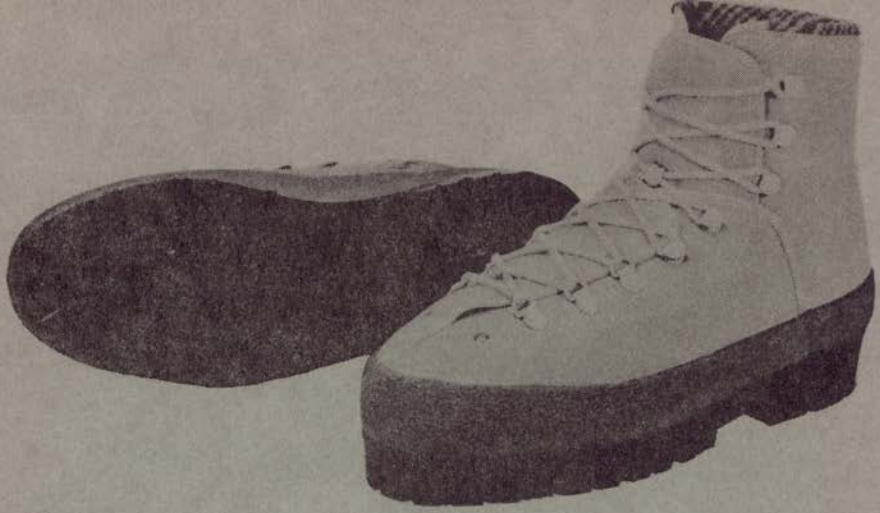
山岳



LXIII



きゃらばん
くらいま

サイズ　24.0～27.0cm
価格　¥3,400

クライミングの技術と用具は　相携えて共に進歩と発展をつづけ　かっては登攀不能と思われた岩壁も　次第にクライミングの練磨の場として親まれその範囲をひろめました。クライミング用の靴も　それに適応する特殊な性能を具備することを大切な条件として成長しました。

新発売の**クライミング・シューズ**は　**キャラバンシューズ**が革製登山靴に対し　実用性と簡易を特性として生れたように　斯界権威者の貴重な体験に基く助言を迎き　現地試験による試作と改良を重ねてこの段階に到達しました。

底は　十分かたく　トウ　ステップを確実にし　足裏の面積に近い細型で**脚布**に選んだ厚織り綿布と　多彩なチェック柄の**裏布**との間には　**底のかたさ**を助成する側面芯ゴムを　又全面的にスポンヂを挿入して打撲や保温に備えました　何れも岩のぼりの適格なバランスを主眼とした　**設計**であります**布の色**は温雅なバハマ　ベイジュ　黒底と脚布を区切る巾27ミリの　**補強ベルト**はイエロー　オーカー(茶褐色)　これに**金具**や**紐**も同系色に調和して個性豊かな**クライミング・シューズ**が誕生しました。

昨今　登山靴も革製と　**キャラバン**と二足の時代だといわれます。現地試験でこの　**クライミング・シューズ**は　登り降りの坂路にも　載歩きにも快適であることが認められました。無雪期には勿論　広範囲に活用下さらんことをを御願いし又御披露申し上げます。

キャラバンマット
カネカロンシュラフ

株式会社　山晴社

東京都千代田区神田駿河台２の１１　TEL(291)４１２１～４
大阪市西区京町堀１の68　五月ビル内　TEL(441)４４３１・５２０４

山岳

第六十三年

山岳第六十三年目次（一九六八年度）

W・ウェストン「日本氷河遺跡論」と明治十年代前半の氷河不存在論その他……岡山俊雄…一
—改稿 本邦氷河問題研究拾遺—
ロシュ・ゴル　一九六七年—サラグラール南峰ほかの登攀—……一橋大学山岳会…三
ヒリシャンカ・グランデ　一九六七年……田中元…吾
マウント・コウベ（Aello Peak）一九六七年……大野光彦…六
ペルー・アンデス　一九六七年—サンタクルス・ノルテ登頂—……横地康生…八
マッキンリー山　南壁中央稜（一九六七年）—カシン・ルート登攀—……佐々木孝雄…一〇三
山岳会初期の人々—辻本満丸君と辻村伊助君のことども—……中村清太郎…一二五
私の登山……松本善二…一三〇
ヤジュン峰登頂（一九六七年）……増永迪男…一四三
ゴーレン・ゴル源流を探る（一九六七年）—チャコリ・ゾム、イシュペル・ゾムの登頂—……宮森常雄…一五三
ヒンズー・ラジ　一九六七年……海老原道夫…一六三
ティリチ・ミール　一九六七年……高島一芳…一六九
エルブールズ山脈での合宿をふりかえって……浜野吉生…一七七

サンタ・マルタ山群紀行（コロンビア）……山本良三…一八四
ボリビア・アンデス（一九六七年）―ワイナ・ポトシ峰登頂―……関田美智子…一九七
ヘス峰登頂（一九六七年）……中村純二…二〇八
小川登喜男君を憶う……成瀬岩雄…二三三
追悼　中村清太郎氏（三枝守博・望月達夫）、神山勉氏（佐藤耕三）、伏見鎌次郎氏（冠松次郎）、三森幾二郎氏（加治甚吾）、小林正尚氏（植村直己）、小里頼忠氏（塚本茂樹）……二三八
図書紹介（山岳遍歴、山の序曲、ネパール・ヒマラヤ探検記録、Mt. McKinley, the Pioneer Climbs, 遠い山 近い山、登頂ゴジュンバ・カン、シッキム・ヒマラヤの植物・ヒマラヤの花・東部ヒマラヤの植物写真集、赤道の氷河を越えて、わたしの山旅）……二四五
会務報告（一九六七年七月―一九六八年六月）……二六三
英文梗概……巻末一
海外登山年表＝一九六七年＝……巻末二

写真

赤石岳山頂での記念写真
ロシュ・ゴルに関するもの五枚（内折込み一枚）
ヒリシャンカ・グランデに関するもの五枚
マウント・コーベに関するもの四枚
サンタクルス・ノルテに関するもの五枚
マッキンリー中央稜に関するもの二枚
ヤジュン峰に関するもの二枚
ゴーレン・ゴル源流に関するもの四枚
ヒンズー・ラジに関するもの二枚
エルブールズに関するもの三枚
サンタ・マルタ山群に関するもの一枚
ワイナ・ポトシに関するもの二枚
マウント・ヘスに関するもの二枚
名誉会員　中村清太郎氏、神山　勉氏、三森幾二郎氏、小林正尚氏、小里頼忠氏

地図

ヒンズー・クシュ東南部概念図、ロシュ・ゴル概念図
コルディエラ・ワイワッシュ概念図、コルディエラ・ビルカバンバ概念図、ヒリシャンカ・グランデルート図
サンタクルス山群概念図、ワンツァン近傍図、サンタクルス・ノルテ登頂ルート図
カヒルトナ氷河概念図、マッキンリー中央稜ルート図
ヒンズー・クシュ中央部概念図、ヤジュン峰近傍概念図
アリンガル地域概念図、ゴーレン・ゴル流域概念図
ヒンズー・ラジ　トゥイ・アン周辺概念図
ディマバンド近傍図、サギチョール近傍図
コロンビア・アンデス概念図、サンタ・マルタ山群概念図
コルディエラ・レアル中部概念図
ヘス山群概念図

表紙（きただけそう）、**カット**　　山下一夫

W・ウェストン「日本氷河遺跡論」と明治十年代前半の氷河不存在論その他

——改稿　本邦氷河問題研究拾遺——

岡山俊雄

一、はしがき
二、ウェストン「日本氷河遺跡論」
三、「日本氷河遺跡論」の成立過程
四、ジョン ミルン「日本における氷河期の証拠」について
五、明治十年代前半の氷河不存在論
六、神保博士の氷河地形は風化によるとの説について
七、あとがき

本稿は昭和四十二年九月発行の『駿台史学』第二一号に「本邦氷河問題研究拾遺」と題して発表したものである

が、日本山岳会編集委員望月達夫氏のおすすめによって、本誌に転載されることになった。そのついでに、申し越された希望に従って、「はしがき」中に本邦氷河問題研究の初期の歴史のあらすじを加えて、採りあげたいくつかの項目の研究史上の意味をくみ取りやすいようにし、かたがた、原文では省略しあるいは書きたりなかったところを補い、かつ、その後知りえた若干のことがらを書き添えなどして、稿を改めた。原文とは分量的にも内容的にも違いのあることを明らかにする意味で標題を改めたが、全くの書きおろしではないので、もとの標題を副題として添えることにした。

筆者は本誌第三〇年（昭和十年）および第三一年（昭和十一年）に「本邦氷河問題の回顧と現状」――「上」は明治十三年から昭和六年まで、「中」は昭和六年十一月から十一年まで――を寄稿したが、「中」でとりあげなかった同期間の他の諸問題を取扱う予定の「下」は未刊のままである。もっぱら、職務が急に忙しくなったためではあるが、この点、思い出しては、日本山岳会ならびに会員諸氏に申しわけなく、心苦しく思っている。時を経るにつれて、「下」を執筆するために、昭和六～十一年間に発表された約一三〇篇の、全部ではないにしても相当数の文献を読みなおす余裕は、ますます得がたくなって来ている。代わりの原稿でまに合う性質の問題でないことを承知しつつも、本稿の改稿には、実は、この気にかかる負い目の一端を、何らかの形で償うことができれば、という気持があった。おくればせながらこの機会に、「下」未刊の不始末について、せめて陳謝の意を表することが宥されれば幸せである。

一、はしがき

日本の氷河問題の研究の歴史は一八八〇（明治十三）年にはじまる、といわれて来た。日本政府に招かれて一八七六年、二六歳で来日したイギリス人 John Milne は、以来十九年間、工学寮・工科大学で金石・地質・鉱山学を講じ、一八八〇年には日本地震学会を創設し、大森房吉博士をはじめ多くの地震学者を養成した。火山関係の業績も著しく、岩木山・岩手山・鳥海山・月山・磐梯山等に登っている。そのミルン教授が、一八八〇年十二月に、日本アジア協会で、本邦氷河問題研究史の第一頁を飾る「日本における氷河期の証拠」という講演を行なった。しかし、ミル

ン教授のこの一投石は、ほとんど何の反響も起こさなかった。時期尚早だったのである。

当時は日本の地学の揺籃時代で、北海道では、幕府ならびに開拓使の招きに応じて、一八六二（文久二）年以降、相次いで渡日したアメリカ人 Blake, W.R., Pumpelly, R., Lyman, B.S., Munroe, H.S. ならびにライマン氏、マンロー氏の養成した日本人技術者らの努力によって、一八七七年にはすでに全道にわたる地質調査報告が出版されたとはいうものの、これはむしろ意外な例外で、創立後まもない東京大学の地質学科の卒業生は当時僅かに四人、その指導にはなお主として Naumann, E., Brauns, D. 等のドイツ人が当たっていた。地形図作成の事業もようやくその緒についたばかりだから、大部分の地域の地形地質はおおむね未詳というべき状態だった。ミルン教授の見解に賛成するにも反対するにも、大方はそれに足る材料の持合わせがない、というのが実状だったと想像される。

日本人学者としてはじめてこの問題を採りあげたのは山崎直方博士である。画期的といわれるその論文「氷河果して本邦に存在せざりしか」の発表されたのは、ミルン教授の講演から二十二年後の一九〇二（明治三十五）年である。日本の地学界がみずから氷河問題を手がけるには、二十余年の歳月が必要だったとも解釈される。続いて、博士は氷河問題に関するその第二論文「高山の特色」を公表した。だが、明確な反響があらわれるまでには、事実上、さらに九年の年月が経過している。

反響の第一声は横山又次郎博士によって挙げられた。その「鮮新世以降における日本の気候変化」の刊行された一九一一年から一八年に至る七年間に、本邦氷河問題に関する論述約三十篇が、内外の研究者によって内外の出版物に相次いで発表された。この期間を、筆者はかつて本邦氷河問題の第一論争期と呼んだ。小島烏水氏が独自の見解を本誌第六年および第八年に示されたのもこの期間である。以下に紹介するウェストン師の一文の発表も、まさに第一論争期の終末の年にあたる。

日本における近代的登山の開拓者の一人として、また、日本アルプスの海外への紹介者の第一人者として、われわ

れのよく知る Rev. Walter Weston は、今まで、日本の氷河問題とは無縁の人と見なされて来た。日本の氷河問題に関するもっとも精到な文献目録、佐々保雄・今西錦司両氏編「本邦氷河問題に関する文献」（本誌二八年、昭和八年）にも、ウェストン師の名は見えない。しかし、彼にも日本の氷河問題についての論述があったのである。

ウェストン師は、九年にわたる第一回目の日本滞在から帰英した一八九六年に、その代表的著作『日本アルプスの登山と探検』を世に送った。その第二著書『極東の楽園』[1]は、彼の三回目の滞日から帰国して四年目にあたる一九一八年に刊行された。前著ほどの歴史的意味もなく、書名もわれわれにはさほど魅力的ではないから、発行は二十余年後でも、知る人も読んだ人も、前著の場合よりかえって少ないかもしれない。数年前の年末、筆者はたまたま『極東の楽園』に目を通して、第九章「北アルプス再遊記、その二」の中に、日本の氷河遺跡に関する彼の論述（一九〇―一九六頁）を発見した。ついで筆者は、ウェストン師が一九一五年に、英国王立地理学会の雑誌に「北日本アルプスの探検」[2]を寄稿し、かつ、同じ雑誌の同じ号に日本の氷河遺跡についての短いノートを発表していること、その翌年のスコットランド地理学雑誌には「日本アルプスにおける最近の探検」[3]が掲載されていることを知った。ただし後者は、「北日本アルプスの探検」と同内容で、ややそれを簡略にしたものである。この二篇が日本の氷河問題関係の文献として、Schwind 教授[4]――目下、三巻本となるべき大著『日本地誌』を執筆中で、昨年出版のその第一巻は皇太子殿下に献呈されている――によって、一九三五年、すでに採りあげられていることに気付いたのは、さらにのちのことであった。

本稿では、まず、本邦氷河問題関係の文献として挙げられたこともなく、従ってその内容が紹介されたこともない『極東の楽園』中の論述を訳出し、ついでその成立過程をうかがい、続いて本問題の草分けと認められてきたミルン教授の論文について、流布していた誤解をとくとともに、教授の意のあるところを改めて明らかにし、さらにミルン教授の論文と相前後して公刊された外国人学者による関係論著があり、本邦氷河問題研究史の発端は一八七七（明治

十）年にまでさかのぼることを示し、最後に、ウェストン師の立論の拠りどころとも密接に関係する特殊な事情——今までもっとも不明確だった、従ってむしろ憶測に委ねられてきた研究史上のある問題を、徴しうる文書を渉猟して、可及的に明らかにしようとした。

註

1 Weston, W. (1918) The Playground of the Far East. London. pp. 333. 標題の Playground を楽園とも訳すべきか、といっている記事を何かで見た記憶がある。誰であったか明らかにし得ないが、そのアイディアを借用した。

2 Weston, W. (1915) Exploration in the Northern Japanese Alps; with a Note : Suggested Glacial Phenomena in the Northern Japanese Alps. G.J. Vol. 46. pp. 188-200; 239-240.

3 Weston, W. (1916) Recent Exploration in the Japanese Alps. Scott. Geogr. Mag. Vol. 32. pp. 306-315.

4 Schwind, M. (1935) Eiszeitforschung in Japan. Geogr. Zeitsch. 41 Jahrg. S. 292-297. u. Bibliographie der Eiszeitforschung in Japan. Zeitsch. Gletscherk. Bd. 23. S. 203-208.

二、ウェストン「日本氷河遺跡論」

以下の訳文では、原文にクォーテーション・マークが用いられているところは「……」で示し、師自身（……）を用いている場合は同形のカッコを使い、筆者の加えた簡単な註・備考あるいは理解をたすけるために補入した語句等は〔……〕のようにして区別してある。

『白馬岳の残雪は、近年、日本の登山家にとって、異例の呼びものとなっている。ひとつには、樹林をまとう急峻な谷壁をめぐらす荒涼とした谷を埋めて、はるか上方、山ふところに傾き達する巨大な雪渓の、ほとんど比類のないひろがりが、人を感銘させるからである。他方では、そこが、史前時代の氷河作用のたしかな証拠があると断定された最初の場所であること、それが好奇心をそそるからである。

問題は十分に興味があり、かつ重要と思われるので、示された証拠について論じた、日本とヨーロッパの主要な学者の、いろいろな見解を紹介するために、簡明な記述をこころみる。

この問題が初めて論ぜられたのは、一八八〇年、日本アジア協会の会合で、地震学者として名声の高かった故 Milne 教授が、「日本における氷河期の証拠」と題する講演をおこなった時である。

彼の到達したおもな結論は、「日本の気温がかつて現在より低かった証拠はあるが、正しくいえば氷河期の決定的な証拠はない」ということであった。ミルン教授はまた Gowland 教授〔一八七二―八八年在日、「日本アルプス」の命名者、大阪造幣廠技師、槍・乗鞍・立山・爺岳・白山・鳥海・月山等に登る〕の観察の結果を、つぎのように引用している。「この山脈（今は日本アルプスとして知られている）の最古の部分である槍ガ岳附近、もし氷河があったなら、その存在の証拠が当然みいだされるはずの槍ガ岳附近で、私はそのような証拠を何も見なかった。そして、私の行ったどこの山岳地域でも、いまだかつて私は氷河作用の証拠を見たことはない」。ミルン教授の講演後の討論において、それには当時在日の代表的外国学者が参加したのであるが、上記の趣旨に対しては異論なく、事実上、一同これに賛同したのである。[5] しかし、最近私の注意をひいたのは、ガウランド教授がこれらの地域を踏査した際の同行者の一人、故 Edward Dillon 氏〔伝不明〕が、その日誌中に次のように述べている一事である。「船津と双六の間で、谷の両側は厚い氷河堆積物で縁取られている。しかも、さらに上流の今見と平湯の間で、道は堆石丘を登る」。ディロン氏はまた、「平湯から平湯峠への途上で」、古い氷河の堆石を見たと思っている。（私は過去二〇年間、この道筋を通った多くの旅行で、そういう印象を得たことはなかったと付言したい）。

他方、ライン教授は、その有名な著述[6]（一八八八年）中の日本の地質および山誌を扱った章で、「万年雪と氷河はこの日出ずる帝国には見いだされない」（六〇頁）、また、「私の日本旅行中、堆石・氷河による研磨岩あるいはその他の氷河時代の痕跡は、どこでも観察しえなかったことを、一言しておきたい」（三九頁）、といっている。

この主題は、一九〇三年〔正しくは一九〇二年〕までは、日本の旅行家と学者の注意をほとんど全くひかなかったように見受けられる。同年、東京帝国大学地理学教授山崎博士は、白馬地域の旅行後、論文を発表し、「北日本アルプスで、氷河作用の諸痕跡、堆石ならびに氷河の擦痕を認めた」と信ずる理由について述べた。続く数年間にこの論文がまき起した多くの議論は、大関教授が一九一五年三月の『スコットランド地理学雑誌』に寄稿した論文[7]に要約されている。その論文で大関教授の到達した結論は、明らかにある点ではむしろ前後矛盾しているが、手短かには、つぎの要旨の如くである。

(1)「今までに日本で得られた氷河作用の証拠は、飛騨山脈北部における圏谷と堆石堤の存在だけである」。それらの事例はスケッチとともにこの論文に示されている。

(2)「それらはさほど顕著なものではない[8]」。

(3)「擦痕のある転石を伴なう堆石・擦痕岩面および羊状岩が、圏谷中で、確実に識別された例はない」。ただし彼は、「立山の西斜面でわれわれ〔山崎・大関の二人〕は、その前面に二列の端堆石のある圏谷を発見した[9]」といっている。

(4)　ドイツの旅行家 Hettner 教授〔当時ハイデルベルク大学教授〕は、一九一三年、松本平野の西境、島々に近い某所を通過中、「梓川の河畔、八〇〇メートルの高距において、石礫の堆積物中に、擦痕のある大岩塊を発見した」ことを挙げている。〔これは論文末尾の脚註に、日本からの報知によればとして、追記されていることである〕。しかし、これに関しては、大関教授はつぎの所見を述べている。「もしこれが真に氷河起源のものなら、われわれは、延長四〇キロメートルの谷氷河が梓川の谷を占めていたと結論しなければならない。それは、今までに日本で存在の証明されたどの氷河より、はるかに巨大なものである。でなければ、氷触岩塊は、極めて例外的と見なければならない洪水によって、運ばれて来たと信ずる用意がなければならない」。（ついでながら、この点に関しては次のように言っ

てもよい。もしヘットナー教授が一度でも梓川の谷を跋渉していたなら、そのような延長の氷河の存在は、とうてい不可能だったことを理解しえたであろうと。そしてまた、これらの急流性の渓流の洪水の際の、あの怖るべき、かつ、遠くおよぶその影響をみずから経験したものは、その運搬力が、事実、ほとんど信じえないほど「極めて例外的」であることを十二分に知っていると)。

(5) 「Penck 教授(現ベルリン大学総長)は、槍ガ岳における氷河作用の証拠について論じている。槍ガ岳の南東斜面下に、岩塊の散乱した土手状の地形があり、それは同教授によれば、端堆石以外の何ものでもありえない。彼はまた私〔大関〕の示した写真で、圏谷と端堆石を確認した」。「穂高岳には広い雪原がある……従って過去の氷河作用の証拠の発見を期待できる」。(私はこれらの雪原をしばしば通過し、そのすぐ近所で数週間をすごしているが、氷河作用の形跡は何ひとつ目にとまらなかった)。〔この(5)も大関論文の結論中に挙げてあることではない。大関教授は一九一二年ベルリン大学でペンク教授に師事していた。ペンク教授の槍ガ岳附近の地形についての見解には、拠るべき文献もある〕。

上掲の諸見解に対して、少くとも同等の権威と経験のある日本とヨーロッパの学者の双方から、反対論が提出されている。

東京大学の有名な古生物学者横山又次郎教授はいう。「東京湾近傍の第四紀堆積物中には、寒冷な気候状態を示す動物群の遺骸は全く見いだされない。したがって、氷河期の存在が確認されたということは否定される。[10] この見解は Lepsius によってドイツに広く紹介された」。[11]

東京大学地質学教授神保コタロー博士〔正しくは鉱物学教授神保小虎〕は、地質学会の会合で、くり返して「山崎博士の結論の土台となったすべての現象は、風化作用で形成されたものと認められる」と述べている。

前東京大学地質学教授小藤博士〔一九二一年まで現職の教授〕は、数年前、山崎・大関両博士が立山で発見したい

わゆる堆石に関して、私に書面を寄せ、次のように指摘した。「夏季、同地域の万年雪はとけてその断片が小さな雪崩となり、その上に載っていた岩屑とともに、谷の側面に掻傷をつける。雪崩のこの作用は、擦痕のある壁面を生ずる点で、氷河の作用に似ている。……山崎博士の持ち帰った標本は、多分、岩壁の一片である。今までのところ、堆石はまだ発見されない」。

この特殊な問題について、Lake 教授と Rastall 教授はその地質学教科書（八六頁）で、「氷河と同様、雪崩にはそれ自身の涵養区と、一定したその道と、その融解区がある。雪崩はしばしば相当量の岩屑を下方に運び、その道は多くの場合掻傷を受け、多少なりとも研磨される。雪がとけると、そこに残された岩屑は氷河の堆積物とよく似た外観を示す」ことを認めている。大関博士の論文についてのラストール教授の意見はつぎの如くである。同論文に示された「日本に氷河があったという証拠は、私には疑問に思われる。スケッチでは、当然、描き手が自説を立証するように最善をつくすだろうから、証拠として不充分である。決め手は、もちろん、堆石の発見にあるが、この場合、その証拠は私には、はなはだ薄弱に見える」。

ケンブリッジ大学地質学教授 Marr 博士は私に指摘した。「氷触を受けたと言おうとする場合の、cirques に関する議論は、あまりあてにすべきではない」。何となれば、「cirques にはいろいろの cirques があり、そのあるものは疑いもなく氷成ではない」のだから。〔この訳文では、cirque, corry は、氷河が作ったという意味に使われている場合には、すべて圏谷と訳してある〕。

Bonney 博士は、一九一〇年のイギリス学術協会の会長演説で、つぎのように述べた。「〔英仏で〕cirques,〔スコットランドで〕corries〔と呼ばれる地形〕および椀状の谷がしらは、大部分は水の働きによるものであり、その形はその場所の諸条件による。……それらは氷蝕を受けた地域に限って存在するものではない。アルプスの主要な圏谷は、峰の高さ一一〇〇〇フィート未満の地域にあり、その底は高い水準にはなく、むしろ四〇〇〇フィートあまりより下

にある。換言すれば、圏谷が最大の規模で存在するのは、氷河が最小の拡がりと、最短の存続期間と、最少の侵蝕力を持っていたであろうような所である」。

日本アルプスにおける風化作用の広汎で多様な結果について、神保博士の提出した意見は、山崎・大関教授の記載した諸現象に、全く適切な説明を与えるものと、筆者には思われる。

日本の山地の地形の全般的なアウトラインと、部分部分のディテイルとの両者を、形づくり、かつ、変形させつつある水の力は、事実、驚異的で全く例外的である。故に、現存の諸事象が、主張されている如くたしかに氷河作用の結果であり、しかも、風化や水の営力ではとうてい形成され得ないものであるという、より明確かつ決定的な証明が確立されるまでは、日本アルプスの氷河作用のために唱えられている主張は、それを受け容れるにたるほど充分には、まだ証明されていない、と結論するのが至当であるように思われる』。

註

5 この部分の記述は、ミルン教授の論文の末尾の討論の記録に基づいていると思われるが、それによると、発言者は Brauns 博士と Faulds 博士の二人で、出席者数ないしその氏名は列挙されていない。フォールズ博士にはドジョー（泥鰌）や生物関係の論考がある。

6 Rein, Johannes Justus : Japan nach Reisen und Studien. Bd. I. 1881, Bd. II. 1886. 当時「最も忠実詳密な日本現状誌」または「日本地誌の最高権威」といわれた。ウェストン師のあげている発行年・頁数は、英訳本第一巻のそれである。

7 Oseki, K. (1915) Some Notes on Glacial Phenomena in the North-Japanese Alps. Scott. Geogr. Mag. Vol. 31. pp. 113-120.

8 これは、結論中の一項とするほどの重要性があるとは思えないかも知れない。大関教授はこれに続けて、「氷河期には小さな懸垂氷河が海抜二五〇〇メートルのレヴェルまで流下していた」と書いている。従ってウェストン師の引用部分に「欧米におけるが如く」とでも補えば、原著者の言おうとした意味は汲み取れよう。

9 前半は結論(3)の一部分の引用、後半は本文からの引用。ウェストン師が大関教授の結論には前後矛盾したところがあると評したのはこの点である。しかし、師の前半の引用文は、Morains and striated boulders, striated surfaces, and roches moutonnées have not been identified ……in the corries となっているが、教授の原文では二語目が with で and ではない。原著者の意嚮は明確にはつかみにくいが、おそらく、圏谷底に堆積形と侵蝕形の共存する例はないという意味と解せられる。それをウェストン師は、圏谷中に堆石のある例はないという意味にと

って、前後矛盾と評したが、同教授が論文中に示したスケッチ六個のうち三個には、現に圏谷底に堆石が描かれている。なお教授は前半の引用文に続けて、圏谷底の最低所約二五〇〇メートルの高さは、氷河期の雪線高度を示すが、三、七八メートルの槍ガ岳も今日雪線に達していない。よって氷河期における雪線の降下量は七〇〇メートルより少なくはなかったと結論される、と結んでいる。結論(3)の主眼はここにあったのである。

10 一九一三年、矢部長克博士によって、洪積世の日本の気候は、外国と平行的に寒冷で、横山説の根拠となった館山湾頭の沼のサンゴ層は沖積世初期のものであることが明らかにされ、一九二四年、横山博士も沼のサンゴ層を後氷期のものと認めて、この問題は落着した。なお、ミルン論文では、沼のサンゴ層は氷河期以前のものとされている。

11 レプシウス博士は、氷河時代は世界的または宇宙的変動に由来するという説に反対し、地殻の局部的変動に原因するとの説を主張していた。欧米に氷河があった時代に、日本にはなかったということは、氷河期を局部的現象と解する自説の一証であるという観点から、横山説が採りあげられたのである。

三、「日本氷河遺跡論」の成立過程

ウェストン師は『日本アルプスの登山と探検』の序文で、地質・植物の記載はガウランド氏に負うところが多い旨を記している。[12]「日本南アルプスの旅行と探検」[13]では、原田豊吉・Naumann 両博士の日本地質構造論を紹介している。地学関係のことにも、あるていどの関心があったことはたしかである。一方、『日本アルプスの登山と探検』には、日本アルプスに対する頌辞として、「その峰は氷河彫琢の光栄を担わず、高さもアルプスの三分の二に過ぎないが、谿谷の絵のような美しさ、山腹をおおう幽暗太寂の森林は、私が欧州アルプスで遭遇した何ものにもまさる」といっている。[14]ガウランド氏と自身の意見のいずれにより多く因るかはともかく、少なくとも一八九六年までは、日本には氷河の遺跡はないと思っていたことを、この頌辞は示している。

ウェストン氏が二度目に来日した一九〇二年は、上述した山崎博士の画期的な論文[15]の発表された年でもある。小島

烏水氏によると、この「論文は、私がウォルタア　ウェストン氏の嘱を受け、当時の萬朝報英文記者山県五十雄氏に依頼して、全文を英訳し、これをウェストン氏に送致したが、氏が近頃私に語ったところによると、『あれだけでは、氷河の遺跡とは考えられない』と言われた」[16]という。ここに近頃とは、師の帰英が一九〇五年であるから、その頃までのことと考えられる。

ウェストン氏が三たび来日した一九一一年から最終的に帰英する一九一五年までの四年間は、前記の通り本邦氷河問題論議の第一回の開花期の前半にあたり、横山又次郎・辻村太郎・小島烏水・Lepsius, R.・Penck, A.・矢部長克・山崎直方・加藤鉄之助・小川琢治・田中秀作・下斗米（田中館）秀三・大関久五郎の諸氏によって、少なくとも合計二十二篇の論文が発表された。ヘットナー石もこの期間に発見された。この間の消息は、日本山岳会員経由で、あるていどまでウェストン師にも伝わったはずであるが、必らずしもそうではなかったと思われるふしもある。

一九一五年帰英したウェストン師は、五月三十一日に王立地理学会で、「北日本アルプスの探検」[2]の講演をし、白馬岳について「谷の岩石は氷河作用の痕跡を示すというが、二回の登山において私は、それを肯定すべき何ものも見なかった」（一九二頁）といっている。二回のうち一回は一九一三年の登山を意味し、それは山崎論文の所説をみずからたしかめることを一つの目的としていたと思われる。この講演は同学会の雑誌の九月号に掲載されたが、同じ号の月報欄には「北日本アルプスのいわゆる氷河現象」と題するウェストン師のノートも出ている。

さて、前掲の「日本氷河遺跡論」において、ウェストン師の論評の主対象となっている大関論文[7]は、『スコットランド地理学雑誌』の同年三月号所載であるが、学術雑誌のことだから、事実上の発行は三月以後と考えてよい。おそらくウェストン師は、講演後そして原稿提出後に大関論文を読み、それに触発されてこのノートを書いた。それは、ウェストン師のノートの見出しと大関論文の標題が似ていること、ノート中の横山・神保両教授の所説の紹介が、部分的省略を除けば、大関論文の文章と一語一句ほとんどちがわないこと、山崎論文の発表の年は一九〇二年とすべき

であるのに、ノートでは一九〇三年となっており、それは大関論文が（間違って？）一九〇三年としているのを踏襲したためと考えられること、などで裏書きされる。この大関論文はペンク教授のすすめによって留学中に執筆され、その際、山崎論文が手元になく、記憶にたよったために間違ったのか、それとも、掲載誌の発行日は一九〇二年十月および十一月となっているが、実際には年を越して発行されたことがなお記憶にあったのか、そのいずれかと判断されるからである。

このノートは「氷河期に関する決定的証拠はないというミルン教授の結論、氷河遺跡は見たことがないというガウランド氏の見解、後にミルン教授は氷河遺跡は日本には見いだされるはずがないと考えるようになったこと〔この一項は何故か訳出の論述では削除されている〕、山崎説の主要な根拠は圏谷の存在にあること、その証拠とする諸現象はすべて風化によるとの神保教授の主張については、スイスやアルプスの氷河現象を知るものはこの見解に同意するだろうといい、日本アルプスにおける既往の氷河を立証するには、より多くの確実な証拠が必要」と結んだものである。この短いノートはその構成において、ここに訳出した論述の原形と認めうるもので、従ってウェストン師の日本氷河遺跡論の成立ないし誕生にとっては、大関論文がその直接の契機となっていると見てよく、事実、遺跡論における日本の学者の所説の紹介は、小藤博士の場合以外は、すべて大関論文に拠っているのである。

ウェストン師は同年七月、オックスフォード滞在中の大関教授を訪問した。やや余談にわたるが、同教授の一論文[17]中、上高地の位置を説明したくだりに、次の記事が見える。「ある意味での我国の地形研究史に多大の功労ある英国の宣教師、今は故国に帰養せる Rev. W. Weston 氏が去夏七月予をオクスフォドに訪ねた時、三十有余年の我国の滞在の最もうるはしき記憶の一として、いつも上高地に愛を抱いていると語った。其折予は始めて氏はこの客舎〔上高地清水屋〕創設のそもそもの発案者であることを知って、弥増敬虔の念に堪えなかった……」。しかし、氷河問題について意見を交換したというようなことは、何も記されていない。

だが、一九一六年五月二十八日の日本山岳会第九大会における大関教授の講演の速記[18]は、この訪問の模様を次のように伝えている。やや長いが、文章を簡潔にして引用する。なお、原文が講演の速記体の場合は、以下においても同様の引用の仕方をする。あらかじめ、その点について原著者ならびに読者の諒承を得ておきたい。

「かの日本の山川に非常に明るいウェストン氏……は昨年の夏オクスフォドに私を訪ねてくれた。実は私はウェストン氏の訪問以前に、氏の日本氷河論批評を人の噂で聞いた。それは約言すれば、日本には氷河論があるが自分は反対だ、とのことであった。よってウェストン氏の来訪の際、私の方から、あなたは日本の氷河論をどうお考えであるか、日本の地形に氷河の痕跡をお認めになりますか、いかがですか、と聞いてみた。ところが、ウェストン氏はカラカラと笑って、私は宗教家である、山川は自分の愛する所のものだが、研究する所のものではない。日本に氷河論のあることは夙に聞いているが、自分は氷河学に何の知識もないから、批評は一言もできぬ、と答えた。私はなお念を押して、ちょうどウェストン氏が持参されて私に見せた槍ガ岳近傍の写真を指し、あなたはこの絵についてどうお考えですか、この辺に氷河があったという御見当ですか、と聞いたら、やはり何処までも私の問を避け、私は何ともいうことができない、ただ、私はイギリスへ帰って同国人にこういうことを言ったことがある。日本に氷河問題があるけれども、自分は専門家でないから当否はわからぬ。しかし、日本は降水量が多く森林が到る処に茂生し、渓谷はゆきわたって発達し、それにあれほどの地震の多い所、噴出の多い場所であるから、たとい過去に氷河があったとしても、その跡はすっかり破壊されてしまったに違いない、そういう事を一言したことがある。実際それ以上には何もいうことができない、との答弁であった。……」。大関教授のこの講演は、日本の氷河問題を、それに関与した研究者の態度という観点から説述した特徴のあるもので、ここに引用のウェストン師との会談のもようは、日本人学者の所説に対する外国人の反応という問題の一例として挙げられているのである。

ウェストン師のこの訪問が、前記ノートの執筆以前か以後かはわからないが、格別の目的もなしに行なわれたとは

考えにくい。槍ガ岳近傍の写真携行という一事は、大関論文を通して知ったペンク教授の所説が気がかりで、それについて大関教授の見解をただしたい、というのが、少なくともその一目的だったことを思わせる。が、ウェストン氏は質問を受ける側に立つことになった。その答弁は、しかし、それを真正面から受け取るほど、師の訪問の目的をますます捕捉しがたいものにする、という気がする。みずから求めた訪問において、その意図の明言をみずからあえてさし控えたのは、そして恐らくそのためもあって、ウェストン師が答える側に廻ることに終始してしまったらしいのは、換言すれば、率直に教授の意見をたたかなかったのは、この訪問が、師の氷河遺跡論に影響をおよぼし得たかもしれない殆んど唯一の好機だったと思われるだけに、返えす返えすも惜しまれる。

ウェストン師の講演とノートが活字となったころ、大関教授は四年間の海外留学から帰国した。その頃から『極東の楽園』出版までの約三年のある期間が、右のノートが日本氷河遺跡論へと発展——ただしその考えは、山崎論文の読後感以来、少しも変わっていない——した時期といえよう。『極東の楽園』の発行された年の十一月、三年間に氷河問題関係の論述十一篇を発表し、小島烏水氏によって氷河問題のファイターと呼ばれた、そして、ウェストン師とも因縁の浅くない大関教授は、釧路の客舎で、にわかに不帰の客となった。

註

12　小島烏水（一九三二年）『氷河と万年雪の山』一八六頁

13　Weston, W. (1906) Travel and Exploration in the Southern Japanese Alps. G.J. Vol. 27. pp. 18-35.

14　前掲12、二二八—二二九頁

15　山崎直方（一九〇二年）「氷河果して本邦に存在せざりしか」『地質学雑誌』九巻、三六一—三六九、三九一—三九八頁

16　小島烏水（一九一二年）『日本アルプス』第三巻、一五四頁

17　大関久五郎（一九一六年）「梓川上流上高地盆地四辺の地形について」『地質学雑誌』二三巻、六一頁

18　大関久五郎（一九一六年）「日本に於ける氷河問題」『山岳』第十一年、二三五—二四四頁

四、ジョン ミルン「日本における氷河期の証拠」[19]について

ウェストン師の日本氷河遺跡論を読んで、筆者は、そこに要約されているミルン教授の論文の結論に、怪訝の思いを抱いた。ミルン教授は、一般には、日本に氷河があったことを認めた最初の人と思われていたからである。少なくとも筆者はそう思いこんでいた。

このミルン論文は、山崎教授の氷河問題に関する第三論文[20]（一九一四年）で、初めてわれわれに紹介された。すなわち、「……ミルン氏は、Atkinson, Kinch, Divers 諸氏[21]の実見に基き、中部日本の高山では五千尺、少し北に偏した西海岸の地方では四千尺の高さに万年雪があって、その中には十分凝固して小氷河 puny glaciers をなすものもある、と結論している。さらに氏は季候・生物の方面から、氷期が本邦にあったであろうとの考説を述べている。しかし、直接の証拠として挙げているのは、氏が羽前の月山で確かに氷河作用によって造られた地形を見た、ということである。すなわち、その北側にいわゆる roches moutonnées とて岩石が削磨されて円頂形になっている所があると云っている。……ともかくミルン氏はその頃、既に氷河存在説を唱えていたことは明らかである」。佐々・今西両氏の文献目録の解説には、「みずからの考察（山地の残雪状態・気候・生物・地層・月山の羊状岩に関する）のほか、日本アルプスの先遊者達の観察（省略）より、日本洪積期に氷河ありきと説いた。ガウランドの日本に氷河遺跡なしとの説も記してある」。また望月勝海氏『日本地学史』（一九四八年）にも、「明治十三年という昔に、ミルンにより、月山に羊状岩が報告され、日本にも洪積世に氷河がひろがったとされたことがある」（一三八頁）とある。これが、ミルン論文についてのわれわれの常識であった。ウェストン師はそうは受けとっていない。その理由が筆者にはのみこめなかった。

ミルン論文の掲載された『日本アジア協会雑誌』は、一九六四年にリプリントが出はじめてからはともかく、それ

までは、事実上、見ることのきわめて困難な稀覯書だった。筆者はウェストン師の氷河論を読んだ直後、国会図書館石山洋氏の好意によって、初めてミルン論文に接することができた。そして、われわれの受けとり方にも正確を欠くところがあり、ウェストン師もミルン教授の真意を伝えてはいないことを知った。

同教授はその結論に先立つ一節に、「氷河作用の直接の証拠」という見出しをつけている。「直接の」とは、同論文がそれまで検討してきた、気候変化との関連における日本の位置・海岸段丘の高さや分布・動植物の分布の異常・化石（沖積層中のものをふくむ）から推定される過去の気候等々は、すべて氷河存否に関する間接の証拠であるが、それらに対する直接の証拠としては、という意味である。その節の冒頭には、「直接の証拠とは、月山の山腹の明らかに羊状岩と見られる、丸められた岩石群のことである」と断定的に記されている。しかし、それに続く記述を要約すると、「山頂から北へくだる途中、急斜面をおり切った左側に、緩傾斜の比高平均二〇フィートの波状起伏地があり、多くの場合、その急斜部は山頂側に向っている〔氷河起原のものならばその急斜部は山麓側に向かうのが普通である〕。密生する草と土壌におおわれて、小丘の岩石の性質は明らかにしがたいが、その外観は氷河作用を暗示し、ラブラドルやニューファウンドランド〔ミルン教授は日本へ来る前にこの両地で鉱山技師をしていた〕の氷蝕波状地と異ならない。しかし、これらの頭を丸められた岩石が、事実上、氷の作用の結果か否かについては I am not prepared to make any definite statement, 精査に価するものと思われる」。精密な検討[22]を要するということは、結論中にも繰返されている。これが、ミルン教授自身によってその氷成であることが確認されたかのように思われて来たのである。

教授は結論の一部で、概略、次のように述べている。「日本の氷河期といっても、それは、北欧の氷河期が意味するところを意味するのではない。たとえば、日本のある地方が一面に氷でおおわれたとか、津軽海峡が氷結するほどきびしい寒さだったとか、考えるべきではない。ヨーロッパが氷河期だった当時の日本の気候は、スペイン北部あたりの氷河期の気候と大差のないものだったと考えられる。冬は今日より長くかつきびしかった。かつて雪のない山に

は雪がつもり、以前から氷河があったようなところでは、それが拡張して山腹へ流れくだったろう。一般的に現在より寒かったが、居住を許さないような状態では断じてなかった」。つまり教授は、北欧などの場合とは違うという条件付きで、日本に氷河期の存在したことを認めた。換言すれば、氷河期の regional differentiation を明確に認めたのである。

こういう趣旨の講演の後の討論において、ブラウンス教授はつぎの意見を述べた。「講演には日本の氷河期に対する証拠の提示がむしろ不足している。内陸氷床がたしかにあったというほどの気温の低下は、ミルン教授も認容されているように日本にはなかった。……示された証拠は、どちらかといえば、日本には氷河期がなかったことを物語るらしく、私には思われる」。ミルン教授は、日本の氷河期が著しいものではなかったことを、かなり具体的に明らかにしたにもかかわらず、氷床もなかったのに氷河期というのは受けとりがたい、という意見である。注意すべきは、この場合、論点は、ミルン教授の事実認定の当否より、むしろ「氷河期」ということばの内容ないし定義に移っていることである。

ブラウンス教授の意見に対して、ミルン教授は、御説ごもっともといい、「日本には現在より気温が低かったという証拠はあるが、正しくいえば〔ブラウンス教授が考えているような〕氷河期の決定的な証拠はない」と答えた。この場合、ミルン教授は、すでに自身の結論からはなれ、ブラウンス教授の考えの線にそってこう答えたのである。

ウェストン師がミルン論文の結論としてその日本氷河遺跡論中に示しているのは、この答そのものであって、同教授の長文にわたる結論をみずからの判断で圧縮したものではない。しかも、ブラウンス教授の意見と切りはなして、それを、ミルン教授の主要な結論として示したのでは、原著者の意のあるところはとうてい伝えようがない。日本の氷河期の気候は当時の北スペインあたりの気候に近いという、原著者の解釈にあるていどの考慮が払われていたなら、前記のウェストン師のノートや『極東の楽園』中の所論での、アルプスを引例とする論述は、もっと形の変わっ

たものになり得たのではなかろうか。しかしまた、ブラウンス教授ですら、氷河期ということばによって、そのタイプロカリティともいうべき地域の状態以外の状態は考えにくかったらしく見えることと思いあわせると、考え方や用語の内容の regional differentiation とも見られるこういう例は、むしろわれわれに戒心すべきことを教えているのかもしれない、という気もする。

註

19 Milne, J. (1881) Evidences of the Glacial Period in Japan. Transact. Asiatic Soc. Jap., Vol. 9, pp. 53-86.

20 山崎直方（一九二三年）「飛騨山脈における氷河作用に就て」『地質学雑誌』二二巻、一—二頁

21 Atkinson, R.W.：英人、一八七四—八一年在日、開成学校・東京大学理学部で分析化学・有機化学を講ず。日本酒醸造・お白粉の製造・日本の化学工業・磁器業に関する論著があり、「八ガ岳・白山および立山」を一八七九年の『アジア協会雑誌』に出している。Kinch, Ed.：英人、駒場農学校教師、日本の農芸化学・食用植物等の研究があり、針ノ木峠を通過した。Divers, E.：英人、一八七三年来日、日本工学寮・工部大学校で無機化学を講義、日本の隕石・草津温泉についての論考がある。針ノ木峠で側堆石・端堆石を認める。

22 山崎教授は一九二三年夏、大関教授は一九一六年一〇月中旬、月山に登ったが、それぞれ、雨と雲、風雪にさまたげられて、所期の目的を果たせなかった。その結果は註20の論文および大関：「羽前国月山の万年雪に就きて」『地質学雑誌』二十四巻（一九一七年）、三六六—三七三頁に出ている。

五、明治一〇年代前半の氷河不存在論

画期的といわれる山崎博士の第一論文の標題が「氷河果して本邦に存在せざりしか」と反問の形をとっているところから、氷河は存在しなかったという人がいたのではないか、という考え方が生まれる。辻村太郎博士は、この標題を「かなり挑戦的なもの」といい、さらにこの「標題の文字は不思議である。誰か前に『存在せず』と云った人があって、更にその前には『存在したり』と云い出した人もあったに違いない」[23]と続けている。挑戦的との評言は、この

ほかにも例[24]がある。以下、山崎論文の発表の頃までの氷河不存在論をたずねてみよう。

日本について最も早く氷河の不存在を説いたのは、一八七二年に来日した北海道開拓使の地質兼鉱山師長ライマン氏である。「北海道の古沈積層〔段丘堆積層〕は、おそらく欧州の洪積層と時代を同じくするものらしい。しかしその構成はそれとはなはだ異なっている。というのは、本島には氷河の痕跡、すなわち、細泥や大小の転石の交錯した無層理の堆石、迷子石、研磨され、掻痕あるいは凹痕を有する岩面を見ない。おそらく氷河時代には、北海道は、気候が高温だったか、あるいはなお海底にあったのだろう。中央の高峰深山には、今なお氷河があるか、過去の氷河の跡があるか、まだわからない云々」という意味の記事をふくむ北海道の地質の総括的英文報告は一八七七（明治十）年、その訳本[25]は一八七八年に出版されている。

ライン教授の大著『日本』[6]を日本の氷河問題の文献として挙げたのは、ウェストン師が最初である。その短い引用は、実は、この問題に関するライン教授の記述の全文にあたる。一八七三年から七五年へかけて本州・四国・九州を広く旅行した教授の『日本』の元版第一巻は、ミルン教授の論文の刊行された一八八一（明治十四）年に出た。山崎教授は一八九九年、海外留学中に、ボン大学ライン教授の自宅で、週二回、その再版のための増訂改稿の手伝いをさ[26]れた。

一八七九年、ナウマン博士の後任として、東京大学理学部教授となったブラウンス博士の『東京近傍地質編』[27]には、次の記述がある。第一章総論中には「東京平原中に氷期沈積に係るの岩層もしくは氷田作用の痕跡だも見ざるは吾人の最も注目すべき所なり」。欧米各地で氷田の最も発達したのは洪積世だから、われわれもこれを洪積層中に発見しようとしたが、全く得るところがない。このことはナウマン氏も「江戸平原論」[28]中で示している。（ナウマン氏も、それが無いといっているというのではなく、それがあるとは書いていないという意味らしく思われる）。しかもナウマン氏は、洪積世の気候は今よりも寒かった証拠があるというが、賛成しがたいとその理由を述べ、日本に氷田が存在

しなかったのはむしろ当然で、緯度的には東京はジブラルタルやダマスクスと同じで[29]、地形的にはアルプスの如きものがない、ということ自体がそれを証明するにたる事実である、といっている。第三章「漂積期沈積層」中には、「氷期層の形跡は日本に於て絶て発見せざる所なり」とあり、「緒言追加」には、北海道へ旅行して、「実にライマン氏の説の如く、本道中には絶て氷期時代の痕跡を見ることなく、以て其全く存せざりしものと認定せり」と述べている。ライマン氏は高山地域についてはその存在の可能性を保留しているが、ブラウンス教授はそれに考慮を払っていないように見える。

上記の引用中の「東京平原中に……を見ざるは吾人の最も注目すべき所なり」という一文は、氷期があったのなら、その証拠は当然平野に残っているはずである、という先入観的考えの反映のように思われる。このことはまた、氷期に大規模な氷河の発達を見た地域に育った学者には、氷河は山頂附近にしかなかったというような氷期のあり方は、よほど考えにくいか、思い及びがたいものだったらしいことを暗示している。が、それはともかく、この『東京近傍地質編』の緒言は一八八〇年十二月の日付になっている。ミルン教授の講演と同年同月である。従って、ミルン教授の講演当時には、この大版二〇〇頁余の論著の原稿は既にでき上っていたと考えてよい。故に、ミルン教授の講演に対する前記のブラウンス博士の意見は、その場での単なる感想的意見ではなかったのである。

日本の高山に関する多くの資料をミルン教授に提供したガウランド氏が、日本アルプスには氷河の遺跡もないと考えていたことは、ミルン論文の数カ所で紹介され、その一つ、槍ガ岳付近の所見は、ウェストン師の論述にも引用されている。しかし、山崎教授は一九一三年の氷河問題に関する第三論文で、はじめてミルン教授の論文に言及しているところからみると、「氷河果して……」の当時は、ガウランド氏の所説はその念頭になかったものと思われる。ガウランド氏は、一八九五年八月、英国山岳会で、日本アルプスには氷河も遺跡もないと講演している（小島『氷河と万年雪の山』一八九頁）から、文献として徴すべきものは、当時の『アルパイン・ジャーナル』中に見いだされよう。

槍ガ岳付近については挿話がある。ウェストン師のノート "Suggested Glacial Phenomena in the Northern Japanese Alps" の掲載された雑誌[2]には、「東から見た槍ガ岳」の写真が別図版としてはいっている。ウェストン師が大関教授訪問の際、持参されたのは、この写真だったのではないか、という気がする。それはともかく、ほとんど全く同じ写真がシュウィンド教授の日本における氷期研究の展望[4]にも出ており、それには「槍ガ岳・槍沢圏谷の三段の堆石」と説明がついている。いや、ウェストン師は右のノートの執筆以前に、大関論文によって、ペンク教授が槍ガ岳付近に氷河地形の存在を確認したことを知ったはずである。だからこそ、この写真を大関教授のところへ持って行かれたのだろう。そのペンク教授は、横山教授の日本に氷期を認め得ずとの説をもって、自説を支持するものとしているレプシウス博士[11]に対し、日本の高山に関するわれわれの知識の不足を考慮していない憾みがあると指摘し、現に大関教授の示した写真によれば、槍ガ岳には立派な圏谷があり、また位置・形状から判断すれば、端堆石としか見えぬ地形もある、といっている[30]。要するにこれは、事実の認定に関する見解の相違なのだが、ガウランド氏は、そしてウェストン師（青年時代アルプスに親しみ、マッターホーンにも登った）もまた、おそらく、アルプスあたりのいわば本場ものを判断の基準とすることによって、日本の氷河遺跡を見のがしてしまったように思われる。これをたとえれば、ガウランド氏らは、本場ものと等しくないからタイとは云えないと思い、山崎・大関・ペンク教授らは、本場ものと違うところはあるが、やはりタイだと見た。それがまた、まがい物がほん物を僭称するかのように受け取られたのかもしれない。それにつけても、日本では氷期の発現のしかたが違うことを、いち早く認めたミルン教授の炯眼に改めて敬服する次第である。

さて、一八八〇年前後すなわち明治一〇年代の前半においては、右に述べたように、ミルン教授を通して知られていたガウランド氏、ウェストン師の挙げたライン教授、本稿ではじめて紹介されたライマン氏・ブラウンス教授と、本邦氷河問題の大勢は氷河不存在説によって制せられていた。来日した欧米の学者が、氷河時代の証跡の有無に着眼

したのも、経験から平野部にこれを求めて、そして氷河はなかったと考えたのも、むしろ自然なりゆきだったと思われる。ミルン教授は、当時におけるただ一人の存在論者だった。この点からいえば、ミルン教授の講演後の討論についてのウェストン師の括言は、同教授の意嚮を全く没却しているところを論外とすれば、まさに正鵠をえていたといえる。なおここに留意すべきは、上記諸家の氷河不存在説の大部分に共通する特質は、みずから得た手持ちの資料に基づくそれぞれの分野におけるモニュメンタルな著作中での氷河問題への論及において、それが説かれていることである。山崎博士は、ふた昔あるいはそれ以上の昔に出版されたこれらの記念すべき業績を念頭において、「氷河果して……」と反問し、「挑戦」されたのだろうか。筆者にはそうとは思えない。そうすべき何ものも、この場合にはあり得なかったと考えられる。

註

23 辻村太郎（一九四九年）「小島烏水氏と日本アルプスの氷河地形」日本山岳会編『小島烏水追憶』一一五頁

24 小林国夫（一九五四年）「日本の氷河」『自然』九巻九号、七七頁

25 辺沿文・士蔑治・来曼（ベンジャミン・スミス・ライマン）（一八七八年）『北海道地質総論』二八—二九頁、開拓使訳のこの報文には、硫黄層（デリュウユーム）、氷漂石（グラシアル）、裂縫（モレーン）、磨団石子（ボールダル）のように、訳者にとっての難解語には原語が付記してあるが、英文報告が参照できないので、引用はその大意を示すものと思われたい。

26 山崎直方（一九二五年）「ライン先生とライン文庫」『地理学評論』一巻、五八九頁

27 ブラウンス（一八八二年）『東京近傍地質編』理科会粋、第四帙、七・二三—二八・三八・一九四頁、英文版は一八八一年に刊行されている。

28 Naumann, E. (1879) Über die Ebene von Yedo. Peterm. Mitt. 25 Bd. S. 121-135. 氷河問題に縁のふかい沼のサンゴ層の最初の紹介。ナウマン氏はそのサンゴ層を新第三紀のものと見、当時は今日より六度ほど温暖だったとし、一方、横須賀から発見された象の化石などから洪積世における気候の寒冷化を考えた。横山博士は同じサンゴ層を洪積世のものと考え、氷河の存在に対しては否定的だったが、サンゴ層の時代に関しては、ナウマン・ミルン両氏より、確実に一歩、真実に近づいていたわけである（註10参照）。

29 ミルン教授は、日本と同緯度ないしより低緯度の地域にも氷河があったのに、日本にはなかったと考えるのは不合理である、というところから出発して、上記の結論に達した。

30 山崎直方（一九一三年）「氷期に関する論争」『現代之科学』一巻九号、七頁

六、神保博士の氷河地形は風化によるとの説について

微妙なのは、ウェストン師の立論の拠りどころとなった神保教授の風化説である。ウェストン師はそれを大関論文で知った。大関教授はそれを、学会で講演をきいた際の記憶に基づいて記した（と一応は考えられる）。大関論文中、神保教授の所説には参照すべき文献が挙げてないし、事実また、神保教授の筆になる唯一の氷河問題関係の記事[31]は一九二六年の刊行で、一九一五年にはその意見はまだ文書の形になっていなかったからである。つぎに、大関論文ならびにウェストン師の氷河遺跡論における神保説の紹介の記事中の「繰返して……」も、一九〇二年の「氷河果して……」の講演と、翌々年の東京地学協会における講演「高山の特色」との、二つの機会をさすと考えれば一応の説明がつく。

山崎教授自身は「高山の特色」[32]――これは高頭式氏編『日本山岳志』に収録されている――の中で次のように述べている。「始めてこの事〔白馬岳の氷河遺跡〕について口頭で批評されたのは神保君であるが、その時には別にどうという具体的な理屈は述べられず、単に私が白馬岳で見ただけの現象では不充分である、といわれて批評されたのみで、私にとっては手ごたえのない反対であった」と。大関教授の伝えるところとは内容的に異なっているのが注意をひくが、この点は後に改めて検討する。注意すべき第二点はその時期である。山崎教授は一九〇二年二月海外留学から帰朝、同年四月東大講師（本務は東京高等師範学校教授）、その夏、震災予防調査会臨時委員として大蓮華火山調査、白馬岳登山（大井上義近氏同道）、その成果「氷河果して……」を九月二十七日に講演、その全文は同年の『地質学雑誌』十・十一月号に分載されたが、同誌九月号の雑報欄には「日本に於ける氷河遺跡の発見」と題してその速報が出ている。なお、神保・山崎両氏は当時地質学会の仕事の担当者でもあったから、神保教授は講演の行なわれる以前に、既にその内容を承知しておられたに違いない。これらの点から、神保教授が初めて口頭で批評されたのは、

むしろ、講演に先立つある機会と推定される。小川琢治教授は「故神保先生等は之〔白馬岳の氷河遺跡についての山崎教授の所説〕に冷評を加え、真面目に之を考究する態度に出る人がなかったのは遺憾であった」[33]との感想を残している。これは、どの場合の発言をさすのか明らかでないが、神保教授の批評の性格とその影響を伝えている。

日本の氷河問題に関して神保教授がみずから筆をとった唯一の文献「長野県の偽氷河遺跡」[31]は、「長野県下の地質鉱物」と題する報告中の、序論に続く一章ないし一節を占め、正味三八〇〇字ほどのものである。教授はその冒頭で「長野県下に於て氷河の遺跡ありと論じたるものを見るに、大概皆根拠薄弱にして、やゝ信ずべきかと思はるるものも、あまりにその実例の稀なるが故に、疑はしき論に過ぎず」と概説し、白馬岳の大雪渓の擦痕は「雪崩と共に墜る石のため、又は山崩れに当りて掻かれたるものと何の区別なく」、「白馬岳の葱平（ネノカダイラ）のお花畑には、丸く膨れたる形の岩石あるも、これ又氷河のためにその形を成せりと曰ふ証左なし」。「信越地方にてカールと認められしものは、遠望してかく認めたるものを大多数とし、近寄りて見たるものとても、この辺に多き山崩れに非ずして氷河の働きにて生ぜりといふ証拠あるものは殆ど無きが如し。我国に於てカールと称せられしものにして、最も著しき立山及び薬師岳のものも、この点に於て反証ありや否や」。「ヘットナー石と呼びたる……一花崗岩塊は、断層の磨擦と墜石の衝突にて、容易にかくの如く丸みある面と磨り傷の平行線を生じ得たりと思はる。かつてこの岩塊を氷河の遺跡とのみ考へしは、もとより取るに足らず」。さらに、一部の学者が氷河堆積物と認めたヘットナー石を含む礫層および松本平の段丘地の礫層、上高地において氷河の端堆石と認められたもの等について、同様に論破し、最後に「既に研究の進みたる西洋の氷河地方を視察したる人が、極めて薄弱なる本邦氷河遺跡存在説を出せしも、多少明瞭なる遺跡かと思はるるもの極めて乏しきは遺憾なり。又疑なき氷河の擦痕がことごとく滅却せしが如き観あるは、ひとへに訝し。特に地質学の教育殆どなき人が本邦に氷河遺跡ありと論ずるものは、全く取るに足らず」と結んでいる。

この報文を書くための調査は、教授みずから記すところによれば一九一九年に行なわれ（但しこれは、この時より

前に教授が問題の地をふんでいないという意味にはならない)、報文そのものは一九二六年に出版されている。いずれにしても、第一論争期の後にあたる。一読して注意をひかれるのは、教授自身の観察ないし調査によって明らかにされた事実をほとんど記述・提示することなく、断案、裁定をくだすというその論法であろう。この一篇を、四十年の昔の、当時としては及ぶかぎりと思われる周到な調査によってみずから得た諸事実に根拠をおくライマン・ブラウンス氏らの氷河不存在論、あるいは、本報文執筆の時に近い第一論争期の、ものを見る目もこまかくなり、議論も委細をつくしている諸論者と比較するとき、これはむしろ単なる所信の披瀝に近い、との感が深い。しかし、それ以上に注目すべきは、ここに引用しなかった部分を含めても、その論述中、山崩れによるとの意見は散見するが、風化によると解釈しうる見解は殆んど見当たらないことである。神保教授が繰返して風化説を唱えたのなら、この論稿にもその片鱗ぐらいはあらわれていてもよさそうに思われる。

大関教授によって紹介された、氷河遺跡は風化によるとの神保説は、同じく大関教授によれば、学会の席上で述べられたことになっている。しかし、山崎教授の二回の講演の後の討論ないしその際の神保教授の発言の記録は、筆者にはまだ見つからない。見いだし得たのは、大関教授の前掲講演速記[18]中の次の記述である。「学者の態度の第三番目に、公の言論に於ては氷河論に対し何ら反対せずに、私議に於ては反対される方がすこぶる多いやうに見受けられる。これも実は感服できぬ態度と思ふが、影響するところは少くない。その一つの御考をもれ承はるところによると、空気の侵蝕論である。氷河論に対しては立派な根拠と思はれる。空気の侵蝕、気蝕論ともいふべきか〔当時風化は時に attack of atmosphere ともいわれていた〕。……もしそれらの方が気蝕論を信ぜられるなら、堂々と飛騨山脈なり赤石山脈なり、実地の問題を掲げ討論されればはなはだ結構と思ふ。さうすれば如何にこの問題がどんどん片付くか。けれども、もし私の聞く所に誤がないとすれば、飛騨山脈における山崎博士の氷河地形は、普通の空気の侵蝕でできる、山崩れでもできる、雪崩れでもできる、何も氷河を持ってくる必要はない、と云ふやうな説であるらし

い。果してかう云ふ考へでも気蝕論を内々に唱導してゐるとすれば、それははなはだ放漫な主張ではないかと思ふ。……気候の変動は事実吾々の認める所で……古生物学上から外国と同じに、日本でも過去の気候の変遷が知られてゐる。それ故、気蝕論ならばその気蝕論の根拠を明らかにすればよろしからうと思はれるが、さう云ふことがないとすれば、これは矢張り、学者の態度としては世間をさわがせる因となるのではないか、と思はれる」。

第一の疑問は、この気蝕論者は誰か、である。この講演には、山崎・ウェストン・横山・加藤鉄之助・矢部・辻村・ヘットナー諸氏が出てくるが、神保氏の名は見えない。一方、大関教授は『スコットランド地理学雑誌』の論文で、疑いの余地のない明確さで、神保教授と風化説（気蝕論）を結びつけている。しかも気蝕論は、大関教授の講演速記によってのみ今日に伝えられ、他の文献には見いだされない。これらの点から、「その一つの御考」は神保教授の考えと解釈される。

第二は、大関教授の「もれ承はるところによると」、「気蝕論を内々に唱導」という表現は、その気蝕論が、公開の席上、つまり学会の会合で述べられたのではないことを意味するが、もしそうだとすると、大関論文の「……著名な鉱物学者K・神保は東京大学地質学会の会合（複類）で繰返して、山崎の結論の土台となったすべての現象は風化によって形成されたものと認められる、と述べた」という記述とは矛盾することになる、という問題である。もれ承わることができた神保教授の気蝕論は、大関教授には、問題となった地形を氷成と見る論と対抗しうる、一つの可能な考え方と思われた。このことは、引用した講演速記にもあらわれている。そう思われたからこそ、そしてまた、態度の公正を期するためには、自分に不利な説のあることも伝えるべきと考えて、『スコットランド地理学雑誌』へ寄稿の論文中、日本の氷河問題についての代表的見解を紹介するに当たって、気蝕論をその一つとして採り上げようとした。しかし、学術雑誌にまさか「もれ承はるところによると」とは書けない。それでは、紹介した見解の信憑性にかかわる。しかしまた、拠りどころとすべき文献もない。やむをえず、挙げるべき典拠の代わりに、事実上、神保教授が所見

を述べた「学会の会合で」とした。その上で、さらに、会合で口にされた「ことば」ではなく、その「こころ」を採って、つまり、「ことば」の背後にあると大関教授には信ぜられた考え方すなわち気蝕論を紹介した。これは全く筆者の推測だが、こうとでも考えなければ、この問題はつじつまが合うようには解決できないのではなかろうか。

第三には、大関教授によって採るにたる論と評価されたと受けとられる気蝕論は、神保教授がどの程度まで意識的・組織的に考究されたものだったのか、という疑問である。「もれ承は」ったのは偶然にでもなく、人づてでもなく、実は、何か納得できない思いがして、大関教授みずから、叩けよ然らば開かれんと、神保教授に直接質問した結果と筆者には思われるが、神保教授はその時、むしろ思いついたままに、まず風化作用を挙げたという程度だったのではなかろうか。大関教授自身、気蝕論の話のすぐあとで、その説を「山崎博士の氷河地形は、普通の空気の侵蝕でできる、山崩れでもできる、雪崩でもできる」という形で伝えていることからも、そのように判断される。気蝕論が「長野県下の偽氷河遺跡」では、もはやほとんど痕跡をすらとどめていないのも、それを暗示している。

ウェストン師は「日本アルプスにおける風化作用の広汎かつ多様な結果についての神保博士の見解云々」と記したが、これは大関論文中の神保教授とその説を紹介した四十語ばかりの部分を、ウェストン師自身が潤色したものと見られる。事実、この記述に見合う文献ないし資料は何も見あたらない。神保教授の風化説は、少なくとも文献的には、まぼろしの説といえそうである。

山崎教授は神保教授の八年の後輩にあたるが、公開の席で神保君と呼ぶ間柄であった。神保教授からみれば、山崎博士は何の遠慮もいらぬ同僚の一人だったと想像される。小川教授の「冷評」ということばからは、少なくとも、その批評が条理をつくしたものでなかったことを推知しうる。その批評の調子は「長野県の偽氷河遺跡」であるていどまで見当がつく。張り切っている弟——留学から帰朝して以来「氷河果して……」の印行までのスピーディな事の運ばれ方を想起されたい——に、兄貴が冷水をかけた。実質的にそれは「手ごたえのない」ものだったが、おさまらない

気持から、何とか一矢をむくいたい、そういう内心のおのずからのあらわれが、「氷河果して……」という標題だったのではなかろうか。問題の標題は一種の買言葉だったのではなかろうか。そうとすれば、挑戦的というより防戦的、応戦的と見るべきではないのか。由来、買言葉は、おおむね、売言葉の発せられた直後に発せられる。山崎論文の標題の反問形に、もし他発的誘因があったとすれば、それは講演前に口頭で述べられた「神保君の批評」だったと思われる。

なお、既述の通り、一九〇二年の山崎論文の蒔いた種は、一九一一年から一八年へかけて見事に開花した。当時の氷河問題論議は、しかし、望月勝海氏『日本地学史』によれば、一九三一年にはじまる第二論争期におけるほど「白熱的なものでなかった。それは主として、……小藤や横山はじめ神保小虎や佐藤伝蔵らが、氷河論には確実な根拠がないとして、わざとこれに無関心な態度をとったからである」（一四七頁）という。小川博士が「故神保先生らは冷評を加え」と主語を複数形にし、大関教授が「私議において反対される方がすこぶる多いように見受けられる」といったのと照応するが、おそらくこの記事も拠るべき文献を欠く言い伝えに基づくものと思われる。ただし、横山博士は第一論争期の発端となった論文のほかに、日本のサンゴ期に関する論考を発表して、古生物学の立場から氷河問題に積極的に寄与しているから、右の望月評言は同博士に関する限り当たらないというべきであろう。

東京大学の地質学科の第一回のただ一人の卒業生であり、一八八六年以来三十五年間教授であった小藤博士の日本の氷河問題に関する公式の発言は、「日本の火山」と題する長文の英文論文[34]の脚注の「山脈（飛騨山脈）の二六〇〇メートル以上は雪蝕をこうむり、鋭い山稜の直下、同等の高距に、cirques の列を見る」という二行の記述だけである。ウェストン師の論述中で、この小藤教授の山崎説に対するやや具体的な見解にめぐり会えたのは、全く思いがけぬことであった。ただ、小藤教授の「雪蝕」を、ウェストン師宛の書面に見える夏季の雪崩の作用とのみ速断するのは、避けるべきであろうし、その他にも註釈の必要な点がなくもない。が、それよりも、地形学上の新学説をいち早

くとり入れて、日本における準平原関係の先駆的論文[35]をみずから発表されたほどの教授が、氷河問題に関してなぜ消極的だったのかは、やはり一つの謎である。

ブラウンス博士が理学部地質学教授となった一八七九年に、小藤教授は地質学科を卒業している。工部大学ミルン教授の講演の話が、ブラウンス博士から二十三、四歳の小藤理学士に伝えられたことはなかったであろうかと筆者ははじめ疑ったが、ミルン教授の講演当時、小藤理学士はすでに海外留学中であった。横山教授は少なくとも二年近くは「生徒」として、ブラウンス教授の講義と指導を受ける立場にあったはずである。横山教授が出版直後に『東京近傍地質編』を熟読されたことは、想像だが、まず確実である。小藤博士も、日本の地質関係の論著の少なかった時代だから、やはりそれを読まれたであろう。しかし、後年の両教授の氷河問題に対する態度や考え方の深層に、ブラウンス教授の氷河不存在論が、なお何らかの影響力をもつ程度に尾をひいていたかどうかは、おそらく両教授自身でさえ、明答しかねた問題なのではなかろうか。

註

31 神保小虎（一九二六年）「長野県下の地質鉱物」『内務省天然記念物調査報告・鉱物之部・第一輯』一―六頁

32 山崎直方（一九〇四年）「高山の特色」『地学雑誌』第一七集、七七頁

33 小川琢治（一九四一年）『一地理学者之生涯』京都、二五三頁

34 Koto, B. (1916) On the Volcanoes of Japan, IV. Jour. Geol. Soc. Tokyo, Vol. 23, p. 78

35 Davis, W.M. が侵蝕輪廻説を体系的に述べた The Geographical Cycle. G. J. Vol. 14, pp. 481-504 は一八九九年、小藤文次郎「中国筋の地貌弐」『震災予防調査会報告・第六四号』は一九〇九年の発行。

七、あとがき

本稿はもともと、ウェストン師の一文と、それを機縁に拾い集めえた本邦氷河問題研究の落穂の紹介を主目的とし

たものである。すでに記したように、筆者はウェストン師の論述を読んで、師の伝えるミルン教授の結論に不審を覚え、ミルン論文を見て末尾の討論記録にブラウンス博士の名を発見した。それに示唆されて『東京近傍地質編』をひもとき、既にライマン氏によって氷河不存在論の唱えられていることを知った。本稿の第四・五章はそうして生まれたものである。

また、ウェストン師の氷河遺跡論を読み進んで「風化作用の広汎かつ多様な結果について云々」という記述に出会い、ふと合点のいかぬ思いが頭を掠めた。風化の結果の種々相を日本の氷河問題との関連において扱ったものは、聞いたことも読んだ憶えもなかったからである。師の論述から大関論文へさかのぼり、さらに関係する諸文献に当たっているうちに、神保教授の風化説が少しずつ不思議に思えてきた。その不思議の実体は、前稿「本邦氷河問題研究拾遺」ではまだ見当がつかないままだった。幸い山口大学附属図書館文理学部分館の好意で、神保教授の「長野県の偽氷河遺跡」を読むことができ、一方、昔たしかに目を通したが内容はもう忘れていた、しかも、手元にありながら再読を怠っていた大関教授の講演速記を読みなおして、その不思議も第六章を草し得たていどには解き明かすことができた。本稿における筆者の思考の糸を逆にたどれば、それらはすべて、ウェストン師の論述に端を発している。そういう形で筆者は師の「日本氷河遺跡論」から恩を受けたことを銘記しておきたい。

最後に、今は全く意外なほど接することの困難だった文献の参照に便宜を与えられた山口大学附属図書館と、たまたまの転載の申出によって、筆者に稿を改める機会をめぐまれた日本山岳会に謝意を表して筆をおく。

（昭和四十三年七月四日稿を了る）

ロシュ・ゴル　一九六七年

＝サラグラール南峰ほかの登攀＝

一橋大学山岳会

はじめに

ロシュ・ゴルという谷は、そもそもあまり人の気をひくようなパッとした存在ではなかった。私たちが一九六七年夏、ここへ訪れることになったきっかけというのは、ロシュ・ゴルという谷に長い間憧れの気持を抱いていたとかいう、純粋な動機からでは全くなかったが、そこで一と夏を過ごした結果は、期待していた以上の充実した登攀を経験することができ、まずは満足すべきものであった。

ヒンズー・クシュには、七〇〇〇メートルを越える大きな山が四つあり、ティリチ・ミール、ノシャック、イストル・オ・ナール、サラグラールと、ほぼその順に、南から北へ並んで聳えている。それらの山に東側（つまりパキスタン側）から入り込んでいる谷には、ティリチ・ゴル、アトラック・ゴル（もしくはウドレン・ゴルとも呼ばれてい

る)、ロシュ・ゴルと三つあり、そのうち一番大きく、昔から人によく知られていたのは、何といっても、ティリチ・ミールやイストル・オ・ナールの入山路であるティリチ・ゴルであった。また、深く入り込んだアトラックの谷は、近年にわかに注目を浴び、遠征隊が幾つか入り込んだが(一九六四年オーストリア隊―シャカウルなど初登頂、一九六五年ドイツ隊―シンゲイク・ゾム初登頂、一九六六年オーストリア隊―ダルバン・ゾム初登頂)、ロシュ・ゴルには、一九五八年、イギリスのオックスフォード隊が入り、サラグラールに登ろうとして遭難を起こした後は、誰も訪れる者がなかった。このオックスフォード隊の前にも、測量とか放牧のために人間が入った以外は登山隊など訪れることもなく、ヒンズー・クシュの真ん中にあるにしては話題に乏しい、いわば忘れられた存在であった。

私たちは当初、カラコルムへ出掛けるつもりで、四年程前からパーミッションを得るべく交渉を重ね、一九六五年にはそのための交渉を兼ねた先遣隊を派遣した。そして、一九六七年のはじめには、その年のパーミッションは確実であろうという情報をつかみ、しかるべき準備を整え、四月には装備一式を発送するところまで漕ぎつけていた。

しかし、先年の印パ紛争の余波などで情勢は意外に厳しく、結局のところ、カラコルムのパーミッションは獲得するに至らなかった。しかし、再三の煩雑な交渉の結果、代案として提出したヒンズー・クシュ「サラグラール南峰およびその周辺の山」という対象に対して、やっとパキスタン政府から公式の登山許可をもらうことができたのである。

私たちがサラグラール南峰を選んだのは、それが残された七〇〇〇メートル峰の一つであり、すでに登られている北峰より高いのではないかという、不確かだが耳よりなニュースなどもあったからだが、実際にパーミッションがおりた段階になって、どこからその南峰に登ろうかと考えたとき、ロシュ・ゴルがはじめて大きく私たちの前にクローズ・アップされてきたのだった。

サラグラール北峰が初登頂されたのは、一九五九年、イタリアのマライニ等によってであるが、彼等は北側にある

ジワール・ゴルのニロギ氷河から、キャンプを六つ建て、頂上から北に派生する尾根を辿って登頂している。もし同じニロギ氷河から南峰へ登ろうとすると、南峰から東へ伸びる長い尾根づたいに登るか、あるいはイタリア隊と同じルートから北峰を越えて南峰まで行くか、のどれかになる。どちらにしてもひどく長い距離になるし、その上、他に適当な未登峰もなく、楽しみも少ない。それに加えて、このジワール・ゴルには近年オーストリアのシュムック等が入って、ウシュコ氷河を歩きまわったりしている。どうも人くさいし、いささか新鮮味に欠けるきらいがある。

ところがロシュ・ゴルはどうだろう。何だか地味な感じで、イタリア人の初登攀の舞台となったニロギやアトラックの華々しさに較べ、何となく山の裏側のような響きがある。ちょうど穂高での梓川に対する蒲田川のような感じである。しかも、オックスフォード隊が遭難を起こしたロシュ・ゴルのノース・クム氷河は、同隊の報告によれば、遭難さえなければ登れたであろう、ということであり、難かしそうだが面白そうに思える。それに、南峰へ直接つき上げている南側の谷（ロシュ・ゴルの一つの枝谷）には未だ誰も足を踏み入れていないが、そこに可能性を見出せたら、こんなおあつらえ向きなことはない。その上、アトラック氷河とロシュ・ゴル氷河を隔てている尾根上には、名前も知られていない未知の山々が連なって気を引かれる。

そんなふうに考えてくると、ロシュ・ゴルに私たちが向かうのはまさに当然のことと思えてきたのである。

こうして私たちは、とにかくロシュ・ゴルに向かうことにした。しかし、過去の記録が少ないため、十分な資料を得ることもできず、極めて不確かな気持で出掛けなければならなかった。もちろんしっかりした地図などなく、リエゾン・オフィサーが借りてきてくれた、パキスタン・サーベイの不鮮明なクォーター・インチ・マップだけが唯一の頼りだった。

隊員は次のとおりである。

隊長　山本　健一郎（33歳）

副隊長　倉知　敬（28歳）
隊員　佐藤之敏（25歳）＝渉外
　　佐藤久尚（25歳）＝装備
　　原　博貞（25歳）＝食糧
　　池知昭洋（25歳）＝記録
　　宮武幸久（21歳）＝庶務
医師　鈴木羊三（36歳）＝慈恵会医科大学山岳部 O・B

また、パキスタン政府から派遣された連絡将校は次の二人である。

ムニーブ・ウル・ラーマン・ファルーキ大尉（30歳）
マリク・モハメッド・アシュラフ大尉（38歳）

二人とも真面目な回教徒で、エリート軍人としての矜持を失わない立派な人間であり、私たちへの協力を惜しまなかったが、何分にも二人というのは荷が重すぎて、堅固しい感じであったのは否めない。

私たちのロシュ・ゴルでの活動は、次の四つの局面に分けて考えることができる。

まず第一は、サラグラール南西側にあって、ロシュ・ゴル氷河から派生して北へ深く切れ込んでいるノース・クム氷河の登攀にあてられた。オックスフォード隊のネルソンが転落死したのは、この氷河のつめの六六〇〇メートル地点である。

私たちは、サラグラール西壁の麓にベースキャンプを設けた七月四日以降、オックスフォード隊とほぼ同じルートを辿って登ろうとしたが、七月十二日、五二〇〇メートル地点で池知隊員が落石で左足を骨折するという事故が発生

し、やむなくこのルートからの登攀は放棄することとした。

第二の局面は、ノーバイズノン・ゾム（六六〇〇メートル）の初登頂である。

ノーバイズノン・ゾムはロシュ・ゴルとアトラック・ゴルを隔てる尾根上にあり、三つのピークを連らねている急峻な山である。ロシュ・ゴル氷河の底から見上げる頂上は、ヒマラヤ襞におおわれて美しく、とても華やかな感じだった。

この山に登ろうとした時は、もう半ばサラグラールをあきらめていたが、気分一新の意味と、池知に付き添って下山した宮武の帰着を待つ間、短期間に一つでもピークを踏みたいという意欲があって、十日ぐらいの予定で取り付いてみたのである。しかし、実際には深いペニテント・スノウと長いやせ尾根の縦走に苦闘を強いられ、七月十九日から十九日間を費やして、やっと登頂することができた。この登攀は、六〇〇〇メートル級の山ではあったが十分な手応えがあり、登攀のテクニック、山の様相、ルートのとり方といった点で、ヒンズー・クシュの山登りのエッセンスを思わせるところがあった。また登った三つの山のうち、最大労力と日数を費やしたこともあり、私たちの今回の遠征では、もっとも強い印象を受けた登山であった。

私たちの第三の活動は、ウドレン・ゾム南峰（七〇五〇メートル）の初登頂に向けられた。

ノーバイズノン・ゾムの第一キャンプを設けたウドレン・アン（五三〇〇メートル）から、ノーバイズノン・ゾムと反対側の尾根上にウドレン・ゾムの三つの頂上が続いていた。ウドレン・ゾムは、一九六四年、オーストリア隊によってまったく反対側の尾根をルートとして、三つのうちのもっとも北にある最高峰（北峰）が初登頂された。

私たちは、これを新たに、南側の稜から南端の頂上に立ったのである。ルートがノーバイズノン・ゾムと同じように、急峻なクーロアールややせ尾根であったのに、前者に較べて著しく短期間で登れたということは、一旦高度順化し、山そのものにも慣れてしまえば、雪の少ないヒンズー・クシュの山は比較的簡単に登れるということを如実に示

している。ウドレン・ゾム南峰の場合は、岩場の登攀が随所にあったが、このあたりの山塊で見る限り、ヒンズー・クシュの岩は岩質がもろく、楽しい岩登りをするというわけにはいかない。サラグラールの西壁やウドレン・ゾムの北壁は圧倒的に切れ落ちた魅力的な岩壁となっているが、見ていると落石が絶えないし、将来のバリエーション・ルートとして考える場合、岩質の点で大きな制約を受けざるをえないだろう。

さて、最後に第四の局面は、残されたチャンスを最大限に生かして、サラグラール南面の未踏の谷から南峰（七三五〇メートル）を登ることに全力を投入した。

最初は、この残された期間を、さらにムトチリとかアトラック・ゾムといった六〇〇〇メートル峰を登るのに使う予定だったが、それらを偵察する間に、思いがけずサラグラール南面に可能性のあるルートを見つけ、急遽転進したのである。

七月十八日にベース・キャンプを移してからのラッシュ・タクティクスによる登攀はトントン拍子に進み、五日間で二つの中間キャンプ建設と一回のビバークの末、二人（佐藤之、原）が南峰に登頂した。

八月も終わりに近づくと、氷河上には大きな変化が現われ、氷の溶ける速度も速く、クレバスは流れ込む水が氷化して埋まるなど、氷河上の登行は容易になる。もはやブロック崩壊以外は雪崩の危険もなく、急峻な斜面をほぼ一直線に、最短距離をとってルートを設定できたのは、登頂成功のもっとも大きな要因だった。八月下旬のもっとも条件のよい時期に、十分高度順化した後とりついたのは、正に賢明なことだった。キャンプ間の高距は一〇〇〇メートル以上もとることができ、また天候が安定しているために、かなり大胆にビバークを予定に入れることができるなど、ヒンズー・クシュの八月は思いきったラッシュ・タクティクスのとれる、文字通り絶好の「登山シーズン」であるといえよう。

キャラバン

ラワルピンディから空路チトラルに飛んだ私たちは、六月二十七日、二十五頭のロバと四頭の馬を雇い、チトラルからドラサンへの五十四マイルにわたるキャラバンを開始した。

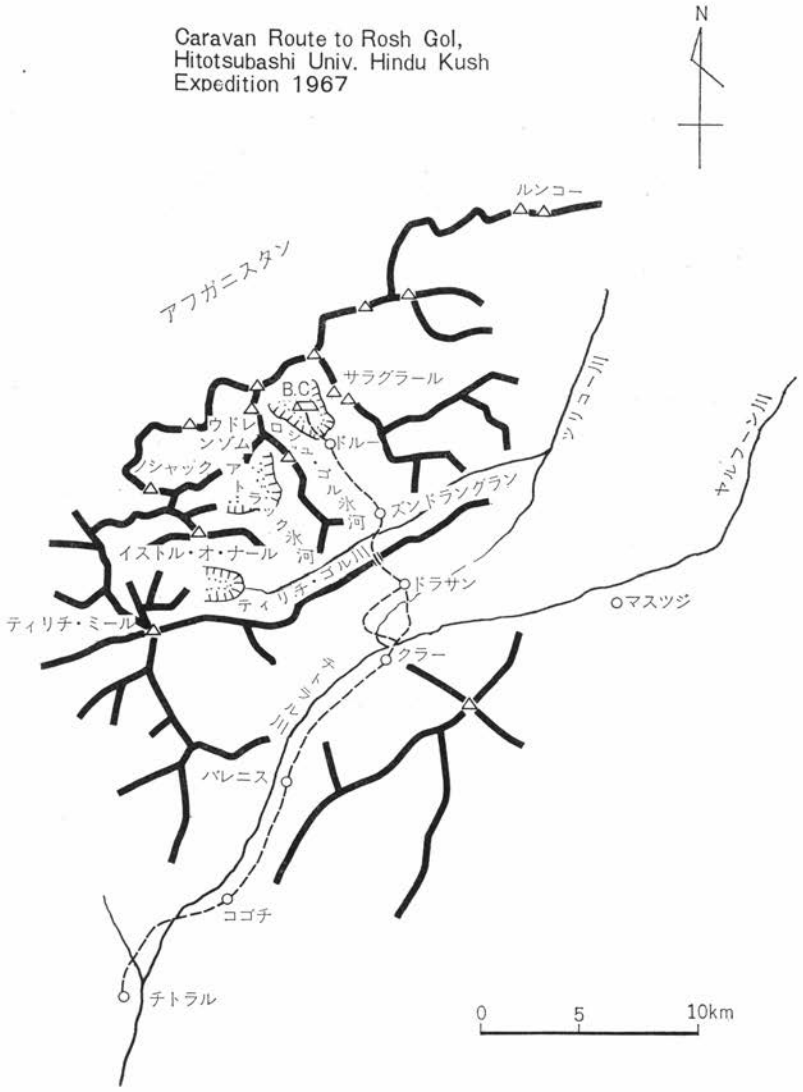
チトラルからマスツジを経てシャンドール峠を越え、カシミールへ抜ける街道は、かなり昔から重要な交易路となっているので、よく踏まれた立派な道が続いている。私たちは、途中コゴチ、バレニス、クラーにそれぞれ一泊し、四日目にこのシャンドール街道とわかれて左へツリコー谷に入り、ドラサンへ向かった。

クラーまでの道は、濁流うずまくチトラル川本谷の左岸沿いに延々と続いていたが、広々としたチトラルの河岸段丘の広がりをはずれると、谷はとたんに狭まってゴルジュ状となる。いよいよこれから旅が始まるのだという、昔ながらの街道の入口の由緒ある趣きがしのばれて、このゴルジュには誠に捨てがたい雰囲気があった。

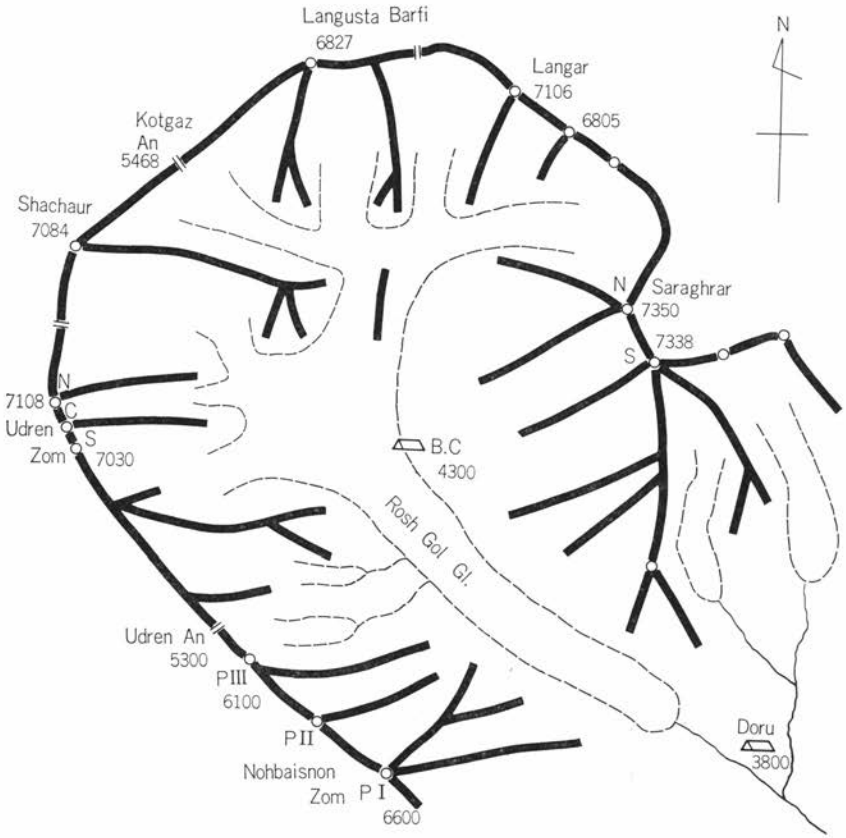
クラーからは短い一日行程で、昼すぎて間もなくドラサンへ到着。昔の領主の館に隣接するリンゴ園の中にキャンプをさせてもらった。

翌七月二日、私たちは一三一人のポーターを雇い、サルト・アンを越えた。リエゾンの働らきで一人八ルピーという妥当な日当でポーターを雇うことができたが、ロバと違って人間を雇うには、賃金をめぐってトラブルが起こるのは避けられないようだ。

ドラサンからサルト・アンへの登りは約二〇〇〇メートル、向こう側、ズンドラへの下りは約一〇〇〇メートルであるが、この日のアルバイトは相当なものだった。峠へ登るにつれ、背後にブニ・ゾムからスワート方面へつづく山並みがだんだんと姿を現わし、その柔らかく連なる澄んだ山景色が、登りに疲れた身体をいやしてくれるようだった。


Caravan Route to Rosh Gol,
Hitotsubashi Univ. Hindu Kush
Expedition 1967
N
ルンコー
アフガニスタン
サラグラール
B.C.
ウドレ
ンゾム
ロシュ・ゴル氷河
ドルー
シャック
アトラック氷河
ズンドラングラン
ツリコー川
ヤルフーン川
イストル・オ・ナール
ティリチ・ゴル川
ドラサン
マスツジ
ティリチ・ミール
クラー
ミニジャ
バレニス
コゴチ
チトラル
0
5
10km

Sketch Map of the Rosh Gol Region



Originally surveyed
by Frieder Gölz,
rearranged by K. Kurachi

次第に緑が失せ、急なガレの登りとなる。慣れない高度に息をきらしながら、それでも期待に胸を躍らせて最後の数歩を小走りに登ると、そこには息を呑むような風景が待ちかまえていた。左手に一段と高いティリチ・ミール、続いてイストル・オ・ナール、そして正面にはロシュ・ゴル谷の狭いゴルジュが一直線にかけ上がり、その奥やや右寄りに目指すサラグラールのマッシブな南面がどっしりと聳え立ってみえた。

最初の印象は、ただ途方もなく大きい山ということだけだった。双眼鏡を取り出して交互にのぞいてみるが、雪をべったりつけた急峻な上部フェースと下部の枝尾根に隠された深い谷は、見れば見るほど手がつけられない気がして、呆然と見とれるばかりであった。それでも、目指すは反対側のノース・クムだからと心にいい聞かせて、降りはじめた。降る途中から見るサラグラールは、ますます高く、夕陽をあびて近寄りがたい顔をしていた。

サラグラール北面の試登と事故

サルト・アン越えから二日、ズンドラでポーターを雇いかえた私たちは、ロシュ・ゴル谷を遡り、七月四日、高度四三〇〇メートルの地点にベース・キャンプを設けた。そこはサラグラールの巨大な西壁の真下にあたり、地図上にトティラス・ノークと名付けられた夏の放牧地である。草地の点在する砂原の中を細い小川が幾条も流れ、八月上旬になると色とりどりの高山植物が咲き乱れる、荒々しい世界の別天地であった。

キャラバンの途中、南面の谷に偵察に入ってもみたが、折からの悪天候のため、皆目、様子がわからなかった。その上、サルト・アンからの印象があまりにも絶望的だったので、ノース・クムからのルートを優先させることにした。

七月五日、早速ノース・クム氷河の偵察を開始したが、個人差はあっても、この辺で高度の影響が現われたようで、頭痛を訴えたり、食欲を失う者も続出した。さらに、スケールの大きさを見誤まっていたこともあり、日帰りで

ノース・クムの奥をちょっと見てこようと考えた七月六日の第一回偵察は、時間切れで失敗に終わった。

ノース・クムに入り込むには、その下部にある二段構えのアイスフォールを突破せねばならないが、ベース・キャンプからでは距離も遠く、複雑にクレバスのあいた氷河は通過するのに非常な時間を要した。氷河上は高度五〇〇〇メートル位までは氷が露出し、その上にモレーンが累々と転がっているという状態であるが、それより上部に行くと、新雪の積もった雪原状となった。

ノース・クム氷河は幅が約一キロメートルあり、両側は一〇〇〇メートル以上も高くそびえる垂直の岩壁に取り囲まれている。しかし、私たちはそこに上部稜線に続くと思われるクーロアールがあるにちがいないと考えていた。

ベースキャンプからの偵察行では遠すぎるので、私たちは氷河入口に第一キャンプを建て、そこから次の偵察行を試みることにした。八日、雇った二人のハイ・ポーター（ウィラヤート・シャーおよびダルベッシュ・ハーン）にボッカさせ、C1を建設（四六〇〇メートル）、佐藤之、原、佐藤久、倉知の四人がその日C1に泊まり、翌九日、再びノース・クムに入った。

この日は更に上部雪原をつめ、ほとんど最奥のカールの底にまで近づいたが、大きなクレバスに阻まれて、岩壁までは近づけなかった。氷河のつめを詳細に観察した結果、がっかりしたことには、望ましいクーロアールなどはなく、このルートは決して楽でないことをはっきりと悟らされることとなった。ただ一つ考えられるルートは、岩壁左側に斜めにいくつも走っている幅広いクーロアールのいくつかを適当にトラバースして結びつけ、ランガールよりの稜線上へ登るというルートだった。

他によい考えもないまま、この左手のクーロアールに唯一の望みをかけて、とにかく取りついてみることにし、次にカールの底へ続く大クレバス下に第二キャンプ（五二〇〇メートル）を設けた。

事故の発生は七月十二日のことであった。第二キャンプに集結した佐藤之、原、池知の三名は十日に第一回目の試

登を行なった後、十一日を休養にあて、万全の態勢で第二回目の試登にとりかかった。今日こそはビバーク覚悟で稜線に到達しようと、六時半にキャンプを出て、九時には五六〇〇メートル地点にさしかかっていた。氷のつまったクーロアールを原、佐藤之、池知の順でスタカットで登っている最中のことである。空を切って落ちてきた唯一個の落石が先頭の二人をかすめ、池知の左足に当たった。この落石によって、彼の左大腿部は完全に折れてしまった。驚いた二人は彼を安全なテラスに移し、佐藤之が直ちに救援を呼びに降りた。十二日午後十時、C1にいた倉知、宮武が薬品、防寒具、食糧を持って現場に到着、付き添っていた原と四人でビバーク、残りの隊員とハイ・ポーター二人がC1へ入り、リエゾン・オフィサー二名とコックのシェルワリがベースに残った。そして翌十三日から困難な作業が続けられた。クレバスをこえ、モレーンを降り、ある時はソリで、ある時は担架でと、あらゆる手段を使って、十五日午後七時に池知をベース・キャンプに収容することができた。最後の日には皆消耗の極に達し、大きな石の積み重なったモレーンの上を担架をかついで歩きながら、足がもつれ、転んだりするほどだった。

翌日、ドクターの手で全身麻酔をかけられた上、ギブスをはめる手術が行なわれ、池知を日本へ送りかえす手筈が整えられた。

最年少で、まだこれからも山登りの機会に恵まれるだろう宮武がカラチまで付き添って下ることになり、十九日早朝、ポーターにかつがれた池知は山を下りて行った。リエゾンのキャプテン・アシュラフも同行した。

二つの初登頂——ノーバイズノン・ゾムの縦走とウドレン・ゾム

ベース・キャンプ地点より少し下流に対岸から流れ落ちているゆるい氷河があり、なだらかなコルに続いていた。この氷河は、地図で見るとノーバイズノン氷河と記入されており、その左奥にヒマラヤ襞のきれいな山があった。池

知の事故で気落ちし、宮武がカラチまで随行して登攀要員すら欠くことになった私たちは、気分一新の意味でこの山に目を向けた。

十九日、私たちは早速この氷河をつめ、容易にその奥のコルに立ち、それをウドレン・アン（五三〇〇メートル）と名付けた。

峠に登り着き、その向こうに広がる見知らぬ土地の有様を初めて垣間見るのは、いつも心地よいものである。次第にゆるくなっていく雪の斜面を登りきって顔を上げると、南側から吹き上がってくる柔らかいそよ風とともに、全く新しい光景が飛び込んできて、新鮮な感激を与えてくれた。

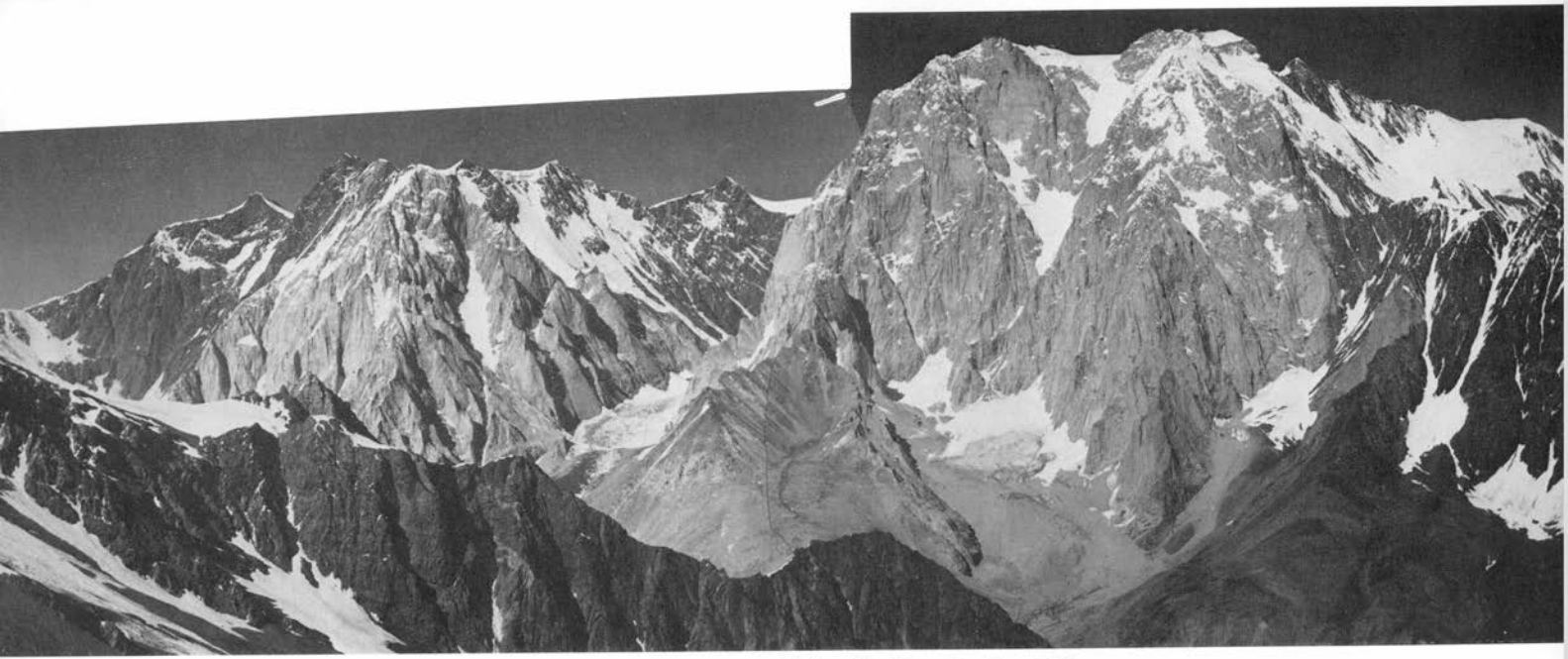
ウドレン・アンはペニテント・スノウにおおわれた広い雪原となっていて、アトラック側に下りている氷河の彼方には、長々と蛇腹のようにくねったアトラック氷河があり、その向こうに端正な台形のノシャックがスカイラインを画して聳えていた。

コルの両側は高い岩壁にさえぎられた尾根が続いているが、ノース・クムの険悪な様相を見せつけられてきた目には、さほど威圧感もなく、むしろ格好な登路となりそうなスキを見出す余裕さえもてた。私たちは、そこにC1を建て、直ちにその左手へのびる尾根伝いにノーバイズノン・ゾムを試みることにした。つづく何日かをボッカに費したあと、二十三日、倉知、佐藤之、原、佐藤久の四人がウドレン・アンのC1に入った。

翌二十四日、倉知と佐藤久の二人は、C1より上部のルート偵察に出た。ウドレン・アンのすぐ左手は圧倒的に切れ落ちた岩壁となっているが、その岩壁の上端より西へ長い雪稜が派生しているので、その尾根——西稜と名付けた——の端へ出るつもりで、岩壁の下を左へトラバースしていった。その側壁は四十五度位の傾斜をもつ硬い氷壁だったが、トラバースを続けていくうちに、次第にやわらかなペニテント・スノーにおおわれた雪壁となり、幸い登行は易しくなって来た。



ウドレン・ゾム南峰の約6500m地点より望むノーバイズノン・ゾム（6600m）
Nohbaisnon Zom (6600m) seen from the point of ca. 6500m of Udren Zom South Peak.
(By K. Kurachi)



ランガールとサラグラールの西面、真中の谷がノース・クーム谷

Langar (7106m) and Saraghrar (7350m) (west face). North Cwm seen at the center.

(By K. Kurachi)

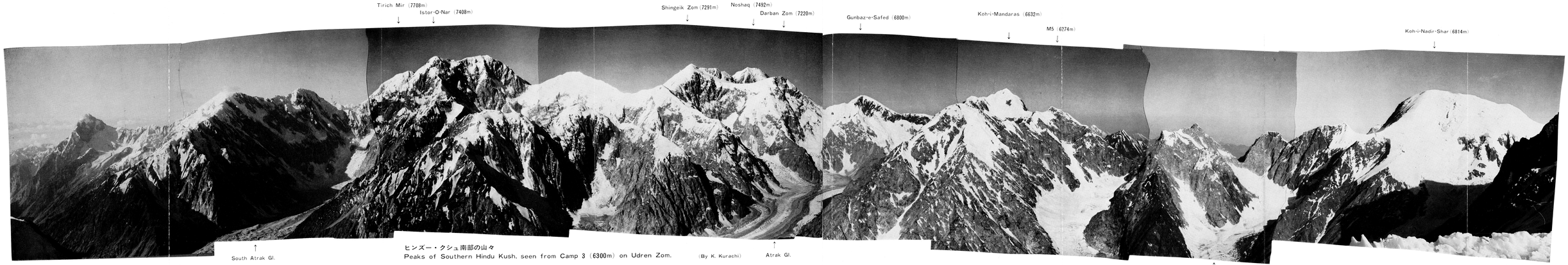


ノーバイズノン・ゾム西稜から見たウドレン・ゾム南面
South face of Udren Zom seen from the west ridge of Nohbaisnon Zom.
(By K. Kurachi)



ウドレン・ゾム南峰5500m付近の岩壁

On a rock wall at the height of 5500m, south face of Udren Zom South Peak. (By K. Kurachi)



ヒンズー・クシュ南部の山々
Peaks of Southern Hindu Kush, seen from Camp 3 (6300m) on Udren Zom. (By K. Kurachi)

後にジャイアント・スロープと名付けた西稜の巨大な側壁を登りきり、西稜上に立つと、大体の登路の見通しがついた。西稜は雪屁のとび出たヤセ尾根となって主稜線上につき上げており、そこから主稜線は三つのピークを連ねている。ひどく長くまた起伏のはげしい稜線ではあるが、忠実にそれをたどっていけば、主稜線の最奥に聳える頂上に到達することはできそうに思えたのである。その日二人は、主稜線上のピーク—PⅢ（六一〇〇メートル）の肩のところまでトレースしてC1に戻った。西稜上は不安定なペニテント・スノウにおおわれている上に両側が鋭く切れ落ちていて、ほとんどアンザイレンしていかなければならなかった。

中一日おいて二十六日、西稜上へC2を設営するつもりでいたら、驚いたことには先日のトラバース・ルートを横切ってブロック雪崩が発生した。仕方なくその日のボッカは中止、改めてもっと安全なルートをみつけるために、西稜のうんと端の方に当たる所までアトラック側へ一旦下り、側壁の端にある急峻なクーロアールをたどるルートを開拓することにした。その日は何とかそのルートをかため、固定ザイルをフィックスした。そして二十八日、西稜上五八〇〇メートル地点にどうやらC2を設け、登頂への足がかりを築くことが出来た。

その後、天候の不順等のためひとまず全員ベース・キャンプへ下り、八月三日になって再び倉知、佐藤之、佐藤久、原の四人がC2に入った。翌四日は快晴で迎え、私たちは五時半頂上に向かった。佐藤之—佐藤久、原—倉知の組でザイルを結び、PⅢを越え、PⅡとPⅠのコルまでアンザイレンして稜線をたどった。

西稜からPⅢまでは要所々々すでに固定ザイルをフィックスしてあったので難なく通過したが、PⅢの下りで一カ所、またPⅡの登りの急峻なギャップを通過するところで二カ所、隔時登攀をしなければならなかった。またPⅡでは一旦アトラック側へルンゼを下り、ギザギザのナイフ・エッジを避ける必要があった。

しかし、PⅠにかかってからはザイルをはずし、長い幅広い雪稜をたんたんと登った。午後四時十五分、私たちは疲れきって頂上にたどりついた。折りからの夕陽に周囲の山々は濃い影をおとし、ロシュ・ゴルの底はすでに黒い陰

に入っていた。

PIを下りきったところで日没をむかえ、岩陰でビバークをし、翌日、午後三時、無事C2へ帰り着いた。

カラチへ下った宮武はまだ帰らない。サラグラールはやはり望み薄になったようだ。そこで、一日休んだ八月八日、ひきつづき私たち四人は、今度はウドレン・アンのC1からウドレン・ゾムに向かって行動を起こした。

ウドレン・アンから北西へは一つの小岩峰をへだてて広い雪稜が続いているが、その先に立ちはだかる大きなロック・バットレスの突破が登攀のカギと思われた。

その日は五四〇〇メートルのバットレス下にC2を建設、バットレスは左側の大クーロアールにルートをとって正面の岩場を避け、八月十日、主稜線上の六三〇〇メートル地点にC3を設けることができた。

八月十一日、天候はやや悪化しつつあり、ガスにおおわれていたが、絶好調の四人は一気に頂上を目指し、アトラック側の氷壁に丹念にカッティングを続けた。最後はおおまかな岩稜だったが、午後一時半、ゆとりをもって頂上に立つことができた。

サラグラール南峰（七三五〇メートル）登頂

二つの登攀を終え、ベース・キャンプへ皆が揃った十二日の夕刻、宮武とアシュラフ大尉もひょっこりベース・キャンプに戻ってきた。

カラチは数十年振りの豪雨で大変だとか、悪天候のために飛行機が飛ばず、ローワライ峠をジープで越えてきたとか、久し振りに聞く宮武の下界の話に聞き入る。何よりも安心したのは、池知の経過が順調で、七月二十九日には日本へ帰って正式の治療を受けているという報告だった。

それからは毎日、ウドレン・アンの撤収と平行して、残された日程のプランについて討論が繰りかえされた。

ノース・クムのルートは十日あまりの残余日数ではまず無理だった。そこで、もっとも関心をもったのは、ノーバイズノン・ゾムの南に聳えるアトラック・ゾム、ムトチリ、バクトゥンボクト・ゾムの三峰である。この三つは、ともに高さこそ六〇〇〇メートル一寸だが、かなり手強い相手と思われた。しかし、いまの皆の調子ならやれるのではないか、高度順化の遅れている宮武でも登れるのではないか、という意見が強く、八月十六日、佐藤之と宮武が前記三峰の可能性を探るため、偵察に出た。

ドルーの少し下流からアトラックの内院を構成する枝谷に入った二人は、まわりを屏風のような岩壁にとりかこまれたこの谷からは、三つのどのピークにも、とてもとりつけないことを確認せざるをえなかった。

しかし、そこからだと、皮肉にもサラグラールの南面の谷が真横に眺められた。サルト・アンからみた時から一カ月近くたったせいか、雪もずい分少なくなっている。よく見ると、谷の中央に大きな尾根があって、可能性のある斜面が頂上までまっすぐに伸びている。これは登れるかもしれない——。勇躍ドルーへひきかえした彼らは、翌日、直ちにサラグラール南面の谷に入り、ヒドン・ヴァレーから上部の雪稜へ続いている急な懸垂氷河を目撃した。

これで私たちのその後の方針は決まった。すっかりあきらめていたサラグラールへの夢がもう一度蘇った。

八月十八日、住みなれたベース・キャンプにわかれを告げ、三四〇〇メートルのドルーへ降りた私たちは、迫り来る秋の気配におびえながら、気のせくままに次の行動を開始した。

八月十九日、私たち七人の隊員は、二十一人のポーターを伴い、きりつめた装備・食糧で南面の谷に入り、ヒドン・ヴァレー上四五〇〇メートル地点の氷河上に前進キャンプを建設した。この間の私たちの行動のすばやさは、今から思っても誠に鮮やかなものであったが、それは、今まで何かにつけてどうもすっきりしなかった気持ちの迷いを、この古くて新しい目標を見出したことによって振り切ることの出来た、その目覚めのせいであったろう。

ヒドン・ヴァレーの最奥部には、洗濯板を立てかけたような、傾斜の強いアイスフォールが流れ落ち、更にその上部は、頂上まで高く伸び上がっている大きな尾根―中央岩稜が続いていた。

翌二十日、ほとんど偵察らしい偵察もないまま、中央岩稜上にキャンプを出すべく、私たち全員が重荷を背負ってヒドン・ヴァレーを出発した。いかにも険悪そうに見えた二〇〇メートルほどのアイスフォールは比較的容易に越え、あとはペロッとした雪の斜面が中央岩稜すぐ左手に続いていた。表面はペニテント・スノウが解け崩れた後のように、ただ凸凹のザラメ雪におおわれていたが、登るにつれてペニテントが現われてくる。そして、日中温度が上がると、溶けた水がその上をサラサラと流れ出し、一風変わった光景が展開する。

時折り雪のちらつくこの大斜面を、三〇キロ近くの重荷に閉口しながらひたすら直上し、五六〇〇メートル地点のテラスにC1を建設した。この日は佐藤之と原が泊まる。

翌二十一日、佐藤之と原はC2予定地への偵察と荷上げ、倉知と佐藤久がさらにC1に入った。二十二日には畳みかけるように四人で六三〇〇メートル地点の岩稜上にC2を建設、佐藤之と原が残って翌日の頂上登攀に備えた。この日は、しばらく続いていた不安定な天候と打って変わって終日快晴が続き、周期的な天候の波の好天の部分が始まったことを知らせてくれた。

八月二十三日午前六時、佐藤之と原の二人はC2から頂上へ向かった。ビバークを予想してキスリングに詰めた荷物は重かった。

C2から一〇〇メートル位続く岩稜は次に幅広い雪稜というか雪壁に変わるが、そこから上はペニテントが姿を消し、フィルムクラストの雪面から硬雪、そして六千七、八百メートル付近から氷の斜面へと変わった。その上は一旦巨大なプラトーとなってから頂上をとりまくお鉢状の岩壁にさえぎられている。この岩場を墜落の恐怖におびえながら何とか突破した二人は、午後三時、その上の岩蔭（七二〇〇メートル）でビバークすることに決めた。

翌朝、急傾斜の最後の斜面を一時間程で登りきって、午前九時、二人は目指す南峰の頂上に立った。

この時の模様を佐藤之は次のように報告している。

「必要のないものはビバーク地に残したので身軽となった。昨日のような苦しさは感じない。踵が痛くなる程の急斜面をアイゼンをきかせて一歩一歩登る。どのくらい登ったろうか。突然猛烈な風と寒気が顔面を襲った。雪粒が激しく顔を打ち、目をあけられない。もう高いところはなかった。後をふりかえると原は遅れていた。私が立ちどまったので原が大声で聞いてきた。『どうしたんですか！』『前に何もないぞ！』原も登ってきた。そこは、まぎれもない頂上だった。九時をやや過ぎていた。

目の前の景観は面白い。東西に長い南峰の頂稜と全く相似型のもう一つの頂稜が、北側に同じ向きであい対していた。間には幅一キロメートル近い雪田があり、ロシュ・ゴル氷河側とニロギ氷河側におちこんでいる。

西にティリチ・ミールが一段と高く、東北に遥か霞んで見えるのは、パミールの山であろう。その手前にはウルゲント、コー・イ・テーズなどの山並みがみえる。北峰の向こう、一カ月前に苦汁を呑んだノース・クムがある。ふと暑い東京の病院で池知は何をしているだろうと考えた。」

（山本健一郎、倉知　敬記）

（訂　正）　四〇ページのロシュ・ゴル地域の地図のうち、サラグラール北峰（七三五〇メートル）とあるを七三三八メートルに、同南峰（七三三八メートル）とあるを七三五〇メートルに、またウドレン・ゾム南峰（七〇三〇メートル）とあるを七〇五〇メートルに夫々訂正する。

ヒリシャンカ・グランデ　一九六七年

田中　元

隊の構成と目的

隊の名称は「東京農工大学アンデス遠征隊一九六七年」といい、東京農工大学山岳会（ＯＢ会と山岳部により構成）のメンバーにより構成されている。しかし結果的に見ると、会の一部の活動的な有志が立案・準備・実行したものである。

立案―実行に約三カ年の月日を要した。その間、隊の構成員が既に社会人であったのと、勤務地が東京・横浜・名古屋・稲沢と点在していたので、連絡には時間的、資金的に無駄があった。

遠征の主目的はペルー・アンデス、特にコルディエラ・デ・ワイワッシュのヒリシャンカ・グランデ（六一二六メートル）およびその周辺の登攀であった。

遠征は、当初、期間六カ月程度の普通の規模のものであった。しかし曲折の末、一カ年間に亘る規模のものになってしまった。

その理由は登攀のみに時間と金を使用するのが惜しいと考えたからである。そして、後半の六カ月は南米各国を各人の目的により自由に歩くことにした。

登攀の対象を選択するに当たっては、処女峰より登攀として価値のある山、重要ピークの新ルートを優先に考えた。その結果、比較的小規模な山群ではあるが、岩・氷・雪のミックスした困難が予想されるコルディエラ・デ・ワイワッシュの山、特にヒリシャンカ・グランデを第一目標に選んだ。また登攀方法は五〇〇〇メートル～七〇〇〇メートル峰はラッシュ・タクティックスで出来得ると考え、登攀はラッシュを主体に考えた。

隊員は次のとおりで、※印は日本山岳会会員である。

隊　長　※田　中　　元（29歳）愛知県名古屋土木事務所。
隊　員　古　畑　　博（27歳）大同毛織（株）稲沢工場。
　　※小　林　伸　好（28歳）横浜市衛生研究所。
　　※加　藤　朝　章（27歳）神奈川県織物指導所。
　　※和　地　陽　二（26歳）資生堂化学研究所。
　　岩　谷　弘　一（22歳）東京農工大学農学部学生。
　　フランツ・オエストメル（29歳）（チリー・ドイツ人クラブ会員・現地参加・ワイワッシュ山群のみ）
ポーター　イダルゴ・アルバイツァ（ワイワッシュ山群のみ参加）

行動の概要

一九六七年四月二十六日、田中・小林・加藤の三名が先発する。横浜からアメリカン・プレジデント・ライン（A・P・L）でサンフランシスコに渡り、そこから空路、メキシコ・シティ経由で五月十五日ペルーの首都リマに着く。

後発のメンバーは船の都合で日本出発が遅れ、六名全員がリマに集結したのは六月十四日であった。

ペルーに来てから、ドイツ系チリー人のフランツ・オエストメルが現地参加することになる。

荷物約二トンは六月六日カイヤオ港に着く。荷物は陸上げ通関に手間取ったが、六月二十日に諸手続終了、同日チキアンに向け発送する。

六月二十一日朝、本隊はリマを発ち、夕方ワイワッシュの登山基地チキアンに着く。そこでポーター一人、アリエロ（馬方）六人、ロバ三十三頭、馬二頭を雇い入れる。すでに手配済みだったのでスムーズに進む。

六月二十三日ワイワッシュ山群に向けチキアンを出発する。第一日目は山間の部落ヤマックに泊る。第二日目カカナン峠の下にキャンプ、三日目の午後、ヒリシャンカ・グランデの北側、氷河の末端にある氷河湖ミツコーチャ（標高約四〇〇〇メートル）に着く。そこの台地にベース・キャンプを設け、八月七日まで滞在する。

ベース・キャンプに入ってからは、高所順応に十分気をつけ、次の三つの期間に分け行動する。

第一期高所順応期間（六月二十五日～六月三十日）

四〇〇〇～五〇〇〇メートルの間での順応を目的に、附近の踏査、氷河の散歩とのんびりすごす。

第二期高所順応期間（七月一日～七月九日）

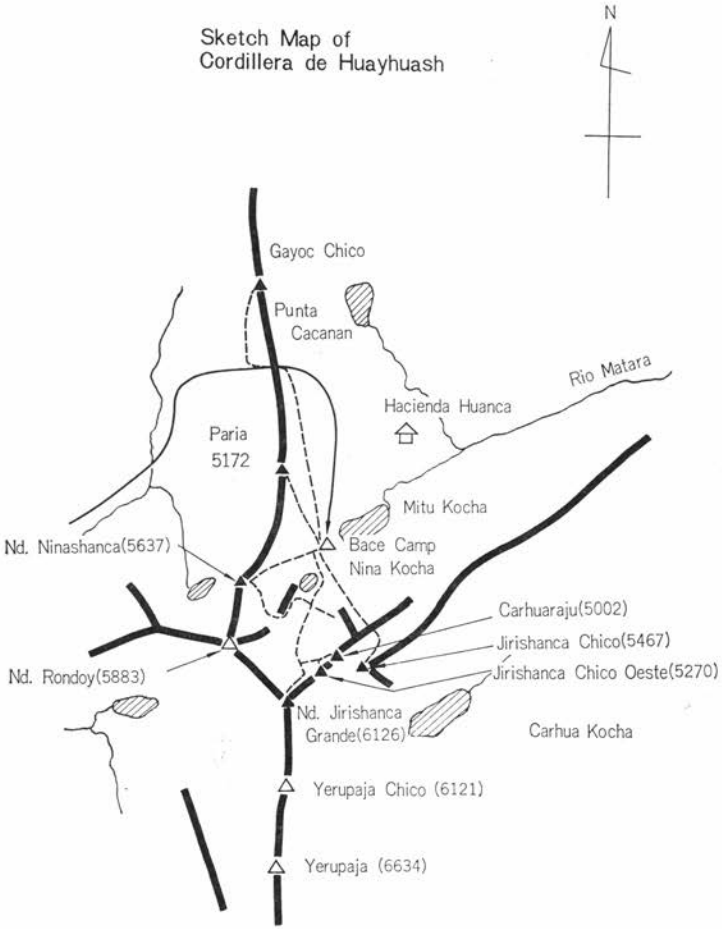
五〇〇〇メートル以上での行動と同時に氷の急斜面での行動に馴れる目的で、ヒリシャンカ氷河の四七〇〇メートル附近に一カ所テントを設け、そこを中心にヒリシャンカ・グランデとヒリシャンカ・チコのルート工作をする。

登攀期間（七月十日～八月五日）

この期間にベース・キャンプと氷河内のC1を中心に行動する。二～三人が一パーティーとして行動する。

①七月十日　パリア（Paria 五一七二メートル）登頂

パーティー　古畑―和地、小林―岩谷


Sketch Map of
Cordillera de Huayhuash
N
Gayoc Chico
Punta
Cacanan
Rio Matara
Hacienda Huanca
Paria
5172
Mitu Kocha
Nd. Ninashanca(5637)
Bace Camp
Nina Kocha
Carhuaraju(5002)
Jirishanca Chico(5467)
Nd. Rondoy(5883)
Jirishanca Chico Oeste(5270)
Nd. Jirishanca
Grande(6126)
Carhua Kocha
Yerupaja Chico (6121)
Yerupaja (6634)

○七月十三日～十八日　ヒリシャンカ・グランデ（Jirishanca Grande 六一二六メートル）試登
　パーティー　田中―オエストメル―加藤
○七月十五日～十六日　ヒリシャンカ・チコ（Jirishanca Chico 五四六七メートル）試登
　パーティー　小林―和地
②七月十八日　ヒリシャンカ・チコ・オエステ（Jirishanca Chico Oeste 五二七〇メートル）初登
　パーティー　古畑―岩谷
③七月二十一日～二十三日　ニナシャンカ（Ninashanca 五六三七メートル）登頂（二十三日）
　パーティー　古畑―和地
④七月二十四日～二十八日　ヒリシャンカ・グランデ登頂（二十七日）
　パーティー　田中―加藤
⑤七月二十六日～二十八日　ヒリシャンカ・チコ登頂（二十七日）
　パーティー　オエストメル―岩谷
⑥七月二十七日　ヒリシャンカ・チコ・オエステ登頂
　パーティー　小林―アルバイツァ
⑦八月一日～二日　ガヨック・チコ（Gayoc Chico 五〇〇〇メートル?）初登頂（二日）
　パーティー　小林―アルバイツァ
⑧八月一日～三日　ニナシャンカ登頂（二日）
　パーティー　オエストメル―岩谷
⑨八月四日～五日　カウワラフ（Carhuaraju 五〇〇二メートル）初登頂（五日）

パーティー　古畑―加藤

八月八日にベース・キャンプを撤収、八月九日チキアン、十一日にリマに戻る。同じ時期にワイワッシュに入山していた東京白稜会はすでに日本に戻り、ブランカに入った長野隊もリマに下山していた。

リマで休養と次の準備を済ませ、八月十六日に次の目的地ウルバンバに入山するためバスとトラックに分乗、クスコに向かう。当初の予定ではビルカバンバに入山の予定だったが、すでに時期的に遅いので、地理的に便利なウルバンバのベロニカ山群に入ることにする。

八月十九日クスコに着く。ベロニカ山群の偵察と出発の準備を済ませ、八月二十五日にベロニカの山麓、標高二七〇〇メートルのチルカにベース・キャンプを設ける。今回はポーターも使用せず、隊員六名のみでやる。

天候はすでに良くなかったが、幸い予定の登攀には成功した。登高距離はベロニカの場合三〇〇〇メートルあったが、やはりラッシュで登る。

○八月二十七日～三十日　ベロニカ（Veronica 五七五〇メートル）試登

パーティー　田中―小林

⑩八月二十九日～三十一日　ボノニア（Bononia 五一一〇メートル）登頂（三十日）

パーティー　古畑―加藤

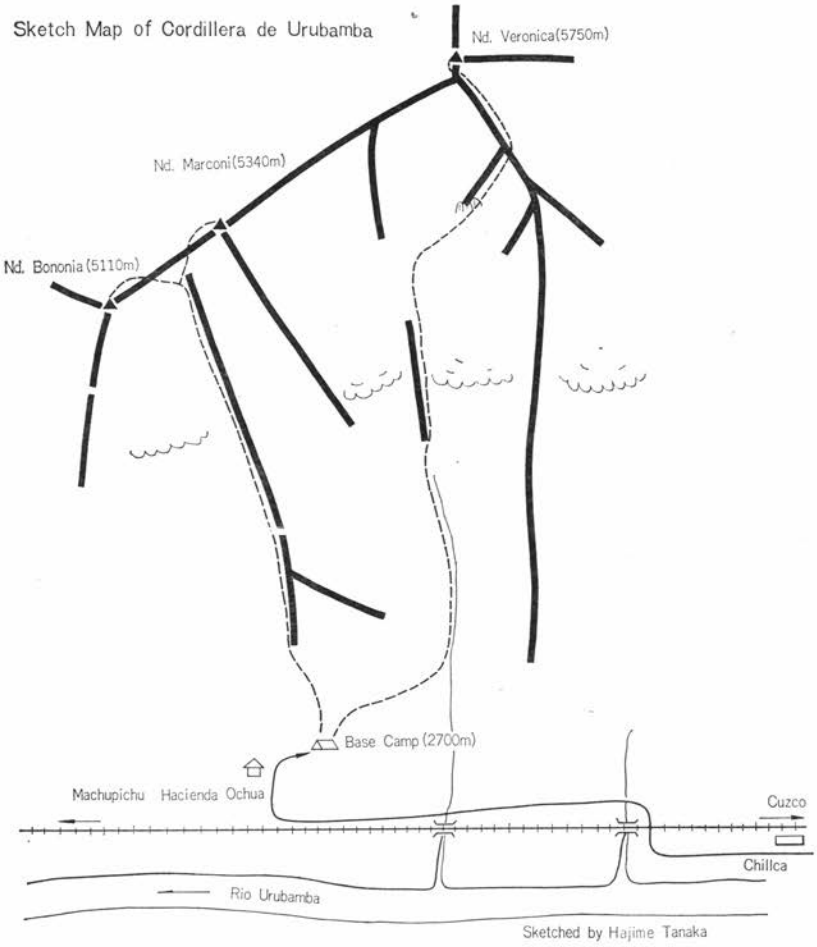
⑪九月三日～五日　マルコニ（Marconi 五三四〇メートル）登頂（四日）

パーティー　小林―和地

⑫九月四日～七日　ベロニカ登頂（五日）

パーティー　田中―岩谷

以上で予定の登山活動を終了。一週間程附近の遺跡や村を歩き、九月十三日にクスコに戻る。その後、陸路ボリビ


Sketch Map of Cordillera de Urubamba
Nd. Veronica(5750m)
Nd. Marconi(5340m)
Nd. Bononia(5110m)
Base Camp (2700m)
Machupichu
Hacienda Ochua
Cuzco
Chillca
Rio Urubamba
Sketched by Hajime Tanaka

アにまわり、九月末リマに再び戻る。

十月から後半の計画に入り、各人それぞれのルートで南米諸国を歩き、翌年四月に日本に戻り、全計画を無事終了した。

ヒリシャンカ・グランデの登攀

ヒリシャンカとはケチュア語で「蜂雀の嘴のように尖った峰」という意だと、セサール・モラレスが書いている。別名南米のマッターホルンとも呼称され、全アンデスで最も壮麗な峰ともいわれている。

コルディエラ・デ・ワイワッシュは延長三〇キロメートル程の小規模な山群である。しかし、その中には六つの六〇〇〇メートル峰、そしてそれを囲む数多くの五〇〇〇メートル峰と、困難な鋭峰が林立している。

この山群の登攀の歴史は新しく、一九三二年に始まる。ヒリシャンカ・グランデの登攀の歴史はさらに新しい。一九五四年のオーストリア隊の試登に始まり、一九五七年、同隊の二名(T. Egger, S. Jungmeier)により初登、一九六六年同じオーストリアの四名により第二登がなされた。その間他の隊により何度か挑戦されたが、成功しなかった。

× × × ×

我々のベース・キャンプであるミツコーチャ側(北面)から見る限り、登攀可能なルートは二〜三考えられた。しかし、そのどれもいかにして頂上から北東に伸びる尾根状のところに抜けるかに問題があった。オーストリア隊は隣りのカルワコーチャ側にベースを設け、登っている。後でわかったのだが、彼等は左側の岩場を登って尾根に出ている。我々は正面(北面)から左に斜上―尾根に出ることにした。このルートは約九ピッチ(五〇メートルピッチ)硬雪と氷の斜面を登り、最後は岩場と氷のオーバーハングを抜け、十三ピッチ目(ここからオーストリア隊のルートと合流)で五四〇〇メートル附近の尾根の雪田に抜け出るものだった。

ヒリシャンカに関しては田中が責任をもってあたることにしていた。七月十日までになんとか一〇ピッチ北面のルートを開き、どうやら、困難ではあるが抜けられると判断し、第一回目の試登に入ることにした。

試登は七月十三日～十八日の五ビバーク六日の登攀になった。そして下から見える最後の岩場、オーストリア隊が五級、六級の岩場と呼んだ岩場の上までルートを開くことが出来た。登攀の二日目、悪天で全く行動出来ず、一日停滞したが、この一日が最後にひびき、時間切れで一たんベース・キャンプに下山した。

三日間緑のベースで休養、七月二十三日に氷河のテントに移り、二十四日から再度のアタックに入る。他のパーティーはその間着々と成果を上げていた。

一度アタックに失敗すると約一〇日間のロスになる。天候は七月中頃から段々悪くなり、雪の降る日が多くなる。これがラスト・チャンスだと心にきめ、登攀に向かう。

× × × ×

七月二十四日（晴）

午前三時に起こされる。のんびり準備して、ヒリシャンカ・チコに行く岩谷とフランツに見送られ、六時にテントを出る。

ゼルブスト、金物、ザイルをつけ、田中がトップで何度も上下した氷河をまた登る。五日分の装備が重く、スピードが出ない。

岩壁の基部に立つ頃陽が照り始める。第一ピッチが始まる。スタカットの登攀が始まる。開くのに一日かかった第一ピッチも、固定ザイルがあるので荷物を吊り上げてスムーズに通過する。単調な苦しい登攀が続く。約四時間半、九ピッチで最初の氷の滝の下に着く。チコに行くパーティーのコールが聞こえる。今日中に試登のとき第三回目のビバークを行なった第二雪田まで登る予定なので、休まずに登る。時々落石が頭の上を通過する。滝のフィックスは青

氷の中に埋まってしまい、使えないので、またアイス・ハーケン二本を交互に打ち、ホールドにして登る。次の岩場はザックを吊り上げて登る。さらに二ピッチ登り、第一雪田に続くクーロアールに出る。ここからオーストリア隊のルートと一緒になる。左下の急な岩場にフィックスが見える。クーロアールに張られた彼らのフィックスは氷づけになっている。

第一雪田に入る。急な雪田は日中の強烈な日射で表面がゆるみ、状態はきわめて悪い。一歩一歩が不安な登攀だ。このような登りが一〇〇メートル続く。今まで日陰を登ってきたので暑い。雪面がすぐ目の前にあり、照り返しで頭がボーッとしてくる。登攀用具、ザック、後のザイル、何もかもが重い。

午後三時、第一雪田の上端にたどりつく。一時間ゆっくり休息する。チコには人影がない。どうやら今日はアタックをやめたらしい。

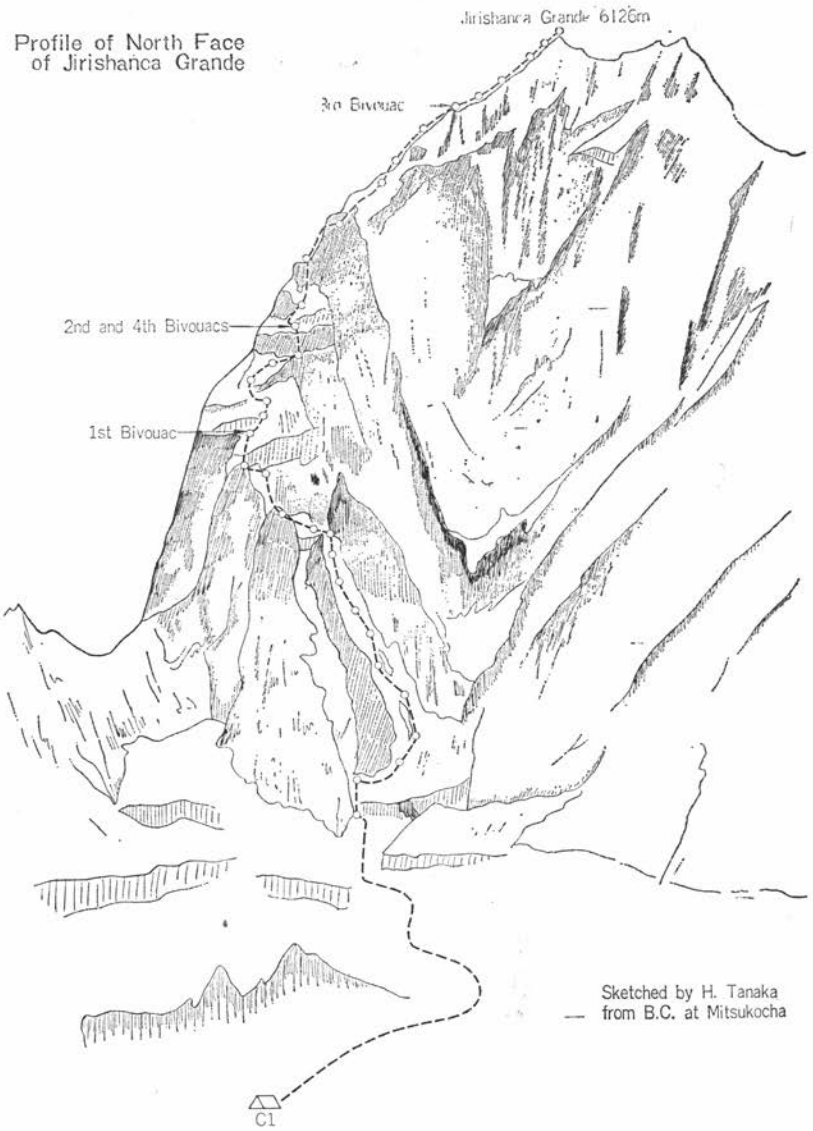
前回作った氷のトンネルを抜け、岩を登り、第二雪田に入る。午後五時、五〇メートル上のビバーク予定地に着く。日がかげると、急に気温が下がる。かくして氷の中の第一夜が始まる。

七月二十五日（高曇り、昼から風とガスが強くなる）

五時に起き、スープ主体の簡単な食事を済ませ、七時に登攀開始。

空全体に薄雲が広がり、日は照らず寒い。前回不安定だった急な雪壁は硬く氷化しており、登りやすい。足が冷たく痛む。それでもアイゼンの前爪だけで登らねばならず、一歩一歩が苦しい。絶対に落ちられない登攀が続く。

第二雪田は全部で四ピッチ約二〇〇メートル、十時半に上端に着く。今度はまた岩場だ。そして氷のハングが続く。風が強くなり、ガスが流れ始める。十二時半ようやく悪場を抜け、前回の第四・第五ビバーク地点に着く。一〇〇メートル下の氷河の中にテントがすぐ足下に見える。ヒリシャンカ・チコに向け四人パーティーが登っているのも見える。

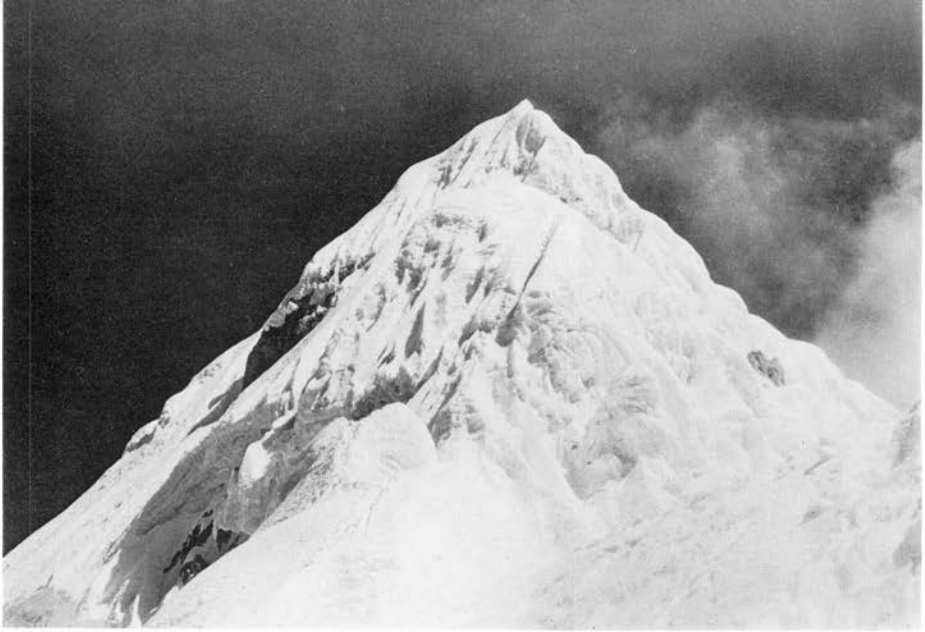

Profile of North Face
of Jirishanca Grande
Jirishanca Grande 6126m
3rd Bivouac
2nd and 4th Bivouacs
1st Bivouac
C1
Sketched by H. Tanaka
— from B.C. at Mitsukocha



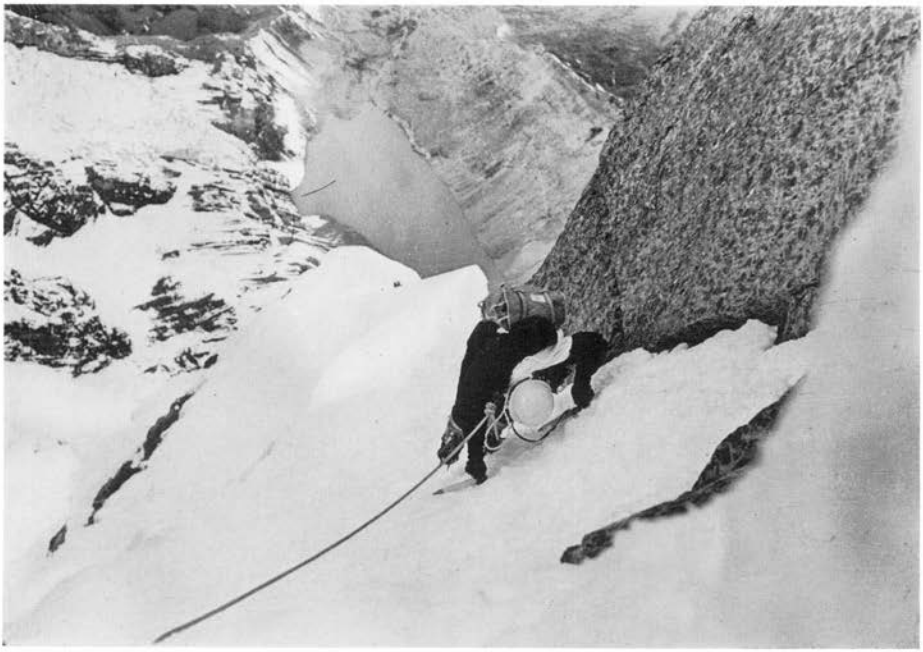
ヒリシャンカ・グランデ（6126m）
Nd. Jirishhanca Grande (6126m) seen from Jirishhanca Chico.
(By N. Kobayashi)



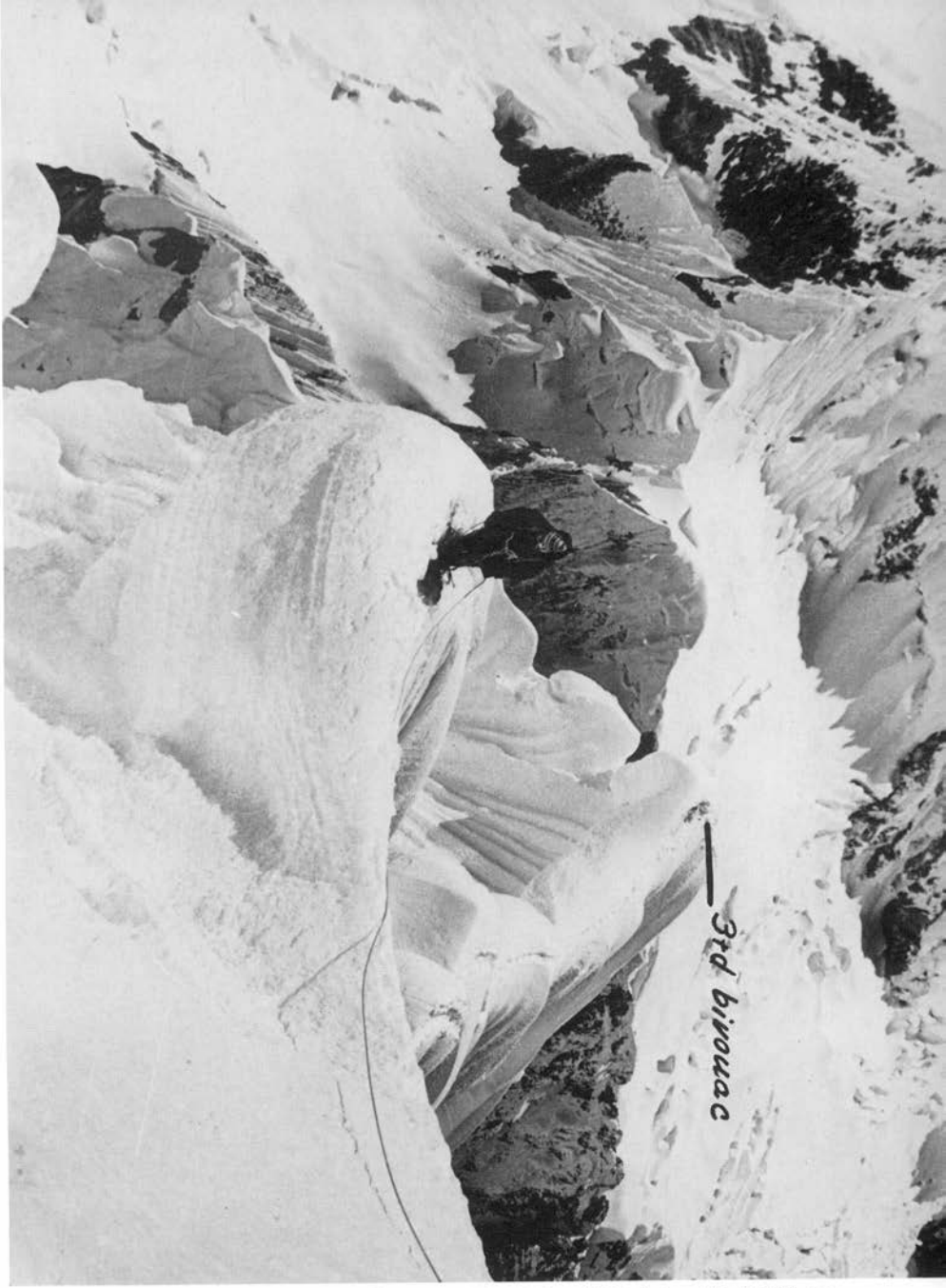
ヒリシャンカ・グランデ：第2ビバーグ地点から見た最後の岩場
Nd. Jirishhanca Grande: the final rock wall seen from the 2nd bivouac site. (By H. Tanaka)



ヒリシャンカ・グランデ：第3ビバーク地点からの頂上
Nd. Jirishhanca Grande: the summit seen from the 3rd bivouac site.
(By H. Tanaka)



ヒリシャンカ・グランデ：20ピッチ目の下降
Nd. Jirishhanca Grande: Climbing down at the 20th pitch
(By H. Tanaka)



ヒリシャンカ・グランデ：第31ピッチ目、下方に第3ビバーク地点が見える。
Jirishhanca Grande: Climbing on the snow ridge ca. 6000m, the 3rd bivouac site seen below. (By H. Tanaka)

五時間フルに登ってきたので、ツェルトを張りゆっくり休む。午後になり天気は益々悪くなる。気温が下がる。急に寒くなる。風は強く、ガスもひどい。ツェルトの外に出る気もなくなってしまう。時間は早いが今日はもう登るのをやめ、明るいうちに、寒い夜の来る前に眠る。

七月二十六日（晴のち曇。その後雪）

風は朝になっても止まない。日の出を待つ。明るくなり、ガスは晴れる。七時半羽毛服の上下を着たまま登り始める。食糧二日分、燃料は三日分持つ。第一ピッチ（通算二十三ピッチ目）は岩場に雪がはりつき、氷化した急な雪壁。出来る限り岩場沿いに登る。十六ミリのシネは氷結して動かないので、ビバーク・サイトに置いて行く。四キログラムのシネから開放され、ほっとする。この種の登攀のために作った羽毛服だが、着たままで登るのは今日が始めてだ。そのまま二ピッチ登る。

最後の岩場の基部に立つ。前半は逆層の凹角。かぶり気味でボロボロに崩れそうだ。次のピッチはところどころかぶっている岩と氷のミックスの壁。下から見ると最上部に見える岩場だ。右手に古い捨て縄がカラビナ付きで垂れている。上半は前回五〇メートルのフィックスを一本残しておいたので楽だ。天気はまた悪くなる。気がついたときにはすでにガスってしまっている。

岩場が済むと未知の雪稜が始まる。標高はすでに五八〇〇メートル位だろう。視界が悪くなる。雪稜はフワフワと足場が定まらない。一ピッチ登る。すでに前回の最高到達点は過ぎている。この頃雪が降り始める。細い雪稜の次は急な雪壁になる。無言で進む。雪は乾燥し、サラサラと稜の両側に音もなく流れ消える。不安定で確信のない足場しか出来ない。どちらが落ちても助かるまい。天気は悪いし、条件は悪い……しかし運を天にまかせてまた登り始める。一歩一歩ただ無心に登る。三ピッチ登ってはじめて坐れる広さの場所に出る。一瞬ガスの切れ間にピラミッド型の真白いピークが見える。頂上だ。双耳峰のノルテはすでに下に見える。既に六〇〇〇メートルを越しているのだ。

この先ビバーク・サイトが得られるかどうか判らない。頂上はもうすぐ上だ。既に五時間登っているので、ここを今夜のビバーク・サイトと定めてあたりを整理する。休息の時間だ。午後一時ツェルトをかぶり休む。燃料は十分あるので茶を沸かし、スープを作り、のんびりやる。

二時半、明日の登攀に備えてルート工作をする。雪は何処まで行っても悪く、天気も悪い。雪は斜面の下から吹き上げ、視界がきかない。二時間程登り、五時半ビバーク・サイトに戻る。

六〇〇〇メートルの稜線のビバークは寒い。ヒリシャンカに来て今日で八日目のビバークだが、ビバークの夜は日増しに寒くなる。気温も下がり、そして体力も消耗しているのだ。

七月二十七日（晴）

ローソクが燃えない。十二時頃からはもう無性に寒くて眠れない。我慢出来ず、ガスに火をつける。ボーと青白い火が燃えるが、熱は皆消えてしまう。ヤッケを通し、羽毛服を通し、寒気がしみる。膝を抱え少しうつらうつらするが、足が冷え、すぐにまた目が覚めてしまう。時間がたつのが遅い。

三時半。少し早いが加藤が朝食のスープを作り出す。

明け方になり風が止む。ガスも消え、青空になる。ツェルトの外を見ると、坐っている正面にイエルパハが月の光に浮かんでいる。すぐ頭上にはヒリシャンカ・グランデの頂上がある。月がヒリシャンカの肩にかかる。昨日のトレースは頂上直下まで続いている。天気は回復したのだ。

六時。写真をとるためにツェルトの外に出る。六時三〇分、最初の光がツェルトに当たる。ツェルトの中は急に暖かくなり、昨夜の寒さがうそみたいに思える。

七時、補助ザイル五〇メートルと若干の食糧、カメラを持って登り始める。田中がトップを続ける。三ピッチで最後の雪壁の下に立つ。三〇メートル急な雪壁を登ると頂稜に出る。最後のピッチは細い頂稜を這うように一〇メート

ルも登ると反対側が見える。頂上だ。

頂上は雪の三角錐になっている。三方の壁は一五〇〇メートル下の氷河まで一気に落ちている。頂上は一人がやっと立てる広さだ。九時だ。四日前に出た氷河の中のテントがすぐ足下に見える。まだ日が当たらない。下で待っているセカンドの加藤に連絡してすぐに登ってもらう。

幸い快晴だ。頂上から見ると全てが小さく見える。

「おーい、登ったぞ！」と加藤は叫びながらベースに向かい日の丸を振り回している。お互いに無性にうれしい。すぐに、足下に見えるテントに、緑に囲まれたベース・キャンプに飛んで帰りたいと思う。

× × × ×

頂上からの下降は、一歩一歩長く苦しいものだった。頂上に立つまでの三日間以上に神経をすりへらした。一歩一歩、登りのルートを二日間下り続けねばならなかった。登攀第四日目の夜はまた氷の中で眠られぬ夜をすごし、五日目の夕方、壁の基部に立つまでは疲労と焦りとの戦いだった。緑のベース・キャンプに戻り、他の仲間に迎えられたのは、さらに一日後、七月二十九日の午後だった。

マウント・コウベ（Aello Peak）一九六七年

大野光彦

一、はじめに

「アラスカ・ラッシュ」なる言葉が交わされるようになった近年、単独行までとび出すに至り、海外登山の方式においてもマイナー・エキスペディションがすっかり常識化されてしまった。

アラスカでのピークハントも戦後十年でほぼ落着[註1]し、完全にバリエイション時代を迎えることになったのである。

このような趨勢の中で、兵庫県山岳連盟は神戸新聞社の共催を得て「神戸開港百年」、「兵庫県政百年」、「シアトル・神戸都市提携十年」、「兵岳連二十周年」等、記念行事という大義名分を冠し、後記の如き大部隊をアラスカへ送ることになった。しかも、計画の目標が未登峰の登頂におかれたのであるから、観点を変えれば時代錯誤の感は免れないのである。事実、計画当初には強い抵抗感をもったものである。しかし、それはアラスカの山をネパールやパ

キスタンや南米の山と同一平面で論議したり、山の高度だけをもって評価しようとする誤謬であった。海外登山の未経験者が一知半解的な認識だけで、これを実施することは厳に戒めなければならないと考えたのである。岳界の動向がどうであろうとも、初心者分相応の姿勢というものがあるべきだし、謙虚にその第一歩をふみしめたい、そのような発想のもとに決定をみたのである。従って、我々が一致した了解点は「次期遠征のためのファースト・ステップとなり得る遠征」ということであった。加えて、多くの資料はアラスカの魅力と偉大さを我々に教えてくれた。即ち、「マッキンリー南壁」におけるR・カシン隊(註2)、S・C・シルバースタイン隊(註3)、B・N・エベレット隊(註4)、「ハンティングトン」におけるL・テレイ隊(註5)、D・S・ロバーツ隊(註6)、そして「ムーゼス・トゥース」におけるA・スマイズ隊(註7)などの苛烈な記録に接し、アラスカの魅力を発見することになったのである。

計画実施に当たって、神戸市助役の宮崎辰雄氏（現兵岳連会長）に相談した。パイオニア・スピリットについては人後に落ちない人である。宮崎氏は非常な情熱をもって我々を支援し、ついには「何かユニークな隊を編成しては」という意向さえ示された。その間、津田周二、山本吉之助、前田浩、仲野和也の役員諸氏の努力があって、兵庫県、神戸市などの後援も決定され、日に日に隊の姿はそのスケールを大きくしていった。遂に宮崎辰雄氏を団長に推挙し、氏はこれを積極的に了承されたのである。対社会的、特に公的なマネージメントにおいてどれ程円滑に事を運べたかは言うまでもない。

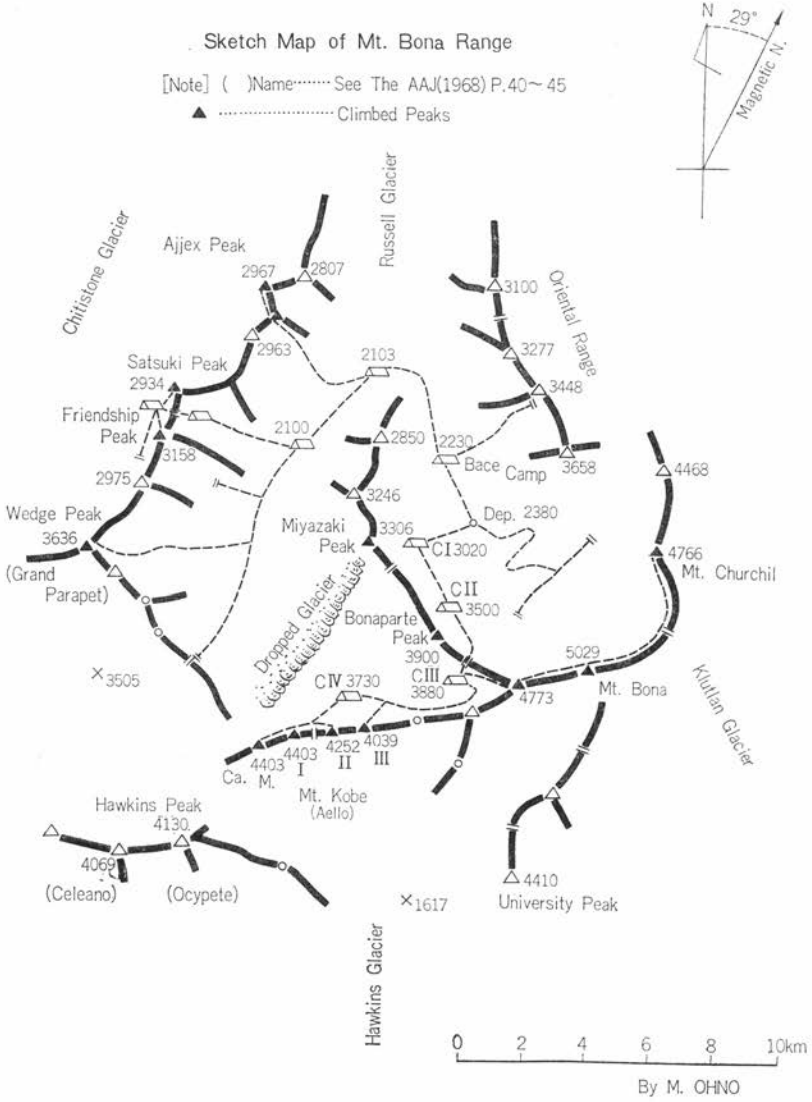
そこで、日米合同登山隊を編成した経緯について少し触れねばならない。副隊長となった藤田博氏は五年前からシアトルにある「ザ・マウンテニアーズ」と接触しており、情報交換が続けられた。I・スプリング(註8)、V・ジョセンダル(註9)、L・アンダーソン(註10)夫妻等の来日はその関係を一層深めることとなり、兵岳連からのプロポーズに対しては六六年の年次総会で〝熱狂的な雰囲気の中で同意〟した旨伝えて来た。藤田氏はこの種の合同登山が得意とあって六三年の台湾(註11)へ赴いた経験の上に立ち、手際良くプロモートしていった。かくして合同登山隊が編成されたのである。隊の構

成は次の通り（※印の者は日本山岳会会員）。

（日本隊）

団　長　※宮崎辰雄（55歳）神戸市助役
隊　長　※津田周二（62歳）神戸印材機工（株）社長
副隊長　※藤田博（47歳）（株）藤田商店取締役
カメラマン　藤田重夫（53歳）神戸市建築局
登攀隊長　※萩原邦一（35歳）三菱重工業（株）高砂製作所
報　道　※森川列（33歳）神戸新聞社事業部
装　備　松本武彦（31歳）千代田火災海上保険（株）
マネージャー　※大野光彦（31歳）報徳学園高校教諭
記　録　中島竜（30歳）神戸市総務局人事課
通　信　窪田哲夫（29歳）神戸市消防局
食　糧　下山隆巳（29歳）住友金属（株）尼ヶ崎製造所
気　象　大西義雄（29歳）神戸製鋼所
梱　包　※荒木壮一（28歳）三菱重工業（株）神戸造船所
医　務　稲留哲也（27歳）県立淡路病院内科医
渉　外　※羽根田博正（27歳）三菱電機（株）中央研究所
食　糧　岡本周三（23歳）三菱重工業（株）神戸研究所

（アメリカ隊）


Sketch Map of Mt. Bona Range
[Note] ( )Name····· See The AAJ(1968) P.40～45
▲ ····· Climbed Peaks
N 29°
Magnetic N.
Chitistone Glacier
Russell Glacier
Oriental Range
Ajjex Peak
2967
2807
2963
2103
3100
3277
3448
Satsuki Peak
2934
Friendship Peak
3158
2100
2850
2230
Bace Camp
3658
4468
2975
3246
Dep. 2380
Wedge Peak
3636
Miyazaki Peak
3306
CI 3020
4766
Mt. Churchil
(Grand Parapet)
CII 3500
Dropped Glacier
Bonaparte Peak
3900
5029
×3505
CIV 3730
CIII 3880
4773
Mt. Bona
Klutlan Glacier
4403 I
4403 II
4252
4039 III
Ca. M.
Mt. Kobe (Aello)
Hawkins Peak
4130
4069
(Celeano)
(Ocypete)
×1617
4410
University Peak
Hawkins Glacier
0 2 4 6 8 10km
By M. OHNO

〔隊長〕 A・ランドール、〔副隊長〕 C・グレン、〔マネージャー〕 F・ランドール、〔登攀隊長〕 H・スティリー、〔カメラマン〕 J・ベーリアン、〔隊員〕 R・バセット、R・ヒコック、N・ベントン、E・ボールトン、G・バデット、R・カナーハン、R・ハーマリー、G・マックビー、T・ハーニイ、P・ハーズ

二、シアトルからノースウェイへ

隊は三つに分かれて日本を出発した。第一次隊（萩原、松本、岡本）は三月四日、川崎汽船のオレゴン丸で横浜からサンフランシスコを経由してシアトルへ、第二次隊（藤田（博）、大野）は二十日羽田よりアンカレッジ経由でシアトルへ。別送の約二トン半の装備をシアトルで通関後、カナダ経由の陸路で空輸基地ノースウェイへ転送。大野のみシアトルに残り、藤田（博）の指揮下、四五〇ドルで購入したワーゲン・バスでアルキャン・ハイウェイを北上した。雪道で車が転んだり、ポイントを焼き切ったり、カー・トラブルに悩まされながら七転八倒の末七日間を費やしてノースウェイに着く。

一方、本隊（宮崎団長、津田隊長他九名）は四月五日シアトルへ。藤田副隊長はノースウェイで指揮をとっていたが、萩原、P・ハーズの二名をBC地点へ先行させ、松本、岡本の二名を開梱と空輸手配のためノースウェイに残留させ、一時シアトルに帰着。六日宮崎団長、津田隊長らはA・ランドール隊長らとワシントン州知事およびシアトル市長を公式訪問され、州議会では議事を打ち切って宮崎団長が演説されるなど、終日公的なスケジュールが組まれた。その夜は日米協会の主催するレセプションに参加、日米両隊員は固く結束した。七日、両隊員二十七名はシアトルを発ち、空路フェアバンクスに一泊。八日、チャーターしておいた「ホワイト・パス・ユーコン」バス会社のリムジーンで一路三〇〇マイルを南下し、カナダとの国境近くにあるノースウェイへ向かった。地平線の彼方まで一直線に続くこのドライブは辟易する程単調で、アメリカ大陸の広大さをしみじみと味わったのである。一時間も走るが対向車に

会わない。だが道路は除雪され、良く整備され標識も完備している。やがて「WATCH MOOSE」の標識が目にとまった。ムーズ（大鹿）が出て来て衝突すれば共倒れになるから注意せよ、という実にユーモラスな標識である。タイガ地帯の無味な大平原が七時間も続き、一八時三〇分未だ明るいノースウェイの寒村に着いた。

ノースウェイは第二次大戦中の空港である。滑走路の傍に一軒のロッジがある。近くにＦＡＡ（連邦政府航空局機関）の基地があるだけで空寂そのものであり、時折、カラーフルでカッコいいセスナやビーバーが着陸し、ガスを詰めてはまた飛び立ってゆく。マリリン・モンローのような美人を乗せた紳士がやって来た。猟を終えてフロリダへ帰るというこの紳士は「君達は何をしに来たのか」と問うので、「山登りだ」と答えた。紳士曰く「You are crazy !」

その夜はスキヤキ・パーティーですっかりリラックスした後、兵舎を改造したロッジに落ちついた。緯度の関係で午後一〇時頃になるとやっと夕暮の感じがする。荒漠たる大雪原の彼方に目指すボナ山塊の一角が夕日に映えて魅惑的である。私は羽毛服の襟を立てて呆然とこの雪原を眺めていた。時折、遠吠えするハスキー犬の鳴き声が彼方へ消えてゆく。

三、ラッセル氷河へ

アラスカ山脈の中でランゲル山群とセント・エライアス山群に挟まれたところにボナ（BONA 5,029 m）がその大きな山容を横たえている。ラッセル氷河はこのボナの北面に広がり、その南面にあるホーキンズ氷河が荒々しく男性的であるのに比して、女性的な美しさをもった幅約二キロメートル、長さ約四〇キロメートルに及ぶ氷河である。ユーコン河の支流の一つ、ホワイト・リバーはその源をこの氷河に発している。合衆国地理学会はこの氷河の命名に当たりＩ・Ｃ・ラッセルの名を冠した。彼は前世紀末より今世紀初頭にかけて活躍した地質学者であるばかりか、ＡＡＣの創設メンバーであり、セント・エライアスを試登することアブルッツィ公に先んじ、また明治八年には金星測量の

ため来朝している関係[註12]で「ラッセル」の語がもつ韻には何か親近感さえ覚えるのである。比較的新しいアラスカ登攀史の中で、このボナ山塊への接近は古い方に属するといって良いであろう。しかし、ラッセルにとっての目標はセント・エライアスにあったのであり、ここはむしろ地質学的興味の対象でしかなかったようである。

ボナ周辺に接近した隊は今まで分かっただけでも六隊が数えられる。即ち、A・カープ隊によるボナ初登頂[註13]（1930）、スタンフォード隊のボナ第二登[註14]（1951）、P・ジャーストマン隊によるユニバーシティ峰試登[註15]（1954）、K・ハート隊によるユニバーシティ峰初登頂およびボナ第三登[註16]（1955）、F・ベッキー隊による四四〇三メートル峰試登[註17]（1965）、および東京教育大隊によるボナ、チャーチル峰登頂[註18]（1966）等である。もしこの山塊にボナ峰しか存在しなかったとしたら、それ程の魅力はなかったであろう。比較的多くの登山家に注目された理由は他にあったようである。初登攀のA・カープが記しているように、異様な高貴さをもって聳え、いつの日にか後世の登山家が注目するであろう二つの光り輝く峰々があったからである。またホーキンズ氷河に峙立するユニバーシティ峰の見事さ、あのヒマラヤ襞で被われたホーキンズの峰々にはぞっとする興奮をもってピーク・ハントの意欲を駆られるのである。この点において人後に落ちないあのF・ベッキーをして、我々が第一目標とした四四〇三メートル峰をマークさせたのも一理あって合点のゆくところである。

我々の幸運な成功も間接的にはこのベッキーの失敗に負うところ大であった。彼は西氷河より接近しようとしたが、時期を失して敗退している。大概のことはAAJに投稿する彼が、どうしたことか載せていないのは私には謎であるが、多分、執拗な執着心をこの山にもっていたと推測する。穿った見方をすれば、そっと秘密にしていたのかも知れない。

ところで、ラッセル氷河の源頭部は二俣になっており、ボナより北方へ突き出している大きな尾根を境として、東西に分岐している。カープ隊はこの東氷河に、ベッキー隊はこの西氷河に入った。我々は東氷河の二二三〇メートル

地点にランディング・サイトを見つけ、そこをBCとした。

四月十三日、三日間の吹雪も晴れてノースウェイを後にした。五時からクリフ・ハドソン（タルキートナ）とロイド・ミラー（ノースウェイ）のセスナは一六〇キロメートル離れたBCへ往復二時間半をかけピストン輸送を行なった。知名度の高いウィルソンやシェルダンが一級とすれば、我々の使ったブッシュ・パイロットは二級であるかも知れない。がクリフ・ハドソンは陽気で人が良く、安全性の点からも熟達した技術をもっており、彼の飛行基地（タルキートナ）から遠く離れたボナ山塊での空輸にも、その実力を十分に示してくれた。

四、第三キャンプへ

BCから見上げるボナ北面のアイス・フォールは高度差二八〇〇メートルの見事な景観で、その頂は時折ピンクに染まり、白一色のBCに色を添えてくれた。この地点から大氷河の真ん中を直進し約三キロの地点を第一デポとする。これより西に折れてクーロアールに入り、約二キロに及ぶアイス・フォール地帯を突破するとC1のプラトーに出る。不安定で巨大なアイスブロックとヒドン・クレバスに覆われたこの一帯は先ず第一の関門でもあった。米隊の氷河上での登攀は「タイト・ロープ」である。これを口にしながら互いに確認し合って登ってくる。日本式のコンティニュアス・クライミングは、万一、ヒドン・クレバスを踏み抜いた時、そのショックが大きいので危険だという。確かに傾斜の少ない氷河上に限って有効であった。

三三〇六メートル峰を背景に新調したブルーのテントが並んだ。資材のボッカも急ピッチである。C1へのルートも明瞭なトレールがつき、危険なクレバス地点には夜光塗料をぬった標識が二本交叉させて立てられた。もう難関を思わせないが、慎重を期するよう副隊長命令が出された。

十六日。快晴に恵まれて人海戦術による多量の荷上げを可能にした。米隊員はいずれも大柄で良く担ぐ。米隊員が

二〇〇〇cc級の大型車とすれば、我々日本人はさしずめ三六〇cc級のミニ・カーである。それ相当に回転数をあげねばならない。しかし日本の山で鍛えたこのミニ・カーは、オーバー・ヒートすることもなく、日米のボッカ・オリンピックは接戦となった。

ボナパルト・ピークの北斜面、三五〇〇メートル地点にC2を建設。ここは真下にラッセル氷河が、東にはチャーチル峰が、西にはランゲル、リーガル峰が遠望出来る場所であり、またC1からの急登が一段落するプラトーであった。この山塊はコースト・レインジの山々と異なり、一六〇キロも内陸にある関係で、降雪量が少なく、日本の冬山の如きラッセルを強いられることは全くない。従ってBCから直接アイゼンを着けることさえ出来た。それでもルート偵察や先行パーティーはスノー・シューズかスキーを使用して安全を期した。

C2からC3へは完全に氷化した急勾配の登りで、一途にコルへ達するルートであった。夕刻など青く光るこの斜面の登りは辛く、従って小休止も多くなる。すぐ東側にはボナ北面のアイス・フォールが花キャベツのように眺められ、口を開けたクレバスの縞模様が美しく、ぜい沢な風景を堪能出来たのである。

十七日、シルバー・ザッテルに達し、初めて目標の四四〇三メートル峰と邂逅した。我々が東氷河からわざわざ遠廻りしてこのコルに達したことは、我々にとって重大な意味をもっていたのである。何故ならば、西氷河の最奥部にある氷河断層を越してその上部のプラトーに達したことになり、これを越すことが第一の鍵であった。私は思わず目でこの未登峰のルートを追っていた。この日はガスっていたので異様な怪奇ささえ感じたのである。しかし、この峰の北壁直下にアタック・キャンプを置けば何とかなるという期待がもてた。

十九日。C1背後にある三三〇六メートルの未登峰へ、森川、中島、羽根田、ハーズの四名が五時間でアタックし、宮崎辰雄団長の名に因んで、「ミヤザキ・ピーク」と命名した。日米両隊員はその報せに喜び合った。一方、萩原、松本等はC3（三八八〇メートル）建設に専念していた。二十日にはボナ寄りの東斜面には日本隊は五張のテン

トを、米隊は四室からなる大雪洞を構築し、アタックへの構えを整えたのである。アラスカの山々が地平線まで続き、夜は北斗七星が頭上にあり、オーロラが奇しく光った。

二十二日。大西、窪田は米隊五名と共にボナの第五登に成功、往復十四時間を要して、無事C3に帰着した。

五、アタック

二十五日。昨日発表された第一次アタック隊（萩原、松本、大野、スティリー、ボールトン、グレン）は藤田副隊長と綿密な打合わせの後、一一時四五分C3を出る。トラバースしながら約五キロ、高度差一五〇メートルの下りである。C4予定地（三七三〇メートル）に一三時三〇分着。固定ロープ六〇〇メートル、スノー・バー四〇本、縄梯子一本、スクリュー・ピトン三五本、標識一〇〇本、テント二張、食糧四日分などを搬入。一五時テント二張を設営、徐々に強くなった風に日米、岳連、神戸新聞社の旗が翻る。この地点は四四〇三メートル峰の二・三峰間のクーロアール直下にあたり、後方は先述の氷河断層である。危険があるとすれば、アイス・ブロックの崩壊だけであるが、デブリはここまでとどいていない。既に確認された登頂ルートを追ってみるが、接近してみると可成りの傾斜（平均約五〇度）がありクレバスが意外に多い。早速C3と交信する。グレナレンFAAとC3との交信で高気圧が二、三日続くというので明日のアタックを決定した。

二十六日。アラスカの夜明けは早く、痛い程寒い。隣の松本も眠れなかったのか、目を覚ましている。非常に寒い。零下三〇度。萩原は寝袋の中から、体調はどうかと声をかけてきた。四時、ランドールとベントンがC3からとんで来た。無理をしてはいけない。危険に会えばすぐ後退せよ。と命令形で忠告してきた。我々の第一目的は「ノー・アクシデント」だと言う。彼との会話で初めて聞く命令形であった。相当緊張して心配している様子であったので、すぐ同意の旨を伝えた。六時二〇分発。北壁取付点七時。Ⅱ峰直下のオーバーハングの下を二ピッチ一〇〇メー

トルの固定ロープをつけて第一クレバス九時着。割れたクレバスの上部は、大きなビルディングになっている。雪は意外に柔らかく、二、三〇センチ下は堅雪で、その下は青氷である。ピッケルとバイルのシャフトを交互に打ち込んで高度を稼ぐ。第二クレバス地点九時三五分着。高度約三八〇〇メートル。徐々に勾配を増し、部分的には頭がつかえる感じで六〇度はあろうか。一直線に突き上げているルンゼの入口付近で悪い状態の氷が出る。スクリュー・ハーケンを打って乗り切る。ここでトップにいた米隊が二時間もロス・タイムを出して、ピッチは急に狂い出した。壁面にへばりついての停滞は、手足の感覚を失なわせ、すっかり消耗したのである。日本隊がトップを交代し、ルンゼ直登一〇ピッチ、五〇〇メートルの固定ロープをはって、第三クレバスに一五時四五分着。僅かなテラスをけずって六人が集結。協議の結果、可能な限り行動し、ビバークを決意する。クレバスの側壁を越して急斜面を登ると稜線に出た。南側は高度差三〇〇〇メートルの切れ込んだホーキンズ氷河で、三面がヒマラヤ襞の入った実にすばらしい景観であった。一九五四年ユニバーシティ峰試登のレイノルズが「ナイヤガラ」のようだと絶讃したところの上部にいる訳である。稜線上のコブを二ピッチで越すと主峰に続いているコルに出た。上部の黒い露岩に因んで「ブラック・コル」と呼んだ。行動中止。一時間半で雪洞を掘り、六名が腰をおろしたのが二〇時。気温零下三二度。スイス・メタだけでは暖がとれない。寒い長い夜が経過した。

二十七日。四時四〇分雪洞を出る。北側にまわりこんで側壁にルートを取る。西ラッセル氷河へ直接切れ込んでおり、体が宙に浮いたような高度感である。この壁面は、日射の関係で表面の二〇センチぐらいがグラニュー糖のようになっており、「グラニュー・フェイス」と呼ぶことにした。雪崩を出さないよう注意しつつ、四ピッチのフリー・クライミングで大きなクレバスに突き当たる。その縁を馬乗りになって更に右へルートをとり、漸く幅広い稜線に出た。核心部は一応過ぎたので、ホッとして遅れている米隊を待った。ビバークのためか前進は牛歩の如く、偽ピークにだまされだまされながら、白い稜線を進んだ。エビノシッポがアラスカにも見られ、それをかじりつつ進んだ。

八時二一分。我々六人はこのアルバイトから解放された。確かにUSGSの地形図[註19]に示されている一四四四五フィートの上にいた。しかし、更に西方を見ると稜線が続いており、約一キロ離れて、ほぼ同一の高さをもつ三つの綺麗なピークがあるではないか。これを「マイナー・ピーク」と呼ぶことにしたが、私はアルティ・レベルを置き忘れたので、どちらが高いかは明白でない。

そこで、私は米国隊が提案したようにこの山を「マウント・コウベ」と命名するならば、後日の混乱を避ける意味で全部に登っておこうと考えたのである。このマイナー・ピークは第二次隊に譲ることにして下山した。我々は三十二時間の行動を終え、C4へ帰った。

二十七日、アタック隊のサポートをしていたランドールとベントンが第二登に成功した後、二十九日、森川、中島、窪田が一日で主峰を往復し第三登。続いて三十日、松本が再び下山、稲留、羽根田、荒木、岡本を率いて第四登に成功。このパーティーはマイナー・ピークを往復し、更にビバークをはさんで第二峰へも初登頂した。一方、第三峰は、二十八日、藤田（博）、大野、ランドール夫妻、スティリー、ハーマリーによって初登頂され、この山塊全部に足跡を残すことが出来たのである。

六、第二次山行の記録

目的を果たした我々は、その後隊を分散して色々の山行をもった。紙数の関係で詳細は割愛しなければならないが、概要は次の通りである。

☆五月二～三日

ボナ第六登ハ森川、中島、藤田（博）、萩原、ランドール夫妻、ハーマリー、スティリーV内米隊および萩原はチャーチル峰まで足をのばす。

☆五月七～八日…西氷河
五月(サツキ)ピーク（二九三四メートル）初登頂。翌日、フレンドシップ・ピーク（三一五八メートル）初登頂。〈下山、稲留、羽根田、岡本〉
☆五月八日…西氷河
ＡＪＥＸ・ピーク（二九六七メートル）初登頂。〈藤田（博）、中島、窪田、ランドール、ハーマリー〉
☆五月八日…西氷河
ウェッジ・ピーク東峰（三六三六メートル）初登頂。〈萩原、スティリー〉
☆五月七～八日
ボナ北面ダイレクト・ルート試登（約三八五〇メートルまで）〈松本、大野、荒木〉
☆五月十日
オリエンタル・レーンジ（三四四八メートル峰）試登。〈松本、大野〉

七、「マウント・コウベ」山名のこと

外国の山に日本名をつけることは、例(註20)をみないこともないが、稀なことである。まして公式名を取ろうとすれば、その手続きは大変なことであることは、百も承知である。

我々の目標とした四四〇三メートル峰に「マウント・コウベ」と名付けようとしたのは一体誰の発案であったか。我々がシアトルに着いた時、成功すれば、合同登山を記念して「マウント・コウベ」と名付けようと米国側から提案されたのである。宮崎団長は積極的に断わる理由もなく、これを受けられた。加えて、ワシントン州知事、シアトル市長、フェアバンクス市長もそのプロポーズのためには強力にバック・アップするとまで言われた。そのアプリケー



第3キャンプからマウント・コーベをのぞむ（右端が主峰）

Mt. Kobe (Aello Peak, 4403m) seen from Camp 3 (the main, 2nd and 3rd peaks from the right)

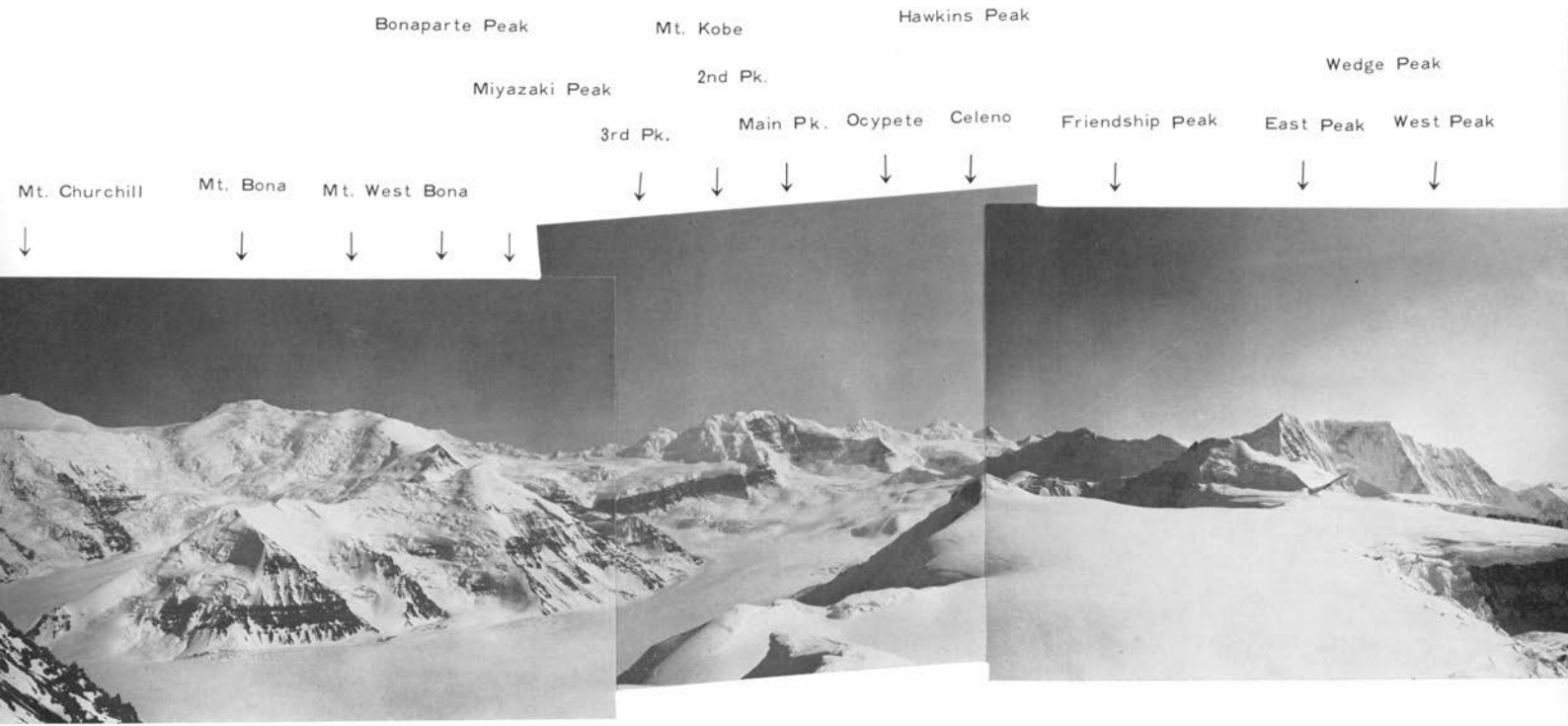
(By S. Fujita)



マウント・コーベ主峰よりマイナー・ピークをのぞむ
Minor Peak of Mt. Kobe seen from the summit of the main peak.
(By T. Matsumoto)



マウント・コーベ第3峰からホーキンズ・ピークをのぞむ
Hawkins Peak (Ocypete Peak, 3130m) seen from Mt. Kobe III.
(By S. Fujita)



AJJEX峰からみたボナ山塊のパノラマ
A panorama of Bona massif taken from AJJEX Peak (2967m). (By T. Kubota)

ションは各方面から出すことになった。また、成功後米国やカナダの新聞は、「マウント・コウベ成功」のニュースを大きく報道し、いわばこの山名は既成事実となってしまったのである。我々は単純に、それ以後こう呼び、そのように発表して来た。しかし、昨年の暮にはランドールが私信で、マウント・コウベの命名が頓挫していることを知らせて来た。最近に入手したＡＡＪによればアメリカ合衆国地名局によって―決議リスト六七〇四―山名は次のように決定した旨を掲載していたのである。つまり、四四〇三メートル峰（マウント・コウベ）を「AELLO」、三一三〇メートル峰（ホーキンズ・ピークと呼んでいたもの）を「OCYPETE」、およびその西にある四〇六九メートル峰を「CELENO」と各々呼び、この三座を総称して「TWA-HARPIES」[註21]と命名したのである。このことについて吉沢一郎氏から親切な提案[註22]を戴いた。本稿の主題はそれに従がわせていただくことにして、内容の方では山行中使っていた名をそのまま使った。

この命名の仕方には妥当でない面があるが、今それらに触れる紙数を持たない。後刻、正式に報告書で記したいと思う。しかし、我々にとって山名がどうであろうとも良い。アメリカ側が駄目だと言えばそれに従うだけである。では、「TWA-HARPIES」なる語はどこに根拠をおくのであろうか。HARPIESについては脚註で詳しく記したが、そのような仮称のあったことは知っていた。つまり、一九五一年の「スタンフォード・クルトラン遠征」隊によると、A・バックスターは、ボナ頂上より、その西端にある衛星峰を、小さなフィールドによって分かれている二つの急峻な峰々として望見し、「トゥワ・ハーピーズ」を連想したと記録している。彼の見た峰々とは、確かに我々の登ったものと我々がホーキンズ・ピークと呼んだものとを指しており、正確な地図を持たなかった彼は、チティストーン氷河の源頭部にあるという風に勘違いしている。そもそもこの名の起こりは、この資料にあり、後のレイノルズもその報告の中で、またベッキーなどは盛んにこの名で呼んでいたのである。一九六七年十一月になってそのような公式名が決定された事情は何か別にあったようだ。これについても今触れないことにする。

いずれにしても、ファースト・ステップとしての氷河は十分勉強になったし、先ずは成功裏に終えることが出来た。いろんな援助をいただいた会員の諸岳兄に心からお礼を申し述べたい。

〔註〕

(註1) アラスカでのピーク・ハントは、一九五五年の KEITH HART 隊のユニバーシティ峰登頂でその時期を画することが出来ると考えられる。

(註2) AAJ (1962) p. 27-37, "The South Face of Mt. McKinley".

(註3) M.W. (62/63) p. 149-160, "Mt McKinley from the Southeast".

(註4) AAJ (1963) p. 381-389, "The Southeast Spur of Mt. McKinley".

(註5) M.W. (64/65) p. 138-149, "The Conquest of Mt. Huntington".
AAJ (1965) p. 289-298, "Mount Huntington".

(註6) AAJ (1966) p. 1-7, "Mount Huntington-West Face".

(註7) AAJ (1963) p. 467-468, "Moose's Tooth and Mt. Danbeard".
AAJ (1965) p. 299-302, "The Moose's Tooth".

(註8) 山岳写真家として世界の山々を撮りまくっている。著書に、「"JAPAN"—crossroads of East and West」がある。

(註9) AAJ (1953) p. 416-423, "King-Peak Yukon Expedition" のメンバーで、他にペルー・ワスカラン遠征（一九六四）もある。

(註10) 彼は、オールドタイマーであるが、AAJ (1942) p. 421-423, "The Last of Bugaboos" で活躍した。

(註11) 『山岳』第五十八年（一九六三）・一八四～一九七ページ「台湾の山旅」

(註12) AAJ (1946) p. 119-120, "Israel Cook Russell" について、J.M. Thorington がアメリカ山岳会の創設メンバーについて触れているが、その項に「ラッセル」に関する記述がある。

(註13) A.J. (1931) p. 69-74, "The Ascent of Mt. Bona, Alaska".

(註14) AAJ (1952) p. 241-249, "Climbs from the Klutlan, 1951".

(註15) AAJ (1955) p. 84-87, "University Peak, 1954".

(註16) AAJ (1956) p. 131, "Various Notes—University Peak".

(註17) AAJ (1968) p. 40, 編者註の項。

(註18) 『山岳』第六十二年（一九六七）・二二六～二四五頁「アラスカ・ボナ峰登頂」

（註19）U.S. Geological Survey: 1 : 63,360 シリーズの地図。McCarthy (B-3), Alaska.

（註20）「神戸峰」なる山名は他にもある。『山と人』（一九六〇）一〇頁。神戸大学第二次チリ探検隊によるものでイエソ谷にあり。（また『山岳』第五十六年（一九六一）対一三三頁の写真及び一三七頁参照—編者）

（註21）「Harpies」とは、古代ギリシア神話に出てくる swift robbers で、「上半身が女身、老女の顔をし、垂れ下がった胸と、まがった爪をもち、また、翼と爪のような足をもって、巨鳥の如く、空中に住む」という、「疾風の化身」であると伝えられる。ホーマーの詩では、「Podarge」という名になっているが、ヘシオッドの詩の中では翼をもつ女神の娘として、「AÉLLO」と「OCYPETÉ」がハーピーズであった。その後、ローマ詩人であるバージルの詩では「CELAENO」（「AAJ の正式名では、"Celeno" とあるが誤り）が加わり二神のリーダーとなった。命名はそれからとられた。

（註22）『山と渓谷』三六〇（一九六八）九月号・一四四頁

ペルー・アンデス　一九六七年

――サンタクルス・ノルテ登頂――

横地康生

計画の発端

同志社大学山岳会の「A―A計画」は有名であり、立派な成果をあげているが、同じ頃長野にも「A―A計画」があった。一九六七年のサンタクルス・ノルテの発端をたどれば、この「A―A計画」に結びつく。

長野方式の「A―A計画」のAはアフリカとアンデスの頭文字のAであり、「東アフリカを中心とした各地で登山のあと国産自動車を馳って赤道沿いにアフリカを横断旅行する。大西洋を渡り南米はアマゾンを溯り、アンデス登山をする」というスケールの大きな計画であった。

発案者は山岳会グループ・ド・モレーヌの吉沢一郎氏である。長野市で運動具店の社長業のかたわら、朝から晩まで凡人の考えもおよばぬ「どえらいこと」ばかり空想し、誰れ彼れとなく吹きまくっている。しかし彼の豊かな雑学

知識と生来のアドベンチャラー的性格から生まれる大ホラを真に受けて、いつのまにかその虜となって海外登山を実現させた者は多い。

一九六四年のギャチュン・カン遠征のプランナーも彼であり、「田舎の山岳会がはじめてヒマラヤ遠征するのに、それにふさわしい低くて手頃な山を選んだのでは、ますます人間のスケールが小さくなってしまう」と、当時未登峰第三位のギャチュン・カン（七九二二メートル）を目標に選んだのも、ただの大ホラではなかった。

ギャチュン・カン遠征が実現し、その副隊長として忙しいさ中に、彼はもう次の夢を吹きまくっていた。それがアフリカとアンデスを結ぶ「A—A計画」であった。そして準備資金にと、ギャチュン・カンの餞別の全額二十万円をポンと投げ出して、ネパールへ飛んでいってしまった。

このような計画は常識的な頭からは生まれない。ギャチュン・カンで三千万円余りを集めた余勢をかって、吉沢先輩の術にかかった連中が集まって具体化に進んだ。しかし金、人、タイミングがそろわないと実現しない。折から遠征中のギャチュン・カンで遭難が発生し、後援予定の新聞社が手を引いて、「A—A計画」は必然的に儚なくも空中分解に至る。柳の下に「どじょう」は二匹いなかった。しかし私たちには、ギャチュン・カンを自分たちの力で実現させたという自信があった。まずアンデスを切りはなし、「東アフリカ三国での登山と自動車旅行」を実現させることにした。一九六五年六月「A—A計画」の中心だった堀内利美先輩を隊長に出発していった。

「A—A計画」は更に分裂をくりかえし、その年の秋、仲間の丸山晴弘はアンデスの具体化しないのにしびれをきらし、まだ日本から本格的な登山隊の入っていないニュージーランドの山へ出かけて行った。

このように吉沢先輩の大風呂敷は、またたくまに三つの海外登山隊を長野県山岳協会に実現させ、一九六七年にはペルー・アンデス、一九六八年にはパタゴニア・アンデスへと発展していったのである。

サンタクルス・ノルテについて

一九六六年という年は、ペルー・アンデス計画を具体化しつつある私たちにとって、全くタイミングの悪い年であった。悪名高い「松代群発地震」が長野市を中心に揺さぶりつづけ、登山隊の面倒を見てくれる所などなかった。結局自己資金でやるということで、六月に実行委員会が発足し、八月に十名の隊員も決定した。

登山目標はペルー・アンデスとした。なぜペルーを選んだかであるが、ギャチュン・カンやアフリカ計画の生き残りがメンバーの中心であり、マハルングル・ヒマールがそのままコルディエラ・ブランカになったのである。そこに最もアンデスらしいアンデスがあったからだともいえる。

山を選ぶとき、「何が何でも未登峰を」という考えはなかった。ペルー・アンデスへは、毎年二十隊近くの登山隊が世界各国から押しかける昨今である。ましてアンデスの黄金時代は一九五〇年代に終わり、六〇〇〇メートル級のジャイアンツの未登峰は残されていない。そのあと、ジャイアンツのバリエーションからの再登頂や五〇〇〇メートル級の初登頂時代となり、現在は更に進んだ「テクニックの時代」を迎えようとしている。すなわち一九六五年のアルゼンチン隊によるフィッツ・ロイの大ガリーからのラッシュ・タクティクスによる第二登や、フランス隊によるワスカラン北峰の北東稜（一人死亡）、オーテンバーガーの北米隊によるワンドイ南峰西稜、イギリス、スイス、カナダ隊が執拗にアタックをくりかえしているイエルパハー北東稜、近くは農工大のヒリシャンカ北稜、愛知岳連隊のサルカンタイ南稜など果敢な攻撃がくりかえされている。そんな時代に、あえて未登峰にこだわっていれば「別にどうっていうことのない初登頂」に終わってしまう。自己満足に終るような登攀はさけようと思った。そして二つの目標を選んだ。「テクニックの時代」にふさわしい目標としてサンタクルス・ノルテ（五八二九メートル）とワンツァン（六三九五メートル）の二つである。

ワンツァン（Huantsan）はワラスの町から南東に見える山で、高度ではペルー第三位だ。一九五二年リオネル・テレイの参加したフランス・オランダ合同隊が北稜から北峰（六一一三メートル）経由で第三キャンプまで設けて初登頂に成功した。第二登はアメリカ山岳会のレイ・オーテンバーガー隊で、初登ルートをとって登頂。頂上直下の岩場にテレイの打った残置ハーケンを発見している。そのあと一九六四年北米オレゴン大学の登山隊が北峰まで登り退却している。

一九六六年にはワンツァンをバリエーション・ルートから登ろうというパーティがあらわれた。ワンツァンの近くにあるウルアシラフ（Huruashiraju 五七三五メートル）の初登頂に成功したイタリアのカルロ・マウリ（G4のボナッティの相棒）とブラジルのドミンゴ・ヒヨビで、ワンツァン南西稜の南峰（Huantsan Sur 五九一五メートル。高さではペルー最高の処女峰）を狙い、南西稜からの登頂を試みたが、巨大な西壁が突破できず不成功に終わる。以上がワンツァンの戸籍簿である。世界のテクニック派の代表的クライマーが手がけているということも魅力的だった。ルートは西壁からマウリ隊の狙った南峰に登頂、南西稜から主峰を登る計画をたてた。

六月中にワンツァンで高度順応とアンデスの氷壁になれたあと、サンタクルス・ノルテ（Santa Cruz Norte）にぶつかることにした。サンタクルス・ノルテは幸運にも処女峰であり、なぜこのような独立峰が未登で残されていたのか不思議だった。

一九五八年、アメリカ山岳会のレイ・オーテンバーガー隊がはじめ東面から狙ったがルートが得られず、すぐ隣りのサンタクルス・チコ（Santa Cruz Chico 五八二二メートル）に登った。東面は雪もつかない岩壁に囲まれ、西面は圧倒的なヒマラヤひだの氷壁、三つの山稜は急峻な茸雪の連続という決定的な悪さに、最後まで多くのアンディニストの二の足を踏ませたのだろうと思われる。

ペルー山岳会報（Revista Peruana de Andinismo）の一九五八／五九年に、一九五八年にペルー人がサンタクル

ス・ノルテに初登頂と発表されている。さっそくペルー文部省アンデス課のセサル・モラレス氏へ問い合わせたら「サンタクルス周辺で五〇〇〇メートル峰のいくつかに登ったが、それがサンタクルス・ノルテであるかどうかは不明」という。チャクララフ東峰の猛者オーテンバーガーをして「登攀ルートは得られないだろう」といわせたサンタクルス・ノルテを、ペルー人に登れるはずがないと考えた。また一九六六年の芝浦工大隊も一度は目標に考えたようだが、「登られた」という情報で止めている（『岳人』二三二号）。

資料やアドバイスは、一橋大OBの吉沢一郎氏、早大岳友会の井田英彦氏をはじめアメリカ山岳会のアダムス・カーター氏、L・オーテンバーガー氏から受けた。

資料として今回最大の収穫は、サンタクルスとワンツァン周辺の航空写真と立体写真が手に入ったことである。ペルー空軍省航空写真課（Ministerio de Aeronautica, Aerofotografica de Peru, Las Palmas de Barranca）にはペルーの殆んどの地域の航空写真が保管されている。十年位昔に撮影されたものも混っているが、鮮明なもので、立体鏡にかけると氷河や尾根、氷河湖畔の状況が判明し、雪線までのルートやBCの位置を日本で十分に検討することができた（一枚約二〇〇〇円）。

隊員は十名、長野県山岳協会加盟団体から選出した。またギャチュン・カン以来海外登山で隊員の交換をしている愛知県山岳連盟から一名、ペルーで早大岳友会の宮下隊員（一九六五年ペルー・アンデス隊員）が現地参加した。隊の構成は次の通り。（年齢は遠征当時）

隊長　村井栄一（五十四歳）上田山岳会、大修館書店勤務。
副隊長　横地康生（三十歳）グループ・ド・モレーヌ、渉外・記録、養蜂場自営。
隊員　西郡光昭（二十七歳）信州大学山岳会、医務、信大医学部学生。
小林一智（二十六歳）上田USK、輸送、信州名鉄運輸勤務。

浜　　巌（三十歳）諏訪山岳会、食糧、諏訪セイコー舎勤務。
浜田　勝信（二十六歳）中京山岳会、装備、愛知県庁勤務。
宮下　昭（二十四歳）早大岳友会、渉外、リマ・サン・マルコス大学学生。
小松　佑次（二十三歳）木曽福島山岳会、食糧、松屋時計店勤務。
山田　明（二十二歳）グループ・ド・モレーヌ、装備、長野日本無線勤務。
ポーター　パブロ・モラレス（二十七歳）コルディエラ・ブランカ山岳会、ワラス市民病院救急室勤務。
オノラート・カルドア（三十五歳）左官大工。

ペルー上陸

実行委員会ができて具体的準備期間は十カ月だった。資金集めと貨物船便乗にさんざん苦労をし、四月二十五日、二名の先発隊が約一トンの登山荷物と共に川崎汽船の崎島丸で出発した。本隊は三井ＯＳＫのブラジル丸でパナマ入りした。

五月三日、十名の隊員はリマに集結した。通関は先発した小林が在リマ長野県人会の青木留男氏や通関エージェントのホセ・上松氏の協力で進めていた。書類の不備や休日にかかったり、大蔵省の担当官の出張などで「無税通関許可証」の入手がおくれたが、結局一週間で荷物を引きとることができた。

リマ到着の翌日、文部省のアンデス課セサル・モラレス氏を訪ね「サンタクルス・ノルテ登頂」の情報を集める。登攀者名も記録もなく問題外。ワンツァンへはイギリス隊と北米ニューメシコ隊が申請してきていたが、日本隊に優先権を与えるとのことだった。

通関に手間どっている間に、リマ滞在費節約のため、横地、山田、小松、浜の四人が登山の基地となるワラスへ先行し、ポルタドールのパブロ・モラレスと落ち合って、ロバや馬方（アリエロ）の契約や食糧の買入れなど、キャラバンの準備を

した。六月六日には通関も終わり、全員ワラスへ集結し、ワラス在住邦人の谷川精三氏宅の庭で開梱、キャラバン用に麻袋に再梱包した。隊長、副隊長は県知事と警察署長へあいさつに行く。警察では「事故のときはリマから空軍をよんでやる」とのこと。やはりアンデスでも事故に備えて山行届は必要である。準備の間、ワラス放送局に出演したり、パブロの自宅に招待されたりの国際親善もあった。

第一目標ネバド・ワンツァンへ

六月八日、「バーモス！（出発）」の声がワラスの石畳の裏通りにひびく。待望の時だ。二十五頭のロバを連らね、ネバド・ワンツァンへ向けキャラバンがはじまる。町並が切れると、石畳の道はとたんに自転車も走れぬ石がら道となる。まるで河原のようだ。けれど仰げば紺碧の空の下コルディエラ・ブランカの秀麗な山々が高くそびえ、緑のユーカリの林の中にアドベ（日乾レンガ）のインディオの家が点在し、私たちは満足していた。

チョタワンカのパンパ（草原）を越え、二日のキャラバンでラフコルタ谷の奥深く、氷河湖フフコチャの岸へBCを設営した。

キャラバン二日目、ラフコルタ谷の入口でインディオとトラブルがあった。谷の奥は開けた草原で、ワラスに住む白人の所有する牧場となっていた。谷間をさえぎる牧柵を通過するとき、インディオの老母があらわれて、ケチュア語でわめく。生憎ケチュア語のわかるパブロが病気でキャラバンに参加していなかった。「通るなら所有者の許可をもらって来い」といっているらしいが、BCを眼の前にして強行に通過してしまった。小林は肩にした散弾銃をインディオの老母に奪われ、宮下は手にかみつかれるという騒ぎであった。後でこのトラブルは私有地不法侵入で訴えられることになってしまう。

BCは標高四二〇〇メートル、全員高度障害があらわれて、林、小松は全く動けない。元気な隊員で六月十一日か

ら偵察をはじめた。山田、浜は氷河湖の右岸を登り、谷を囲む岩尾根を越えた。報告によると岩尾根には放牧の踏み跡があり、向こう側にも小さな氷河湖があってC1に最適という。

翌朝、さっそくC1建設に向かおうとしているところへ、黒い帽子に黒のポンチョという殺し屋スタイルのインディオの男がやってきて、牧場主からの手紙を持ってきた。「私有地へ無断で入ったこと、門番の老母をなぐったこと、牧柵を破壊したことを裁判所へ訴える」というものだった。すぐ返事をかく。「不法侵入の件は持主が私有地である公示をしていなかったのでしかたがなかった。隊長が高山病で動けないので下山後話しあいたい。」

こんなごたごたで出発がおくれたが、林と村井隊長を残し、全員でC1建設に出る。右岸の岩尾根には縦走路のような踏み跡があり、一歩ごとワンツァン氷河がせまってきた。サイドモレーンの中に氷河湖が光り、そのわきへC1を設営した。近くに一九六六年の北米のアダムス・カーター隊のテント跡があった。設営後モレーンを登って上部氷河を偵察したが、高度順応不完全で、頭が割れそうに痛み、逃げかえる。

六月十三、十四の二日間でC1への荷上げを終わり、十五日C1へ入った西郡、小林、宮下、山田はワンツァン氷河に入りC2へのルート偵察をやった。「氷河はクレバスも少なく、難なくネバド・ルーレック（Rurec 五七〇〇メートル）のコルへ達した。「ワンツァンの西壁は約四〇度の傾斜で高さ三〇〇メートル、南西稜上へC2を出すとすればC1からのアプローチが長く、西壁工作のため氷河の中へC2を設けるべき」と報告される。

この報告により十六日西郡、山田、宮下、横地がC2予定地確保のため荷を肩に氷河を登ったが、十一月の冬富士のような、息もできない突風に出合った。ブランカ山群はネバド・ワンツァンで中断し、十キロほど離れたネバド・ポンゴス（Pongos 五六八〇メートル）の山稜へと続く。その断層の谷から、アマゾン大平原の風が太平洋へ吹き抜け、その支流がワンツァン氷河へ吹き込むのだ。C2は標高五二〇〇メートル地点、突風をさけて崩れたクレバスの中へ設営して山田、宮下隊員が残る。

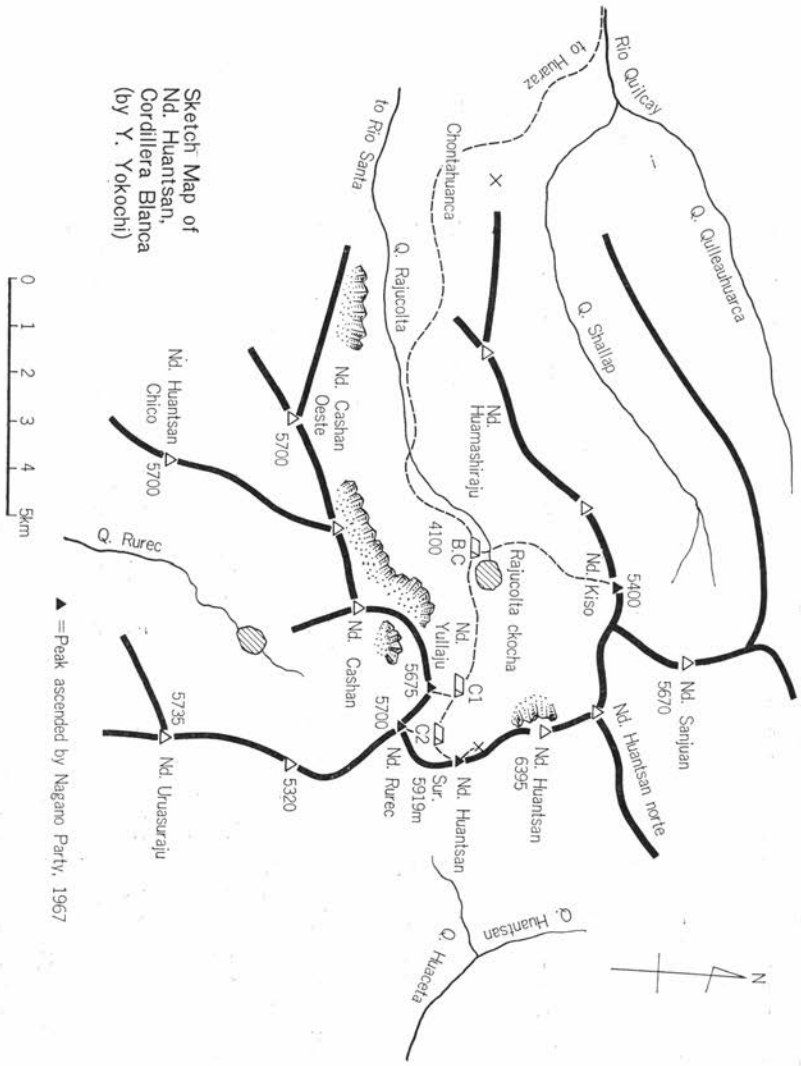
六月十七日、C2から宮下、山田が西壁を試登、三五〇メートル登ってロープを固定したが、南西稜直下の壁を横切る巨大なクレバスが二ヵ所あり、急斜面で梯子も使えないとのこと。西壁のいたるところから雪崩が出ていて、安全な壁は二ヵ所しかない。その一ヵ所がまずダメとなったのだ。

ネバド・ルーレックのコルに近い南西稜の端の西壁を試登するため、翌日西郡、林を出し、山田、宮下、横地がそのサポートにあたる。壁にはクレバスもなく簡単に南西稜へ抜け出られたが、尾根はやせている上に茸雪の連続で、乗りこえるのに苦労させられる。胸までもぐる軟雪かと思うと、手がしびれるような堅い氷があり、また尾根を寸断するクレバスもあって、一時も気が休まらない。

先行した西郡、林隊を追って山田が茸雪のかげに入ったとき、「ズズーン」という地鳴りのような響きと共に足もとがゆれた。雪崩だ。一瞬恐怖が全身を走る。宮下の「山田クーン」と叫ぶ声。茸雪をこえてとびおりた時、ヒドン・クレバスを踏み抜いて、山田は墜落したのだ。宮下と結んだザイルが宮下のアイゼンにからまり、十五メートル位の墜落でくい止められていた。山田は全身打撲と脱腸、宮下はザイルの摩擦で手の肉をくいとられていた。この事故が隊員に与えたショックは大きく、隊長から全員へBCへ降りて休養をとるよう命令が出る。BCには病気のなおったパブロが日本からの手紙の束を持って入山していた。それが事故のショックを落ちつかせるのに大いに役立った。

ワンツァン南峰登頂

休養中はもっぱら西壁突破のルートについて議論がくりかえされた。六月二十一日、休養明けと共に、最初山田、宮下がクレバスにはばまれて退却した西壁を再工作してみることにして、西郡、林、宮下、小林をC2へ入れる。横地、小松はワンツァンの対岸にある約五五〇〇メートルの無名峰へ登り、南西稜の状態を偵察した。(無名峰はネバド・アベハ(Ned. Abeja と命名=みつ蜂峰の意)


Sketch Map of
Nd. Huantsan,
Cordillera Blanca
(by Y. Yokochi)
0 1 2 3 4 5km
▲=Peak ascended by Nagano Party, 1967
Río Quilcay
to Huaraz
Chontahuanca
to Río Santa
Q. Rajucolta
Q. Shallap
Q. Qulleauhuarca
Nd. Huamashiraju
Nd. Huantsan Chico 5700
Nd. Cashan Oeste 5700
Rajucolta ckocha
B.C 4100
Nd. Kiso 5400
Nd. Sanjuan 5670
Nd. Huantsan norte
Nd. Yullaju
C1
C2
5675
5700
Nd. Cashan
Nd. Rurec
Nd. Huantsan Sur 5919m
Nd. Huantsan 6395
Q. Rurec
5735
Nd. Uruasuraju
5320
Q. Huantsan
Q. Huaceta
N

二十二日、全員が頂上へ向け行動に入る。C2の西郡、林は再度西壁へとりつき、クレバスは幸運にもブロック雪崩に埋められてブリッジができていて、六〇〇メートルのフィックスド・ロープを張って南西稜へ抜け出ることに成功した。そこはワンツァン南峰直下であり、C2からの射程距離である。

六月二十三日、夜明け前C2を出発した宮下、小林は南峰登頂に向かう。十六ミリ映画を撮影する林、サポートの西郡、小松が後続、C2から仰ぐ南峰はさかんに雪煙をあげている。(以下小林隊員の記録から)

「西壁は凍りついたフィックスド・ロープをたどり難なく南西稜に達した。ここから先は未知の稜線である。両雪庇(アンデスでは人の字型の両側へ発達した雪庇もある)の稜線を慎重に登ると、巨大な茸雪につきあたった。その東側(アマゾン側)をトラバース気味に登ると、東面のワンツァン谷まで一気に切れていて、雪片が吸い込まれるように落ちてゆく。高度感は恐ろしい位だ。軟雪が多くスノーバーがスポッと入って不安でならない。

茸雪をこえると稜線はやや広くなり、クレバスが走っている。スノーブリッジを渡り、続く急な雪壁をあえぎあえぎ登ると、ガスが切れ青空が見えた。そこが南峰(五九一五メートル)の頂上だった。午後一時だった。三〇分後サポート隊が賑やかに登ってきた。

主峰への稜線はいったん一〇〇メートル位降り、やたらとクレバスの多い広い稜線がつづく。そして深いギャップの向こうに黒々とした岩壁の上に雪をのっけた主峰があり、あたかもガルワールのシブリンに似て、去来するガスのせいか遠く非常に困難に思えた。ワンツァンに初登頂したL・テレイやオーテンバーガーが、一見やさしそうに見える南西稜を敬遠したわけがわかるような気がする。凍ってどうにもならないトマトジュースの缶を頂上に埋めて下山する。」

南峰は終わった。しかしまだ主峰が残っている。フィックスド・ロープも固定したままだ。その夜C2入りした浜、浜田、山田も加えて話し合った。やはり大ギャップの突破が問題で、日程、装備などから判断しても不可能とい

う結論に達する。私たちにはより困難な目標のサンタクルス・ノルテが残っているのだ。ワンツァンでの高度順化は終わって目的は一応達成されたのだ。

下山と決まった翌日から天候が急変し、連日強風が吹きまくった。主峰への未練を抱く余裕もない位激しい嵐だった。二十五日フィックスド・ロープを回収、その間に事故から回復した山田は小松とネバド・ルーレックの第二登、林の十六ミリ映画撮影のモデルになって西郡、小林、浜がネバド・カウヤラフ（Ned. Caullaraju 五六七五メートル）の第二登をした。思い思い無名の処女峰に登り、二十六日C2を撤収し全員BCへ下る。久しぶりのBCの土と草の上で休養のあと、六月三十日ワラスの町へ下山した。

サンタクルス・ノルテへのキャラバン

ワラスへ帰るとすぐラフコルタ谷の牧場の事件を解決するため牧場主を訪ねた。「私有地不法侵入、器物破損」で訴えられ、九〇〇ソーレス（約一万円）の弁償をすればとりさげるという。一万円は大金だ。ワラスで知りあった税務署長のラモス氏の同行をたのみ、結局一五〇ソーレス（約二〇〇〇円）で示談成立、奪われた散弾銃もとりかえす。

サンタクルス山群へのアプローチでトラブルをさけるため、県知事と警察署を訪ね「通行証」や「通達書」を作ってもらった。またパブロに病院の仕事ができたため、オノラート・カルドアを雇う。パブロの従兄弟とのこと。

七月五日、ワラスでの休養と補給を終わった私たちは、トラックで約八十キロ離れたサンタクルス山群へむかった。リオ・サンタ沿いの道路はインカ時代の「太陽の王道」であり、スペインのピサロの軍隊が一五三二年、インカの王都クスコめざして進軍した道路でもあった。砂ほこりをあびて走り五時間程でコルカスへ着く。部落もない荒漠たるアンデス山麓の分岐点で、標高一九〇〇メートル、大分暑い。リオ・サンタ河を吊り篭で渡り対岸の牛小屋に泊

る。

このあたり一帯はアシェンダ・コルカス（コルカス農園）の所有地で、サンタクルス三山をはじめ、キタラフ、ネバド・アルパマヨなど六〇〇〇メートル級の山も所有地の中にある。

ロバ二十五頭とアリエロをアシェンダの好意で借りて、七月七日キャラバンを開始した。放置されて荒れはてた農園の石がら道を登り、サボテンの台地をすぎると、パンパ・ワルカヤンの草原に出る。インカ時代の段々畑のあとやアドベの崩れた遺跡のわきを通る。この道はサンタクルスやネバド・アルパマヨをめざしたフランスのコーガン隊やアメリカのオーテンバーガー隊、ドイツのギュンター・ハウザー隊、日本の早大隊など、世界のアンディニストがキャラバンを進めた道である。急な山腹の巻き道を登ってウシカシの水場を眼の前にして日が暮れる。わずかのわき水での炊事、アリエロのインディオがアメリカ隊は人使いが荒く、遠くまで水くみにやらされたことを口に泡をためて話す。

キャラバン二日目、草原を登りきると、ラグーナス渓谷沿いに切り開かれた道となる。谷間に突然純白のサンタクルス・ノルテがあらわれた。所々雲にかくれて西面のヒマラヤひだの壁は陰惨にさえ感じられた。山麓の氷河湖クリコチャ（金星の湖の意）の岸へBCを設営する。

前進キャンプ

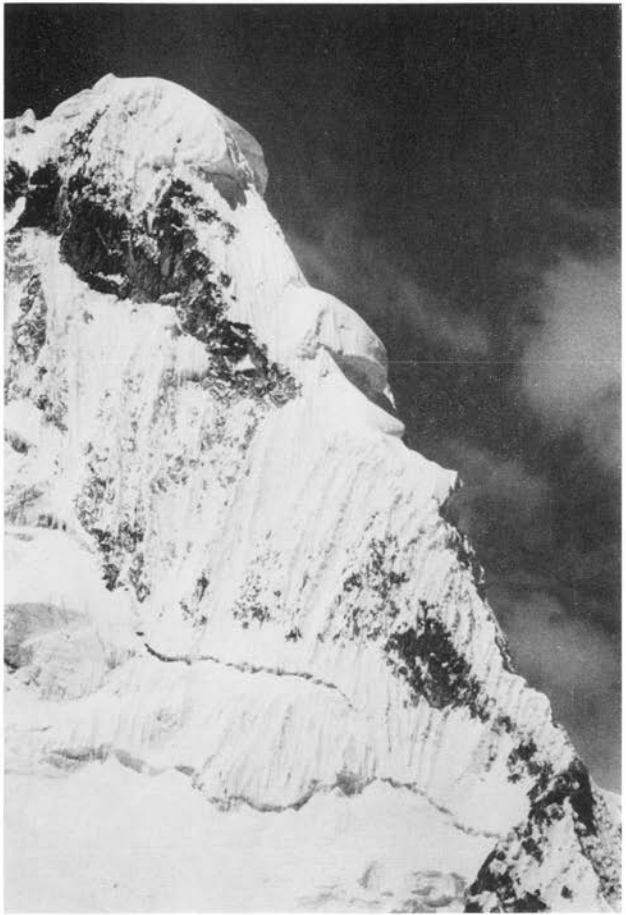
アンデスで氷河湖は最もすばらしい憩いの場所となる。コバルトブルーのクリコチャの彼方に、純白のサンタクルス三山が整いすぎる位美しくそびえていた。しかし登攀対象としてのサンタクルス・ノルテは、正面に懸垂氷河がかかり、北稜、西稜とも両雪庇と茸雪の発達したやせ尾根であり、西壁はヒマラヤひだにおおわれて余りのもの凄さに呆然として登攀ルートなど浮かんでこない。かわるがわる双眼鏡をのぞいてBC第一日は終わる。「明日撤収しよう」



サンタ・クルス・ノルテとサンタ・クルス・ノルテ氷河
Santa Cruz Norte (5829m) and Santa Cruz Norte Glacier.



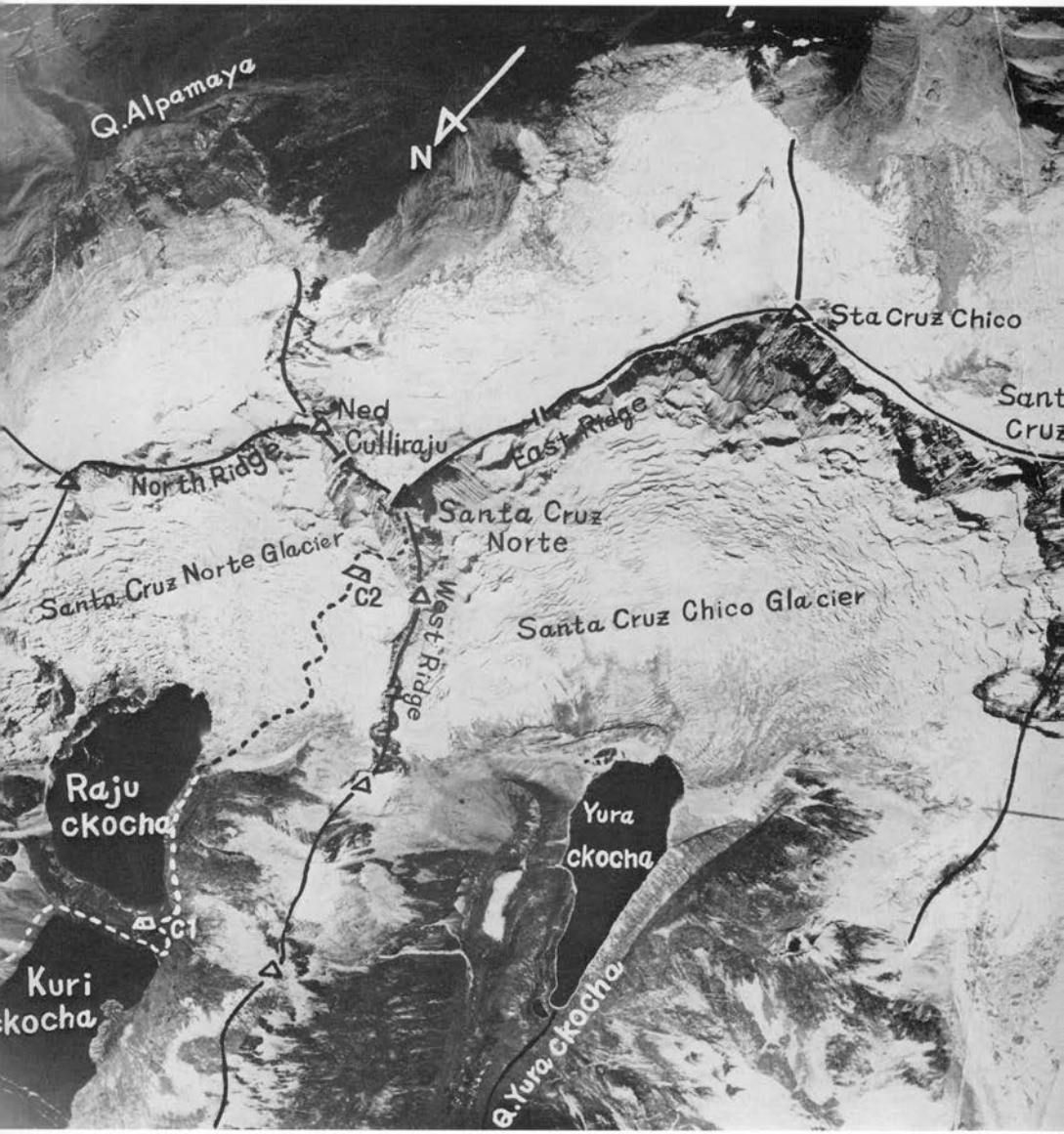
サンタ・クルス・ノルテの西壁（1）
West face of Santa Cruz Norte seen from Camp 2.



サンタ・クルス・ノルテの西壁（2）
West face of Santa Cruz Norte seen from the Base Camp.



サンタ・クルス・ノルテの西壁（3）
West face of Santa Cruz Norte seen from the Base Camp, 4 men climbing up in the center.



サンタクルス山群の航空写真
Air photograph of Santa Cruz region of Cordillera Blanca.

という冗談ならぬ冗談も出る。

七月十日、隊長を除いた全員でクリコチャを越えた奥の氷河湖ラフコチャの水辺へC1を設営した。C1へのルートは、ペルー空軍省より入手した航空写真で、日本で予想していた通りの位置へ設けられた。ただクリコチャの両岸とも岩壁帯のため水辺を歩くことができず、左岸のモレーンの急斜面を高巻きしなければならなかった。登り降りのはげしい割に高度は稼げず、モーター付ゴムボートがあれば三十分の距離だと悔やむ。モレーンの中はヒュッチェ（針のようにとがった葉の草）が密生していて歩くと刺される。それをはじから燃やすことにした。夜に入ってもあちこちで燃えつづけ、一ヵ月おくれのサンファン（インカ時代の山焼き祭り）だ。

七月十二日、連日の行動とワンツァンの疲れが出て、隊長はじめ林、山田、浜田が風邪に倒れ、小松は歯痛がひどく動けない。他の隊員も食欲がないという状態なので、全員休養をとることにした。オノラートには休みを利用してカラスの町まで野菜やタバコを買いに下らせる。BCは小松のうめき声と咳で異様な雰囲気となる。

十三日、小松は歯痛に耐えきれずワラスへ歯の治療に下ることになる。林、山田、浜田は今日も動けず、C1入りする宮下、西郡、小林をサポートして横地、浜の五人が行動する。C1からの帰りに雪降りとなり、水気の多い雪に濡れて疲れきってかえる。半数の隊員が風邪や歯痛で倒れ、登頂の可能性はゼロに等しく、その上予想外の降雪だ。気分が滅入るばかりである。

翌朝オノラートの雪かきの音で目が覚める。健康を回復した浜田とオノラートのサポートで横地、浜はC1入り。きのうの降雪でクリコチャの高巻きルートは滑りやすく、フィックスド・ロープを張る始末。倍の時間をくってC1へ入る。

C1から西郡、宮下がラフコチャの右岸をトラバースして氷河の末端へ達し、サンタクルス・ノルテ氷河へもぐり込み、西稜末端の鋭いピークめざして氷河を登った。しかし、懸垂氷河の巨大なクレバスにはばまれて迷路のような

氷河を歩きまわっただけで、ルート発見はできず疲れてかえる。

十五日も雪降りである。C1からわずかの晴れ間をぬってノルテ氷河へもぐり込み、C2へのルートを探る。西郡、横地がノルテ氷河西端のモレーンの丘に登り、氷河を探る宮下、浜にルートのアドバイスをする。ワンツァンの氷河とちがって起伏がはげしく荒れていて、十メートルにも及ぶ断層がいたるところにある。午後再び吹雪となり、赤旗をたよりにフィックスド・ロープを固定してかえる。

この日ノルテ氷河の三分の二は登り、C2への見通しはついた。四人共ぬれねずみになり口もきけないほど疲れてかえる。C1ではホエーブスにぬれた衣類をかざして乾かす。まるで日本の冬山だ。

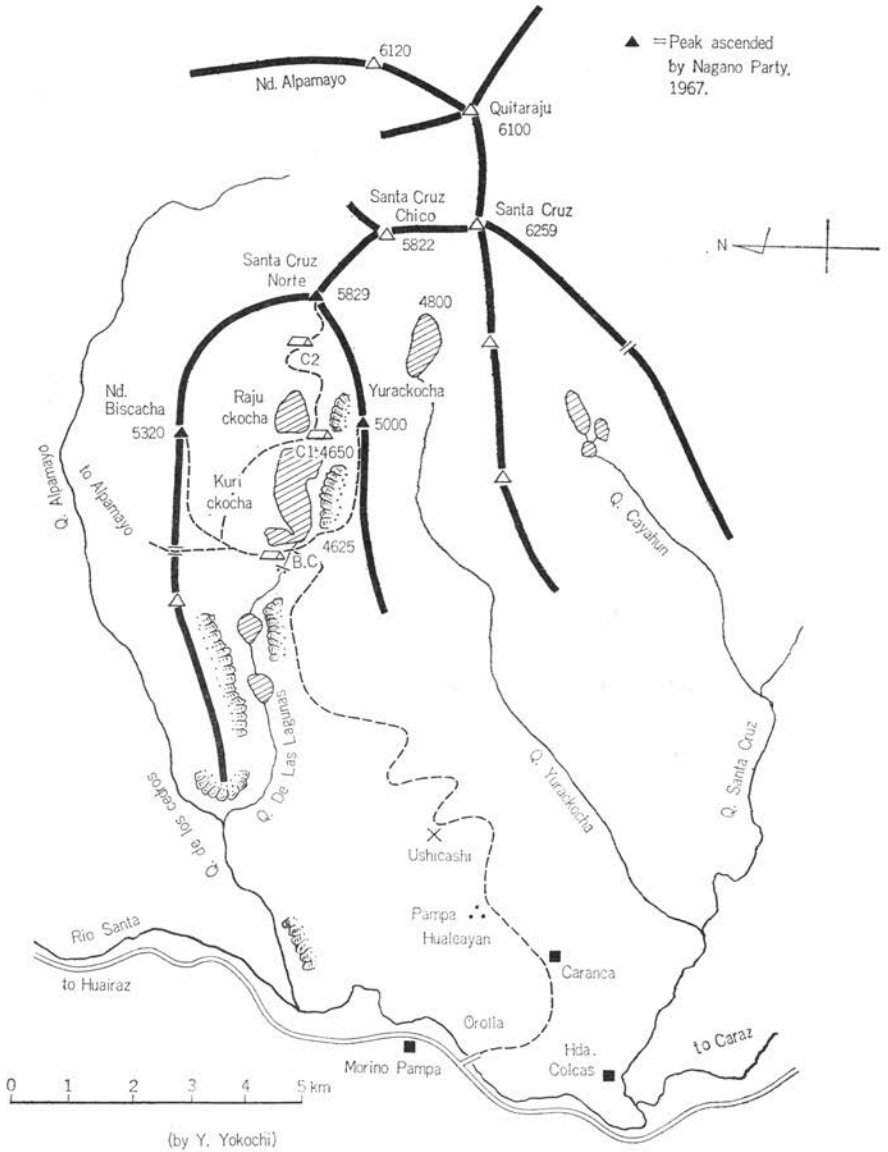
翌日は三日間降り続いた雪も止み、ぬけるようなアンデスの空がきた。C1からは西郡、宮下、浜、横地がノルテ氷河へ入り、昨日のルートを更にのばして西壁直下へC2の位置をきめる。氷河の中は反射熱でやけつくようだ。新雪がアイゼンにダンゴとなり、四人共今日も疲れがひどい。BCから身体の調子をとりもどした林、山田、浜田とオノラートがC1入りし、歯の治療に町へ下った小松が五日ぶりにBCへかえる。ワラスまで行って六〇通余りの手紙を持ちかえる。すべてが明るい方向へむいてきた。

十七日、快晴。林、山田、浜田、小林でC2予定地点へ荷上げをする。他は疲れきって快晴というのに終日C1で死んだように眠る。昨晩オノラートへBCからの荷上げを命じておいたら、夜の明けぬうちにBCを往復して、手紙の束と共にビスカーチャ（野兎）まで一羽射ってかえる。よく気のきく頼もしい男だ。

翌日も晴天が続く。一日の休養で精力を貯えた西郡、宮下、小林、横地でC2を設営、他のメンバーは身体の不調を訴え、C1で休養する。このところ身体の調子の良い者と悪い者が固定されてしまい、調子のいい西郡、宮下、横地らに大きな負担となっている。

C2は西壁直下のクレバスが崩れてセラックスの乱立するわずかの平坦地へ建設された。そこからはC1もBC

Sketch Map of Santa Cruz Norte, Cordillera Blanca



(by Y. Yokochi)

も、そして二つの氷河湖、サンタクルス・ノルテの西稜も頂上も見渡せ、高度感も満点だった。

夕ぐれのC2で西壁を仰ぎながら登頂ルートを検討する。私たちは西稜を登頂ルートに予定していた。レイ・オーテンバーカーのすすめるクリラフのコルから北稜を登るルートは、一見可能性はありそうだが頂上までの距離も長く、クリラフのコルへ達するまで西壁から常に雪崩の危険があった。だいいちヤセた両雪庇の北稜を登る気にはなれない。しかし西稜とて荳雪の連続であり、頂上直下の巨大なオーバーハングの荳雪をどのように突破するかも全く未知数だ。しかし山は眺めていてはルートは発見できない。壁に鼻をすりつけてみることだ。西壁直下へ立ってみて、今まで予想もしなかった新しいルート案が生まれてきた。西壁直登である。「アンデスの花嫁峰」のウェッディング・ドレスの氷のヒダを直登して西稜へ抜け出るというのだ。まず雪崩の危険が気にかかる。しかし、C2付近のデブリの少ないことから判断して心配ないと考える。アンデスではしばしば稜より壁の直登で成功した例が多い。一九六六年のイエルパハーも、西壁を直登して第二登に成功している。明日は西稜と西壁へ偵察隊を出すことにする。

翌十九日、さっそく二つの偵察隊が出かけた。小林、横地は西稜末端の鋭いピークのコルに登り、西稜及びユラ・コチャの谷と南西壁を見た。予想通り西稜はノコギリ歯のようになり、所々巨大な荳雪がのっかり不安定で今にも崩れ落ちそうだ。あきらかにルートには使えない。

一方西壁は西郡、宮下がとりつき下段のクレバスを突破、上のクレバスまで達し二〇〇メートルのフィックスド・ロープを固定してかえる。西壁の上部はヒマラヤひだがクーロアール状となり青氷となっている。ブロック崩壊があればまず助からないが、西壁に朝日の射すのは十時すぎなので、すばやく西稜へ抜け出ればその危険は少ない。技術的な困難は西壁より西稜の二つの荳雪の突破にありそうだ……と判断して登頂ルートは西壁直登と決定した。C1から林、小松をアタックにそなえてC2へ入れる。

二十日は小松、小林と西郡、宮下の二パーティを西壁のフィックス工作に出す。上のクレバスは傾斜が急のため

(約六〇度)、二メートル位ひさしとなっておおいかぶさり、容易に渡れない。クレバス沿いに三十メートルほど右へトラバースしてスノーブリッジを見つけて渡ることに成功。下半部のもたつきにくらべて、ヒマラヤひだの中へ入ってからは「ブロック崩壊」が恐ろしくて、やたらとピッチがあがり、三時間余りで西稜へ抜け出る。頂上まであと三〇〇メートル余りとなり、登頂の可能性が強まった。

その夜アタック計画について検討し、二十二日を第一次アタック日と決めた。アタック隊員は西郡、宮下とし、これに十六ミリ映画を撮影する林、小林がサポートして、できれば四人が登頂する。ルートの状況により翌日小松、山田、浜、浜田の四名を第二次アタックにむかわせることにした。

二十一日、C2では明日からのアタックに備えて登攀用具の準備と休養に入る。小松と横地は氷河の中からスノーバーやロープを回収した。西稜登攀用が不足しているのだ。スノーバーは全部で四〇本持参したが、やはり絶対量がたりないので氷河から回収するしか補いようがない。

翌朝、浅いねむりの中でパサパサとテントをたたく雪の音をきいた。きのうの乳色の雲が天候の下り坂の前兆だったのだ。アタックは延期される。降雪でフィックスド・ロープが埋没すること、雪崩、食糧不足などあれこれ心配している時、食糧担当の小松がやってきた。悪いことは重なるものだ。C2にはあと二日分の食糧しかないという。今更小松を吊しあげてもはじまらない。副隊長の私の責任でもあるのだ。ギリギリの食糧ではアタックはできない。この悪天候の間にBCから補給することを考え、吹雪をついて横地、山田、小松はBCへむけ下山して行った。

サンタクルス・ノルテ登頂

七月二十三日、再び快晴の朝を迎えた。BCからトランシーバーでアタック隊の出発を指令する。七時半、四ツの黒い点が西壁めざして陽の射さない氷河を登っていくのを見る。(以下宮下隊員の記録から――)

「チリチリする寒さが快い。七時半、林を登攀隊長とする西郡、小林、宮下のアタック隊はC2を出発した。C2を出て以来だれも無言で登る。西壁の取りつきのクレバスでザイルを出す。その時西郡が「そーれ、いっちょうやるか！」とすっとんきょうな声をあげた。その声が登攀前の緊張をほぐすのに役立つ。

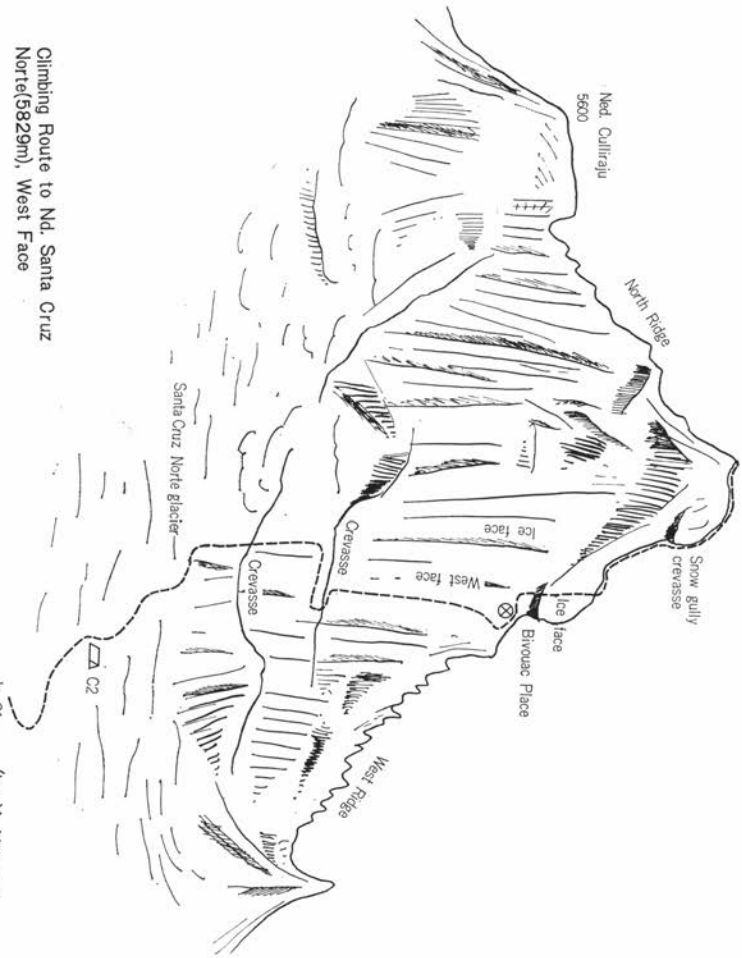
西壁には二つのクレバスが走っている。氷壁自体の重さでずれてできたもので、水平方向に亀裂が走っている。壁の傾斜が急なのでクレバスの上部は庇となり、部分的には五メートルもはり出している。下のクレバスも上のクレバスも、幸運にも西壁のヒマラヤひだの中を落ちてきた雪が、つみ重なってスノーブリッジができており、クレバスをよじ登ることができた。ヒマラヤひだの中へ入り、アイスハーケンを打ってひだの両側に足をふんばり、セカンドの西郡を迎える。下を見ると胸のすくような高度感だ。

それから上部はフィックスド・ロープをホールドにしてアイゼンの出ッ歯を青氷にたたきこみ一気に登る。ツァッケは一センチ位しか入らないが、それで十分だ。ヒマラヤひだのつめで右のひだに移り、西稜の雪庇を巻き込むようにして西稜へ出た（十一時〇分）。ここまでは一昨日トレースされていたので、問題はこれからの西稜である。あと標高にして約四〇〇メートル、すぐ頭の上と頂上の大茸雪は、まさに圧倒的な迫力を持っていた。

後続の林、小林パーティが西稜へ這い出たところで、すぐ上の大茸雪のアタックにかかる。林は息つく間もなくカメラをまわす。小林は西稜のど真ん中へ雪洞を掘りはじめた。

西郡トップで西稜の胸までもぐる粉雪の中へ入っていった。やがて西稜は細くなり頭の上の茸雪はますます巨大になる。右側を見れはユラ・コチャの谷まで一気に切れ落ちている。もし可能なルートを選ぼうとすれば、正面しかない。西稜はナイフエッジとなり、ハングした大茸雪に押えつけられて消えていた。まるで前穂高北尾根四峰のあの北条・新村ルートのハングのような感じで、まん中にくびれがある。

氷は堅くアイスハーケンは先が曲がったり折れたりしてしまう。無理に叩き込もうとしたら、一かかえもある氷が



Climbing Route to Nd. Santa Cruz Norte(5829m), West Face

(by Y. Yokochi)

ガバッとはげて、すんでの所で氷と心中するところだった。何をやってもダメなので、最後には右寄りに吊りさがっている腕位もあるつららにあぶみをセットして登る。次々にアブミをかけ、二時間の大奮闘でのりこす。あとはナイフエッジが頂上までつづき、絶望的な頂上の大茸雪があった。ロープをフィックスして雪洞へ下る。

二十四日、雪洞を七時三〇分出発。きのう苦労した茸雪も快調に登る。しかし、その先のナイフエッジは急斜面なのにフワフワの雪で、いくらかき除いてピッケルを刺しても手応えがない。雪崩れないのが不思議だ。西郡が猛烈な馬力で登ろうとするが埋没するばかりだ。さんざんもがいて、二ピッチでこの悪雪を乗り切る。登りつめると頂上直下の大茸雪の下に出る。まるでこのサンタクルス・ノルテの口のようにクレバスが真横に走り、深さは二、三メートル位なので、洞穴のようなものだ。全体が青氷でできていて、がっちりしたテラスともいえる。クレバスは左側、つまり西側へむけて開けていて、その先はすっぱり切れた岩壁になっている。登るとすればボルトが必要だろう。右側は次第にクレバスがせまくなりつららでふさがっている。しばし協議して右側を巻いてみることにした。頂上は私たちの頭の上にあるのだ。

西郡がトップを引き受け、クレバスを這うようにして右へ伝い、アイスバイルでつららをたたき落とす。ぐっと体をのり出す。と、今までつららで保たれていた頭上の氷の庇が崩れて、ゴーッという音と共にサンタクルス・チコ氷河へ、まるで生きもののように吸い込まれていった。突然のことで、全員恐怖に心臓のひびきがきこえるほどだった。クレバス内へアイスハーケンを何本も打ち再び体をのり出す。そしてやっと一本のハーケンをクレバスの上の氷壁面へ打ち込んだ。今度はこれに全体重をかけて振子トラバースを試みる。二度、三度と失敗したが、そのたび足の下にはサンタクルス・チコの氷河まで一〇〇〇メートル近い空間が踊った。ついにアイスバイルが氷壁の一角をひっかける。アイゼンの出ッ歯をけ込み、自分の限界に近いバランスを要求されたが、やっと立てた。無理な姿勢で何とかアイスハーケンを半分程打ち込んで一息つく。それより少し登り、まわりを切り崩して足場をつくる。そこは一日

中陽の射さない所で、雪質がまた一変してフワフワの粉雪となる。西郡がトップになるといつも悪い雪になるようだ。まるで塹壕を掘るように雪をかき分け、二ピッチでついに傾斜が落ち頂上の一角へたどりついた。

頂上はゆるいドーム状で、陽光がさんさんと降りそそぎ、雪面がまぶしく輝いていた。ひげ面の西郡と思わず顔を見合わせ、快心の笑みを浮かべる。コンティニュアスでなおも登ると真の頂上はもう少し先にあった。頂稜より四、五メートル北稜寄りの、鼻のように尖ったピークが真の頂上だった。西郡が頂上へむかう。なおも雪が深く、彼の蹴りあげる雪の飛沫が美しい。十二時四十五分、とうとう頂上に立つ。西郡が大きく振る日章旗とペルーの国旗、そして長野県山岳協会旗が、抜けるように青いアンデスの空に、へんぽんとひるがえった。その時、仲間の共同作業の頂点に自分たちがいることを強く感じた。そして仲間の一人一人に「おい！　よくやったな」と声をかけたかった。東の方にはプカヒルカ・グループ、アルパマヨと今まで日本人が獲得した素晴らしいピークが横たわっていた。まもなく林、小林が頂稜に顔を出す。ペルー式に肩を抱きあって祝福しあう。残念なことにトランシーバーが故障して、登頂のよろこびをC1の浜さんやBCの隊長、副隊長に伝えられない。

頂上に二時間余り滞在して、長い長い下降に移る。登る時以上に神経をすりへらす。西壁にかかってからは日がとっぷりとくれ、フィックスド・ロープにビレーしては一気に懸垂で下降する。一時も早く横になりたかった。C2へころがり込むようにして戻ったのは、ちょうど九時だった。」

登頂は終わった。二十六日にはC2を撤収、翌二十七日全員無事BCへ集結した。隊長は登頂したことよりも全員無事に顔を揃えたことに、手ばなしで感激していた。下山準備の間に小松、浜田、山田はサンタクルス・ノルテ北尾根の端にある美しい双耳峰に初登頂してネバド・ビスカーチャ（Biscacha 五三〇〇メートル）と名付ける。野兎のことだ。

マッキンリー山　南壁中央稜（一九六七年）

――カシン・ルート登攀――

佐々木孝雄

はじめに

昭和三十九年十二月から四十年初頭にかけて、われわれは日高山脈の南、楽古岳から北、芽室岳に到るおおよそ一二〇キロメートルの日高山脈の全山縦走を、何等の支障もなく無事終了することが出来た。北海道の山がヒマラヤに通ずることを念頭に歩んで来たわれわれにとって、国外のより困難な、より美しい山が一層身近かなものに感ぜられたのは当然であった。

この時点において、われわれのヒマラヤ委員会は、未踏の峰を模索して会を重ねていたが、折柄のネパールの入山禁止令によって、ヒマラヤ領域への計画は一応頓座の形となり、委員会の検討内容は目標地域の変更という予期しない方向へ発展していった。そして、北海道の冬山においては欠かすことの出来ないスキー技術にいささかの自信を持

ち、北辺の生活から必然的に獲得することの出来た寒冷への順応性等も考慮に入れた結果、われわれの前にマッキンリーがクローズアップされて来たのであった。謂われる所の亜北極の気象圏におけるわれわれの体力の限界、氷河上のスキーの有効性等がわれわれにとっての第一の関心事であった。

マッキンリーの南面は、巨大な一枚の壁のような威圧的な風貌を持っている。その南壁の中で、一九六一年、カシンによって開拓された中央稜、通称カシン・ルートに、われわれの目は吸着された。アプローチとしての未踏の上部北東カヒルトナ氷河、さらにその上部の氷と岩の稜線の登攀が、第二のそして最大の関心事であったことは云うをまたない。

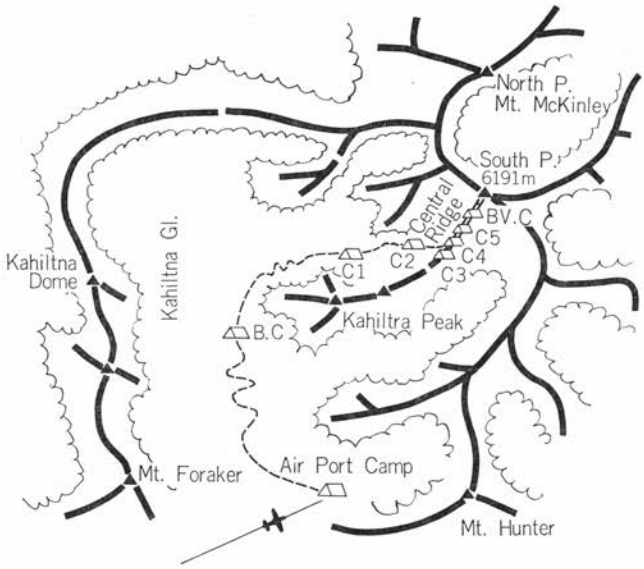
かくして、本山行は北海道山岳連盟の初の海外遠征として、スタートしたのであった。

隊員構成は左記の如くである。

隊長	佐々木孝雄	(38歳)	国立札幌病院
副隊長	計良幸作	(34歳)	北海道庁
隊員	川越昭夫	(29歳)	北海道新聞社
	秋元喜孝	(24歳)	自家営業
	宿院昌宏	(26歳)	北海道新聞社
	平川浩一	(29歳)	北海道電気通信局
	山中司	(28歳)	北海道警察本部
	氏家英紀	(24歳)	自家営業

南壁中央稜

マッキンリー山はアラスカ州のほぼ中央部、北緯六三度西経一五一度に位置する北米大陸の最高峯（六一九二メー



トル）である。初登頂は一九一三年、スタック神父等四名の隊によってカーステンツ稜（北東稜）から行なわれた。その後多くの隊が頂稜に足跡を残したが、何れも北面からの各ルートであり、一九五一年、ウォッシュバーンによって西稜が開拓されて以来、ようやく南面が注目をあびるようになったのである。わが国の登山界からも、一九六〇年、明治大学及び早稲田大学が西稜及びそのバリエーション・ルートから、所期の目的を達したことは記憶にあたらしい。南面の初登は一九五九年、ブライテンバッハ等によって、ウェスタン・リブを経由して行なわれ、さらに一九六一年、カシンによって直接最高点の肩、カヒルトナ・ホーンにつき上げる中央稜がトレースされ、南壁の持つスケールと登攀の困難性が紹介されることになった。

南壁中央稜は通称カシン・ルートと呼ばれ、カヒルトナ・ノッチ（カヒルトナ・ピークと前述カヒルトナ・ホーンを結ぶ稜線の最低鞍部）からカヒルトナ・ホーンまで高距二五〇〇メートル、平均斜度四〇度以上に及ぶ氷と岩のミックスされた稜線である。上部約四〇〇メートルは一部の岩稜を除いてややゆるやかな雪稜であるが、下部は氷

壁、アイス・クーロアール、雪田、岩壁のミックスで、登攀は総じて氷壁技術が要点となる。カシンの報告には、隊員の一人カナリが足の凍傷のために、一層困難な登下降を行なったと述べられている。

マッキンリー国立公園まで

四月十六日　先発隊四名船便で横浜発。

四月二十四日　本隊四名空路羽田発。同日、両隊アンカレッヂ着。

四月二十六日　トラック、乗用車等でタルキートナに向かう。約三時間で到着。即刻、全隊員及び若干の物資が、ダン・シェルダンのセスナ機で南東カヒルトナ氷河に空輸された。航空機は国立公園内の発着が許されず、境界線ぎりぎりの地点であった。

四月二十七日から二十九日まで降雪。

四月三十日　全物資が南東カヒルトナ氷河に集結完了。

登攀日誌

四月三十日　快晴。全員でベース・キャンプ建設に出発する。南東カヒルトナ氷河の着陸点キャンプから一旦カヒルトナ氷河本流に下り、約八キロメートル上部への荷上げである。カヒルトナ氷河は、スキーをはいて足首あるいはそれ以上の新雪をかぶり、ラッセルをしながら進む。氷河の幅は約二キロメートル、広大な雪原の感じである。中間付近にクレバス帯が続いて、左右に大きく迂回する。二七〇〇メートル地点にデポーする。

五月一日、二日、快晴。全員で荷上げをし、二日は隊長他三名でベース・キャンプを建設する。

五月三日。快晴。隊長他三名は北東カヒルトナ氷河偵察に出発。氷河出合付近は巨大な氷河の押し出しとクレバス

でふさがっており、西稜側を迂回して北東カヒルトナ氷河に入る。大小のクレバスを左右に小さく迂回した後、ウェスタン・リブに接近して帰幕する。

五月四日。晴。昨日のスプールをたどりウェスタン・リブの基部に達した。この部分は左右から両岸がせばまり、氷河一ぱいに巨大なクレバス帯を形成している。スキーをデポーしてクレバスの底部に下り、また登りかえすこと数回、迷路のようなルートをたどってクレバス帯を抜け切った。

五月五日。曇ときどき晴。着陸点キャンプからは三日、四日とも荷上げが続いていたが、ベース・キャンプからも応援に下り、全隊員と必要物資がベース・キャンプに集結を完了する。

五月六日。快晴。不思議なほど好天が続く。疲労回復と装備点検のために停滞する。

五月七日。快晴。昨日までのトレースを通って荷上げ、ウェスタン・リブ基部のコブ状地形にC1を建設する（三三〇〇メートル）。この地点は丁度クレバス帯の上部で雪崩の心配がない絶好の場所であった。ただ小さいクレバスが周囲にあり、テントの付近にロープを張って注意した。川越、秋元はC1泊り。

五月八日。晴れたり曇ったり。C1の川越、秋元はカヒルトナ・ノッチに到達すべく、北東氷河の最大のクレバス帯の突破にかかる。四日に途中まで作ったルートをたどり、ウェスタン・リブの上部を、小さいクレバスに悩まされながらもノッチの真下約五〇メートルに達して、格好のテントサイトを見つける。他の六名はC1への荷上げ。

五月九日。晴れたり曇ったり。C1の二名はC2予定地上部の中央稜取付点に到達、登攀具を身につけ、中央稜側壁にあるアイス・クーロアール下部の氷壁に取付いてみた。計良、氏家はC2まで登って来てC1入り（ノッチ下で高度三八〇〇メートル）。他の四名は昨日に続きC1への荷上げ。

五月十日。晴。とにかくC2を完備しなければ中央稜攻略は無理との判断で、C1の四名はクレバス帯を一日二度荷上げしてC2入り、BCの四名は依然としてC1への荷上げ。彼らも今日は二度荷上げした。

五月十一日。快晴。C2の川越、氏家は中央稜攻撃のためアイス・クーロアールに向かう。本格的な氷壁との闘いである。九日に一ピッチ・フィックスしたのに続き、斜度約六〇度の極度に硬い氷壁を三ピッチ登る。ピッケルのブレードでは受けつけないような氷、平型のアイスハーケンでは入ってゆかないため、コの字型のハーケンしか頼れなかった。勿論スクリュー型ハーケンは氷が乾燥しすぎていて効き目がない。氷壁を突破してアイス・クーロアールの中を六ピッチ。もはや夕暮であった。丁度クーロアールの中間にアイスフォールがあり、その下で引き返す。帰りぎわにアイスフォール付近にフィックスド・ロープを発見、びっくりしたが、ハーケンや残したカラビナで六年前のイタリア隊のものであることがわかる。彼らはノッチ上部の岩壁を左に捲き、このクーロアールに一度降りてから上部に登り返したらしい。帰りの懸垂は夕暗からとうとう月夜となり、C2へ夜の十時に着く。他はC1、C2の荷上げとBC—C1への荷上げ。

五月十二日。C2の川越、氏家は再度アイス・クーロアールの突破に向かい、アイスフォールから氷の中にみえ隠れするカシンのフィックスド・ロープをたどり、下部から十六ピッチ目に待望の中央稜に飛び出る。出たところではからずもカシン隊C1の跡にぶつかる。テント、コンロその他なかば氷の中に埋れて雑然と残っていた。帰りの懸垂はまたまた夜間下降となり、C2着夜の十二時。他の者は昨日と同じ荷上げ、計良、秋元はC1へ下り、かわりに宿院、山中がC2入り。

五月十三日。晴。川越、氏家は休養をかねC1へ戻る。途中C1を撤収してC2入りする隊長達と合流、引き返しC2を完備する。宿院、山中は氷壁に取りつき軽いトレーニング、夕刻から作戦会議を開き、明日からいよいよ南壁中央稜総攻撃を行ない、C3をイタリア隊跡に作ることを決めた。C3入りは川越、秋元となる予定。

五月十四日。ガス。降雪。停滞。

五月十五日。前日にひき続き降雪で停滞。久しぶりの連休となり、各隊員は身体をもて余す。川越隊員は無類のギ

ヤンブル好き、彼は日本から紙のマージャンパイを持って来ていたので、テントの中で隊長を含めて盛んに「チー」「ポン」とやりはじめる。皮肉なことにさして上手とも思われない？宿院隊員が大勝となる。大事な登攀のことなど忘れたような、なごやかなテント生活、テントの下一〇〇メートルの雪崩の通路は、夕刻ともなると三十分おきにすさまじい音を立てて雪崩が落ちている。

十六日。一昨日からのガスも消え快晴がやって来た。いよいよ南壁攻略開始である。二日間の停滞で荷揚げの疲労も抜けた。隊長を除く七名が三パーティーに別れて問題の氷のクーロアールに取り付く。約五〇度から六〇度の氷壁を、かなりの荷を背負っての登攀は厳しいものであった。終日氷と闘ったが、秋元、川越パーティーと宿院、氏家パーティーがクーロアールを抜け切り、計良他二名のパーティーは途中の氷壁に荷をハーケンでぶらさげ敗退を余儀なくされる。一昨日からの降雪で、ルート工作班がせっかく刻んだステップもすっかり消えたのが原因であった。ともかくC3はつくることが出来、川越、秋元がC3に入った。六年前のイタリア隊が残したテントが氷の中に埋まっているが、取除くのも面倒なので、その上に張ることにした。狭いテラスにハーケンで固定されたC3の中では、やがて景気の良いコンロの音が聞こえ出した。

十七日。C3の川越、秋元は昨日のクーロアールに再度降り、途中残した荷物を上げるのに午前中を費やす。C2からの荷揚げも今日は順調で昼にはC3に着いた。狭いC3のテントの前でアラスカの山々を眺めながら昼食、川越、秋元パーティーは上部のルート工作、荷揚げ班は昨日の残り荷を取りにクーロアールを降り出す。ルート工作班は時々氷の中から現れるイタリア隊のフィックスド・ロープに導かれるように五ピッチ、チムニーを抜け青氷を刻んで上部のスノーリッジに達した。スノーリッジは丁度馬乗りが出来る細さで上部雪田へと続いている模様、固定ロープを張り終えてC3へ帰る。C3付近の氷は相当硬い。アイスハーケンの不足から、長目のロックハーケンを打ち込んで使用してみたが、結構抜けてこない程であった。



マッキンリー南壁の下部
The lower part of the South buttress of Mt. McKinley (By H. Ujiie)



第2キャンプから見たカヒルトナ・ピーク
Kahiltna Peak seen from Camp 2. (By H. Ujiie)

十八日。C3の川越、秋元はC4予定地である雪田に向かって、スノーリッジの突破にあたった。荷揚げ班は今日で三回目のクーロアールの登降である。今日C3にもう一張りのテントを張ることになり、宿院、氏家がC3入り、C4予定地を見付けて帰った川越、秋元達を加えて、狭いテラスに活気がみなぎる。

十九日。C3の四名はC4の装備食糧を雪田へ荷揚げ、C2のクーロアール荷揚げ班は休息をとる。本来なら今日C3へ隊長を除く七名が入る予定であったが、C3のあるテラスは何分にも狭いのでC4設営後入ることになった。

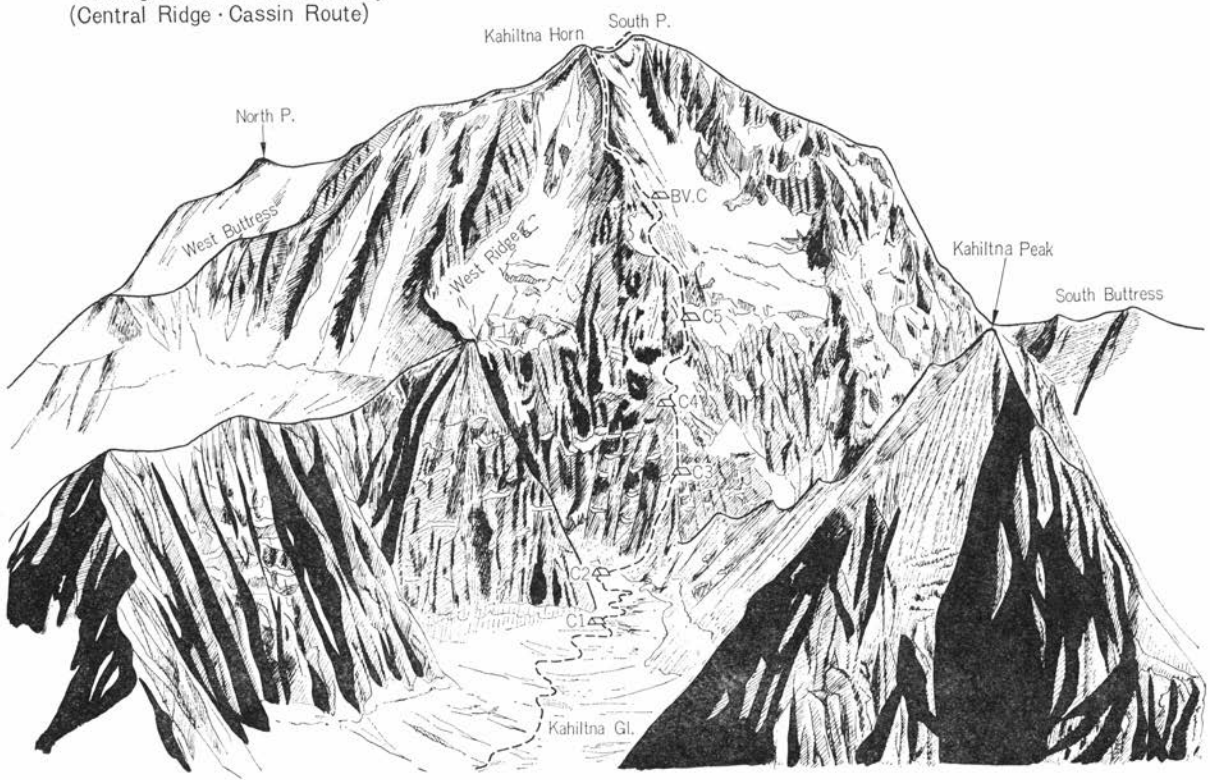
二十日。C3の四名は二十キロ以上の荷を背にスノーリッジを馬のり行進の末C4建設、さらに宿院、氏家パーティーで雪田（斜度五〇～六〇度）を約五ピッチ、ルート工作、C2からは計良、平川、山中がC3入りした。

二十一日。宿院、氏家パーティーはC4上部をルート工作、川越、秋元はC3へ荷揚げに降りる。午後C4へ二張りのテントを設営、七名も集結した。夕刻副隊長の計良から今後のアタック態勢について説明があり、川越、氏家をアタックメンバー、宿院、山中をサポートと決定、平川、秋元と計良副隊長はC5への荷揚げ班となる。各隊員に微妙な空気が流れた。誰しもが登りたいのは本音だが仕方のないことである。

二十二日。総力をあげてのC5建設、宿院、山中パーティーがルートを開き、後に五名が荷を背負って続いたが、昼頃から荒天模様となる。雪田上部に仮のテントを設営して計良他二名はC4へ戻る。他の四名は交互にルート工作に専念、吹雪の中でカッティングが行なわれた。午後五時、雪田上部の岩壁中の小さな氷の斜面まで達して引き返す。宿院、山中は仮のテントに泊り明日の前進にそなえる。川越、氏家はC4へ吹雪の雪田下降を強行した。すでにステップは消え、足元は粉雪が泡状に流れている中をひざまで埋りながら下降を続けたが、遂にルートを見失なう。

「おい氏家、雪を横切ると雪崩れるぜ。気をつけろ」、「うん、だけど全然ルートが判らないよ」二人は約五〇度の氷の斜面をそれでも降った。川越隊員は何度か上部の仮のテントに引き返すことを考えたが、明日の行動が狂うことと何とかなりそうだと思う気持に勝てずに下降を続けた。「おーい川さん、何か標識のようなものが見える！」「どれど

Climbing Route to Mt. McKinley
(Central Ridge · Cassin Route)



れ、何も見えないぜ」「そうすると俺の幻覚だろうか？」「おいおいよせよ、おどかすなよ」やがてガスの切間から、かすかにルートマーカーが見えた時は助かった思いであった。C4に着いた二人は互いに顔を見合わせて言い合った。「お前と結ぶと、いつも危い目に合うな」。

二十三日。今日こそC5を建設しないと残りの食糧が少ない。宿院と山中は昨日の上部へとフィックスを伸ばす。C4の五名は必要装備を全て持ってその後を追った。午後三時、期待の宿院パーティーは昨日より三ピッチしか進んでいない。相当難しい岩壁（カシンは五級と言っている）に阻まれている。高度四七〇〇メートル、荷揚げ班の計良他三名はC4へ下降、川越、氏家は約四〇度の氷の斜面を切り開いてテントサイト作りを始めた。副隊長は「おい川越、俺たちはこれで降るが、後はお前に任せる」「はい、何とかやってみます」、「いや頑張ってくれよ」「おお」荷揚げの三名は空身の体を懸垂で降っていった。宿院、山中パーティーは岩壁を突破してその上部へと進んでいる。川越と氏家は急に淋しくなった気持でテントサイト作りを続けている。約二時間、どうやらテントと同じ広さの平面を作りあげた。しかしテントを張る時の荷物の置場がない。またまた荷物置場作りが始まった。そのうち氏家が「やった！」「どうした」「ピッケルが……」、氏家のピッケルが折れてしまったのだ。こんなところでピッケルが折れては大変なこと、しかし予備のピッケルはC2にあるのみで補給は無理である。氏家はしばらく折れたピッケルを手に呆然となっている。「なんとかなるさ、仕方がない。」川越隊員は言った。「それよりテントを張らなくては」考えた末まず荷物をテントの中に入れてから支柱を立てて張り綱を張ることにした。狭い場所である。フィックスに頼りながらどうにか張り終えた。その気になればテントはどこでも張れるものである。やがて宿院、山中の二人も真白になってテントに転げ込んで来た。彼らの話によるとイタリア隊最終テントは、この上約十ピッチ程であるそうだ。四人相談の末、これ以上テントを揚げるよりここから一気にアタックに出た方が早い、せいぜい二晩のビバークで帰ってこられる、と言うことになり、その旨C2の隊長に無線連絡する。幸いC2—C5間は良く連絡がとれた。然しC4は壁の影響

で聞こえなかった。いよいよ明日はアタックと決まる。

二十四日。皮肉にも吹雪、連日の疲れもあるので停滞とする。食糧がぎりぎりなので終日横になっていた。小さい雪崩はテントの両脇を走っているが、どうやらここは無事な様子、夕刻からガスが切れて好天のきざしとなる。

二十五日。午前一時起床、狭いテント内で一人ずつアタックの用意、初めの計画を変更して二名ずつ二組でアタックに向かうことにする。その方が担荷力も増えるからであった。午前四時半宿院、山中パーティーがC5を飛び出し凍てつく中を登り始めた。午前六時、悪い岩壁を登り終え、C2の隊長に連絡。「隊長々々アタックに向かっている、非常に寒い」「おー頑張れ、薬は飲んだか?」薬とは凍傷予防の薬のことである。やがて数ピッチの易しい雪の斜面と二ピッチの難しい岩を抜けると広い雪の稜線に出た。その上部にイタリア隊の最終テント跡が六年もの間そのまま残っているのが見られた。ここまで来ると稜線と言うより南壁の中と言った感じ。高度五二〇〇メートル。午前十時、今は太陽の光を浴びて春ののどかなアラスカの山山を眺めることが出来た。しかし目前の巨大な岩壁の突破でわれわれの気は重い。川越トップで登り始めたが、浮石をかかえて約二十メートルスリップ、はっとする場面もあった。ここで若い氏家がトップ、左手へトラバースしてイタリア隊の二ピッチの氷のクーロアールに入る。難度五級、悪戦の末突破、小さい雪田に出て休憩、午後二時であった。さらに上部に大きな岩壁、さんざん迷った末、左手の雪のクーロアールを見つけイタリア隊の跡をたどった。アラスカの夕日は横に走りなかなか沈まない。すなわち白夜である。午後八時、雪のクーロアールを抜けて大きな雪田に出る。高度五五〇〇メートル、今日はここでビバークとする。素晴らしい雲海がわれわれの足下に広がる。羽毛服のみのビバーク。

二十六日。疲れのためか良く眠れた。午前四時、ツェルトの外は春の陽光がまぶしい。朝食の時、宿院が突然吐き気を訴える。高山病であった。やむなく山中を付添いに残して川越、氏家は頂上に向かった。宿院達も回復したら後を追うことにした。氏家は折れたピッケルの頭と七〇センチメートルのスノーバーを手にしている。キックステップ

で進める雪田のトラバースを終え、高度差四〇〇メートルの雪の大きなクーロアールを直登して、はっきりとした中央稜に出ることが出来た。午後二時、約六〇〇〇メートル付近から再び雪は硬くなりカッティングをしながら進む。二人は高度の影響に悩まされながらじりじりと南壁上部に迫った。最後に軽い岩場を四ピッチで南壁から解放された。午後五時四十分、C2の隊長に連絡、「隊長、今南壁を抜けた。これから頂上に向かう。苦しいのであまり話しが出来ない……」。あとはだらだらの広い稜線の登りである。然し二人の足はふらつきだし、夢遊病者のような歩き方である。やがて大きなピークを登り、地図上カヒルトナ・ピークであることを確認。南峰頂上はそれからさらに約一キロだらだらの頂稜をたどらねばならない。もはやこれ以上進むのは時間的に無理であるし、あえて頂上を踏むこともあるまいとの判断から引き返すことに決め記念撮影をする。C2の隊長とは地形的に連絡不能。午後七時四十分下降開始、アラスカの白夜といっても春のうちは九時を過ぎると暗くなり始める。二人は夜間下降を覚悟せねばならなかった。慎重に岩場を降り、ステップを切ったところは一歩一歩スタカットで後むきに降る。高度を下げるとともに頭痛はおさまり呼吸も楽になった。ようやく前向きでコンティニュアスで降りられるところで暗やみが迫って来た。でも完全に暗くはならず、ぼんやりと足元が見える程度、途中二回の懸垂は手さぐりでハーケンを打つ。ビバーク地に着いたのは翌二十七日午前一時であった。ツェルトの中にはようやく回復した宿院と山中が二人の帰りの遅いのを心配して待っていた。「おー登って来たぞ」「よかった。心配していたんだ。今ラーメンを作るから」、すでに左手の空は朝の明るさになり始めたが、太陽が出るまで仮眠。

二十七日。快晴。隊長に登り終えたことを連絡、下降に移る。何十回かの懸垂、途中軽いスリップをしたり宿院が落石で頭を負傷したが、どうやら午後三時、計良副隊長の待つC5に着く。アタックに向かってから約六十時間の強行であった。C5の装備はほとんど撤収され、そのままC4へ懸垂を続ける。C4には秋元、平川が待っていた。川越、氏家は精根つき果てたように彼らに抱かれる。ようやく安定した平らな所、腰を安心しておろせる所、それは素

晴しい場所であった。

二十八日。快晴。さあ、安全な氷河へ向かって最後の下降である。幸いC4から少し出た所からC2に向かって物資を投下すると無事下に着くことがわかり、丈夫なものは全て投下する。下の隊長は今日は大童であった。お蔭で上の七名はサブザックで快適な懸垂下降、午後四時、隊長の暖かい手と握手した。

二十九日。曇。C2を撤収して一気にBCへ。途中から快適なスキー滑降。

三十日。曇り。BCを撤収してエアーポートである南東カヒルトナ氷河へ。

三十一日―六月六日。荒天のため迎えのセスナ機が飛来せず、毎日長距離無線で下手な英語で「早く来い、早く来い」としゃべり続けた。六日の夕刻待望の銀色のシェルダン機が来る。夜を徹しての空輸で新緑のタルキートナに冬姿のまま帰って来た。

遺稿

山岳会初期の人々

＝辻本満丸君と辻村伊助君のことども＝

中村清太郎

日本の近代登山も山岳会の出来た明治三十年代の末から大正の初めにかけては、中部の脊梁をなす山や谷の目ぼしいのはあらかた登りつくされ、極め果たされた時期であるが、世間はいっこう山には無関心で「山きちがい」と嘲けるぐらいがせいぜい、それを平気で構わず、好きな山に身も心も打込んで行った人々。私には少年期から学生時代の古い話で忘れてしまった事も多いが、覚えている限りよくよく感銘の深かった証左で、ここに書こうとする人たちなど中々立派な人物であって、今日では登山家という言葉もずいぶん乱用されているようで私などあまり好かないけれど、ほんとうにそれに値いするような人もいるように思う。そのいい例の一人が……

辻本満丸

辻本氏は当時工学士の役人で、無口で重厚、しかし山男といった頑丈なタイプでなく、研究室の学究らしい人柄で

専門は油脂化学。三十そこそこで私とは一と桁以上も違うが、ひどく老成に見え、笑うと頬に皺が寄って苦味があり、山の話になると白い歯を見せて愛敬が出るがそれは例外に近い。農商務省の工業試験所に勤め、休暇に好きな山に入る。私が初めてこの人に会ったのもそういう山行の途上で、互に全くの全くの生面、行きずりの登山行旅でのこと。たしか明治四十年の夏。今ならともかく、当時山中でのそうした場面はむしろ稀。信州白骨から乗鞍への登山路の峠道であった。私共は中学での同窓四人、それに白骨で同行者となった陸軍戸山学校教官と案内者の六人。向うは辻本氏と同行者に案内の三人。追いついた私共に小径を譲ってくれる。大分荷が多い。私どもは丁寧に挨拶して追い越した。これが長い尾をひく付合いの最初とは知るよしもない。

怪しかった空は霧から雨となり、小径も高山植物も洗い上げられ、大雪田と乱立の岩塊は濛々と烟って風さえ加わり、荒れ模様となって頂上のお助け小屋は虫の巣か難破船の態で入ることも休むこともならず、ビショ濡れで薄着な案内者など慄えたまま嶺伝いに鶴ガ池まで辿りついたが、道が分らぬと心細い案内の話で白骨へ戻りたいという。平湯へ出て上河内(かみこうち)から槍を志す血気の私たちはそれを許さず、教官氏も「道を探せエッ」と号令をかけるがここでは通らぬ。案内もあきらめて平金(ひらがね)なら行けるというのでそこへ下ることに決め、絶頂は再挙にゆずり池の上の鞍部を西に越えて、道も無い岩間に濡れ伏す高根の花、雨しとどの偃松、七かまど、岩場にしぶく飛瀑一条、倒木縦横の森林帯で日を暮らし、夜の難行をつづけて辛くも平金に到着。次の日平湯峠を越して平湯泊り。そこから昼なお暗い安房峠を越えて、烟を吐く焼岳の山腹を横切って上河内に入った。

梓川の碧流を挟んで、桂、唐桧、から松、白樺などが亭々、その梢を圧して残雪を懸けた奥穂、前穂、西穂、霞沢の峯々に囲まれた、この世の外の河内の景観は感にたえた。只一軒の温泉宿は梓川に臨みまだ村営の時代、帳場に槍ガ岳登山の希望を話すと、折りよく数人の客が明日登山の筈ゆえ一緒にと案内も用意された。この中に、あの乗鞍道で出会った辻本氏も居たのだが、まだ名のり合って話を交わすまでには至らず、ただ偶然の同行登山の仲間に過ぎな

かった。

槍ガ岳さして出かけた朝は快よく晴れて、雪に輝く穂高を目近く仰ぎつつ、その雪解けの水をしぼる岳川が本流に落ちて一曲する所に、両岸から手斧削りの巨材を差し出してへの字に突き合わせたセリ持ちに、奔湍に架け渡した河童橋のその昔の木橋を渡って徳本峠道へ。直下に展ける梓川原へ降りて、左岸から右岸へ、また左岸へと、往ったり来たり幾回となく徒渉をくり返す。雪解けの谷水は痺れるまでに清冷なのがやがて熱い湯気を吐く。辻本さんたちは写真機らしい荷が多く、徒渉には苦しんで遅れがちだ。

赤沢の岩小屋は早や暮近く、もう一息で坊主小屋（これも岩窟）だからと案内の言うまま雪渓を踏んで登るうち、西岳の下あたりで谷は大喰（おおばみ）の方へ分かれているのを槍沢のつもりで登ったらしく、坊主（播隆上人参篭の跡）はまだかと松明（たいまつ）をかざして物色するが、それらしいものは見つからぬ。変だと気付いた時はもうだいぶ大喰の高みへ登りこんで居たわけで、坊主とは縁のない方角違いなのだ。そこらが雪を離れて岩屑と草と偃松の緩斜面なのを幸い、離れ散った一行をそこへ呼び集めて一夜を明かすことになった。

いかにも寒いが天気のいいのは仕合わせで、もし降られたら大事だったろう。かけ出しの案内者と言うより経験の浅い荷持ちに過ぎず、山中で仕事をして居ても、こういう高みへ来ると杣では駄目でやはり猟師でないと役に立たぬことは段々と分かった。焚火を囲んでどうにか乏しい食事をとり、めいめいそこらの岩間草間に腰を伸ばして多少の談笑も起り、私も友と持参の甘味など含んで、寝るともつかぬうたた寝に、この山上絶境の短か夜を送った。

オオバミとは山上の広い草付を意味し、草食動物が草を食（は）みに好んで集る所、猟師の狩場でもある。夜行性の獣の徘徊も多いので、彼らは何処かでこの侵入者どもに目を光らし、持前の好奇心を満足させたかもしれぬ。兎、カモシカ、オコジョ、熊…と人間—それも害意の見えぬ裸の群れ—それは彼らにとって近年の珍らしい見もの…。

山上の夜気はいち早くばらと紫の天界の秘色に明け放たれる。人間の夢のなごりも、その光りと熱に刺し貫かれ

て、私どもも辻本さん達もモゾモゾ五体に生気を蘇えらせる。槍よいずこ?…岩と草と偃松の斜面に足場を見付けて北へ北へとからみ進むと、尾根の岩蔭から鞘を払った瑞みずしくも光り滴たる大槍の矛先が、ギラリと目の前に衝立った…。

歓喜は声になる前に先ず胸に填まって眼を見張らせたが、一行の歓呼も次ぎ次ぎと慎ましく、岩ヒバリの朝の讃歌に和して起った。だが槍の穂は額を圧して近いのに、そこに達するのはそうたやすくは行かぬ。槍沢の最奥のカールの雪へ、この岩尾根の壁から移らねばならず、そこの岩壁に殺生(せっしょう)の岩小屋があった。殺生は猟の意で、猟師の定宿だ。入口は岩の小さな隙間だが中はやや広く、二、三人なら泊れそうだけれど、馴れぬ者には暗く鬱陶しくて、今にも岩が口を閉じるかと居たたまれぬ。そこへゆくとずっと下手にある坊主の岩窟—誤まって大バミへ登ったため通り越した—は幾つかの大岩が寄り集まった形で、天井から陽も雨も洩れるだけに、この陰気さは無い。

播隆上人はこの岩屋を天与の庵室と感得して度重なる参篭を遂げ、ここを本拠として、自ら資材や自家独創の梯子を負って幾度となく槍の穂に攀じ、その巌壁に梯子を懸け、絶顛に仏祠を祀ってその宿願を果たしたのである。上人はもとより猟人のたぐいでなく、善心の使徒、岩、雪、花、鳥、そして空、風、雨、雲、日月、星辰の相関と引接の絶涯境を悦び歎じてここに安住の年月を重ねたので、上人と出会う熊も鹿も猛禽もその善心と害意無きことを感知して、楽園の点景となったであろうことを疑わない。もとより上人は麓の信徒から従者を選び薪水の労を分担せしめ、王侯も及ばぬ山中の生活と伝えられるが、俗世ならぬ善心円満の世界におけるそれにふさわしい朝夕であったに相違ない。

あの奈良朝以降、藤原、鎌倉の中世に作られた浄土変相、弥陀聖衆来迎、あるいは山越弥陀の図像に見られるような、護法善神、念仏行者の超俗生活をさながらに見る観がある。上人の見た三尊来迎のイメージが、実はエルモの火やブロッケンの物理現象に過ぎぬなど、したり顔に指摘する輩があれば、それは自己の精神的不具を暴露する外の何ものでもないことを知らぬ者であろう。

話が迷路に入ったが、私たちは殺生から岩と雪と偃松の間を、どうやら槍の穂の中ほど、西南の肩先まで這い上がった。そこから播隆和上が手本を示した切立ての大巌や巌の挟間の梯子の名残りを頼って、巌の隙間に開いた窓から足下の下界が映って胸を躍らせ、槍の穂先最後の巌頭を四つ足姿で漸く攀じ登り、乗り越えて、そこに天外に孤立する槍ガ岳の尖端、僅かに数畳の不規則な長方形の岩壇上に踞坐することを得た。感慨は無量かつ無限、そして不覚に渋る眼を見張って、北の峯頭に危うく建てられた、暴れた木のそそくれて白光る小祠を拝した。その上下四方に波打つ雲海の天地に瞳を放って、その波間に出没する小島か岩礁にも似た近山遠山の紫から藍の濃淡変幻の状を、有り難く崇め見入ったのである。ともすれば涙にくもる眼に、よくは見分けもつかなかったけれど、常念や大天井は最も近く、北の方、後立山、薬師、蓮華の諸峯、南に穂高の群峯、乗鞍、木曽山脈、東に移って白峯、赤石の電波のような峯脈、八ガ岳、浅間、戸隠と幾らか特徴を示す山々が、瞥見の間にも多少の印銘を留め得たのである。

この時の経験は、その後東京での山岳会の会合で再会を重ね、意気相投じて山を語り合う同志になってから、何かにつけて話や考えの土台になった。辻本家は雑司ガ谷で、私は当時まだ日本橋だし、よく一緒に訪ねた三枝君（一橋の同窓で威之介、後守博と改む）は早稲田、それがよく夜分に訪問して山の話に夢中になり、夜を更かしたものだ。氏は人を訪ねるより迎えるのが好きらしく、母屋と離れた書斎に山の文献や地図―といっても正確なのはまだ無く地質図の十万ぐらい―を机上に話しこむ。よく奥さんが夏みかんに砂糖をかけたのを茶うけに出された。夫君の好物らしい。年齢からも私は友達扱いは気がひけたが、三枝君は平気で、烏水氏さえ君で呼んでいて、私もつられて友達付き合いになった。

彼の話ぶりは雄弁でも放論でもなく、笑いも抑えて綿々沈々、彼の文章と同じく慎ましくまた精細、自ら文筆の人をもって任じてはいないが、行文に工まぬ雅味があり、いやしくもせぬ格調があった。文も言も共に人である。夜更け帰ろうと腰を浮かすと、辻本さんは淋しげに押しとどめ、まだいいと居直らすのがクセ。もう寝床が延べてある座

敷を抜けて帰るにも心なきわざと悔まれるが、氏は山の見果てぬ夢に現つもない。家人は「亭主の好きな赤烏帽子」と諦めていたものか。

こうした間に後立山縦断という夢の構想が生まれ育ち、具体化実行を見たのが明治四十三年の七月である。独り先発した私が戸隠裏表、黒姫、飯綱などを歩いて、明科で東京からの辻本、三枝両君と合流、馬車を大町に駆った時は期待と覚悟が胸に溢れていた。対山館に招いた遠山品衛門の次男兵三郎は、曽て辻本氏を東道して爺ガ岳に登った猟師。大出(おおいで)の遠山家で支度を整え、外に三人の荷持、一人は山見習い志願の農夫。

松蝉と郭公の声に送られて篭川入りへ。針ノ木の雪を仰いで右手扇沢に折れ、雪解けの奔流を溯って奥小沢の出合に夜営した。上手に雪渓が雲にとけ込んでいる。テントはスイス産を参考に、三枝君と工夫をこらした国産で昨年南アルプスで試用済み。環境は高深、意気は昂揚と申し分ないが、難は天候。それが思わしくなく、三日も降り篭められて出鼻を抑えられたため、短気な兵三郎は「オレは帰る」と言い出す。血の気の多い三枝君も黙っていない。穏やかならぬ空気がキャンプを包む。それを大事に至らず無事に納めたのは辻本さんの冷静と分別の功だ。兵三郎にはそうした癖があったので、それを知った辻本氏は「人を紹介するにはよほど注意しないと……」と自省していたが、私はその後の付き合いで、短気で喧嘩早いクセはあるが根は案外の気弱で親切者、その癖が同村の人々にも出るのでとかく評判がよくない。登山者の間にも同様、酒は好まず甘党で、山へ黒い玉砂糖を持ちこんで、飯よりもそれを舐めては胃を悪くしていた。金銭にも至って淡泊だ。初期の有力な案内人だった彼のため、私は大方の誤解をここに正して置く。

宿雨があがると共に人も蘇って、脚どりも軽く弾み扇沢の雪渓を登る。峯近く階段状に落差は大、ピッケルはやはりスイス製をモデルに試作させた国産創製、鐐(かんじき)は地元のだが、相俟って急斜に大いに有効、見るみる雪渓を詰める。鳶口の辻本氏は下から私共を戒める。そして草付きへ出ても鐐を脱がず、岩交りのそれは却って危いと言って

も、友人が曽て転落負傷した例をひいて肯かぬ。

こうして雪は尽き、身は爺ガ岳の西裾、種池平のお花畑に入った。偃松や白桧や潅木に囲まれた美しい楽園めく天地で、向うに黒部谷を隔てて剱、立山の連峯が出頭没頭、そちらへ落ちる谷が棒小屋沢で、ここは兵三郎たちのいう棒小屋乗越。後立山主脈上のこの優れた景観に打たれて波立つ胸に、また一つショックが来た。お花畑の花間に見馴れぬ美しい蝶が遊んでいるのだ。小形の粉蝶らしく、翅の前端が鮮やかな橙紅に染まり、裏面は淡緑の雲文で、高根の花が舞い出たかと思う。これは日本の蝶譜に入っていない種だ、となると見逃がすわけにも行かない。これこれの珍らしい蝶を見かけたというだけでは、専門家でない私の言は学問上とりあげられないに相違ない。私は中学以来蝶にはさんざん罪を重ねたが、近年それは止めた。この際、山神の許しを乞うてその禁を破ろうにも、ネットも毒瓶も用意が無い。

南でも北でも、記録の無い山や採集家の足跡の及ばぬ辺では注意を払って来たし、殊に昨年の白峯、赤石の縦断では、植物、動物、地形など何か異常なものに出会わぬとも限らぬと予想したもので、今度は猶さらそれが強かったのだが、早くもそれが現われたものか…お花畑の中で心をきめかねるまま考えあぐねた私も、漸やく意を決して…白根ニンジンの花蜜を吸う無心の蝶に、顫える手に登山帽をかざして忍び寄るなり…さッと花ごと伏せた。息が止った思い。だがネットとちがい中の様子はまるで分らぬ。帽子の縁を少しもたげて探る指先をスルリと抜けて蝶は飛び立つ…その影を目だけで追って…程遠からぬ花間にそれが入るのを見きわめるなり走り寄って…二たびそれを伏せ、慄えおののく指に拝むように蝶を挟むや、思いきって指先の力を軽くか細い小蝶の胸に加えた…蝶は動かず、私の指は不覚に躍って危うく蝶を傷めるところ…深い吐息と共に私はそこに膝を折って坐りこんだ。そして貴い宝物の如く掌に捧げた蝶を改めて見入ったが、幸い大した傷みも免れ、銀と茜に輝く可憐なむくろは、手早く折った三角紙に包まれ、小筥の中に納められた。これがもし飛翔力のある行動範囲も広いアゲハの類であったら、最初の失敗でそれきり

だったろうに。

立って私はあたりに人影もないのを知ると、急いであとを追った。種池の辺で待ちかねていた辻本さん達から「どうした」と声をかけられ、弾む息で私は手短かに宝物入手を報告した。「本当かい」と辻本氏は半信半疑、三枝君は無関心。一行は峯脈伝いに東北へ爺ガ岳の峯腹を横切って、小冷(つめた)の頭から北へ鹿島槍を指して、冷(つめた)の池畔に夜営した。むら立つ白桧の梢に立山の大連壁がカールの雪を盛り上げて夕空に大波を打上げる。途中休むなり、何か手があけば私は例の宝物を取出して改めた。胸を圧して殺した蝶は、よく息を吹き返して翅を動かし、鱗片を落して見る影もない姿になる恐れがあるからだ。それが頻繁なので辻本さん達は「虎の子」というアダ名をつけた。「虎の子」は見れば見るほど美しい。早春の田園に見るツマキ蝶に似て、あれほど細く尖らず円味をもったあけぼの色がめでたい。この行の後半で更に未知の高山蝶を一種苦心の末入手したが、帰京後それと共に師友の昆虫学者矢野宗幹氏の手で精査され、『動物学雑誌』に発表された。その際「和名は君が付け給え」と言われて感動、沈思の末「雲間褄黄蝶(くもまつまきちょう)」と命名したが、この世にも美しい高山蝶の絶品を世に出し、国産の籍を与えることに参与する、その感激と光栄は無上である。

蠹の住む冷の池畔、白桧の梢に黒部を隔てる金の空をくっきりと暮色に染める立山の峯々、ここの幕営は豪壮無比であった。この池をはじめ爺の山腹に点々つづく池沼は、岩層に形を規制された特異なもので、辻本氏はそれを図入りで後立山縦断記中に記述している。この『山岳』(編者注・第六年第一号)に載った紀行は三人の連名だが、実は辻本氏の作である。

鹿島槍への峯伝いはまた更に深奥味を増し、かつ広大な眺望を加えて後立山の中核を成すが、その要素は剱、立山の雪峰群立と白日を呑む黒部の大峡谷にある。そして峯頭の岩石と偃松、白桧の配合と、そこに遊行する雷鳥、星鴉、鷲鷹、そして特色ある鹿島槍の双頭から懸垂落下する大冷の雪渓にある。

辻本さんは好景を選んで方寸に収めんと懸命、三脚を据えてカビネ形のカメラを丁重に整備、水平器を覗いて位置の狂いを正し、黒布を被って山の範囲を決め、いざシャッターという段になって肝心の峯に雲がかかる…氏は何か呟いて雲の去るのを待つ…が、そこらを歩く拍子に不覚や三脚につまずき整備のやり直し。雲は去っても整備は終らず、さあよしとなった時は意地悪くもまた雲…舌打ちするような氏の顔…こんどは私の方が冷静で笑う番だが。

布引ノ頭から峯頂の辺で景趣は極点に達する。後年私が黒部溯行を計画した動機もここに胚胎する。我々はここから行を還して後立山南半の踏破に向った。扇沢ノ頭以南、棒小屋沢が素練をしごく黒部の谷間へ落ちてゆく。向うは壁立する劔。沢の西側の尾根に持子尾根の名が残るのは、藩政時代に木材を伐り出した名残りらしい。岩小屋沢岳から新越の小鞍部にキャンプする。白桧の疎林を圧して立山連峯の雪が輝き、偃松と花の小平地は美しく滞留を誘うが、水に遠いのが難だ。赤沢岳からスバリ岳と山脈は南に一曲して巨岩が縦横に堆積、厩窪（まやくぼ）のカールに連なって境はいよいよ幽荒。この雪に接した夜営はまた忘れ難い記憶を残したもの。

前は篭川谷のどんづまりで後ろは針ノ木岳の大岩壁、雪が豊富で飲水に不自由なく、谷のかなたには越えて来た後立山の峯々谷々、感は深く気は悠々。蒸し昇る雲が杜鵑（ほととぎす）の声を送ってくる。詩情勃然。焚火を周って炊事に働く人夫たち。私は例によって小宮の一物を取り出し、やおら宝物の点検…折から一陣の突風が巻起って、あなや！　私の手から大切な秘宝の三角紙を宙に吹上げた。恐らく私は悲痛な声をあげたらしい。だが眼は夕空に閃めき上る紙片を追って離れず…その自覚は痛いほど頭に刻まれている。同時に後ろから人声「あきらめ給え」「もう駄目だよ」なども幽かに残って消えない…。私は夕空の果てに針の頭ほどに光る一点―それが見える限り―遺像か錯覚だろうといわれてもあらがう気はない―私は見捨てない。ところがそれは消える代りに光度を増し距離を縮めてくるではないか。そして谷を指して落ちて行くのだ。私は気力をしぼってその行方に追い迫る…それが幸いにも、真に幸いにも、見失う前に傾斜に茂る偃松の繁みに留まるのを確認するや、私は急斜の岩崩れを蹴って走り下りていた…うしろの声など聞き

流して。目当ての落下点に駆け寄って、うれしや宝の紙包みが偃松の木末に支えられているのを認め得た時の感謝と祈りの念！　私はしっかとそれを拝み取りに手に挟んで、山神に崇敬の誠を捧げた。帰りは意外に遠く、カモシカの如く跳び下りた斜面が鉄の棒でも引きずるように重い。どうやら笑顔を取戻して帰った私を、みんな夕餉を控えて驚き顔に迎えてくれた。私の顔と手を等分に見守りつつ「虎の子は無事かい」「驚いたよ」「駄目かと思ったねえ」「よかったナァ…」など奇蹟的な結果を喜んでくれたが、私には一抹の寂しさもないではなかった。

ここから針ノ木岳の頂上を極めたのを最後に後立山の行を終り、辻本さんは休暇明けで人夫一人を供に大町に下るので、針ノ木峠のみねで互いに別れの言葉を交わす。辻本さんは兵三郎を傍に呼んで纒頭を与え、何かしばらく話していた。恐らく自分が抜けた後半の東道を無事果たして私共を上河内まで守り届けるよう訓したものかと思う。かくて一行は二手に別れ、辻本さんは峠の雪渓を東に、われらは黒部の谷間さして西へ。

紫丁場から流水と共に五色、赤牛の黒部上流の空を望みつつ黒部川へ下る。山榛の巨樹が岩間に大幹を仁王立ち。かの北越の勇将佐々成政が雪の更々越から針ノ木峠を抜け関東への軍旅を進めた戦国の昔をしのぶ、信飛越を貫く高山々中の連絡路に当たるところ。われわれは黒部を渡って気を新たにし、第二段階の立山々脈に踏み入るのだ。黒部川の中流に当たるここは篭渡しがあり、少し開けた河原の岩から岩へ掛け渡した綱に、結んだもっこ形の坐席があって、それを手繰って白波をあげる激湍を越えるのだ。脚元に渦を巻き水烟りを噴く奔流を綱にすがって飛沫を浴びつつ乗り越えるのはスリルがある。渡れば平の小屋で品衛門らの定宿。魚の燻り香が満ち、ベンケイに刺した山の魚が一ぱい。この時も彼が漁に入って居て、私たちはその釣りを見物した。手拭鉢巻した五十がらみのヤセ形で、腰にビク、タモを片手に、自然木らしい竿を急湍に打込んでは流して奇術のように光る獲物を揚げてゆく。

翌る日苅安峠からザラ峠へ、立山の南端、鬼ガ岳の裾から南へ展開する五色ガ原へ出る。ここは品衛門から初めて聞いて強く牽かれ、想像を馳せたが、来て見ると、予想も及ばぬ素晴らしさ。広い雪田、湛える潴水、花の床を横切



赤石岳山頂での記念写真（明治42年７月27日）
前列左端は高頭式氏、その右が小島烏水氏、右端が高野鷹蔵氏、後列左から２人目が中村清太郎氏（撮影は三枝威之助氏）
This picture shows the famous ascent of Mt. Akaishi (3120m) in the Southern Japanese Alps by the late Usui Kojima's party of J.A.C. on July 27, 1909

り囲む偃松、白桧の矮林、それを周って立山、薬師、赤牛、烏帽子、黒岳、針ノ木など黒部源頭の峯々が雪をおびて輝き、見下ろす飛越の群嶺、遠く白山。残雪の洞門から冷たい水煙りと水流を吐く…。ここの幕営は後立山でも味えなかった超絶の神仙境の趣きであった。

ここから南へ峯を幾つか越えて、急に細るヤセ尾根で薬師に接する辺は、前から疑問のあった処で、遠望では切れているとも見える。そこへさしかかって意外な変事が起った。大町から山見習いの志願で加わった農夫が、一行の列から忽ねんと姿を消したのだ。それに気付いて黒部の急崖を覗くと、偃松などの茂みの下に残雪、そこに黒影一つ。呼んでも答えはない、それは熊だった。折りが折りとてショックだ。兵三郎たち二人が急いで捜しに降りる。私たちはそのアトを覗いて懸念の中にしらせを待つ。急斜の死角に入って何も見えないが、最悪の結果さえ覚悟した。程経て声があり、まず吉報、負傷したが大した事でなく、只貴重な食物を失い、辻本氏に託された役所のバロメーターが壊れた…という。人命に比べたら軽い程度で胸を撫でる。どうやら歩いて上って来た彼は、ショゲてはいたが、もともと呑気な男で、罪のないホラ吹きといったタチだから責める気にもなれぬ。幸い補充の食糧が飛騨から薬師に近い側師（がわし）の小屋まで上げてあり、それを持って帰れといったが、上河内まで付いて行きたいと懇願する。彼は後年かなり名のあるガイドになって、山で出会うこともあったが、このアクシデントは当時の私の紀行にはわざと書かずに置いた。

その夜は手近の尾根の一角に泊って薬師に登って行ったが、長大な岩の稜線で又も未見の高山蝶に出合い、苦心の末辛くも入手、今度も物笑いの種になったが、「虎の子二世」。蛇の目蝶の一種。これも前のクモマツマキ蝶と共に矢野氏に依って『動物学雑誌』に発表された。タカネヒカゲである。

薬師岳は元来信仰の山で、山麓の信者は絶頂に木造の祠堂を建て、銅製の鰐口を飾っている。越中の名山の一つだ。辻本さんは有峰の由緒ある山村（後に水力発電のダムのため廃墟となる）を経て常願寺の源流、真川（まがわ）から太郎兵

衛平を通って登頂を果たし、南の上ノ岳まで偃松の海に苦しんで極めている。『山岳』（編者注・第五年一号）に発表したこの山の記文は辻本氏の代表作と言ってよく、単なる高峯の記述に留まらず、先ず芦峅の泉蔵坊で山谷の清気に浸り、所蔵の開山以来の古書画（地獄極楽図など）を鑑賞して心気を養い、有峰の平家伝説の由縁、郷社の祠堂に祀られている木彫の古雅掬すべき甘狗駒狗などを、得意の写真を入れ、伝説、民俗など自然の外に広い視野から山を眺めた深味のある記文を残している。甲斐の鳳凰山でホウオウシャジンを発見したり、安曇の爺ガ岳峯頭に現われる雪形口碑「種蒔き爺さん」をいち早く紹介するなど自然科学から民俗、伝承と厚味のある教養を持った明治人らしい愛山家の好典型である。私などその雪形口碑に刺激されて、後に木曽御岳の種蒔爺、大蓮華連山の三人の種蒔爺さん、白馬岳の「代馬（しろうま）」、白馬鑓の鶴と双鶏などの雪形を発掘紹介するに至った先蹤者に当たる。辻本氏とは山岳会の会合でよく相会したが、当時貴族院翰長で漸やく民俗研究の蘊蓄を提げて世に問うに至った柳田国男先生もよく山岳会で講演を試み、その西欧文学、文化の素地を踏んで、よく民俗学始祖の業に打込まれた先生の話に私など耳を傾けて聞き入ったものだ。

辻本さんは小島烏水氏ほどの逸話の持主ではないが、義太夫の愛好者であったことは知る人が少ないかもしれない。本郷の席亭などによく出かけられたようだ。私が例の書斎の会合で、近松の戯曲で見つけた「ひし」という文字を持出し、それが窮迫とか危難とかいうような意味らしく、五竜の別名割菱や八方の黒菱などの名称の由来に関係ありはせぬかと述べると、氏は沈吟の末「私はどうもそういう事を知らないので困る…」と自省される態には感服した。それと大へんな雷嫌いなこと。これは山行中にも経験したが、遠雷でも頭を抱えて蹲まってしまう。テントの中では蹲まったまま焚火の烟にむせ、「アヽイカン」とか何とか絶えず呟くので、鼻汁と涙とが合体し、はたで見ても苦しそうだ。一度奥さんにそれを話しておうちではときくと「そりゃ大へんなんですよ、押入れに引込んでカヤを被ってしまいます…」という。科学者だから稲光りと雷鳴との時間の差で近いか遠いかは分る筈と思うのに、遠雷でも

途端に落つきを失ってしまうのは市井人と変りがないらしい。だから山の雷のアクシデントに関しては、世界的な知識を持っていたようである。

辻村伊助

辻村伊助君も異色ある山の愛好家で、この人は大へんな文学好きだし、自作の短歌も数多くある。農学士で太郎さんの従兄、共に日本氷河の提唱者山崎直方さんの教えをうけ、太郎さんはそれを花咲かせた出藍の学者に成長したが、伊助君は学者より詩人、そして山にも人事にも浪漫派の血が漲り流れる好個の青年紳士。彼の出た家は小田原の旧家で大地主、後の小田原駅から公園の城址一帯はその所有地の一部であったので、私どももよくそこの和洋折衷の邸館で彼と相会したものだ。

後年彼がスイスのアルプスに旅して、シュレックホルンの雪崩に傷つき、国際的恋愛の花を咲かせ、しかもその愛する妻と子らと箱根の山中に悠々生を楽しむ間もなく、あの関東大震災のため山津波の襲来にあえなくも一家をあげて埋没し去ったとは、浪漫派もここに極まったと言わねばならぬ。短かかった彼の生涯は惜しまれる限りだが、私は彼を不幸だとは思い切れない気がする。いや仕合わせな男だったとさえ評したいくらいだ。これは太郎さんとも話してその肯定を得た覚えがある。彼のエピソードは短かい割にすこぶる豊富だ。第一彼に悩まされた老友が今も私の外に幾人も残っている。悩まされたのはむろん彼の浪漫癖だが、その初めは彼の話好きから床を並べてもこちらを寝かさないのだ。それが彼の好きな小説でもまた実話でも、まるで暗誦するようで、完全に出来上った一編の好作品になっていて、聞き惚れるばかり。だが惜しい哉、床中では睡魔が妨げる。それを敏感に覚る彼は、「オイオイ、寝てはイカンよ」と、無ざんにも揺り起して、また話を続けるのだから聞く方は耐らない。聞き惚れるどころか恨めしさに化けて出そうになる。万事この調子だが、淡泊の一面はありながら、これという一念が起るとこの調子になるのが

彼の宿命か、思えば恐ろしい気さえする。こういった話を私の筆に任せた作り話か筆のアヤかと疑う向きは、幸いまだ証人を数えれば、スイス同行の近藤茂吉（編者注・一九六九年二月二十二日病歿された）、高野鷹蔵（編者注・一九六四年九月二十八日病歿された）、武田久吉…とすぐ間に合うから喚問すべしと明言しておく。

彼の一切は、愛玩の動植物まですべて山に生きながら葬り去られたのだが、これは平生彼が「自分が山で死んだら捜したりするな、そのままにしておけ、自分の好きな処で死んだものを骨を折って拾い出す必要はない！」と遺書しておいたことに正に該当するわけで、悲しみの遺族の方にもその通り計らう外なかった。

ところが、その後自然にその旧宅跡に一編の彼の手記が忽然と出土していた。怪談めくが事実で、それを収納した実兄常助さんから山岳会に寄贈され、少し焼け跡のあるのを大切に書庫に収めてあったが、これも戦災でまた焼失した。飽くまで付きまとう運命かな。その手記というのが「続スイス日記」であって、表紙は牛皮のなめし皮に山刀の焼印があり、嘱をうけて、私が油絵之具で十字架を中央に、その周囲に雪、高山植物、陽光といった物象を象徴的に配合した。自分として会心のデザインであったし、評判もよかったものだ。惜しいと思う。それから思い出すのは前に述べた床中談に関してだが、彼は晩年こういうのだ。「君（というのは私をさす）の『山岳』（編者注・第十二年第一号の「黒部川峡谷の話」のこと）に書いた黒部峡谷の話は実にいい。あれを床の中で読み耽っていると、フラウが怪しんで、何がそんなに面白いのかときくので、読んで聞かせてやったよ…」というのだ。当時妻君はまだ日本語は解らなかったから、飜訳して聞かせたのだろうか。或いは例の調子で相手が解らなくても構わず独演したのかもしれぬ。その私の作を目の前で暗誦された時は、私は寒けがしてやめてくれと断ったのを覚えている。その外に彼の暗誦した作品は鏡花の「高野聖」で、これは全編暗誦に耐えた。うまいものだった。実話では、少年時代釣りに行って、帰りの田圃道で狐に化かされ、ビクのまま獲物を全部取られてしまったという。これは創作にちがいなく、まさに昔話の民間伝承にありそうな好短編で、民俗学の方で採録する価値があったかもしれぬ。今のような録音器が当時あったら、採って

置いて、一粲を博すことが出来たであろうに。

兎もあれ前の辻本さんとは勿論、前にも後にも匹儔を見出し得ない特異な登山家と言うことが出来よう。諸行無常、あなかしこ。

本遺稿に就いて

中村清太郎先生没後、令息浩太郎氏より蜜柑箱大のボール箱が一個拙宅に届けられた。先生の残された原稿の由で、私がその整理をまかされたのである。もともと生前から某書肆より先生の本の出版計画があって、その雑務をいくらか私がお手伝いしていたわけであるが、突然の右手怪我のために頓挫してそのままになっていたわけだ。

『山岳渇仰』、『ある偃松の独白』につづく三冊目の山の本として、執筆中の「日本登山史」と共にたのしみにしておられたらしい。ボール箱の中には単行本にしておられない雑誌原稿の切抜きや、山岳会々報のご自分の文章などあり、本遺稿もその中にあった。恐らく新しい山の本のために書かれたものらしく浄書は途中までで終っている。先生の文章に対する厳格さ潔癖さはたいへんなもので、ボール箱の中の尨大な原稿も同じ内容の文章が大半を占めていた。つまりどんな文章も数度にわたって丹念に推敲されており、本遺稿もノートから原稿までいくどとなく書き直した形跡がみられる。

ボール箱の中で先生の遺稿として、また日本山岳会々誌にもっともふさわしい一文として敢えて本遺稿を選んでみたしだいである。

（安川　茂雄）

私の登山

松本善二

私は去る三月二十七日（一九六八年）の小集会に「私の登山」という題で古い山登りの話をしたとき、それをテープにとったので、それでよいと思っていたら、今度その話を書いて出すようにといわれてはなはだ困った。自分は旅から旅でほとんど落ち着いて家にいることがない。しかしそう自分の勝手ばかりいってもいられないので、不得手の原稿を書くことにした次第である。

私は下町に生まれ、下町に住んでいるので、関東大震災と今回の戦災とで登山記録の全部と写真乾板フィルム、採取物の全部を焼失してしまった。やむなく『山岳』またはその他の書物に発表してある記録と記憶をたどって、取りとめのない事を書くことにした。

私の山登りは、ほとんどが武田先生と木暮理太郎氏と同行であるので、従ってそれに関連した珍談も少なくない。

それに先立ち、ちょうどよい機会なので、登山記録の訂正をしておきたいと思う。

会報の一九六五年七月発行の二四一号の六頁に、神谷恭氏の「登山の今昔」という記事が載せてある。それを読んで実に驚いた。全然事実と違うのです。この機会に訂正しておきたい。

私は、俺は総理大臣をしたといっても、また己は皇族だといったとしても、そんな事は少しもかまわない。ただ、自分の登山記録を勝手に変更されたり捏造されては黙止することはできない。

その第一は、会報二四一号七頁の上段に、「大正八年道志から松田へ抜けた丹沢山縦走が縦走登山の初めだったと思います」と書いてあることだ。

これが問題だ。私は大正八年十一月二十一日に、府立工芸学校の人々四名を連れて与瀬から丹沢を通って秦野へ抜け、二宮から東京へ帰ることに成功した。丹沢山登山に関しては、『霧の旅』第三号に、かつて久野政雄氏が同じ年の夏、単身で焼山から蛭ケ岳へ登り、三境より塔ケ岳を経て大倉へ降った（途中一泊）という簡潔な記録はあるが、自分は、土曜から日曜に一気に縦走して東京へ帰ってしまうことは出来ないかと考えて、この計画をたてたのだ。それはかつて先輩の梅沢親光氏が試みて失敗しており、また横浜の北沢君（故北沢基幸氏）も同じ失敗をしたと聞いた。

実行後直ちに、日本山岳会の小集会で「丹沢山塊縦走」として発表の講演をなし、また諸君もこれを聞いて認めている。そして、その詳細を『山岳』第十四年第三号（大正九年七月発行）八十四頁に「焼山より丹沢山塊縦走」という題で掲載してある。

その第二回目が、同じく私がリーダーで丹沢山塊縦走を実行している。この時が松田へ抜けているのだ。この時、丹沢の地形が大分変わっていたから震災後です。なお、この時神谷君が参加している。

第二はさらに重大である。「登山の今昔」の七頁上段に「上越国境山脈縦走も大正十五年夏、霧の旅会が初めて」とある。どういうわけで、こういう思い違いを述べているのか全く了解



谷川温泉　金盛館前にて，中央左から木暮理太郎氏，
筆者，武田久吉氏（大11．4．筆者写）

に苦しむのだ。

この計画の発端は、かつて自分が、大正十一年四月、武田、木暮両先輩と阿能川岳へ登ったときに遡る。そのとき、初めて谷川岳南面のすばらしいマッカケ岩等を望見して、実に驚異の眼を見張ったものであった。その後、木暮氏と再三赤谷川の上流にある川古温泉より赤谷川を遡行して、アミダガセンの手前まで行ったり、エビス大黒ノ頭の一部に取り付いて一夜を明かしたが、天候不良のため空しく引き返えしたりした。その後数回、法師より三国山に登り、北方に聳立する平標ノ頭、仙ノ倉、エビス大黒ノ頭、越後富士方面を望み見ては、残雪に輝くこの連峰の秀麗なる風貌に接して、少なからずその魅惑を感じたものであった。

それでいよいよ大正十五年七月二十六日、私が隊長格で、会員の野口末延君と同じく会員の吉田直吉君（後久兵衛と改名す）の三名で、蓬峠より三国峠までの縦走を決行することになった。その時分には上州の山の人夫はやにっこくて駄目なので、わざわざ越後の熊取りの強者を五名連れていった。もちろん上越トンネルは工事中であるため、未だ通れない。

この計画は決して霧の旅会の計画ではなく、もちろん日本山岳会員として計画もし実行もしたもので、成功後直ちに、私がその詳細を日本山岳会の小集会で発表の講演をなし、また報知新聞の講堂で全山岳界に発表したものである。

それを『山岳』第二十五年第三号、即ち二十五周年記念号一八九頁に「上越国境の山と其の地名」と題し、附録として地名と沢名を記入した地図を付し、また記事中に写真も挿入して発表してある。

ですから荀も古い日本山岳会員であれば知らぬはずはないと思う。古い『山岳』を読んでいれば知っているはずだと野口、吉田の両君とともに不審に思っている。

第三が霧の旅会創立のこと。会報二四一号の同じ記事中に、「その頃日本山岳会の会員の間に同好の人達だけで霧の旅会という集まりを創立、木暮、武田両先生を名誉会員にいただいて」とあるが、これが全く事実と相違している。

霧の旅会は全く別の会です。府立工芸学校の卒業者と学生およびその関係者でつくったもので、発起人が五人いる。その中の一人は現在日本山岳会員の山崎金次郎君であり、発起人は松井幹雄（同校教諭）、山崎金次郎、田尻春男、田沢昌介、加藤留五郎の諸君である。

私が霧の旅に頼まれて講演に行ったとき、日本山岳会のあることを教え、勧めて松井幹雄君を入会させたのが縁となって、段々に霧の旅会の人が入会してきたのだ。その後ずっと過ぎて神谷君が入会してきた。神谷君とは古い親友であり、どうしてこんなことをいわねばならぬことになったのか、私は非常に残念なことと思っております。

上高地のこと

私が山へ熱中しはじめたのは明治四十四、五年頃と思う。その時、まず浅間山へ登り、草津を経て白根へ登り、渋温泉より豊野へ出て、長野乗りかえで松本より馬車で島々へ来て泊り、翌朝、徳本峠を越えて行くとき、目の前にあの穂高のすばらしい雪渓を見て、全くびっくりした。日本にもああいう立派な山があることを初めて知った。これが病みつきで上高地へ篭城することとなった。そのときにいた面々（敬称を略す）は、ウェストン夫妻をはじめ、茨木猪之吉、高村光太郎、真山幸治、東大の名誉教授である南君はまだ帝大の学生であって、私と相室であった。後から名古屋の八木道三君、松坂屋の伊藤氏等も加わった。ガイドは、嘉門次がウェストン師の専属、私は飛騨の作太郎を常傭としていた。茨木君とは再々穂高へ登ったりした。あるとき、まだ昼さがり、茨木君とのんびり温泉につかっていると、向こうの河童橋を一人の婦人が和服を短かく着て、昔よくはやった経木の海水帽をかぶり、トランクを人夫に背負わせて颯爽と渡ってくるのが見えた。上高地へ婦人の登山者が来たのはこれが初めてなので大騒ぎだ。この人が後に高村夫人となった智恵子嬢である。新しき女という会のメンバーであると誰かがいった。新入りはなかなか忙しい。菓子がなくなると、よく籤引きで敗けた人が安房峠を越えて平湯へカンカン棒を買いに行ったこともあった。

私は、今の登山者は誠に偉いと思う。職業をやりながら登山もやっている。私の熱の盛んな時代には、そんな悠長な事をしてはいられなかった。自分はちょっと銀行に勤めたのだが、あまり休むので、ある日、重役に呼びつけられ、「君は病気欠勤の届をするが、出てくると必らず日に焼けた、真っ黒な健康そうな顔をしている。今後は絶対に休暇はならん。山をやめるか職をやめるかどちらかにしろ」といい渡された。私はその場で辞職届を書いて出し、登山業に改業した次第であります。ですから、幾日登山に行っていても、誰からも文句の出ない全くの登山業者が三人いたのだ。

バロンのこと

私は、山へ登る人と書く人とは別だと思っている。人の話を聞いて、それを実にうまく編集する人がある。私の友人に、それはそれは可愛い好男子で人品のよい男がいる。ニックネームはバロンと呼ばれているくらいだ。私はこの人と再々旅行をしたが、実に愉快な人である。編集の技術は実に大したもので、私が丹沢縦走を終わってその整理をしている所へ訪ねてきた。丹沢の話を是非聞かしてくれというので、私は全部を詳細に話した。写真も見たいというのでこれも見せたら、今度は貸してくれといって持っていった。その後暫くして、その人が東京附

近の低山の登山案内を出版したと聞いたので、その書物を見て驚いた。説明も写真も全部載せてある。そのことを武田先生に話したら、武田先生も同じ被害に遭ったといっておられた。

ところが、この本が大変な人気で、売れて売れてすばらしい。大分印税が入ったので、その金で書いた山へ登ったということだ。まるで嘘のような話である。ところがその後、ある宴席でその人に出会った。ちょうどその時、武田先生もおられたので、二人で行って詰問したら、頭を抱えて逃げ出した。これが本当の世の中だから仕方がない。

三人の約束

その頃、武田、木暮両先生と私との間に固い約束があった。そのうちの誰からでも山の召集があったら、どこへ行くのか、何日かかるかは一切聞かずに必らず集ること。家族には一切いわないこと等で、その後これを実行した。

霧の旅の一節

霧の旅会の発会してまだ間もない時代に、私が山の話をよくしに行ったが、ある時、今流行の日本アルプスを知らないでは駄目だということになった。そこで、私が指導者となり、霧の旅会の会長格の松井幹雄、同じく会員の石川猛範、同田中実の三名を連れて、中房温泉から燕岳、大天井、東天井、槍ガ岳、上高地、中尾峠、蒲田温泉、平湯温泉と廻って行ったことがある。平湯は村山旅館へ泊った。その当時の旅館の部屋は往来に面していて、通る人が見えている。すると、筵を小脇に抱えた会員の久野政雄君が通っていくのを発見した。誠に偶然だといって呼びとめて、仲間に入れた。これで五名となった。

翌朝乗鞍へ登った。もちろん歩いてだ。下りは白骨温泉へと降り、斎藤旅館へ投宿した。ところが偶然にも、自分の家から宿の主人と私とに電報が来ており、すぐに見せられた。私は行く先を家にいわない主義なのだが、その時は何かでわかったのだと思う。私の長女が赤痢に罹かり入院して危篤とのこと。やむなく翌朝は大風雨で台風の中を出発することにした。連れの松井君と久野君が学校の講習があるのでなるべく帰りたいと同道することになり、一行三名で二人を残して宿を出た。ひとっ走りにと急いで帰る途中、松井幹雄君が大熱を出して苦しがり、歩行が困難になったので桧峠の一軒茶屋で休んだが、松井君の熱はいっこうに下がらない。「全く困った、泊めてくれ」といったら、細君が「家の亭主は焼きもちやきだから絶対に泊めない」というのを無理に泊まりこんでしまった。ところが、夜中になってその亭主が帰ってきた。大工かなんからしい。若い男が三人も泊まりこんだと聞いて怒り出した。大変なんだ。大声で喚きたてて遂にわれわれの部屋に暴れこんでくるといっている。私はリュックサックの中のレボルバーを出して実弾を

装填した。あまり長くなりますので、この先は次のことにします。

武田先生のこと

武田先生は学者であると同時に、非常に江戸趣味が豊かで、いや生粋の江戸っ子である。江戸の言葉はもちろん、江戸の諺とか昔江戸ではやった尻取りの唄などをよく知っておられるのには全く驚嘆する他はない。私が下町生まれで下町育ちなので、よく〝うま〟が合うらしい。先生と山へ登ったり、または共に旅を歩いたときに出会った様々の出来事はあまりに多いので、先生には悪いがその中の二、三を語ることにする。

〈伊豆の旅より〉

吉佐美の草履屋で鯖を食べる

石廊へ行く途中、吉佐美の角にある草履屋の前を通ると、実にいきのよい鯖が数本おいてあった。あがりこんで話をした途中で、あの鯖を炊きたての熱い飯で食べたらどんなにうまかろうといったら、その家の細君が、「それはいと易いこと、すぐ炊きましょう」と気軽に飯を炊いてくれたので、二人は非常に喜んだ。こんなことは今はとっても思いもよらない。その裏の家の庭が非常に立派だから是非見ろと薦められて、拝見することになった。その庭に実に見事な紅梅があった。武田さんは職掌柄「その梅の種類は何といいますか」と聞いた。その家の爺さん曰く「コービェー」という梅だとの返事に先生ギャフン。

下流で螺を食べさせられる

下流村の右側に雑貨屋がある。そこの娘に武田さんと二人で、この辺に螺を食べさせる所はないかと聞いたら、向かい側の缶詰会社へ行ってご覧なさい、といわれた。早速その会社へ行ってみると、今大釜で螺を煮ている最中らしい。すこぶるよい香りがしている。缶詰の見学に来たのだといったら、まずこれを試食してくれろ、と大皿一杯の螺を出されたので、こっちがびっくりしてしまった。

長津呂の大きなお尻に驚ろく

石廊の手前あたり、今は土産屋が並んでいるが、その時分には観光客等はあまり来ない時なので、全く無人の部落であった。それでも一軒の旅館があって、船橋屋といった。主人は大工で細君が内職にやっている程度であるため、客はほとんどない。風呂の設備もないので銭湯へ行ってくれといわれて、武田さんと二人で銭湯に行くことになった。行ってみると男湯と女湯とはあるが、両方沸かしたのでは採算がとれないと、一方だけしか沸かさない。そこへ男女とも入っている。仕方がないとお仲間入りをして風呂場へ下りてみると、いや驚ろいた。流し

の中央の辺にある、まるで井戸のように深い枠の中の底の方はるかに湯らしいものが見える。決心して二人で中段を下って中へ入ってみると、漁師が裸足のまま入るせいか、底に砂がうんと溜っている。中にある湯は一尺程の深さだ。仕方がないのでその中にかがんで我慢していると、今度は上の方から、実に偉大な婆さんのお尻が徐々に落下してきて二人の頭上に覆いかぶさってきた。いや驚いたの何のって、直ちに二人で宿へ逃げ帰った。桑原桑原。

その旅の帰りだと思う。湯ケ島の近くの休み茶屋のおかみが、武田さんの歯切れのよい江戸弁でてきぱき喋るのを聞いていたが、世の中にこういう人がいたのなら、この人を是非婿さんに欲しいといい出したので、実に弱った。そのときの話題は、万年茸と猿の腰掛の区別。

次はお通夜の手伝い

湯ケ島の奥に世古の滝という温泉のあるダルマ屋があった。静かでよいので、常に寄ることにしていた。ある時、そこに寄ることになった。よく知っている家なので、すぐ二階へ通されたが、上がってみると何だかざわざわしている。聞いてみると、人が死んで今夜がお通夜だという。何故断わらなかった、といったら、あなた方はよく知っているので断わらなかったという。えらく信用されたものだ。仕方なく二人で一晩中お通夜の手伝いをした次第。

宿の娘の嫁入りを送る

五日市に鶴屋という旅館があった。ある時武田さんと二人で泊ったら、その晩その家の娘が嫁に行くのだとわかった。これも何かの縁と、二人でその家の親戚の仲間に入って、お嫁さんを送る行列に加わった。

谷村の宿の失敗

山の帰りに武田さんが、僕の知っている旅館へ行こうと、谷村のたしか吉田屋といったと思う中々立派な家に案内された。入っていくとすぐ二階へ通された。ところがすぐ女が何人も寄ってきて取り巻き、酒をむやみに持ってくる。これは変だと聞いてみると、「家は宿屋ではありません。料理屋です。」とはっきりいわれたのには驚ろいた。これは大変だと思うと同時にリュックを背負い、階段を駆け下り、草鞋をはいて逃げ出した。

嵯峨塩鉱泉で強盗と間違えられた話

山の帰りに武田さんと二人で嵯峨塩鉱泉に着いたのがちょうど十二時半位であった。いくら叩いても戸を開けてくれない。今度は破れるように叩いたが、それでも開けない。暫く待っていると、ようやくシンバリ棒をはずす音がして戸を開けてくれ

た。中へ入ることになったが、何だか雰囲気が変だ。二階へ通された。自分と武田さんはリュックを下ろすと、寒いのですぐ風呂場へ下りて行った。その留守にリュックの中を見たらしい。その中には、武田さんはブローニング、私はレボルバー、何れも実弾が装填してあるのが入れてあった。翌朝早くたった。

それから十年余りたったとき、また偶然に嵯峨塩に寄ることになった。今度は早く着いたので、難なく座敷に通された。私だけすぐ風呂へ行った。すると宿の婆さんが湯に入っていて、しきりに喋っているのをふと聞くと、「どうも今来た異人さんはこの前の強盗によく似ていると思う」といっている。私は直ちに、それはいつ頃だと聞くと、十年位前だという。「その時の二人はわれわれだが、決して強盗や何かではない、大間違いだ。その時何故すぐ戸を開けなかったのだ」と聞いたら、「先ず仕度をする、それから小供を戸棚に隠して戸を開けたのだ」と答えた。なんで子供を隠したのかは未だにわからない。すぐ婆さんと主人に了解のいくように詳細の話をしてやった。

次は木暮理太郎氏のこと

木暮さんは文科出で歴史が専門です。山へ行くときの服装は詰襟の服に紺のキャハン、紺足袋で草鞋ばき。

木暮さんは一生に一回、『山の憶ひ出』という本を出しただけだ。その中で同行者の名を略したりしたことは決してない。ちゃんと明細に誰と行った、と書いている。

或るとき、木暮氏から召集が来た。リュックを持って上野駅に来い、何時発の列車に乗れと。そこで、直ちに上野へ馳せつけたが、肝心の木暮君が見つからない。まごまごしているうちにその汽車は出てしまった。とにかく木暮さんの家へ行って念のため聞いてみようと、駒込蓬莱町の住居へ行って奥さんに聞くと、「今朝早く松本君と行く」とだけいって早朝に出たことだけはわかった。すぐ上野駅へ引き返して、次の日光行きの列車で日光へ行き、馬車で馬返しまで、後は徒歩で湯元温泉へ行った。板屋で聞くと、「まだ木暮さんは来ない」といわれたので、少しがっかりした。しかし、来なければ温泉があるのだからゆっくり入湯して明日帰る考えで、二階の座敷に陣取った。椅子を廊下に持ち出して、湯の湖の方を眺めていた。日がとっぷり暮れて、もう暗くなったと思う頃、向こうにあの特徴のある鐘馗様のような髭が見えてきた。二階の下に近づいて、「やあ」といったが、自分は少し中腹でいたので、「どこをうろついていたのだ」と大声で怒鳴ったら、「そう怒ったってしようがないさ」といって二階へ上がってきた。すこぶる悠長だ。

その夜、主人を呼んで「鬼怒沼へ行きたいんだが」と話すと、言下に「鬼怒沼へは道がなくって行けません」といわれた。ところが、腑まがりが二人揃っているので、行けないとい

うなら行こう、ということになった。

そこで金精峠へ登り着き、尾根通しで鬼怒沼へ行った記事は、木暮さんの『山の憶ひ出』に詳細に出ている。

昔の尾瀬沼

木暮君から召集があったのですぐ上野駅に馳けつけたら、今度は尾瀬方面だという。

沼田から栗生峠の下の高平までしか馬車は通っていない。その先は全部歩きだ。この峠道は三回にわたって変更されている。初めは一番高い栗生峠の隧道を通って大原に下った。吹割の滝は今とちがって水が豊富で実に見事であった。追貝を過ぎて、須賀川という寒村の木賃宿に泊った。

翌朝、またその道を鎌田、越本、古仲と過ぎて、戸倉を少し過ぎた路上に山栗の実がいっぱいに落ちている。木暮君はまるで子供のようにはしゃいで、いちいち「ヒョオー」という奇声を発して無邪気にこれを拾っている。これが本当の木暮君だ。

そこへ上の方から長蔵が下ってきた。たちまち話に花が咲く。長蔵は「兵隊に行っている息子のところへ小包を出すので鎌田の局まで行くところだから、すぐ帰るで、先に小屋へ行って待ってくれろ」といって下っていった。そこで二人は、三平峠を越えて長蔵小屋へと急いだ。まだスキーは無い時代なので、客はまるきりいない。全く静かだ。長蔵の婆さんは玉網を持って出ていったが、すぐそばの小川で大きな岩魚を掬ってきた。これが大き過ぎて、まるで鮭みたいに大きい。これを切身にして出すので、大味で甚だまずい。しかし、長蔵とわれわれの話は尽きない。夜中になってばかに静かになったと思ったら、雪となった。表の景色はまるで変わった。実にきれいだ。長蔵の婆さんの里が会津の湯の花温泉の湯本屋だから、是非帰りに寄って入湯していけという。勧められるまま、その気になって沼山峠を越え、桧枝岐に出て、小繋峠と唐沢峠を通って館岩村の湯の花温泉湯本屋の客となった。

法師温泉の岡村さんとその娘さん

ある時、木暮さんと湯宿で馬車を下り、相俣の橋を渡って猿ケ京の通りを歩いていた。すると、横からいきなり、小さな黒い犬が飛び出してきて、木暮さんの向こう脛にがぶりと噛みついた。大したことは無さそうなので、そのまま吹路を通って法師温泉へ行き、そこを根拠地として上越国境を歩きまわった。

その当時の主人は元の貴族院議員の岡村貢さんである。今の婆さんが岡村さんの娘で、えび茶の袴の女学生であった。一人淋しい岡村さんを慰めるため、土曜日から三国峠を越えてよく来ていたのに出会った。またある時は、赤沢林道が出来たので、木暮さんと私がそこを通ってみようといったら、法師の番頭から是非連れていってくれと頼まれ、四万まで一緒に連れて

いってやったこともあった。その時分は、四万から中の条へは歩いていくのが普通であった。日本にリュックサックというものがないので、木暮さんがオーストリアからとりよせたというリュックを私が借り、それを見本として芝の赤羽橋の天幕屋に作らせた。それを私が背負っていると、中の条へ行く途中、西側の石段のある農家から一人の老婆が馳け下りてきて、「郵便屋さん、この葉書を局へもっていって出して下さい」といわれたのには恐れいった。多分われわれが背負っている袋を郵便局の行嚢と間違えたらしいのだ。

木暮さんの写真機

またある時、木暮さんと湯宿で馬車を下りた。四、五百メートル行くと、左側にトコロ天を売っている店がある。その前から旧越後街道が右へ曲がって山の方へ登っていく。登りきったところに住吉神社があり、そこを通り過ぎると、下に相俣の部落を見下ろす突起があった。そこからは赤谷川上流のエビス大黒の頭と毛渡沢乗越がよく見えた。必らずここで写真を撮影したものである。それは木暮さんを経て『世界写真帖』に出ている。

その時分の器械は、木暮さんのものはエルネマンの手札形で、シャッターには空気のピストンがついている。あるとき、そのスプリングが折れてしまったが、こういうときの木暮さんは誠に面白いことをやる。先ず浅草公園に行ってテキヤが売っている軽便ハンダ、即ちハンダの粉を油で練ったようなものを買ってくる。それでスプリングを接着しようというのだが、結局失敗に終わってしまった。

私の器械は独逸のダゴールのついたターロテナックスで、鋼鉄の取枠が十二枚附属している。その時代には、パンクロはイルフォードの手札形黄箱の乾板しかなく、やむなく手札形を使っていた。三脚は二人とも同じ形の三段折れの木製で、木暮さんのはエルネマン製の黒色の中三段折れ、私のはイカの白色で木製中三段折れ、天部が回転式で山のパノラマが撮れるようになっていた。これで手札形の乾板一〇ダースも持ったら大変な重量だ。その他に飯盒と草鞋数足を背負う。そして川古温泉に篭もり、アミダガセン、エビス大黒の沢、あるいは赤沢と赤谷川の上流の沢を登って、上越国境縦走の下準備とした。

足の裏に竹槍を突き通した話

今は登山靴という完全なものがあるが、私の時代には日本に登山靴というものが全然なかったので、やむなく草鞋を使った。

ある時、会員の故久野政雄君が来て、君は丹沢の縦走は成功したが、東西に横断したことはないだろうから、これから行こうと勧誘され、直ちに出発することになった。

今度は鳥屋から入り、無籍者の村伝道の猟師の家に泊まり、翌朝セヤの沢から丹沢本岳へ登り着き、尾根通しに蛭ケ岳に出、更に西に分岐している尾根に入り、臼ケ岳の谷間にある山窩のセブリに勧められるまま泊まり込んだ。遂にそこで三泊し、そこから桧洞丸を経て犬越路に出る予定なので、犬越路で新しい足袋と草鞋に履き替えようと、そのまま古い性のぬけたくたびれた草鞋足袋で歩いていった。夕暮れになったので急いで行くと、道の上に約一メートル位ある大木が倒れていた。普通に乗り越せば何でもなかったのに、勢いこんで飛び越えたとたん、向こう側の下から出ていた竹槍が、腐った足袋の上から足の裏に突き通ってしまった。御料局の人夫が笹を鎌で刈りとった跡が、十センチ位、あたかも竹槍のように鋭利に尖っていたのだ。何しろ出血が多いので、持っている手拭を引き裂いて血管を堅く縛って止血した。

もう歩行は不可能なので、久野君に「直ちに犬越路に行き、北側に少し降りていくと長者小屋という炭の集散地がある。そこで村の人に頼んで、力のありそうな屈強な男を雇って来てくれ」と頼んだ。久野君はすぐそこへ行ってくれた。自分は一人で、血は止めたものの一面に笹の槍が出て座る所もない場所なので、幾らか尖りの少ない所を探して横になった。もはや日も暮れかかり、あたりは大分暗くなってきた。灯りをつけることも出来ず、油紙（今のようにビニールはない）を頭から被っていると、丹沢名物の大雷雨がやってきたが、そんなことを気にしてはいられない。そのうちにとろとろと眠ったらしい。目をさますともう日がさしている。天気が好くて幸いだと思った。時計を見ると八時近い。峠の方から「オーイ、オーイ」と呼ぶ声が段々近く聞こえてきた。

間もなく、久野君が六尺以上もある大男を連れて戻ってきてくれたので、その男の背負梯子の上に縛りつけられて長者小屋まで行った。そこには、怪我人があると聞いて村の人が炭を運ぶ馬を一頭待たしておいてくれたので、馬の背の人となり、上野田の旅館まで送ってもらった。その翌朝も、同じ馬で奥牧野を通って上野原駅まで馬方が送ってくれた。上野原駅から万世橋駅までは汽車、それからは人力車で自宅に帰った。

最後に、木暮理太郎、田部重治、松本善二の三人が若い美しい娘に助けられた話

頃は五月、端午の節句で気候もよいから、三人で富士の裾野の山々を歩きまわろう、と話がきまった。木暮、田部の二人は夜行で行くという。自分は夜行がきらいなので即刻たち（その時分は軽便鉄道）、富士大宮で旅館に泊まり、翌朝、二人が到着するのを駅で迎える手筈とした。

駅で出会って三人揃ったので、まず浅間神社に詣でた。中井出、上井出と行く村々では節句に使う草餅をつく音が盛んに聞

こえる。「松本、お前行って草餅をわけてくれるよう掛けあってこい」といわれたが、自分は生来のはにかみ屋で、ついにその任務は果たせなかった。

人穴の前まで来ると、田部君が入ってみようといい出し、とうとう三人で人穴に入ることになってしまった。中には水が湧いている。初めのうちは足だけ濡れる程度だったが、奥へ行くに従って深くなり、えらく冷めたく感じるようになり、しまいには服をぬがねばならなくなった。もう止めようと提案したらたちまち話は成立して、表へ飛び出した。表は少し寒いが気持ちがよい。茅戸の中を無暗に歩きまわった。すると、彼方に麓の村が見えてきた。村で一番大きい立派な家を見つけて一夜の宿を頼んだ。われわれの人品がよかったせいか、快よく承知してくれ、最近までこの家の隠居が使っていたという別棟の離れに案内された。その上かなりの馳走に預かった。しかし、何よりも、先程から狙っていた草餅が沢山出てきたので大満足であった。

翌朝は、その家のすぐ裏から大方山に登った。その時はまだ毛無山とよばれていた。私と木暮さんは尾根に取りつき、尾根通しに登っていったが、田部君はどこかに見えなくなってしまった。私が心配していると、木暮さんは「田部君はいつもこうなんだ。多分沢を登っているのだろう。頂上へ着けば必らずどこからか現われてくるさ」と平気でいる。果たして、頂上に着くと、どこからともなく現われてきたので感服した。西の眺望は全然駄目だった。暫く休んで、この時この峰を木暮氏は大方山と命名した。後にはその名で『山岳』その他に通用している。

尾根を北へと進んで、雨ケ岳から本栖湖の南岸へと小径をたどった。ここで田部君は、「俺は胃酸過多だから牛乳が入用なんだ」という。これは困ったと思ったが、本栖の村中探した結果、ようやく見つけることができた。これからは変哲もない街道を精進へ向かう。現在は精進湖の東側を通る車道だが、その当時は一尺幅位の小径で、精進湖の西側を通っていた。

精進湖の近くに来ると、日はとっぷりと暮れて、湖面が鉛色に見えてきた。と同時に、道が湖水の中に入って行くので、三人は自然にじゃぶじゃぶと湖水の中を歩くようになった。驚いて、「これは変だ、道はどこへ逃げたのか」と三人で相談したが、何しろ灯火は小田原提灯一つずつ、それを頼りに道を探したが、なかなか発見できない。

気の短い田部君は、どしどし高い方へ登っていってしまい、いくら呼んでも戻ってこない。木暮君と私は気を落ちつけてある小径を見つけた。それをたどって行くと、水車小屋があった。もうどうにでもなれ、とその水車小屋の前に腰を下ろした。ここで夜を明かしてもよいと思った。木暮君の好物のカニパンがリュックから出され、それに水をつけては齧った。出来

れば精進村の山田屋で風呂にでも入りたい等と考えていたが、暫くして、もうこうなったら仕方がない。遥かに見えている精進ホテルに行って聞くより手はない、と結論が出た。精進ホテルは外人でなければ泊めないのだが、木暮君と相談して、主人は外人だが奥さんは日本人だから、とにかく行って聞いてみようと、ホテルに向けて歩き出した。

ホテルの門前まで行ったとき、ホテルの門がサッと開き、中から夜目にも美しい十七、八の娘さんが、赤いセーターを着て、女中さんのような侍女を一人連れて出てきた。二人とも驚いたどころの段ではない。夜は更けている。戻り橋ではないが、妖怪変化ではないかと一寸たじろいだ。気をとり直して対面する。するとその美人が「あなた方山に馴れない人はさぞお困りでしょう」といわれた。これで木暮氏と私とは全くまいってしまった。ギャフンだ。二人顔を見合わせて冷汗をかいた。頗る神妙にしていたが、一応話をしてみることにして、実はわれわれはここまでは順調に来たが、ここで道が湖水の中に入っているので、探してみたがどうしても道を発見できず、甚だ困却している次第だと告げた。その婦人がいうには、今日、精進村小学校の生徒が葦刈りをしたとき、その中の誰かが行方不明になった。そこで、村の人々が捜索しているのだと思い、応援に出て来たのだという。「いま一人われわれの仲間がいるのだが、どこへ行ったかわからないで困っている」といったら、「その人はあとでわたしが探して連れていくから、まずあなた方二人を対岸の精進村まで送り届ける」とのこと。門内に入れというのでついて行くと、構内に繋いである白いボートに乗せられた。そこに一人の白い服を着たボーイが現われ、これにオールを引かせる。そして「どうぞお大事に」ときた。何とも恐縮するばかりである。木暮君は仙台の二高でボートの選手であったし、松島で鍛えた腕前なので、早速片側のオールをとった。昔とった杵柄で、難なく対岸の精進村桟橋に到着した。私は上陸したが、木暮君はボートに残って、これから戻って田部君を探してくるという。私は山田屋旅館に先行して風呂を沸かすよう手配をした。間もなく三人が合流することができたが、この美人は横浜フレンド女学校の学生とのことであった。

ヤジュン峰登頂（一九六七年）

増永迪男

はじめに

広島大学の山岳部がスタートしたのは、昭和二十四年。三十二年にはOBの会、広島大学山の会が発足した。山岳部は積雪期の山行に限っていえば、伯耆大山から歩み出して雪の黒部奥ノ廊下遡行へ進み、今は雪の柳又谷と取組んでいる。山の会には三十七年に海外遠征実行委員会ができた。まず関西に住む会員のグループが中心になって資料集めをした。次に目標を決める。

ネパールのタムール川、アルン川流域。しかし、四十年の三月二十日にネパール政府はヒマラヤ登山の全面禁止を発表した。一方その間にカラコルムについても苦心して地図作りが続き、同年にはその全部をひろげると四畳半大になる地形図が完成した。これからというところで印パ戦争の勃発。またしても後発グループの悲哀を味わわされた。

その間、私たちはアフガニスタンのヒンズー・クシュなどは第二流の山である、との偏見を持っていて、計画を立てようともせず、そこへ日本から行く隊があると聞けば、なぜあのようなところに行くのかと、不思議に思ったりした。

ヒンズー・クシュを真剣に考えるようになったのは、昭和四十一年の五月からである。海外登山技術研究会から帰ってきた舟橋が、

「アフガニスタンにいいところがありますよ」という。これが遠征のはじまりであった。

中部ヒンズー・クシュは比較的最近になって開拓されているので、ひどく大まかな地図以外はなかなか手に入らなかった。

ムンジャンのような大河でも、その源はよく解らなかった。しだいに私たちは地図のない地域を探る、ということに気持を動かされ、ムンジャン谷上流の六〇〇〇メートル級未登峰の登頂をめざす計画書を作った。

しかし、その頃までに中部ヒンズー・クシュの六〇〇〇メートル級の山々は、ほとんど西独の人達によって登られてしまっていて、私たちはムンジャンに本当に高い山があるのかどうか不安な気持でいた。六〇二四メートルの未登峰が残っているとわかったのは、ミュンヘンにいた舟橋の妹から送られたドイツ山岳会の会報を読んでからである。それは小さな地形図の白い三角の印であった。その地形図は、なぜかムンジャン谷のあたりは空白になっていた。私たちはそのことについて、

「ドイツの連中、今年あたり登るつもりでわざと白くしておくのだろう。」

「いや、本当にその山があることしか解っていないのだろう。」と憶測をたくましくした。

四十二年の四月十二日になって、次のように広島大学ヒンズー・クシュ遠征隊が結成されることになった。

隊長　大谷敏夫（61）広島大学医学部教授
副隊長　増永迪男（34）広島大学山の会
同　平位剛（36）広島大学医学部山岳会
舟橋明男（29）広島大学山の会
石田雅則（24）広島大学山岳部

六月二十八日、増永、舟橋は装備と食糧を積んだアフガン・トランスポートのトラックで、カラチからカブールに向け出発した。

七月二日、隊長を除いた四人がカブールのアリアナホテルで落ちあった。早速それぞれの分担を決めて行動に移り、チャーターしたバスで同地を出発したのは七月十一日であった。目標であるムンジャン谷最奥の村ナオまでは、パンジシール川を遡り、サミール・パスを越えてアリンガール川の上流部に入り、ラムグル・パスでムンジャン谷に入るキャラバンコースを予定していた。しかし、予定表よりは約十日の遅れを出していたことから、車の終点の村、ダシテレワートの馬方の意見を入れてアンジュマン・パス越えのムンジャン行きという平凡なコースに変更した。

七月十三日、晴。私たちの荷物は学術調査も合わせて行なうために総計で七二〇キロ余であった。これを九頭の馬に分担させてキャラバンに入った。ダシテレワートからナオまで一頭につき千四百アフガニーという請負で賃金を支払うことにした。隊員は徒歩である。キャラバンに入ってから四日目、アンジュマン・パスを越えたところにあるアンジュマン村で、私たちが連れた馬方と村の人たちの間で口論が始まった。ローカルガバナーの区域により縄張りがあるらしく、夕刻にはダシテレワー


Central Hindu-Kush
to Amu Darya
Jurm R.
Keron
Razir
Shahron
Kawaja Muhammad
3500
Anjuman V.
Anjuman
3100
Anjuman Pass
Para I V.
Adj V.
5954
Tilli
Yajun
Nao
Munjan V.
Parun V.
Pagar V.
6026
5653
6001
Safed
Miyonsher V.
Kaujon
Panjshir R.
to Dashte-i-Rewaht
Mir Samir
Ramgur Pass
Weran Pass
Alingar R.
Pech V.

トの馬方は追いかえされた。

ここで馬と馬方を替えて再出発。アンジュマン川のゴルジュは通行不能との事で尾根を三つ越え、ムンジャン川の徒渉に手こずり、目的のナオに着いたのは十日目であった。その間の数数のトラブルを切り抜けることができたのは、通訳のナスラハ（二十九歳）の活躍に負うところが極めて大であった。キャラバンの最後の二日間の旅は、広くゆるやかになったムンジャン川に沿って進む。U字谷の両側にそそり立つ五〇〇〇メートル級の山の壁が、広い水面に映り、美しい川岸の芝生を歩むという山紫水明の境地であった。私たちはキャラバン中の食糧は現地食でと決めていたが、この調達はほとんど不可能に近いものであった。

ベースキャンプ

ナオ村は戸数七戸の寒村である。左岸にある村のすぐ裏には目標の六〇二四メートル峯があるはずであるが、茶色の壁が迫っていて山の上部は見えない。村のはずれにベースキャンプを作り、付近を調べることにした。高度は三〇〇〇メートルである。

七月二十二日、晴。舟橋、石田は偵察に出発。しかし山や登路は発見できなかった。石田は舟橋の指示で地図とよく符合する谷に入ったというが、増永の意見では、遠すぎるとして否定的である。

二十三日、晴。増永、石田は昨日のコースへ、舟橋はナオのすぐ上流に北から入っているかなり大きな谷をつめる。二時間後、増永組は灰色に濁った水を流してくる枝谷に入る。登るにつれてU字谷であることがはっきりし、目標の谷であることを確認する。三九〇〇メートル地点で幅約八〇〇メートル、高さ五〇メートルのモレーンが現われる。城壁のようだ。モレーンに登り、歩きにくいその畝づたいに進み、四二〇〇メートル付近で水とやや平らなところを見つけ、第一キャンプ地点と決める。モレーンの間にほんのわずか水流が顔を出し、その底は氷になっていた。どうやら氷河の上らしい。しかし、どう見ても辺りは岩屑の丘また丘だ。その両側は斧で割ったような壁の連らなりの岩稜である。正面はオーバーハングのかたまりのようなピーク五〇一五メートルだ。

二十四日、一日中うすい霧がかかっている。キャラバン出発以来はじめての休日。子供らが持ってくる鱒を二アフガニーで買い、乾魚作りに精を出す。

二十五日、うすい霧。ナオの人たちの背を借りて、ベースキャンプを目標の谷の出合まで上げる。ここのポーターは一人平均六〇キロは担ぐようだ。村人たちは目ざす谷をヤジュンと呼んでいる。そこで、私たちもそれにしたがって目標の山をヤジュン・ピークと呼ぶことにした。ヤジュン谷には羊を上げるこ

ともあるようだが、草本限界からは頂上は見えず、また村人たちは雪のある山には無関心であった。ベースキャンプは小さな段丘の放牧地にある。小川の流れやそれをとりまく柳の林が美しい。ただし、水は岩粉を含んでいて灰色をしている。

二十六日、うすい霧。人夫七名とヤジュン谷を上り、第一キャンプを作る。予定量の五〇パーセントが上った。第一キャンプの約二キロ上流でヤジュン氷河は二股に分かれている。右股にはアイスフォールが見え、左股には一段約二〇〇メートルの岩壁がある。頂上は右股の奥になるらしい。

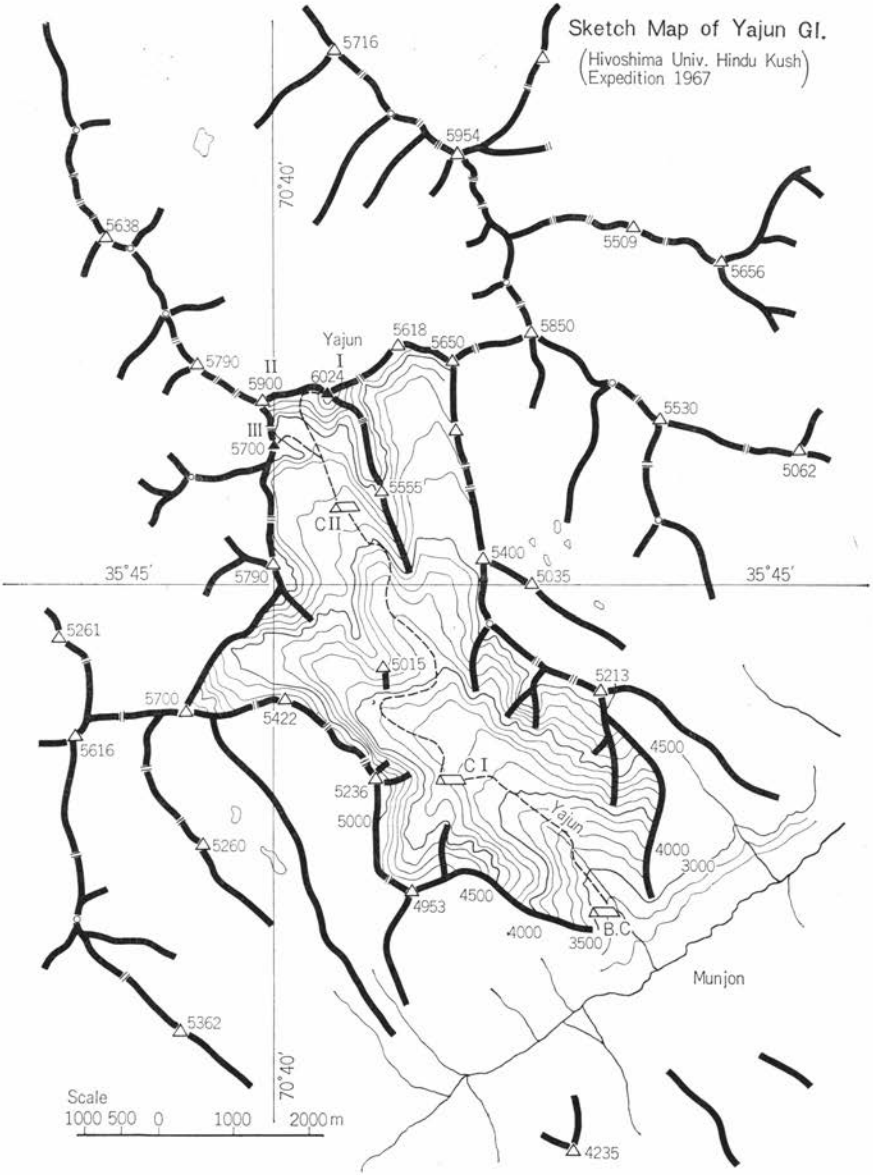
二十七日、晴。増永、石田は右股氷河の偵察に出る。困難と思われた滝場はルートを見つけて乗り越す。ここで右股はさらに二つに分かれていた。さらに右に入り、傾斜を増した氷河上の堅雪にステップを切って登り、氷河の源流の広い雪原に出た。高度は五二〇〇メートル。奥行は約四キロもあるだろうか。雪原の左側は高さ約六〇〇メートルの壁が連らなり、奥も壁、右の壁はやや傾斜がゆるく、ところどころに雪がついている。五二五〇メートルの雪原の詰めまで行って見たが、頂上は発見できなかった。頂上付近へ登るルートもないと決めた。両名とも初めての高山病を経験した。この日、残りの荷物も全部荷上げされた。ベースキャンプは当分の間、通訳のナスラハとムンジャン谷のローカルガバナーのいるケランから私たちの警備に同行してきた兵のモハマド・ゴールとで留守番だ。なお、この兵士は去年のRCC隊にも同行している。

二十八日、晴。平位、舟橋は中股氷河の偵察に出る。そのルートの前半は昨日と同じコースを行き、上の二股で左に入るわけである。上の二股から氷の上の不安定な岩屑の小さな丘をいくつも越し、約二〇〇メートルのアイスフォールをアイゼンをきかして登ると、同じようにひろびろとした雪原に出た。黒みを帯びるまでに澄み切った空にくい込むように立っている雪の三角のピークが頂上らしい。堂々たる岩壁に守られているが、稜線に達している急峻な雪のルンゼが一本ある。あそこがルートになるだろう。帰途は左股氷河のアイスフォール下に抜けるコースをとる。きょうの偵察で第二キャンプは中股氷河の上部雪原と決める。

第二キャンプ

二十九日、快晴。増永、舟橋は第二キャンプ作りを目ざして出発。この山行で初めての大型ザックが重い。ついに滝場を越したところに半荷を残し再び上に向かう。中股上部のアイスフォールでは傾斜のゆるい右側もアイゼンをつけて登る。雪原の高度五二〇〇メートル地点に荷物をデポ、引き返して四七〇〇メートルの滝場上部に中継キャンプを張る。平位、石田は中継キャンプまで荷上げ。

三十日、晴。増永、舟橋は雪原に第二キャンプを作る。増永


Sketch Map of Yajun Gl.
(Hivoshima Univ. Hindu Kush Expedition 1967)
5716
5954
5638
5509
5656
70°40'
Yajun
5618
5650
5850
5790
II
5900
I
6024
5530
III
5700
5062
5555
CII
35°45'
5790
5400
5035
35°45'
5261
5015
5213
5700
5422
4500
5616
CI
5236
5000
Yajun
5260
4000
3000
4953
4500
4000
3500
B.C.
Munjon
5362
70°40'
Scale
1000 500 0 1000 2000m
4235



ヤジュン第一峰と頂上へのクーロアール
Yajun I (6024m) : Climbing route is taken in the central couloir.

ヤジュン第1峰の頂上からピーク"X"、コー・イ・サフェ、ピーク5700mをのぞむ
Peak 5700m (left), Koh-i-Safed (6001m, center) and Peak "X" (6036m, right) seen from the summit of Yajun I. (By M. Masunaga)

はさらに上部の偵察に出る。一昨日、平位らが発見したルートは、雪原からは見えないところでスパッと切れ落ちた大きいギャップで阻まれていた。しかし、廻りこんでいる雪原の奥からそのギャップまで、雪のクーロアールが伸び上っている。

ただし、ギャップから頂上まで段々になっている壁の連なりが問題だ。うまく稜線の向こう側にルートが見つかればよいが。稜線のところどころに顔を出している雪に望みを託す。平位、石田は中継キャンプまで二回荷上げをする。

三十一日、晴。増永、舟橋は偵察に出る。雪のクーロアールの途中にあった氷の軒のようなオーバーハングは、舟橋が左の壁にハーケンを二本打って越し、ギャップに出る。稜線から反対側を見る。直下一五〇〇メートルはあるだろうか、はるか下方のアンジュマン川に落ちるアビ氷河まで切り立った壁だ。稜線の裏側にルートがないことははっきりした。主に雪原の側をからんで頂上に向かう。岩は堅いが浮石が多いので慎重に行動する。

五ピッチ目に登攀不能のオーバーハングにぶつかる。このルートはあきらめることにして、第二キャンプへの帰途、頂上を見上げながらコースを検討しあう。

直接頂上に向かうとすれば約六〇〇メートルの堂々たるバットレスだが、これは最後のルートに残し、頂上から約二キロほど東に寄った地点に突きあげている細い雪と氷のクーロアールを次のルートに決める。高度差は約六五〇メートル、傾斜は七〇度くらいだろうか。しかも出口が頂上からずっと離れているのが欠点だ。だが待てよ。クーロアール出口のすぐ右手のピークの方が高いのとは違うだろうか。あすは第二キャンプの舟橋の休養日として、増永は中継キャンプへ下る。平位、石田は中継キャンプ入り。

八月一日、晴。石田はすっかり回復したので個人装備で第二キャンプへ入る。増永は同キャンプまで二回荷上げ。平位はアイスフォール下部へ二回荷上げ。

ヤジュン第一峯（六〇二四メートル）頂上へ

二日、快晴。五時半舟橋、石田は第二キャンプを出発。七時、クーロアールに入る。上方の壁に日が当たり始めると、小さなルンゼや壁に張りついていた氷が間断なく落ちてくる。しかし、そのコースは大体決まっていて、クーロアール上に幾条もの溝を刻んでいる。左側の壁沿いに登る。雪面は無数の大きな筍が生えそろったようなニエベ・ペニテンテだ。かなりの傾斜だが快調に登れる。やがて日の当たるところに出た。雪は急速に腐り始め、堅い氷とその上の薄い雪の層に悩まされる。クーロアールの半ばに落石と落氷が左から入って来るところがある。タイミングを合わせて一気に突破した。しかし、このピッチで急に高度の影響を受け始める。

中継キャンプから第二キャンプに向かっている増永と平位は、交信時間ごとに一喜一憂した。

一四時、クーロアール上半部にあるゴルジュに入る。内部は氷の垂直に近い樋になっていた。アンザイレンして右側の壁を越え、ゴルジュ上部の扇型にひろがる雪壁に出る。稜線までもっとも近い左へ曲がるルートを取り、巨大なニエベ・ペニテンテがやや下に向かって林立する雪壁を直登した。しかし、高山病の症状がしだいに激しくなり、服薬後はさらに眠気も加わって来たので、ビバークと決める。雪壁の半ばにあるインゼルの岩棚の上にハーケン陣を敷き、ツェルトザックをかぶった。西日を受けて、不安定な姿勢にもかかわらず眠りこみ、交信時間も知らぬままに日暮れを迎える。

三日、快晴。この辺りの寒さは第二キャンプでも夜間にはテント内で靴が堅く凍るくらいであるが、とくに寒さを意識することなく夜を過ごす。黄金色に輝き出す山々をカメラにおさめ、五時四五分出発。三ピッチで稜線に出た。雪のナイフエッジだ。ここまで長い間頂上だとばかり思ってきたピークは、実は第二峯で、本当の頂上はすぐ右手の間近にそびえるピークであることが初めて解る。いっぺんに体の節々の痛みも吹き飛ぶ。頂上は雪の上にポッカリと露出した大きな岩であった。

九時一五分頂上に立つ。辺りの山は皆すでに低くなっている。ただ遠く北東方、コー・イ・バンダコル、さらにその果てのワハンの山々が白く高く重なりあっている。見はるかすヒンズー・クシュは荒海が凍りついたようだ。頂上に先蹤者の跡を示すものは見当たらなかった。五人の名前とこの遠征に際してお世話になった人々の名前を書き、小さな缶に入れてケルンを積む。一〇時四五分頂上出発。クーロアールはハーケンを連打してアプザイレンで下る。ついに横リス用のハーケンが切れ、アイスハーケンを岩に使用する。一八時、ついにクーロアールから解放される。あたりにはすでに夕暮の気配が迫っていた。待ちかまえていた増永と抱きあって喜びを分かちあう。

ヤジュン第三峯（五七〇〇メートル）登頂

五日、快晴。アフガンの空は今日も澄み切っている。目ざす第三峯（五七〇〇メートル）はカニノハサミの大型判のような頂上を真っ青な空に浮き立たせている。通いなれた雪原を一昨日のクーロアールの出口に向かい、今度はその反対側の雪壁を登る。約二〇〇メートル登って大きなクレバスで休憩する。真向こうに第一峯の頂上への登攀ルートが手にとるように見える。四人で苦闘の跡を語り合う。ここで石田はシネカメラをバトンタッチして帰って行った。

クレバスを抜けると雪の斜面は一段と急になる。アイゼンをつけてのキックステップだ。頂上から派生した支稜に出る。直下には第二キャンプのある雪原が広がっている。弧を描く雪の

線条に目を引かれる。凍りついた波紋といおうか。ニエベ・ペニテンテ群の支稜を登り、最後の岩稜に出る。ここで舟橋からザイルを受けとり、増永、平位でアンザイレンした。

岩稜は最初の登りにフリクションで突破するところがあっただけで、あとはナイフエッジを忠実にたどった。三ピッチ目に頂上に達した。一五時五七分、実に薄い一枚岩である。登ってきた方を残して三方はそいだように切れ落ちている。二人とも頂上のほんのわずか手前の岩にまたがって、頂上の尖った岩角に触れた。

六日、晴。第二キャンプ撤収。

八日、曇。第一キャンプでは時々アラレが降り、一時あたりが白くなる。しかし、ムンジャン谷を隔てた南東の山々には依然として日が当たっている。

九日、晴。ヤジュン左股氷河の調査に行く。そのアイスフォールは本格的なものであり、アイスハーケンがよくきいた。

十日、晴。第一キャンプ撤収。

十一日、晴。ベースキャンプを撤収して六頭の馬で帰りのキャラバンを組む。

十三日、晴。ラジールでイタリアのトリノ山岳会の一行に出会う。十二名でシャロン谷に入ったとのこと、六〇〇〇メートル級一つを含む十一峰に登ったという。

十四日、晴。イスカズールで往きのキャラバンコースと別れてジュルム川に沿って下る。

十五日、晴。キャラバンを終えて、ハザラドセイド泊り。トラックとバスを乗り継いで、十八日、カブールに出た。

これからのヒンズー・クシュ

今後のムンジャン谷上流の登山としては、ナオのすぐ裏手の五八五〇メートル峯。ヤジュン氷河よりの五八〇〇メートル峯（ヤジュン第二峯）、五七九〇メートル峰、五七〇〇メートル峯、の三つが魅惑的である。ヤジュンより上流部のムンジャン流域の山々は次第に低くなり、五五〇〇メートルを割るようになっている。

中部ヒンズー・クシュでほとんど手つかずの状態で残されている、アンジュマンとムンジャンの両河にはさまれた山域の登山についていえば、前記の三山以外はすべてアンジュマン側にルートが求められるだろう。六〇三六メートル峯、五九五四メートル峯等が残されている中でも目立つピークである。

六〇三六メートル峯はヤジュンの頂上から見た限りでは（コー・イ・サフェッドがその大部分を隠していたが）、ほとんど岩峰であるように思われた。

いずれにせよ、これらの山々では氷と岩の両方のテクニックが必要となるだろう。

ゴーレン・ゴル源流を探る（一九六七年）

＝チャコリ・ゾム、イシュペル・ゾムの登頂＝

宮森常雄

はじめに

私たちの隊は、隊の名称を「東京農業大学ヒンズー・クシュ学術調査隊」といい、西パキスタン北部の農業調査が目的である。当初は、チトラル、ギルギット間の二つの主要路に沿った各農村、山岳地帯の踏査に目標をおいたが、農機具輸送の途中、ネパール経由の隊員がマラリアに冒され、治癒を待って、第二案のゴーレン・ゴル流域とカフィリスタンの調査に目標を変更した。

調査は、前期、中期、後期の三段階にわけ、前期は主として言語の集録、農産物の流通等の基礎的なことに比重をおき、以後の調査を容易にするべく準備期間とした。中期はゴーレン・ゴル主流全般に目標をおき、現地参加の大阪府大学生二名の意欲的な協力も得て、源流の山岳地帯踏査、および流域各部落の農業事情調査をした。後期はチトラル周辺、およびカフィリスタン全域の調査に主力をおいた。

隊員は次のとおり。

隊長	宮森　常雄	(35歳)	醸造学科卒　山岳部O・B
副隊長	向後　元彦	(27歳)	農芸化学卒　探検部O・B
隊員	根本　徳彦	(24歳)	拓殖学科学生　探検部
	門田　昭	(24歳)	〃　〃
	石井　一郎	(20歳)	醸造学科学生　〃
	向後紀代美	(26歳)	東大地理学系大学院
	田中　稔	(22歳)	大阪府大　現地参加
	由利　秀夫	(20歳)	〃　〃

ゴーレン・ゴル Golen Gol について

①ゴーレンは地名、ゴルは谷の意味である。チトラルではゴーレンと発音するが、谷の二、三の地元民には、ゴレーンと発音するものがあった。

この谷でもっとも大きな部落が Golen であることから、ゴーレン・ゴルと呼ばれるものと思う。谷には二人の村長がおり、ゴーレンに住む村長は、ウズゴール Uzgol を境として南にさかのぼるウズゴール谷と、下流のゴーレン・ゴル出合までの各部落を支配し、ビルモア Birmogha の村長はビルモアより上流の本流、支流の各部落を支配している。他の地にみられるような部落間のなわ張り根性は少なく、むしろ、他地域から放牧に来る移牧民同志の牧草区域、境界意識の方が厳しいようだ。

部落によって、人の好し悪しの差が大きい。村長の住む部落は一般に親切で、気持もおだやかな人も多く、紛失物もないが、他の部落の場合、貧富の差もあろうが、人夫として使ってみてもタチの悪い問題を生ずる場合が多いようだ。

②チトラルの北東約二五キロメートルにあるコゴージ Kogozi 附近で、チトラル河（マスツジ河）に合流するこの谷は、源流をブニ・ゾムの南西にあたるラーマン河 Raman との分水嶺より発し、出合まで約五〇キロメートルの長さをもつ谷で、支流はいずれも南に大きく発達し、二、三の小さな谷を除いて、すべてが濁流であることから、上流にはそれぞれ大きな氷河の存在が推定される。北側は、谷というより沢と呼ぶにふさわしい程度のものばかりだ。

ゴーレン・ゴルの出合は、両側から数百メートルの垂壁にせばめられて陰惨な感じをうけるが、間もなく広大なU字谷になる。氷河の後退をあらわすモレーンらしき丘が、ゴーレンまで約二キロメートルの地点にあり、更に、バカ Baka とウズゴール間、ウズゴールとビルモア間に見られ、イスツール Istur より上流は、明瞭なモレーンが、イスツールとシャムハーン Shamkhan 間、およびローメン Romēn、ロージュナリー Rojunari、ダンガリクルー Dangari-krhu、シャチオクー Shachio-Khu、チャコリ Chakhori の各部落にあり、レンジュ Renju 谷の出合を最後に、イシュペル Ishpel (or Fargan) 氷河の舌端から分水嶺につづく。

③ゴーレン・ゴルをかこむ山塊には二つの著名な山があり、北東にブニ・ゾム（六五五三メートル）山塊、南にゴーカン・サール Ghokan-Sar（六二〇〇メートル）山塊がある。この二つの山塊を結ぶ直線の中央附近に複雑な稜線をもつ山塊があって、百万分の一GSGSでは完全な空白（赤い斜線）、四分の一マイル（インド測量局）でさえ、ほとんど空白に近いようだ。これは、ロージュナリーより上流の、南に派生する谷の源

流と思われるが、この山塊にも六〇〇〇メートルを越えると思われる山がいくつも見られた。ロージュナリー（六二〇〇メートル）からドローシュ Drosh に通ずるロヒガル・アン Rohigal-an と思われる近くに立派な山があり、地元民はクルイツ・ゾム Qruitsu Zom と答えたが、チトラルからきた狩人はゴーキ・シャーヒ Goki-Shahi と答えた。おそらくゴーカン・サール山塊の一部ではなかろうか。

ダンガリ・クルーの南の谷には約五五〇〇メートルから六〇〇〇メートルクラスの山が二、三見える。どの山を指してもシャチオ・クー Shachio-Khu と答えた。ここにはシャチオ・ハーン部落がある。

チャコリ Chakhori 部落の上流から四分の一マイル地図の空白地帯にあたるが、モレーンの急坂を登れば広い河原となり、谷は三分される。北東に、チャコリ氷河から我々の登頂したチャコリ・ゾム（ca 6000 m）、東にイシュペル氷河があって、南東に逆 S 字状に湾曲しながらつきあげて、イシュペル・ゾム（ca 6000 m）がある。東端附近にファルグ・アン、南にレンジュ氷河が正面のトニウシ・ゾム（ca 6000 m）にぶつかり、東に折れてレンジュ・ゾム（ca 6000 m）の壁下でおわる。

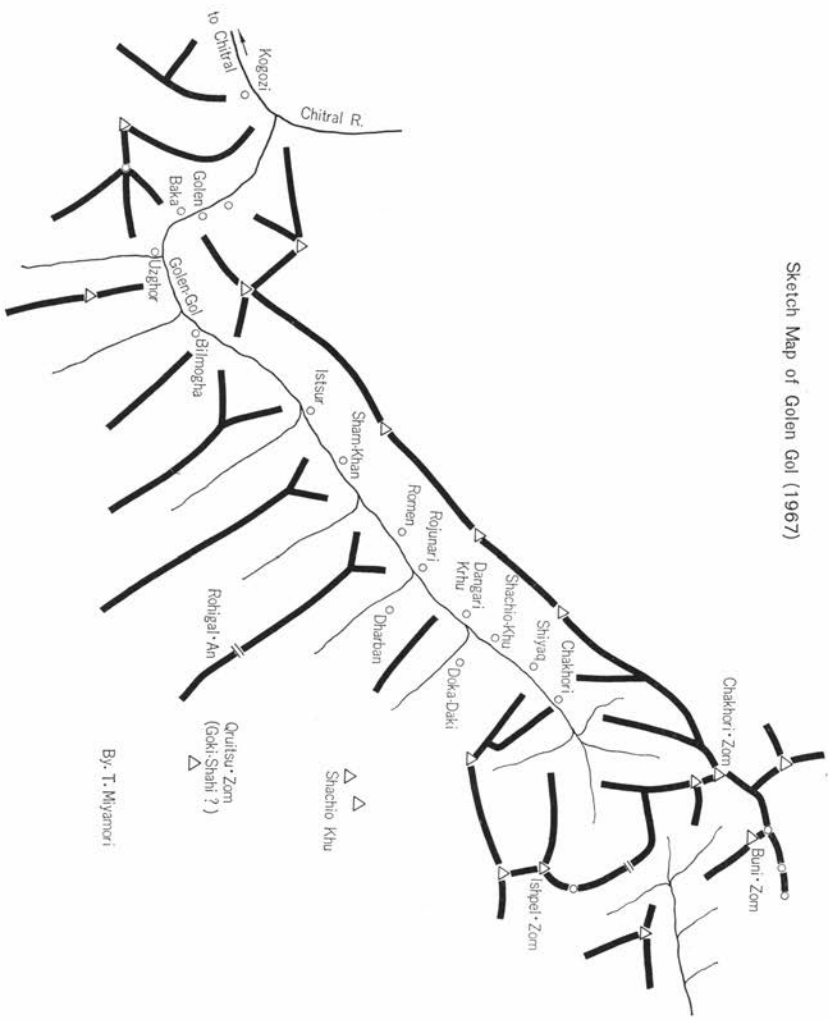
④このゴーレン・ゴルは、ビルモアの村長の話によれば、我々より数ヵ月はやくイタリア人が谷の一部を通過したのみで、近年にいたるまで外国人のパーティーの入域はみられなかったといわれる。

キャラバン

七月二十二日。ジープにてコゴージに向かう。クラクションに追われ泣きだす子供、逃げ廻るロバの群、壁にへばりつく商人、この国は自動車優先らしい。レストハウスまでの約三時間はオーバーヒートをくりかえす。夜間、サソリの出現におどろき、全員戸外に寝る。七月二十三日。早朝集まったポーターは、値も高く、荷が重いと不平をいうので、全員追い払う。リエゾンが案外の働きもので、ロバと馬を調達、値もロバが一日一〇ルピー、馬は十四ルピーにきまり出発。バカで弱ったロバを替えて、ポーター四名を入れる。この日はウズゴール谷出合に泊る。

七月二十四日。きびしい登りが続く。気温三十五度、ビルモアの部落からイスツールまで平地をとばしたが、馬の徒渉にてまどる。二六〇〇メートルのローメンは美しい牧草地だ。数百頭の牛、羊が土煙をあげる。眼病が多く、目薬一滴で充血がひく。馬方はビタミン剤を馬にのませてしまった。

七月二十五日。ロージュナリーまでのモレーンは苦しい。数名頭痛に弱る。ダンガリ・クルーでシャチオ・クーの氷河におどろき、登攀意欲を新たにする。チャコリ・ゾムを眼前に、最後の部落チャコリ（三三〇〇メートル）につく。


Sketch Map of Golen Gol (1967)
to Chitral
Kogozi
Chitral R.
Golen
Baka
Golen-Gol
Uzghor
Bilmogha
Istsur
Sham-Khan
Romen
Rojunari
Dangari
Krhu
Shachio-Khu
Shiyaq
Chakhori
Duka-Daki
Dharban
Rohigal-An
Qruitsu-Zom
(Goki-Shahi ?)
Shachio Khu
Chakhori-Zom
Bunj-Zom
Ishpel-Zom
By. T. Miyamori

七月二十六日。早朝より三パーティーに分散し、チャコリ氷河、イシュペル氷河、レンジュ氷河に偵察を出す。各パーティー共それぞれ氷河の舌端に達し、田中隊員の発見したイシュペル・ゾムを第一目標に、第二をチャコリ・ゾムに決定する。夕方、ポストランナー到着。

七月二十七日。チトラルに残した向後K隊員の病気も治り、副隊長が迎えに下る。隊長高熱のため不調、全員休養のため停滞する。移牧調査。

七月二十八日。停滞。数名頭痛をうったえる。

七月二十九日。早朝出発せるも、イスツールのポーターがストライキをはかる。指導者格の男、チャコリの家長の息子を追い払ったが、見えがくれにつけてくる。二度目のストには我々も腹をたて、一人三ルピー支払って全員解雇する。チャコリ・ゾムから南に派生する尾根の末端、三五〇〇メートル地点にBC建設を終了する。

イシュペル氷河へ

七月三十日。宮森、根本、田中、由利の四名は、南斜面から絶えず落石音の響くなかを荷上げにかかる。モレーンは崩れやすく、高度差約四〇〇メートルで氷河の舌端となる。氷河卓がならび、氷上を流れる川が音をたててクレバスにすいこまれる。約四一〇〇メートルに中間キャンプを建設し、C1予定地偵察後、根本、田中、由利がBCに下る。

七月三十一日。宮森、マコー・ゾム Makho Zom (ca 5000 m) の偵察。十一時頃荷上げ三名到着、南面偵察後BCへ下る。石井が不調という。宮森、根本が工作の準備のため中間キャンプ泊り。

八月一日。宮森、根本はルート工作と上部偵察を兼ねて先行し、田中、石井はBCよりC1建設の荷上げに後続する。唯一の登攀ルートである氷河は、前衛峰の尾根のところで南に湾曲して大クレバス帯となり、上部はアイスフォールにてルート発見できず、クレバス群の中にC2（約四三〇〇メートル）を建設する。田中、由利、石井のアタック隊を送るため、宮森、根本はC2に残り工作。田中、石井は中間キャンプへ下る。

イシュペル・ゾム（約六〇〇〇メートル）登頂

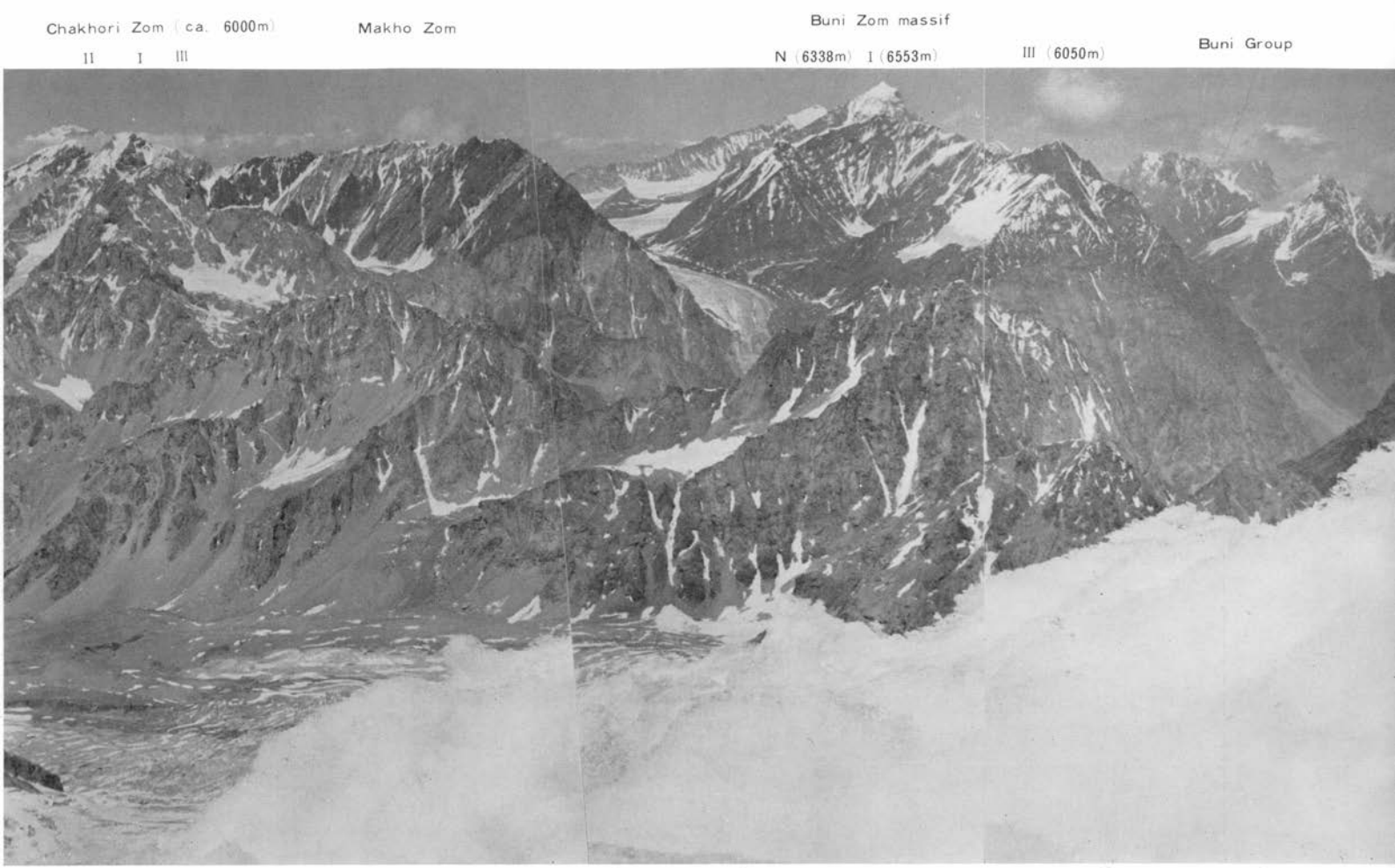
八月二日。アタック隊の三名は、中間キャンプと頂上の高度差が二〇〇〇メートルである事を考え、今日中に五〇〇〇メートル前後にACを設ければ、明日の登頂可能と判断し、朝七時出発する。昨日より早いペースで進み、約二時間半でC1に着く。隊長、根本は食糧、器具のボッカを兼ね工作をやっている。昨日の話通りルートは氷河の左に求めており、我々は右にルートをとる。その結果、スノーブリッジを求めて端へ端へと追いやられ、結局残雪が多いヒドンクレバス地帯を歩くことに



ロージュナリーからチャコリ・ゾムをあおぐ
Looking up Chakhori Zom (ca 6000m) from Rojunari of Golen Gol. (By T. Miyamori)



イシュペル氷河からイシュペル・ゾムをのぞむ
Ishpel Zom (ca 6000m) seen from Ishpel Glacier (or Fargan Gl.) (By T. Miyamori)

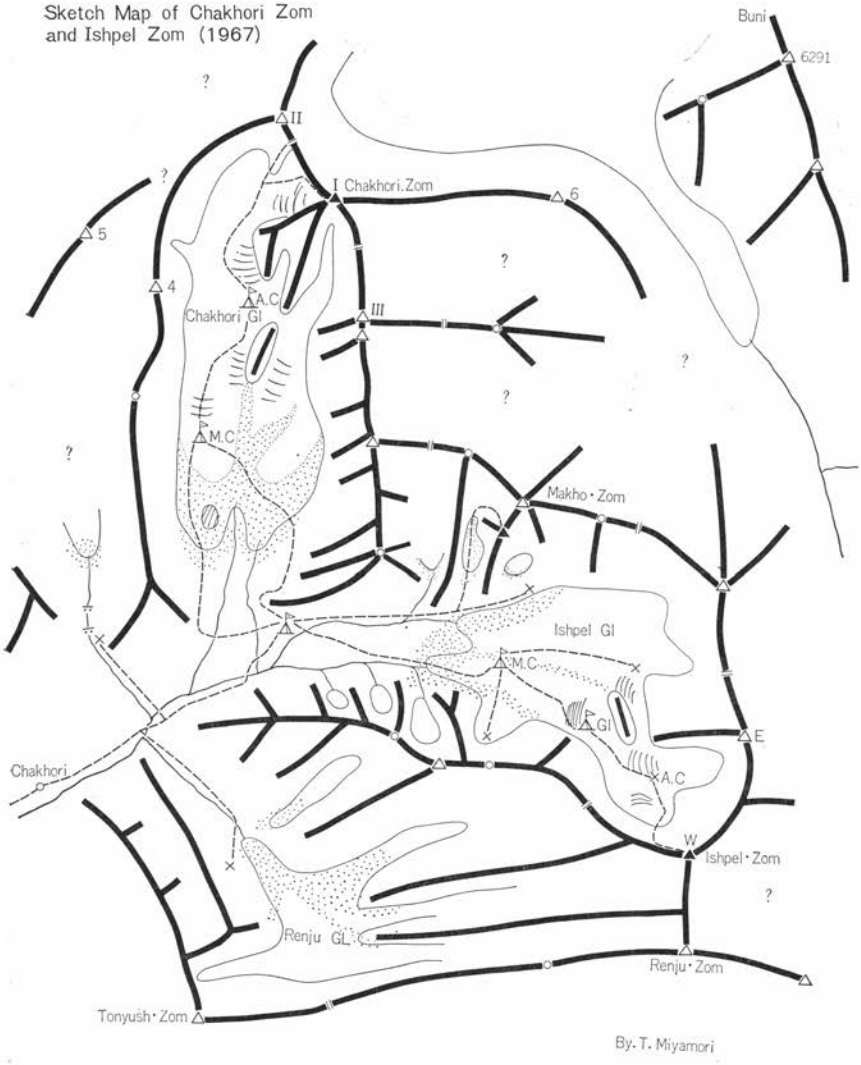


イシュペル・ゾムからブニ・ゾム山塊を望む
Buni Zom massif seen from the west ridge of Ishpel Zom.

Renju Zom(ca. 6000m)　　Shachio-Khu(ca. 6000m)　　Tonyush Zom(ca. 6000m)



イシュペル・ゾムからの展望
A view taken from the west ridge of Ishpel Zom (ca. 6000m). (By I. Ishii)


Sketch Map of Chakhori Zom
and Ishpel Zom (1967)
Buni
6291
II
I Chakhori.Zom
6
5
4
A.C
Chakhori Gl
III
M.C
Makho・Zom
Ishpel Gl
M.C
Gl
E
A.C
Chakhori
W
Ishpel・Zom
Renju Gl.
Renju・Zom
Tonyush・Zom
By. T. Miyamori

なる。なんとかクレバス帯を突破すると、眼前に大氷原が拡がり、登頂の鍵となる氷壁がそれをとりまく。右半分は磨かれた壁とヒマラヤひだが交互に混じり、絶望的な壁だ。左半分は左側ピークとイシュペル・ゾムの間からの氷河が、高差二三〇〇メートルのアイスフォールとなり、青氷が圧倒的だ。さいわい、この一部分が雪崩で埋まっており、七〇度程の傾斜だが突破し、午後五時三〇分、約五〇〇〇メートル地点の氷河の隅にツェルトを張る。ラジウス不調、明朝が心配だ。

八月三日。朝七時、単調な登りがはじまる。四〇メートルザイル一杯の尺取虫だ。次第に傾斜も強くなり、ルートを右の稜線に求める。五メートル程の氷壁の下からクレバスをぬって稜線の下に着き、昼食のチャパティを食う。頭痛がする。雪を砕き稜線へ出ると、レンジュ・ゴル側は切れ落ちている。稜線の傾斜はかなり強く、約五〇度の登りが続く。アイゼンをはずし、レンジュ側から岩を登る。身体の動きは鈍く、無心に攀じ登るのみ、トップの姿が隠れ、「ピークだ！」と小さく聞える。午後二時だ。三人は腰をおろす。我々の前に、思ったより大きくイシュペルの東峰が約一五〇メートル高く聳えて見える。「行くか！」と話は出たが、恐ろしい程長い雪壁を暗闇の中で下山しなければならないことを考えると断念せざるを得ない。空缶にパキスタンのコインを二個入れ、西峰の頂に置く。ティリチ・ミール、イストル・オ・ナール、サラグラールと、ヒンズー・クシュ主稜線の七〇〇〇メートル級の山々が、そしてブニ山群が、南には全くの処女地であるシャチオ・クーの麗峰が間近にあり、パノラマの撮影、ささやかな記念写真を撮った後、頂を去る。

下りの一歩一歩が頭にひびき、痛む。スタカットをくりかえし、午後五時三〇分、ACをたたみ、C1へと下る。小さなスリップ、クレバスへの転落もあり慄然とするが、無事隊長と根本の待つC1へもぐり込む。幸せな山登りができ嬉しさでいっぱいである。（田中記）

八月四日。C1よりBCへ下り、チャコリ・ゾムの準備をする。向後K、元気な顔を見せ、テントの中には花がさしてある。やはりベースだ。実働六時間。

チャコリ・ゾム登攀

八月五日。向後K、田中、由利、石井をBCに残し、チャコリ・ゾムに向かう。BCの北面にそそり立つ巨大な尾根を西に捲き、エーデルヴァイスの群落に一息いれて、標高四三〇〇メートルのチャコリ氷河の舌端につく。頂上から派生する尾根には、チャコリⅢ峰が圧倒的な壁を落とし、落石が数分おきに出る。氷河湖を右に捲く頃、起伏がはげしくなり、見通し悪く、いちいち高所に登ってルートを探す。第一のアイスフォールを左に逃げるが、クレバス多く手間どる。西側の壁に日がかげる

と同時に、氷河がピシリピシリと音をたてて硬さを増す。午後五時三〇分、第一のアイスフォールを逃げきれず、クレバス群の中にテントを張る。実働九時間。

八月六日。六時三〇分出発、直径二〇〇〇メートル程の氷原に出る。トップは二、三度ヒドンクレバスを踏み抜き、肝を冷やす。第二アイスフォールの下部にAC適地あり、更に上部に向かう。およそ四十五度近い。この付近はII峰と頂上に囲まれた井戸の底状で、空が狭い。このあたりから各隊員が頭痛をうったえる。動きは鈍く、第三アイスフォールの下部にルートを求めるが、不規則なクレバスが走り危険と判断し、四九〇〇メートルよりC1に引き返す。午後四時、時間が十分あるのでC1を第二アイスフォールの下部へ移動し、ここをACとする。実働十三時間。

八月七日。六時出発。昨日のルートをとり井戸の底に出る。ペニテント・スノーも堅く、第三を左に避けてコルに向かう。股を越すペニテント・スノー、歩きにくいが良きホールドとなり高度を増す。気分的に非常に楽だ。五〇度程の傾斜を乗りきり五三〇〇メートルのコルにとび出す。北東に大きくプニ・ゾムが見える。足下がナイフのように切れ落ち八〇度位の傾斜で一気に落ち込んでいる。頂上を取り巻く帯状のアイスフォールにルートを求める。五四〇〇メートル。アイスビルディングと呼べる程だ。上部は三、四の小アイスフォールをのぞかせて、そのままストレートに頂上まで行けそうだ。トラバースしながら真西に廻り込む。カッティングする青氷はピッケルをはねかえす。途中小さなカミーンを見つけて、向後、根本が強引にもぐり込んだが、上部がハング気味で撃退され、右端のアイスフォールの切れ目を登るが、ここも上部の傾斜がきつすぎ、アイスハーケンも簡単に曲がるほどの硬い氷で、やむなくツララをぬって後退。やはり稜線の見える所までもどり、時間切れのためアタックを断念する。天候悪化の気配あり。午後四時、AC着。BCまで空身でマラソン、午後八時三〇分到着。実働十四時間。

八月八日。農業調査のため、二名チャコリ部落へ、由利はチトラルに下る。

八月九、十、十一日。農業移牧調査。

八月十二日。七時、向後他四名がチャコリ・ゾムのアタックに出発するのを見送る。午後よりBC付近のスケッチマップ作製のため、南斜面の小氷河に行く。夕方NHKの最終放送が入る。

マコー・ゾム四峰（約五〇〇〇メートル）登頂

八月十三日早朝四時BC発。イシュペル氷河舌端左を目指し、モレーンを行く。移牧のあとがいたる所にあり、道らしきものが数十本も重複して見える。四一〇〇メートル付近で突然

そのあとがなくなり、私の考えるには、ファルグ・アンの存在が疑問に思えてくる。見渡した所、地元民の通れそうな峠はひとつも見当たらない。最低鞍部付近もクレバスが多く、傾斜も相当なものだ。やむなく、七月末に偵察しておいたマコー・ゾムから南に派生する尾根の左に入りこむ。絶えず落石はあるが、一定の時間をおいて発生するようだ。イシュペル氷河より離れて小モレーンを登る。カール状のこの沢は、やはりガレの下は青氷であり、舌端より押し出す岩が落石の原因だ。囲りが岩のせいか、案外暖かく、のびのびと登れる。クレバスは岩くずがつまり、アイゼンをはずす。再び頭痛がくる。左に本峰の壁がどっしり構え、登攀不可能。本峰とモロイ層の赤い壁にはさまれた沢を登る。周りは見上げるように高い。帰路のため二ヵ所にフィックスする。一本の大きなルンゼの中は岩くずが氷に堅くはりつき、アイゼンなしでも登れそうだ。すぐに息がきれ、三〇分程休む。ここにザックを置き、ザイルとカメラのみで稜線にたつ。ピークまでの約一〇〇メートルはおそろしい程息が切れた。単独のささやかな初登頂、スケッチマップを書く。珍しい地衣類をみつけ、ポケットに入れる。イシュペル・ゾム全景をカメラにおさめて帰路につく。二度のアプザイレンに恐怖を感ずる。モレーンをかけ下り、BC着午後七時。実働十五時間。

チャコリ・ゾム（約六〇〇〇メートル）登頂

八月十二日、宮森に見送りをうけて、向後M、向後K、根本、田中、石井の五名が、チャコリ氷河に入る。田中、石井は、調子悪く頭痛、モレーンの登りに苦しむ。病後のKは快調。十八時、ACに到着、攻撃の準備をする。八月十三日、昨夜ばらついた雪もあがり、アタック日和となる。田中―石井、M―根本のオーダーで第一のアイスフォールにとりつく。前回に比較して、形も一変し、前回残した赤布は、ほとんど確認できないが、セラックを縫い苦労して通過する。昨夜の雪がクラストしてピッチはあがるが、全員の疲労はげしく、約五〇〇〇メートル地点にて断念。

八月十四日、五時半出発。昨日のオーダーにKを加え、再三にわたる攻撃の失敗が、第三のアイスフォール五〇〇〇メートルにありと判断し、コルより頂上へと続く稜線に、活路を求める。相当な傾斜だが第三アイスフォールを左に捲き、第四をきわどく捲いて稜線に出る。ブニ側の斜面は、ほとんど垂直に一五〇〇メートル程切れ落ちて、思わず恐怖を誘う。だが、稜線には、急斜面ながらペニテント・スノーがあり、よいホールドを与えてくれる。「これはいける」。全員の顔がほころぶ。しかし、上部のアイスフォールは、フィックスが必要だ。たえずブニ側を見下ろし、背すじを冷やしながら強引に工作する。サラグ

ラール、ルンコーの白さが、目にしみる。かなりの時間を費やして突破するも、高度の影響か、全員ペースが鈍る。巨大な雪庇を大きく巻き息を切らす。チャコリⅡ峰はすでに低い。十三時、先行する田中、石井の声が響く。「やったぞ」。急に元気が出て心ばかりあせる。頂上は岩の露出も見られず、ハーケン一本と赤布に包んだチャパティを置き、約一時間程休息後、下山を始める。十九時、AC着。

八月十五日。ACを十三時発、十九時、BC着。（根本記）

カフィリスタンについて

カフィリスタンはチトラルの南西約五〇キロメートルにあり、ジープで二時間。カフィールとは異教徒を意味するペルシャ語であるという。アフガニスタンとの国境に面する約四五〇〇メートル近い山が多くあり、いずれも氷河を持つ。これらの山あい、ビリール Birir、ボンボレー Bomboret、ルンブール Runbur の各谷に部落が散在する。人口は全部で二五〇〇～三〇〇〇人と云われ、風俗、習慣、言語とも、同州内でありながらチトラリーとは異なり、独自の古い文化を有している。我々はこの地域の祭礼を主とする人文調査を行なった。男子は外部との接触が多いため、ほとんどチトラルと同化していると思われるが、女子はまだ一様に貝を縫いつけた長帽子をつけ、濃褐色の厚い布をまとっている。化粧には、顔にトマトの種子を貼りつける等の風習も見られた。回教国で禁止されている酒も、この地では、秋を迎えると酒作りの祭りをして果実酒を作る。チトラルでは男女共移牧地に移り住むが、当地の移牧は男子のみで行なわれ、協業作業の型で行なわれる。男子が家畜を追い山に居る間、女子は部落で農作業を行なう。当地ではあたりの豊富な材木を活用する。チトラル近辺の橋は、そのほとんどが日本の猿橋型であるが、この技術は当地から出たものと云われ、潅漑水路も材木を利用した橋型が見られる。墓地も、チトラル一帯の土葬に対し、棺桶が使用され、葬儀も埋葬も異なった方法がとられている。副葬品の偶像は芸術品に近いものが見られる。家屋も木造三階建のものが数多くある。木材と石組合わせの家屋では、突き出た石一つない程整然としている。言語はやはり文字がなく、独自のカフィール語を用いるが、コワール（チトラル語）で十分意志は通ずる。澄み切った渓流の水と緑は心の安らぎを与え、豊かさを思わせる。（門田記）

ヒンズー・ラジ　一九六七年

海老原　道　夫

はじめに

私と高橋善数のパーティーは、海外登山を計画するにあたって、二つの矛盾する目的を持っていた。

一つは、登山者の記録のない未踏地の踏査であり、もう一つは初めて経験する高山ではあるが、「ヒマラヤ鉄の時代」へのさきがけとしての、人工登攀も含まれる岩や氷が主体のディフィカルト・ルートの登高というものだった。しかし、結果として未踏山塊のヒンズー・ラジを知るにおよび、後者の目的は少人数によるラッシュ・タクティクスによる登攀という行動にとどめざるを得なくなった。なぜなら「ラジ」については、その中心部である「トゥイ・アン」周辺の写真もなく、地図はイギリス陸軍当時のもので、各峰のたたずまいも知ることが出来ないからだった。更に「トゥイ・アン」まではチトラルから合計九日間のキャラバンを続けなければならず、そのための経費は、登攀道具と日本から持参するはずの高地用食糧を大幅にけずり取って、捻出する以外に方法はなかったからである。

そのような訳で、私たちは食糧も含めた全装備が、たった一〇〇キログラムという超ライト・エキスペディションになり、少々心細い感じでチトラルを出発したのであった。

キャラバンとポーター

チトラルからモロイまでジープで行った後、マスツジ、ワッサムを通りトゥイ・アン下部のガルピガルまで合計九日間のキャラバンだったが、前半のブレップまでを馬とロバで荷を運んだために、連日の行動が平均三〇キロメートルにもなり、非常にスムーズに進むことが出来た。また、モロイで雇った道案内兼通訳のオーランの活躍でポーター達への意志の伝達もよく、毎日が楽しく過せた。馬方にしても中々に責任感が強く、安心して荷を預けることが出来た。

後半に雇ったポーター達も、少々チップの要求が多いのをのぞけば、それぞれが誠実で快活な人々で、私たちと彼らの間には友情さえかよい合うようになり、荷物の盗難の心配などまったく不必要だった。

また、負傷した私を背負っての帰路の強行軍も、彼らは全力

を出して頑張り、連日、早朝から午後の八時頃までひたすら歩き続けてくれたのだった。

偵察とシャ・ゾム（四九六〇メートル）初登頂

七月二十一日、私たちとオーランそして五人のポーターからなる隊は、いよいよキャラバンの最後の一日を踏み出した。めざすトゥイ・ゾムは刻々と頭上を圧し、道は前山の岩壁のすそをからみ、氷河のモレーンを越えて行く。ポーター達ははるか下方であえいでいるが、二人のサーブははやる心にせかされて、ガルピガルの草原に登る。

トゥイ・ゾムの南壁はすぐそばにそそり立ち、その二〇〇〇メートルもの垂壁は雪さえとどめていなかった。この谷の奥に見えるそれぞれの峰も、その山腹は一様にけわしい岩壁をめぐらし、私たちの知るヒンズー・クシュとははるかにかけ離れた姿を見せ、その岩峰群の一つでも陥れることが出来るかどうかまったく自信をもてないほどだった。

おくれたポーターたちが疲労しきって到着した。私たちはトゥイ・アンのベースをあきらめ、このガルピガルにベース・キャンプを設定した。

小型の冬用テントがたった一つの最小規模のベース・キャンプだが、この地へ来た最初の登山隊としての誇りがあった。

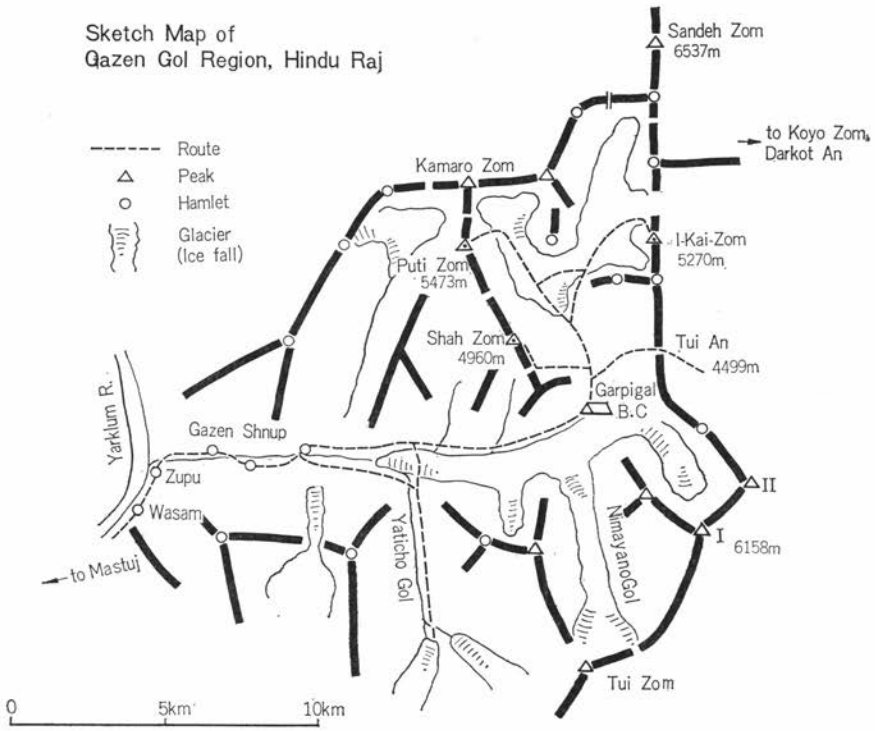
翌朝、テント・キーパーにオーランを残した私たち二人は、トゥイ・アンに登り、トゥイ・ゾムと他の峰々への登路を探ろうと、長いキャラバンの疲労を背負ったまま峠への雪面を登った。

高度はすでに四〇〇〇メートルを越え、たった五〇〇メートルの登りに二時間も費した。トゥイ・アンにはい上がり、私たちは一瞬絶望に打ちのめされた。トゥイ・ゾムに弱点があるとすれば唯一の弱点が見出せるかもしれないと期待していた北面は、平均七〇度もある岩壁がさらにツルツルの氷でおおいつくされ、大氷壁のいたる所に巨大なブロックがついており、時々すさまじい破壊力を秘めた雪崩が一七〇〇メートルもの高さを落下して、私たちの登攀意欲をみじんに打ち砕いてしまった。

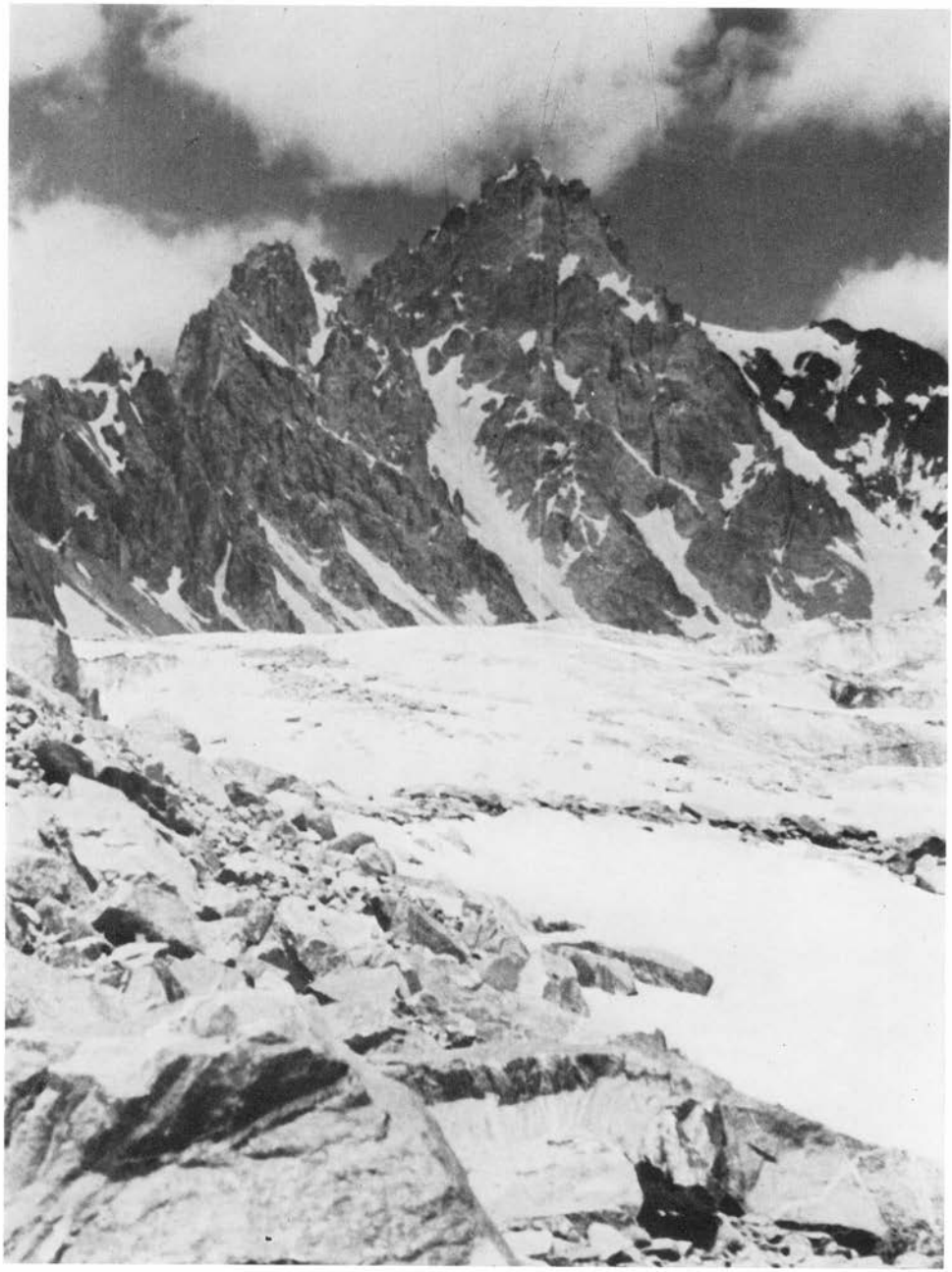
更に峠の東側、ギルギット州の峰々はあまりにも遠く、ポーターを全員帰らせてしまった私たちには、まったく手の届かない存在であった。

かくしてチトラル側にだけ的をしぼった私たちは、トゥイ・アンと氷河をはさんで西方のパラノ・アンから北に続く山稜上の、このあたりでピークと呼ぶにはややみすぼらしすぎるシャ・ゾムだけを登頂可能な峰として発見したのである。シャ・ゾムはトゥイ・ゾム北方のトロイ・カイ・ギニ山群の偵察には絶好の位置にあり、シャ・ゾムに登る目的は初登頂より偵察行にあると考えた。

翌七月二十三日、私たちはアンザイレンの必要も無く、パラ



(by Y. Takahashi)



ビバーク地からプチ・ゾムをのぞむ
Puti Zom (5473m) seen from the bivouac site. (By M. Ebihara)



プチ・ゾム頂上からトゥイ・ゾム（6158m）をのぞむ
Tui Zom (I. right and II. left) seen from the summit of Puti Zom. (By M. Ebihara)

ノ・アンへの雪渓を登りつめ、ガラ場と雪壁のミックスする山稜を登り、シャ・ゾムの初登頂に成功した。標高四九六〇メートルのこの峰には、それまで名前も付いていなかった。シャ・ゾムとは日本語に訳せば単に「黒い山」という意味にしかならないが、私たちは登頂後、テント・キーパーのオーランから「黒」という原地語を聞き出して、あっさりそう名付けてしまった。しかし、平凡なこのピークも、私たちの第一の目的である偵察には十分に役立ってくれた。目標の一つであったサンデー・ゾムがこの谷にはなく、更に北方の氷河に位置することが発見され、これも私たちには手が届かないことが判明した。これで主目的であった二つの峰とも登攀することが出来ないことになってしまったが、私たちのいる氷河の東俣の奥にイ・カイ・ゾムがあり、北面からの登路を発見することが出来たのだ。

私たちは標高四〇〇〇メートルのベースからシャ・ゾムを日帰りで登ってしまったが、キャラバンからトゥイ・アン、シャ・ゾムとこの間一日の休養もなかったため、さすがに疲労を感じた。そこで、イ・カイ・ゾムへのアタックを控えて、翌日は一日ゆっくりとベースで過ごすことにした。

ところで大変尾篭な話だが、私はキャラバンの後半からはげしい下痢に悩まされていた。一日に数回も物かげにかけ込みながらの行動には非常に苦しい思いをしていたのだが、この休養日にオーランの炊事を見ていて、その一因を発見することが出来た。オーランはまず湯をゴトゴトと沸かし、その中へ生米をいきなりホオリ込んだものである。私は原地米はうまく炊けないものと頭から思い込んでいたのに……。

イ・カイ・ゾム（五二七〇メートル）初登頂

七月二十五日、三日分の食糧と装備に背をこごめた二人は、夜が明けきらないベース・キャンプを後にして東側の氷河へ向かった。

イ・カイ・ゾムへのアプローチは、氷河右岸の傾斜のゆるいモレーンから氷河を横断して行くものと、左岸の大氷壁の付近を直登するものとがあったが、私は後者をあえて主張した。いずれにしても手に入れることの出来る頂上なら、その難しさを十分に味わい知りたいし、この高度での岩場の登攀を是非経験して、後々の役に立てようと考えたからである。

暑く長いガラ場を登りつめると、頭上やや左に巨大なアイス・ビルディングの乱立した大氷壁が立ち並び、正面にはカラカラに乾いた岩壁が立ちふさがっている。

私たちはその基部で用意を整えて壁に向かったが、二時間もあれば十分と考えていたこの二〇〇メートルの岩壁を乗りこえるのに五時間もかかってしまった。空気がうすいために、ちょっとした悪場でも荷を背負ったまま行動すると、確保出来るテラスに登りつくまでに貧血を起こして、墜落してしまう恐れが

あり、慎重に荷を吊り上げたりしたため、そのたびに貴重な時間や体力をどんどん費やしてしまい、壁を登りきった私はフラフラとすぐ上のテラスにヘタバッてしまい、まだ日暮れまでは五時間近くもある三時頃だったが、そこでビバークすることになってしまった。そして星が輝き出す頃は、もう何もすることのなくなった私たちは、思いきりノンビリとロマンチックな夜を過ごそうと、頭に浮かぶ歌を片っ端しから歌いまくり、遠い日本に想いをはせたのだった。

イ・カイ・ゾムは日本語に訳すと「長女の峰」となる。これも私たちの命名だが、トゥイ・アンから北の山稜がコーヨー・ゾムから連らなる山稜と交わるまでの間に、三つの岩峰が三角形の格好に立ち並んでいるので、その山群をトロイ・カイ・ギニ・グループ「三姉妹峰」と名付け、高いのから順に長女、次女、三女の峰と名付けたのである。シャ・ゾムにでも登らないと見ることの出来ないこれらの峰は、もちろん原地名など付いていず、原地の人々はこのあたりの山を全部「トゥイ・アン・ゾム」と呼んでしまっている。道案内人のオーランでさえ、登頂後、ベースから見える岩峰の奥のもっとずっと高い峰に登ったのだと伝えても、ピンとこない様子だった。

翌二十六日、ビバーク地を後にして氷河を遡り、枝氷河を横断してイ・カイ・ゾムの北西側の基部に立った。小休止の後、アンザイレンして氷化した雪壁をツルベ式にどんどんザイルをのばしながら登高した。シャ・ゾムからの偵察では北側の山稜がスカイラインに見えたため、三〇度位の雪面をテクテク歩けば頂上に着くように見えたが、さすがに山が大きく、登ってみるとスノー・リッジがあったりして、けっして簡単ではなかった。ピッケルとアイスバイルを総動員して登ると、五ピッチ目の氷壁を左にトラバース気味に登って、頂上直下のコルに出た。さらに一ピッチ垂直の氷壁を含むルートを登ると、ついに頂上に立つことが出来た。

頂上は硬い万年雪の下にあり、その雪は雪庇となって南壁の上にたれ下がっており、のぞき込むことも出来なかったが、トゥイ・ゾムの北面と北方にそびえるサンデー・ゾムの眺めは素晴しかった。六五〇〇メートルのサンデー・ゾムは、ごく近い位置に台形の岩峰と鋭い槍の穂先のようなピークとが、まったく独立して同じ位の高さを誇ってそびえ立ち、どちらがサンデー・ゾムと名付けられているのか判然としなかった。しかし、どちらを登頂するにも非常な困難が予想され、四、五名の一騎当千のクライマーがそろって初めてアタック出来そうな山である。

頂上を後にして氷壁部を慎重にクライミングダウンした後、コンティニュアスで一気に氷河までおり立った。さっそく次の目標を検討したが、意見は私の主張する現在の態勢をそのまま生かして、この東側氷河の最奥部の頂上付近に三角形の岩場を

もつ六〇〇〇メートル峰をアタックする案と、高橋の一度ベースに帰り、登頂のチャンスの多そうな西側氷河のプチ・ゾムへ登ろうという案に分かれてしまった。が結局の所一つでも多く登頂すべく、可能性の大きいプチ・ゾムへ向かうことに決定した。急いでビバーク地を撤収して、氷河を西に横断し、東西氷河の分岐点の右岸のモレーンに、次回のアタックに必要な登攀具、食糧等をデポして、一気にベース・キャンプまで走りくだった。

プチ・ゾム（五四七三メートル）初登頂

プチ・ゾムは日本語で「愛の峰」と呼ぶ。高橋も私も各々日本では婚約者が待っており、もっとも形の良いこの峰の登頂に成功出来たら是非「恋人たちの峰」と名づけたかったのだが、結婚するために女性を金や牛などで買い取るこのチトラルでは恋人という者が存在しないらしく、適当な言葉が見つからないので仕方なく「愛の峰」と呼ぶことにしたのである。

七月二十九日、プチ・ゾムの東稜への氷河をクレバスを避けながら登る。

私たちは前日デポした荷物を西側の氷河のモレーンに運んでビバークし、今朝早く出発して登って来たのだった。

この氷河は東側に比べて傾斜もきつく、蛇行しているのでクレバスも縦横に走っている。

南面から見るプチ・ゾムはピラミッド型の岩峰で、南壁は頂上から氷河まで一直線に切れ落ちている。

登路としては、東に落ちる岩稜のピナクルを一つ一つ乗り越えて肩に出る以外に無いものと思われた。従って私たちは相当な岩登りをするつもりで出発したのだったが、氷河を登り東稜の基部に立つと、東稜の北面がかなり状態の良い雪壁となっていることがわかり、そこをトラバース気味に登った。雪は軟らかく技術的な問題は何も無く、氷河を登るときはつけていたザイルもはずしてどんどん登った……。と書きたいのだが、私が軽い高山病にかかってしまい、高橋との間が離れる一方で、彼は肩で三〇分以上も私を待たなければならない有様だった。

肩からはアンザイレンして、頂上稜線の雪庇の下を約一五〇メートルも右（西）へトラバースして庇を乗り越え、ペニテント・スノウの立つ雪稜を四〇メートル登って頂上に立った。

標高五四七三メートルのこの頂上を手に入れるために、私は高山病の症状が出てからの四～五〇〇メートルの登りに、非常な苦しみを味わい、何度も登頂をあきらめかけたが、気力を総動員しての初登頂だった。

しかし、プチ・ゾムはそのまま私をあっさり帰すことはしなかった。午後の日光は氷河をいろいろの形に変形させ、私たちが朝方セットしておいたペナントが役に立たなくなる程に、クレバスの幅を広げてしまった。私はそこで再度気力を充実さ

せ、トップに立ってクレバスを右に左によけながら、軟らかくなった雪をかきわけ、クレバスに胸まで落ち込んだりした。やっとビバーク地のモレーンにたどりついたときは、身も心もクタクタになっていた。再び両氷河の分岐点に荷物をデポすることも考えたが、高山病の心配のある私は少なくとも二、三日の休養が必要と思えたので、一応全部ベース・キャンプへ下ろすことにした。

すでにうす暗くなったモレーンから雪渓におり、高橋も私もバラバラに勝手にルートを選びながら、フラフラとベースにたどりついた。

あとがき

その後、私たちは食糧の不足等の関係からベースをズプーに移し、カマロー・ゾムへ向かったが、私の左足のほんの小さな傷がひどく化膿して歩行出来なくなり、登山活動を中止し、チトラルに向かったのである。

最後にチトラル以後歩行の自由を失った私が、お会いした人人の御親切、特に大阪府大の由利氏、カブール駐在の笹島氏御一家、そして広島大隊のドクターと隊員の皆様に紙上を借りて心からお礼を申し上げます。

山岳　第六十一年

（一九六七年三月刊）

登山界と登山者
山岳会創立前後
六十年を振返って
登山の文化史

松方三郎　武田久吉　槇有恒　桑原武夫　高橋進　鹿野勝彦　吉川尚英　杉田敏男　藤島博一　矢本真夫　塚野琲　佐藤敏之　宮原巍　細野淳美　川上隆　塚崎義人　芳野満彦　吉尾弘　星川政範

ゴジュンバ・カン登頂（一九六五年）
ローツェ・シャール（一九六五年）
キンヤン・キッシュ（一九六五年）
ベルー・アンデス（一九六五年）
困那山の話（一九六五年）
ダウラギリII峰（一九六五年）
西部カラコルム・ディラン峰（一九六五年）
コー・イ・モンディ（一九六五年）
ミール・サミール紀行（一九六五年）
グリーンランド・スイスの踏査と
フォーレル峰の試登（一九六五年）
コルディエラ・ノルテ（一九六五年）
ローガン峰北面インディペン
デンス・リッジ（一九六五年）
マッキンレー南壁東稜（一九六五年）
マッターホルン（一九六五年）
ドリュの北壁（一九六五年）
ドリュの西壁（一九六五年）
アイガー北壁登攀報告会の記録
狩場山雑記
連嶺一千キロ
創立六十周年記念行事

山川黙氏（武田久吉）、北沢基幸氏（編者）、柴山乙彦氏（編者）、曽原喜久蔵氏（藤島敏男）、森本次男氏（阿部恒夫）、橋本三八氏（月原俊二）、福田庸雄氏（冠松次郎・行方沼東）、村木潤次郎）、竹中要氏（木原均）、斎藤清太郎氏（高橋定昌）、君島久登氏（三井松男）、山川勇一郎氏（深田久弥・石井鶴三）

追悼

海外登山年表　松田雄一
図書紹介・会務報告・日本山岳会定款・支部設立並びに運営等に関する規定・英文梗概

A5判三四〇頁・写真六三葉・地図十八面

一九六五年

ティリチ・ミール 一九六七年

高島一芳

許可を取得するまで

微妙な国際情勢を反映してか、ヒマラヤを擁するネパール、インド、パキスタン各国共に登山許可を得ることは、はなはだ困難な状況下にある。幸い、我々は永年にわたり努力を傾倒した結果、一九六七年、ヒンズー・クシュ山脈の最高峰ティリチ・ミール（七七〇八メートル）の登山許可を取得した。

一九六四年、当初の計画は同じパキスタンのカラコルムであったが、カシミールの印・パ紛争地域に近接していたために問題にならず、申請は却下された。同時に、印・パ情勢に根本的な変化がない限り、登山許可は全く絶望との情報がもたらされた。しかし、我々は少しも怯まなかった。よくよく熟考した結果として、パキスタン政府はカラコルム地域は禁止するといっているので、パキスタン・アフガニスタン国境に連らなるヒンズー・クシュ山脈についてまで、禁止措置の適用を行なうことは疑問に思えた。そこで更に慎重を期し、問題となる恐れのある諸点を避け、①完全にパキスタン領内にあり国境紛争の恐れがない。②パキスタン政府関係者に名が知られている（知名度の高いこと）。③近年高まりつつある彼らの自尊心を傷つけないよう既に登頂がなされている。④ヒンズー・クシュ山脈中の最高峰である（これは我々の希望であった）。以上の点に配慮をして打診を行なった。丁度東京オリンピック開会式の当日である。前記事情、特にカラコルム地域でないことを強調した結果、パキスタン側もその事実を認め、また、ヒンズー・クシュには例の尨大な申請書は必要ないとのことであったが、同年十二月上旬になり、改めて正式なフォームによる申請書を提出せよとの要求があった。

明けて一九六五年、カラコルムも西に寄った地域の山に対し、奇蹟とも思われる許可が東京大学隊、京都府岳連隊に相次いで下りた。我々も一層の希望を持つとともに、パキスタン側からも間違いなく許可はするから、今暫く待つようにとの連絡があった。これについては全く疑問を挟む余地はなかったが、二月、三月と何ら音沙汰なく時は過ぎて行った。我々も坐することなく連日陳情を重ねると同時に、出発準備も平行して進めて行った。ところが出発日時も決まった四月六日、「本年（一九

六五年）の許可は出来ないが、明年希望するなら優先的に許可を与えるから至急申請書を提出せよ」との通告があった。準備の進捗度は九〇％にも達していたが、やむなく本遠征は一カ年間の延期を決め、翌年に備えて隊員の中から調査隊を編成、有岡達郎、関谷宏、仁科正純の三名を急遽現地に派遣した。

彼らは六月五日カラチに集結、列車で北上、ペシャワールより陸路ローワライ峠を越えてチトラルに達した。当時のチトラルは訪れる外国人など数少なく静かな佇いを見せ、チトラルを訪れた二番目の日本人だと歓迎を受けた。ティリチ・ミールは指呼の間にあり、彼らは小躍りした。だが日に日に悪化しつつあった印・パ関係は最悪の事態に達し、一触即発の異常な緊張はこの奥地までも感ぜられた。その当時、チトラルに入るには政府のツーリスト・ビューローで発行するイントロダクション・カードの携行が必要であり、有効期間はペシャワール出発から帰着まで一週間という厳しい制限であった。彼らは途中トラブルがあり、出発より六日目にチトラルに達した。ペシャワールの係官によれば、カードの延長はチトラルで可能であるとのことであったが、A・P・A（Additional Political Agent）の係官は言下に拒否し、チトラル以奥への立入りは阻止された。同年には二、三のパーティーが入域していたが、どのような経路を踏んだのか不明であった。非常に残念ではあったが、ティリチ・ミールを望見したことにより、調査隊の目的は達せられた。

翌一九六六年、許可は余程のこと（印・パ開戦）がない限り必然的に得られるものと考え、隊員仁科正純を現地に留め、パキスタン政府との折衝および現地語であるウルドウ語修得を目的に、カラチ大学ウルドウ語科（外国人コース）に一ヵ年留学を決めた。調査隊が帰国して間もなく、もっとも恐れていた印度・パキスタン戦争が勃発した。幸いなことに戦争は短期間で終わったが、諸般の情勢からして当分の間は許可が下りる見込みはないものと判断され、絶望感が広がった。現地仁科からは「戦争による影響は少ない」と連絡があったが、当然一九六六年の申請は却下された。

同一九六六年七月二十一日、カラチの有力紙「DAWN」に「インドのパキスタンに対する侵犯行為により引起こされた情勢のため、有名なカラコルムの山々に来ることの出来なくなった世界各国の登山隊は、来シーズン（一九六七年）より再び遠征を開始することが期待出来る。」という記事が掲載された。

再び見通しは明るくなった。同年九月にパキスタン政府の交通大臣 Khan A. Sobur Khan が来日した折、地元出身の国会議員を通じ積極的な協力を懇願した。

一九六七年一月は何事もなく過ぎた。過去の例では遅くとも前年末には許可について何らかの通告がなされていた。また駄目なのであろうか。幾度目だろうか、諦らめの感情が全てのも

のを覆い始めた。時を同じくして計画を持った多くの隊はいずれも転進して、アラスカ、南米、アフガニスタンにと続々出発して行った。我々の中にも非常に〝危険〟な思想が支配しはじめていた。計画を貫き通すか、転進するか、岐路に立った。

幸運は突然にやって来た。二月十八日「パキスタン政府はティリチ・ミール遠征を許可する。至急計画書を提出せよ」一同涙を流さんばかりに狂喜した。が、その喜びは長くは続かなかった。計画は出来ているものの、一九六五年の例もあるので事を慎重に運び、実際面の動きは差し控えていた。出発予定まで約二ヵ月、余りにも準備期間がない。更には許可の真偽についての確認に手間取り、実際に行動に移ったのは三月十日であった。余す所四十数日である。チャンスは逃がせない。不可能を可能にするべく、不眠、不休の努力を続け、どうにか四月二十二日、装備一切を業者の倉庫に搬入、五月五日横浜出港のアメリカン・プレジデント・ライン、P・アダムス号に積込みを終わった。

一息つく間もあればこそ、愕然とすることが持ち上がった。五月十二日、パキスタン大使館より「ティリチ・ミールにはチェコスロバキア隊（L. Vladimir Sedivy 以下十三名）も遠征を行なうので日本隊は計画した日程を出来れば変更するよう」との通告があった。全く青天の霹靂、よくよく質すと、なんと我々と同じルートからの計画であった。当然受け入れられぬと拒否の回答をした所、「パキスタン政府は関知しないから当事者間で調整を行なえ」と手を引いてしまった。仁科に強硬な抗議を行なわせたが反応はなかった。日本大使館筋でもパキスタン政府の決定であるので従えとのことであった。チェコ隊が許可になったいきさつについては色々と支障があり、日本では明らかにすることは出来ないが、誠に残念なことであった。今更山の変更も出来ず、ただ成行きにまかす他なかった。

アプローチ

六月七日、有岡は現地の仁科と合流し、入国業務その他、諸手配を行なうために先発した。一番の懸念は港湾施設が不備なカラチ港では数十日の沖待ちは普通の事とされ、荷上げがうまく出来るかという問題があったが、パキスタンとしては驚異的な早さで、一個の紛失もなく、我々の手に落着した。カラチ日本領事館（当時、日本大使館カラチ事務所）の御好意で裏庭に集結した荷は、六月二十五日、トラックで近藤、山本の二名が同乗してラワルピンディに向かった。約四十八時間後に到着した荷は先発した仁科の手配により他のトラックに積替え、ペシャワール空港に六月二十八日に到着した。先発のチェコ隊は約二週間先行し、ペシャワールよりローワライ峠越えの陸路輸送を行なった。我々は予定通り空輸を行ない、運よく第一回は六月三十日、定期便フォッカー・フレンドシップ機を借り切り、近

藤、山本が先行した。小松、高野、前田はペシャワールに待機し物資購入。高島、有岡、仁科、高橋はラワルピンディでの諸手続を終え、リエゾン・オフィサー、パキスタン陸軍大尉 Irshad Ullah Tarar（イルシャード・ウッラー・クラール）を伴い、七月二日ペシャワールに到着した。以後山岳地帯の天候が安定せず、後日重大な結果を招く要因となる数日が過ぎた。七月七日、今日飛行しなければ陸路輸送に切り換える手配をして空港に待機する。チトラルからの連絡では強風が吹き、飛行は難しいという。遅れること二時間、飛行と決定した時は思わず歓声が上がった。雲間より眺めたカラコルム、ヒンズー・クシュの景観は圧巻であった。尾根すれすれに身の毛のよだつ飛行を続け、土煙り舞い上がる河原のチトラル空港に降り立った時は、いささかの安堵感があった。有岡、仁科には顔見知りが馳け寄って来た。空は青く、抜けるように高くティリチ・ミールが目の前に毅然として立っていた。

予定より二十日の遅れが生じている。猶予はならない。大パーティーが重なったのでポーターの心配があったが、ロバが集まることで解決した。開梱、配分と二日の滞在でチトラルを出発した。ロバ四十三頭、馬二頭、ポーター二名、七月九日であった。チトラル河に沿って道は高く低く、カンカン照りの中をロバは驚くべき早さで進み、人間は難行苦行の連続であった。コゴチ、バレニス、チャルンを経、ドラサンでロバをポーターに代え、ザニ峠を越えた。峠の上でヒンズー・クシュ山脈のパノラマは展開した。モンスーンの影響が少ないためか、雪が乏しく思われた。しかし、なんとティリチ・ミールは高いことだろうか。峠の下、深いティリチ河の谷底には驚くべき強靱さを持った人間の生活があった。

登山開始

ベース・キャンプはティリチ氷河の末端より約六時間、上部ティリチ、下部ティリチ氷河の合流点に近く、高度四〇〇〇メートル、チェコ隊に隣接して設営した。以後全てのキャンプは同様の憂き目に会ってしまった。時間的にも場所的にも合理的な所にあったが、決定的なことはポーターがそれ以上には動かなかった。チェコは悪い前例を作ったものだ。ポーターの賃金問題では過去の遠征隊でも頭を悩ましているようだが、我々のリエゾン・オフィサーは威厳を持って事に当たり、ウルドゥ語の達人仁科との絶妙なるコンビネーションにより、トラブルは一度も起こらずにすんだ。チェコ隊は石を投げ合う寸前の険悪な空気になったそうである。

遅れを取戻すために百十五人のポーターの中から二十人の特選隊を募り、速やかに、少しでも多くの荷上げを行なおうと試みたが、結局第一キャンプ（四五〇〇メートル）に予定量の半分を上げるに止まった。七月十六日、四名の高所ポーターと我我の実戦隊員七名中体調不調な二名を除いた十一名は、長い忍

耐のいる荷上げを開始した。モレーンに覆われ、単調な起伏が続くティリチ上部氷河が南北に分流する屈曲点に第二キャンプ（四七〇〇メートル）を置いた。南に流れを変えると氷河は本来の純白な姿を現わし、幅も一〇〇〇～一五〇〇メートルと広大な広がりを見せた。

何度目かの荷上げを終わった七月二十三日夕刻、何時かは耳にしなければならなかった、出来るものなら聞けないことを願っていたチェコ隊登頂の報が入った。一同声もなく押し黙った胸中には、様々な感慨が流れた。登頂は七月十九日、頂上に立ったのは四名の隊員であった。付近の衛星峰、ティリチ・ウエスト第一峰にも登頂したと聞くに及んでは、落胆するよりも怒りが込み上げて来た。ラワルピンディで仁科とチェコ隊隊長との会談により、ティリチ頂上付近には七四〇〇メートル、七三〇〇メートルの未登峰がある。我々（チェコ隊）は七三〇〇メートル峰を登る。七四〇〇メートル峰は日本隊のために残しておくとの談合がなされていた。ベース・キャンプでも隊長は繰り返えし強調していたはずである。後で見るに及んで成程と思った。七三〇〇メートル峰は登りに行く程のこともない、遠い稜線上のコブに過ぎなかった。しかし、何故に我々はこうも不運なのだろうか。

気を取り直しキャンプを進めた。七月も終わりになると、氷河には無数のクレバスが驚くべき早さで口を開いた。七月二十三日、第二キャンプ、第三キャンプの中間でスノー・ブリッジの崩壊により、近藤がクレバスに転落する事故が発生した。傷は胸部の打撲だけに止まり、約十日間の休養で戦列に復帰することが出来た。第三キャンプ（五五〇〇メートル）、第四キャンプ（六〇〇〇メートル）、ティリチ上部氷河源頭に第五キャンプ（六五〇〇メートル）を設け、そこをアタック・ベースとした。見上げる頂上まで一二〇〇メートルの高度差である。

丁度その頃、オーストリア人クルト・ディームベルガー、ドイツ人ディトコ・プロスケ両氏が我々と相前後してティリチ・ミールを目指していた。彼らはすでに七〇〇〇メートル峰二つの登頂をなし、我々「素人」から見ると超人的な人種と見受けられた。二人は紳士的に日本隊が登った後で登るといってはいるが、尻に火を付けられたようなものだった。彼らはノー・ライセンスであったから、帰途我々のリエゾン・オフィサーの知る所となるや、激しい口論の末、今後パキスタン入国禁止の措置を取ると申し渡されていた。その後いかなることになったものか。

第一次攻撃

八月十二日、第五キャンプより有岡、高野、前田、山本が頂上への行動を開始した。最後までチェコルートをたどることはない、独自のルートからの登頂をと、頂上より西に延びて第五

キャンプの前で急激に高度を減じ、再び六七七八メートル峰に連らなる尾根にルートをとろうと考えたが、八月二十五日にはベース・キャンプを出発するという日程を、リエゾン・オフィサーより申し渡されていた。我々は公式の隊であり、他に迷惑が及ぶことを恐れ、リエゾンの命令を至上のものと考えていた。やむなくルートの開拓はやめて、明確なチェコルートを採った。主稜は頂上東肩より北に延びる尾根が一旦七二〇〇メートルまで落ち込み、再び七四〇〇メートルのティリチ・ウエスト第一峰から二、三、四峰を経てティリチ・ノースに続くのである。ルートはこの尾根上七二〇〇メートルのコルに達し、ティリチ主峰東肩へと尾根を忠実にたどるものであった。もっともチェコ隊はルートを詳しく語ろうともしなかったし、我々も聞こうともしなかった。彼らとは登頂以来何か釈然としないものが残った。

コルまでの下半部は、ティリチ氷河の源頭をなす斜度四十～五十度位の雪面である。八月も半ばに入ると気温の低下が感じられ、チェコ隊はアイゼンを使用しなかったと聞いたが、とてもそのような状態ではなかった。中程のクレバス帯にロープ・フィックス作業を行ない、上半部岩壁帯との接点、六九五〇メートルの岩棚で一回目のビバークを行なった。十三日はクーロアールの登攀に終始した。歯の立たない硬氷に心細いスタンスを切り刻み、一五〇〇メートルの登行に七時間を費やした。ここでクーロアールは両岸一メートル程に挟まり、その上には垂壁が立ちはだかった。向かって右が高く、左に高度を下げていた。右壁と接する所にチムニーが走っていたが、彼らは中程の約二〇メートル程の所を乗越した。上部は幅も一〇メートルに広がり傾斜も落ちたが、状態は一転し、ブレーカブル・クラストに気息奄々、七二〇〇メートルのコルに達したのは月も頭上に輝く午後九時であった。

コルに立つと、ティリチ上部氷河側は急峻に、下部ティリチ側は緩やかに消えていた。チェコ隊の放棄したテント（一重夏用）をツェルト・ビバークよりはと使用したが、西からの強風に吹きまくられて、まんじりともしない夜を過ごした。

翌十四日、彼らは今日は頂上が手中に落ちるものと確信していた。七三〇〇メートル付近を過ぎると、それまでなだらかな様相を見せていた尾根は脊尾根に変わった。稜上は小規模な壁が断続しているので、尾根の左側、下部ティリチ側のトラバースを続けた。すると俄かに壁面が険悪になり、追い上げられるようにして七四五〇メートル付近で尾根の上に出た。この登山期間中大きく天候の崩れたのは二度だけであったが、一日の変化は連日起こり、特に六五〇〇～七〇〇〇メートル以上ではほとんど毎日、午後になるとスノー・シャワーがあった。時にはかなりの積雪が見られた。十四日もその例にもれず、午後になって雪が舞い始めた。午後三時、有岡は隊員の健康状態からし

て更に一晩のビバークは可能と判断し、この地点をビバーク・サイトとした。

八月十五日、今日こそはの意気に燃えて出発したが、高度による影響と三晩にわたるビバークの疲労が顕著に現われ始め、進捗度は鈍った。七五五〇メートル付近で、高度もほとんど上がらないトラバースを行なわねばならなかった際に、その感は極まったが、極端に困難な個所は終わったように思えた。残るは緩やかな岩稜が頂上に伸びていた。有岡は決断に迷ったそうである。だが、決定的なことは、第五キャンプより往復四日行程を見込んで携行した食糧はすでに尽きかけていたことである。やむなく帰途についた。その日は七四五〇メートル、更に十六日、七二〇〇メートルのコルでビバークを行なった。一方、この遠征中最大のミスともいえるトランシーバーの携行を忘れたことのため、第五キャンプでは連絡がつかず、憂慮の色を濃くしていた。後続のディームベルガー氏パーティーは我々に追い付き登頂の機をうかがっていたが、同行のプロスケ氏が体調を崩し、彼にはあせりが見えていた。彼も我々の状況を察知し、同行を申し入れて来た。第五キャンプにはクレバス転落より回復した近藤、仁科、高橋の三名が待機していた。

ティリチ・ミール（七七〇八メートル）登頂

八月十六日、ディームベルガー氏、近藤の二名は、登頂隊の確認、あるいは異常を発見したいずれの場合にも連絡を行なう目的で出発した。ところがディームベルガー氏は初めから登頂の目的であったようだ。十六日は六九〇〇メートルに荷上げ、十七日、両パーティーは七〇〇〇メートル地点で邂逅し無事を喜び合った。下山パーティーは食糧の補給を受け、下山を続けた。日没が近づき雪面の氷化が始まった。メイン・ザイルを含め全部のザイルを後日の二次攻撃に備え、フィックスに使い果たしたため、彼らの下降は極度に困難なものだった。一時は立往生かとも思われたが、着実に小刻みな下降を続け、十八日午前四時第五キャンプに帰着した。

一方ディームベルガー、近藤パーティーは第一次攻撃隊の無事を確認したので、任務は終わったものと登行を続け、十七日七二〇〇メートル・コル。十八日停滞。十九日、有岡パーティーの七四五〇メートル・ビバーク地点から彼らと反対側、即ち上部ティリチ氷河側に出てティリチ主峰北東面を頂上に向かった。頂上に立ったのは午後二時であった。何か我々の心には蟠まるものがあったが、しかし、これが事実上一回だけの登頂となった。

日増しに気温の降下が感ぜられ、夜間の寒さは耐え難いものとなって来た。予期せぬ登頂に計画を全面的に修正し、態勢を立て直した八月二十六日、第二回登頂隊としての仁科、前田が第五キャンプを出発した。七二〇〇メートルのコルまでは全面

にフィックス・ザイルがあったため、信じられぬ程速やかに、容易に達せられた。翌二十七日、僅か十日の違いでしかないのに、驚くべきことに、天幕の出口からスタンスをカッティングしなければ進むことができず、二時間を費やして一〇〇メートルしか前進することが出来なかった。すでに氷結は始まり、逆光ににぶく映えるティリチ・ミールの頂上を仰ぎ、もはやこれまでと涙をのんだのであった。

いま思うこと

顧るに、一応は登頂に成功はしたが、いささかすっきりしないものがあった。

ここで直接的な問題点となるのは、第一次登頂隊の七二〇〇メートルからのルート選定にあった。チェコ隊、ディームベルガー・近藤パーティー共に、そこから頂上までは容易に達していることを見ても明らかであるが、当時の状況からして、その責を一概に彼らに負わせるのは酷であろう。

パキスタン政府は、申請した登山期間、六月二十六日から八月二十五日まで（もっとも我々は強引に十日間の延長をはかった）に対し、実際に入山した七月十五日以前の二十日間の遅れを後にスライドするのは認めず、ベース・キャンプ出発はあくまでも八月二十五日という線を固執したために、登山期間はわずか四十日間と限定されてしまった。その結果、高度順化などの余裕はなく、上へ上へと追い上げられた形になってしまった。また、ルート自体も長大なため、各キャンプの確保に大変な労力を費やし、連日の行動の疲労が最後の段階に現われてしまった。八月十日、第五キャンプ設置を完了するまでの間、完全に休養をとった日はたった一日、考えて見るとよく続いたものだ。近藤が「超人的」なディームベルガー氏に同行出来たのも、クレバス転落以来十分な休養をとったからに他ならなかった。ともかくも、内容の如何を問わず、なんら組織的な背景を持たぬ我々が、零から出発した遠征としては、十分あり余る成功であった。学ぶことも多かった。

メンバー

隊長　高島一芳（45歳）（市川山岳会）
副隊長　有岡達郎（31歳）（〃）
隊員　小松鉱二（30歳）（〃）
〃　仁科正純（28歳）（〃）
〃　高野健次（25歳）（〃）
〃　近藤理昭（24歳）（〃）
〃　前田房義（24歳）（〃）
〃　山本良彦（23歳）（〃）
〃　高橋定昌（55歳）（山岳巡礼クラブ）

エルブールズ山脈での合宿をふりかえって

浜野吉生

海外合宿

乱暴ないい方をすれば、日本の雪の山はむずかしすぎた。狭い北アルプスに、剣や穂高などという地形も気象もきびしい山が文字どおり屹立している。そのうえ、早稲田大学山岳部には、このところ日本の山が、あまりよい顔を見せてくれなかったということもある。遭難つづきで、どうにも打つ術がなかったから、海外の山へでも行ってみるか、ということになった。全部員でエルブールズへ出かけた動機をそんなふうにいっても、あまり間違っていないように思う。一人の人間の山登りに、好不調さまざまなうねりがあるように、大学の山岳部にも周期の定かでない波があって、底へ落ちるときには、下手にあがけばあがくほど引きずりこまれるようであった。当事者は、一生懸命、夢中になるほど周囲が見えなくなって、同じようなエラーを繰り返すものである。そして、危険の方にばかり注意を向けるから、山登りの楽しさもわからないという状態に山岳部全体が陥っていたようであった。

エルブールズを舞台にした〝海外合宿〟は、そのような低迷状態から脱するための新しい試みであった。見知らぬ海外の山へ出かければ、山岳部の将来にこれまでと違った展望が開けるにちがいない。最近の十年間、私たちの部に終始つきまとっている遭難の暗いかげから脱し、のびのびと登山を楽しんでみようと考えた。実際のところ、穂高へ行っても剣へ行っても、また遭難するかもしれないという無用の遭難アレルギーが、最近の部員には例外なくあったのである。

この十年のうちに、私たちは十人の仲間を失っていた。昭和三十三年には明神岳東稜で四人、三十五年には富士山吉田大沢で四人と、いずれも雪崩による遭難が起きた。そのたびに、山での行動やリーダーの判断を細かく検討し、山岳部の組織や運営方法について反省した。そして検討結果から、立直りの手掛りを模索し、遭難のない山登りをしようと努力したのだった。当時を思い出してみると、明神の場合は、主に、不用意な行動とリーダー判断の未熟さを反省し、だから山に対して注意深くあれと戒めあったようである。富士山の場合、明神の戒めを忘れていたわけでもないのに、私たちの理解を超えたところで雪

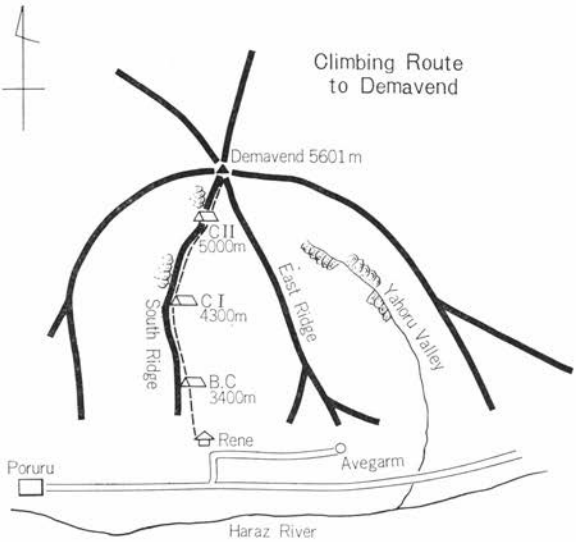
崩が起こった。大学からはスキー場に行くのさえ危ぶまれたが、もう一度基礎からやり直そうとスタートした。安全第一をモットーに、行動範囲は著しく小さくなった。ところが、またしても四十年の五月には、前穂高北尾根で転落事故があり、二人の尊い生命が失われた。個人的にも、部全体でみても力不足を痛感させられた遭難であった。

北尾根遭難の反省会では、こう事故が続くのでは、もはや山岳部の存立基盤はない、したがって山岳部は解散した方がよいのではないかという意見が、比較的に若いOBから、少なからず出てきた。これは私たちの部のように、登山活動が教育の一環として取扱われている環境では、ある意味で妥当な意見であった。

しかし、山岳部が活動を中止しても、山へ登りたい者は登るだろう。登るかぎり、山の危険は同じように存在する。山岳部の機能に見切りをつけないで、もう一度部を建て直し、あらゆる手をつくして遭難の危険をなくしていこう。もう一度、白紙の立場から、大学山岳部らしい登山の実践を考えてみようではないか——。こうした前向きの考え方が、最終的には私たちの出発点になった。私自身は、明神の遭難以前から部に身を置いて、どんな登り方をしたって遭難の危険を百パーセントなくすることの不可能なことをよく知っていたが、だからといって部を解散したり、活動を中止しても意味がないと思っていた。しかし、もう一度やり直すには、これまでとちがった新しい方法でなければ駄目だという思いが強かった。

どん底におちた山岳部を建て直すには二つの方法がある。一つは、基礎から一歩一歩地道に積上げる方法であり、他の一つは大きな目標を設定し、それを遂行する過程で実力をつけていく方法である。明神と富士山遭難後の再建策は前者であった。私たちは、自分自身の骨を拾うような気持で、なぜ間違ったかを考え、どうすればよいかを話合った。しかし、明神といい富士山といい、数年をまたずに遭難を繰返している。三度目も同じ方法をとるのは得策ではない。ふりかえって明神以後の七年間は、頭を垂れて地面ばかり見つづけてきたような気がする。「ひとつ思いきって大きなことをやってはどうか」という声が、OBと学生の話合いのなかから出てきた。これに対して「基礎的なことをおろそかにして、いきなり海外登山に飛躍するのは危険ではないか」という意見が当然出た。しかし、基礎的なことは、やり方によってどのようにでも解決できる問題であった。なによりも当時は、部員の頭を持ち上げさせ、大きな山を目指して能力をフル回転させることが必要であった。私は監督として、そのような方向に学生の目を向けさせようとした。

学生たちは驚くほど敏感に反応し、四十二年春の合宿は、全部員参加のもとに海外で行なうという方向へ走り出した。そのエネルギーは、これまでの陰に対する陽性で、保守的ではなく



て進取的であった。スタートは、いくらかOBのおしきせ的なところがないでもなかったが、間もなく計画は、完全に学生たちの手で進められるようになった。

準　備

どの山を対象に選ぶか、マネージメントはどうなのか、いったい、いくら費用がかかるのか、当初はまごつくことが多いようであった。四十一年の新学期から本格的に準備をはじめて、軌道に乗ったような感じがしたのは九月ごろであった。

時期は春休みの二カ月間。全部員参加が大前提なので、一年生から四年生まで、技術的にかなり差のある者を収容しきれる山でなくてはならない。つまり、むずかしすぎても、やさしすぎても都合が悪いのである。そのほか、個人負担金が二十万以内でできるところとなると対象はそういくつもなかった。ヒマラヤとヒンズー・クシュは、時期的にも金銭的にも、また入国事情のうえでも不可能であった。最も手近な台湾は、調べてみると、近年ほとんど雪がなく、しかも、当部をはじめ（戦前）、多くの日本人が行っていて新鮮な魅力というものがなかった。そんなとき、立教大学山岳部の人たちがカフカズへ出かけたことが一つのヒントになって、イランの山が面白そうだと気がついた。ちょうど日本と同じように、三月ごろは冬で雪もある。ディマバンドの五六〇〇メートルという標高にも過不足がな

い。夏ディマバンドを登った人から話を聞いたり、イラン山岳会に問い合わせてみた結果、ディマバンドを含めて、冬のエルブールズ山脈はきわめて新鮮な魅力のある、合宿地として適当な山が多いことがわかってきた。といっても、冬の記録はほとんどないから、勝手にこちらで想像し、多分面白いだろうと思い込んだまでである。ディマバンドは独立峰だから風が強いだろう。雪もかなり多いという情報を得たが、冬の劔を想定していけば十分だろう。その程度のことで計画を組立てる以外なかったのである。

行きがかりから私が隊長を引受けた。学生の後見役のような形で二人のOBが参加してくれることになった。学生は四年生が五人、三年が一人、二年が四人、一年が七人の合計十七人である。三年生は北尾根の事故で二人が欠け、一人になっていた。

予算は総額七百万円。参考までに簡単に内訳を記すと、このうち四百万円ほどが交通費で、外貨購入費、つまり滞在費や現地での食糧費が二百三十万円ほどであった。資金の調達は個人負担四百万円、OBの寄付金が百六十万円、一般からの寄付金が八十万円、学生アルバイトの五十万円などが主なものである。二十万円の個人負担を出してもらうため、四年生が手分けして一年生の家庭を訪問して回った。と同時に部員全員の父兄から「合宿参加承諾書」も出してもらった。この間、五月に富士山で行なった新人合宿をはじめ、夏、秋、冬と各シーズンごとの合宿は、例年に増して気を入れて行なったようである。そのうえラグビー合宿と称して部員たちが一緒にいる機会も多く、百科事典の抜書き程度だが「イランの文化」などを勉強していた。もっとも、時間をかけたわりには、イランに関する知識など、身に入っていないようであった。

行動記録

二月十四日（一九六七年）、浜野ら二十名、バイカル号にて横浜港出発。ナホトカより鉄路ハバロフスクへ出、十八日、空路モスクワへ。同日、一週一便という列車でテヘランへ向け出発。

二十二日　テヘラン着。二十三、二十四日を食糧、燃料の購入などにあてる。

二十五日　テヘランよりバスにてディマバンドの登山根拠地レーネに向かい、イラン山岳会の山小屋（標高二六〇〇メートル）にはいる。

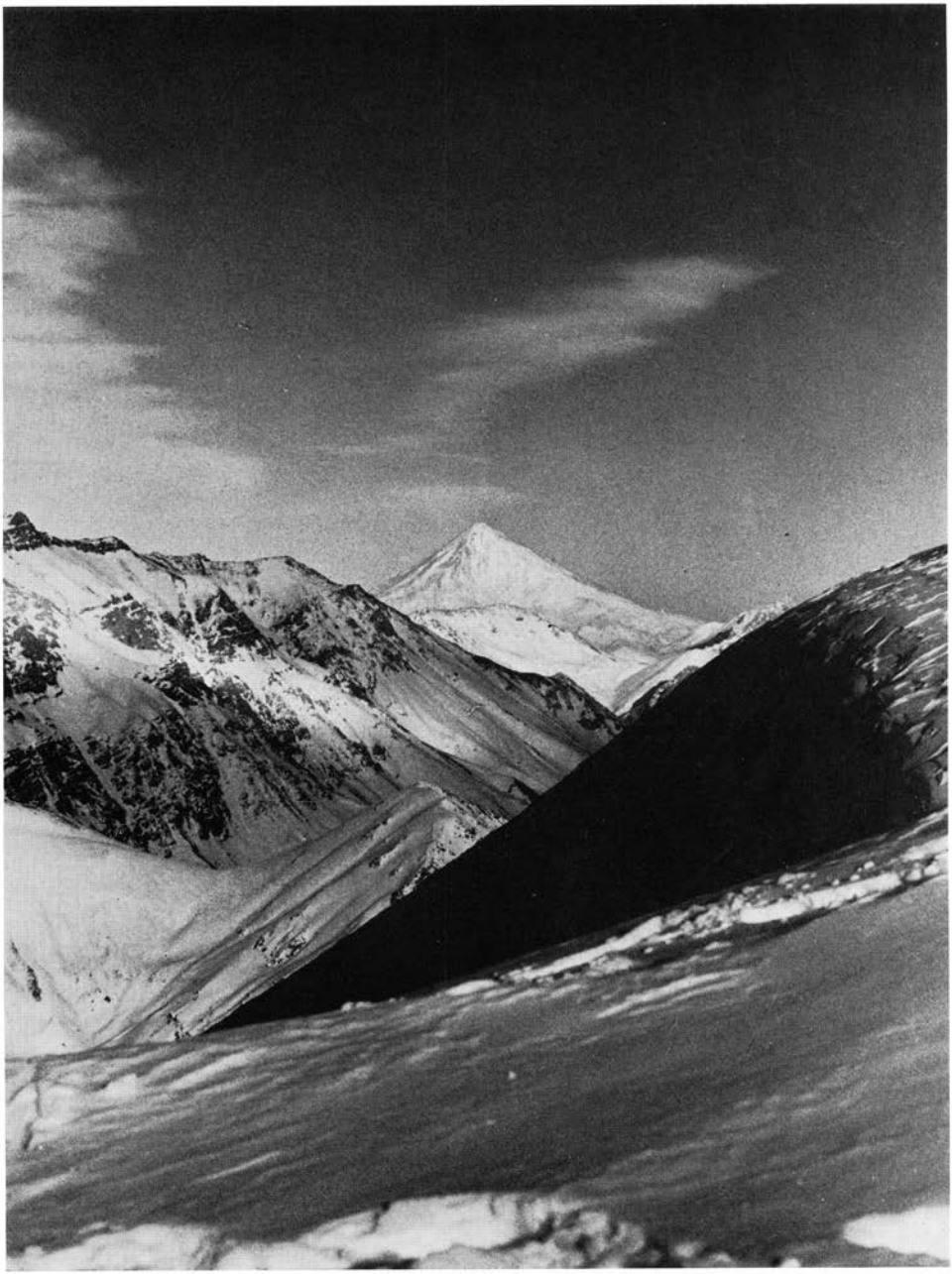
二十六日　ディマバンドの登攀開始。標高三〇〇〇メートルまでトラックに乗り、そこから三四〇〇メートルの放牧地にベースキャンプを設営する。ルートとした南面は雪が少なく、地肌が黒々と現れている。山の感じは富士山によく似ている。ところが、二十七日の降雪で、山はいきなり真冬の感じになった。



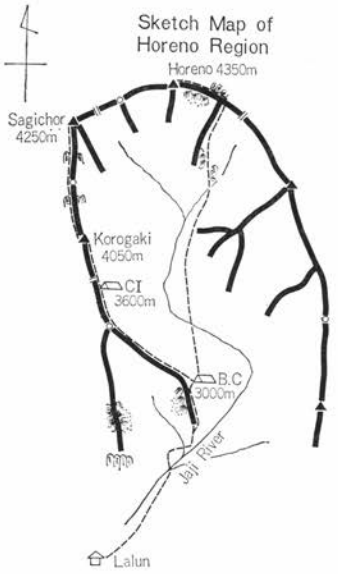
ディマバンド南稜上の第1キャンプ
Camp 1 on the south ridge of Demavend.



ディマバンド南稜を登る
Climbing up the south ridge of Demavend.



サギチョール稜線上の第1キャンプから見たディマバンド
Demavend (5601m) seen from Camp 1 on the ridge of Sagicholu.



二十八日　四三〇〇メートルの台地に第一キャンプを作る。

三月二日　中山（四年生）ら四人は五〇〇〇メートルに第二キャンプを作り、登頂態勢を完了。浜野ら十六人は第一キャンプに集結。三日は吹雪。

四日　中山、辻田、高木、佐藤の四人は午前六時半、第二キャンプを出発。南稜から急なクーロアールをたどり、午前十一時、五六〇一メートルの頂上に立つ。頂上は猛烈に風が強く、少し息苦しさを感じたという。十五分ほど頂上にいて、午後一時十五分第二キャンプに帰る。ディマバンドの冬季の登頂は、イラン山岳会によると、一九六四年と六五年に同会が成功しただけで、早稲田が第三登であるといっているが、六四年にドイツ隊が登った記録があるので、わかっているだけでも第四登である。この日、OBの田村ら八人は第二次登頂に備えて第二キャンプ入り。

五日　田村らはアタックに向かったが、天候が悪化し引返す。浜野ら第三隊の八人も第二キャンプへ上り登頂しようとしたが、六日、七日と猛吹雪になり、テントにとじこめられたまま。

八日　食糧、燃料が少なくなったので第二キャンプの十六人は登頂をあきらめ、ひょうと雷の中を下山。全員がベースキャンプまで下った。

十一日　テヘランへ帰る。

十三日　全員がイラン山岳会の総会に招待され歓待を受けた。

十四日　テヘランの真北八〇キロの地点にあるホレノー山群を次の登山目標とし、登山根拠地のラルンに向かう。

十五日　ジャジェ川をさかのぼり、尾根の途中にある台地（三〇〇〇メートル）にベースキャンプを作る。

十六日　岡部ら五人は午前五時半キャンプを出発し、同十時半ホレノー（四三五〇メートル）の登頂に成功。このあと十七日には浜野ら六人が、また十九日には田村ら九人が、それぞれ登頂し、全員が頂上に立った。また岡部ら五人は、十七日コロガッキ（四〇五〇メートル）の積雪期初登頂に成功。二十一日には、中山ら四人がコロガッキの手前に設けた三六〇〇メートルのアドバンスキャンプからサギチョール（四二五〇メートル）に登った。この山も、だれも積雪期に登った者はないということだった。二十三日にはさらに四人がサギチョールに登り、またコロガッキへは全員が登頂をすませた。

二十四日　ラルンへ下山。二十七日、全員テヘランに戻る。

四月三日　テヘランを出発。往路と同じコースで四月十三日、横浜港に帰着した。

ふりかえって

ディマバンドは写真を見てもわかるように富士山をひとまわり大きくしたような山である。気象条件も富士山と似ている点が多い。二十人行って四人しか登れなかったのは、あの悪天候では仕方のないことだった。ヒマラヤのジェットストリームに匹敵するような物凄いやつが四日も荒れ狂うのは予想外でもあった。もし天候に恵まれていれば全員が登頂できたかも知れない。と残念がるのは、学生たちが四〇〇〇メートル以上の高度に意外に強く、一人として高度にへばった者がないからである。ヒマラヤへ行ったとき、五〇〇〇メートルまでくると、ほとんどの隊員が頭痛を訴え、なかには食べ物をすぐ戻してしまう者もいた。ところがディマバンドでは、顕著な高山病の症状を示すものは一人もいない。年齢が若いせいかどうか、理由はよくわからぬが、一つの驚きではあった。とにかく学生たちは、全員が富士山以上の五〇〇〇メートルに何日も滞在したのだ。そういう日本では味わえない経験が、これからの登山に、有形無形に良い影響をもたらすとは考えられないだろうか。

ディマバンドはともかく、コロガッキやサギチョールは、現地へ行ってはじめて見つけた山である。正確な地図さえもないような山である。そこへバスで出かけて、冬、どうやらだれも登ったことのない頂きへ足を置く感激は強烈であり新鮮である。「登りました！　アタックは成功です」なんて学生が興奮して叫んでいるのを聞くと、自分までうれしくなってしまう。確かに技術的にはいくらか不満も残った。サギチョールへの稜線

が少しむずかしいくらいで、ディマバンドもその他の山も、高度の技術を要求される山ではない。しかし、登山の楽しさは、困難な壁や急峻な雪稜を突破することにばかりあるわけではなかろう。「経験することが全て目新しく、山も新鮮な魅力にあふれている」「自分たちより他に人影のみえない山、まだ数えるほどしか人が登っていない頂上に立つ喜び」、学生たちは海外登山でしか得られない感想を綴っている。イラン合宿は、未知なるが故の困難さや面白さで、行詰まっていた部に一つの明るい展望をもたらしてくれたように思う。

だがこの喜びを、物珍らしさや目新しさからきた一時的な興奮で終らせてしまっては、せっかくの貴重な経験が台無しになる怖れは十分ある。「ひとつ思いきって大きなことをやってやろう」という考え方から出発したこの計画は、飛躍しているだけに、どこかに脆い部分を残しているにちがいないのである。海外合宿の繁雑な手続きに費やした時間に、実は他にやらなければならないことがあったのではないか。海外合宿によって、無用の遭難アレルギーは取除かれたかもしれないが、山の危険はどこでも、どんな場合にも同じようにひそんでいる。日本の雪の山はむずかしすぎたというのは数年前に私が感じたことであるが、なんといっても私たちの舞台は日本の山である。むずかしい山を、いかにうまく登るか、そのための地道な努力を怠ってはなるまい。「イラン合宿の成果も、外国の山の頂上に登ったということだけに焦点を置いて考えずに、その準備や山登りの過程で得たものは何かということにも目を向けてほしい。登山の成功ということで単純に喜び、早大山岳部が遭難から立直ったのだと考えてしまうことは、むしろ危険である」(「リュックサックXI」村木潤次郎)。

エルブールズの山々から帰って早くも一年以上経った。いまになって、部の再建とは何なのか、学生たちに問いかけることがある。遭難を起こさないこと、犠牲者を出さないことは、その第一である。だが、それだけではあるまい。ひとりひとりが充実した登山をしてもらいたい。大学の山岳部らしい規律と、きびしい鍛錬の態度を持しながら、楽しみのあるそれぞれに個性のある登山をしてもらいたい、というのが、今の私の願いである。

附記

早稲田大学イラン・エルブールズ登山隊の構成は次のとおり。
隊長＝浜野吉生(28)、コーチ＝田村修一(30)、大村裕治(26)、隊員＝中山昇二(22)、岡部孝(23)、辻田希代彦(23)、本田靖生(23)、小林紘司(23)、小早川正治(21)、高木良三(21)、佐藤修(21)、山田新(20)、林田正彦(20)、本間修(20)、村田省一(20)、久新大四郎(20)、代田邦三(19)、米本隆夫(19)、三宅正太郎(19)、斎藤忠文(20)以上二〇名。

サンタ・マルタ山群紀行（コロンビア）

山本良三

まえがき

昭和四十二年（一九六七年）、静岡大学と静岡大学山岳会は、コロンビア・アンデス、サンタ・マルタ山群へ登山と学術調査を目的とする遠征隊を派遣した。

サンタ・マルタ山群は厳密にはアンデス山系の主流には属さない独立山群で、カリブ海沿岸から約六〇キロメートルのところに屹立する、半径五〇キロメートルにおよぶ円形の山群である。有名な避寒地サンタ・マルタはこの山群の北西にある。

われわれは、当山群の位置を広義に解釈して、コロンビア・アンデス東部山脈に含まれるものとしている。

アンデス山脈はコロンビア共和国に入ってから三条に分岐し、東部、中央、西部の各支脈となっている。このうち東部山脈がアンデスの主流を受け継ぎ、ヴェネズエラ・アンデスに続き、カリブ海に没している。

東部山脈の盟主はコクイ山群のネバド・アルト・リタクバ峰（五四六四メートル）で、この山群には十八座の五〇〇〇メートルを越す峰々の登頂が報告されているが、キチンとした地図が一枚もないので、詳細は不明である。中央、西部両山脈については、著名な峰々は全て登頂されており、それ以外に登高欲をそそるような峰は見当たらない。

今回、『地史的背景と密接に関連づけながら、コロンビア・アンデス地方の生物相の研究を蝶蛾類を中心として行なう、と同時にサンタ・マルタ山群とコクイ山群の未登峰の初登頂および未踏地帯の地質調査を行なう』ことと目標が定められ、「一九六七年静岡大学コロンビア・アンデス学術調査隊」の名のもとに選定された隊員は次のとおりである。

隊長　土　隆一（37）地質調査担当、理博
副隊長　山本良三（27）植物相担当
隊員　高橋真弓（32）昆虫調査担当
〃　杉本　武（27）昆虫調査担当
〃　太田欽也（32）地理調査担当
〃　安藤　弘（28）機器管理担当
〃　和田　享（22）地質調査担当
〃　小久江浅二（37）医者、医博

しかし、初めてのこととて、先発隊六名が羽田を出発するまでは、静大山岳会長酒戸弥二郎教授や同副会長尾崎徳郎教授に多々労を煩わし、お骨折りを願った。

その甲斐あって、資金面では静岡県を始め、静岡新聞社、静岡放送の後援のもとに、県下有力会社の援助や静岡大学の前身の山岳部関係の方々の援助を得ることができ、それによってわれわれは出発することができたのである。

アプローチ

先発隊六名は、五月三十日、ボゴダの国際空港において、大使館や三菱商事の方々に迎えられ、空港長や多くの新聞記者にとりまかれてコロンビア入りをした。

翌日、高橋、杉本はコロンビア国立大学理学部長を訪問、到着の挨拶と学術調査の打合わせを行なう一方、私と太田は大使館、三菱商事などで今後の総合的打合わせを行なった。そして夕刻、調査の根拠地バランキリヤへ飛んだ。

飛行機は薄暮のジャングルと蛇行する河の上を一路北上した。バランキリヤでは、数少ない在留邦人の一人堅川繁樹氏の出迎えを受けて、ホテル「ヘノワ」に落ち着いた。

六月一日。早朝、電話のベルで起こされる。受話器をとるなり、「貴方はミスター・ヤマモトか」と流暢な英語が飛びこんできた。

当地のアトランティコ大学ゴンザレス学長の使いとして、若い英語学の教授が迎えにやってきた。急いで、大学の車だというポンコツ寸前のフォードで同行する。

同大学との共同研究打合わせを始めとして、当地では入山前に多くの準備をすませておく必要があった。日産自動車の現地代理店でのジープの貸借契約、日本郵船の現地代理店との船荷に関する打合わせ、税関との折衝、銃器と弾薬の購入手配、現地購入品の調達、近郊の学術調査、ガイドの雇用、入山ルートの偵察、州知事への協力依頼、陸軍第二師団への協力要請などであった。

もっとも心配していた船荷は、六月八日、バランキリヤ港に予定通り陸上げされたが、コロンビア政府の無税通関保証書の発行が若干遅れたため二週間待たされ、五月二十一日に清水港で積み込んだままの状態で受取った。小型乗用貨物車一台を含む二十トンの船荷である。代理店の担当者は「異例の早さですよ」と得意顔。なるほど、そうかもしれない。

通関二日後の午後、トラック、ジープ、ライトバンの三台の車でバランキリヤを出発。郊外の濁流のマグダレーナ河をフェリーボートで渡ると、舗装道路がカリブ海に沿って、サンタ・マルタへ通じている。

サンタ・マルタの手前から道を右にとり、一路南下する。舗装が切れてからは、もうもうたる土煙りをあげて走る。東アフ

リカのサファリー・ラリーの経験者小久江医師の話しでは、「東アフリカのケニヤ地方とよく似ている」とのこと。

六月二十四日。人口約三万人程度の町、バレドパールでは、産婦人科医プマレホ博士の世話になり、陸軍第二師団分隊司令部や警察署を訪ね、万一の場合の協力を依頼しておく。だが、ついにガイドは雇えなかった。

バレドパールからアタンケスを経由してチェメスケメナ村に至る南側斜面一帯は乾燥しており、樹木も少なくなく、標高二、三〇〇メートル附近ではサボテンもみられる。

尾根すじは赤茶けた山肌を露出しており、水のある谷沿いだけ樹木がある。

アタンケスからは一段と道が悪くなり、シャベルで地ならししながら進み、やっと夕方にガタプリ川岸にある、周囲を山々にかこまれた標高一〇〇〇メートルのチェメスケメナ村に着いた。ここで車の通れる道は終わっていた。

翌日、ラバ借用の交渉を始めるも、予想外に高い料金なので、「高い、もっとまけろ」と暇にまかせてあの手この手と二時間ほど、ねばってみたが、きめがなさそうだったので諦めた。ラバ一頭一日四十ペソ（円換算 約九二〇円）、人夫同じく四十ペソであった。

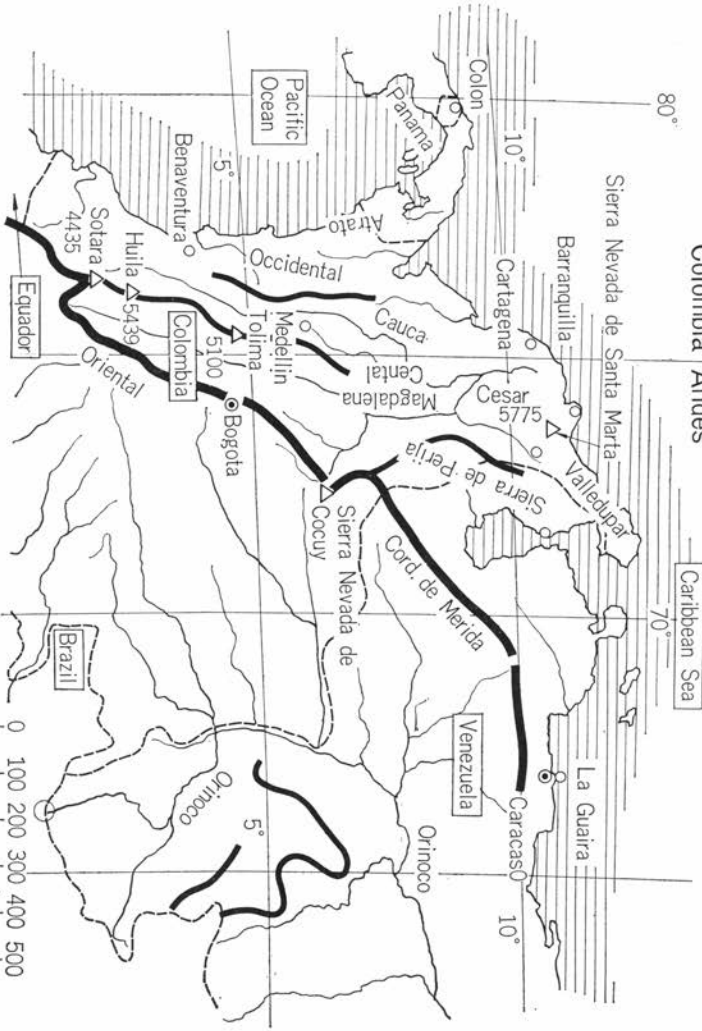
キャラバンの旅

雇用ラバ二十七頭、人夫八名。村のはずれでガタプリ川を徒渉する。

実が鈴鳴りのマンゴー樹の下を通り、バナナ畑のそばを抜け、サトウキビ畑を対岸沿いに眺めながら、谷から村の裏山の登りにかかる。山腹の高巻き道を降りると、ドナチュイ谷はアロワコ族インディオの居住地である。ドナチュイ川に沿って樹木が繁っている。谷全体は湿めっぽく、大木も見かける。その中に、インディオの草ぶき小屋がひっそりと自然に溶け合って点在している。

初対面のインディオは、皆んな無愛想で、多分に警戒的なところがある。小柄で、手織りの白黄色の柔道衣と古代大和時代の衣服とを一緒にしたような形の衣類を身にまとっている。男女とも黒髪を肩のあたりまで垂らしており、一見異様な感じであるが、大変おとなしく、淳朴な種族である。フーリオ・イスキエルダと名のる若いインディオが進み出て「二年前の米国隊のガイドをやったので、英語がしゃべれる」と自信ありげだったが、「OK！」と「Thank you」程度であった。

六月二十七日。アロワコ族の縄張り根性を剝き出しにされたので、連れてきたラバ全部と人夫四人を村へ返えし、新たにラバと人夫を雇った。そのため停滞を余儀なくされ、昆虫、植物


Colombia Andes
Caribbean Sea
Sierra Nevada de Santa Marta
Barranquilla
Cartagena
Cesar
5775
Valledupar
Sierra de Perija
Colon
Panama
Atrato
Occidental
Cauca
Medellin
Tolima
5100
Magdalena
Central
Pacific Ocean
Benaventura
Huila
5439
Sotara
4435
Equador
Colombia
Oriental
Bogota
Cocuy
Sierra Nevada de
Cord. de Merida
Venezuela
La Guaira
Caracas
Orinoco
Brazil
0 100 200 300 400 500
km
80°
75°
70°
10°
5°
0
10°

採集やアロワコ族の生態調査をすることができた。小久江医師は無料診療所を開設、子供連れの奥様方に大もての様子であった。

翌朝、ラバの集まり具合は良くないし、荷積み作業能率も悪かった。その上、大牛二頭がキャラバンに加わった。

かくなる上は全てのんびりとインディオ調に合わせるしか手はあるまい。単調な谷に沿った道が続き、ソグローメ部落、サカラクンゲ部落を通過し、今夜の泊り場ラ・ネバデータ部落につく。標高二六〇〇メートル。気温一〇度。肌寒さを感じる。ジャンパーをとり出して着る。ここは、コギー族の部落で、大きなヤグラ付きの小屋が中央にある。タブーがあるのか、アロワコ族は誰一人部落に入ろうとはしなかった。

樹木がだんだん少なくなり、しだいに谷が広くなる。メリオアカという地名のところに着く。粗末な放牧用無人小屋が一軒、大きな岩蔭にひっそりと建っていた。

谷はますます広くなって、モレーンによってU字谷が埋められて出来た平原が一段また一段と続き、谷幅も広いところでは三〇〇メートルにも達する。

入山以来、連日昆虫を追いかけていた高橋の消耗が激しい様子なので、明朝、杉本と共にドナチュイ部落へ下山することになった。

六月三十日、晴、気温五度。いつしか灌木もまばらになり、コケと数種の高山植物や草地が多くなり、樹林限界に達する。高度約四〇〇〇メートル。夜半からの隊長の高熱は翌朝になっても続き、小久江医師は下山を勧告。残る隊員五名も頭痛を訴えはじめる。

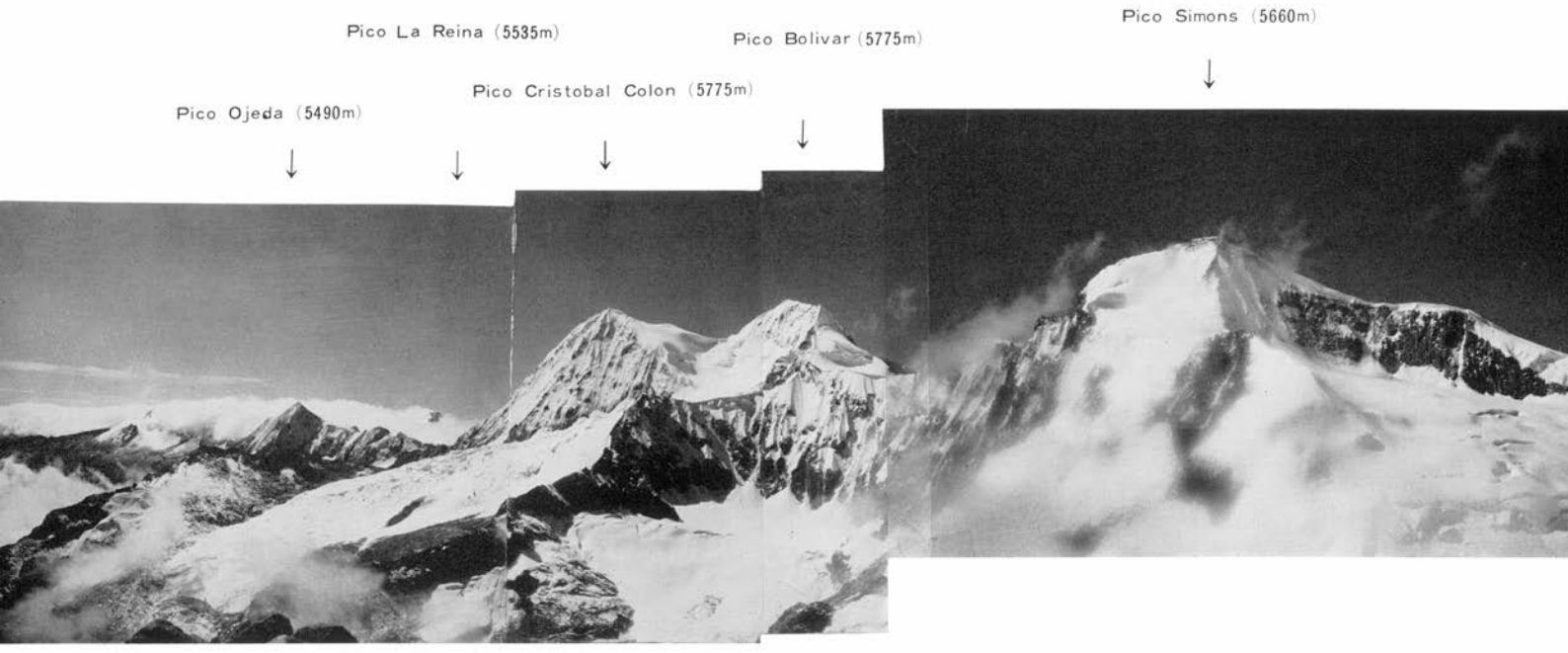
四五一〇メートルのナボバー湖のほとりには七月一日午前一〇時半に着いた。缶詰の空缶や雑誌の一部から、一見して二年前の米国隊の残したものと察しがつく。賃金の支払いを行ない、人夫を解雇した。十年前の地図とくらべると、谷氷河は年年後退しているようだ。もっと高いところまでラバが使えそうなので、インディオの人夫頭ヘルマンを一週間後に再度雇う約束をして帰す。

前進

プレ・ベース・キャンプの中で全員頭痛に悩まされていた。しかし、翌日からはほとんど痛みもおさまったので、偵察に出掛けた。

続く二日間の偵察の結果、チリグア峠からのアプローチは絶望的で、ナボバー湖の右岸にある谷を直登し、コロン峰の支稜より派生する尾根の末端近くを乗り越えて、最高峰二座の吊尾根の下部にひろがる圏谷へ入るルートを取ることにきめた。

丁度涸沢を数倍したような圏谷で、涸沢ヒュッテのあたりに湖がある。



ネバド・テソロⅠの頂上からの展望
A view taken from the summit of Nevado Tesoro Ⅰ (5250m).

ベース・キャンプはこの湖岸の草地に置いた。

ルートを圏谷の中に選べば、稜線直下の急斜面とその下に続く約四〇〇メートルのセラック帯の突破さえうまく行けば、比較的簡単に稜線に出られそうだと見当をつける。

セラック帯の下方は雪や氷に磨かれた平らな岩盤があり、モレーンの丘がその下部に続き、舌端に湖がある。

七月四日、昼過ぎにヘルマンがラバに乗ってやってきた。早速荷上げをたのむ。そして、十日までにB・Cへの荷上げを完了すると共に、約五〇〇〇メートル地点にデポ地を作った。よく働いてくれたヘルマンを帰すことにして、賃金以外に色々の物を与えた。

主峰地帯を越えて

B・Cを出てから主峰地帯を越すのに一週間を要した。

七月十一日。気温零度。太田、私、安藤、和田、小久江の順でモレーンの上をゆっくり登る。間もなくデポ地に着く。更に登行を続けると、今までモレーンに遮られて見えなかったボリーバル峰や周囲の景色が見えてくる。氷河のツメ跡ばかりを見ながら、広い褐色の岩盤を登る。足元では時折り黄銅鉱が目につく。コロン峰より続く東稜線上に、二年前米国隊が初登頂して命名したニエベ・デ・ナボバー峰の大きく丸い雪のスロープがキラキラと輝いている。

一方、左手にはボリーバル峰からガンサー峰へ派生する痩尾根があり、その屏風のように屹立する三〇〇メートルの側壁は雪をつけていない。

振り返えると、エル・グアルディアン峰やタイローナ峰が、更に東方には巨大なラ・レイナ峰やオヘダ峰もみえる。セラック帯にかかる頃から、東方にコダッティ連峰がその鋭い鋒先を見せはじめる。

C1はセラック地帯の中、五三七五メートルの地点に設置され、安藤と私がルート工作のために残った。

翌朝、C1から約一時間の登行で主稜線直下の急斜面の下部に達した。左の垂直の岩壁に沿って一〇メートルほど登り、そこから雪の斜面に出て、大きな足場を切りながら右上へトラバース気味に登って稜線に出た。ここに一五〇メートルの固定綱を取り付けた。

稜線の反対側の北面は大きな雪庇があり、真下を見ることは出来なかったが、ボリーバル峰の北壁は美しいヒダのある急斜面が四〇〇メートル近く落ち込んでいる。そのつきるあたりにクレバスが口を開けており、谷氷河に続いている。ボリーバル峰へは急峻な岩と雪の稜線をたどれば簡単に登頂出来そうだし、コロン峰へはなだらかな雪のドームを越えて行けばよい。いずれにしても、ここまでくれば最高峰二座の登頂をはたしたも同然といえる。国内第三の高峰シモンズ峰は、ボリーバル峰


Sketch Map of Sierra Nevada de Santa Marta
Pico Shizuoka
IV 4960
VI 5020
VII 4960
VIII 4915
4910 II
4915 I
4930 III
5070
5225 III
5230 II
5250 I
Nevado Tesoro
C5
C4
C3
C2
C1
Q. Viscungue
Q. Nevada
R. Palomino
N
4930
4960
5020
Pico Simons 5660
5415
Pico Cristobal Colon 5775
Pico el Professor 5360
Pico Nueva Vista
5490
C4 Pico Bolivar 5775
5330
5600
Depot 5050
Pico Nieve de Naboba 5310
Pico Ojeda 5490
Pico Codazzi
5535
Pico La Reina
C6
Q. Nevita
Lag. Caitano 5230
B.C. 4625
P.B.C 4510
Lag. Naboba
Lag. Achacuareba
Pico Tairona 5000
Pico el Guardian 5285
R. Donachui
0 1 2 3 4 5
km
△ First climbed peaks
By R. Yamamoto

の右手奥に鋭いピラミッド形をして聳えており、更に右手奥に三座の雪の峰が見える。われわれの目指す北西の未登峰群は、これらのいずれよりも奥まった地域にあった。

私と安藤はこの日デポ地まで下り、B・Cより登ってきた太田、和田と共に稜線まで荷上げをし、そこにC2を建設した。

七月十三日。C2から簡単にコロン峰の頂上に立った。日本の春山の感じで、実に気持が良かった。「北西未登峰群は遠いなあ」、正直な印象だった。

正午頃、荷上げのためにC1へ下ってゆっくりしていると、突然睡魔が襲ってきた。いくら気負ってみても、全身の力が抜けてだるい。やっと気を持ち直して登り始めると、雪が降り出してきた。C2に着くや否や、頭上で雷が爆発した。背負子の金属部に接している身体に針で刺す痛みを感じ、全てをほうり出してデポ地まで下った。当山群では、毎夜どこかの方面で稲妻が見られる。翌日も雪は降りやまず、われわれはB・Cへ下る。

七月十六日。C2から北面への下降ルートの選択に迷ったが、安藤が雪庇を踏み抜いて宙吊りになったところを掘り下げて、二〇〇メートルの固定綱を垂らした。C3はボリーバル峰北壁の下部をトラバースして、北東稜の肩の手前に斜面を切って設営した。

「北東稜の肩の向こう側はどうなっているのだろう。」

「スッパリと切れ落ちていたら、C2へ戻らにゃなるまい。」

この夜の気分はあまり良いものではなかった。が、はたして北東稜の向こう側は広い雪原がシモンズ峰まで続いていた。

徐々にガスと降雪で視界が悪くなってきたが、膝までの軟雪のラッセルで雪原を進み続けた。シモンズ峰南東斜面をトラバースして南稜の肩に達する頃、シモンズ峰南東斜面を表層雪崩が連発落下し、われわれのトレースを切断して行った。

軟雪のボタン雪で衣類も濡れてきた。高度五三三〇メートルでこのあり様である。肩の衝立石にピトンを打ち、ツェルトを張って四人がもぐり込んだ。C4とする。

未踏地域へ

七月十八日。晴。C4から西方へ向けて出発したわれわれは、シモンズ峰西稜の緩斜面のトラバースを終えて、午前十時三〇分高度五二〇五メートルの西方鞍部に達した。窪地に入ると物凄く暑く、体もだるいので、休憩すると眠くなってくる。鞍部は風の通り路のせいか、岩が露出していた。

この鞍部から東方への尾根はシモンズ峰へ続き、西方への岩尾根には一九六五年の米国隊が初登頂したエル・プロフェソール峰を始め、ヌエバ・ビスタ峰やネイバ峰などがあり、当山群踏査史上南面からの最奥到達地点となっている。

北面は平坦な大雪原をなし、その向こうに岩山が見える。高

度は更に低くなる。大雪原に、赤旗を立てて進む。しかし、今日は偵察なのでC4へ戻らなければならない。

翌日、出発前に食糧計算をしてみたら、前進よりも補給が先、という結論になった。そこでC3へかえってみたら、テントはおろか赤旗一本すらも見当たらなかった。ボリーバル峰北壁を落下した雪崩のせいだ。長い時間をかけて掘り起こす。ポールが飴のように曲がっていた。

太田、和田はその場から食糧を持ってC4へ引きかえす。安藤と私は、更にC2まで予備の食糧をとりに行って、夕刻にC4へ戻った。

七月二十日。晴。珍しく風の強い日である。

シモンズ峰の第三登を目指した安藤と私は、新ルートの南稜から取付いて、硬い雪面を直登すること二時間で頂上に立った。頂上は雪庇に覆われ、二年前の米国隊の積んだケルンが東寄りにあった。

一方、C5の建設を目指す太田、和田は大雪原を通過したが、主峰群地域と北西地域を区切っているネイバ山峡への下りでは、三〇〇メートル以上の硬雪の斜面で手間どっていた。ネイバ山峡のセラック帯の氷は予想外に硬く、足場を切るピッケルはピンピンとはねかえってしまう。

セラック帯を抜けると周囲は岩の世界に変わり、広い岩の台地となる。幾つかの湖も見られる。C5を湖の岸に設営していた。

その間、安藤と私はシモンズ峰の下降ルートに長い西稜を下り、鞍部に降り、そこから岩尾根を攀じてエル・プロフェソール峰の第二登を果たし、頂上では米国隊の残していたメモを発見した。

翌日、C5へ入る前に、安藤と私は更に足をのばしてヌエバ・ビスタ峰の第二登も行なった。この日、太田、和田は早朝からC5の北東に立ちふさがる雪の連峰に出掛けていた。

ネイバ山峡とヌアナイシ山峡の分水嶺から立ち上がるこの雪の三つの峰は、確実に未踏峰であった。前もって名前は「ネバド・テソロ（最高峰五二五〇メートル）」と考えていた。

彼等は分水嶺近くから岩稜を攀じて上部雪田に達し、次々と続く三つの峰を北西へ縦走して、初登頂を果たした。技術的に何ら難しくない単調な山々であった。

われわれがプレ・ベースを出発してから二〇日間が経過していた。連日の晴天続きのために、我々四人に少し疲労の色が見えはじめていた。

七月二十二、二十三の両日、シズオカ連峰と命名した八つの峰よりなる最奥の北西ピーク群の踏査を行なった。ネバド・テソロの西方鞍部から北西へ四つの無名峰を越え、途中からナバカ山峡の分水嶺約三〇〇メートルに下れば、目指す北西ピーク群はもう近い。無雪のナバカ山峡の水は、パロミノ川の源流

となって北方へ流れ、ビスクンゲ山峡の水は、ツクリンカ川の源流となって南方へ流れている。シズオカ連峰（最高峰五〇二〇メートル）への入り口となった高度約四七〇〇メートルのこの分水嶺は、南北の高所インディオが通過するらしく、細い踏み跡が両方の谷沿いに続き、古い牛糞も落ちている。そして、インディオの道標である長方形の石が、あちらこちらの岩の上に立っている。

谷はうねりながら、しだいに熱帯降雨林へと高度をさげてゆく。シズオカ連峰へは、分水嶺から花崗岩質のガラガラ石の上を約一時間登ると稜線に出る。北側を覗いてビックリ、数百メートルが垂直に切れ落ちている。サンタ・マルタ山群は、ある意味では、ここを境に高度をどんどん下げ、北はグアヒラ地方の砂漠に、西側はカリブ海沿岸に没している。

二組のペアで全山縦走を行ない、最高峰にはケルンの下に記念品を埋めてきた。しかし、いかに未登の山であったとはいえ、やはり無雪という条件は寂しいものであった。われわれは雪のない山の魅力の限界といったようなものを強く感じた。この印象は、裏をかえせば高度や山登りの困難さに対する、物たりなさのあらわれであったのかもしれない。

七月二十四日。晴。C5の西方に続く低い岩尾根が最後に残った。どう見ても登山の興味をそそるような山容ではなかったが、岩石拾いと地形調査を兼ねて出掛けてみた。だらだらとした老年期の山で、所々に草花も見られる。四つのピークは、いずれも五〇〇〇メートルに充たなかった。

撤収・帰路

北西地域での踏査が一段落したので、テントの中には何となくホッとした気配がある。昼前にC5をゆっくり撤収してC4へ向かった。太田、和田はシモンズ峰の第四登を目指して出掛け、夜暗くなってから帰幕した。

七月二十六日。晴。朝の微光に長い影をわれわれの所まで投げかけているボリーバル峰の急峻な北東稜を見つめながら、安藤、和田の二人が話し合っている。「何時間ぐらいかかるだろう」「帰りはどうする」そして二人は出発した。

私と太田はシモンズの東峰へ立ち寄った後、既に登攀準備を完了して、今まさにボリーバル峰の登頂を北東稜のバリエーション・ルートからやろうとしている二人と、北東稜の取付点で一緒になったが、その足でC3へ入った。

ボリーバル谷氷河上に聳える三角形の独立岩峰は、主峰二座と対比すると高度こそ見劣りはするが、山容は立派なものだった。太田と私は、C3から思ったよりも簡単にこの山に登ってしまった。三角形にあやかって、トリデント峰と命名した。

折りしも、豆粒大に見える安藤、和田の二人は、比較的下部の岩稜上を遅々として進まない。われわれがC3を撤収して稜

線のC2に帰りつく頃、やっと二人の姿は北東稜を登り切り、主峰へ続くテラスの上に立つのが望見された。しかし時既に遅く、太陽は没しようとしていた。二人は、「降りる」と連絡してきた。そして、夜もとっぷり暮れて寒々とした八時頃、C2へ帰ってきた。B・Cの小久江医師となつかしい交信をする。

七月二十八日。風強く、空は晴れ渡っていた。ボリーバル峰の一般ルートを、C2から四人のコンティニュアスで攀じる。約一時間で頂上についた。頂上は予想外に広かった。一昨日安藤、和田が立ったテラスまでは、左右交互に雪庇の張り出た嫌な痩せ尾根が続いているが、一昨日の試登を完全なものにすべく、二人はテラスを往復した。この夜、B・Cに全員集結し、もっとも楽しい夜を満喫した。

これでわれわれの全計画は無事終了した。だが、晴天の毎日が続いたので、予備日数の一週間が丸々残っていた。そこで協議の結果、B・Cでの休養の後、三隊に分かれて附近の峰々の登頂とキャンプの撤収をすることにした。

八月三日にB・Cを撤収するまでの一週間に、小久江、和田はコロン峰の登頂を、太田と安藤はラ・レイナ峰（五五三五メートル）、オヘダ峰（五四九〇メートル）を、私は単独でガンサー峰（五六〇〇メートル）(注)とニエベ・デ・ナボバー峰（五三一〇メートル）の登頂を果たした。

翌四日、迎えのインディオの助けを得て、プレ・ベースの撤収を終わり、雪の舞う思い出の地をラバの背にゆられながら立ち去ろうとしていた。思い返せば色々のことがあったが、とにかく晴天に恵まれたために、五人で一カ月間に処女峰十八座を含む二十八座に登り得たということは幸いであった。

帰路のキャラバンは三日間。植物採集と岩石採集を行ないながら、ドナチュイ部落ではアロワコ族の生活実態調査を行ない、八月九日、隊長や高橋、杉本の待つバランキリヤ市に無事帰着した。その後、平地における昆虫、植物採集およびカリブ海沿岸の貝の採集や断層、化石の調査に約一カ月をかけた。

一方、隊長は、登山班が下山した直後の十一日、内陸調査旅行中、コルドバ州での自動車事故で右腕を骨折し、十五日、小久江医師と共に急ぎ空路帰国した。

約一カ月間の調査期間中、一万キロメートルにおよぶ内陸部自動車旅行も行ない、九月上旬バランキリヤに集結。九月十二日、残る六名はカリブ海のカルタヘーナ港から日本船に乗り、十月十一日に横浜港に帰着した。

(注) ガンサー峰をAAJ, 1968. にはサンタンデール峰と記載しているが、いずれも正式には認められていない。ガンサーとは一九四三年に初登頂したスイス人の名前で、AAJ, 1962. に Evelio Echevarria によって、始めてガンサー峰と呼ばれた。サンタンデールとは、コロンビア建国の英雄の一人で、シモン・ボリーバル将軍の右腕と称せられている歴史上の人物。ボリーバルとサンタンデール将軍の名前がないと、夜も昼も明けないコロンビア人

気質に合うように、われわれボリーバル峰の最も近くにある高峰として、仮に命名したものである。

（補）サンタ・マルタ山群の登山抄史

サンタ・マルタ山群へ登山の目的で訪れた最初の人は、一八八一年の英国の自然科学者、F・A・シモンズであるといわれているが、彼の記録は確かではない。

一八九八年、エル・グアルディアン峰が仏国の旅行家ブレテスによって初登頂されたらしい。

一九二五年には英国のエベレスト遠征隊の医師をやったことのあるウォラストン夫妻が、カリブ海側から登行を試みようとしたが、成功しなかった。

その後、真の登山活動は、一九三六年、二人の独国登山家W・ウェバーとH・ロッチャーが、南面のサン・セバスチャン部落を経由して最高峰群に到達した時に始まったといわれる。ロッチャーは、この遠征でクリストバル・コロン峰（五七七五メートル）の岩稜登攀中に遭難死をとげている。その後一九六六年までに大小の遠征隊を合わせると、実に二十二隊がサンタ・マルタ山群を訪れた記録がある。しかしわれわれが行くまでは、依然として広大な未踏地域を内包していた。

サンタ・マルタ山群の最高峰シモン・ボリーバル峰（五七七五メートル）の初登頂は、一九三九年二月にグイド・ピッチラーとエンリコ・プラオリーニとドイツ系コロンビア人エルウィン・クラウスによって行なわれた。その一カ月後、T・D・ギャボットに率いられた米国調査隊がやってきて、精力的に地形調査を行ない、この時の三角測量のデータをもとに、今日でも利用されているサンタ・マルタ山群の原地図を作成している。そしてもう一つの最高峰クリストバル・コロン峰の初登頂に成功している。一九四三年二月にスイスの著名な夫婦登山家F・マルミロド博士夫妻がこの山群にやってきて、既に登頂されていた最高峰二座の第二登とコロンビア・アンデス山中第三の高峰シモンズ峰（五六六〇メートル）の初登頂に成功し、更に同年三月、同じくスイス人A・ガンサーによりボリーバル峰南稜線上にそびえる未登の無名峰（五五四〇メートル）が踏まれている。これでサンタ・マルタ山群の四大巨峰の頂上は踏まれた。

だが、一九五一年には三人の経験豊かな登山家により、初めて今日最もよく利用されるアタンケス、ドナチュイ経由のドナチュイ川沿いのルートが開かれた。これより以前の隊は全て伝統的なサン・セバスチャン経由のアプローチをとっていた。彼等はボリーバル峰の初登頂で勇名をはせたコロンビア人クラウスを始めとし、クエネット博士、グリエレの三人であった。南東面より入山した彼等は、主峰群域で活動した後、チリグア峠を越して西方に廻り込み、北面へ下りセビリア谷を通ってマモロンゴ部落に達している。このようにして史上始めてサンタ・

マルタ山群を南東から北西への縦断に成功している。

一方、ロンドン大学ではA・B・カンニングハムが、入手し得る全ての過去の遠征隊の記録をたんねんに調べあげ、なかでも特に一九四一年にギャボット調査隊が作成した地図を頼りに遠征計画を練っていた。そして時期は冬の乾期にあたる一月が最も良いこと、入山ルートはジャングルのないドナチュイ川沿いが理想なことを条件とし、一九五四年に取り敢えず五名の偵察隊員を送り込んだ。彼等はジャマイカから空路コロンビアへ入り、超スピードでベース・キャンプを設営した。この超スピード行軍は大変な時間の節約をしたかにみえたが、ベース・キャンプについてから高度順化不十分がたたり、キャラバン中にかせいだより更に多くの時間を失わねばならなかった。しかし彼等はこの偵察により、タイローナ連峰の中にいくつかの未登峰を見つけて目的を果たし、三年後の一九五七年、高所生理学の研究と経緯儀による高度と地形の調査を兼ねた本隊を率いて再度やってきた。丁度時を同じくして、二人のイタリヤの登山家S・モラーとP・ギリオーネにアンデス登山記録の権威チリーのE・エシェバリーア、それにサン・セバスチャンのポーターを加えた四人のパーティーが別の地域で活躍していた。この時の報告書の中で、エシェバリーアは始めて未踏の北西ピーク群に触れて次のように記している。

There are also other virgin peaks (17000 to 17600 feet) to the west of Pico Colon, in the extreme western end of the group, which do not appear on maps and have been located only by airplane……

翌一九五八年一月、イタリヤ山岳会のP・ギリオーネは再びこの山群に舞い戻り、エシェバリーアの記したグアタプリ谷北面の未登峰を総なめにしてしまった。これはサンタ・マルタ山群の登山史上、最も果敢な攻撃を行なった記録となっており、氷と岩よりなる困難な五つの初登頂を含め、四〇日間に二十一座の初登頂と三〇近い新ルートの開拓を行ない、なおかつ、ネバディトス連峰の北東から南西への縦断にも成功したと記している。このイタリヤ人のすさまじい活躍を知ったE・エシェバリーアは次のように書いた。…after the remarkable activity of the Italians, the only unclimbed peaks of this area are concentrated northwest of Pico Colon, just above the impenetrable forest of the Tucurinca valley……

最後に残された未踏域〝北西のピーク群〟へは長いアプローチが必要であった。しかしながら、この年に早くもビットリオ・マググナと二人のバランキリヤ人は、そこを目指して勇敢にも熱帯雨林のジャングルをかきわけて、西方よりルート開拓を行なっていた。比較的ジャングルの薄い尾根上にルートをとったにもかかわらず、荷物輸送の不自由さと連日の霧に悩まされ、行動は遅々としてはかどらなかった。そしてやっと三九五〇メ

ートルの峰に達したのみで終わった。やはり西方ルートは無理かと思われたが、三年後の一九六一年二月、十一年ぶりに米国人の登場となる。米国航空宇宙研究所のワッズワース博士をリーダーとする一行三名。西方ルートは南面もしくは南東面のそれに比較すると熱帯雨林のジャングルというだけで、むしろ条件は悪かった。しかし北西域へのアプローチとしては最短であり、その上種々の面で〝未知の魅力〟がただよっていた。ワッズワース博士は報告書の中で、次のように述べている。

……the formidable northern and western flanks, which contains the densest rain forest and several unclimbed and unnamed peaks 17000 foot class, are still virgincountry. In their rain forests live the most inaccessible and least civilized of the Arhuaco Indians tribes. The forests also contain the ruins of the Tairona Indian cities destroyed by the early Spanish..... The northwestern approach sounded like the type of Challenge I wanted, as a professional geophysicist, I would be interested in the geology of the area, and as a mountaineer, I wanted to scale the unclimbed snow peaks.....

結果は三九五〇メートルの尾根上から十六キロの地点にある雪の峰を見ることができ、偵察は成功であった。ルートは開かれたと判断され、翌年一月、再びワッズワース博士は昨年の偵察の成果を本物にすべく、第二次世界大戦で米軍が使用した水雷爆撃機と同型の飛行機を持ち、三人のガイドを雇用してやってきたが、ドナン・チュクア尾根に遮られて、結局四三五〇メートルの無名峰を登り、ミッション峰と命名したのみで終わった。

しかし彼は報告書には次のように結んでいる。

.....at least, we had opened up a route for a future expedition to reach the unclimbed northwestern peaks.....

一九六六年二月、われわれは彼から詳しい手紙をもらった。その中で彼は「北西地域は依然として魅力のある未踏域である」と結んであった。

ボリビア・アンデス（一九六七年）

＝ワイナ・ポトシ峰登頂＝

関田美智子

準備から出発まで

アンデスへの夢は、山に関心を持っている者の一度は抱くものであろう。距離的に日本から離れて位しているという欠陥を除けば、美しい氷河、安定した天候、紺碧の空の下に六〇〇〇メートル級の山々が数知れぬ程乱立しているアンデス。道路の発達によってキャラバンの必要性も少なく、容易に入りこめる山麓。

確かに魅力的だ！

すでに日本一国だけからも三十隊近い登山隊を迎えるほどポピュラーな山々。しかし、だからといって登り尽くされてしまったわけでもなく、興味が半減されたわけでもない。確かにヒマラヤほどの豪快さ、巨大さはないが、そのかわりアンデスの山々は比較的簡単に麓まで入ることができるし、少人数でも六〇〇〇メートル級の頂に立てる可能性を持っている。

となると私たちのような女性ばかり三人という、小さな心細い隊でも手がつけられそうであった。

コロンビア・エクアドル・ペルー・ボリビア・チリー・パタゴニア・場所はどこにでもある。しかし最少の費用で最大の効果を得ようというのである。結局、私たちの意向は次のようなものに集約された。

一、少人数でアタック可能な山であること。

二、アンデス山脈の中で、従来日本隊があまり足を踏み入れていないところ。

三、アプローチが長くないこと。

四、六〇〇〇メートル級の山に登ること。

五、全く個人的に身軽に出掛けること。

六、費用は自己負担を建前とすること（五十万円内外で）。

七、山だけでなく親善活動も合わせて行なうこと。

このようにして最終的に浮かび上がってきたのが、ボリビアの山々であった。

アンデス山脈はカリブ海から始まって南はフェゴ島まで六〇〇〇キロメートル以上の長きに及ぶ。その中でボリビア・アンデスには現在まで一九六一年一橋大隊、一九六四年神戸大隊、一九六四年外語大隊、一九六五年浅野学園隊の四隊が既に日本

から出掛けているが、未知の部分が多く残っているという。

ともかく三人の力の及ぶ範囲で頂上攻略のできる山々を物色した。乏しい資料の中から私たちの意向を最大限に反映するものとして、ワイナ・ポトシ峰（六〇九四メートル）を目的の山とすることにした。この山は氷河の発達が顕著で、山容はトロイデ型の美しいもので、私達の登頂意欲をそそったが、一つの難点は独立峰だということであった。したがって、ワイナ・ポトシ付近だけに登山活動を限定することは困難なので、次のように計画を分けて、それぞれ一週間ないし二週間ずつ、行なおうという考えに至った。

第一次　ラウラニ山群（主として高度馴化のための登山）
第二次　ワイナ・ポトシ峰
第三次　コルディエラ・レアル最南部（イリマニ周辺）

さて計画はどんどん進んだが、最も身近な資金の問題は各自にまかされてあったので、その調達に苦労した。当初、船を利用するつもりであったのが往復飛行機を使うことになって、予算は一人六十万円を軽くオーバーしたからである。

しかし、幸いなことに装備はエーデルワイス・クラブのペルー・アンデス遠征委員会より借用したので、共同装備のための出費はなかった。また個人装備は常日頃冬山に用いているものを転用し、不足分のみ補ったのでこの面では考えていたほど出費せずに済んだ。食糧は日本から送り込んだものは登山期間中のレーション類、インスタント食品が主で、最少限に抑えた。

こうして準備されたわが隊の荷は総重量二百七十キロ、木箱五、トランク二、計七個というこじんまりしたもので、四月十九日、川崎汽船の船長托送としてチリーのアリカをめざして横浜港を出航した。

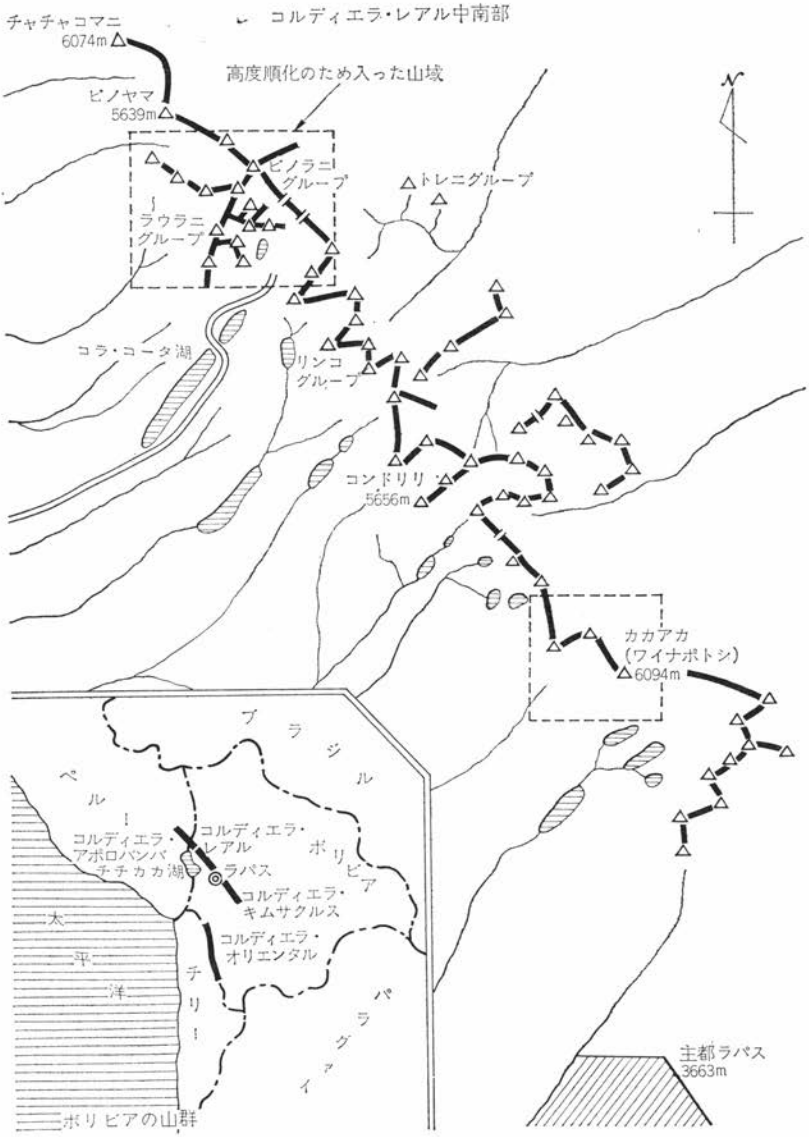
五月二十三日、杞憂に充ち充ちた見送りの人々の顔をあとに三人の隊員は羽田を発った。

隊員は次の通りである。

隊長　関田美智子（27歳）日本女子大学大学院在学中、川崎高校勤務
隊員　清水聡子（26歳）呉造船所ＫＫ勤務
　　阿部正子（24歳）

ラウラニ山群東部

私たちは女性三人だけということから、すべての山行の対象を首都のラパスから車で数時間の所に限った。従って高度馴化のトレーニングの場となる山々も、その要求をみたし、なおかつ周囲に手頃な山が多くあるということから一度下見聞に出掛け、私たちの持参した地図ではラウラニ・グループとなっている山群の東側の山々を選んだのだった。外語大隊の入ったチャチャコマニ谷はここより北側の二つ目の谷である。パン・アメリカン道路を北に向かい、ペーニャ部落の手前を入る道を辿


コルディエラ・レアル中南部
チャチャコマニ
6074m
高度順化のため入った山域
ピノヤマ
5639m
ピノラニ
グループ
ラウラニ
グループ
トレニグループ
コラ・コータ湖
リンコ
グループ
コンドリリ
5656m
カカアカ
(ワイナポトシ)
6094m
ブラジル
ペルー
コルディエラ・
アポロバンバ
チチカカ湖
コルディエラ・
レアル
ラパス
ボリビア
コルディエラ・
キムサクルス
コルディエラ・
オリエンタル
太平洋
テリー
パラグァイ
主都ラパス
3663m
ボリビアの山群

り、カラコタ湖、コティア湖という大きな湖を二つ過ごし、やがて三つ目の湖に行きつくと、もうこの山群の足元である。

この山行はポーターを伴わず、ジープで入りこめる所まで行き、そこから少し上がった所にベースを置こうということになっていた。

六月十七日の朝出発。冷たい空気の中をジープは突っ走った。自動車道路の終点で戻っていく車を見送った後、湿地帯の中に続く細々とした道を横切り、高度四七〇〇メートルにベースを設ける事にする。少人数ではあっても一週間分の装備、食糧の重量は三人の肩にずっしりと重く、一時間ほどの行程に三人とも火をふいてへばってしまった。以下阿部の日記からその行動を追ってみよう。

六月十八日　＝五三〇〇メートル無名峰＝

私たちのテントから北西へ谷が入り込んでいた。今日はこの奥へ入ってみようと三人張り切って出る。草まじりのガラ場を二段越すと登路は相変わらずガラ場が続いていたが、待望の氷河が目の前に現われてきた。さほど苦しくはないが、やはり登る速度は遅い。しかも、つき当たりの小さいとばかり思っていた山が行っても行っても近づかない。今日は初めだからあの小さな山に登ろう等と言っていたのだが、自分たちのスケールに対する目の不確かさを教えられる。仕方なくガラ場の終点から一番近い南側のくずれ易い岩の露出している山へと登る。標高約五三〇〇メートル。ここは日本と反対の南半球なので、北側は岩が露出していて南側にべったりと雪をつけている。高所に登ると、思ってもみなかった山がこつ然と現われる。私たちのおそまつな骸骨地図では、複雑な現物をまのあたりに見て混乱するばかりだ。初日だから無理せずに行こうと午後一時に戻ることにする。往きは期待にせかれて歩んだガラ場も、帰りともなるとガッカリする程長かった。

六月十九日　＝ウィラリョヘタ（五二四四メートル）＝

自動車道がふっつり途絶えてからも、インディオの通り道は奥へ奥へと続いて行った。その道の向こうの左右から迫る黒い山の端に割込むように、ポッカリと白い山があった。上が平らで、山というより雪を四角に切り取って置いたような、そんな山だった。見かけよりずっと遠いかもしれないと、今日はそんな覚悟を決めて出かける。テントのすぐ後ろから始まる湿地がだんだん大きくなり、池塘に浮かぶ水面に、向かいの山が影を落としてゆれていた。東と北の二手に峠道が続いていたが、私たちは右の肩、つまり東側の峠から登ってみた。遠目とはおよそ違い、青いクレバスが不気味な山だった。そして下から見た平らな山頂は真の山頂ではなく、意外に鋭角的な山頂が眼前に現われたのだった。クレバスの多さを敬遠して五一〇〇メートルで引き返すことにする。遠くの山々をスケッチした。

午後、あられが降る。一瞬のうちにあたりは薄白くなってし

まった。南米の山も晴れ通しというわけにはいかないらしい。

六月二十日

今日は半ば休息というつもりで、昨日の山の北の峠に登ってみた。峠はガラガラと砕けた岩が堆積した広い所だった。インディオが積んだのか、ポツンポツンとあるケルンに導かれて、細々と、しかし、しっかりと峠を越えて向こうの黒々とした山の谷間に径は消えていた。

横手の、大量の岩くずを落としている稜線まで登ってみよう、と行きついたコルでの眺めは期待を裏切らなかった。豊富な雪の斜面、大きな谷が切れ込み、全く思いもかけなかった大きな山がすぐ北前方にあった。だが、ここを登れば外語大の登ったチャチャコマニなど見えるのではないか、という期待ははずれた。それらはまだずっと遠い山塊であるらしい。私たちの地図にはない、大きな山が次から次へとその胸を広げているのだった。

帰途、リャーマの群に出会う。好奇心が強いと見え、あまり近づきすぎないかぎり、向こうからキョトンとした顔で見物にやって来る。カメラでも向けようものなら余計興味深げに見物されてしまう。どことなくひょうきんなリャーマは、この山群での私たちの生活に牧歌的な色どりを添えてくれたのだった。

六月二十一日

毎日、五〇〇〇メートル以上の標高まで登り、四七〇〇メートルのテント場まで帰るというのが効果的なせいか、たいして高度が苦痛ではない。今日は、テントの入口に立って北を見上げると、威圧的な急斜面をこちらに向け落としている山へ行ってみることにした。ガラ場を登り、雪のついた急なザレを登ること一時間あまり。目指すピークの下に出たのだが、下で見た時想像もしなかった悪場であった。ピークから下りた岩はハングして直登できず、右肩へ逃げたのだが不安定な岩に緊張させられた。

上でうさぎとリスのあいの子のような小動物を見かけた。こんな岩ばかりの所で、どうして生きているのか不思議に思う。一瞬の間に岩に隠れてしまい、再び現われなかった。

六月二十二日 ＝ハッチャパタ峰（五四二〇メートル）＝

高度馴化のための山行も今日で総仕上げ。一日目の谷の奥に入ることにする。午前五時暗い内にテントを後にする。不案内なガレ場を懐中電灯を頼りに歩くのはうっとうしい。

一日目に較べると、慣れもあるのか、ガレの長さがそれ程気にならなくなった。岩がいよいよ雪の下に没しようとする所でアイゼンをつける。吹きだまりでは膝までもぐる雪も、日射を受けた広い斜面では程よくクラストしてアイゼンがよくきいた。いかにもヒドン・クレバスの巣のような広い雪原を避け、ピッケルをさしてみては進んだ。はるか下で望み見た時、谷の最奥に見えていた小さな平たい山を廻り込んで登ってみると、

広い稜線続きになっていて、少し高いピークが先にあるのが見え、あそこまで行こうと進む。上に出たらばかに風が強い。日はカンカンと照って白銀の世界はきらめいているが、寒さが体を貫く。周囲の山のスケッチをしようとしたが、手が冷たくていうことをきかず、面倒になってやめてしまった。

午後四時帰幕。明日の撤収に備えて荷物を整理する。よく見るとサケ缶が一つなくなっているという。インディオが持っていったということか。彼等の知識では魚のついたのだけ食べられると判断したと見える。泥棒の被害が缶詰一個とは幸運だったが、信じられない程ささやかで何か滑稽な盗難だった。

翌二十三日、ジープで下山し、次のワイナ・ポトシ峰に備えてラパスで休養した。

ワイナ・ポトシ峰（六〇九四メートル）

この山、地図上ではカ・カ・アカと命名されているが、ボリビアではワイナ・ポトシが通称である。男性的なイリマニ峰とは対照的な美しさを持つ山で、ラパス市民の間でも非常に関心を持たれている。

初登頂は一九一九年、R. Diest, A. Schulze によってなされ、以来その美しさ故に多くの人々の注目を惹き、ラパスから比較的近くに位するため短期間で登頂できるので、既に十登以上重ねているもようである。

私たちは高所でのボッカ力の限界を考え、BCから上へテントを上げるのは断念し、ビバークで機動力を持とうということになった。

七月一日　例によってジープに揺られて出発、広大無辺と思われるアルティ・プラノの彼方に、ワイナ・ポトシのたおやかなシルエットが見えつ隠れつして次第に近づいてきた。今回はポーターのフーリオと、登山口を案内してくれるというボリビア山岳会の会員一人が同乗して賑やかであった。四五〇〇メートルのソンゴ・パスで車を降り、ダムを渡っていよいよワイナ・ポトシの山麓に入る。水道路の細い枠に添って歩いていくと、やがて小さな沢が左側より落ちている所に行きつき、そこで昼食をとって山岳会の青年と別れた。それから後、径とも断じがたいリャーマの通る路を辿り、トラバースをつづける。やがてそんな足跡も消えてしまった頃、私たちはトラバースをやめて直登する。四九〇〇メートルを過ぎたと思って目をあげると、そこには氷河の舌端が、老婆の顔のように私達におゝいかぶさってきていた。

小さな流れもあり、比較的広い平らな所だったので、ここにベースキャンプを建設することにした。夜、谷は雲海につつまれ、空には南十字星が輝いていた。

七月二日　朝からガスがかかって視界ゼロ、フーリオに昨日デポした品物を取りにいかせ、私たちも行動を起こそうと支度

をして外に出たが、結局無駄足となり、一日停滞をきめこんだ。

天候というくせものは年々歳々これ同じうせずで、今までの遠征隊が晴天白日に恵まれたとしても、必ずしも毎年同じ状態であるとは限らない。もちろん平均的なことは予測できるには違いないが、それは当たらずとも遠からずの部類に属するものだ。今年はラパスの人々がさかんに異常気象だといっている。今日からこんな悪天では先が思いやられる。

〝エイッ！まゝよ〟とシュラフにもぐり込んで、明日の晴天を心に念じて眠りにおちた。

七月三日　さて、天気はどうかと外をのぞく。満天の星だ。三時半起床、夜明けを待ったがとうとう六時、未明に出発。フーリオはまだ夢路を辿っているのか起き出してこない。彼は一人でテント番である。三人は勇み足で氷河に向かって進む。七時、ティキマニ、ムルラタの空が赤く燃え、夜空の星たちは消えて、清々しく太陽が活動しはじめ、明るい朝がやって来た。

アイゼンをつけ、いよいよ雪の斜面を登り始める。広い雪原、クレバスの群、その中を右往左往しながら尾根上に辿り着こうとルートを求める。雪の状態は場所により千差万別で、膝よりも深くもぐる所もあれば、青氷のところ、表面だけが氷化している所など油断は禁物であった。

快晴で、歩いていると汗をふくが、休むと風が汗をさらっていき、寒さを感じるほどだった。ふりかえるとアルティ・プラノの涯に小さく雪をいただいたサハマがみえている。

ゆるやかな尾根を登り、急斜面を乗っ越すと頂上がパッと目に飛び込んできた。五五〇〇メートル程の地点だった。その頃からクレバスが多くなった。尾根を大きく迂廻しなければならない所が矢継ぎ早にあって、そろそろ疲労しはじめてきた私たちを鞭打った。

午後四時、日はまだ高かったが、五七〇〇メートル地点でビバークすることにして、ピッケルやコッヘルで雪穴をほってツェルトをかぶった。そして気が遠くなるような長い長い夜を迎えた。

七月四日　待望の朝がきた。寒さで体がミシミシするような気がした。ミルクを飲み、はっきりしない空の下を歩きはじめる。

九時、のんべんだらりとした尾根の端にちょうど三角錐でも置いたような頂上直下に出た。なんと長く、しかも急斜面なのだろう。客観的にみればその傾斜は五十度ほど。しかし私には八十度はあると思われた。

頂上を守るように、私たちの前にはクレバスが立ちはだかり、私たちを威圧した。それでもどうにか登路をみつけ、クレバスを渡り、そこからアンザイレンして三人は慎重に登りつづける。カッティングする腕は棒のようになっていく。確保する



チャカルタヤ・スキー場からワイナ・ポトシ峰（6095m）をのぞむ
Huayna Potosi (6095m) seen from Chakarutaya.



5600m地点からのワイナ・ポトシ峰
Huayna Potosi seen from the point of ca. 5600m.

にも、ピッケルのピックも石づきも三センチぐらいしか打ち込めない。そのために数多いカッティングをしいられてぐったりする。知らぬ間に周囲の山々はガスに包まれ、雪が舞い始めていた。三人のザイルワークは遅々として進まず、この三角錐のテッペンまで延々六時間を費やしてしまった。

午後三時、三人が頂に立った頃は雪が顔に吹きつける程風が強く、私たちの身体は冷えきってしまっていた。頂上は大きな雪庇であった。強く風が吹いた後、一瞬チチカカ湖の水の色が目にとびこんできた。あるいはこの頂上付近だけの悪天なのかもしれなかった。

その時、頭からパチパチと火花が出るような痛みにおそわれた。頭から首、背中から腰と、もう立っていられない。それが雷雲のいたずらだとわかるまでに数秒かかった。ピッケル等から遠のき、身体をできるかぎり小さくして避難する。確かにこの頂上付近には電気が充満しているに違いない。もはや何の躊躇もなかった。それこそ転げ落ちんばかりに馳せ下った。しかしゆるやかな尾根に辿り着くと、視界がきかないためにかえってルートを見定めにくくなった。それでもどうにか、昨夜のビバーク地点に辿りついた。すでに夕闇は迫っていたが、この寒さと悪天の中では一メートルでも下におりたかったので、ツェルトをたたみ下山し続けた。

登りの時に苦労した大きなクレバスの上に出たらしかった。しかしすっかり闇にとざされてしまい、この先のルートはもはや判明しがたかった。私たちはクレバスの中の棚にビバークすることにした。三人坐るのがやっとだった。氷を枕に頭を冷やしながらの一夜は、地獄への暗い路を思わせるものがあった。

七月五日　夜明けが近づき、死者の世界は去った。明るくなるのを待ちかねて出発。重い雲がたれこめていたが、薄日がさしてきた。人間は全くげんきんなもので、明るくなればどんな危険があっても解決できると思い込んでいる。私たちも昨夜の心細さはどこへやら、走るようにテントに帰る。フーリオが岩に坐って心配げに私たちを見上げていたが、三人無事なことがわかるとにこにこした。

一日そこでのんびりしたいところだったが、すぐにテントを撤収して下山にかかる。一時よくなるかと思われた天候が、またまた崩れはじめて、昨日よりもひどい吹雪になった。雷鳴もあちこちに響きはじめた。もはやこんな悪天続きの山に長く留まる気もしなかった。四〇〇メートルも下れば人里も近い。私たちはソンゴ・パスめがけて一心に下った。

その夜、ラパスでは十年ぶりの降雪をみた。

イリマニ峰（六四六二メートル）

イリマニはボリビアの首都ラパスの象徴となっている山である。市内から何とも妙な美しさをもつ山容が眺められ、人々は

異常な程の憧憬をもっているらしい。ラパスから南に二〇〇キロメートル、コルディエラ・レアル最南端の山である。北峰、中央峰、南峰の三つの頂からなり、初登頂は一八九八年、マーチン・コンウェイ等によってなされた。

日本からも神戸大隊が一九六三年にこの山をねらって南峰登頂に成功し、一九六五年浅野学園隊は北峰登頂にも成功した。

残念なことに、独立峰であるため行動範囲が限られてしまうので、長期間の登山は適さない。私たちは計画をたてる際に二週間を予定した。しかし現地での情報でもっと気軽に行けること、日数はそんなにかからないことを知り、一週間に変更、行ける所まで試みようということになった。

七月二十二日　予定より二日遅れての出発である。それというのも約束した二人のポーターが行方不明で、出発しようにも動きがとれなかったからだ。

ボリビア山岳会の人たちにも八方手を尽くしてもらったが、皆目見当がつかず、とうとう別のポーターを雇うことになった。

車でイリマニ山麓に入る。新しいポーター君、イリマニの登路を知っているといっていたはずなのに、さっぱりわからずじまいで私たちの手で探す。ベースを四七五〇メートルの所に設け、偵察に出る。五〇メートルも上がると北峰稜線が仰がれ、南峰に続くと思われる尾根に登路をみつけることができた。その夜はシュラフのチャックをあけて寝るほどだった。

七月二十三日　この日はC1を建設するために荷をあげた。一歩前進二歩後退のようなガラ場をあがる。五三〇〇メートルまであげるつもりだったが、登路のガレがひどい上に、ポーター君がまいってしまったので、五〇〇〇メートル地点にC1を置くことにした。ポーターをBCにかえす。二時すぎから悪天となり夜半より降雪。

七月二十四日　昨日偵察した時は三十分で行ったのに、今日は雪の上に出るまでに二時間を要した。昨夜の降雪でガラ場に雪がついているためだった。そこからアイゼンをつけ岩と雪の接する所を歩いていく。雪が軟らかくラッセルを強いられるから雪面をさけた。そのうち尾根全体雪となり、蒼氷の所もでてきた。そこまでくると、あまり調子のよくなかった清水がぐったりと腰をおろしてしまった。五五〇〇メートル地点、午後一時半。ビバーク。

七月二十五日　七時外に出る。ここからコンティニュアスで登るが、カッティングしながら登る足にザイルが重く感じられる。十時、五七〇〇メートル。そこから少し上がった所から尾根は急になり、南峰が真っすぐ仰がれた。もう一日ビバークする余力があるだろうか。三人のこのコンディションで行動をつづけてよいものだろうか。はたと判断に迷う。いや迷う必要はなかった。ここからひきかえすべきなのだ。

C1に帰りつき、シュラフにくるまって目をつむった。きら

きらと輝く南峰がまぶたに浮かんでは消えていった。

七月二十六日　C1を撤収してBCに下り、その夜は賑やかな山との送別会をやった。

七月二十七日　ゆっくりと起き、ボリビアでの山の生活を想い起こしながら、テントを撤収した。少し登って遠くに見えるワイナ・ポトシを眺め、イリマニ氷河に別れをつげた。



山岳　第六十二年

（一九六八年三月刊）

会員第一号城数馬氏のこと　藤島敏男
アンデスからアマゾンへ（一九六五年）　同志社大学山岳会
アコンカグア南壁（一九六六年）　原真
東グリーンランドの山（一九六六年）　池田錦重
アンナプルナ北方山域の踏査（一九六五年）　薬師義美
山内ピッケル抄録　平柳一郎
山と明治天皇　広瀬誠
越後の県境を探る　日本山岳会越後支部
ハンター及びフォレイカーの登頂　錦織英夫
グランド・ジョラス北壁ウォーカー稜の登攀　伊藤敏夫
コー・イ・バンダコール登頂（一九六六年）　板橋元一
ミール・サミール一九六六年　中馬敏隆
バダクシャン山地の旅　安川茂雄
アラスカ・ボナ峰登頂　東京教育大学山岳部・同OB会
ペルー・アンデス（一九六六年）　エーデルワイス・クラブ
ボリビアの山（一九六五年）　岡島成行
ティエラ・デル・フェゴの山旅（一九六六年）　安間荘
アーサー・ジェフリーズの富士登山　成瀬岩雄

追悼　高木菊三郎氏、石黒清蔵氏、磯野計蔵氏、斎藤長寿郎氏、和田豊種氏

海外登山年表　＝一九六六年＝　松田雄一編
図書紹介・会務報告・英文梗概　A5判三七〇頁・写真九〇葉・地図二十五面・定価二千円

ヘス峰登頂（一九六七年）

中村純二

はしがき

東京大学運動会スキー山岳部およびその卒業生のクラブである東大山の会では、一九六三年のバルトロ・カンリ、一九六五年のキンヤン・キッシュにつづき、一九六七年は前回登頂を果たせなかったキンヤン・キッシュに再び登山隊を派遣しようと計画していたが、パキスタン政府より入国不許可の通知があったため、目標をアラスカに切りかえた。

アラスカは高度こそ低いが、高緯度のため氷雪の状況がヒマラヤ並で広大な氷河を抱え、自然に対し人工の加わっていない特徴を持つ。私たちの場合、アラスカは学術調査についても未開の処女地であり、かつアラスカ大学と協力して調査と登山活動を行なえる好条件に恵まれていたことも、目標を決めるための大きい因子となった。しかしこの場合、学術調査と登山活動を同時に行なうことは、いろんな面から考えて望ましくないので、両者を時期的に区別し、滞在前半は登山活動に重点を置き、滞在後半や日本―アラスカ間の往復の船上では、調査と観測に重点を置くことにした。

登山目標としては、高度よりも技術的に興味ある処女ルートを求めたところ、マッキンリー周辺、ヘイズ山群、セント・エライアス山脈等が話題に上ったが、これらの中、アラスカ大学山岳部の勧めもあって、日本人の未だ入ったことのないヘイズ山群を選ぶことになった。更に地図や航空写真により検討を加えた結果、ヘス峰およびヘイズ峰の南面からの初登を目指すこととした。

早速、アラスカ大学山岳部のD・K・ビンガム、R・B・フォーブス教授をはじめ、ボストンのB・ウォッシュバーン、アラスカ山岳会のV・ホウマン等と連絡をとる一方、仲間の一人は現地に赴き、ブッシュ・パイロットのジャック・E・ウィルソンと下打合わせを行なった。

一九六七年一月二十八日、大河内総長の列席する理事会で私たちの遠征計画は大学の行事として承認され、ここに遠征隊に対する派遣本部（白木博次本部長、渡辺兵力事務局長）および募金のための後援会（日高信六郎後援会長）が正式に発足することになった。

計画の概要

名称　東京大学アラスカ学術登山隊一九六七年

目的　1、学術調査活動

- 日本―アラスカ間の夜光緯度効果の研究および海洋調査。
- 極光帯における夜光絶対測定。
- ヘイズ山群周辺の地質調査。
- 高所医学の研究。

2、登山活動

- アラスカ山脈ヘイズ山群中、ヘス峰（三六四〇メートル）、ヘイズ峰（四二一六メートル）などの南面からの登頂。
- チュガチ山群の偵察。

遠征期間　一九六七年五月下旬より九月下旬まで

隊の構成と担当

隊　長　中村　純二（43歳）　教養学部助教授　夜光観測
副隊長　三上　良治（30歳）　経済学部卒　東洋レ　総務
隊　員　岡井　清士（31歳）　医学部整形外科　高所医学
　　森田　尚幸（26歳）　理学部地質大学院　地質・庶務
　　稲垣　忠男（24歳）　経済学部三年　渉外・輸送
　　松田　治（23歳）　農学部四年　装備・海洋
　　本儀　隆（22歳）　経済学部四年　気象・会計
　　伝田　克彦（22歳）　文学部三年　食糧・記録

遠征費用　約六一〇万円（内外貨六七〇〇ドル）

隊の行動の詳細については「東京大学アラスカ学術登山隊一九六七年公式報告書」に記されている。また一般向けに岩波映画製作所編集になる「カシードラルピーク・ヘス」という十六ミリ記録映画（カラー二十八分）が作製されているが、ここではヘス峰登頂を中心に登山活動の概要を述べる。

入山まで

五月二十日、岡井と稲垣は約一・五トンの荷物と共に和歌山港を出港、ヘインズから隊員はバス、荷物はトラック輸送によりグルカーナに六月五日到着した。たまたま六月十日、ブラックバーンでの東洋大学青木隊員の遭難事故にあい、事後処理に協力した。

五月三十日、松田、本儀、伝田の三名は三五〇キログラムの荷物と共に神戸港を出港、ランゲルからフェリーとバスでグルカーナに向かい、六月十五日同地に着いた。

六月十五日、中村、三上、森田の三名は羽田発空路アンカレッジに向かい、六月十六日バスでグルカーナに到着した。グルカーナ飛行場では、ウィルソンがヘイズ南麓のウェストフォーク氷河へは、パクソンから空輸するのが時間的にも経済的にも

能率がいいというので、その日のうちに全員荷物と共に二台の車に分乗し、パクソンまで移動しキャンプした。

六月十七日、午前八時ウィルソン機が飛来、中村、伝田が搭乗してヘイズ峰およびヘス峰の空からの偵察を行なった。ヘイズ山群南面は予想外に岩がもろく、また下部のアイスフォールは悪絶で、当たってみないと果たして切り抜けられるかどうかわからない。しかし山容は予想以上に立派で、とても三千、四千メートル級の山とは思えない。特にフェアバンクスから望むと教会の二つの尖塔のように見えるのでカシードラル・ピークと、名づけられたデボラ、ヘスの双耳峰は鋭くスカイラインをきっていて、大いに登高欲をそそりたてる。二ヵ所のランディング地点を偵察の後、午前九時半ウェスト氷河中流の予定した広大な雪原に着陸した。日射のため、既に雪が軟らかくなりだしたため、この日は一便だけで空輸を中止し、翌六月十八日白夜の午前二時に再開、六名の隊員と八〇〇キログラムの観測器材、装備、食糧を四回のセスナ便で運んだ。かくして快晴のうちに高度一八六〇メートルの地点にベース・キャンプの建設が行なわれた。

ここからは目指すヘスこそ見えないが、急峻なデボラの東稜と南東壁が眼前にそびえ、東には第二目標のヘイズ、南にはヒマラヤ襞で飾られた三角山が望まれ、絶好の場所である。ただし登路となる急斜面ではしきりに雪崩が起こり、日中に行動するのは極めて危険であるので、専ら雪の安定する白夜の夜間に行動することにした。

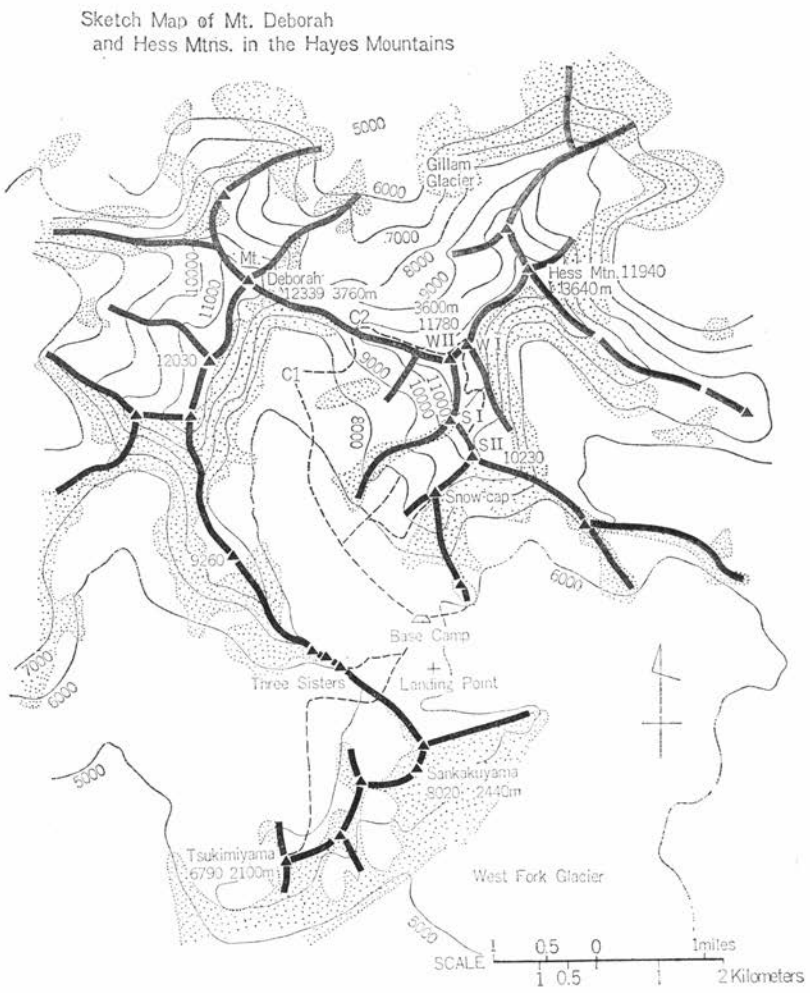
この付近は内陸性気候帯と海洋性気候帯の遷移帯にあたり、年間の雨量は比較的少ないが、アリューシャン低気圧の影響で入山中はしばしば雪や雨に見舞われた。気温は0度前後で、この高度より上で雨に見舞われることはなかった。

ヘス峰登頂

六月十九日から二十一日にかけて、三パーティーに分かれて登路偵察を行なった結果、

①ウェストフォーク氷河内陣→デボラ・ヘス鞍部→稜線→頂上

②スノーキャップ→ヘス南峰Ⅱ→雪田→頂上　の二つのルートが考えられた。しかるに、私たちに一日遅れ、デボラ登頂を目指して入山してきた米国ハーバード大学の五人のパーティー（F・ソーンキスト隊長）の話により、ルート①は一九六五年に既に彼等の中の二名によりトレースされ、登頂されたことを知り、誠にガッカリした。そこでルート②を採ろうとしたが、このルートは稜線は岩がもろく、氷河はセラックが大規模であって、本隊のためのルート工作を行なうのは日数から考えても殆んど不可能であることが判った。そこで本隊は①による登頂を行なうと共に、別に小さな隊が一泊か二泊のビバークで②のラッシュ攻撃を行ない、これを西峰付近で本隊が収容することに


Sketch Map of Mt. Deborah
and Hess Mtns. in the Hayes Mountains
Gillam Glacier
Mt. Deborah 12339 3760m
Hess Mtn. 11940 3640m
3600m
11780
C1
C2
WII
WI
SI
SII
10230
Snow cap
Base Camp
Three Sisters
Landing Point
Sankakuyama
8020 2440m
Tsukimiyama
6790 2100m
West Fork Glacier
SCALE
0.5 0
1miles
1 0.5
2 Kilometers

内定した。

六月二十二日より活動開始。全員荷物をかついで二一時三〇分BCを出発、ヒドン・クレバスを避けて氷河の内陣に達し、標高二三〇〇メートルの地点にC1を建設した。その後吹雪が続いて荷揚げの速度は落ちたが（天気図参照）、七月に入って漸やく小康を得たので、七月二日夜からC2への登路の開拓をはじめた。八名はC1から直ぐ右手の斜度四十五度の急斜面に取付き、続いてデブリに埋まった平均傾斜四十度の長い斜面を登行、最後に氷柱の下った急な氷壁を三ピッチで越えてデボラ・ヘスの稜線に達した。時に七月三日三時一〇分、C2の標高は三一五〇メートル、気温は零下一〇度前後であった。この日C2にはルート工作隊の松田、本儀が残り、他の6名はC1に下った。七月三日は沈澱。

登頂隊の記録（松田の手記より）

七月四日　零時の交信ではC1の気圧は依然低く、この前の好天時より高度計で一〇〇メートル低いとのことであったが、その後次第に青空らしいものがガスと風雪の上に見え始めた。天候は快方に向かう模様なので、一眠りの後、九時五〇分ルートの偵察に本儀と出発することにした。主な装備は九ミリ・四〇メートルのナイロンザイルの他、二十五メートルの固定用ザイル、アイスバイル、スノーピトン、アイスハーケン、アブミ、ツェルト等である。

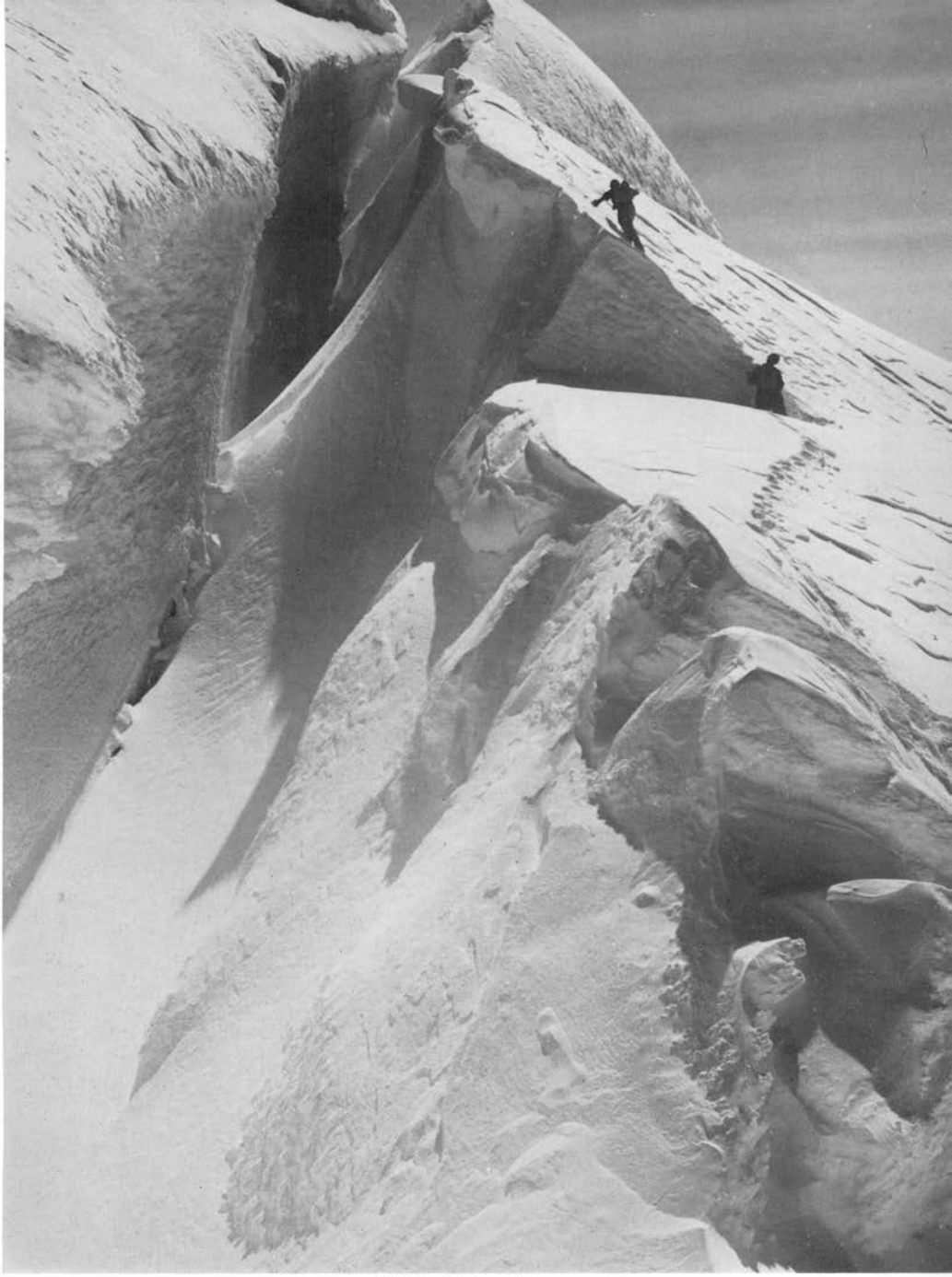
風はかなり強いが気温はそう低くない。膝までもぐる半締りの雪に大汗をかいてコンティニュアスで進む。やがて稜線が痩せて来て、一ヵ所急な氷壁を右手にからんで登ると、前方がクレバスで断ち切られた難所に来た。右に廻るとクレバスの下の部分が雪稜になって続き、幅が狭くて飛べそうに思えるが、近づくととてもそんな幅ではない。スタカットで四ピッチ程進むと、別のクレバスがくい込んで、間に雪のつまった所があり、どうにか渡ることができた。赤旗を立て、急な雪面にステップを切って主稜に戻る。なおも進むと、高さ、幅共に数十メートルもあるエビのシッポのジャイアンツの列が間近に迫って来る。そこは西峰Ⅱの主稜で、一三時二五分、頂上に着いた。

北側のギラム氷河の縞模様の間に、真青なパドルがペンダントのように点々と並んでいる。南側にはルート②の全容が望まれた。西峰Ⅱでは休まずに北側に曲るように下ると、西峰Ⅰ、Ⅱ間の純白、平らな雪田に出、案外早く、一三時四五分西峰Ⅰの頂上に着いた。ここで昼食。東北方には頂上までのルートが初めて望まれ、コル付近の雪庇とクレバスの交錯した痩尾根や頂上直下の急斜面が意欲を盛り立てる。

一四時半、西峰Ⅰを出発してしばらく進むと、稜線はストンと切れ落ちて、先は覗くこともできない。しかし両側は急峻な壁で他にルートもないので、八十五センチメートルのスノーピトンを打ち、二十五メートルの固定用ザイルを垂らして本儀が



カシードラル・ピーク（左からデボラ、西峰II、西峰Ⅰ、ヘス）
Cathedral Peak: Mt. Deborah (3760m), W II Peak (3600m), W I Peak (3600m) and Hess Mtn. (3640m) from left to right. (By K. Denda)



稜線上のクレバス

Knife-edged ridge with a big crevasse between Hess W II Peak and Camp 2.

(By J. Nakamura)

トップで降りにかかる。ピトンはよく効いた。カッティングしつつ一歩々々ゆっくり下ると、最後の二メートル程は氷壁のオーバーハングとなり、下には細いクレバスが口を開けている。フィックスを持って飛んだ所、うまく先のリッジの上に飛び乗ることができた。ここでかなり時間をとったので休まず雪のリッジをコンティニュアスで下り、最後にスタカット四ピッチで西峰Ⅰと主峰の間のコルに一七時到着した。

この先はナイフエッジとなり、左手はクレバスにハング気味に落ち、右手は一気に千メートル程落ちているので、リッジの中心僅か右側を一歩々々登る。眼下にブロッケンが出ていた。このリッジの中心に三角の尖った氷のピークがあるが、この登りで交信時間の一八時を迎えたので、リッジに馬乗りになってトランシーバーを取出す。

C1では七月四日の日中はズッとホワイトアウト、夕刻から好天に向かって来たので、行動を開始、本隊はC2へ向かい、稲垣、伝田のスノーキャップ隊もいよいよ出発するとのことである。隊長はこの好天を利用し、松田、本儀の二名にそのままアタック隊として頂上を目指すよう指令して来た。

この三角ピークの下りは短いが急なので、セカンドは天ぺんの氷をピッケルでキノコ状に切り、ザイルを廻して降る。三ピッチで下りおわる。時間は容赦なく過ぎ、最後の三〇〇メートルの急斜面を下り基部についたのは二〇時だったが、白夜のためあせることもなかった。食物を適当に頬張る。天候はますます落着いて来た。ここからは幾つかの氷の隆起の左手伝いに、傾斜のなるべくゆるい所を縫って行く。蒼氷の壁が出るようになってからは、頂上まで延々たるスタカットの繰返しである。雪面は氷になったり硬い氷と空ろな氷が入り交っていたり、クレバスがあったり、変化は多い。やがて傾斜がゆるくなり、南北に長い頂上の北の肩に近づいた。

七月四日二三時四五分、二名は遂にヘス峰の頂上に着いた。持って来た小さな米国旗と日の丸をピッケルに結ぶ。この日は偶然アメリカの独立記念日でもあった。風速は二〇メートル近かったが、夕焼けの空を背景によくはためき、夕焼けはやがて朝焼けに変わって行った。頂上の東側は雪庇を出し、先は切れ落ちているので、ヘイズ方面への稜線は見られなかったが、ヘイズ峰は雲海の上にヘスに似た偉容を悠然と現わしていた。七月五日〇時、C2へ向かう本隊とは西峰が邪魔して交信不可能であったが、南稜に取付いたスノーキャップ隊とは連絡がとれ、本隊は傍受によって私たちの登頂成功を知った由である。

大休止の後、〇時半頂上を出発、氷のルンゼにはアイスハーケンを一本打ち放しにして下った。雪は登りより条件がいいので、下りは四〇メートルのスタカットで真直ぐ下った。三角ピークはキノコで越え、オーバーハングの氷壁はアイスハーケンを打ち、アブミをかけて乗り越えた。ハーケンはキンキンと音

を立てて喰い込み、よく利いた。この頃から次第にガスが出、飛雪が舞って来たが、西峰Ⅱの下では赤旗が見つかり、ホッとした。かくして八時五〇分、二十三時間の行動の末C2に帰着。テントには隊長と森田がオバルチンと食事を用意して、暖かく迎えてくれた。二人共多少雪盲気味であった。

この日稲垣、伝田のスノーキャップ隊は下部のアイスフォールでセラックの迷宮に入り込み、ビバークの後C1に引返し、三上、岡井もC2への荷上げ後C1に引揚げていた。翌七月六日、松田、本儀はBCに下り、代わりに三上、岡井がC2に登って来た。この間中村、森田は稜線の偵察に向かったが、ホワイトアウトのため西峰Ⅱの下で引返した。同時に稲垣、伝田は再びC1からスノーキャップ・ルートに向かって出発した。

スノーキャップ隊の記録（伝田の手記より）

七月六日夜、C1を出発した稲垣、伝田はスノーキャップ・ブランチの入口でスノーシューをデポし、前回のビバーク地点まで楽に着いた。ここから左岸に渡り、いよいよ四十五度の急斜面の登高にかかる。ザラザラの氷をアイスバイルでステップを切って乗り越え、小スノーキャップのクレバスの下に出る。ここからはラッセルが深く、大汗をかいての登高だ。七日六時C2との交信、主稜線の辺に黒い人影を認めることができた。一方、下のスノーシューをデポした地点付近には丁度松田、本儀が通りかかり、盛んに手を振っているのが見られた。これらに励まされ、四〇メートル・五ピッチのスタカットでスノーキャップ直下のナイフエッジに立つ。見る見る空は明るくなり、雪は腐って来たので、東側斜面に一旦下り、二ピッチでスノーキャップ頂上に立つ（八時二〇分）。ここから再び西側斜面に下り、雪庇の下をトラバースして十一時半南峰Ⅱとのコルに着いた。ここでビバーク。一八時C2との交信に起きるが、ガスのためもう一眠り、二一時四五分起きて朝食をとり、南峰Ⅱへ出発する。昼間アイゼンを団子にした雪も漸やく締り、快調に南峰直下まで進む。しかし、ここから南峰Ⅱまでは凄く急なので、左方に壁をまき、七月八日〇時南峰ⅠⅡ間のコルに出た。C2の本隊もいよいよヘス峰頂上へ向かった模様である。南峰Ⅰまでも左右に雪庇の出た急な雪稜つづきなので、ここから東の雪田に降りることにする。雪庇を切り、スノーピトンを使って四〇メートルの懸垂を行なう。ここから西峰までは処女ルートであるが、セラックが錯綜して、私たちにも先がどうなっているか全く判らない。腰に達するラッセルに悩まされつつとにかく登り、セラックにぶつかる毎に右に左に迂回する。やがて二〇メートルの垂直の氷壁にぶつかった（六時）。セラックの切れ目を少しでも登ろうと左にトラバースを始めた頃、空はどんどん明るくなり、再び雪は腐り始めた。八時頃、今度は右のルンゼ状の雪の斜面を登り始める。稲垣が三〇メートル程ステ

ップを切って直登し、氷に囲まれたクレバスの中に入って小休止する。やがて激しく粉雪が降って来た。

この時西峰Ⅰの少し先まで進んでいた本隊は、ホワイトアウトと降雪のため西峰Ⅰまで引返し、我々のために盛んにコールしているのが聞こえて来た。夢中でコールを返し「トランシーバーを」と叫んで本隊との交信に成功した。これで我々は雪田直下のズッと左寄りにいることが判った。

隊長と岡井は西峰Ⅱに登り、三上と森田が雪田の下部をトラバースして探し回ること三〇分、一〇時過ぎになって遂に氷の殿堂の中で四名は固い握手を交わすことができた。これによりスノーキャップから南稜を伝う処女ルートのトレースを完了した。

その後も本隊はヘス登頂を目指し、稜線を途中まで往復したが、天候悪化のため登頂は果たせなかった。一方、ベースキャンプをヘイズ直下のスーシトナ氷河へ移動すべき予定日の、七月十五日が次第に近づいて来た。七月十日夜からは撤収を考慮することとし、七月十二日に訪れた晴間を利用してキャンプの撤収を行ない、その日のうちに全員ベースキャンプに降った。

われわれはともかく南面からのヘス第二登とヘス南尾根の初トレースに成功したわけで、盛大なパーティーを開き、ヘス登頂を喜び合った。

七月十三日以降、迎えの小型機が来るまでの数日は荷まとめの傍ら、近くの月見山二一〇〇メートルに初登頂したり、三角山にいどんで中腹まで登ったり、三姉妹峰を訪れて高山植物やパドルを鑑賞したりした。これらはいずれも私たちの命名による山々である。

七月十五日からベースキャンプは連日の吹雪で、飛行機は姿を見せず、沈澱を続けた。一週間以上経った二十三日になって漸やくウィルソンの依頼を受けたデニー・トンプソンが、悪天候を冒してパイパー機で飛来した。この時ヘイズ方面はなおガス、移動できる見込みがたたないので、われわれはひとまずトンプソンの飛行基地デナリーに引上げることに決めた。翌二十四日デナリー・ハイウェイを二台の車に分乗してグルカーナに向かい、近くのドライクリークにキャンプしたが、この日も雨で、われわれの転進は時宜を得た処置であったと話し合った。

エクルートナ氷河の事故

一九六七年はアラスカの天候が極めて不順で各地に大雨が降り、フェアバンクスでは洪水が起きる有様であった。このような状況でヘイズに向かうことは時間的にも無理なことが予想されたので、代わりに一台の車をチャーターして、小パーティーによるチュガチ山群の探査を行なうことにした。中村、三上、森田、稲垣の四名は西部チュガチのエクルートナ氷河に、岡

井、松田、本儀、伝田の四名はバルデズを中心に車を利用してウォーシントン氷河その他に入って偵察を行なうことにした。

このエクルートナ氷河を引揚げる日に転倒滑落事故が起こり、二名の負傷者を出したのは遺憾であった。しかし救出が手早く行なわれたため、二名共傷が快癒し、誠に不幸中の幸いであった。

八月七日は天気図（後掲）からもわかるように低気圧の襲来で強風雨であったが、バルデズ隊との約束もあり、雨も少し小止みになったので、午前九時半ベースを出発した。岩のガラ場を降り、氷河に出た所でアイゼンを着けた。最初は五〇度の氷の急斜面であるが、注意すれば滑落の危険はないと思われたので、慎重に足場を切って降ることにし、ザイルは結び合わなかった。このあとは、通いなれたなだらかな氷河を、稲垣を先頭に森田、中村、三上の順で互いに二十数メートルの間隔を保ちながら降り始めた。

この付近はエクルートナ氷河の本流と西俣が合する所で本流が右に屈折しており、このため氷河は中流付近から右岸に向かって緩いスリ鉢型になっている。最大傾斜は二十五度程度。下山のため歩く進行方向に関しては、最初二十度、中間十五度、その先は更に緩くなっていた。なお最大斜度十度―十五度、幅七〇―一〇〇センチメートルの外傾したバンドが、最大傾斜線に直角に階段状に数本走っており、われわれはこのバンド沿いにトラバースしていた。氷質はアイゼンのツァッケが一センチメートルほどはいる程度の硬い氷であった。

斜面の傾斜が次第に緩くなって来たと思われるころ（一〇時一〇分）、セカンドの森田が突然前方に転び、背負子を背負ったまま右半身を氷面につけ、足が斜め下になった姿勢で、荷物に引きずられるような恰好で、ゆっくり滑落を始めた。

森田はピッケル停止をしようとするが殆んど効果はなく、十数秒滑る間に次第にスピードを増して行った。

数段下のバンドの前方約二〇メートルを歩いていたトップの稲垣は、これを見て水平に五メートル程戻り、森田の許にかけよって森田の身体をかかえようとしたが、自分も足をとられて転倒、二人重なって滑落を始めた。この後三回程試みた稲垣のピッケルストップは極めて有効で、ピックが打ちおろされる度毎に周りに氷片も散り、加速度も減少したが、二人分の体重と合わせて五十五キログラムの荷物の持つ運動量をゼロにするまでには至らず、そのうちに斜度五十度の急斜面に入って中村、三上の視界から消えると共に、一挙に岩壁に向かって二人離れて落下して行った。滑落距離は二十五～三十度の斜面を森田は三十五メートル、稲垣は約十五メートル、五十度の斜面を両者いずれも約二十メートルであった。森田は岩壁にぶつかった後、さらに岩と氷河の間の斜度四十度のラントクルフトに飛び込み、滑滝状の岩壁を約一〇メートル滑り落ち、岩と氷にはさ

まって漸やく停止した。

中村と三上は直ちに迂回して現場に向かった。幸い事故現場の二〇〇メートル下流には、米陸軍山岳訓練隊のインストラクターであるH・E・ワグナー氏と兵士八名が居合わせ、事故を目撃して彼等も直ちに現場にかけつけてくれた。稲垣は岩壁と氷壁の斜度が比較的緩い地点の雪氷が岩壁側に突出した所で止まって、左大腿骨折と右足首骨折、ワグナー氏の操作で数分で意識も取戻した。森田は稲垣の下流約二〇メートルのラントクルフト内奥に発見され、頭蓋骨、腰椎骨の骨折と気胸で意識不明であった。

ワグナー氏はこの状況を見届けた後、単身氷河を下り、氷河末端の米軍キャンプから無電で米陸軍にヘリコプターの応援を求めてくれた。三上は稲垣に付いて止血、副木を行ない、中村は森田の背負子とアイゼンを外し頭を上にした後、軍医と協力して目かくし、止血などの応急手当をした。足場が悪く救出に多少時間を要したが、大雨の中にもかかわらず担架をザイルで吊り上げ、先ず稲垣を、次いで森田を約三〇〇メートル下流の平坦なモレーンの上まで移した。

風は相変らず強く、ヘリは着陸できそうにないので、先ず重傷の森田を担架に乗せて氷河を降り始めた時、風が少し弱まって小型ヘリが強行着陸してくれた。一三時五分第一便で森田、つづいて一三時二〇分第二便で稲垣が運ばれ、米軍キャンプ地から大型ヘリで十四時、エルメンドルフ空軍病院に収容された。

その後負傷者の状況も明るい見通しがついたので、三上のみ状況報告のため空路帰国、岡井が病院に残り、中村、松田は予定の夜光観測をカナダ領ユーコンで実施した。負傷者は接骨その他の手術の後、八月末空路帰国した。岡井は研究のためトロントに向かい、本儀、伝田は名古屋港着八月三十日、中村、松田は九月二十六日清水港に着いた。

エクルートナの事故は勿論不可抗力ではなかったと判断している。森田は第一回のバルトロ・カンリ遠征にも参加したベテランで技術的には問題はなかった。最終日で、しかも難所を通過した直後という気のゆるみと、何かのはずみで転んだとき、運悪く頭でも打って十分ピッケル操作ができなかった所に原因があったのだろうと推察される。現在、森田の追想は当日小屋を出てカギをしめた所で停止しており、この辺の事情は未だ決定的な結論に達していない。ただ外的条件として、背負子が外し難くてピッケル操作ができなかった点を反省し、バルトロ型よりもっと外し易く、角ばらない背負子の改良を部内で計画している。また森田はズボン式のビニール雨具をつけていたが、これは極めて滑り易いので、山には使わない方がよいとの結論に達している。

反省並びに二、三の意見

最後に今回の遠征を終って、特にアラスカ、カナダに出かける場合、参考になると思われる二、三の点を列挙しておく。

一、ジオロジカル サーベイ発行の、六三、三〇〇分の一地形図は極めて精確である。これとウォッシュバーンの航空写真を利用すれば、ある程度ルートの選定は可能である。個々の山については『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』に詳しい。

二、気象上、時期としては五月、六月が最適である。ただし海岸地方は一般にガスが多い。ラジオの天気予報は大まか過ぎて、特に山地では余り参考にならない。その場所で気圧計その他で判断すべきである。気象の周期は大体二日ないし一週間である。夏季は白夜となるので雪質のかたい夜間に行動するのが適当、しかし夏の特に南面の岩稜はもろく、できるだけ氷の直登ルートをとるのがよい。

三、装備は船で輸送し、車を現地で借りるのが一番有効なようである。というのは自動車の整備や故障、長い入山期間のことを考えると、車を日本から持って行くのは必ずしも得策ではないからだ。

四、氷河に入るには、日数、費用、熊の脅威を考えた場合、ブッシュ・パイロットによる軽飛行機を利用するのが最善の策である。パイロットとしてジャック・ウィルソンやドン・シェルダンならば絶対に信用できるが、デニー・トンプソン等も使えなくはない。また場合により荷物を前進キャンプ予定地に投下したり、帰途徒歩でハイウェイまで出ることを考えてもよい。天候が定まらない場合、チェック・アップ・フライトの約束は、登山活動の計画に重大な制限を加えることがあるので、できれば無電で飛行基地と連絡できるようにしておくのが望ましい。ただし以上の予備交渉は数ヵ月前にすませておくべきである。

五、入山中の危険として、第一にヒドン・クレバス、第二に雪崩が挙げられる。平坦な氷河地帯はザイルをピンとはったまま、全員連らなって歩き、または休憩するのが鉄則である。この場合スノーシューを用いるのは極めて有効であり、スキーも歩く道具として十分役立つ。雪崩を避けるには、暖かい日中や豪雪の直後に歩かないことである。

氷状は極めて硬いこともあり、ザラザラになっていることもあり、半しまりのこともある。このためスクリュー式のアイスハーケン、断面がコの字型のアイスピトン、長さ八〇センチメートル程度のスノーピトンを、それぞれ数十本携行すべきである。今回はかえって通常の長さ二〇センチメートル程度のアイスピトンはあまり使えなかった。またスノーピトンも断面は円形でなくするよう改良する必要がある。

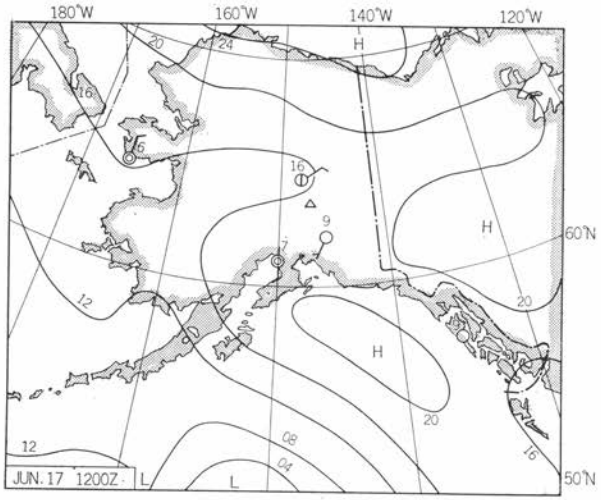
六、セスナ機の場合、一回の輸送量は三〇〇キログラム程度であり、積載スペースも極めて限られているので、梱包の容積はできるだけ小さく、また軽くすべきである。パッキング袋や円筒型カートンボックス等は有用であろう。勿論ルートにもよるが、登攀用具も重装備でなく軽快にして、行動に弾力をもたせた方が有効であると考えられる。

七、食糧は嗜好面、経済面の両方から全部日本から携行することを勧めたい。ただし牛肉など生鮮品も、氷河に埋めておけば一週間程度は使用可能である。

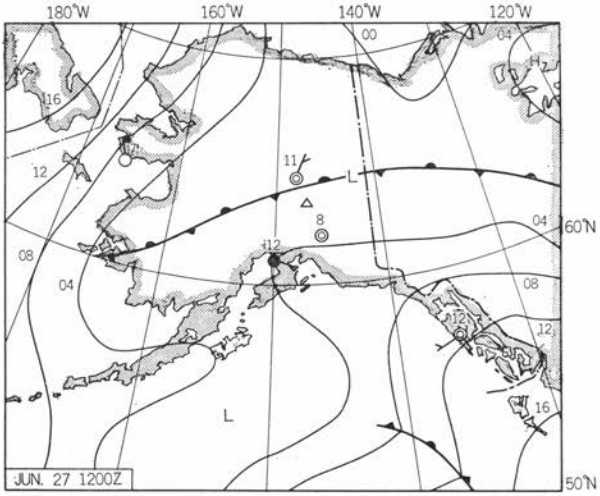
八、入山にあたって現地のレスキュー・グループ、山岳会等にはできるだけ連絡をとっておくべきである。また生命傷害保険のみならず、写真機や借用品についても、しかるべき保険をかけておくことを勧めたい。

以上の準備をすれば、旅行者の外貨の枠内で一ヵ月か二ヵ月の間アラスカ、カナダの山にはいることが可能である。そこでは人工の加わらない雄大な自然に接し、豊富な野性の動植物を楽しみ、ヒマラヤにも匹敵する広大な氷河や氷雪の醍醐味を、心ゆくまで味わうことができる筈である。

（参考）アラスカの天気図

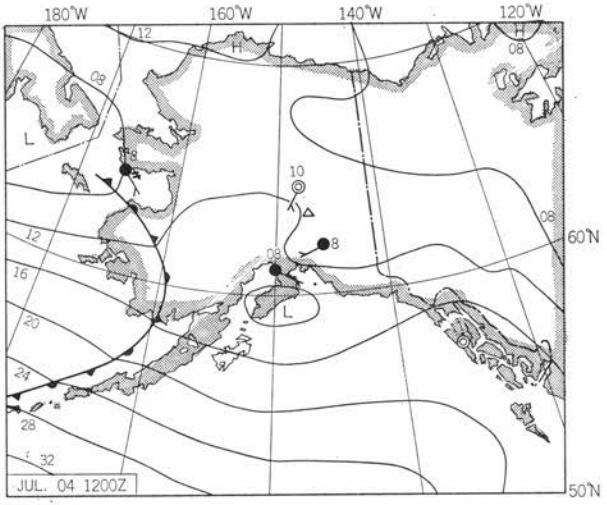


入山時の好天のときのもの。

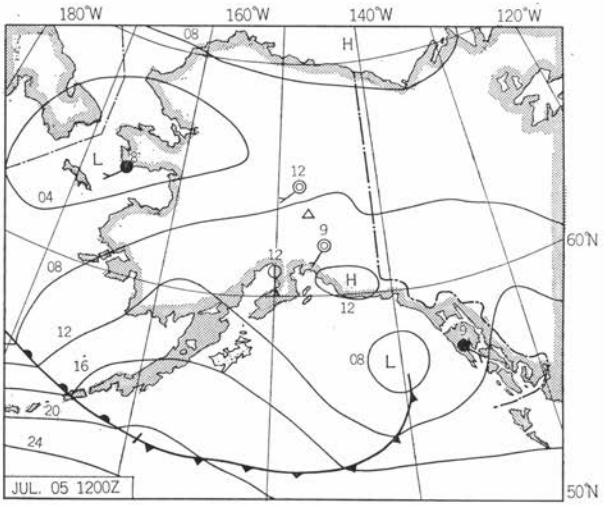


吹雪で停滞中のときのもの。

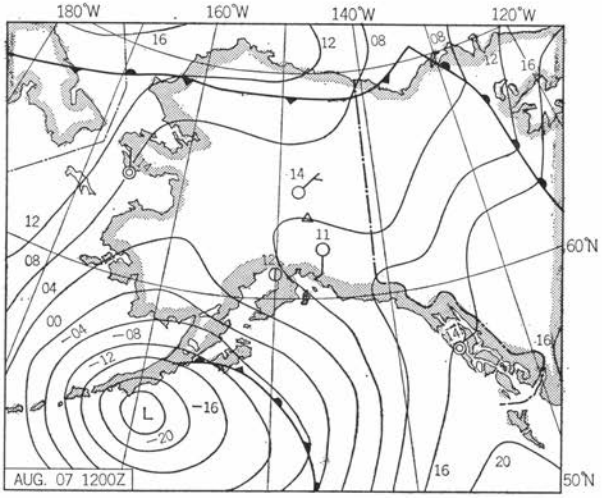
フェアバンクス洪水時も同様の天気図で、南北に伸びた前線が一週間近く停滞していた。



小さい気圧の谷が通り、下部は雨または曇りだが、三、〇〇〇メートル以上は比較的穏やかで、時々青空も見えた。



ヘス峰登頂時の天気図。
小さい高気圧圏内に入り、雲はあるが、風も弱く、二十三時間の連続行動ができた。



低気圧の襲来で、終日風雨強く、行動にもさしつかえる程度であった。

小川登喜男君を憶う

成瀬岩雄

まえがき　戦争後三、四年間は、本会員の動静にも不明の点が多く、戦時中も含めて、その頃亡くなった多くの会員については『山岳』や会報に未掲載のまゝ今日に至っているものも少なくない。その欠を少しでもうずめたいとは、編者のかねてからの希望であった。小川登喜男氏の場合もそうであって、会報第一五一号（一九五〇年九月）の八頁に極く簡単に、その訃報が記されているに過ぎなかった。偶々編者が会の図書室で『山岳展望』第九号（一九六六年十二月）を繙いていたとき、会員成瀬岩雄氏が小川氏の思い出を綴られているのを知り、同氏にその一文を『山岳』へ転載されたいと請い、併せて山崎安治氏を厄わして、故人の略歴と出来れば写真等の入手を依頼した。幸い各位の協力を得て目的の果たせたことを喜ぶと共に、各位に対し心から御礼を申し述べたい。（編者）

小川登喜男との交際は比較的短時日ではあったが、山を中心とした彼との交際は、その人となりから受けた恩恵は山の如く大きいものだった。

当時、僕も学生時代の事であり、社会人としての訓練は受けていない頃で、云わば山の事しか考えない若い時代ではあったが、今、年代を経て社会人としての経験を多少なりとも得て来て見ても、その人となりから受けたものは決して単なる「山の友達」だけではなかったと思っている。尊敬出来る仲間であったと思う。常に無口で、その謙虚なる行動、態度は一面、山の崇高さに似たものを備えた人物であった。それだけに、あんな若くして世を後にした事は如何にも残念な事だ。

僕はもともと、東北の山を歩きたい一念のみで東北大学に入ったのだから、学校などにはメッタに顔を出す必要もなく、従而所謂「大学生生活」から受けたものは何もなかったし、当時心酔していた柳田国男さんの著書に引かれて、むしろ好んで独りで東北の秋の山を楽しんでいたので、特に此方から仲間を求める気持もなく、大学の山岳部のルームに顔を出した事もなく従而、小川君と知り合ったのは一年近く経ってからではあったが、一年上級に彼の様な人物を、山プラス「仲間」として発見し得た事は、この様な意味では「大学生生活」を楽しいものにしてくれたと云えよう。

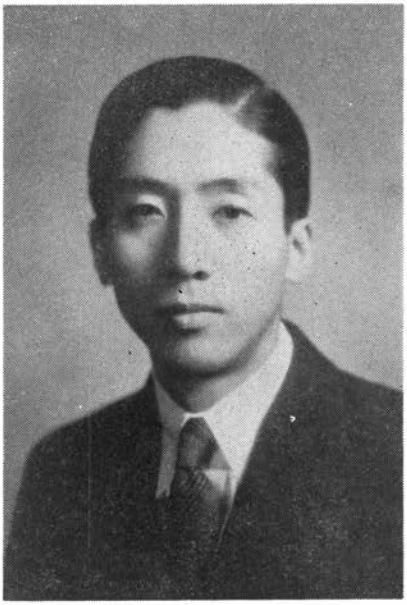
偶々それ迄に度々、毎冬、毎春出掛けていた吾妻山の硫黄製錬所小舎に久振りで出掛けた時の事、例の如く微湯（ぬるゆ）温泉から吾妻富士の裾をかけ廻る、あの、いつでも猛烈な風に吹き曝される所を、僕は一人トボトボ、スキーを進めていた時、見知らぬ

スキーヤーが矢張一人で吹雪の中をやってくるのが、荒れ狂う猛吹雪を通して眼にとまったのだが、之が矢張僕と目的地を同じくする小川君であったわけだ。その夜、小舎で彼が東北大学の学生であると云う事も初めて知り、小川君もあの通り無口な、温厚な人物であったから、あまりお互いに語ると云う事もなかったが翌日、五色温泉へ一緒に越えて仙台へ帰ったのが初まりで、車中で語り合う内、一度、山の事となると別人の様なファイトの持主である彼としても、肝胆相照すと云う仲間もいなかった様で、之を機会に彼としてもよき仲間を得たと云う様な処ではなかったかと思う。

それ以来、僕の下宿を訪ねて来る数も頻繁となり、教科書は揃っていなくてもアルパイン・ジャーナルだけは揃えて持って来ていた僕の部屋に入りびたり、又、偶々僕の持って来ていた大島亮吉さんからの手紙の数々を彼は毎回、まるで骨トウ品の掘出し物にでも手を触れる様な顔付で、繰返し読んでは何かと亡き大島さんの話をさせようとするのであった。彼としても大島さんが日本山岳会の木暮さんや田部さんに対して敬意を抱いていると云う事について『登高行』等で感銘していたらしく、「大島さんと云う人の偉さは唯、レコードばかりでなく、決して自らを宣伝する様な事なく、先輩に対する敬意、礼儀を心得ている処に僕は感心しているのだよ。それだけに何かの機会に一度、会って見たいと思っていたのだが残念だった」等と既に亡き大島さんに会う機会に恵まれなかったのを、如何にも残念がっていたが、此辺りが又、如何にも彼の山登りに対する彼らしい考えで、その謙虚な態度も自らこの様な気持の表われであったと僕は思う。又、時には夜を徹して語り合い僕のシュラーフザックに入って寝て行く様な事もあり、又、時には黙って影の如くスーと僕の部屋に上り込んで来て、勝手知った僕の書架から例の手紙や、山の本を引張り出して読み、黙ってスーと消えて行くと云う様な事で、もう其頃は彼と僕との間柄も山を中心として一つの暗黙の呼吸が通っていた事は確かだったのだ。

本来なら彼は、大学では僕より一級上のクラスであったのだから、当然僕の方から先輩として諸事につけて取扱うのが礼儀であり、又、僕も勿論その様に取扱ってはいたのだが、口幅ったい様な事をいって恐縮ではあるが、当時、未だ積雪期の北アルプスに入ったグループは、早慶学習院位のほんの僅かしかなかった時代であり、殊に彼が後に熱愛した谷川岳などについては、殆んど知る人も少ない時代で、小川君としても勿論、その意欲には燃えていた事と思うが、其点では僕の方が聊かなりともその実績を持って仙台に来ていたので、彼の僕に対する態度も決して所謂、上級生と云う様な態度を微塵も表面に出す様な事もなく、むしろ此方が恐縮する位、辞を低うしていつも謙虚なる態度であった事は、僕としても尊敬出来る山の仲間として親愛の度を深めて行ったわけである。

其後、昭和五年春休みの時だったと思うけど、一足先に東京に帰省していた僕の家に突然表われ、「君のいない留守に大分、アルパイン・ジャーナルを勉強したよ……」などと嬉しそうに語り合った事もあったが、その節、同君を促して会津の朝日岳に登ろうと云う事になった。前年の夏、僕は朝日岳では猛烈なヤブと物凄い増水に悩まされて空しく引返した心残りもあったので、残雪期には是非登りたいと思っていた事を話すと同君も積極的で、二人で出掛けたわけである。当時は勿論上越線の全通していない時だから、盤越西線廻りで栃尾から守門を越え、浅草岳頂上から快適なスキー滑降を楽しんで田子倉などと云う桃源境（当時）を経て、前年厄介になった黒谷村の農家に一夜の宿を乞い、翌日残雪を踏んで朝日岳の頂上に達し、二人はテントサックをかぶって素晴しい夕と朝の景観を味わったのだが、その夕焼に燃える飯豊山が馬鹿に近く見え、登高欲旺盛な小川君は急に飯豊にも行こうと云い出し、会津若松に出て早速五万分之一の地図を求めて、山都から飯豊山にも登り此時も山頂でテントサックをかぶって一夜を明かしたのだが、其夜、談、偶々谷川岳の事に及び、元来はどっちかと云えば岩登りの方を好んでいた小川君の事だから、之には彼も特に関心を寄せていた事は確かであった。事実、彼も山登りの真髄は「岩登り」にあるのだとよく云っていた位だから、後に谷川岳の岩壁に彼が残した素晴しいレコードは、当然あるべくしてあった事だと僕は彼のために祝福している次第である。それに谷川岳の岩壁については、大島さんも早くから興味を持っていた事は彼もよく承知して居り、大島さんが僕に寄越した谷川岳の岩壁を最初に目近かに見て帰った時の手紙「谷川は直立八百メートルの岩壁もあってものすごいところ、穂高以上かも知れません。あまり長く上を見上げていると首が痛くなってきたので、しまいには寝て見ました。しかし面白そうなところ。まだ二三回は行って見る価値あり」を、彼も僕の下宿で具さに見ているので尚更、谷川岳岩壁登攀については心を燃やしていたのだろう。



故小川登喜男氏　昭和16年3月写

話が聊か横道に外れるが――僕が最初に谷川岳の岩壁を下見に入ったのは確か昭和三年の春、夏に出掛けた時だったと思うが、今にして見れば幽ノ沢だと思うが、この沢を登り詰めて見ようと今は亡きO君と出掛けたのだが、先づ沢の状況を見ようと云う積りだったので、ネイルドブーツは下の天幕に置き草鞋でスタスタ登り出したのがそもそもの間違いのもとで、暫らく登る程に沢は狭くなり一面の残雪に覆われて、真夏の今時にこんな処でこんなに残雪が多いのに二人共驚いてしまった次第であったが、考えて見れば殆んど東向きの、しかも両側はあの通り岩壁に挟まれたあの様な処は日照時間も短かく、しかも冬はあれだけ多量の雪が降る所だから、残雪のタップリ残るのも何も不思議ではないのだが、登るにつれて残雪は氷状になり「氷河だ……」などと勝手に二人で喜びながら登り続ける内、角度は急になるし遂に草鞋では滑りそうで、どうにも進めそうにもなくなり先ずは一服と云う事になった。

大体、まさかこんな処にこんな硬い残雪が一杯谷を埋めているなどと云う事は、当時全く判っていなかったのでピッケル、アイゼン等は初めっから持って来ていないし、「此辺でザイルを結ぼうか……」と云う話になったが「お互いにいつかはヒマラヤに行くんだから、こんな処でザイルを結んでピッケルもないまま、二人共滑って一緒にやられるのは馬鹿らしいからザイルは止めよう……」等と話し合って立ち上った途端に、O君が僕の足元から滑り出し、両手で氷状の凸凹の上を必死にもがきながら相当のスピードで滑り落ちて行くのを見た時は、僕も「駄目だ……」と、唯、施す手もなく息を呑んだ形だったが天の助けとは正にこの事だろうか、当時、学生間に流行していた兵隊用の幅広い皮革についている恐しく大きな金具のビジョウが氷の突起部に引掛り辛うじてO君は約二十米位下で止まったのだが、手の爪は殆んどはがれそうになり、ヒョウソウみたいになって一晩中コップに汲んだ清水に指を浸しつつ痛みに苦しみ、一睡もしないで翌日早々にして引上げて帰った事もあったが、こんな話を飯豊山頂の露営で彼に語ったのが、谷川岳の岩壁への遊心に尚、油をそそいだ事も間違いないのである。

その内、東北大学の法学部を卒へた彼は一面、真摯なる勉学の士でもあったから更に東京大学の文学部哲学科にもう一度入学、この時代が彼のもっとも谷川岳や穂高岳の岩壁に思う存分親しんだ時代であった様だ。哲学とは云うものの或は山の哲学のためだったかも知れないが。併しどう考えて見ても所謂会社向きのサラリーマンには不向きな彼が、哲学を志した事は彼の日頃の性質から云っても僕には当然の事だとよく判るのだが、哲学の真髄を必ずや究めたであろうその暁には、それこそ彼は崇高な登山家として大成したに違いないと思うにつけ、それだけに彼の早死は誠に惜しい次第である。

谷川岳も上越線の全通以来急激に今日の様な事になってしま

ったが、小川君などは最も早い時代の登攀者の一人であり、唯、あの通りあまり人に喋べったり派手な振舞をする事の嫌いな謙遜なクライマーであったから、あまり世間にその実績を知られていない様である。後年、懇望されて思案の末漸く『山岳』に谷川岳のレコードを掲せたが、僕には頻りと「俺みたいな若ゾウは未だ資格がないよ……」などと云っていたが、如何にも彼らしい謙虚な気持の表われだと思う。併しあのレコードを作った時や屏風岩の登攀の時など、逸早く僕の処に知らせに来た時の彼の眼には、いつも嬉しさを隠し切れぬ様な、光り輝くものがあり、彼こそ本当の山の気高さそのものの様な、その時の顔は僕には未だに忘れられないのだ。

略　歴

・明治四十一年七月二十三日、東京浅草に生まれる。
・東北大学心理学科を経て、さらに東京帝大法学部に学び昭和六年三月卒業。
・帝大卒後富永鋼業株式会社入社。
・同社が大同製鋼に吸収合併された後、昭和二十一年大阪支店長となる。
・大同製鋼より大同鋼板株式会社が独立し、同社の専務取締役に就任。
・昭和二十四年十二月十日、兵庫県芦屋市にて肺結核のため死去。享年四十二歳。

主な登山歴

・昭和二年より昭和八年くらいの間四季を通じ山を歩いた。北海道大雪山、東北飯豊山、月山、朝日岳、蔵王山、奥秩父の山々に親しんだが、ことに穂高、剱岳、谷川岳の岩場を好み、日本の登山史上に記録的な登攀を数多く行なった。そのほとんどは初登、または初下降であった。また昭和七年夏には朝鮮外金剛に遠征、集仙峰付近の岩場を開拓した。

その主要な記録は次の通りである。

・昭和五年七月　谷川岳一ノ倉沢奥壁第三ルンゼ登攀（同行田名部繁、高木力・初登）。
・昭和六年七月　谷川岳幽ノ沢第二ルンゼ登攀、一ノ倉岳に達す（同行田名部繁、枡田定司・初登）。
・昭和六年七月　谷川岳幽ノ沢右俣より堅炭岩登攀（同行田名部繁、枡田定司・初登）。
・昭和六年七月　谷川岳マチガ沢オキノ耳東南稜登攀（同行田名部繁、枡田定司・初登）。
・昭和六年八月　前穂高屏風岩第二ルンゼ登攀（同行桑田英次、三輪武五郎・初登）。
・昭和六年八月　前穂高屏風岩第一ルンゼ登攀（同行小川猛男、熊沢誠義・初登）。
・昭和六年九月　日本山岳会入会、会員番号一三二八番（紹介者松方三郎、植有恒、浦松佐美太郎）。
・昭和六年十月　谷川岳一ノ倉沢本谷登攀（同行桑田英次・第二登）。
・昭和六年十一月　谷川岳一ノ倉沢アルファ・ルンゼ登攀、一ノ倉岳に達す。（同行小川猛男、田名部繁ほか・初登）。
・昭和六年十二月　上高地五千尺より奥穂高岳南壁直登（同行田名部繁・厳冬期第二登）。
・昭和六年十二月　五千尺より間ノ岳尾根を登り頂上手前より引き返え

す（同行田名部繁）。
・昭和七年一月　五千尺より岳川コブ尾根登攀（同行田名部繁・初登・同日下降した松高パーティーとすれ違う）。
・昭和七年一月　徳沢より涸沢を経て前穂高北壁登攀、第一、第二峰間のコルより前穂に達し三、四のコルより下降（同行桑田英次、三輪俊一、三輪武五郎、田名部繁・初登・往復二十四時間）。
・昭和七年二月　谷川岳一ノ倉沢一ノ沢より東尾根登攀、一ノ倉尾根下降（同行国塩研二郎、清田清、田口一郎、田名部繁・厳冬期初登）。
・昭和七年四月　剱岳八ッ峰登攀（下半およびマイナー・ピークは早大隊の後を追い単独、上半は早大今井友之助、池野信一と同行・初登）。
・昭和七年四月　剱岳源治郎尾根下降（単独・初下降）。
・昭和七年七月　岳川天狗岩東南稜登攀、間ノ岳、西穂高（同行桑田英次、三輪俊一、国塩研二郎、大場・初登）。
・昭和七年七月　明神岳最南峰東壁登攀（同行国塩研二郎、三輪俊一、桑田英次・初登）。
・昭和七年八月　前穂高中又白谷登攀（同行桑田英次、国塩研二郎・初登）。
・昭和七年八月　前穂高屏風岩第三ルンゼ（同行三輪俊一）。
・昭和七年八月　朝鮮外金剛遠征、集仙峰主峰、東北稜S2峰（同行桑田英次）、東北稜S1峰（同行清田清）登攀（いずれも初登）。
・昭和八年九月　谷川岳一ノ倉沢衝立岩中央稜登攀（同行田名部繁・初登）。
・昭和八年十月　谷川岳一ノ倉沢衝立岩南稜登攀（同行小川猛男・初登）。

登山に関する紀行、登攀報告には次のようなものがある。
・谷川岳東面の岩登攀『山岳』第二十六年第三号
・穂高岳屏風岩『山岳』第二十六年第三号
・朝鮮外金剛『東京帝国大学スキー山岳部報告一九三二』（この雑誌には右にあげた記録の多くがおさめられている）。
・秋の一ノ倉岳『ケルン』第十七号

（付記）本稿は故人の令弟小川猛男氏より会員折井健一氏にあてた略歴メモを基に、右の文献および『谷川岳の岩場』（山岳同志会編）を参照して記したものである。小川猛男氏はそのメモの最後に、「登山のうちでもロッククライミングを好み、穂高の屏風岩や谷川岳一ノ倉の新ルートを発見している。〝もう一度穂高に登りたい〟この言葉を最後に残して死んだほど山を愛し、穂高山塊が好きでした。またスキーもうまく、東北大在学中、東北の山々を冬、春歩いたようです」と結んでいる。

（山崎　安治）

追悼

中村清太郎氏（一八八八―一九六七）

本年の『山』三月号（二七三号）から六月号（二七六号）にかけて、安川茂雄さんが執筆されました中村清太郎君略年譜、毎号心待ちして熟読致しました。四月、遺作展を拝見に会場に参りましたおり、安川さんとお会いすることが出来ましたので、二、三気付きました点お話し致しました。これは六月号でそれぞれ訂正されてあります。その後また次の点を気付きましたので書き添えます。中村君の山岳会入会は一九〇七年五月（『山岳』第三年第三号の会報欄に手続き記載）とありましたが、手元にあります名簿（一九六五年）には中村君や加賀正太郎君は一九〇八年五月入会となっております。どちらが正しいのでしょうか。こんなことを書きますと地下の中村君は、「三枝の奴、馬鹿だなあ、七年でも八年でもよいではないか、馬鹿だなあ」と例の口癖の「馬鹿だなあ」を連発しているかもしれませぬ。今は、そのなつかしい声を聞くすべもありません。淋しいきわみです。

私は明治四十年に中村君や加賀君と同時に一ッ橋の予科に入学しましたが、クラスは別でした。その頃は無論山岳部などはなく、私はボート部に入り向島によく通っておりました。学校の制服は大体黒でしたが、両君は青味がかった紺の服を着ておられ、二人とも白面長身の美青年で、いつも行動を共にしておられたので、目につきやすく、名前は知りませんでしたが、早くから見知っておりました。しかし、山登りなどなさる方々とは、少しも考えられませんでした。それが山岳会の大会に来られ、お互いに会員であることを知り、ヤア、君もかと、驚きもし喜びもし急に親しくなりました。

横浜の山岳会事務所（高野家）へは以前からよくお邪魔しておりましたが、それ以後は中村君を誘って尚頻々と参るようになりました。小島（烏水）さんや梅沢（親光）さんたちもよく来られるので、山の話に花が咲き、おそくなって夜もご厄介になったことが度々あります。高野（鷹蔵）さんのお宅は、生糸の運送と旅館業とを兼営されておられ、部屋数も沢山あったので、割合気安くご厄介になれたのだと思います。あの頃が私の学生時代で一番楽しかった時代でしょう。

安川さんの記事の中にテント、ルックサックおよびピッケルのことがあります。明治四十二年に小島さん方と白峰赤石方面に参ることとなり、準備の相談も度々高野さんのお宅で致しましたが、その時テントの方を引受けましたが、何処で作らせてよいかさっぱりわからず、困っておりましたが、幸に父の知人が片桐さんに紹介して下さったので、早速京橋入舟町の片桐さ

んへ伺いました。その頃片桐さんは船の帆など作っておられました。片桐さんも初めての仕事ですし、殊に登山用と云うことで、ご相談に私も度々伺って漸く出来上りました。五、六人用に作ったのですが、重量も割合に軽く防水もよくきいており、翌年の辻本（満丸）さんとの登山にも使用致しました。テントの件で片桐さんとは大変懇意になり、引続きルックサックなどお願いするようになりました。現会員の片桐さん（盛之助さん）は、その頃まだ十四、五歳位の可愛いい少年でした。後年船具の仕事を止められ、登山具専門の仕事をされるようになられたのも、私のお願いしたテントやルックサックが原因の一つではないかと思っております。

翌四十三年、辻本さんと後立山に参ることになり、その相談でよく小石川のお宅に中村君とお訪ね致しました。辻本さんは、とても温厚な方でしたが、山の話となると声も大きくなり、三人で長時間大声で談笑するので、定めし奥様にはご迷惑だったことと存じます。その頃校庭でしたと思いますが、ピッケルを作る話が出まして、中村君が近くの鍛治屋に製作を依頼され、見本には私が独乙帰りの東大の先生に拝借したものを用いたように記憶します。これも確かなことは覚えておりません。中村君は柄を少し長く作らせたと思います。日本山岳名著全集第十一巻の辻本さん撮影の口絵写真で、中村君が持っているのがそれです。私のは山梨県に疎開しました時、柄を短く切って手鍬代りに使っておりました。幸いまだ残っておりますので、何かのご参考にもと会の方へお届けしてあります。現今のものとは大分形が違います。

明治四十四年校門を出ましてからは、お会いする機会も少なくなりました。大正末期からは全くお会いすることなく、昭和二十四年私が宮城県におります頃、一度山岳会に招待されました時、久々に面会、その後はまたご無沙汰、三十二年に東京に住むようになりましたので、その頃、二、三回阿佐ケ谷にお訪ねしましたが、旅行でご不在のこともあり、只一度だけ夜伺った時お会いすることが出来ました。それが最後となりました。誠に残念に存じます。

昨年十二月、会よりお知らせを受けましたが、私も微恙のため告別式には参列出来ず、四、五日過ぎましてから弔問致しました。ご令閨はご不在、令息浩太郎様に初めてお会い致しました。あまりにも若き日の清太郎君に似ておられるので、ハッと致し、思わず中村君暫くと声をかけるところでした。それ程実によく似ておられます。もっとも、これは私が青年以後の中村君とはあまりお会いしておらぬので、中村君と云うと直ぐ学生の頃が思い浮かぶためかもしれません。それにつけても、同じ東京に住んでおりながら、大成された晩年の君と談笑出来なかったことを、返すがえすも残念に思います。ご一周忌の日も近づきました。ご冥福を祈ります。（昭和四十三年九月）

（三枝　守博）

＊

日記をみると、昨年の十二月二十三日とある。土曜日のことで、昼過ぎＪＡＣのルームを訪れると、時間も早やかったせい

か誰も来会者はなかった。何気なく掲示板に目を移すと、名誉会員中村清太郎氏の死が報ぜられ、告別式も既に終っていた。あゝ、この先輩も遂に冥界に入られたかと、ひとり深い感慨にひたった。私が中村さんのお宅へうかがったのは、僅か二度ほどで、御家族の方とも殆んど面識がない。弔問にあがる気もくじかれて、その夜はひとり古い『山岳』第八年第一号をとり出し、「白峰山脈の南半」の一篇を心静かに読みくだすことによって、私なりに中村さんへの弔意を表することゝした。

曽て私はこの一篇こそ、中村さんの数々の山岳紀行文中最も素晴しいものであり、なお且つ明治大正の山岳文学中でも白眉の一つと考えていたからでもある。それは明治四十四年十一月下旬の紀行で、当時は登山者にとってまだテラ・インコグニタと目されていた南アルプス南半の山谷に、唯一人わけ入ってゆく二十三歳の青年の烈々たる気魄と、溢れるばかりの山岳への渇仰が、行間に滲み出ているのである。私は現代の若い登山者に、この一文は是非読んでほしいと思うのである。それによると、中村さんは未明の静岡駅からワラジがけで歩き出しておられる。梅ケ島の奥までバスが通っている現在と比較して、その未開のさまは思い半ばに過ぎるものがあろう。

笊ケ岳登山をもって終ったこの山旅につづいて、翌明治四十五年には光岳、イザルケ岳、上河内岳、聖岳、赤石岳への大縦走が記録される。中村さんは先きに四十二年、小島烏水氏らと悪沢岳、赤石岳をさぐり、また四十三年、辻本満丸、三枝威之介氏と後立山々脈の初縦走をされたが、それと、この聖、赤石までの縦走とは、日本の近代登山史に永く残る輝かしい記録であり、それによって中村さん自身も日本の登山史に逸することのできぬ存在となった。

この早期の登山でも、中村さんは常時倦むことなく山中で写生をしておられ、その幾つかは当時の『山岳』誌上を飾って、読者に限りない愉しみを与えてくれるが、後半生の登山ではますます山の絵が中心となったことは、末尾の年譜の示す通りである。そして日本の山岳画家として特異の地位を築かれたものと思う。山の絵について素人の私が言うべきではないが、「白峰の夕栄え」(『山岳』第二十六年第一号巻頭所収・一九一九年作)をかゝれた時代の絵に、私は最も惹きつけられる。

私が初めて中村さんのお宅を訪れたのは、忘れもせぬ昭和二十四年頃の厳冬と記憶している。烏水翁が亡くなられたあと、『山岳』追悼号の原稿をお願いしに阿佐ケ谷のお宅をおたずねした。敗戦後日も浅く、われわれがひとしく万事不如意な生活を強いられた時代だが、中村さんは広々としたアトリエの一隅に、豆粒ほどの灰火しかない火鉢を傍におき、机に向かって一心に何か書いておられた。多分小島さんに関することを調べておられたのだと思うが、私はその側で深々と迫る寒さを覚えながら用件をお話した。

その次は、年時はさだかに覚えていないが、もっと陽気のいい時節で、お訪ねすると、アトリエのなかに残雪の富士山をかいた四号か六号ぐらいの同じ図柄の油絵が何枚も立てかけられてあり、富士山は何遍かいても気に入ったものがかけない、と

いうような話をされていたのが記憶に残っている。

たまにルームでお逢いしてお話をうかがった時などは、談たまたま山の話になると、古稀を過ぎてなお溌剌とした相貌にかわり、青年のような元気さが言葉に漲って、消そうにも消えない矍鑠（かくしゃく）とした山への思慕が感じられる人でもあった。

私は本誌の編集者として、中村さんの追憶はどうしても田部重治氏にお願いしたいと思って、書を呈したところ、田部さんから本年四月十日付で次のようなお返事を頂いた。

拝啓　中村君のことを書けと云うことですが、実は私よりも三枝君の方が適当ではあるまいかと思います。一度あたって見て下さい。どうしても三枝君がいやなら私が書いてもいいですが、私は今非常に忙がしいのです。八十四歳の老人が学校を三つ（東洋、法政、実践女子大）教えて、その上今年中に二冊の本を出版しなければならないのです。（後略）

私は田部さんのご指示に従い、早速三枝さんにお願いの手紙を書いた。三枝さんも古い記録をすべて失ったからと何度も固辞されたが、懇願をかさねた結果、本号に掲げた一文を頂戴することを得た。曽て大黒茂谷で共に苦労をなめられた田部さんの追憶は、折りをみてうかゞう機会を得たいと思う。

JAC草創期からの会員であり、身を以て日本の近代登山を切り開いて来られた、この大先輩の遠逝を悼み、その霊の安らかならんことを祈って筆をおく。

なお中村さんの略歴は会員安川茂雄君が会報『山』に連載したものに、今回補正を加えて掲載することゝした。

（一九六八年十一月）（望月　達夫）

中村清太郎氏略年譜

明治二十一年（一八八八年）四月三十日、父中村清吉、母すみの長男（一人息子）として東京浅草区今戸に生まれた。今戸には母すみの父、戸沢弁司（工芸家）の家があり、父の家は日本橋通り油町（現在の堀留一丁目付近）で、ゆかた問屋「中清」であった。幼少年時代は日本橋で育ったが、その付近について、「草の芽」中で、「育った日本橋区の問屋町――通油町界隈などは、下町の中の下町で、しかも都市らしい施設は殆んどなく、もとより分厘の利を争うから、人気といっては激しくかつ険しいもので、何とも息苦しい、味気ない、また苛々しいかぎりの土地柄であった」と述べている。

小学校も水天宮の裏手にある有馬小学校で、卒業後、府立三中（現在の両国高校）へすすんだ。この折に加賀正太郎などのクラスメートと府立一中の「博物学同志会」に匹敵する「原人講」なる山旅グループをつくり、箱根、日光、御岳、乗鞍、白馬、八ケ岳など信飛の高峰に登山を試みた。すでに三中に入る前、高等小学校時分、講中の一員として富士山に登ったのが山への洗礼とみてもよく、それ以前は江ノ島などへ遠足や関西、北陸などの旅行を試みている程度だった。もともと自然が好きであり探検心が旺盛であったが、一方では家業の関係から絵柄の勉強のために、父の指図で外神田にいた画家川端玉章のもとに通っていた。

山旅グループ「原人講」は、仲間うちで回覧雑誌などもつくり登山紀行や水彩画を掲載し、中村清太郎も中心メンバーの一人だった。この頃（明治三十年代後半）にいたると、小島烏水の山岳著書や『博物

之友』、高頭式『日本山嶽志』なども刊行されていて大いに刺戟をうけた。やがて山岳会も設立されて、機関誌『山岳』が明治三十九年に創刊された。

明治四十年（一九〇七年）府立三中より東京高商（後の一橋）に入学し、同年五月日本山岳会にも加賀正太郎と共に入会した。この手続きは『山岳』第三年第三号の「会報」中に記載されており、同期の入会者としては田中喜左衛門、石崎光瑤などの名前がみえて、会員番号一五三番であった。同じ東京高商生の三枝威之介（後に守博と改む）は、彼らより先に既に入会しており、会員番号三十五番だった。（ちなみに会員番号はのちに付されたもので当時はなかった。）

この夏、中村清太郎は原人講のメンバーとともに、白峰北岳、八ケ岳、乗鞍、槍ケ岳などに登った。

この頃の一時期、中村清太郎は外交官を志願したい旨の気持があったらしく、東京高商へ入学したのも彼の希望ではなかったという。もともと彼の志望は美術学校への進学であった。そこで本郷絵画研究所にも学び、同所に油絵の先輩ともいえる多田良吉がいた。

明治四十一年（一九〇八年）一月十六日山岳会における第一回有志晩餐会が麹町の富士見軒で催された。参加者十六名で発起人は辻本満丸で、この会に中村清太郎は出席している。

この頃、彼は山と絵画に的をしぼり研鑽にはげんでおり、後年の自己来歴中に、「性癖に従て山に入り又自ら画道に志す。」と記している。

明治四十二年（一九〇九年）山岳会の事務所は、明治四十二年一月から牛込の城数馬氏宅から横浜本町の高野鷹蔵氏宅へ、城氏が渡鮮のために移されていた。友人の三枝守博（威之介）氏の紹介などもあり急速に山岳会になじみ、小島烏水、辻村伊助、梅沢親光の諸氏など山岳会会員と親しくなっていった。七月彼にとって画期的ともいえる赤石山脈の初縦走を、小島烏水ら日本山岳会幹事らと共にした。

「本会幹事高頭仁兵衛、高野鷹蔵、小島久太、会員三枝威之介、中村清太郎五氏は、画家茨木猪之吉氏を加えて、七月二十日甲州鰍沢に到り、二十一日湯島温泉に一泊し、翌二十二日登山準備を整へ、二十三日人夫十一人を引率し、赤石山脈縦断の行程に上りて新沢嶺腹に野宿、二十四日大井川西俣の真砂沢に野臥、二十五日悪沢岳頂に登りて野臥、二十六日千枚沢岳、悪沢岳、西河内岳、魚無河内岳の四大岳を縦走して尾根の四窪地点に野臥、二十七日赤石山の前山及び本岳を縦断して、南方尾根の中腹に野臥、二十八日大森林を下りて小渋川を二十七回徒渉し、小渋温泉に一泊、二十九日大河原を経て飯島に一泊、三十日一行を解散して行を終れり、其後三枝威之介氏は八月初旬北アルプスに向ひて、鹿島槍ケ岳を登攀せられ、同じく小島久太氏は、富士山の御中道を一周せられ、中村清太郎氏は八月下旬美濃恵那山に登り、転じて信州穂高山を究められたり。」（『山岳』第四年第三号会員登山報より）。この山行は同年夏の石崎光瑤パーティによる剣登頂、鵜殿正雄の穂高縦走などと共に白眉の山行とされている。

明治四十二年夏、赤石山脈縦走ののちは、十一月二日夜の富士の裾野を月明をたよりに須山村まで歩き、のち愛鷹山に登っている。

明治四十三年（一九一〇年）は一月早々高野鷹蔵、三枝威之介の二氏と共に信州を旅行して雪の日本アルプスを仰望した。同月二十八日には、前年夏に赤石山脈を縦走したメンバーが中心となり高野鷹蔵氏宅で「赤石会」をつくり会合を催した。小島烏水、茨木猪之吉、大下藤次郎の諸氏と共に出席。

なおこの赤石会よりも早く一月十六日志賀重昂氏を中心にした四松庵の会にも出席（この二つの会については烏水著『山の風流使者』中に詳しい）。

この年春にあらたに幹事を二名増員することとなり三枝威之介氏と共に幹事となり、同じく幹事の武田久吉氏は渡英している。

夏になるとまず戸隠山、黒姫山に登ったのち、辻本満丸、三枝威之介の両氏パーティーと七月十三日東京発、十四日信州大出より、遠山兵三郎、大西又吉などのガイドと共に篭川を溯り、扇沢より棒小屋沢乗越をこえて鹿島槍へ登頂。それより山稜つたいに針ノ木峠に二十二日着。ここで辻本氏と人夫二名は四谷に下山、三枝氏と人夫三名と共にさらに五色ガ原、薬師、上ノ岳、黒部五郎、蓮華、双六、西鎌尾根より槍まで縦走した（これらの記録はいずれも初縦走とされている）。

同年十二月二十八日には、沼田より上州武尊の一峰に登山した。

明治四十四年（一九一一年）四月上旬、小島烏水、辻村伊助、高野鷹蔵氏らと箱根への小旅行を試みた。

この年に東京高商を卒業したが、同年夏はとくに著しい山行記録はみられず、十一月となって静岡より安倍川ぞいに大日峠をこえて大井川に入った。田代に一泊したのち三尺峠、無名峠をへて千挺木山、笊ケ岳の初登頂に成功した。

この頃『山岳』の校正に従事しており、東京高商を卒業しながら就職もせずに一途に山岳画家たらんとした。又、住居も日本橋から移り現在の田端にあたる「東京府北豊多摩郡滝ノ川村田端西台通六二二」に移ったと推定される。（明治四十五年四月発行の「日本山岳会々員名簿」参照）

明治四十五年（一九一二年）三月、はじめて南日（田部）重治と大洞山付近登山の目的で、飛竜山に登ったのち大菩薩峠に至った。そのあと道に迷い、雪の大黒茂谷にはいりこんで谷で一夜をあかしたが、寒さと飢えのためにハミガキ粉をなめたりなどして遭難しかけた。

夏は七月九日赤石山脈南半の縦走を志して東京を発ち、静岡より大日峠をこえて大井川の田代に到って準備を整えた。のち信濃俣の上流より光岳、イザルケ岳、仁田岳、上河内岳などをへて聖岳に辿りついて山頂で三泊した。さらに兎岳、大沢岳をこえて赤石岳に至り、再び田代へ下山した。八月一日帰京。

明治末期における幾つかの山行こそ、中村清太郎氏の生涯におけるもっとも輝かしい足跡であった。ことに前記した明治四十二年夏の赤石山脈縦走においては、三枝威之介氏の設計になる登山テントを、はじめて大井川上流の白樺林に設営しているし、さらに四十三年夏の後立山縦走のときには、中村氏自身が日本で最初にこしらえたピッケルを持参している。

このピッケルはスイス製のものをモデルにして、日本橋堀留のカジ屋に注文してこしらえたのだった。さらにルックザックについて彼はこの頃、三枝氏と共に加賀正太郎氏の欧州帰朝みやげをモデルに、築地片桐でつくらせたといわれ、中村清太郎氏は探検登山期において、近代登山の用具をもっとも積極的に使用したパイオニアーの一人だった。

大正二年（一九一三年）五月、木暮、南日（田部）両氏をパートナーに金峰山に登り、峰づたいに国師、甲武信岳などの縦走に成功した。

さらに八月には、木暮、田部パーティーが槍ガ岳より日本海へのガイドレスの縦走を試みて成功したが、このときパートナーとして誘われたという。だが彼は五色での制作を志して滞在し、両氏とここで合流し剣岳へ三人で攀じたのち、早月川を伊折へ雨の中をくだった。

この頃（大正二、三年）木暮氏と共に「東京からみえる山々」について調査し『山岳』第八年第二号には「東京郊外池袋より望める秩父群山」の眺望を記し、又、「大井川奥山の旅」の紀行を挿画と共に掲載した。又、『山岳』第八年第一号には「白峰山脈の南半」の紀行と共

にスケッチ、挿絵を発表した。

大正三年（一九一四年）十一月一日より十日まで、芝区虎ノ門の議員倶楽部で「三人油絵展覧会」として多田良吉、小山葭太郎と共に山岳画十数点を出品した。これまで春陽展などへ出品していたが、これが初めての個展と推定される。

大正四年（一九一五年）七月より十月にかけて鐘釣温泉に滞在し、黒部川周辺の谷々を跋渉し、白馬、五竜、小黒部などに登り画作に専心した。これらの紀行文および挿絵は『山岳』第十二年第一号中に「黒部川峡谷の話」として発表されている。

大正六年（一九一七年）この年には南洋にでかけてジャワのブロモ火山、セレベスのカラバット火山に登った。

大正七年（一九一八年）八月、木暮氏をパートナーとして黒部川に入り鐘釣温泉より遡行して仙人谷より池ノ平へ、剣沢より室堂へといった山行を実践した。

大正八年以降の主だった山行は、主として画作をかねてのもので、**昭和十年**　加賀正太郎氏と、朝鮮より満洲にわたり小白山脈、熱河付近の山地を訪れた以外には、自身次のごとく記している。

「近年山中滞留多く槍ケ岳付近、乗鞍、御岳、冬の針ノ木、春冬の白馬近傍、雪倉朝日、春の鹿島槍、立山鳥帽子連山、餓鬼、冬の西沢峠、秋の高瀬川上流、冬の八ケ岳で画作す。」

この「近年」とは昭和十八年のことで『山岳渇仰』上梓のために記した山歴の一部であるが、この本は中村清太郎氏の最初の単行本であり昭和十九年十月に生活社より四円二十四銭で刊行された。すでに太平洋戦争のさなかで、はじめ山と渓谷社で刊行の予定が合併して（戦時出版体制としての処置）生活社となった。序文小島烏水、跋文田部重治であるが、すでに物資不足のために紙質はセンカ紙に近く、スケッチなどの印刷もきわめて不鮮明であった。

画人としては、大正三年の三人展のあと翌四年にも多田良吉、富取太郎の三人で展覧会をおこなっており、さらに昭和十一年三月設立会員の一人として日本山岳画協会を創立した。（本会報五十五号に「日本山岳画協会の創立について」の一文を書いた。）足立源一郎、茨木猪之吉、石井鶴三、石川滋彦、丸山晩霞、吉田博など諸氏の名前がみられ、顧問として小島久太、藤木九三両氏が推されている。

同協会の第一回展は同年七月十三日より十七日まで日本橋高島屋で催されて、「立山残雪」など七点の作品を出品した。

戦後は、一時病床にあったが、昭和二十二年冬（？）七面山にこもり富士を描き、二十九年七月には大雪山に登るなどしている。**二十五年**（一九五〇年）四月、日本山岳会名誉会員に推挙された。三十一年はじめて双六小屋に滞在して画作し、その後しばしば夏をすごした。三十五年には、第二著作集としてコマクサ双書の一冊として朋文堂より『ある偃松の独白』を、「黒部川峡谷の話」などを中心として上梓した。三十八年頃から「日本登山史」の稿を起して同人誌『山岳展望』に連載したが、未完のまま四十年十一月十四日事故のために右手首を骨折した。

さいごの旅は昭和三十七年十一月の静岡支部主催の井川村行で、画作もここで描いた寸又渓谷の作品（遺作展に出品）が絶筆となった。

昭和四十二年十二月二十日の夜、七十九歳で逝去され、戒名は浄岳院釈清映居士、菩提は麻布二ノ橋の福泉寺である。

歿後、昭和四十三年四月二十日から二十七日まで遺作展をJACルームにおいて開催した。

（安川　茂雄編）

神山　勉氏（一九一六―一九六七）

戦争によって長い間ブランクになっていた本会の活動が、終戦の鐘と共に本来の姿に立ち戻ろうと泡立ち始めたその頃、「山日記の復刊」という一つの事業が発議され、神山が日大山岳部出身の生き残り、千谷、崎田、金坂、真島、野田といったスタッフのまん中に立って色々な調査が始められました。やり出した仕事は、とことんまでやり遂げるという生来の一本気の気性から、そのメンバーはずい分酷使されたように聞いております。山小屋の状況調査に始まって、荒廃著しい古い道、新しい道の確認、案内人組合の現況等なみなみならぬ努力が払われ、ようやくにして十四輯が世に出ました。その間関係各位の協力や、会の中では谷口氏始め多くの有志の心からの尽力と熱意とに助けられたことは言を待ちません。その間の事情は、

「出版されれば、出来ばえに就て手痛い批判もあることだろうが、実の所私達には精一ぱいの仕事であって、今では未だあれ以上のものを私達の頭の中から、実物にまで成長させることが出来やうとは考へられない。」

と述べた、日大山岳部会報六号（一九四九年）における彼の文章によく現われています。

彼の山岳会に対する協力は、その翌年の山日記編集と二年間の足跡にとどまりますが、国体登山部門での協力などから、日大から二、三の者を山岳会の方へ出してくれとの申し出があり、大学山岳部復活の世話を見る者を除いて、結局千谷、金坂の両氏を推して、彼「神山」は日本山岳会関係の第一線を退いて行きました。その後は若い石坂君や松田君が山岳会の仕事を手伝うようになりましたが、いつのときも必ずアドヴァイスを受けに、原町へかよっている若い者の姿がありました。

ここでいささか山岳会とはかけ離れますが、「神山」という人間の大学山岳部での考え方、リーダーとしての姿といったものを捉えて見たいと思います。

昭和四十二年七月に亡くなって後、四十三年一月に追悼会が東京で催されましたが、その席で「神山勉追悼集」を出そうじゃないかという議が決められました。思いますに、山で遭難した友の追悼集、報告書等は巷間に溢れていますし、文章の立派な遺稿集も十指に余るものがあります。しかし本人の遺稿もほとんどなく、学校山岳部を出てすでに三十年にもなり、病気で亡くなった昔のリーダーの追悼集を出したいという点で、われわれ桜門山岳会員すべての気持が一致したことは、その故人に対する畏敬の念と、ある一部の人にはなつかしさと、そして偉大だった一人のリーダーの姿が、そこにあったからに他ありません。会報二六九号に初見一雄氏が短文で「神山勉の死」という追悼文を書かれましたが、その中に「二十年に一人、三十年に一人といった」リーダーというようなことを書いておられま

したが、全く同感で、個人の追悼の書が桜門山岳会の名において出版されるようなことは、恐らくここしばらくはないだろうと思われます。

会員の皆がそれほど慕い、畏敬した「神山の人間性と登山観」は一体どんなにして形成されていったのだろうかと深く考えつめて行くならば、紙面の都合でとうてい紹介し切れませんが、昭和十四年頃の日大山岳部の歩んだ道はすべて彼、神山の用意した枕木の上にレールを敷いてつっ走ったと申せましょう。山岳部の発展の過程には、個人の力ではどうすることもできない曲折があるものですから、リーダーを中心にその意図する所を敏感に察知して、実行に移してゆくスタッフ（よきメンバーといいますか）を数多く作って行き、それぞれ適所で能力を発揮させて行くという「和」を完成したのが、昭和十四年頃の神山の姿でした。

山を心から愛し、その山を部員に見つめさせて行くために払った代償としては、意見の違う同僚とは疎遠になり、ある先輩には楯をついた結果も生まれましたが、日大山岳部の伝統の上に、より輝かしい伝統を積み上げて行った代償としては、捨てて省みなかった小さな寂しさだったと思います。山岳部を愛し、柳原町の自宅に何時も後輩を呼びつけてはお説教をし、若い者もまた、お説教をされることが判っていても寄って行くという点は、何か不思議な魅力があったためだろうと思いますし、そこには山岳部を心から思う情熱がいつも流れていたのだと思います。

山を恋い、事業に熱中のあまり、自分の家庭を持つことがあんなに遅れた神山は、ただ一つの人生におけるミスをやってしまったように思えます。眠っている時以外頭から離れなかったという小学校一年生の一粒種の姿が、もし仮に大学一年生だったら、どんなに彼、神山のよき相談相手になっただろうかと、残された「友」の一人として痛恨に耐えません。今はただ故人の冥福を祈るのみです。

（佐藤　耕三）

略　歴

大正五年（一九一六）三月二十日　静岡県富士郡富士根村に生まれる。
昭和十五年三月　日本大学工学部機械科を卒業、丸三製紙株式会社に入社。
兵役には従事せず、戦後は福島県の原町工場の建設に専念、幾多の難関を乗り越えて、セミケミカル・パルプの開発を完成する。
昭和三十年　せい子夫人と結婚、一粒種の修一君を残す。
昭和四十一年十二月　脳膜出血、その後東北大学にて手術を受け、療養生活。
昭和四十二年七月三十一日　原町の自宅にて他界する。法名は福祥院法枝日勉大居士。
日本山岳会へは昭和二十二年十月に入会（会員番号三〇九〇）。



名誉会員　中村清太郎氏
Seitaro Nakamura (Hon. mem.)
(1888～1967)



神山　勉氏
Tsutomu Koyama
（1916～1967）



三森幾二郎氏
Ikujiro Mitsumori
（1909～1966）



小林正尚氏
Masanao Kobayashi
（1941－1968）



小里頼忠氏
Yoritada Ori
（1901－1968）

伏見鎌次郎氏（一九一一―一九六七）

伏見君と初めて会ったのは昭和十五年の夏愛鷹山を縦走した時であった。富士山麓の須山から黒岳に登り、それから頂稜を最高峰の越前岳へ上り西に折れて一縷の頂稜をたどって、鋸岳の屏風岩、三枚歯の峻をヘヅって位牌岳に上り、袴腰、馬場平から愛鷹山一一八七メートルに登って桃沢神社に詣で、それからは下り一方の道を東海道の原または沼津に出られる。私たちは原へ、伏見君は沼津へ出て帰られた。この縦走には優に九時間を費やした。

その後、富士山を中心に共に楽しい旅行をした。

梅ガ島温泉へは共に度々出かけた。温泉から八紘嶺へも幾度か上って富士山と南アルプスを眺めた。安倍峠から身延へ出たことがある。安倍峠はよい峠で、広い高原のようなその中央を美しい水が流れていた。大きな楓の林の中を行く気持は中々よい。甲州分へ出ると富士山が美しい。身延山へ出て甲府に帰った。珍しくよい峠である。

最後に秋の十月、八紘嶺から三里の大尾根を歩いた。秋風を浴びながら西に赤石岳を中心とした南アルプス、東に富士山の姿を見ながら、七面山の最高峰であるシソノ木平についた時に



昭和 33 年 4 月 22 日　須山の渡辺氏宅にて。
右端が伏見鎌次郎氏，その左が冠松次郎氏。

は、日は暮れかかり、夕日を浴びた大きな富士山は実によかった。七面様の太鼓の音のとどろいている敬慎院にくつろいだ。翌早暁山門の前に立って、富士山の肩をついて差し昇る日の出を拝み、帰路は奥の院から甲州路へ下った。

富士山へは春、夏、秋にわたって幾度も登山した。元村山の道を見に富士の宮から元村山に上り、次郎長新田、勢子の辻から十里木へ出て須山に帰った。

最後に須山から榛叢を分けて水ケ塚に上り、営林署の小屋で泊り、翌日は宝永山の第一火口の高原に出た。この火口も今はほとんど平坦な広大な平になって、落葉松や白桧が美しく茂っていた。途中イチゴや桜んボなど摘みながら、火口の平で暫く遊んだ。もうすぐ上は第二火口で、その上が宝永山で、御殿場口の五合や富士の宮口の五合は間近い。帰途は御庭を廻り、元村山の道から水ケ塚に帰った。なかなか面白いコースだが、道は相当悪かった。

伏見君は静岡の素封家の次男に生まれた。大柄な頑丈な体躯の持主であった。

私が初めて静岡の家へ御尋ねしたときには、近くのアパートの五階でダンスの教習をやっていた。サッカーの選手として静岡のスポーツ界で相当ならしていたらしい。県知事のところや県会などへもよく顔を出していた。静岡の家の庭にプラスチックの工場を建てて、その仕事にもたずさわっていたが、何時の間にか東京へ出て岸体育館にしばらく勤めていた。

御殿場の板妻へ移ってから病を得て、静岡の病院で亡くなれた。腸閉塞だということであった。私は足腰が悪く会葬出来なかったので、万事須山の渡辺徳逸氏に任せた。

体が頑丈で相当の活動家だったが、あまり諸方へ手を伸ばしたため、別段の業績を残さなかったのは実に残念であった。

（冠　松次郎）

略　歴

明治四十四年二月二十日生まれる。
昭和十六年十一月　日本山岳会入会（会員番号二〇七三・紹介者＝冠松次郎、渡辺徳逸）
昭和四十二年十二月二十四日病歿。

三森幾二郎氏（一九〇九―一九六六）

長い間の山友の一人三森君（旧姓菅根）は、昭和四十一年四月二十四日アッという間に世を去った。

三森君は最近十数年、毎月ほとんど決まった頃白河市から上京した。その際大てい私に電話するか、私宅に来訪した。時々珍しい手土産を持参する彼だった。彼が逝去した年の四月二十六日、朝家を出る時今日あたり彼から電話があるだろうと家人

に言い残して出かけたが、おそく帰宅したところ、意外にも彼の死亡通知を受取り驚いた。未亡人のお話によると、二、三週間腰が痛むと訴えていたが、精密検査を受けようと気軽に自宅を出て、知人のおる福島医大に入院、一週間後には帰らぬ人となった。病気らしい病気もなかった彼に、癌があろうとは誰も信じられなかった。

三森君と私の出合いは昭和六年十二月、山岳部の苗場スキー合宿の時だろう。普通の山好きの青年であるが、当時はやりのニッカーなど着けていたから、スタイルは整っていた方だろう。私は彼の二年先輩だったが、どこか馬が合い、話すようになった。

彼は慈恵医大に入学して直ちに山岳部に入部しなかったが、残り五ヵ年の学生々活中、実によく山へ行った。入部後最初に求めた山日記（一九三二年）には、彼の綽名「菅根章介」と書いてある。勿論山行記録はあるが、「登山の注意」その他の記事に赤線青線が一ぱい引いてある。くりかえしよく読んだらしい。山の本も沢山読んだらしく、外国の登山家の寸言や辻、田部、槇さんなど日本の山の先輩の言葉のぬき書きを通じて、初期登山に対する彼の考えが、どんなであったかの片鱗がうかがえる。その中に若山牧水の詩「枯野の旅」が目に付いた。彼にもこんな時期があったのだろう。

乾きたる落葉のなかに栗の実を
湿りたる朽葉がしたに橡の実を
とりどりに拾ふともなく拾ひもちて
今日の山路を越して来ぬ

山の連中は口が悪いからまともに名など呼ぶことは少ない。彼は先輩にさんづけで呼ばれるような不思議な魅力があった。注意深い、静かなポツリポツリの話しぶりが特有だった。大きな声を出して人と言い争うこともなかった。「スロモー」「菅根章介さん！何ぞ……」など、歌にされて笑われても怒ったことがなかった。

彼は早く両親を失い、天涯の孤児となり、叔父さんに育てられた少年時代は淋しかったかも知れない。大学入学後殊に山に行くようになって友人が多くなった。先輩の私を兄のように思っての交友が続いたが、戦争によりお互いに戦地生活七年を経て無事生き残った。戦後は色々の相談相手になった。殊に結婚話にはふん切りが中々つかず、意見を聞かれること十数回に及ぶ慎重さなのである。彼と話し合っていると、こちらもテンポがおそくなり、数十分お互いにだまりこんでいることもあった。

彼の人となりを私が書くよりも、彼が昭和三十一年山岳部に書き残した最初で最後の文章「回想の山岳部生活とその後のことなど」の断片を抜き書きすれば、彼の山への情熱の移り変りを知ることが出来るだろう。

「……思ひ起せば私が山岳部に係り合いを持つことになりましたのは一九三一年です……。秋の一週間、尾瀬、奥利根行に参加したことに始ります……。この山行は私のその後の学生々活に決定的な影響を与へることになり、山の魅力と、それにも増して気宇濶達な山友達の魅力を体得した為か、それからは暇ある

毎に、休みある毎に山に取り組み、黙々と能ふ限りの努力を山に傾倒し、人によっては登山を遊びと云ふかも知れませんが、私はこれに全てをかけ、山で死んではならないと云ふそのことの為に慎重に心を砕き汎ゆる犠牲を払ったものです。従って誰が名づけたのか「スロモー」の綽名もこの辺から起ったものと思はれます。…略…夫々異った風格を持った先輩に接する日が多くなり、春夏秋冬の山々と学の内外に於て引張り廻され指導され、登山が生死の問題を含み、自然の厳しさが行為を規定する限りに於て、心身共に鍛へられたのであります。…略…さて学生時代の山岳部員としての生活を顧りみて、秋の尾瀬に始り、春の立山に終る四年六ケ月の中、入山日数累計二百七十日、九ケ月の山々で鍛へに鍛へた体験は、我々を待ち受けてゐた時代の旋風に従ひ、昭和十二年以来三度の召集に際し大いに役立つことが出来たのであります。…略…危険にさらされ、生死をかけ、強ひて功利を追はず、敢へて自らは求めずして変転した風雪二十年の歳月を私は山から得た体験と教訓を身につけて、頑張り抜いて私らしく生きて来たと思ひます。戦後の人心の混乱と荒廃の世相に処して山党の心意気を失はず、或程度世情に超然と過ごすことが出来たと思ふのであります。終りに良き友でありよき岳友であったが惜しくも戦歿した加藤、深谷両君の冥福を祈り、併せて西東詩篇の詩人の言詞を捧げて置きます。

〝死せよ、而して生成せよ、もしそれこの一事を解せざらんか、汝遂に一介憂愁の客として、暗き地上に果つると知るべし〟」

彼の文章はここで終わっている。なお春秋に富む彼を失ったのは誠に残念である。三枝子未亡人の下で彼の三名の遺児は健康に学業を努めておるのを、彼はどこかで慎重にながめておることであろう。菅根章介改め信行院幾蹟禅慧居士！以て瞑すべし。

略　歴

明治四十二年六月三日誕生。
昭和十一年三月、東京慈恵会医大卒、内科学専攻。
昭和十一年四月、日本山岳会入会（会員番号一六六二　紹介者・加治甚吾、黒田孝雄）
昭和十二年以来三度応召、戦後再び東京慈恵会医大付属病院内科勤務、兼ねて生理学教室研究生となり医学博士を授与さる。その間白河市女医三森三枝子さんと結婚、三森姓に改め、白河市に内科医院を開いていた。

主なる登山歴

昭和六年一〇月　尾瀬―燧岳―至仏山。一二月　苗場スキー合宿。
昭和七年二月　苗場スキー行。三月　苗場スキー合宿。七月　燕岳―槍ガ岳―上高地。七月　涸沢生活。八月　岳沢―前穂高岳。一一月　涸沢―槍ガ岳。一二月　苗場スキー合宿。
昭和八年一月　巻機山―牛ガ岳―割引岳。二月　志賀高原スキー行。三月　仙丈岳。四月　苗場スキー行。五月　神津牧場―荒船山。七月　劔真砂沢生活（劔・八ツ峰・別山・立山）。一〇月　八ケ岳。一一月　穂高小舎。一二月　苗場スキー合宿。

小林正尚氏（一九四一―一九六八）

昭和九年三月　苗場スキー行。四月　苗場スキー行。四月　芝倉沢、一ノ倉岳（虹芝寮）。五月　奥武蔵キャンプ。六月　美ガ原。七月　カクネ里生活。八月　涸沢生活。一一月　白根三山。一二月　札幌付近スキー行。

昭和一〇年一月　十勝岳。二月　五色温泉―沼尻スキー行。三月　上高地―奥穂高岳―奥又白谷。三月　霧ガ峰。四月　谷川岳（捜索行）。五月　谷川岳（西黒沢）。七月　谷川岳（虹芝寮）。七月　塩見岳―赤石岳。八月　谷川岳―芝倉沢。一一月　足柄山。一二月　苗場スキー合宿。

昭和一一年三月　立山スキー行（雄山―別山―浄土）。八月　上高地―徳本峠。八月　白馬岳。

昭和一二年一月　苗場スキー行。

昭和一五年一一月　赤倉―関―燕。

昭和一六年三月　尾瀬―燧岳。

（付記）戦後山らしい山へは行かなかった。また写真も撮らなかったので、数年前神津牧場に遊んだとき撮ったものを、複写して片影とした。

（加治　甚吾）

仲間の死というものはなんと悲しいものであろうか。〝遭難は山登りにあらず〟という先輩の口ぐせを堅く信じ、強く学生に伝えた彼であったが、下界でまったく不運な交通事故で尊い命を昇天させてしまった。

小林君とは明治大学々生時代からヒマラヤ遠征まで、ともに山行をして苦楽をわかち合い、山を語ってきた同期の仲であった。

彼は城北高校から明治へ入り、高校から築き上げてきた登山精神を一層飛躍せしめ、大学に入って始めて山を知った私など、小林君の登山論にとうていおよぶものでなかった。彼は豆腐屋の長男であり、山登りには比較的恵まれた環境にありながら、「山登りは遊びに過ぎぬ」といい、山行と学校前は懸命にガンモを揚げる親思いだった。小林君のケトバしてもびくともしないウスのような頑健なからだは強い個性を持ち、一度口に出したら引きさがらなかった。対抗者が出ると更に負けず嫌いの堅固なる意志を発揮した。そんな彼を我々は「ゴキブリ」と呼んだ。ゴキブリの名にふさわしく、彼のどん欲さは総てが山であり、山への意欲であった。これは我々を強く刺激した。「親のスネをかじって山に登るのは山登りではない」、また「社会からはずれて山に生きるのは真のアルピニストにあらず」といっていた。「学生の山登りは訓練の域を出ず、山の基礎を習得するにすぎない。本当の山登りは卒業してからやれ」と下級生に語り、技術訓練の他に部生活に重点を置いていた。各人に研究テーマを出し、ヒマラヤ研究会、遭難実態調査、自家製乾

操食品の研究、気象知識の徹底、器具の軽量化の問題など、街でも山以外の遊びに目もくれさせなかった。そして、よき登山家よりもよき社会人になれ、と後輩の指導に彼は自分を殺して山岳部に没頭していた。彼の統率力は冬の厳しい劍岳山行にもなんの不安も感じさせなかった。同期の我々が思った程だから、下級生など信頼しきったリーダーであったにちがいない。私など小林君と同期とはいえ、彼が幼い頃から積んで来た山への情熱と思考にくらべると、私のそれは月とスッポンの開きがあった。学生時代の彼の姿は真に山に生きた魂であり、部室の中で、テントの中で、山小屋で話す時、いつも狭い山岳部の生活から離れ、遠く雄大な世界を見つめていたようだった。マロリー、ウィンスロープ・ヤングを語り、ナンガ・パルバットにおけるヘルマン・ブールの行動を批判した。特に彼は故大島亮吉氏の『先蹤者』に強く感銘を受けて「バドミントン・スタイル」などよく彼の口から出たものだ。こういった彼に口を合わせるには、山を知ってまだ浅い私には大変なことだった。

学生時代、我々は劍岳長期五ヵ年計画に沿って合宿山行といえば四季を問わず劍岳に入った。そんな中で、小林君は独自で山行以外にも山の研究に足をつっ込んでいた。「俺は劍岳の万年雪の研究をするのだ」といって四年生頃から合宿終了後、下級生をつれて劍沢、長次郎谷の雪渓を掘りかえしたり、シュルンドの中に懐電を持って入ったりして、雪層、岩のキズ跡、浸蝕など調べていたが、遂に未発表のまま去ってしまった。

ゴジュンバ・カン（七六四六メートル）遠征は彼が導火線となっていた。高橋隊長から「ゴキブリの野郎、人の十回分の遠征を一回で吸収してしまう」といわれる程、彼のどん欲なヒマラヤ熱はすさまじく、見るもの聞くもの手に入るもの、ネパール語からシェルパニの下着にまで、なんでも顔をつっ込んだ。彼の旺盛な「何んでも見てやろう」主義には、驚かずにはいられなかった。我々遠征隊を歓迎してくれたシェルパ・ダンスにもみずから踊り出たり、ポーターから教わったネパールソングをいち早く自分のものにし、隊員に歌って披露するのだった。彼はまた「ゴジュンバ・カンからチョー・オユーへ続く八〇〇〇メートルの稜線をカケ足するのだ」と豪語していたが、隊長の命により私がやむなく小林の先に立つことになった。平野隊員と共に第一次アタック隊に向かった小林は、ミンマ・ツェリンの不調があり、登頂ならず引き返した。「あそこで引き返そうなどいってどうも済みません」と、七〇〇〇メートルの最終キャンプの体を寄せ合っているテントの中で、小林君が平野隊員にあやまっている様子は私の心を刺さずにいられなかった。

「ドン（私のドングリのアダ名）、お前フランスへ戻ってどうするんだ。金もなくヨーロッパへ渡る自信はあるのか」と私の旅路を心配してくれ、「カトマンズの白人放浪者を見たろ」ともいった。我々は少なからずスポーツとして山を登ってきている以上、いくらお金がなくても単なる旅人と違うことは、十分銘記しなければならないのだ。ネパール、インド国境、ブリガンジからラクゾールへの五〇〇キロメートルばかりの道程を、二人して人力車に乗って別れを惜しんだ。ラクゾールで別れぎわ、半

ズボンのポケットから、くしゃくしゃになったネパールルピーをわしづかみに「メシのたしにしろ」といってくれ、「お互いに頑張ろうな、お前がヨーロッパにいる間にきっとオレもアルプスへ行くからな」そういって人力車でもとの道をネパールへ帰っていった。これが小林と最後の別れになろうとは思いもよらなかった。

私がフランスへ渡ってアルプス、アフリカ、グリーンランドの山へいっている間、三年の歳月が流れた。しかし、小林は最後に会えるチャンスでもあった国際アルピニスト集会に来なかった。私がヒマラヤからフランスへ戻った直後、黄だんで倒れ、病院生活に途方にくれている時、「外国生活に人間としてハジない信念を持って元気で気を落とさず、お前らしくやっていってくれ、人間がマジメに生きるということが、いかに尊いかお前に言うまでもないと思う……そして我々の山登りは心の中にあるのではないかと思う」こういった手紙で、いつも弱気に傾いた私の心を支える力となってくれた。

私が彼に強く惹かれたのは、山登りより常に兄弟愛的な友情を持っているところであった。小林君を知る多くの人は「八〇〇〇メートルをかけ足する」という彼の言葉などから、ガムシャラで威勢のいい奴のように思いがちだった。しかし意外と人情家である面は知られていない。私が今年の二月にアンデスに入り、十五時間でアコンカグアを単独登攀したことが外電で入ったと、自分のことのように喜んでくれ、「俺も大塚さんの仲人で結婚した」と幸福をかくせない様子で、吉報を知らせてきた。その後、私はアマゾン川へ向かった。小林はその頃同期の仲間の広江の結婚式に東京から鳥取に出かけた。そして交通事故。私がアマゾン川単独イカダ下降を始めて二日目のことだった。その日、私はイカダの上で炊事中、ジャングルの倒木にイカダをぶち当て、あやうくピラーニアの群泳する中に体を投げ飛ばされるところだった。丁度この時間が奇しくも地球の反対側で小林が事故に遭った時だった。彼を見つめるとき、明大山岳部では未来の大黒柱であった小林が、太く短かく世を去らなければならないとは、何んと神の無残な悪戯なのだろう！

私は、小林君に私の山旅の様子を一番聞いてもらいたかったし、彼の反応を知りたかった。そして将来の明大山岳部の遠征計画を彼と一緒に立案し、実現したかった。いまは小林君の冥福を祈るばかりになってしまった。

（植村　直己）

略　歴

昭和十六年一月五日誕生。
昭和三十五年四月　明治大学入学、直ちに山岳部へ入部。
昭和三十八年八月　単身アラスカ、カナダに山旅を行なう。
昭和四十年三月～五月　明治大学ネパール・ヒマラヤ学術調査隊の隊員としてゴジュンバ・カン遠征に参加する。
昭和四十年十月　日本山岳会入会(会員番号六〇〇〇)、紹介者は大塚博美、高橋進の両氏。
昭和四十三年四月二十五日　伯耆大山山麓における交通事故のため逝去。

小里頼忠氏（一九〇一―一九六八）

小里さんが松本の病院で亡くなられてから、もうそろそろ一年が過ぎようとしている。もはや再起することは出来ないだろうとは、誰の眼にもうつっていた。その時は二度目の入院であった。

「もうどうしようもないので、薬で苦痛をおさえているんです。」と奥さんは廊下の片隅で涙をおさえられた。

それでも小里さんは元気だった。いや、みっともないことがいやで元気らしくしていたんだろうか。いつものようにきれいに髭をそって、大きな眼が柔和に笑っていた。

「腰から下が思うように動かないんでね。これさえ動くようになればまた山へ行けるんだが……。」

本当に山と山岳会が好きな人であった。

ある日、病床を見舞った前支部長の高山さんに、

「そろそろ支部の新年集会ですね。もう通知の来る頃だが今年はどうも出られそうもない。」と洩らされたという。山岳会が好きなだけに、出席出来ないことが淋しかったのであろう。

前年、最初の病院生活を終えた後、医者から厳重に山登りを止められていることなど全く気にかけず、自分の庭のように思っている秋の美ケ原に登ったりして、われわれはびっくりさせられた。普通の人だったら家にじっと静養しているであろう。誰が何と言っても全く意に介さず、自分の病状も知らず、自由の心が求めるまま、体さえ動けば好きな山へ足を向けるのだった。私はその強さに感嘆し敬服した。

山に対してはまたきびしい人だった。曖昧さを許さないそこには、明治の一徹と武人の躾とがあった。小里さんの無言の動作の中に、私などははっと教えられることが多かった。服装、動作、装備、どれを取りあげても私などのしていることが、小里さんにとってははがゆかったことだろうと、今にして思われることが多い。

長い間、本当に長い二十年近い年月を、信濃支部において総務として当時の高山支部長を助け、支部のために尽力されて来た。今、私は支部長という立場に在って、それは大変なことだと痛切に感ずる。あれだけ一生懸命に仕事を進める人は、後にも先にも小里さんをおいて外にないであろう。

そんな小里さんも処世だけは下手であったようだ。山の人以外には交際も極めて少なかったようである。処世が下手というより、世の中の雑事にわづらわされることなく、山岳会の仕事をやり、好きな時に好きな山に登ることが楽しみな、真に心の自由を持った、数少ない一人であったのかもしれない。

昭和四十三年三月六日、葬儀は、松本市岡之宮神社において、いかにも旧士族らしく、簡素に、おごそかに、そして盛大に神式によって取り行なわれた。その日は生前の小里さんを偲ぶにふさわしく、好天ではあったが凛として寒かった。

略　歴

明治三十四年四月十二日誕生
昭和二年三月早稲田大学卒業。直ちに有隣生命（現明治生命）に勤務。後、満鉄を経て現地応召（昭和十八年）、終戦により帰国。
昭和二十二年　松本市役所に勤務。
昭和三十一年　同停年退職（退職時は観光課長の要職にあった）。
昭和四十三年三月二日逝去。

本会には昭和二十三（一九四八）年六月、下村雅司、槇有恒両氏の紹介で入会（会員番号二八七九）。それ以後、十八年にわたり信濃支部の総務として支部の発展に尽くされ、また本会神河内山荘運営委員としても尽力された。

（塚本　茂樹）



図書紹介

山岳遍歴

深田久弥著　B6版二五四ページ　写真四ページ　一九六七年九月　番町書房発行　定価四六〇円

会員深田氏の新著。「愉しき山行」の章に、幌尻岳、トムラウシ、太郎山、大峰山、高妻・乙妻、伊吹山、那須岳、祖母・傾、阿蘇山、塩見岳と、あちこちの山の紀行がある。著者が〝還暦前後数年間のもので、その間にもっと多くの山へ登ったが、一々その紀行を書き残すほど私は勤勉な文筆業者ではなかった〟とあとがきにあるが、なかなか怠けものどころではない。

これらの紀行を案内記的によむ読者は、いざしらず、著者がいかにこれらの山々を、よき相棒たちとたのしげに登り、ほっつきあるいているかは、読むものを、自分もいつのまにか著者の仲間となって、山谷を彷徨しているような境地にひき入れるのである。たくまざる紀行文の妙というべきであろう。

紀行につゞく「山によせて」は、信仰登山、北アルプス登山史、冒険の精神、ヒマラヤの先駆者たち、「西域」探検家、鉄の時代、と多彩な項目にわたっているが、資料をあさり、駆使して書かれたものでありながら、堅苦しい読みものにならず、要領よくまとめられているのは、さすがである。ルート図などというものと首ッ引きで、むやみと片仮名の多い記録ばかりあさっている若い登山者に、読ませたいものである。

以下「憶い出の人」には、田部重治氏の近著紹介にことよせて、この大先輩の登山観を語り、著者の畏友田辺和雄、山友山川勇一郎の両名の、共に、或いはアフリカ、或いは南米とはるかに遠い異境に客死したのを悼みながら、あたゝかい心のこもった悲しみをつゞっている。

「山の本と映画」は新刊、新映画の批評紹介、まめによく書いたもので、とりどりに興味があるが、なるほどこれでは山へ出かける時間を工面するのに、著者が苦労しているらしいことが、よくわかるというものである。

巻末の「雑嚢」は時評或いは短評といったもの、この中にときどき著者のピリッとした意見がうかがわれるのは、面白いとおもう。

手近(てぢか)において、気分が倦(う)んだようなとき、どこかひらいて読みはじめると、いつのまにかページを繰ってしまう。これはそんな書物なのである。

本書の「ヒマラヤの先駆者たち」の中に、〝おそらくこの数年間の日本隊の活躍は世界第一であろう。ヒマラヤの氷河を踏

んできた者は、延人数にして三百人を越え、……」というくだりがあるが、それらの人達は著者のように還歴をすぎても、まだ貪慾に山をのぼりつゞけるであろうか。きくところによると、それらの人達の中には、還歴どころか四十、五十の坂も越えないのに、健康をそこねて廃品化したのもあり、山をはなれ、山の仲間からはずれて、洪水のあとの流木のように行方しれず、というようなのもあるという。著者は〝私の骨も肉もまだ強靱である。……還歴とや、おどろくにあたらない。……〟といっているのだから、これからも大いに山に登って、大いにペンを走らせて、好著を送り出してもらいたいとおもう。

終りに、本書二三五頁に〝先ごろ、アメリカの国務長官が富士山に登った。〟とあるが、これは内務長官である（会報二一一号・ユードル長官と富士に登る・百瀬舜太郎・参照）。どうでもいいようなことだが、後世の史家のために、敢えてこゝに訂正しておく。また巻頭に本文とあまり関連のない写真を収載してあるが、婦人雑誌のオマケみたいな添えものは、山の本にはまったく不必要である。

（一九六八年九月記）

〔藤島　敏男〕

（追記）

『山岳』誌上の書評欄が往年はなはだ活発だった時代には、めぼしい本は大抵取りあげられ、後日資料として役立つばかりでなく、読物としても中々興味があった。もっとも山の本の刊行数も、今日からみればすくないものだった。戦後といっても、ここ数年来のことだが、登山人口の暴増につれて、山の本も出せば売れるというわけか、山つなみの中からころがり出す瓦礫のように無数に刊行される。まさに乱世の様相である。その中に好著、快著も少なくないが、大部分は、俄か成金が客間に書棚を設けて、ならべる本がないので本屋を呼びよせ、〝ここが一杯になるだけ本を買うから、みつくろいで持ってきてくれ。どうせ読まないんだから、大判で分厚いのがいいよ〟といった注文に応じて、本屋が担ぎ込むのに丁度いいようなものだ。

このようなときこそ、玉石混淆の中から玉をひろい上げる、適正な書評が渇望されるのである。それで思い出すのは、日本国降伏の翌年昭和二十一年九月発行のJAC会報『山』一三六号にある「書評について」と題する一文である。ここに述べられていることは、今日でもなお立派に通用するし、ふるい会員の手許にはあっても、新しい会員には未見のものとおもうので、こゝに再録しておきたい。

筆者は当時JAC会員であった浦松佐美太郎氏である。氏はこの文につづいて、詩集「山上の蝶」井上康文著の書評を書いている。（藤島）

図書批評について

登山は、他のスポーツと違って、一緒に登らない限り、人の登山を見ることも出来なければ、直接に学ぶことも出来ない。登山について経験を豊かにし、視野を広くし、自分の登山そのものを更に向上させるのに、最も役立つものは、登山について書かれたものを読むことだと思う。他のスポーツと比べて、昔から登山に関しては、書かれたものが多いのは、そのためであり、また有難いことだと思う。

自分の登山が最もよく批判され、それによって更に向上の手がかりを求めるにも、書いたものが一番役に立つように思われる。

こうした点から考える時、登山に関しては、書かれたものに対する批評は非常に大切なことになる。日本山岳会としても、山岳会の立場から公正な、そして権威のある図書批評をすることは、重要な事業の一つであるわけである。従って、このたびブックレヴュウ委員会を作り、その委員会で出来るだけ広い範囲に亘って山に関する図書の批評を行うこととなった。方針としては、委員の図書批評の結果を委員会に持ちより、十分に討議検討の上、紙上に発表することにしている。従って図書批評の責任は、その委員会にあることをご諒承願いたい。

この企てによって、山岳図書の質の向上に、そして誤ったもの、虚偽のものを是正することが出来れば、日本の登山に幾分の寄与をなし得ることと期待している。

猶この機会に会員諸氏にお願しておきたいことは、山に関する良き著作にお気付きの節は、是非お知らせ願いたいことである。ことに地方において出版せらるる図書などについては、日本の登山界のために、お気付のときは、著者、題名、入手方法等につき報知を賜りたい。

委員一同も、日本山岳会の責任を十分に承知し、懸命に努力を続けることを誓うものである。

今月は、その第一回の批評であるが、会報の休刊中批評もれの図書もあるので、新刊のみに限らず、古いものにも及んでいる。

（完）

山の序曲

山崎安治著　A5判三〇〇ページ　写真九ページ　一九六七年九月　明文堂新社発行　定価一二〇〇円

著者は先きに『穂高星夜』（昭和三十三年六月刊）、『剣の窓』（三十七年一月刊）の二著を世におくり、その登山史研究の一端を示された。二著については会報一九八号および二二〇号にそれぞれ紹介されているが、本会員中でも日本の近代登山史について、最も該博な知識の持ち主であることは、既に周知の通りである。その山崎君が第三著として世に問うた『山の序曲』も亦、同君の最も得意とする登山史に関係深いものであるのも当然であろう。

本書は全体を二部に分ち、第一部にはヨーロッパやヒマラヤ関係のことが、また第二部には日本の山に関することが収められている。その内容の幾つかについて触れてみよう。

第一部冒頭の「アーヴィンのアックス」は、一九三三年に至ってエベレストで発見されたアックスが、一九二四年に不帰の客となったマロリーとアーヴィンの、どちらの所持品であった

か、従来種々取り沙汰されていながら不明であったものを、オーデルがアーヴィンのものであるという結論を下すまでの長い物語を、要領よく纏めたもので、一読興味津々たるものがある。特にオーデルの一文は一九六三年五月刊の『アルパイン・ジャーナル』三〇六号の「アルパイン・ノーツ」に載せられたもので、山崎君がよく旦念に文献に眼を通している証拠であろう。

「マロリーの友情」は、一九二二年のエベレスト登山の際、マロリー、ノートン、モーズヘッド、サマヴェルの四人がロープを結び合ってノース・コルへ下降中、三番目の隊員がスリップして、あわや全員が滑落の憂き目を見ようとしたとき、トップが冷静沈着にピッケルを打ちこんで、大事故を未然に防いだ話を述べたものだが、サマヴェルの本でトップがマロリーであることが判っても、他のいかなる書物でもスリップした隊員の名は明らかにされてないという。仲間の失敗に対して固く口をつぐむ、ゆかしい話が特に取り上げられているのは、全く同感である。

こうした文献を基にした叙述でなく、「テンジンの来日」は昭和三十九年二月上旬に来日したテンジン・ノルゲイのことを、当時JACの役員であった著者が、種々の行事に参加した立場から報じたものである。

またハント隊のエベレスト初登頂後に行なわれた幾つかのエベレスト登山について、「その後のエヴェレスト」の一篇に三〇ページに亘りよく纏められており、末尾の参考文献と共に利用価値は大きい。

第二部は第一部に比べて私には一段と面白く、本書の真価もむしろ第二部の方にあると言っても過言でない。

「欧洲アルプス初期の邦人」は、栗本鋤雲、中井桜洲、原田豊吉、高島北海、田中阿歌麿、山崎直方、白井光太郎等の先人のアルプス訪問にふれている。

「黒部川の仙境」は大正八年における近藤茂吉氏の黒部川横断のことを述べたもので、さきに『山岳』第五十九年に掲載され、また「驚の国の瞥見」はアーノルド・マムの日本アルプスにおける登山を述べたもので、これ亦『山岳』第五十九年に発表されたものである。この二篇とも、編集者として私が著者にこうて『山岳』に掲載した思い出のあるものであり、こうした埋もれた事実を古い文献から探し出すのに、著者は優れた能力と、それに加えて人並みはずれた労力を傾けているのを知るのである。

石黒清蔵氏（一八九八―一九六七）による劔岳池ノ谷初下降については、従来発表された文献がなかったところ、著者が特に石黒氏にこうて語ってもらったのを纏めたのが「秘められた記録」で、登山史上まことに貴重な一篇であろう。

その他「学校山岳部の部報」では『登高行』、『リュックサック』をはじめ数々の部報を語り、「二つの古典」ではウェストンの『日本アルプスの登山と探検』および小島烏水の『アルピニストの手記』の二著について述べている。キレット（切戸）は英語のクレフトから転じたと論ずる「キレット考」や、著者自身の書物の思い出を述べた「山書遍歴」もなかなか面白い。

五〇ページに亘る「槍・穂高登山史・序説」は、文字通り労作で、まさにこの著者の独壇場である。末尾に付せられた「槍ケ嶽登山に関する主要文献抄並に解題」および「日本主要登山年表」は共に貴重なもので、特に年表は利用価値が高いと思う。

著者は「あとがき」で、「日本人の登山はいまや世界的なレヴェルに達したといえるのだが、ひるがえって自分たちの足もとを見つめると、そう喜んでばかりはいられない。日本山岳会が生れて僅か六十年余りにすぎない登山の歴史についてすら、不明な点が実に多い。こうした不鮮明な部分を一つ一つ明らかにすることは、実に大変な仕事であると最近やっと遅まきながらも気付いたのだが、しかし曲がりなりにもこれを明らかにできる時点は、いまきりないのだということも身にしみて感じている。」と書いている。私も全く同感で、特に早期の登山に活躍した山案内人の略伝のようなものは、是非早く作っておきたいと思うのだが、こうした方面でも、この著者に更に広く深い研究を期待してやまぬのである。と同時に、この著者のあとについて進む若い層からの、有能な後継者の輩出することを期待するものである。

本書に挿入された写真では、大正八年七月劔岳頂上に立つ近藤茂吉氏の一葉（ドーント氏撮影）は、非常に貴重なものと思う。

〔望月　達夫〕

ネパール・ヒマラヤ探検記録

＝ネパールと日本・一八九九―一九六六＝

編・日高信六郎　本文・川喜田二郎　A5版　本文二五九ページ・資料八二ページ　写真一六ページ　地図一枚　一九六七年四月　講談社発行　定価六八〇円

かつて私は、日本人によるヒマラヤ登山小史を、文献中心に調査し、深田久弥さんの御労作の巻末をかざらせていただいたことがある。その元版は江上康君の『アピ』に発表したものだが、文献上の調査だけでは限界があり、また、一人でこの種の研究を行なうのに、多大の苦労がつきまとうことを痛感したものである。

近ごろのように、多数の海外登山が世界は狭ましとばかり実行されるのを見るにつけ、その交通整理と各種データの集積が一刻を争うような時期にきていることを感ずるのは、私一人ではあるまい。ここに紹介する書物は、そういった類の、ネパールに関する資料集である。本文五一頁には、本会が試みたアンケートのことが記されている。その結果は聞いていないけれど

も、もっとましなソース・インデックス、すなわちネパール紳士録を作りあげようという、日本ネパール文化協会の試みが、美事に実を結んだ。

本書については、すでに多くの書評が寄せられ、いまさら、自分がとやかくいうこともあるまい。私も日ネ会員の一人として、また「フェイス・トゥ・フェイス」（顔と顔）の調査員の一人として、名ディレクターの川喜田二郎さんのおだてと口車に乗せられたことを、少しも後悔していない。かえって、自分が協力しなかったら、こんなに完璧に近い本はできなかったろうと、自認している。前事務局長の松沢憲夫君が尻叩きにまわって歩いたのも、忘れることはできない。

京の田舎にいると、新聞や雑誌で報道される以外、だれが、どこへ行っているのか、とんとわからない。そして報告が公刊されないとなれば、せっかくのレコードも塵に埋もれてしまうことになる。イタリアでは、そんなために、記録情報センターが設立され、着々と成果を発表していく。日本も早急に対策を立てねばなるまい。本書は、そういったことの一つの手本を示してくれた。この場合、日本の中心は日本山岳会だろうと私考するが、組織を作るのは人であり、その成功はスタッフにかかるものだと確言できる。

本書の本文にはまた、川喜田さんの「発想法」にもとづく、KJ法による収集カードの整然たる整理が展開されている。自分はこれから何かを学びとりたいと思っているが、資料編と付地図は、発想の根源をなしていくだろう。そしてまた、そこには日本人のバイタリティが、ふつふつとして感じられるのである。

ヨーロッパの登山界には、日本人の行動を苦々しく思っている人たちもあるそうだが、これの全英訳本を鼻先につきつけてやりたい。本書に盛られた内容が、かれらに解読されたなら、目を白黒させることは確かだ。

ヒマラヤ民族学の碩学フューラー・ハイメンドルフ教授に、日本側の研究をさしおいて、ヒマラヤを云々できなくなったといわしめ、さらに、フランスの新進ヒマラヤ学者ジェストとマクドナルド両博士は、日本のネパール研究文献を無視して、フランスから「ネパール文献目録」を出せないと、協力を求めてきた。それは比叡山で開かれた「ヒマラヤ研究集会」でのことである。

〔薬師　義美〕

"Mt. McKinley, the Pioneer Climbs"

by Terris Moore, University of Alaska Press, Alaska, 1967, $ 6.95

黒白写真 41 枚、油絵1枚、地図および略図7枚、カバーに "New York Times" の Magazine Section (Sunday, June 5, 1910) の複写がある。

マッキンリー峰（六一九四メートル）と言えば北米大陸の最

高峰であるだけに、アメリカの登山家にとっては最も人気(?)のある山で、毎年のAAJにこの山が最初の主要記事の方に出ていないことがない。

この山は北アメリカの最高峰であるばかりでなく、一つの山塊としても尨大で、従ってこれを登るルートにしても東西南北に面白いところが豊富にある。

どこの国の山でもそうであるが、その山が最初に登られたのは、最もやさしい（これも比較的な問題ではあるが）ルートによってであることは登山史が証明している。マッキンリーも決してその例外ではなかった。

本書はその副題にも示してあるように、この山の早期登攀史を述べているものであって、最近行なわれているような、一層難しいバリエーション・ルートについては何も触れていない。これらのことについてはいずれ、ウォッシュバーンその他の人人によって分類、整理され、素晴しい近代的な写真とともに発刊されることと思うし、是非そうして貰いたいと願っているのは、われわれのみではあるまい。

ところで、この著者のT・ムーアであるが、彼が一九三二年に、仲間のバードソルと共に今は中共の高峰ミニヤ・コンカ(Minya Konka, 7587 m)に登っていることは、知る人ぞ知るの時代になってしまったが、その当時にこれだけの山に登っているということは、決して忘れてはならない事実である。

著者はその前言でこう言っている。

「私は生まれて以来、マ峰の探求とこの本を書くための十分な時間的余裕を得たいと思っていた。私はたまたま、この本に述べられている沢山の劇的事件が発生し、私より年上の家族達が、それらを読み且つ話し合っていた最中の一九〇八年に生まれたのである。こうした時代のアメリカの知識人達は、現在、宇宙探検に示していると同様な関心を、地球の未知の地域への地理学的諸探検に、払い続けていたのである」と。

彼が山の探検と宇宙線の研究のためにアラスカに現われたのは二十二歳の時が最初で、その後、ハーバードその他の大学で博士号をとり、一九四九～五三年までアラスカ大学の総長をつとめていた。私の畏友、F・P・ファークハール老も言っているように、彼ほどこの本を書くのに必要な資格をもっている人はそう多くはいない筈である。

この本の本命は何と言ってもDr. Frederick A. Cookのマ峰登頂（一九〇六）声明に対する反論と、それを証明した一九四二年のムーア自身の登山である。クックが頂上だと発表した写真が、真赤な偽物であることを最終的に証明したのが、三十六年後に撮られた写真であったとは、気の永い話しでもあるが、大変面白い。

クックらは北極到達についても、偽わりの報告をして世間を騒がせたが、そのことについてもこの本では触れられており、いろいろの意味でこの本は興味の尽きるところがない。アラスカの山、特にマッキンリーへ行こうとする人々には、どうしてもよく読んでおいてもらいたい名著の一つである。

付録の方にも見逃がすことの出来ない有益な記事が沢山あ

る。流石はムーアだけのことはあると感心させられる。各章のための脚注乃至は参考文献なども詳細で、索引や語彙のついていることは言うまでもない。

尚、マッキンリーに関する一九五〇年までの文献については、左記のもののあることを付け加えておこう。

"Mount McKinley and the Alaskan Range in Literature" —A Descriptive Bibliography, by Bradford Washburn, The Museum of Science, Boston, Massachusetts, 1951.

〔吉沢　一郎〕

遠い山　近い山

望月達夫著　B6版三〇二ページ　写真十二枚　挿画二枚　一九六八年三月茗渓堂発行　定価九六〇円　百部限定特製本あり

この本には、はげしい登攀記や、華々しい遠征記などとは、およそ縁遠い、名前だけではどこにあるのか、見当もつかないような、山や峠の紀行が多い。しかし著者はそういった俗受けしない、ひとっ気のすくない、ひっそりとした山や峠の遍歴が、いかに楽しいかを、かざり気のすくない文を通じて、淡々と語っている——とは著者の長年のパートナーである藤島敏男氏の序文の一節だが、この言葉が、この本についてのすべてを物語っているといってよいだろう。この本の書評を軽率に引き受けてみたものの、東京に住んでいるとはいいながら、私自身出かけたことも聞いたこともない、山や峠の話ばかりなので、まったくとまどったというのが正直なところである。

著者の文章には、学生時代からたくさん接してきた。特に印象に残っている戦前の東京商大部報『針葉樹』第九号に載った「シッキム・ヒマラヤ登攀年譜」を始め、『山岳』あるいは当時の雑誌『ケルン』などに、著者は蘊蓄を傾けたヒマラヤの研究論文を数多く発表されている。また昭和十年前後、小谷部全助、鷹野雄一氏ら錚々たる連中に伍して著者が行なった北岳バットレスや前穂高東面の開拓の、しかもそれが日本の登山史上に残る、まことに充実した記録が当時の私に強く印象づけられていただけに、今回の新著を一読して少々とまどったわけである。当時私なりに感じていた戦前の著者の山登りの片鱗は、わずか最後の「秋の山」でうかがえるに過ぎなかった。最近の著者の山登りについては、むろん耳にしていたことではあったが、近ごろ山の雑誌などほとんど目にしていないので、学生時代私の思っていた著者の山登りとだいぶへだたりを感じ、それだけに、みがきのかかった、息の長い著者の山登りに脱帽せざるを得ないのである。

「戦後のぼくの山登りは、ほとんど北アルプスを除外してし

まったが、そのかわり、ぼくたちをつちかってくれた東京付近の奥多摩や西上州などの、いまでは流行から忘れられた山や峠がぼくをとらえはじめた。それらの山や峠は、せいぜい高くて二〇〇〇メートルをわずかに超えた程度、細かく入りこんだ谷谷の奥深く三々五々と山の部落がたむろしている土地だった」と著者は書いている。そして北海道に渡ってからは数年間、またよい仲間に恵まれ、寸暇をおしんで札幌近郊はいうに及ばず、日高や羅臼岳にまで足を伸ばしている。まことにうらやましい話である。

また著者は、古い『山岳』の木暮さんや『山』の大島さんの記事、そして自分の十年、二十年昔の記憶を引き合いに出し、あるいはすたれ、あるいは開けた山道をなつかしみ、車道と化した峠の、行方不明になってしまった野仏に限りない愛惜の情を寄せている。

すべて著者の手になる写真も、装幀と共によくマッチしており、現在いたずらに岩や氷の奇をてらう山の本が横行している中で、いぶし銀のように渋く光沢を放つ書物である。

〔山崎　安治〕

登頂ゴジュンバ・カン

高橋進編　A5版上装本三二四ページ　カラー写真一六枚　白黒写真二枚　地図二枚　一九六七年九月　茗渓堂発行　定価九〇〇円

一九六五年にネパール・ヒマラヤの処女峰ゴジュンバ・カンに挑んだ、明治大学山岳部O・B、現役による明治大学ネパール・ヒマラヤ学術調査隊の公式報告書である。

報告の内容は、前半約半分の頁をさいて高橋登山隊長が、登山隊長の立場での手記を書き、後半に各隊員が、それぞれの立場で、登山隊長とは別の立場で当時の様子を率直に執筆し、隊長手記を側面から補うことにより、当時の状況を再現するべく細かい配慮がなされている。

公式報告書とはいっても、最近やたらと目につく堅苦しい内容の報告書と違い、隊の内容を時々刻々と伝えた、生きた報告書といえよう。

本書を一読して、端的に書評を述べるとすれば、本書は「大

学山岳部の先輩、後輩の友情の物語りである」ということができる。同じジェネレーションとして育ち、またマナスル、ヒマルチュリの登山や日本山岳会学生部等を通じて、本書に登場する多くの人たちとは顔馴染みでもあり、またネパール・ヒマラヤの登山をよく知っていることもあるかも知れないが、本書を読んでの読後感は「自分も一緒になって、一喜一憂し、隊の中に溶けこんでしまっていた」ことであった。

今まで多くのヒマラヤ登山の報告書を読んだが、隊のチームとしての物語となっている本、例えばジョン・ハントの「エベレスト登頂」などは何時読んでも楽しいし、読みごたえがあるが、それでも大抵の場合は、物足りなさというか、奥歯に物がはさまったような感じで、その先を、その奥を知りたいと思うことがよくあるものである。そのような物足りなさを、少しも感じさせないのが本書であった。それ程、我々が日頃知りたいと思っていることが、率直に赤裸々に述べられており、内容を知れば知るだけ、この隊の人たちが羨ましく思えるのである。

ヒマラヤ登山隊の隊長は常に孤独なものである。何時も冷酷ともいえるような態度で、寂しく決断を下さなくてはならない。本書にも、隊長としての決断を強いられる場面がしばしば出てくるが、高橋登山隊長は、いつも暖かく先輩達に見守られており、決して孤独ではなかったように思えるのである。

本書の二十七ページに高橋登山隊長が「二月十一日の日記より」と題して、「計り知れぬ不安に迷う心を支え、奮い立たせてくれるものは、あわただしい出発前の羽田空港でもらった、この手紙だった」と述べて、大塚先輩の手紙の全文を紹介しておられるが、このような手紙を、自信をもって公表できる高橋隊長は、幸せな隊長であるとつくづく羨ましく思われるのである。

大塚博美氏のこの手紙は、珠玉の名文である。今後もこのような手紙を貰える隊長は少ないと思われるので、ここに敢えてその全文を紹介しておきたい。

『合掌　進君

隊長の責任は重いものです。

今度のヒマラヤ遠征で、隊長学を身につけることでしょう。長い登山期間で、リーダーシップの神髄の何たるかを痛感されるでしょう。

進君、隊長は常に孤独で、いつもつらい決定をせまられます。アラスカにおいても副隊長格として、交野武一先輩のリーダーぶりに接したことでしょうが、君は君なりの方法でやることでしょうから、私は少しの心配もしておりません。ただ私は、この遠征隊に願っていることは帰るに際し「楽しいヒマラヤであった、もう一度いきたい」と君はじめ全員が心から明るい気持であってほしいということだけです。

成否はその次でよいと思っています。私は若輩のクセにおこがましいことを進言するけれど、山に対しては、常に謙虚であれということを、くり返し考えてみることを君にすすめます。

天地創造よりある大自然なる山と、これに向う人。私たちの力はあまりにも小さく儚(はか)ないものです。人の運命があるとすれ

ば、それは、大宇宙の真理です。とてもこれには逆らうことはできぬものです。神仏への祈りは、助けを願うことではありません。人が無心となって、その日一日生きている喜びを感謝することであると信じています。

よい登山、楽しい登山のための、よいチームワーク、これらはすべて、山に対する謙虚な心が、その根底になることでしょう。

隊長として、隊の力を十二分に発揮することは、むずかしいことですが、君の暖かく、大きな心が、必ず隊員をひきつけて行くことでしょう。君たちは守られ、祈られています。このことは銘じて忘れぬように。　大塚　博美』

ゴジュンバ・カンの登頂は輝かしい隊の成果であった。しかし世界中の人たちが、単に「ゴジュンバ・カン登頂、一九六五年四月二十三日、日本隊、登頂者、植村、ペンバ」とだけしか知らないのが如何にも残念である。日本語のハンディという宿命であるが、このような内容の本こそ外国語に訳され、世界中に紹介されてしかるべき内容であると思うのである。

〔松田　雄一〕

シッキム・ヒマラヤの植物

東京大学インド植物調査隊編集
一九六三年　保育社発行
定価二八〇〇円

ヒマラヤの花

中尾佐助著　一九四ページ
カラー写真多数　一九六四年八月
毎日新聞社発行　定価八五〇〇円

東部ヒマラヤの植物写真集

原　寛編集　写真二四九葉　記事六十一ページ
一九六八年四月
井上書店発行　定価六〇〇〇円

ヒマラヤは植物の種類が非常に多いのみならず、美しい花がたくさん在る場所としても世界の最後の宝庫となっている。この美しい花を見ることは、ヒマラヤ旅行者、登山家、探検家にとっても、余りたやすい仕事ではない。ヒマラヤは巨大な山脈で、その部分によって植物の種類が非常に異なっているし、また花のシーズンが一問題ある。春の東部ヒマラヤ（東部ネパール・シッキム・ブータン）では、石楠花類は早春三月から五月

のモンスーンの雨にかかる頃までにわたって咲き出してくる。プレ・モンスーンの登山期に登山するパーティーは往路にすこしの石楠花、帰路の頃に高地で豊富な石楠花の花の海をみることができる。しかしサクラソウ類になると、雨が降り出してから咲く種類がだいぶある。ヒマラヤの名花、青いケシ（メコノプシス）はだいたい雨期の花である。七～八月のモンスーンの時期に高山帯では一番多くの種類の花が咲いてくるが、登山者ではそれを見る機会は少ないだろう。

このヒマラヤの花をカラーの本で見ることは、英国人の仕事が始まりだ。J. D. Hooker, "The Rhododendron of Sikkim Himalaya" (1849) はフッカーの古典的名著の豪華本で、彩色した写生図三〇図版を持ってすばらしいものだが、日本には数部しかなく、一般の人が見るには不便である。その後英国では彩色写生図の出版が時々ある。特に "Curtis Botanical Magazine" (The Royal Horticultural Society, London) には、世界各地から英国へ導入され、生育開花した植物の彩色写生図が収められている。この中にはヒマラヤから導入された植物が多数含まれており、種類の同定の時の図版としては極めて価値の高いものである。また単行本としては、Ethelbert Blatter, S.J., "Beautiful Flowers of Kashimir", 2 vols., London, (1928) は書名どおり、西ヒマラヤの花の彩色写生図であり、忘れることができないものである。

カラーフィルムが登場してから、最初にヒマラヤで花の写真を撮って出版したのは、たぶん Smythe, F.S., "The Valley of Flowers", London, (1947) であろう。これにはガルワールで撮影した写真十五葉を載せているが、花の群落の写真が殆んどである。その後英国からは植物関係の専門雑誌にヒマラヤ、チベットなどの植物のカラー写真が時々発表されてきている。

日本隊が戦後ヒマラヤに入りはじめた頃から、カラー写真は本格的に使用される時代に入り、また写真機は日本製が世界一流品となった関係からか、日本のパーティーはどこの国のパーティーより、写真機とフィルムでは豊富に装備されることになってきた。その結果、登山隊のアマチュアーや科学隊員により、山の姿、風俗、風景など、恐るべき豊かさを持って写真記録が日本にもたらされるようになった。それらのうちでも、植物、花の姿となると、表題の三冊の専門書が日本で出版されるという結果になった。ヒマラヤの植物や花の生態写真の本が、三冊も出版された国は世界のどこにもない。この点では完全に英国を引きぬいたと言ってよいだろう。このほかにも日本からは一九五五年に "Fauna and Flora of Nepal Himalaya", Edt. by H. Kihara, Fauna and Flora Research Society, Kyoto University の巻中に、ヒマラヤ植物の白黒の生態写真六十五枚をかかげている。また東京大学出版の "The Flora of Eastern Himalaya", Edt. by H. Hara (1966) には七頁のカラー写真と、五頁の白黒の生態写真とを発表している（『山』二八〇号・一九六八年一〇月号参照）。

さて、表題にかかげた三冊のヒマラヤ植物の写真集を各個に紹介して、その長短を論ずる必要もあるだろうが、ここではそ

れは余りにくだくだしいことなので、省略させていただくことにしたい。ただ、この日本で出版された三冊の本が、ヒマラヤの植物図鑑として役立つかというと、それは未だはなはだ不十分だとしか言えない。だいたい日本の植物図鑑ほど、日本人に使いよい出版物は世界のどこにもない。もしヒマラヤで図鑑として高等植物を十分網羅しようとすれば、日本の場合の数倍の頁数が必要になってしまい、到底簡単に作ることもできないし、持ち歩いて気軽に参照できるようなわけにもいかない。ただこの三冊の本を見ていると、ヒマラヤでいろいろな意味で、アクセントとなるような植物は一応収録されているといってもよいだろう。例えば森林帯の主要樹種とか、日本とヒマラヤと近似した代換種の面白い例などは、よく紹介されている。例えばツバメオモト、アオキ、ミズナラ、ネジキなどのように、日本人に親しいもののヒマラヤの種類などは、ちゃんと紹介されている。また工芸的な植物、例えばヒマラヤで和紙を作っているが、その原料であるヒマラヤのミツマタやジンチョウゲの花の姿も、カラーで見事に見られる。また視点を変えて、例えばインドと低ヒマラヤに共通する秋咲きのナタネ、野生のコーヒー、現在の胡椒の先駆者であるピパー・ロングウムの姿なども、カラーで見ることができ、ヒマラヤ・プロパーよりも、インド的植物界の一端も表われている。

しかし何といっても、この三冊の本に盛りこまれているものは、植物界や花の愛好者の精神に応ずるものだろう。シャクナゲやサクラソウ、青いケシを始めとして、人外秘境に咲く花の自然のままの生態をカラー写真で受けとめ、それを紹介しているが、ここに盛られただけの花を、現地で自分の目で見ようとしても容易なことでは出来ない相談である。それを机の上で、楽々と再現してくれるのがこの三冊の本である。価格は普通の本と比較すると若干高価であるが、考えようによっては随分安いものだとも言えよう。この本を見るには何といっても三冊たばにして同時に開いてみるに限る。そうしていると、机の上に何となくヒマラヤの冷やかな風と香気が湧きあがってくるような気分になる。

私にとっては、この三冊の写真集だけではまだ物たりない気持ちがする。まだもっとヒマラヤには面白く美しい花がたくさんある。例えばテッポウユリにも似た Lilium wallichianum, あるいは一見してピンク色のテマリバナのようなとでも形容したい Luclia gratissima の姿など、すぐ思い出される花がいろいろある。そのような意味で、日本で出版したこの三冊の本にひきつづき、更に充実した生態写真集が出版されるように祈りたい。

〔中尾　佐助〕

赤道の氷河を越えて

神奈川県アフリカ登山隊著　B5版　本文三三八ページ　挿入写真カラー二四ページ　白黒六四ページ　折込み地図一葉　一九六七年十一月　神奈川新聞社発行　定価一四五〇円

本書は登山だけでなく、自動車による縦断、親善交流をふくむ、東部アフリカの山々とその諸国間、一万三千キロにおよぶ行程を詳細につづった、神奈川県アフリカ登山隊の正式報告書である。

まず準備計画になぜアフリカを選び、親善を加えたか、神奈川岳連の現状から決定までのいきさつを、尾関総指揮、植木隊長が記している。登山記録は、ラスダシャン、エルゴン、ケニア、キリマンジェロ、ルウェンゾリ、ムランジェの登山記録であるが、熱帯から急に氷河のある山頂への登山の変化は、暑さと寒さとの戦いで、特に赤道直下といいながら厳寒の岩場でのビバーク、そして四〇〇〇メートルを超えると頭痛や息切れ、目まいに苦しんだが、無事に目的の全山に登頂している。

もう一つの登山隊の目的である親善交流については、近代化の波にもまれながらも、脱皮しつつあるアフリカ民衆の息吹きが、ひしひしとつたわってくる様子がよく書かれている。アフリカ民衆の真心と登山隊の交歓は随所に見られ、この点でも大成功のようである。

縦断キャラバンでは、エチオピアのアッサブ港よりモザンピークのベイラ港まで、南下するにしたがい政治的な難関が、登山隊の行くさきざきにまちかまえており、ベイラ港に終着するまで（南アフリカのケープタウンまで予定していたが、許可おりず）最後のキャラバンになってくると、秘密警察の尾行まで受ける付録がついたことは、アフリカにおける政治的な問題のウェイトの高いことを、あらためて知らされる。

最後に資料として東アフリカ山岳文献、戦後日本からの登山記録等あり、直接正式報告書に必要ないが、参考となる文献も調査してこのようにあげて見ると、東アフリカの山岳もなかなか文献が多いものである。

以上の記録を読みながら気がついたことは、山と人とのこのような交流の場において、感傷に流れてしまう文章を書きやすいが、この報告書は適度な心情をまじえて、たんたんと語る隊員の文章は乱れることなく、適切な表現はただの登山報告書にとどまらず、登山を知らぬ人々にも価値ある読みものになっていることである。これは編集者の植木隊長と、隊員の人間味と、編集技術によることであろう。

書物の装幀も、アフリカの土の色を表わしたと思われる上質

の麻を原料にした赤茶けたカンバスで、最近の山の装幀としてしゃれている。

それに本書の巻頭にあるカラー二十四頁、白黒六十四頁の写真は、特に熱帯サバンナの植物と氷河の山々とのコントラストのカラーの色彩が強烈で異彩を放っている。

ここで一つ苦言をいわなければならないのは、文中地名の出てくる時、巻末の折り込みの地図を見ながら本文を読んでゆこうとしても見にくいことである。巻末の地図を報告書から別にひきはなすなり、もっと見やすいように図面を書き込むか、折込む方法にしてほしかった。またこの書物全体のバランスからいっても、地図が貧弱の感があるのは惜しまれる。

読み終わった今、ヒマラヤやアンデスの書物を読み終わった感覚とは別な感じがにじみ出てくるのは、不断我々の忘れさっている何ものかを暗示するからだろうか。

とにかくこの登山報告書は今後アフリカ登山をめざす人々の、必ず目を通すであろう詳細にして貴重な文献であり、アフリカ登山の好著として、諸氏の座右の書となるであろう。

〔野上　成勇〕

わたしの山旅

槇　有恒著　新書版（岩波新書六七一）二〇三ページ　写真二葉　一九六八年二月二十日　岩波書店発行　定価一五〇円

一通り読んでしまってから、これは、もう一度読み直す必要があると思った。多分同じような感動をもった人は、二、三に止まらないだろう。第一、新書版の二〇〇ページといえば、分量として、決して読むのに苦労するようなものではない。それに槇さんの淡々たる筆がまた、曲せものなのだ。ついその筆につりこまれて、読まされてしまう。さすが人間七十を越せば、などといっては、著者に失礼になろうが、さらりとしたものである。だが一口にいえば槇さんの幼年時代から今日までにいたる、七十余年を振返えった回想録であり、そのなかにアルプス、ロッキー、ヒマラヤの大物が列んでいるのだから、これはやはりその覚悟で読まなければならない。

三十を越えたか越えないで『山の想い出』を書いたり、五十そこそこで『回想記』などと銘をうった本を出す、これが当節のやり方だとすれば『わたしの山旅』などという看板は流行ら

ないのだろうが、われわれには、この方が有難い。槇さん自身も、余りあらたまった気持ちでなく、炉端での物語のような気持で、話を進められたのだろう。実はそれだけにまた、われわれからすれば、ただ読み流してしまってはならないものがあるのである。

山の記録の面だけでいえば、極めて初期のものを除いては、誰にも既によく知られたものだ。『山行』を皮切りにして槇さんの書かれたものは少なくない。だから山の仲間からいえば、この書物の値打は、むしろ別のところにある。つまり槇さんの回想録だという点にある。そんなこと、最初から判っているじゃないかというだろうが、同じ回想録でも、語る人の経験、経歴によって違う。同じ人でもその年齢によって違う。語る題目にもおのずから違いがあり、語り方にも違いがある。そもそも山の記録という以上、何等かの意味で回顧的なものになるのは当然だが、それぞれの視点の相異によって出来上るものは違ってくる。その意味で槇さんが、槇さん自身の今日の視点に立って書かれたものは、それだけで独特の意味をもたないわけにはいかない。

フレデリック・ハリソンの『アルパイン・ジュビリー』やクロード・ウィルソンの『エピトーム』は、自分の登山五十年を記念して書いたものだ。コンウェイの『回想記』もそれに近い年代にわたっている。猫もしゃくしも五十年山に行きましたから、といって回想記を書いたのでは、わずらわしいことになるが、まあ、五十年も山に入ったのならば、御恩返えしの意味でも、何かなすべきではあるかも知れない。まさか槇さんが、そんな気持で筆をとられたとは思わない。もとは新書の編集にせっつかれたのが話の起こりだろうが、重いお輿が、上がった一つの動機には、幾分かはそれに近いものがあったかも知れない。だから新書のような一般の読者を対象としたものとして出たわけだ。まことに結構なことだと思うし、われわれ山の後輩は後輩として、また別の角度から、この物語を読んで、それぞれに発明するというわけだ。

長い間の待望の書であった。何はともあれ、この本の出たことを祝さねばならない。

思うにこれは座右において、折にふれて読み返えすべき種類の本であろう。そしてどこにどんなお宝が蔵されているか、めいめいが、その時その時に、そのお宝を発掘していくべき本であろう。

〔松方　三郎〕

会務報告

一九六七年七月～一九六八年六月

◇**七月理事・評議員会**　七月六日（木）ルーム
出席者　松方、三田、深田、大塚、松田、辰沼、飯野、宮下、中島、竹田、関口、野田、平山、大貫、丹部、広谷、酒井、折井、中屋、高山、津田、佐藤、石原、中田、川森、沼倉、松本、牧野
▽議事、報告
一、ルーム改装、移転状況報告の件
二、ルーム基金募金対策検討の件
三、ルーム移転に伴う事務局員増員の件
四、ルーム移転に伴うルーム使用規定、図書閲覧規定等検討の件
五、新ルーム披露パーティー開催の件
六、本会指定山小屋制度検討の件
七、日本山岳協会指導員推薦の件
八、支部長会議開催の件
九、UIAA加盟の件
十、東京都岳連評議員推薦の件
十一、谷川岳登山条例の件
十二、その他議事・報告事項
（詳細は「山」二六八号参照）

◇**支部長会議**　七月十五日（土）ルーム
出席者　秋田＝荒巻、越後＝藤島、山梨＝山村、静岡＝山本、信濃＝塚本、東海＝熊沢、石川＝亀田、富山＝中田、関西＝水野、東九州＝野口、松方、渡辺、深田、辰沼、大塚、松田、飯野、丹部、藤井、石原、佐藤
▽議事、報告
一、会長挨拶
二、本年度理事会方針説明
三、各支部現況報告
四、ルーム移転に伴う募金の件
五、山小屋指定制度検討の件
六、日本山岳協会指導員推薦の件
七、本部・支部間の事務方式検討の件
八、その他報告事項
（詳細は「山」二六八号参照）

◇**八月理事・評議員会**　八月三日（木）ルーム
出席者　松方、渡辺、辰沼、大塚、松田、飯野、宮下、丹部、野田、広谷、長尾、中島、酒井、関口、大貫、中田、石原、佐藤、藤井、折井、沼倉、川森、松本
▽議事、報告
一、実行予算案検討の件
二、ルーム募金現況報告ならびに今後の見通しについて
三、支部長会議報告の件
四、山小屋委員会設置の件
五、指導員制度検討の件
六、常務理事一名増員の件

七、事務局員交替の件
八、ルーム移転記念パーティー開催の件
九、日印婦人合同登山隊派遣の件
十、UIAA加盟の件
十一、本会重複図書整理の件
（詳細は「山」二六九号参照）

◇**九月理事・評議員会**　九月七日（木）ルーム
出席者　松方、渡辺、深田、大塚、丹部、飯野、野田、竹田、酒井、長尾、大貫、関口、望月、藤井、吉沢、石原、折井、中屋、津田、川森、沼倉、牧野、松本

▽議事、報告
一、ルーム募金の現況報告および今後の対策検討の件
二、日本山岳協会指導員推薦についての事後処理の件
三、職員採用の件
四、図書利用規定の件
五、会議室使用規定の件
六、鍵取り扱いの件
七、年次晩餐会の件
八、その他報告事項
（詳細は「山」二七〇号参照）

◇**十月理事・評議員会**　十月五日（木）ルーム
出席者　渡辺、深田、大塚、辰沼、松田、丹部、長尾、野田、酒井、関口、中島、吉沢、折井、中田、高山、須賀、沼倉、川森、牧野、松本、他に初見、村井

▽議事、報告
一、ルーム基金募金の件
二、都岳連関係報告の件
三、日本山岳協会指導員特別認定の件
四、その他報告事項
（詳細は「山」二七〇号参照）

◇**十一月理事・評議員会**　十一月二日（木）ルーム
出席者　松方、三田、渡辺、深田、加藤、辰沼、大塚、松田、飯野、広谷、関口、大貫、吉沢、折井、石原、藤井、沼倉、牧野

▽議事、報告
一、年次晩餐会開催の件
二、名誉会員推薦の件
三、永年会員推薦の件
四、ルーム基金募金現況報告ならびに今後の対策検討の件
五、職員正式採用の件
六、冬期間のルーム開室時間変更の件
七、「山岳」「山日記」「山」の編集状況ならびに対策検討の件
八、秩父宮スポーツ博物館増設に伴う展示品出品の件
九、会員名簿発行の件
十、新旧役員交欲会の件
十一、都岳連評議員推薦の件
十二、神河内山荘の件
十三、その他報告事項
（詳細は「山」二七〇号参照）

◇**十二月理事・評議員会**　十二月七日（木）ルーム
出席者　三田、深田、辰沼、大塚、松田、宮下、丹部、竹田、広谷、長尾、酒井、関口、大貫、中島、藤井、佐藤、折井、石原、沼倉、川森

▽議事、報告
一、ルーム基金募金の件
二、来年度役員候補者推薦の件
三、その他報告事項
（詳細は「山」二七一号参照）

◇二月理事・評議員会　二月一日（木）ルーム
出席者　松方、三田、渡辺、深田、辰沼、大塚、松田、飯野、宮下、丹部、竹田、広谷、長尾、酒井、関口、大貫、中島、吉沢、佐藤、高山、石原、川森、折井、沼倉、島田、牧野

▽議事、報告
一、昭和四十三年度通常会員総会開催の件
二、図書募金制度検討の件
三、会員名簿発行の件
四、婦人懇談会日印合同登山隊の件
五、ルーム基金募金報告ならびに対策検討の件
六、昭和四十三年度収支予算案検討の件
七、昭和四十三年度新役員推薦の件
八、その他報告事項
（詳細は「山」二七三号参照）

◇三月理事・評議員会　三月七日（木）ルーム
出席者　松方、渡辺、辰沼、大塚、松田、飯野、宮下、丹部、竹田、広谷、長尾、酒井、関口、大貫、吉沢、折井、石原、島田、堀田、中田、沼倉、牧野

▽議事、報告
一、昭和四十三年度役員候補者推薦の件
二、昭和四十三年度事業計画案検討の件
三、昭和四十三年度収支予算案検討の件
四、ルーム基金募金報告の件
五、その他報告事項
（詳細は「山」二七四号参照）

◇臨時理事・評議員会　三月二十二日（金）ルーム
出席者　松方、三田、渡辺、加藤、大塚、松田、丹部、中島、大貫、酒井、関口、竹田、広谷、島田、折井、沼倉、吉沢、藤井、牧野

▽議事、報告
一、昭和四十三年度新役員、評議員推薦の件
二、総会に付議する議題検討の件
三、ルーム移転の件
四、その他報告事項
（詳細は「山」二七六号参照）

◇四月理事・評議員会　四月十八日（木）ルーム
出席者　松方、三田、加藤、大塚、松田、飯野、長尾、酒井、関口、大貫、広谷、丹部、中島、吉沢、藤井、佐藤、折井、石原、高山、沼倉、川森、松本、牧野

▽議事、報告
一、昭和四十二年度事業報告検討の件
二、昭和四十二年度収支決算報告、財産目録報告の件
三、監事による監査の報告
四、通常会員総会開催準備の件
五、支部長会議開催の件
六、西穂ケーブル問題検討の件
七、その他報告事項

◇昭和四十三年度通常会員総会　四月二十日（土）ルーム　出席者一〇

八名

▽総会次第

一、会長挨拶　松方三郎

二、昭和四十二年度事業報告　大塚博美

三、支部報告

秋田支部（荒巻広政）、宮城支部（伊達篤郎）、越後支部（藤島源太郎）、信濃支部（塚本茂樹）、山梨支部（山村正光）、静岡支部（山本朋三郎）、東海支部（原真）、富山支部（中田勇吉）、石川支部（小林雄二郎）、関西支部（水野祥太郎）、東九州支部（野口秋人）

四、昭和四十二年度収支決算報告　飯野享

五、財産目録の報告　飯野享

六、監査報告　牧野衛

（全員異議なく収支決算の報告を承認）

七、役員改選の件

昭和四十三年度の理事として、三田幸夫、吉沢一郎、深田久弥、大塚博美、飯野享、竹田寛次、広谷光一郎、長尾悌夫、大貫良夫、宮下秀樹、中島寛、丹部節雄、山崎安治、藤井運平、川森左智子、小倉董子、芳野赴夫、小方全弘、浜野吉生、野上成勇の二十氏を選任、さらに会長として吉沢一郎、深田久弥両氏を選任した。退任された松方三郎、渡辺公平、加藤泰安、辰沼広吉、松田雄一、平山善吉、野田三郎、酒井敏明、関口周也九氏の労を謝した。

監事は松本熊次郎氏の任期満了に伴う後任として堀田弥一氏を選任。

評議員は、折井健一、堀田弥一、吉沢一郎、藤井運平、川森左智子、須賀太郎の六氏が退任され、その後任として、松方三郎、渡辺公平、加藤泰安、小原勝郎、辰沼広吉、村木潤次郎の各氏を選任。退任された六氏の労を謝した。

八、昭和四十三年度事業計画案　大塚博美

（全員異議なく原案どおり承認）

九、昭和四十三年度収支予算案　飯野享

（全員異議なく原案どおり承認）

（詳細は「山」二七八号参照）

◇**支部長会議**　四月二十一日（日）ルーム

出席者　宮城＝伊達、越後＝藤島、信濃＝塚本、静岡＝山本、東海＝熊沢、富山＝中田、石川＝小林、関西＝水野、東九州＝野口、三田、吉沢、深田、藤井、津田、大塚、丹部、飯野、辰沼、松田

▽議事、報告

一、昭和四十二年度事業報告

二、昭和四十二年度収支決算報告

三、昭和四十三年度新委員の件

四、昭和四十三年度事業計画案審議の件

五、昭和四十三年度収支予算案審議の件

六、支部事務所在地、支部構成人員等報告の件

◇**臨時理事会**　四月二十三日（火）ルーム

出席者　三田、吉沢、深田、藤井、山崎、飯野、大塚、大貫、小倉、竹田、芳野、小方、野上、浜野、牧野

▽議事、報告

一、会長挨拶

二、常務理事互選の件

藤井、山崎、丹部、大塚、飯野、宮下、竹田、広谷の八氏を互選。

三、理事業務分担の件

吉沢（海外）、深田（支部、図書）、藤井（総務、遭難対策、山荘）、山崎（会報、出版）、丹部（海外連絡、名簿）、大塚（総務、庶務）、飯

野（経理、山荘）、宮下（学生部、支部、指導研究）、竹田（ルーム、指導研究）、広谷（指導研究）、川森（自然保護、婦人懇談会）、長尾（指導研究＝医療）、大貫（山日記、出版）、中島（山岳、庶務）芳野（集会、指導研究＝文部省研修所）、小方（会報、支部）、小倉（婦人懇談会、集会）、浜野（出版、庶務、学生部）、野上（図書、ルーム）

四、その他報告事項

（詳細は「山」二七六号参照）

◇五月理事・評議員会　五月十六日（木）ルーム

出席者　三田、吉沢、深田、藤井、山崎、大塚、丹部、飯野、川森、竹田、宮下、長尾、芳野、中島、浜野、小倉、野上、小方、松方、島田、佐藤、渡辺、中尾、加藤、石原、沼倉

▽議事、報告

一、ルーム移転の件

二、神河内山荘改装の件

三、常任評議員互選の件

松方、渡辺、島田、中屋、加藤、佐藤、石原、沼倉の八氏を互選。

四、各種専門委員会設置の件

ルーム委員会、学生部指導委員会、指導・研究委員会、山日記編集委員会、図書委員会、海外連絡委員会、集会委員会、会報編集委員会、山岳編集委員会、婦人懇談会、遭難対策委員会、自然保護委員会、新刊編集委員会、支部連絡委員会、神河内山荘運営委員会の十五委員会を設置

五、その他報告事項

（詳細は「山」二七七号参照）

◇六月理事・評議員会　六月十三日（木）ルーム

出席者　三田、吉沢、深田、山崎、大塚、広谷、竹田、長尾、大貫、宮下、川森、丹部、芳野、小倉、小方、浜野、野上、島田、牧野

▽議事、報告

一、ルーム移転の件

二、都岳連評議員交替の件

三、その他報告事項

（詳細は「山」二七八号参照）

× × ×

◇小集会

▽第二三三回　昭和四十二年八月十六日（水）於・ルーム　参会者四十八名

富士山と私　松方三郎氏

▽第二三四回　昭和四十二年八月二十三日（水）於・ルーム　参会者二十五名

山の怪談・怪異を語る会　西丸震哉氏

▽第二三五回　昭和四十二年九月二十七日（水）於・ルーム　参会者四十七名

ブータンの旅　金井弘夫氏

▽第二三六回　昭和四十二年十月七日（土）～八日（日）於・立山千寿カ原・文部省登山研修所（富山支部創立二十周年記念現地小集会）参会者八十五名

▽第二三七回　昭和四十二年十月二十五日（水）於・日本体育協会　参会者一一六名

雪崩に関するシンポジューム

（詳細は「山」二七一号参照）

▽第二三八回　昭和四十二年十一月十一日（土）～十二日（日）於・梅ケ島温泉　参会者一〇七名

静岡支部主催第十回紅葉会
▽第二三九回　昭和四十二年十一月二十二日（水）於・ルーム　参会者四〇名
ペルー・アンデス遠征報告　村井栄一氏
▽第二四〇回　昭和四十三年一月二十四日（水）於・ルーム　参会者四〇名
一橋大学山岳会ヒンズー・クシュ遠征報告　山本健一郎氏
▽第二四一回　昭和四十三年二月二十八日（水）於・ルーム　参会者二十五名
アコンカグア南壁登攀　青木敏氏
▽第二四二回　昭和四十三年三月二十七日（水）於・ルーム　参会者三十五名
私の登山　松本善二氏
▽第二四三回　昭和四十三年六月七日（金）於・ルーム　参会者五十六名
中華民国訪日友好登山団歓迎会
（「山」二七八号参照）
▽**主なる行事および集会**
▽富士山頂診療所は七月二十一日～八月十三日の間開設、医師八名（延三十七名）が勤務し、六十五名の診療を行なった。
▽ルーム移転記念パーティー。九月八日。於・新ルーム。参会者一一七名で盛会だった。
（「山」二六九号参照）
▽第八回登山技術講習会。本会指導委員会主催により、十一月二十三～二十六日、富士山において開催。講習生三十五名。
（「山」二七一号参照）
▽昭和四十二年度年次晩餐会。十二月一日。於・新宿伊勢丹会館プリムラ。成瀬岩雄氏の司会で、会長挨拶に続き、名誉会員、永年会員の推薦があり、数々のスピーチが行なわれた。参会者二〇九名。
（「山」二七一号参照）
▽「明治百年この一本展」。十二月一日、恒例により、年次晩餐会の会場の一隅に展示された。
（「山」二七一号、二七二号、二七三号参照）
▽昭和四十二年忘年会。十二月二十日。於・ルーム　参会者七十七名。
▽スキー懇親会。一月十四日～十六日。於・山田温泉。参加者七十五名。
▽婦人懇談会親睦スキー。二月十日～十一日。於・北八ガ岳しらびそ小屋周辺。
▽新ルーム披露招待パーティー。三月八日。於・ルーム。本会会員以外からのルーム基金募金協力者を招待して行なわれた。出席者三十五名。（「山」二七六号参照）
▽日印婦人合同ヒマラヤ登山隊歓送会。四月十二日。於・ルーム。
▽故中村清太郎遺作展。四月二十日～二十七日。於・向井ビル六階。
（「山」二七六号、二七八号参照）
▽第六回木暮翁碑前懇親会。五月十八日～十九日。於・金山平。参会者三十三名。
（「山」二七七号参照）
▽第二十二回ウェストン祭。六月一日～二日。本会信濃支部主催で上高地において開催。
▽第十一回有志閑談会。六月十五日。於・六義園。参会者四十四名。
（「山」二七八号参照）

×　×　×

◇**ルーム基金**　新ルーム移転に伴い、ルーム基金募金委員会（委員長松

方三郎）を設立、八百万円を目標として、募金を行なった。昭和四十三年六月三十日現在の申し込みは七百四十三万九千円で、募金継続中。

× × × ×

◇**磯野記念文庫**　故磯野計蔵氏（終身会員、一一八六番）の遺族から、和書一九五冊、洋書一五〇冊を寄贈された。本会はこれを記念して「磯野記念文庫」として残すことになった。

（「山」二七五号、二七六号参照）

× × × ×

◇**海外登山界との交流**

▽本年度は三十四カ国五十一団体と Journal の交換を行なった。

▽国際山岳協会連合（UIAA）に加盟することを決め、一九六七年十月八日のUIAA総会において、本会の入会が正式に承認された。

（「山」二六八号、二七二号参照）

▽コロラド山岳会訪日登山隊（隊長 W.Y. Takahashi 氏）二十二名が来日。本会では七月八日、ルームにおいて歓迎会を開催した。

（「山」二六六号参照）

▽国際アルピニスト集会。七月十日～二十九日、フランスのシャモニで開催された国際アルピニスト集会に、本会から植村直巳、伊藤頌司の両氏が参加した。

▽ルネ・デメゾン氏来日。六月十四日・本会ルームにおいて歓迎会を開催した。

（「山」二七八号参照）

▽その他多数の外国人登山家が本会を訪れた。（「山」二七四号参照）

◇**海外登山**

一九六七年は別掲（「海外登山年表＝一九六七年＝」）のように七五隊の登山隊が海外の山に出かけたが、これらの各隊には多数の本会会員が参加した。なお本会に直接関係のある海外登山に関するトピックとして、次の点を記録しておきたい。

▽日印合同婦人ヒマラヤ登山隊（日本側隊長宮崎英子氏以下四名）を派遣。四月～六月・インド北部のチャンバ地域に入山し、カイラス峰（五五五六メートル）に全員登頂した。

（「山」二七三号、第二七六号、二七七号参照）

▽海外登山審議委員会　昭和四十三年度国際スポーツ行事用外貨割当てを検討する日本山岳協会の海外登山審議委員会は、十一月一日開催され、栃木県山岳連盟＝ボリビア・アンデス（七四二五ドル）、愛知県山岳連盟＝ペルー・アンデス（六〇〇〇ドル）、日大・桜門山岳会＝グリーンランド横断（五五〇〇ドル）の三隊が承認された。

（「山」二七二号参照）

▽エベレスト登山　度々解禁の情報が流れたが、依然としてネパール政府の登山禁止状態が続いているため、本会の計画も保留のままとなっている。

▽第六回海外登山技術研究会　四月二十八日～五月一日まで富山県の文部省登山研修所で開催された。出席者一〇八名のうち、本会会員は六十八名であった。

（「山」二七八号参照）

× × ×

▽**社団法人日本山岳協会設立認可さる**　本会に直接関係はないが、五月二十五日付をもって、文部大臣より社団法人日本山岳協会の設立が認可された。（「山」二七九号参照）

× × ×

◇**山岳**　第六十二年（通巻一二一号）を三月二十日発行。編集者望月達

夫。

◇**山**　第二六五号～第二七六号を発行。編集代表は第二六五号～第二七五号は吉沢一郎、第二七六号は山崎安治。

◇**山日記**　一九六八年版（第三十三輯）を一月一日発行。編集代表大貫良夫。

◇**名誉会員**　昭和四十二年十二月一日の年次晩餐会の席上、牧野平五郎氏（会員番号二〇六番）、岡埜德之助氏（二七一番）、松本善二氏（四五九番）の三氏を名誉会員に推挙した。

◇**永年会員**　本年をもって在籍五十年に達した左記三氏が、永年会員として、十二月一日の年次晩餐会の席上、「永年会員章」を贈呈された。伊藤英三郎氏（会員番号五四二番）、松方三郎氏（五四七番）、又木周夫氏（五八六番）。

◇**物故会員**　この期間に逝去された会員は次のとおりである。本会はここに謹んで哀悼の意を表する。

一九六八年度役員

会　　長　三田幸夫

副 会 長　吉沢一郎、深田久弥

常務理事　藤井運平、山崎安治、丹部節雄、大塚博美、飯野　享、宮下秀樹、竹田寛次、広谷光一郎

理　　事　川森左智子、長尾悌夫、大貫良夫、中島　寛、芳野趙夫、小方全弘、小倉董子、浜野吉生、野上成勇

監　　事　牧野　衛、堀田弥一

常任評議員　松方三郎、渡辺公平、加藤泰安、島田　巽、石原憲治、沼倉寛二郎、中屋健式、佐藤久一朗

評 議 員　小原勝郎、辰沼広吉、望月達夫、後藤幹次、藤島源太郎、津田周二、伊藤秀五郎、水野祥太郎、中田勇吉、高山忠四朗、三井松男、村木潤次郎

支　部　長　荒巻広政（秋田）、小林雄次郎（石川）、藤島源太郎（越後）、野口秋人（東九州）、水野祥太郎（関西）、三谷孝一（熊本）、織田　収（山陰）、山本朋三郎（静岡）、塚本茂樹（信濃）、熊沢正夫（東海）、中田勇吉（富山）、末松大助（福岡）、伊藤弥十郎（福島）、伊達篤郎（宮城）、後藤幹次（山形）、三井松男（山梨）

書　　記　永原輝雄

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXIII **Issued in March, 1969**

Contents

(in English)
Three Ascents around Rosh Gol·····By Yukitoshi Sato····· 1
Editor's Note (1) ····· 5
Huayna Potosi 6,095 m ·····By Michiko Sekita····· 8
Nevado Jirishhanca Grande, 1967·····By Hajime Tanaka····· 9
Editor's Note (2) ····· 11
Hokkaido Alpine Association Alaska Expedition, 1967·····By Takao Sasaki·····14
The First Ascent of Mount Kobe (Aello Peak), Alaska
·····By Mitsuhiko Ohno·····15
Hess Mountain in Alaska, 1967 ·····By Junji Nakamura·····18
Iran Elburz, Mt. Demavend and other peaks, 1967·····By Yoshio Hamano·····19
·····

(in Japanese, except the articles mentioned above)
Some notes on the glacial phenomenon in the Japanese Alps
·····By Toshio Okayama····· 1
The original members of J.A.C, Mitsumaru Tsujimoto
and Isuke Tsujimura·····By Seitaro Nakamura·····115
My old climbs in those good days·····By Zenji Matsumoto·····130
The first ascent of Yajun·····By Michio Masunaga·····143
Some ascents around Golen Gol ·····By Tsuneo Miyamori·····152
Hindu Raj, 1967 ·····By Michio Ebihara·····162
Tirich Mir, 1967 ·····By Kazuyoshi Takashima·····169
Cordillera Santa Marta (Colombia Andes), 1967·····By Ryozo Yamamoto·····184
Reminiscences of the late Tokio Ogawa·····By Iwao Naruse·····222
In memorial :
S. Nakamura, T. Kohyama, K. Fushimi, I. Mitsumori, M. Kobayashi,
Y. Ori·····228
Book Reviews ·····246
Club Proceedings·····262
Chronicle of Japanese Overseas Expeditions, 1967···Ed. by Yuichi Matsuda····· 21
·····

Editor : Tatsuo Mochizuki

Associate editors : Yasuji Yamazaki, Yuichi Matsuda, Kanji Takeda,
Hiromi Ohtsuka, Seiyu Nogami, Hiroshi Nakajima

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : Mukai Bldg. No. 23, Kanda Nishikicho 3-Chome, Chiyoda-ku, Tokyo.

.....

(April, 1968～April, 1969)

President : Yukio Mita
Vice-Presidents : Ichiro Yoshizawa, Kyuya Fukata
Honorary Secretaries : Unpei Fujii, Hiromi Ohtsuka
Honorary Editor : Tatsuo Mochizuki
Honorary Librarian : Kyuya Fukata
Honorary Treasurer : Toru Iino
Auditors : Yaichi Hotta, Mamoru Makino

.....

Committee

Unpei Fujii
Hiromi Ohtsuka
Kanji Takeda
Yoshio Nagao
Takeo Yoshino
Yoshio Hamano
Yasuji Yamazaki
Toru Iino
Koichiro Hirotani
Yoshio Ohnuki
Masahiro Ogata
Seiyu Nogami
Sadao Tanbe
Hideki Miyashita
Sachiko Kawamori
Hiroshi Nakajima
Nobuko Ogura

.....

Council

Saburo Matsukata
Tatsumi Shimada
Kenichi Nakaya
Hirokichi Tatsunuma
Gen Fujishima
Shotaro Mizuno
Matsuo Mitsui
Kohei Watanabe
Kenji Ishihara
Kyuichiro Satoh
Tatsuo Mochizuki
Shuji Tsuda
Yukichi Nakada
Junjiro Muraki
Taian Katoh
Kanjiro Numakura
Katsuro Ohara
Kanji Gotoh
Hidegoro Itoh
Chushiro Takayama

.....

Chairmen of Local Sections

Akita : Hiromasa Aramaki
Miyagi : Tokuro Date
Echigo : Gen Fujishima
Shizuoka : Tomosaburo Yamamoto
Tokai : Masao Kumazawa
Toyama : Yukichi Nakada
Sanin : Osamu Oda
Kumamoto : Koichi Mitani
Yamagata : Kanji Gotoh
Fukushima : Yajuro Itoh
Yamanashi : Matsuo Mitsui
Shinano : Shigeki Tsukamoto
Ishikawa : Yujiro Kobayashi
Kwansai : Shotaro Mizuno
Fukuoka : Daisuke Suematsu
Higashi Kyushu : Akito Noguchi

Three Ascents around Rosh Gol

Hitotsubashi University Hindu Kush Expedition 1967

By Yukitoshi Sato

One never knows when the blow may fall. And all of a sudden it fell over us at the second rope pitch in the couloir in the Northern Cwm of Rosh Gol glacier. A stone came falling with a earsplitting sound and struck Ikechi on the left thigh to disable him from sharing his important role in the expedition. The blow threw another burden on us; youngest Miyatake was to accompany the injured up to Karachi to send him off to Japan.

We lost two active members, consequently only four were available excluding the leader and the doctor. Coward or not, we weren't inclined at all to approach to the ominous Cwm, or even to Saraghrar itself now that with diminished power of the party.

Viewed from the upper stream of Rosh Gol glacier which takes its rise in the north, on the right bank there soars a massif of Languta Barfi, Shachaur, Udren Zom and an unnamed beautiful six-thousander (we named Nohbaisnon Zom after the name of a glacier near by) in a line from north to south while voluminous Saraghrar group occupies the left bank of Rosh Gol.

Among these neighboring peaks, Nohbaisnon Zom particularly attracted our interest, and all the more after the setback. It was a magnificently beautiful peak of 6600 m in altitude with triple summits.

There was an outstanding col between Nohbaisnon Zom and Udren Zom to the north of the col, which afterwards we named Udren An (Udren Pass). From Udren An a gradual glacier was descending down eastward to join the main stream of Rosh Gol at the point nearly two kirometers down the stream from our Base Camp. Two factors; severe beautifulness as well as the virginity of Nohbaisnon Zom and the light aspect of Nohbaisnon glacier with its alluring gradual slant in contrast with that ominous Northern Cwm, simply urged us to do away with depressing mood caused by the accident.

We decided to aim at Nohbaisnon Zom in first place, for a change of air in

a way. And anyhow it was the number one among the rare virgin peaks around Rosh Gol. Taking notice of Udren An, moreover, it was very easily recognized to be an apparent clue to the ascent of Udren Zom too, the south peak (7,050 m) of which, remaining untrodden, naturally became our second aim.

So on July 23, we set up Camp I on the col, and the assault on the new aims was commenced by the four—K. Kurachi, Two Satos and H. Hara. Camp I being situated at 5,300 m right beneath the extreme northern one of the triple summits of Nohbaisnon Zom to which there seemed to be no possibility of direct access because of the vertical precipice from its top, we were willynilly to take a roundabout route; descending from the col halfway down the glacier on the opposite side of Nohbaisnon glacier toward the Atrak glacier and then traversing to the long ridge leading to the foregoing northern summit which was the highest next to the main summit in the extreme south.

The harder-than-anticipated route was finally opened to the ridge after a previously-opened route on the upper part of the same slope was smashed easily by an ice block avalanche which almost involved us by half an hour difference or so.

The route up to the Camp II cost us five days and considerable quantity of fix-ropes (approx. 400 m), rock & ice pitons (approx. 20) and some snow bars while it forced us a tensional climb on the green ice, the steep slope at an angle of 40°~60° or with cornices. The Camp II, 5,600 m, was set up on July 28 at the narrow site on the ridge, which commanded a fine panorama of Hindu Kush giants, ie, the paramount Tirich Mir, Noshaq, Istor-o-Nal and so on with a crepe high way belt of Atrak glacier winding among them.

Given the hight difference of approximately 1,000 m and surplus getting over of the northern and middle summits prior to the final one, the assault from the Camp II might be rather reckless. But with an anticipation of loss of time and probable danger in advancing another camp forward beyond the first summit (northen summit) on all the more difficult and thiner steep snow ridge up to the first summit, we let the Camp II be a final one for the assault and spared another day preparing the assault what with fixing ropes on the necessary part and making a snow hole for emergency on the flat place a little beyond the first summit.

Despite all these efforts our first assault on July 30 was called off on account of sudden change of weather. Seeing bad weather seemed to continue for some time and there remained little foodstuff at the Camp II, we went down even to

the Base Camp on the Rosh Gol with a good grace partly because we wanted to take a good rest prior to the successive ascents of Nohbaisnon Zom and Udren Zom.

On August 3, we came back again to the Camp II and opened fire of the final assault on the summit.

On August 4, we left the Camp II at 5 : 30 a.m. and got over the first summit very easily with the aid of fixed ropes. Up to the col between the first and the middle summit we proceeded quite well without a hitch alternately on both sides of the ridge, but from the climb up the middle summit forward our advance was slowed down gradually with troublesome penitent snow or ice-covered steep slope. It was already around 4 : 30 p.m. after numerous ups and downs, getting over the last long slope and the climax of the extreme snow pinnacle when we won Nohbaisnon Zom at long last. We had a terribly hard bivouac on that night near the col between the final and the middle summit and staggered back to the Camp II around 3 : 00 p.m. on the following day.

On August 6, we withdrew from the Camp II on the west ridge of Nohbaisnon Zom, removing the fixed ropes on the way down to the Camp I on the col. After the success of ascent of Nohbaisnon Zom which had turned out to be more difficult than we anticipated, we found ourselves with surging impetus for another successive ascent of Udren Zom.

Immediately on withdrawal to the Camp I we set forth for the next action, with the Camp I being a common camp for Udren Zom. The situation of Udren Zom is very similar to that of the previous peak; viewed from the Camp I on the col (Udren An) to the north, on the line direct to the Udren Zom there are some negligible ups and downs for some distance and of sudden there soars a problematical buttress of around 800 m high, from which forward a seemingly-simple snow ridge extends to the summit as far as visible part goes.

The result of reconnaissance on August 7, with the foregoing buttress proving to be impossible to get over, made us heading for a descendent ridge from the head of the buttress toward the Atrak glacier just same as the west ridge of Nohbaisnon Zom. To creep up to the ridge we had to climb a long zigzag climb of over 500 m in height difference on the dangerous steep slope, where we set ropes fixed (approx. 300 m in all). The ridge was so thin, so-called a knife-edged ridge and Camp III was set up at a narrow site on August 10 (6,300 m in altitude) while Camp II had been previously set up below the base of the buttress (5,400 m).

On August 11, we set forth at 6 : 00 a.m. for the assault to the summit. The

climb was comparatively easy on the whole except when were compelled to climb by "a man at a time" using a climbing rope on the two occasions; the one, getting over a steep ice wall of 100 m high crowned with a cornice, and the other near the summit, traversing a gradual slope covered with terribly hard ice. Anyhow we won the second game without a hitch at early 1 : 30 p.m,.

We triumphantly marched back to the Base Camp, when Miyatake and Ashraf happend to come back, relieved from the hard duty of sending injured Ikechi safely off to Japan from Karachi.

We had then less than two weeks left to spare for mountaineering.

—Should we try again Saraghrar unyieldingly, or should we earmark the rest of the days for the climb appropriate to youngest Miyatake who had not partaken of the preceding two ascents unfortunately and had hardly got acclimatized enough for such a big peak as Saraghrar? We took the latter choice, aiming at unnamed six-thousanders near Dru at the lower stream of Rosh Gol. The conclusion, however, drawn from the reconnaissance by Y. Sato and Y. Miyatake was that these six-thousanders, Atrak Zom, Mutchiri by name seemed rather difficult of access because of their solid barriers of rock wall at the lower part and appeared to require us more time and iron materials than we expected.

Suddenly a curtain of an unexpected finale rose. When the two in despair turned about toward the south side of Saraghrar glaring in amber light of sunset, the peak viewed from the new visual angle looked so gentle and completely without that ominous countenance we had seen from the northern side. So we did spare a day for the reconnaissance probing the final possibility, and found there was a hidden branch valley which turned out to be one of two branches of the southern valley joining Rosh Gol at Dru. And the hidden valley had a narrow hollow in its innermost end, from which a ragged glacier, and then steep snow slope and the final part of steeper icy slope led diagonally to the south peak of Saraghrar while the hight difference between the hollow and the summit was roughly 3,000 m.

We tried our fortune on this route of direct steep *slope*, or perhaps we would do better to say the southern *face*, with less than ten days available. Immediately the Base Camp was transfered to Dru (3,200 m) and the Advance Base Camp was set up at the hollow on August 19, from the day on we worked as hard as we could thinking nothing but to mount upwards. Successively Camp I and Camp II were set up on August 20 and 22 respectively at a tremendous speed, which we owed entirely to our adequate acclimatization acquired from preceding

ascents.

The extensive southern valley of Saraghrar is divided by an outstanding big ridge (we named Central Ridge) into two branches; the right one is an active glacier with a vicious look which seems to lead nowhere but to come up to the desperate wall below the south peak, while the left one on which we took the route was comparatively gentle and is absorbed into steep but smooth slope.

Central Ridge is a big rocky ridge in its lower part, but is gradually dwindling and finally disappears. The Camp II was located at 6,300 m on the Central Ridge which became obscure around there and a two-men tent was so helplessly clinging to the knife-edged ridge that it was bound by a rope to the rock near by lest it should be fallen over the precipice down to the foregoing right branch glacier. Y. Sato and H. Hara occupied the Camp II which happened to be qualified as the final one in the light of the expiry of given time.

On August 23, the two started around 5 o'clock in the early morning when the first reddish tint was about to reflect on the mountains neigbouring and in the distance. From the very beginning we faced the difficult climb of green-ice slope which cost us nearly 6 hours and of sudden there emerged a relievable flat plateau, but again, what was worse, rock & ice-mixed steep face blocked our way and it extremely exhausted us. we decided around 3 : 30 p.m. to bivouac on a rock shelf. The bivouac was hard one with severe coldness and headache. On the following day we left unnecessary materials behind and clambered step by step up the icy face. Abruptly we felt ache on the face flapped by snow flakes blown by strong north wind. And there lay no more slope to climb.

Constituent members

Kenichiro Yamamoto	(33),	graduate, leader
Kei Kurachi	(28),	〃
Yukitoshi Sato	(25),	〃
Hisanao Sato	(25),	〃
Hirosada Hara	(25),	〃
Akihiro Ikechi	(25),	〃
Yukihisa Miyatake	(21),	student
Yozo Suzuki	(36),	doctor

Editor's Note(1) :

Reacting to the overall prohibition of mountaineering in Nepal and the similar situation in Karakorum, there has been a boom of Hindu-Kush expeditions in these

several years. Admitting there cannot be so easily found attractive alternatives, we cannot deny that there are certain trend of preference for easiness and handiness to be seen, which is the very antithetical concept of what we call expedition or exploration.

Besides the above-reported expedition there were several expeditions to Hindu-Kush from Japan in 1967, the summary of which records are given for reader's reference as follows.

(number in parenthesis indicates altitude)

Koh-i-Yajun (newly named) 6,024 m.

Hiroshima University Hindu-Kush Expedition

July 11, left Kabul; Via Anjuman-Pass, July 20, reached Nao, the innermost village in Munjon basin; July 25, set up Base Camp at the end of Yajun River (3,100 m) and successively Camp I (4,200 m), Camp II (5,200 m); August 3, the first ascent of Koh-i-Yajun by Akio Funabashi and Masanori Ishida

Koh-i-Bandakor, 6,843 m.

Chuo University Alpine Club Hindu-Kush Expedition

July 7, the sixth ascent of Koh-i-Bandakor by Kuniharu Ichikawa and Yasunori Hirota; July 16, the third ascent of Punta Torino (6,200 m) by Hiroshi Katayama, Kuniharu Ichikawa and Yukinori Isobe.

Tirich Mir (7,708 m)

All Japan Hindu-Kush Expedition

July 16, set up Base Camp (4,000 m) on the Tirich Upper Glacier and successively Camp I (4,700 m), Camp II (5,000 m), Camp III (5,500 m), Camp IV (6,000 m), Camp V (6,500 m); August 12, four members tried the ascent in vain; The party tied up with the Austrian-German two-men party, and August 19, Masaaki Kondo and Kurt Diemberger succeeded in the third ascent of Tirich Mir main peak—the second ascent had been made by Czech party on July 19 of the same season. Previously the second ascents of Achar Zom II (6,300 m) and Dir Gol Zom (or Pyramid, 6,778 m) had been made; the former by K. Diemberger, Masazumi Nishina and Teisho Takahashi (55 years old) on August 11, the latter by K. Diemberger, Dietmar Proske and M. Kondo on August 14.

The North Peak of Saraghrar (7,338 m) and other peaks around Niroghi Glacier and Hushko Glacier

Two-men party of Niigata University Mountaineering Club

June 27, left Chitral; July 3, reached Gram Shal in Ziwal Gol; July 4, set up Base Camp; July 5, Camp I; July 7, 8, the second ascent of Sucai Zom

(5,972 m).

July 15, set up Base Camp (4,200 m), on Hushko Glacier; July 18, Camp I (5,400 m); July 20, climbed an unnamed peak (6,421 m); July 22, Camp III (6,300 m) while Camp II (5,800 m) had been set up by a porter previously; July 25, from Camp III succeeded in the ascent of another unnamed peak, c. 7,061 m which they named "Hushko Zom"; July 26, moved their only one tent up to 6,500 m as Camp IV, and finally on July 27 won the second ascent of the North Peak of Saraghrar, 7,338 m—the first ascent having been made by the Italian party led by Fosco Maraini in 1959; July 28, descended from Camp IV down to Base Camp.

These above-mentioned ascents by Shiro Yokoyama and Koichiro Umezu with only one high-altitude porter deserve considerable attention seeing the small scale of the party as well as the state with sole tent and their energetic, restless activities without a hitch.

Lunkho II (c. 7,020 m)

Masataka Suzuki (graduate of Tokai University)

Shigemitsu Tanaka (graduate of Hosei University)

July 13, left Chitral; July 17, entered Uzhnu Gol (Uzhnu Valley); July 20, established Base Camp at 3,600 m on the plateau at the junction of Chutidum Glacier and Kotgaz Glacier; after some reconnaissances, from the Base Camp they started on June 30 and having taken the route by way of a couloir, continued for seven days of bivouac to climb to the summit, winning its first ascent on August 5, and got back to the Base Camp on August 9. August 14, withdrew from the mountains.

Some ascents around Buni Zom

Tokyo Agricultural University Hindu Kush Cultural Expedition joined with two members from the Osaka Prefectural University

July 22, left Chitral; having entered Golen Gol, and followed it eastward to establish Base Camp at 3,500 m on July 27 and Camp I at 4,300 m on July 29 respectively, August 2, Minoru Tanaka, Hideo Yuri and Ichiro Ishii left Camp I and, having a bivouac at 5,300 m, stood on the summit of Ishpel Zom (6,100 m) on the following day, the ascent being the first one.

August 5, in view of the ascent of Chakhori Zom (c. 6,000 m), Advance Camp was established at c. 4,600 m on Chakhori Glacier; having tried tentative ascent for three times on August 6, 7 and 13, Mr. & Mrs. Kogo, Tokuhiko Nemoto, M. Tanaka and I. Ishii climbed to the summit for the first time on August 14.

Prior to the above ascent, T. Miyamori, the leader of the expedition, climbed Makho Zom (c. 5,000 m) partly with the intention of reconnaissance.

August 18, re-entered Chitral and the party, having been divided into smaller parties, achieved the aglicultural research.

Upper Hindu Raj on the east of Yarkhun River

Rock Climbing Club II Chitral Expedition

July 10, entered Chitral and, having marched alongshore of Yarkhun River, on July 21, established Base Camp on the plain of Gulpigul which was sited beneath Tuiyo An (Tui Pass, 4,499 m). They, M. Ebihara and Y. Takahashi, with the intention of reconnaissance for the ascent of Tui Zom (Tui Peak, 6,672 m), scaled Tuiyo An on July 22 only to find a desperate northern side of Tui Zom with its enormous wall which was approximately 2,000 m high at an average angle of 70° with hanging ice blocks here and there. Instead, they explored and won some new ascents of unknown mountains which lie northwest of Tuiyo An—Shar Zom (meaning a Black Peak, c. 4,960 m) on July 23, I-Kai Zom (meaning an Eldest Sister's Peak, c. 5,270 m) on July 26, Puti Zom (meaning a Lovely Peak, c. 5,475 m) on July 29. These peaks were newly named by them and the nomenclature of the last one is particularly romantic seeing that both climbers happened to agree to attach "Puti Zom" with the name, missing their fiancées who had been long waiting for them to return home.

Huayna Potosi 6,095 m

Three women's expedition to Bolivian Andes

By Michiko Sekita

The Edelweiss Club (one of the female mountaineering clubs in Japan) sent to Bolivian Andes a small expedition titled "Japan-Bolivia Friendship Party, 1967" consisting of Toshiko Shimizu, Masako Abe and myself as the leader.

Prior to the ascent of our main aim, Huayna Potosi in Cordillera Real, we were to do some preliminary exercise in the eastern region of Raurani group in the light of conditioning and acclimatization. In an hour driving in a jeep from La Paz on June 17, we arrived on the lake Kahla-Khota, where we commenced to climb, establishing Base Camp at 4,770 m. And by June 23, we won the

summits of Wila Llojeta (5,244 m), Jachcha Pata (5,420 m) and a nameless peak (5,300 m) successively.

After one week sojourn at La Paz, we moved to Zongo Paz (4,500 m) on July 1 and set up Base Camp at 4,900 m, where we had to stay on the following day owing to the rain and the fog. On July 3, we left the Base Camp for the summit of Huayna Potosi and crossed the snow field and snow bridges while we had to clear the barriers of crevasses one after another. It getting dark when we were climbing at around 5,700 m., we dug a snow-hole for bivouac. On the following day we reached the summit shaping beautiful snow ridge at 3 : 00 p.m. We had hardly begun to descend when we noticed black thunder clouds spreading in the sky above us and it began to snow. An earsplitting thunder bolt which burst very near, awfully frightened us three, when, for an instant, we somehow felt an ache on the head and on the whole body. We hastened to descend for the Base Camp, but ceaseless snowfall and creeping darkness forced us, who often lost the route, to decide another bivouac again at the altitude of 5,600 m. The bivouac was of a toughness with severe coldness and heavy wind never experienced by three of us in our life, and we couldn't sleep, sitting up whole night. Unbearable coldness drove us out of the bivouac site so early next morning and we finally staggered back to the cozy Base Camp to be relieved from the tension for more than fifty hours.

Nevado Jirishhanca Grande, 1967

——the third ascent from new route and some other ascents in the vicinity

By Hajime Tanaka

Cordillera Huayhuash is as popular as any in Peru Andes ranking with Cordillera Blanca, and Jirishhanca Grande(6126 m)particularly among many attracts much attention of "Andinists" with its steepness and the beautiful spire-shaped look despite the modest hight as compared with many superiors in Andes. The peak was for the first time conquered by an Austrian party led by Dr. Heinrich Klier in 1958 after previous unsuccessful trials by the same party in 1954 and 1957 and again made its second ascent in 1966.

We, with the title of expedition, "Tokyo University of Agriculture and Technology Andes Expedition, 1967" aimed at the third ascent via new route seeking its first breakthrough on Jirishhanka Glacier which lay north of the peak.

It was on June 25, that we established Base Camp at the altitude of 4,000 m between the two lakes, Mitu Kocha and Nina Kocha, where overwhelmingly soared Jirishhanca Grande throwing its spire high up in the sky. From then on, more than fortnight, in struggle with physical hardship as well as mental oppression caused by the terror of always collapssing glacier and horrifying steep ice slope, we toiled to open the route and, having set up Camp I at 4,700 m on the glacier, furthermore continued to make the route upwards from the base of the soaring northern side up to the upper part of the Northeast Ridge, setting ropes (c. 600 m) fixed, while 200 meters of ropes had been used at the hanging glaciers.

The first attack party left the Camp I on July 13 only to reach the altitude of 5,800 m after the struggle for 6 days in snowfall, with hard ice and steep rock wall, and, having consumed all the victuals and fuels they had, they retreated down to the Base Camp, utterly exhausted, on 19 th. This setback costed us 10 days in the aggregate in vain. In view of the time left to spare there seemed to be only one chance given for the assault and we knew the grave meaning of the more frequent snowfall at the altitude of the Base Camp and the gradually increasing coldness at night day by day in consideration of several night bivouacs to be required for the summit.

On July 24, Tomoaki Kato and myself set forth from the Camp I and commenced the assault under oppressive mood. We faced the difficulty from the beginning, for the previously-fixed ropes were, being buried with snowfall and new ice, not available, and consequently we were willynilly to climb cutting steps from scratch. Ice, snow, rock and ice again, they alternately appeared and often blocked two of us, heavily laden with more than 20 kgs. of luggages prepared for several days' ascent. We got up to 5,500 m in one day which had been gained by the first party spending three days. On the following, wind blew severely from the morning. We were forced to clamber on the steep slope with hard surface utilizing two fore-protruded nails of crampons, and this gave constant pains to the ankles. In the afternoon the weather was aggravated all the more, and we could not see 10 meters ahead. Severe coldness was afflicting us through cold proof wears at night.

On July 26, wind had been blowing whole night and did not cease on the following morning. When we got over the highest point which the preceding

party had reached, rocks disappeared and we were to follow unstable thin snow ridges which overlooked far beneath on both sides. We were climbing snow ridges and snow walls alternately, being always bathed in the snow shower, with snow flakes furling blown by strong wind around us. The bivouac at 6,000 m on the completely exposed snow ridge was of hardness, the cold of which, as though, had frozen everything.

The weather began to recover next morning, wind having ceased blowing, and the eastern sky bore reddish tint with the moon above Jirishhanca Grande after long absence. The sky clearing up without a cloud, I thought then for the first time the air was really transperant and the very summit lay a little ahead of us, just 200 meters apart, glaring silvery and cold reflecting moonbeam. Then, unawares, all the surrounding was in red and gradually absorbed in the diffiused amber light involving Yerupaja, 6,634 m too, right in the front. Ascending the steep snow face at an angle of 60°-70°, we followed a little upward knife-edged snow ridge for some 10 meters, and the zenith was there under our feet.

We descended back to the Base Camp safely after two days later, in the afternoon of July 29.

Other outcomes of the expedition are as follows:

the second ascent of Paria, 5,172 m, July 10,
by H. Furuhata, N. Kobayashi, Y. Wachi, K. Iwatani.

the third ascent of Nevado Ninashhanca, 5,637 m, July 21～23,
by H. Furuhata, Y. Wachi.

the first ascent of Jirishhanca Chico Oeste, 5,270 m, July 18,
by H. Furuhata, K. Iwatani.

the fifth ascent of Jirishhanca Chico, 5,467 m, July 27,
by K. Iwatani, F. Oestermer (a member of "Club Aleman en Santiago")

the second ascent of Jirishhanca Chico Oeste, July 27,
by N. Kobayashi, H. Alvaiza (portor)

the fourth ascent of Nevado Ninashhanca, August 2,
by K. Iwatani, F. Oestermer.

the ascent of Carhuaraju, 5,002 m, August 5,
by H. Furuhata, T. Kato.

Editor's Note(2) :

Mostly due to the same reason as that of the boom of Hindu Kush expeditions as previously mentioned in the preceding editor's note and partly due to the

increasing preference among mountaineers for difficult climb of rock and ice (especially, the latter) at comperatively high altitude, many expeditions were sent from Japan also in 1967 to Andes as listed below.

La Expedicion Cientifica a Los Andes Colombianos de La Universidad de Shizuoka, 1967

Pico Colon	5,775 m	July 13,	4 th ascent	by R. Yamamoto, K. Ohta, H. Ando
Pico Simons	5,660 m	July 20,	3 rd 〃	by Yamamoto, Ando
Pico El Professor	5,370 m	July 20,	2 nd 〃	by Yamamoto, Ando
*Nevado Tesoro I	5,250 m	July 21,	1 st 〃	by Ohta, T. Wada
*Nevado Tesoro II	5,230 m	July 21,	1 st 〃	by Ohta, T. Wada
*Nevado Tesoro III	5,225 m	July 21,	1 st 〃	by Ohta, T. Wada
Pico Nuena Vista	5,230 m	July 21,	2 nd 〃	by Yamamoto, Ando
Unnamed	5,040 m	July 22,	1 st 〃	by Yamamoto, Ohta, Wada
Unnamed	5,070 m	July 22,	1 st 〃	by Yamamoto, Ohta, Wada
*Pico Shizuoka VI	5,020 m	July 22,	1 st 〃	by Yamamoto, Ohta, Wada
*Pico Esmeralda	4,930 m	July 24,	1 st 〃	by Yamamoto, Ohta, Ando, Wada
Pico Simons	5,660 m	July 25,	4 th 〃	by Ota, Wada
Pico Oriente de Simons	5,490 m	July 26,	1 st 〃	by Yamamoto, Ohta
*Pico Trident	5,415 m	July 26,	1 st 〃	by Yamamoto, Ohta
Pico Bolivar	5,775 m	July 28,	6 th 〃	by Yamamoto, Ota, Ando, Wada
Pico Gansser	5,600 m	July 30,	5 th 〃	by Yamamoto
Pico Colon	5,775 m	July 31,	5 th 〃	by A. Kokue, Wada
Pico Nieve de Noboba	5,310 m	July 31,	2 nd 〃	by Yamamoto
Pico Ojeda	5,490 m	July 31,	8 th 〃	by Ohta, Ando
Pico La Reina	5,535 m	Aug. 1,	8 th 〃	by Ohta, Ando

The peaks with * on their head were those newly named by the expedition.

La Expedicion Japonesa a Los Andes Peruanos 1967

—Cordillera Blanca

Nevado Huantsan (south peak. 5,915 m), June 23, 1 st ascent

by T. Hayashi, M. Nishigoori, K. Kobayashi, Y. Komatsu, A. Miyashita

Nevado Abeja (5,550 m), June 20, 1 st ascent
by Y. Yokochi, Y. Komatsu

Nevado Rurec (5,320 m), June 24, 2 nd ascent
by A. Yamada, Y. Komatsu

Nevado Kiso (5,406 m), June 27 1 st ascent
by A. Miyashita, Y. Komatsu

Nevado Yauraraju (5,676 m), June 21, 25, 2 nd & 3 rd ascent
by A. Miyashita, K. Kobayashi M. Nishigoori, K. Hamada, Y. Komatsu

Santa Cruz Norte (5,829 m), July 24, 1 st ascent
by T. Hayashi, A. Miyashita, M. Nishigoori, K. Kobayashi
A direct route was taken on the west face to follow the west ridge.

Expedicion Japonesa Tokyo-Hakuryo-Kai a Los Andes Peruanos
—Cordillera Huayhuash

Chuglla Chico Norte (5,513 m), June 23, 4 th ascent by T. Ichikawa, M. Honda, Akino

Cerro Rosario Norte (5,596 m), June 25, 2 nd ascent by T. Arai, Akino

Ceria Centro (5,543 m), June 27, 2 nd ascent by M. Honda, T. Miyata

Yerupaja Chico (6,121 m), June 14, 2 nd ascent by M. Honda, Akino

Santa Rosa (5,085 m), June 16, by T. Ichikawa, M. Honda, S. Callupe

Tokyo Midori Alpine Club Andes Expedition 1967
—Aconcagua, South Face (French Buttress)

January 15 Base Camp at the base of the wall
24 Camp I at 5,400 m
30 Camp II at 5,800 m

February 7 Camp III at 6,300 m
10 T. Aoki, N. Masuyama, M. Nozaki and T. Ohashi left Camp III and, after a bivouac at 6,600 m, reached the summit at 3 : 00 p.m. of 11 th.

Tokyo University of Agriculture and Technology Andes Expedition, 1967
—Cordillera de Urubamba

After the activities in Cordillera de Huayhuash, they entered Cordillera de Urubamba and got some ascents as follows.

Bononia (5110 m) August 30, by H. Furuhata, T. Kato.

Marconi (5340 m) September 4, by N. Kobayashi, Y. Wachi.

Veronica (5750 m) September 6, by K. Iwatani, H. Tanaka.

Hokkaido Alpine Association Alaska Expedition, 1967

McKinley via Central Ridge of the South Buttress

By Takao Sasaki

May 2 nd — Base Camp was established at the junction of Kahiltna Glacier and Northeast Kahiltna Glacier at the altitude of 2,700 m.

7 th — Camp I, 3,300 m. at the base of Western Rib of the South Buttress.

8 th — Members were divided into three parties which respectively bore the work of ferrying stores and equipments from Base Camp to Camp I, from Camp I to Camp II and the construction of a route in the couloir which ran up to the Central Ridge from around the site of Camp II. Camp I was located a little below a small ice fall which was sole one on the glacier and above the ice fall there lay wide basin at the glacier headspring, on the innermost left of which more-than-2,000 meters-high South Buttress soared overwhelmingly.

10～13 th — The work of ferrying went on smoothly while the problematical couloir, the clue to the success, was surmounted. On 13 th, all eight members gathered at Camp II, 3,500 m with all the necessary equipments and foodstuffs. Getting over the couloir, for the first time one stands on the crest of the Central Ridge itself, where Camp III was set up at 4,050 m on the rock shelf at the foot of an overhanging pinnacle.

14 th, 15 th — Standstill owing to the snowfall.

16 th — All the three parties were mobilized for the work of ferrying between Camp II and III, and two members of the construction party occupied Camp III while others descended to Camp II to stay still there.

17～19 th — Four members were constantly engaged in ferrying and other

four in the construction of further route.

20 th Four members left Camp Ⅲ to inhabit Camp Ⅳ, 4,350 m on the first big snow field.

23 th All except the leader who stayed at Camp Ⅱ, worked to establish Camp V at 4,700 m on the narrow shelf barely enough to accommodate a tent, the shelf having been scooped out on the steep ice slant at an angle of 40°.

Four members occupied Camp V preparing for the assault.

24 th Standstill due to snowfall and danger of avalanche.

25 th Four members, A. Kawagoe, M. Syukuin, T. Yamanaka and H. Ujiie set forth from Camp V at 5 : 00 a.m. and, having grappled with barriers of rock and ice which confronted them alternately, they reached the second snow field to bivouac there (5,500 m).

26 th Two of them were forced to stay there, severely afflicted with the effect of the altitude. Accordingly A. Kawagoe and H. Ujiie were to bear the burden for themseeves. They, at first, traversed upwards an ice face for five rope pitches and then entered a snow gully, climbing in it for about 400 m to fling on the central arête again. Encouraging themselves depressed with fatigue and the effect of the altitude, they trudged on a snow ridge and again faced an ice gully which exhausted them all the more with step cuttings. Of sudden the slant became gradual and before long they stood on the summit. The time was 6 : 30 p.m.

The First Ascent of Mount Kobe (Aello Peak), Alaska

By Mitsuhiko Ohno

Tatsuo Miyazaki led the expedition party which we called "1967 American Japanese Joint Expedition", organized by "The Mountaineers" of Seattle and "The Hyogo Prefecture Mountaineering Association". We happened to hold in 1967

the centennial celebration of the exploitation of Alaska as well as Hyogo prefectural administration and the opening of the Kobe port, and the tenth anniversary of the Seattle-Kobe sister city affiliation. So we were planning to go on an expedition to Alaska in commemoration of them. This party consisted of 15 Americans and 16 Japanese as follows:

(Japanese Party) Tatsuo Miyazaki, superintendent of the party; Shuji Tsuda leader; Hiroshi Fujita, deputy leader; Shigeo Fujita, Kunikazu Hagihara, Noburu Morikawa, Takehiko Matsumoto, Mitsuhiko Ohno, Ryu Nakajima, Tetsuo Kubota, Takami Shimoyama, Yoshio Ohnishi, Tetsuya Inatome, Sohichi Araki, Hiromasa Haneda, Shuzo Okamoto.

(American Party) Alvin E. Randall, leader; Claude Glenn, Frances Randall, Herbert Staley, Jack Berrian, Robert Basset, Richard Hickock, Norman Benton, Edward Boulton, Roscoe Carnahan, Gerry Burdette, Galen McBee, Ramona Hammerly, Terry Hirni, Peter Haase.

Our plan was to attack an unclimbed, unnamed peak on the west extremity of a long arête leading to Mt. Bona (5,029 m), seeking almost the same route via the Russell Glacier up to Camp Ⅲ as the one taken by Allen Carpe's party in the first ascent of Mt. Bona in 1930.

The proposed peak, 4,403 m which we named Mt. Kobe afterwards had some attendant peaks of roughly same hight, consequently we decided to win all the peaks so that probable confusion might not occur in the future.

We gathered at Seattle on April 5, where we had a pleasant time being warmly received by many people.

From Fairbanks, driving for seven hours via Alcan Highway, We reached Northway near the Canadian border. On April 13, after three frustrated days of bad weather, we could finally fly to land on the east tributary of the Russell Glacier, where Base Camp was sited at 2,230 m. Though we could not see our aimed peaks, we were immensely moved by the splended view of great ice-falls, crevasses, avalanche spreading north of Mt. Bona. It proved to be clear from our survey that Russell Glacier with width of 1,700 m was flowing from Mt. Bona at constant speed of 6 m per month.

Continuous snowfall for several days since our landing ceased at last, although it was still blowing a little. It cleared up and the temperature fell. Advance camps were set up one after another without a hitch thanks to the fine weather. Nearly three kirometers upwards from the Base Camp on the flat glacier, a deposit site was decided at 2,380 m, where the route turned west and having got

over the ice-fall area ranging about two kirometers by way of a couloir, we got to some flat plateau at 3,020 m on the ridge dividing east and west tributaries of Russell Glacier, where we set up the Camp I, while Camp II and Camp III were sited at 3,500 m. and 3,880 m respectively, the latter being located on the col at the shoulder of the west peak of Bona.

April 19, Morikawa, Nakajima, Haneda and Haase ascended 3,306 m peak which was just above the Camp I on the ridge.

Successively, the fifth ascent of Mt. Bona was made on April 22 by Ohnishi, Kubota and 5 Americans via West Bona 4,773 m.

Meantime, the route from Camp III forward traversed a little downward above the dislocation at the innermost part of the west tributary of Russell Glacier, and Camp IV was set up at 3,730 m. as the final one right beneath the couloir descending from between Peak II and III.

From the Camp IV, at 6 : 20 a.m. on April 26, we set forth at long last for the summit, 4,403 m, and began at 7 o'clock to grapple with the problematical couloir on the north wall. The members of the assault were K. Hagihara, T. Matsumoto, M. Ohno, H. Staley, E. Boulton and G. McBee. Having struggled whole day with the steep ice wall, somtimes blocked with huge crevasses or hard ice, we managed to get over this severest barrier to reach the very ridge leading to a series of our aimed peaks. After a while around 6 : 00 p.m., we decided to call it a day, digging a snow hole for bivouac. On that night the temperature fell down to 32 degrees below zero, which brought terrible burden of long, cold bivouac on us during whole night. On the following day, quite exhausted with the hard bivouac of previous night, we trudged slowly on the ridge and finally stood on the summit, 4,403 m at 8 : 21 a.m. The American party had previously suggested us in Seattle to name it "Mount Kobe" after Kobe City, but after all the peak was formally named "Aello" by the American authorities concerned.

Afterwards, successive ascents were made as follows.

April 27, the second ascent of "Mount Kobe" by A.E. Randall and N. Benton.

April 28, the first ascent of Mt. Kobe III, 4,039 m. by H. Fujita, M. Ohno, Mr.& Mrs. Randall, H. Staley and R. Hammerly.

April 29, the third ascent of "Mount Kobe" by N. Morikawa, R. Nakajima and T. Kubota.

April 30, the forth ascent of "Mount Kobe", the first ascents of Minor Peak and Mt. Kobe II, 4,252 m. by T. Matsumoto, T. Inatome, S. Araki, S. Okamoto

and H. Haneda.

May 3, the sixth ascent of Bona by H. Fujita, Morikawa, Nakajima, Hagihara, Mr. & Mrs. Randall, Hammerly and Staley. And five of them reached Mt. Churchill (4,766 m).

May 8, the first ascent of East Wedge Peak (3,637 m) by K. Hagihara, and H. Staley.

May 7, the first ascent of Satsuki Peak (2,934 m) by Shimoyama, Inatome, Haneda and Okamoto.

May 8, the ascent of Friendship Peak (3,158 m) by the above four.

Hess Mountain in Alaska, 1967

By Junji Nakamura

Tokyo University Alaskan Research Expedition 1967 was organized and sent by the Tokyo University Ski and Alpine Club and the Tokyo University Senior Alpine Club.

The main projects of this expedition party was to climb Hess Mtn. (3,640 m) from the south side and make some scientific field surveys such as night airglow observation by multicolour photometer in Alaska and Canada, geological surveys of Birch Creek schist at Hayes Mountain region and some research of heart physiology at high altitude by electric cardiograph.

The eight members were as follows :

J. Nakamura, the leader (43 years of age) ; Y. Mikami, the deputy leader (30) ; K. Okai, surgeon (31) ; N. Morita, Student of graduate school (26) ; T. Inagaki, Student (24) ; O. Matsuda, Student (23) ; R. Motogi, Student (22) and K. Denda, Student (22).

On May 20, 1967, two members left the port of Wakayama, while three members from the port of Kobe on May 30 and the last three flew from Haneda airport on June 16. We gathered again at Wilson Air Service at Gulkana with about one and a half tons of scientific instruments, climbing equipments and foodstuffs.

On June 17, We landed on West Fork Glacier by Mr. Wilson's sesna, and set up our base camp at an altitude of 1890 m.

After three days of reconnaissance, we decided the best route to the summit of Hess Mountain on the west ridge and also a new route on the south ridge.

We set up Camp 1 at 2,050 m at the top of the West Fork Glacier on June 22. We climbed an ice face leading to the col between Mt. Deborah and Hess Mtn. and set up there Camp 2 on July 2.

On July 4, Matsuda and Motogi climbed to the summit of Hess Mtn. taking the route on the west ridge, spending 23 hours, which was the second ascent from south side and on July 7, Inagaki and Denda traced the south ridge to reach Hess west peak for the first time, thereafter they were supported by remaining party near the west peak I.

On August 7, in the course of geological survey at Eklutna Glacier, of sudden Morita slipped down toward the crevasse, and Inagaki, seeing it, tried to stop him in vain, and together fell they over into the crevasse. They were rescued immediately by other members and US Army team and sent to USAF Elmendorf Hospital by Army helicopter. Fortunately they have now recovered quite well. We avail ourselves of this opportunity to express our hearty gratitude to Mr. H.E. Wagner who was the instructor of US Army Mountain Training Infantry Brigade, and to Col. S.V. Haigler who was the executive officer at Elmendorf Hospital, and also to many others who gave us kind cooperation regarding the accident.

Iran Elburz, Mt. Demavend and other peaks, 1967

By Yoshio Hamano

Waseda University Alpine Club sent an expedition composed of three graduates and seventeen students of the University, to Iran Elburz range in 1967. We climbed Mt. Demavend (5,601 m) and some other peaks in snowy season. Mt. Demavend is the highest Mountain in Iran and has a graceful shape like Mt. Fuji.

The members were as follows :

Yoshio Hamano (age 28, leader)

Shuichi Tamura (30), Yuji Omura (26), Shoji Nakayama (22),

Takashi Okabe (23), Kiyohiko Tsujita (23), Yasuo Honda (23), Koji Kobayashi (24), Masaharu Kohayakawa (21), Ryozo Takagi (21), Shu Sato (21), Shin Yamada (20), Masahiko Hayashida (20), Osamu Honma (20), Shoichi Murata (20), Daishiro Kyushin (20), Kunizo Takeda (19), Takao Yonemoto (19), Shotaro Miyake (19), Tadafumi Saito (20),

After one week's journey through U.S.S.R. we arrived in Teheran on February 22. On February 25 we left Teheran for Rene by bus, where we got a hut as a Base House by courtesy of Iranian Mountaineering Federation. The next day we went up, with some laden donkeys and mules, to the site for Base Camp at 3,400 m on the wide south ridge leading to the summit of Mt. Demavend. We took the route on this ridge for the ascent.

Two advance camps were pitched : Camp I at 4,300 m on February 28; Camp II at 5,000 m on March 2.

On March 4, S. Nakayama, K. Tsujita, S. Sato, and R. Takagi made a successful ascent of Mt. Demavend. Our second ascent, however, was prevented by severe snow-storm which continued for four days.

On March 9 we removed all the camps and descended to the Base House in Rene. We returned back to Teheran on March 11.

On the 14 th we departed again from Teheran to Lalun.

On the 15 th we went up northward from Lalun along Jaji Rud (river) and set up Base Camp on a plateau at 3,000 m on the right bank of the river. There we climbed three peaks around the upper basin of Jaji Rud.

Five members climbed Mt. Horeno (4 250 m.) on the 16 th. The ascent was rather easy. On the 17 th they climbed Mt. Korogaki (4,050 m.) and other six members made another ascent of Mt. Horeno.

On the 19 th, Advance Camp was set up at 3,600 m. on the ridge leading to Mt. Korogaki and the third ascent of Mt. Horeno was made by eight members.

On the 21 th, four members who had stayed at Advance Camp climbed Mt. Sagichor. The ridge from Mt. Korogaki to Mt. Sagichor was very steep.

On the 23 rd, the second ascent of Mt. Sagichor was made by other four members.

On the 24 th we went back to Lalun, and on the 25 th, we returned back to Teheran.

海外登山年表 ═1967年═

(Japanese Overseas Expeditions in 1967)

松田雄一編

1967年の年表も前年の形式を踏襲することにし，1967年中に登山を目的に，日本から海外へ出かけた登山隊の記録のみを収録することにした。海外渡航の自由化により，ネパールの国内踏査や韓国などに登山にでかけたものもこの他に数隊あり，また，ヨーロッパ・アルプスやカナディアン・ロッキー等には，学会等で渡欧，渡米した学者や外国に在住している者が，休暇に登山を行なっている例も多いようであるが，何分調査のしようがないため，割愛せざるを得なかった。

この年表を作成するにあたっては，昨年同様「海外登山調査表」の用紙を送って各隊の責任者に記入してもらったが，一部記入してもらえぬものもあったので，その場合は，新聞，雑誌その他の資料により補足せざるを得なかった。そのため，内容にやや統一を欠くところがあるが，その点は御寛容願いたい。

さて例によって，この年表を整理していて気のついた点を二，三あげてみると，

（1） ネパール・ヒマラヤやカラコルムの登山が禁止されているため，1967年には初登頂を目的としたMajor Expeditionは一隊もなく，入国しやすいヒンズー・クシュ，台湾等に集中した。

（2） バリエーション・ルートから登攀したものが多く，長野岳連のサンタクルス・ノルテや，東京農工大のヒリシャンカ，札幌岳連のマッキンリー南壁，緑山岳会のアコンカグア南壁等は世界的に注目されるものである。

（3） ヨーロッパ・アルプスの著名な壁も冬季を含めて数多くのぼられた。

（4） 女性のみによる登山隊の活躍がめだった（ワイナ・ポトシの登頂とマッターホルン北壁）。

（5） 1965年についで海外での遭難事故が多く，とくに滑落・転落事故がめだった。事故発生件数6件，死亡3名，負傷5名を数えた。

（6） 日本からの海外登山隊の数とその参加人員の点では，史上最高の数を記録したが，これといっためぼしい高峰の初登頂の記録はみられなかった。

なお，参考までにこの75隊に登場した参加者の延人員は379名だが，このうち女性は22名，本会々員は91名が参加しており，ほとんどの隊の中心として活躍していることは例年の通りである。

（注） 年表のNosに※のある隊は，その記録が本文に収録されていることを示し，また隊長や隊員名の前に＊印を付したものは本会々員，†印を付したものは故人となっている人を示す。

ヒンズー・クシュ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
※ 1	1967.6～8	ヤジュン峰 Koh-i-Yajun (6024 m) の登頂	**広島大学ヒマラヤ(ヒンズー・クシュ)遠征隊** (The Expedition to Hindu-Kush, Hiroshima University 1967) **隊長**＝大谷敏夫(61) **副隊長(登攀隊長)**＝*増永迪男(34) **副隊長(隊医)**＝*平井剛(36)　**隊員**＝*舟橋明男(29) 石田雅則(24) **行動概要**：6月 28 日カラチ発，7月 11 日カブール発アリンガル川を遡行し，ダシテレワート，7月 13 日パンジシール川を遡り，アンジュマン・パスを越え，ムンジャン川を遡り，7月 21 日ナオに至る。7月 23 日ヤジュン谷を発見，7月 25 日 BC (3400 m) を建設。7月 30 日 C 2 (5200 m) を建設し，8月3日，舟橋，石田の二名ヤジュン峰 I 峰 (6024 m) に初登頂，8月5日には，増永，平井の二名でヤジュン峰III峰 (5700 m) にも登頂し，8月 18 日カブールに帰着。 **文献**：舟橋明男編「知られざる山ヤジュン」1967 年 11 月刊 (非売品)，「岳人」244 号 (1968 年 1 月号)，JAC 会報「山」269 号 (1967 年 11 月号)，「山岳」63 年 143 頁参照
2	1967.6～8	コー・イ・バンダコール Koh-i-Bandakor (6840 m) 第6登	**中央大学ヒンズー・クシュ遠征隊** (Chuo University Alpine Club Hindu Kush Expedition 1967) **隊長**＝*板倉勝正(52)　**副隊長**＝片山博(31)　**隊員**＝*市川邦治(27)広田靖典(24)小谷恵夫(24)磯部幸則(21)　**通訳**＝Nagibulla Ayub(27) **行動概要**：6月 17 日カブール発，クンズーツ，ファイザバード，ジュルムを経て，6月 22 日アザッド・セイ着，マダン，イスカズール，ケロンを経て6月 29 日 BC (4200 m) を建設。7月7日，市川，広田はコー・イ・バンダコール (6840 m) 第6登に成功。更に7月 16 日，片山，市川，広田，磯部の4名はプンタ・トリノ (6200 m) にも登頂 (第3登)。7月 25 日，BC を撤収。アンジュマン峠を経て8月4日，カブールに帰着。 **文献**：中央大学山岳部「年報」6号 (1968 年5月発行・非売品)，JAC 会報「山」270 号 (1967 年 12 月号)
※ 3	1967.6～9	ティリチ・ミール Tirich Mir (7708 m) の第3登	**千葉県ヒンズー・クシュ・ヒマラヤ登山隊** (All Japan Hindu Kush Expedition 1967)……市川山岳会主催 **隊長**＝高島一芳(45)　**副隊長・登攀隊長**＝有岡達郎(31) **隊員**＝小松鉱二(30)仁科正純(29)高野健次(25)近藤理昭(24) 前田房義(24) 山本良彦(23)　**報道**＝*高橋定昌(55) **ハイ・ポーター**＝チゴリ・ハーン，ナヤブ・ハーン，ミール・ムハマッド他1名。

			行動概要：7月9日チトラル発，マスツジ川を遡り，ザニ峠を越えて，7月16日，BC（4000 m）をティリチ上部氷河のサイド・モレーン上に建設。同氷河上にC1（4700 m），C2（5000 m），C3（5500 m），C4（6000 m），C5（6500 m）と次々に建設。8月12日，有岡，高野，前田，山本の4名，主峰と西峰のコルより流下するクーロアールをルートにとり，ティリチ・ミール主峰（7708 m）に向かったが敗退。8月19日，近藤，ディームベルガーの2名，同ルートよりティリチ主峰の第3登に成功。さらに8月27日，仁科，前田の2名で再度アタックを行なうも失敗。なお，この間，8月11日，高橋，仁科，ディームベルガーの3名はアッハー・ゾーム（6300 m）の第2登を行なう。9月4日，BCを撤収，シャグラムを経てチトラルに下る。 **文献**：「山と渓谷」350号（1967年12月号），「山岳」63年169頁参照。JAC会報「山」269号（1967年11月号）
※4	1967.6～8	サラグラール南峰 Saraghrar S.（7350 m）初登頂他	**一橋大学ヒンズークシュ遠征隊**（Hitotsubashi University Hindu Kush Expedition 1967） **隊長**＝*山本健一郎(33)　**副隊長**＝*倉知敬(28)　**隊員**＝佐藤之敏(24)佐藤久尚(24)原博貞(24)池知昭洋(24)宮武幸久(20)　**隊医**＝*鈴木羊三(36・慈恵医大 OB) **リエゾン・オフィサー**＝Captain Moneeb Farooqui, Captain Malik Mohamed Ashlaf,　**ハイ・ポーター**＝Willayat Shah, Darwesh Khan **行動概要**：6月19日，ラワルピンディ集結の後，6月25日，チトラルへ，6月27日チトラル発，ドラサン，ドルーを経て7月4日，ロシュ・ゴル氷河上 4300 m地点にBCを建設。7月5日よりノース・クーム中心に登路偵察開始，7月12日，ノース・クームの 6000 m地点で池知隊員が落石で負傷。7月22日より登山再開，8月4日，倉知，佐藤（之），原，佐藤（久）の4隊員ウドレン・ゾムの東尾根上の 6600 m の無名峰に登頂。さらに8月11日，この4隊員はウドレン・ゾム南峰(7050 m）の初登頂に成功。8月18日，BCを撤収し，サラグラール峰南面へ転進。C1（5400 m），C2（6300 m）を建設の後，佐藤（之），原の二名は8月23日，頂上攻撃に向かい，7100 m の地点でビバーク，翌24日9時，サラグラール南峰の初登頂に成功。8月27日，BCを撤収，帰途につき，8月30日，チトラルに帰着。 **文献**：山本健一郎編「ロシュ・ゴル氷河の山旅」1968年7月，あかね書房刊。部報「針葉樹」14号（1969年刊行予定），「山と渓谷」350号（1967年12月号），「山岳」63年32頁参照

5	1967.5～11	サラグラール北峰 Saraghrar North. P.（7348 m）登頂とニロギ氷河，ウシコ氷河周辺の偵察ならびにチトラル周辺の民俗調査	**新潟大学山の会東部ヒンズー・クシュ踏査隊** **隊員**＝横山史郎(24)梅津晃一郎(24) **ハイ・ポーター**＝Abdul Hagack Khan **行動概要**：6月 27 日，チトラル発キャラバン開始，ロバ3頭を使用し，途中 Reshun，Shagram 等を経て7月1日，Washichi 着。7月2日ポーターに変え，ジュワール・ゴル奥グラム・シャールに7月3日着。7月4日 4200 m に BC 建設。5日 C1（4500 m）建設，6日偵察，7日，C2（5200 m）ビバーク，8日，11 時 30 分，スカイ・ゾム（5973 m）の登頂に成功。 7月 12 日よりベースをウシコ氷河へ移動開始，7月 15 日，4200 m の地点に BC を建設。偵察，荷上げの末，18 日，C1（5400 m）にキャンプを移動。7月 20 日，6421 m 峰の登頂に成功。この間ポーターは数日の食糧をもち C2（5800 m）に移動，全員 C2 に泊る。7月 22 日，テントを 6300 m に移動，C3 とする。7月 25 日，C3 より P. 7061 m 峰の登頂に成功。ウシコ・ゾムと命名。7月 26 日，テントを 6500 m に移動して C4 とする。7月 27 日，C4 よりサラグラール北峰（7348 m）の第2登に成功。頂上にて初登マライニ隊の旗，マリア像の写真を撮して下山。7月 28 日，C4 より BC まで下る。8月1日，ワシチ着。8月7日，チトラルに帰着。その後梅津は8月 24 日まで，横山は 11 月 28 日までチトラルに滞在，1968 年4月に帰国。 **文献**：JAC 会報「山」283 号（1969 年1月号）
6	1967.7～9	ルンコー東峰，Lunkho II（7020 m）初登頂	**東海大学山岳部・法政大学山岳部 OB による個人山行** **隊員**＝鈴木政孝(22)東海大 OB　田中滋晃(22)法政大 OB **ポーター**＝ミール・ソワトハーン他 13 名 **行動概要**：7月 13 日チトラル発，チトラル河を遡り，17 日，ウスヌー村ウスヌー谷に入り，20 日，チュシィズム氷河とコトカズ氷河の出合った地点の台地（3600 m）に BC 建設。7月 30 日よりルンコー登頂に向かい，クーロアールにルートをとり，ビバーク7日の後，ルンコー東峰（7020 m）の初登頂に成功。8月9日，BC に帰着。8月 14 日，BC を撤収し，入山と同ルートをとりチトラルに帰り，9月 17 日帰国。 **文献**：「岳人」247 号（1968 年4月号），JAC 会報「山」268 号（1967 年 10 月号）

ヒンズー・ラジ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
※ 7	1967.7～10	ブニ・ゾム（Buni Zom）西面の踏査とゴーレン・ゴルの農業調査	**東京農業大学ヒンズー・クシュ学術調査隊**（大阪府大隊の田中・由利隊員は現地で合流） **隊長**＝*宮森常雄(36)　**副隊長**＝*向後元彦(27)　**隊員**＝根本徳彦(23)門田昭(23) 石井一郎(19) *向後紀代美(26) 田中稔(22・大阪府大)　由利秀夫(21・大阪府大) **行動概要**：7月 22 日，チトラル発，ゴーレン・ゴルを遡り，東進し，27 日，BC（3500 m）を建設。29 日，C1（4300 m）を建設，8月2日，5300 m でビバークした後，8月3日，田中，由利，石井の3名イシュペル・ゾム（ca 6000 m）に登頂。8月5日，チャコリ・ゾム登頂のためチャコリ氷河上約 4600 m に AC を建設，8月6日，7日，13 日と3回にわたる試登の後，8月14 日，AC より向後（元），根本，田中，石井，向後（紀）の5名でエクタ・ゾム（ca 6000 m）に登頂。なお，この間宮森は，8月 12 日，BC より偵察をかねマコー・ゾム4峰（ca 5000 m）に登頂。8月 18 日チトラル帰着。その後門田はカフィリスタン，ビリールよりアフガニスタンとの国境に近い約 5000 m の無名峰に試登。9月中旬より全員各地区に分散して農業調査を行ない，10 月中旬，宮森帰国後現地解散する。 **文献**：山岳 63 年 152 頁参照，JAC 会報「山」273 号（1968 年 3 月号），「岳人」254 号（1968 年 10 月号），「日本醸造協会雑誌」Vol. 63, No. 7.（1968 年7月号）：禁酒国に酒を求めて，「東京農大醸友会誌」Vol. 10, No. 1：農業調査隊あれこれ，高温乾燥地における日本酒の小仕込試験について。
※ 8	1967.7～8	ヤルクーン（Yarkhun）の探査	**第 2 次 R.C.C. チトラル登山隊** **隊員**＝*海老原道夫(26)*高橋善数(22) **行動概要**：ソ連経由にて7月 10 日，チトラル着。ポリティカル・エージェントより登山許可を得て，世界で2番目の登山隊としてヤルクーンに入る。7月 21 日，ガゼン・ゴルのトゥイヨ・アン下のガルピガルに BC を設営。7月 23 日，メヘジュリアン・カール山群のシャー・ゾム（4960 m），25～26 日，トゥイヨ・アン・ゾム山群のトロイ・カイ・ギニ山群の最高峰であるイ・カイ・ゾム（5270 m），28～29 日，メヘジュリアン・カールの最高峰プチ・ゾム（5470 m）の3峰に初登頂。8月3日，カマロー・ゾムに向かう途中，海老原病気になり引きかえす。8月5日，マスツジへ下山。 **文献**：JAC 会報「山」268 号（1967 年 10 月号），

			「岳人」247 号 (1968 年 4 月号),「岩と雪」11 号 (1968 年 4 月号),「山岳」63 年 162 頁参照

ス ワ ー ト

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
9	1967.5～6	カブラル河流域の調査とハラハリ峰の試登	**京都教育大学山岳部 OB 会・アジア中近東辺地移動調査隊** (Kyoto University of Education Southwest Asia Movable Expedition) **隊長**＝*原田達也(32)　**副隊長**＝土森譲(30)　**隊員**＝堀池将夫(33)桧谷暁一(31)橋本和生(31)高野和生(29)尾瀬戈和(29) **ポーター**＝カリブ・ハーン(27)他 8 名 (ウトロールのポリス交替制のため) **行動概要**：5 月 28 日カブラル着，5 月 29 日，本流・左俣を偵察，6 月 2 日カブラル発，カブラル川本流を遡り，6 月 3 日，ラブレに BC 設営。6 月 5 日，ハラハリ峰の尾根の末端に AC を設営。6 月 6 日～6 月 10 日の間，ハラハリ峰の試登。左俣・本流の源頭を探査。6 月 10 日には，土森，尾瀬は頂上直下 100 m に達するも天候悪化のため敗退。6 月 12 日，BC を撤収し，カブラル村に帰る。 **文献**：京都教育大山岳部 OB 会 KG-5 遠征報告「山と砂漠の子供達」1968 年 9 月 1 日刊, JAC 会報「山」272 号 (1968 年 2 月号),「山と渓谷」352 号 (1968 年 1 月号),「京都山岳」1967 年 8 月～9 月号
10	1967.8～9	ファラク・サール Falak Sar (5918 m) の登頂とパール Par の偵察	**山口大学スワート・コヒスタン遠征隊** **隊員**＝長広喜行(23)秋山利之(22) **リエゾン・オフィサー**＝セバラーシャ，**ポーター**＝4 名 **行動概要**：8 月 12 日，ペシャワール発，ウッシュ川を遡り，15 日，ファラク・サール谷 3300 m に BH 設営。17 日，4300 m の地点に BC 建設。19 日，4900 m に AC を建設，20 日，長広・秋山の 2 名，北稜よりファラク・サール峰 (5918 m) の登頂に成功，8 月 23 日，BH を撤収し，マチルタン部落に下山。26 日アナガル谷へ出発。27 日，マヘ・ダン湖の上部に BC を設営，ミアングル・サール峰の偵察を行なうも，それらしき山を発見することができず，パール (5500 m) があるのみであった。9 月 1 日，アナガル谷を去り，カラームへ下山。9 月 5 日，ペシャワール帰着。 **文献**：秋山利之編集「1967 年山口大学スワート・コヒスタン遠征隊報告書」桜プリント企業組合印刷発行 (1968 年 3 月刊)，JAC 会報「山」271 号 (1968 年 1 月号)

パンジャブ・ヒマラヤ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
11	1967.10	トス・ナラ氷河の調査	**一橋大学山岳会員による個人山行** **隊員**＝*倉知敬(28) **シェルパ**＝バサン・ラクパ，ペンバ・ツェリン **行動概要**：ヒンズー・クシュ遠征の帰路，マナリにまわり，10 月 2 日，マナリ発，ザガース・ナラ（谷）を遡り，マナラ氷河経由トス・ナラ氷河に入る。10 月 6 日，トス・ナラ源頭に最終キャンプを設け，10 月 7 日，無名峰（5640 m）に登頂，10 月 10 日，マナリに帰着。 **文献**：山本健一郎編「ロシュ・ゴル氷河の山旅」1968 年 7 月，あかね書房刊
12	1967.10～12	クルー渓谷，ビアス・コンダ源流での登山	**上智大学山岳会第 1 次ヒマラヤ登山隊** **隊長**＝*藤田孝(27)　**副隊長**＝小野靖行(25)　**隊員**＝神田隆次郎(21)清水政美(22)　**インド隊員**＝プロヒット・ナンダラーラ（27, Manali Mountaineering Institute の Instructor）　**ハイポーター**＝ニボラ，タシ，テンバ，ラマ，チャンバ，ブレーン。 **行動概要**：9 月 9 日横浜発，10 月 3 日インドのラムシワールを経て 24 日，マナリに着く。10 月 30 日，ビアス・コンダに BC (3750 m) 建設，11 月 6 日，AC (ca 5000 m) 建設。7 日，AC より全員にて 5700 m の無名峰に登頂。9 日，天候悪化のため BC へ下山。10 日，BC をバッカルダへ移動。11 日，4500 m の地点に AC を建設。12 日，付近の無名峰 5700 m に試登するも，降雪，雪崩のため断念。13 日，BC を撤収して下山。17 日マナリに帰着。 その後ネパールに入り，ポカラ，ナガルコット等を歩き，12 月 8 日藤田帰国，他の全員も 2 月 1 日帰国した。 **文献**：上智大学山岳会誌「モルゲンロート」No. 10 (1969 年中に刊行の予定)

ネ　パ　ー　ル

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
13	1967.4～7	コシ河流域の探査，パトラーシ，シスネ，カンジロバ連峰の探査	**東海大学東部ネパール探検隊**（第 3 次ネパール地域探査）(East Nepal Scientific Expedition of Tokai University, The 3 rd Expedition of Nepal Area) **隊長**＝星野紀夫(25)　**副隊長**＝杉田喬(22)宮木靖雅(27) **隊員**＝松郷隆三(22)斎藤邦昭(23)吉田正彦(22)内野隆次(21)中庭和之(20)菊岡和弘(20) *岡田啓二郎(28) 川井康男(27)以上 11 名

			シェルパ＝チョタレ，ペンバ・ノルブ，パサン・テンバ，ダワ他4名 **行動概要：東部隊**＝4月 17 日，カトマンズよりビラトナガールへ，4月 20 日，ビラトナガールよりタプレジュンへ向かい，グンサよりカンチェンジュンガ山群，セドアよりマカルー山群を探査し，ナムチェ・バザールを経由して7月9日カトマンズに帰着。 **西部隊**＝4月 17 日カトマンズ発，27 日スリケットへ至る。その後，ダイレク，ジュムラを経由してバトラシ・ヒマール，シスネ・ヒマールの探査を行ない，5月 28 日，シスネ・ヒマールのタウラ・ヒュネ・チュリ（c 6320 m）の登頂に成功した。この頂上から偵察の結果，この山群の最高峰がカンジロバでなくカンデ・ヒウネ・チュリ（c 7000 m）であることを確認した。その後3隊に分かれ，A隊はジュムラよりスリケットへ，B隊はジャジャルコットよりダレへ，C隊はタラコットよりポカラへ帰着，7月初旬，東隊，西隊カトマンズで合流。この間全隊は行程 2000 km を踏査した。 **文献**：「東海大学東部ネパール探査隊仮報告書」，「岳人」247～249，251 号（1968 年4月～6月号，7月号），東京中日新聞4月5日特集号，日本経済新聞5月 17 日特集号
14	1967.3～8	マハラングール・ヒマールとカリガンダキのトレッキング	**岩峯登高会，マハラングール・ヒマール踏査隊** **隊員**＝西野善充，矢島頼子 **シェルパ**＝ミンマ・ツェリン **行動概要**：4月4日カトマンズ発，11 日ナムチェ・バザール着，その後2週間の予定にて，エベレスト BC，ゴジュンバ氷河の探査を行ない，5月7日ナムチェ発，20 日カトマンズに帰着した。その後トリスリ・バザール，カリガンダキのジョムソンバのトレッキングを行ない，7月 20 日カトマンズ発，インドを経て9月4日帰国した。 **文献**：「山と渓谷」350 号（1967 年 12 月号）
15	1967.6	チューレン・ヒマール南麓の踏査	**個人山行** **隊員**＝藤本亜樹雄（25，日本極地振興会々員）藤田輝治（拓大 OB） **行動概要**：5月 20 日ポカラ発，マヤンディ・コーラを遡りルランの先で 3000 m の峠を越してグルジャ・カーネの村に達する。これよりブジュンゲに至る小さなパスを越え，この周辺より，グルジャ・ヒマール，チューレン・ヒマール等の偵察を行ない，6月上旬ブジュンゲを発って8日目カトマンズに帰着した。 **文献**：「岩と雪」11 号（1968 年4月刊）

16	1967.6	バルドール山麓ザイスリ・クンドの旅行	**ケタケティ・エクスペディション** **隊員**＝*向後紀代美(26) 宮木昌代(28) 加納登(26)藤本亜樹雄(25)柘植節子(23) **シェルパ**＝アンツェリン **行動概要**：6月 11 日カトマンズ発，トリスリ・ガンダキよりバルドール南麓の Jaisuli Kund を探査し，6月 22 日カトマンズに帰着した。 **文献**：「岳人」247 号 (1968 年4月号)
17	1967.9～11	クーンブ・ヒマールの探査	**山口大学山岳部 OB による個人山行** **隊員**＝秋山利之(22) **行動概要**：スワート・コヒスタン遠征の帰途，秋山隊員はネパールに入り，9月 25 日～11 月5日までネパールに滞在，この間カトマンズよりソロ・クーンブに旅行し，イムジャ氷河，クーンブ氷河，ゴジュンバ氷河の探査を行なって，ビラトナガールに下山した。 **文献**：秋山利之編集「1968 年山口大学スワート・コヒスタン遠征隊報告書」(1968 年3月)
18	1967.8～10	中央ネパールの旅行	**中央大学山岳部員によるネパール旅行** **隊員**＝広田靖典(24)小谷恵夫(24) **シェルパ**＝プルバ **行動概要**：コー・イ・バンダコール遠征の帰途，2名にてネパールに入り，9月3日ポカラ発，チャムラン，タトパニを経て 17 日ツクチェに至る。9月 20 日ジョムスンバに達し，29 日ポカラに帰着。 **文献**：中央大学山岳部「年報」6 号 (1968 年5月刊)
19	1967.9～12	ダウラギリ峰の偵察ならびに西ネパールの農業調査	**同志社大学山岳部ネパール踏査隊** **隊長**＝*岡田啓二郎(28)　**隊員**＝川井康男(27) 内藤真一(24)大日常男(22) **シェルパ**＝ラクパ・ツェリン，アン・ギルミ，ブターレ **行動概要**：9月 10 日ポカラ発，9月 20 日ツクチェ着，ダンプッシュ・コーラより9月 27 日ダバ・コルに到着，BC を設営，2隊に分かれ第1隊＝岡田・内藤はフレンチ・パスを経てマヤンディ・コーラを下降，第2隊＝川井・大日は北東コルならびにダウラギリ東氷河の偵察を行ない 10 月 22 日ポカラに帰着した。(ダウラギリの偵察は正式にネパール政府の承認を得て実施されたものである。) その後大日・内藤の2名は 11 月 10 日カトマンズ発，11 月 22 日ナムチェ・バザールに至り，約2週間エベレストの BC 地点に滞在の後，ビラトナガールに下山。インド，パキスタン，中近東の旅を経て4月5日帰国した。 **文献**：不詳

20	1967.9～12	ネパールにおける広域ワンダリング（ガネッシュ・ヒマール南面，ヒドン・ヴァレー，ミリスティ・コーラの探査）	**信州大学学士山岳会・信州大学山岳会ネパール王国ワンダリング** **隊長**＝*清水悟郎(63)　**隊員**＝小川勝(24) 佐藤邦彦(24) 望月映洲(24)米倉幸夫(19) **シェルパ**＝ラクパ・テンジン，ニマ・チョタレー，ニム・プタール，ソナ **行動概要**：カトマンズより隊を2隊に分け，A隊（小川・米倉）9月19日カトマンズ発，22日シャブルベンシ着，9月29日～10月18日，アンク・コーラ源流，ガネッシュ・ヒマール南面を偵察し，アルガット・バザール（10月20日）を経て10月27日ポカラに帰着。B隊（佐藤・望月）は9月20日ポカラ発，25日トゥクチェ着。9月28日～10月4日，ダパ・コルを経てヒドン・ヴァレーを往復。10月9日～17日，レテよりミリスティ・コーラに入り，ニルギリ峰を偵察は10月25日ポカラに帰着。 その後11月より第2次踏査に移り，A隊（小川・望月）は11月7日カトマンズ発，11月29日エベレストのBCを往復の後，チャインプールを経て12月15日ビラトナガールに帰着。B隊（佐藤・望月）は11月6日ビラトナガール発，ほぼA隊の逆コースをたどり，12月1日エベレストのBCを往復し，12月17日カトマンズに帰着した。 **文献**：1967 年ネパール・ワンダリング行動概略。
21	1967.9～1968.3	ダウラギリ南面の踏査他	**九州大学山岳会第1次ネパール・ヒマラヤ踏査隊** **隊長**＝西野英世(26)　**隊員**＝中溝幸夫(24) **シェルパ**＝ミンマ・ツェリン(35) ダワ・ノルブ(30) ペンバ・テンジン(37) **行動概要**：5回に分けてネパール・ヒマラヤの広域の踏査を行なう。 ①9月28日カトマンズ発，ゴサインクンドを経て，10月7日，ガンジャ・ラ下5400 m に達し，タルケギャンを経て10月12日カトマンズへ下山。 ②10月7日ポカラ発，10月22日シバン着，ここで隊を2分し，西野パーティはコーナポン・コーラを5000 m 付近まで登ってダウラギリⅠ・Ⅱ・Ⅲとグルジャ・ヒマールの調査を行ない（11月6日終了），中溝パーティーはカペ・コーラを5000 m 付近まで登り，プタ・ヒウンチュリ，チューレン・ヒマール，ダウラギリⅣの諸峰を偵察（11月1日終了），同一経路を経て11月16日両隊ポカラに帰着。 ③11月19日ポカラ発，シクリスを経てマディ・コーラを遡り，23日ポングー・カルカに BC を建設（2500 m），この BC から3日間ラムジュンの南面氷河，アン

			ナプルナⅡの南西尾根を偵察，BC を 28 日撤収し，30 日同一ルートを経てポカラ帰着。 ④12 月 19 日カトマンズ発，31 日ナムチェ・バザール着，1月3日エベレスト BC を往復した他，イムジャ・コーラ，西チャングリ氷河等を踏査し，13 日プルテ発，22 日カトマンズ帰着。 ⑤2月9日カトマンズ発，ナムチェを経てゴジュンバ氷河，クーンブ氷河，チャングリ氷河等を偵察，29 日カトマンズに帰着。 **文献**：「岳人」252 号（1968 年 8 月号），253 号（1968 年 9 月号）
22	1967.10～1968.1	中央ネパールならびにナムチェ・バザール方面のスケッチ旅行と氷河調査	**北大山の会員によるネパール旅行**（隊名なし） **隊員**＝*坂本直行(62)山田知己(27)神谷晴夫(24)*松島静吾(30，東京歯科大 OB) **シェルパ**＝アンツェリン，ラクパ・テンジン **行動概要**：11 月3日ポカラ発，ツクチェを経てダンプッシュ・コーラに入り BC を建設，ヒドン・ヴァレーに入り氷河調査を行なう予定なるも，積雪多量歩行困難のため中止して下山。ツクチェよりジョムスンバ往復後，12 月6日ポカラへ下山。 1月1日より坂本・神谷・山田の3名はカトマンズ発，ナムチェへ向かい，1月 16 日ナムチェ着，1月 22 日ゴラクシェプ附近まで往復，2月8日ヘリにてカトマンズに帰る。 **文献**：未刊
23	1967.11～1968.3	西部ネパール Dolpa District（ジュムラよりティピコット周辺）の民俗学，文化人類学，医学的調査	**西部ネパール民俗文化調査隊**（Japan Western Nepal Anthropological Survey，1967～1968） **隊長**＝田村善次郎(33)　**医師**＝小田晉(33)　**隊員**＝黒田信一郎(28)*松沢憲夫(26) 西山昭宣(25) 木村真知子(25) 神崎宣武(23) **サーダー**＝Purba Kitar　**シェルパ**＝Mingma Sherpa，Pasang Temba　**コック**＝Ang Norbu　**ポーター**＝延 50 人 **行動概要**：11 月 24 日カトマンズ発，空路 Surket に飛び，Dairak を経て，12 月 12 日 Jumla 着。12 月 17 日 Jumla 発—Rimi（12 月 22～29 日）—Tibrikot（12 月 31 日）—1月5日 Pongmo 着。Pongmo にて3月1日まで約2カ月間住込み調査を行なう（Pongmo は GSGS の地図には Pudomigaon とある）。3月1日 Pongmo 発—Ira（3月8日～3月9日）—Lhun（3月 10 日）—Jagati（3月 14 日）—Dan 着（3月 19 日）。3月 21 日 Dan 発，空路カトマンズに帰着。 なお松沢隊員は，カトマンズ大使館開設準備のためジュムラよりカトマンズへ帰る。

			文献：「山と渓谷」360 号～361 号（1968 年 9 月～10 月号）

アラスカ・カナダ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
※24	1967.4～6	マッキンリー南壁中央稜（カシン・ルート）の登頂 Mc-Kinley（6191 m）	**北海道山岳連盟アラスカ遠征隊**（Hokkaido Alpine Association Alaska Expedition） **隊長**＝佐々木孝雄(38)　**副隊長**＝計良幸作(34)川越昭夫(29)秋元喜孝(24)宿院昌宏(26)平川浩一(29)山中司(28)氏家英記(24) **行動概要**：4 月 26 日アンカレッヂ発，自動車にてタルキートナ着，タルキートナより飛行機で南東カヒルトナ氷河に空輸。5 月 2 日 BC（2700 m）建設，5 月 7 日 C1（3200 m），5 月 9 日 C2（3500 m），5 月 16 日 C3（4100 m），5 月 20 日 C4（4300 m），5 月 23 日 C5（4700 m）をそれぞれ建設。5 月 25 日川越・宿院・山中・氏家の 4 名で C5 を出発，5500 m でビバーク，5 月 26 日川越・氏家の 2 名でアタックに向かい，午後 6 時 30 分カヒルトナ・ホルンに達す。5 月 27 日より撤収を開始，5 月 30 日空輸キャンプに集結す。 **文献**：北海道岳連 アラスカ 遠征隊後援会編 「マッキンリー山遠征報告書」1967 年 10 月 31 日発行。「山岳」63 年 102 頁参照。「岳人」247 号（1968 年 4 月号）
※25	1967.4～6	Alaska Range マウント・コーベ Mt. Kobe（4403 m）の登頂および日米親善登山	**兵庫県山岳連盟 1967 日米合同アラスカ登山隊**（1967 American Japanese Joint Alaska Expedition） **団長**＝*宮崎辰雄(55)　**隊長**＝*津田周二(62)　**副隊長**＝*藤田博(47)　**登攀隊長**＝*荻原邦一(35)　**隊員**＝松本武彦(31) *大野光彦(31) 中島竜(29)窪田哲夫(29)下山隆己(29) 大西義雄(29) *荒木壮一(28) 稲留哲也(27) *羽根田博正(27)岡本周三(23)　**カメラマン**＝藤田重夫(53)　**報道**＝*森川列(23) **米国側隊員**＝Alvin Randall 隊長(46)以下 15 名が“The Mountaineers” から参加 **ブッシュ・パイロット**＝Cliff Hudson (Talkeetna), Jack Miller (Northway). **行動概要**：4 月 7 日日米両隊員シァトルよりフェアバンクスに向かい，4 月 8 日ノース・ウェイ着，4 月 10 日～13 日 BC へ空輸。ラッセル氷河（東氷河）2230 m 地点に BC 設営。4 月 13 日先発隊により C1（3020 m）設営。4 月 16 日 C2（3500 m）設営。4 月 19 日森川・中島・羽根田・ハーズの 4 名 Miyasaki Peak（3306 m）に登頂。4 月 20 日 C3（3880 m）を設営。4 月 22 日大西

			・窪田の両名により Mt. Bona (5029 m) の第4登に成功。4月25日 C4 を 3730 m に設営。4月27日荻原・松本・大野・スティリー・ボールトン・ギャレンの6名，Mt. Kobe 4403 m に初登頂。4月28日には藤田・大野の2名は Mt. Kobe Ⅲ峰 (4039 m) に登頂。4月29日森川・窪田・中島の3名は Mt. Kobe の第2登頂に成功。4月30日には松本・下山・稲留・羽根田・荒木・岡本の6名は Mt. Kobe の第3登，マイナー・ピーク，Mt. Kobe Ⅱ峰 (4252 m) にそれぞれ初登頂する。更に5月3日には Mt. Bona の第5登，5月3日松本・荒木・大野の3名は Bona 北壁のダイレクト・ルートを試登。5月6日オリエント試登。5月7日藤田・中島・窪田・ランドール夫妻は Joint Peak (2967 m) に登頂。同日下山・稲留・岡本の3名は Satsuki Peak (3158 m) に初登頂。5月9日には荻原・スティリーは Wedge Peak (3636 m) 初登，更に同日下山・稲留・岡本の3名は Friendship Peak (2978 m) の初登頂に成功，5月14～18日 BC 撤収，Northway に空輸，その後アラスカの調査を行ない，6月20日シアトル—ハワイ経由，羽田に帰着した。 **文献**：「兵庫山岳」No. 3～No. 4 (1967 年3～4月)，「岳人」248 号 (1968 年5月号)，JAC 会報「山」262 号 (1967 年4月号)，265 号 (1967 年7月号)，267 号 (1967 年9月号)，268 号 (1967 年 10 月号)，「山岳」63 年 64 頁参照
※26	1967.5～9	Hess (3640 m) 峰の登頂と Chugach および Yukon における夜光，地質，医学の調査	**東京大学アラスカ学術登山隊 1967 年** (Tokyo University Alaska Research Expedition, 1967) **隊長**＝*中村純二(43)　**副隊長**＝三上良治(30)　**隊員**＝岡井尚幸(26)稲垣忠男(24)松田治(23)本儀隆(22)伝田克彦(22) **ブッシュ・パイロット**＝Jack Wilson (Gulkanna), Denny Thompson (Denali) **行動概要**：6月16日全員 Gulkana に集結。Paxon に移動。6月17日～18日，Paxon より Wilson 機で West Fork 氷河に入り，BC (1800 m) 建設。6月22日 West Fork 氷河源頭に C1 (2300 m) 建設，7月2日 Deborah, Hess のコルに C2 (2800 m) 建設。7月4日松田，本儀，稜線伝いに Hess 西峰を経て Hess 峰 (3640 m) の登頂に成功 (南面からの第2登)。7月6日稲垣，伝田の2名，南稜の初トレースを行ない，Hess 西峰にて本隊に収容される。7月12日，C1，C2 を撤収。7月23日 Thompson 機にて Denali 帰着。7月28日～8月7日 Eklutna 氷河および Valdez 調査。8月20日～8月30日，Yukon で夜光観測。9月26

			日までに全員帰国する。 **文献**：「東京大学アラスカ学術登山隊中間報告書」(1967 年 10 月発行)。「東京大学アラスカ学術登山隊 1967 年報告書」(1968 年 10 月発行予定)。16 mm 記録映画"Cathedral Peak Hess"（カラー 30 分）1967 年岩波映画社。「山岳」63 年 208 頁参照。JAC 会報「山」271 号 (1968 年 1 月号)
27	1967.5～6	ブラックバーン Blackburn (5038 m) の試登とアトナ峰 (4328 m) の第 3 登	**東洋大学創立 80 周年記念アラスカ遠征隊** (Alaskan Expedition of the Alpine Club of Toyo University & the Graduates) **隊長**＝山崎弘一(30) **副隊長**＝田辺博通(28) **隊員**＝†青木勝臣(24)塩野武尚(23)岩竹修(24)聖生清重(20)松永恭司(21) **ブッシュ・パイロット**＝Jack Wilson **行動概要**：4 月 28 日羽田発，5 月 4 日グルカナ空港発ジャック・ウイルソン機にてナベスナ氷河上 2200 m の地点に BC 建設。8 日ブラックバーンの新ルートである東北尾根に C1 (3300 m) 建設。24 日ルート工作しながら稜線に到達，ここに C2 (3870 m) を建設。27 日田辺・岩竹により第 1 次アタック開始。10 数時間を要してナイフエッジを通過せるも，夕刻より天候悪化。ビバークの後翌 28 日 C2 に帰幕。6 月 2 日天候の回復をまって再度両隊員による攻撃を行ない，前衛峰との鞍部に達しビバーク，6 月 3 日前衛峰の上部 (4350 m) に達しビバーク。登頂は時間の問題となったが再び天候悪化，6 日ビバーク地点を脱出し，夕刻 C2 に帰幕，登頂を断念する。6 月 8 日第 2 目的であるアトナ峰 (4328 m) の第 3 登を塩野・聖生の隊員により行ない，翌 9 日，青木・松永両隊員によって第 4 登が行なわれた。その帰途松永スリップして青木を引きこみ，青木は遭難死する。6 月 11 日遺体を C1 に収容。12 日グルカナに全員集結。17 日アンカレッジ発帰国する。 **文献**：「茜」アラスカ遠征隊報告書 1967 年 12 月 5 日東洋大学体育会山岳部，東洋大学学士山岳会発行
28	1967.7	マウント・ドラム (3660 m) の試登	**大和証券山岳部員の個人山行** **隊員**＝*岸栄(32)（単独） **行動概要**：7 月 15 日アンカレッジ発，チャーター機により，ドラム峰北面 1140 m の地点に BC を設営。16 日湿原を経て草原状台地に C1 を設営。17 日無名氷河の右岸を遡行し，C2 を設営。18 日左方の岩尾根を登り，2130 m に達するも，後退し C2 に帰幕，19 日 C2 を撤収し BC に下山。21 日 BC を撤収，チャーター機によりアンカレッジに帰着。22 日アンカレッジ発帰国。夏季休暇を利用してのアラスカの楽しい旅を終った。

			文献：「岳人」240 号（1967 年 10 月号）
29	1967.5〜9	コースト山脈 Mt. Waddington Range およびアメリカ，メキシコでの親善登山	**学習院大学・北海道大学合同カナダ・アメリカ登山隊** **隊長**＝山田忠(24，学習院)　**隊員**＝*大宮司康治(23，学習院)*石井宇一郎(23，北大) **行動概要**：6月3日シァトル経由バンクーバー集結。18 日，キャンプ・ベルリーバーよりチャーター機でダンベル湖着。20 日ティロット・クリーク，ノバブ・パスを経てティードマン氷河（1830 m）に BC 建設。23〜27 日偵察荷上げ。25 日ウィバー・ドーム（2590 m）登頂。7月1日，HBC（2260 m）よりブラボー氷河にルートをとるも断念。Mt. ウォディントン試登（4041 m），2日，HBC をティロット氷河（2500 m）に建設。3日，ドラゴンバック（3200 m）およびイーグル・ヘッド（3200 m）両峰に登頂。6日 HBC をドラゴン・バック肩(3170 m）に移動し，9日アルジビック・ティロット峰，ティロット・スパイヤー（共に 3350 m）に登頂。11 日セラⅠ峰（3570 m）登頂。14 日セラⅡ，Ⅲ峰（3630 m）試登。15 日クロー・ピーク（2650 m）登頂後 BC へ下山。16 日マウント・マンディー（3505 m）試登，19 日 BC 撤収下山。21 日ダンベル湖よりチャーター機にてキャンプ・ベルリーバーおよびバンクーバーへ下山。 7月 25 日〜8月1日，バンクーバーよりメキシコ・シティーへ旅行。8日メキシコ・シティーよりポポカテペトル避難小屋（4500 m），9日ポポカテペトル（5451 m）に登頂。10 日イクタシアトル避難小屋（4900 m）に泊り，翌 11 日イクタシアトル（5280 m）に登頂後メキシコ・シティー下山。13 日メキシコ・シティーよりオリサバ山の小屋（4200 m）に登り，15 日オリサバ(5698 m）に登頂後，メキシコ・シティーへ下山。8月 30 日バンクーバーへ戻り，9月2日シァトルより海路帰国。9月4日残りの1名はマウント・レーニア（4392 m）に登頂後，空路9月 17 日帰国。 **文献**：未刊
30	1967.6〜9	カナディアン・ロッキーのロブソン峰，アシニボイン峰，コロンビア峰等の登頂	**岐阜県山岳連盟カナディアン・ロッキー登山隊** **隊長**＝永井秀夫(32)　**副隊長**＝木村明夫(35)　**隊員**＝藤戸義正(32)森田勇(27)青山幸男(23)木村みどり(35)高橋禎子(28)馬渕久仁(25) **行動概要**：6月4日横浜港発，17 日バンクーバー入港。29 日カナダ山岳会バンフ・ヒュッテ，7月1日 BC を設営。7月2日〜5日アシニボイン峰登頂ルートの偵察。10 日 BC を撤収し，12 日オルガリー着，18 日ジャスパー出発，19 日キンネイレイク附近に BC 建設。22 日 2590 m 地点に AC を設営。28 日森田，青山両隊員によりロブソン峰（3954 m）の登頂に成功。30 日

			AC を撤収，31 日 BC を撤収，レッド・パスを経て，コロンビア・アイスフィールド・キャンプ場着。8月4日永井，藤戸，高橋，馬渕の4名グレーシャー・アイス・フィールドを経てコロンビア峰（3747 m）登頂に成功。8月4日カルガリー発，5日メイコック湖附近にBCを建設。8月9日森田，青山両隊員は北稜を経てアシニボイン峰（3618 m）の登頂に成功。11 日 BC を撤収，12 日カルガリーに帰着。9月4日バンクーバー港発 9月 20 日横浜に帰国。 **文献**：不詳
31	1967.7～8	Canadian Rockies の自然保護状況の視察をかねての旅行	**Canadian Rockies への個人登山** **隊員**＝*今井雄二(69)*今井喜美子(63) **行動概要**：7月4日バンクーバー着，カナダ山岳会支部の月例集会に出席。7日バンフ着，山岳会クラブハウスに滞在。11 日，Mt. Assiniboine の Sunburst Lake Camp に入る。14 日 Terrapin 氷河を登る。16 日バンフ，19 日レーク・ルイーズ，21 日モレーン・レーク，22 日 Larch Valley と Sentinel 峠へ登る。23 日バスでハイウェーを北上ジャスパー着，25 日エディス・キャヴェル訪問，26 日 Robson Ranch，27 日 Berg Lake Chalet へ入る。8月1日ロブソンの Rare Guard Peak へ登る。3日 Robson Ranch，5日バンクーバーへ帰着。 **文献**：JAC 会報「山」267 号（1967 年9月号）

アンデス・パタゴニア

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
※32	1967.5～10	コロンビア・アンデス，サンタ・マルタ山群の未踏査地域の踏査とボリーバル峰の登頂	**静岡大学コロンビア・アンデス学術調査隊**（La Expedicion Cientifica a Los Andes Colombianos de La Universidad de Shizuoka, 1967） **隊長**＝土隆一(37)　**副隊長**＝*山本良三(27)　**隊員**＝高橋真弓(32) 杉本武(27) 和田享(22) *太田欽也(32) 安藤弘(28)　**医師**＝小久江浅二(37) **ポーター**＝フーリオ・ヘルマン(22)（アロワコ族インディオ） **行動概要**：6月 10 日，コロンビア共和国バランキリヤ市に全員集結，26 日キャラバン開始，7月1日ブレーに BC（4510 m）を建設，10 日全員 BC へ移動。7月 13 日～8月1日の間，18 座の無名峰の初登頂と著名な峰9座の登頂に成功。同時に未踏査地域の踏査も実施。主なる登頂記録は下記の通り。 7月 20 日　シモンズ峰（5660 m）　山本，安藤 エル・プロフェソール峰（5295 m）　山

			本，安藤 7月 21 日　ヌエヴァ・ヴィスタ峰 (5155 m)　山本，安藤 ネバド・テソロ峰 (5200 m)　太田，和田 7月 28 日　シモン・ボリーバル峰 (5775 m) 7月 30 日　ガンサー峰 (5540 m)　山本 7月 31 日　クリストバル・コロン峰　小久江，和田 8月 1 日　レイナ峰 (5535 m)　安藤，太田 オヘダ峰 (5490 m)　安藤，太田 8月3日 BC 撤収。9日バランキリヤ市に全員集結。8月 11 日～9月6日学術調査を行ない，9月 12 日カルタヘナ港発帰国の途へ。 **文献**：静岡大学コロンビア・アンデス学術調査委員会編「概略報告書」1968 年3月1日静大理学部発行。公式報告書は静大山岳会編にて 1968 年度に発行の予定。JAC 会報「山」271 号 (1968 年1月号)，雑誌「ちゅうがい」1968 年2月～7月号，中外製薬編集発行。「岳人」254 号 (1968 年 10 月号)，256 号 (1968 年 11 月号)「山岳」63 年 184 頁参照
※33	1967.4～8	ペルー・アンデス コルディエラ・ブランカ山群 Santa Cruz Norte (5829 m) 初登頂他の登山と高処医学の調査，ペルー在住長野県人会との交流	**長野県山岳協会ペルー・アンデス遠征登山隊** (La Expedicion Japonesa a Los Andes Peruanos '67.) **隊長**＝*村井栄一(54)　**副隊長**＝横地康生(30)　**隊員**＝林竹彦(27)小林一智(26)浜巌(30)浜田勝信(26)小松佑次(23)山田明(22)　**現地参加**＝*宮下昭(25，早大岳友会)，**医師**＝西郡光昭(27) **ポーター**＝パブロ・モラレス(28)オノラート・カルドラ(33) **行動概要**：5月 30 日リマ集結，6月8日ワラス出発キャラバン開始，9日 Huantsan BC 設営，6月 23 日林，西部，小林，小松，宮下の5名は第1の目標 Nvd. Huantsan 南峰 (5915 m) の初登に成功した。この間6月 20 日横池，小松は Nvd. Abeja (5550 m) の初登。6月 24 日山田，小松は Nvd. Rurec (5320 m) の第2登，6月 27 日宮下，小松は Nvd. Kiso (5406 m) の初登。宮下，小林，西郡，浜田，小松は，6月 21 日および 25 日の両日に亘り，Nvd. Caullaraju (5676 m) の第2，第3登も行なった。 こうして第1次のワンツァンでの登山を終え，6月 30 日ワラスに下山した。ワラスで4日間休養の後，7月5日ワラス北方 150 km のサンタ・クルス・ノルテを目指しキャラバンを開始，クリ・コチャ湖畔に BC を設営，サンタ・クルス・ノルテの西壁に直登ルートを開拓，21 日西稜に達し，アタック隊の林，宮下，西郡，小林の4名は，23 日西稜上でビバークの後，24 日初登頂に成功

			した。25 日 C2 を撤収し，26 日 BC へ下山した。更に 28 日に小松，浜田，山田の 3 名は Nvd. Biscachu の初登にも成功した。 **文献**：「岳人」242 号（1967 年 11 月号），247 号（1968 年 4 月号），「山と渓谷」349 号（1967 年 11 月号），信濃毎日新聞 1967 年 9 月 5 日より 15 回「アンデスを行く」を連載。JAC 会報「山」267 号（1967 年 9 月号）。「山岳」63 年 80 頁参照
34	1967.5～9	ペルー・アンデス コルディエラ・ワイワッシュにおける登山	**東京白稜会ペルー・アンデス遠征隊**（Expedicion Japonesa Tokyo-Hakuryo-Kai a Los Andes Peruanos） **隊長**＝市川正(31)　**副隊長**＝新井豊明(31)　**隊員**＝本田守旦(26)秋野尊愛(25)宮田建夫(24) **ポーター**＝Serjio Callupe (28)（兼アリエロ頭） **行動概要**：6 月 9 日リマ発，6 月 11 日チクィアン発，プンタ・タプシュ越え，リオ・セリアを遡り，6 月 14 日セリア谷源頭 4500 m の地点に BC 1 を建設。6 月 19 日ラサック～ツァクラ間のコル（ca 5130 m）に AC 建設，20～21 日ラサック・オエステ（5700 m）西壁のルート工作を行ない，22 日市川，本田にてアタックするも，クレバスのため 5500 m 附近より退却。6 月 23 日市川，本田，秋野の 3 名，AC より北東稜経由ツァクラ・チコ・ノルテ（5513 m）の第 4 登に成功。24 日 AC 撤収。25 日新井，秋野はセロ・ロザリオ・ノルテ（5596 m）に向かい，途中ビバークの後，東稜より第 2 登に成功。更に 6 月 27 日本田，宮田は西面の氷河よりセリア・セントロ（5543 m）の第 2 登をなした後，29 日に BC 1 を撤収，セリア谷を下り，7 月 2 日カルア・コーチャの 4150 m の地点に BC 2 を建設。7 月 5 日～6 日，本田，宮田ヒリシャンカ・チコ（5467 m）の北稜をアタックするも成功せず。6 日イエルバハ氷河末端に AC 建設（ca 4700 m），7 日～11 日氷河内のルート工作を 5250 m まで行なう。12 日 AC よりエル・トロ（6121 m）に向かい 2 ビバークの後，14 日エル・トロの第 2 登に成功。 16 日市川，本田，カユーペの 3 名，AC よりサンタ・ローザ（5085 m）登頂。7 月 16～17 日，新井，秋野，宮田の 3 名，ヒリシャンカ・チコ（5467 m）を北東稜よりアタックするも成らず，19 日 BC 2 を撤収，プンタ・カカナン経由，7 月 21 日チクィアンへ下山。22 日リマに帰着した。 **文献**：「山と渓谷」349 号（1967 年 11 月号），JAC 会報「山」265～268 号（1967 年 7 月～10 月号），公式報告書は作成中
※35	1967.6～1968.2	ペルー・アンデス ヒリシャンカ・グラ	**東京農工大学アンデス遠征隊**（Tokyo University of Agriculture and Technology Andes Expedition, 1967）

		ンデ Jirishhanca Grande (6126 m) の登頂ならびにウルバンバ山群の調査	**隊長**＝*田中元 (29)　**隊員**＝古畑博 (28) *小林伸好 (28) *加藤朝章(27)*和地陽二(26)岩谷弘一(22) **現地参加**＝Franz Oestemer (チリー人，チリー・ドイツ人クラブ所属) **ポーター**＝Hidalgo Alvaiza **行動概要**：6月 22 日リマ発，23 日 Chiquian 発，25 日 BC (ca 4000 m) をミツコーチャに建設。8月7日まで滞在する。この間，7月10日古畑，小林，和地，岩谷の4名で Paria (5172 m) 登頂 (第2登)，7月 21 日～23 日古畑，和地の2名で Nvd. Ninashhanca (5637 m) 登頂 (第3登)。7月 18 日古畑，岩谷の2名 Jirishhanca Chico Oeste (5270 m) 初登。7月 27 日田中，加藤の2名で4回のビバークの後，新ルートより Jirishhanca Grande (6126 m) 登頂 (第3登)。7月 27 日岩谷，Oestemer の2名で Jirishhanca Chico (5467 m) 登頂 (第5登)，小林，Hidalgo も Jirishhanca-Chico Oeste (5270 m) に登頂 (第2登)，更に 8月2日岩谷，Oestemer の2名は Nvd. Ninashhanca (5637 m) の第4登，8月5日古畑，加藤は Carhuaraju (5002 m) に登頂した。 8月 12 日リマに戻り，8月 16 日にウルバンバ山群に向け出発。8月 24 日 Chillca (ca 2700 m) に BC を設け，9月 11 日まで滞在する。この間，8月 30 日 Bononia (5110 m) に古畑，加藤が3ビバークのラッシュで，9月4日 Marconi (5340 m) に小林，和地が2ビバークのラッシュで，9月6日 Veronica (5750 m) に田中，岩谷が2ビバークでそれぞれ登頂に成功した。 9月末リマに戻り，隊を分散し，チリー，アルゼンチン，ブラジル，ボリビア，パラグァイの各国を廻り，4月初旬に全員帰国したが，この間 1968 年2月 17 日，田中，加藤の2名は Aconcagua (7021 m) にも登頂した。 **文献**：JAC 会報「山」270 号 (1967 年 12 月号)，「東海山岳」第3号，「山岳」63 年 50 頁参照。「岳人」249 号 (1968 年6月号)
※36	1967.6～8	ボリビア・アンデス，コルディエラ・レアル山群，ワイナ・ポトシ Huayna Potosi (6094 m) の登頂	**エーデルワイス・クラブ日本ボリビア親善隊** **隊長**＝*関田美智子(27)　**隊員**＝*清水聡子(25) *阿部正子(26) **ポーター**＝フーリオ (ワイナ・ポトシ BC まで) **行動概要**： ○ラウラニ山群東面の偵察 (6月 17 日～23 日) 6月 17 日ラパス発ラウラニ山群の東面に BC を設け，6月 19 日ウイラ・リヨヘター (5244 m)，6月 22 日ハチャパタ (5424 m)，6月 18 日無名峰 (5320 m) 等

			にそれぞれ登頂。 ○ワイナ・ポトシ（7月1日～5日） 7月1日ラパス発，ソンゴ・パスにて車を捨て，その日のうちに 4900 m に BC を建設。2日偵察，荷上げ，3日 BC を出発，5700 m にビバーク，4日ワイナ・ポトシ（6094 m）の登頂に成功。ビバーク。5日 BC に戻り，BC を撤収してソンゴ・パス（4500 m）を経てラパスに下山。 ○イリマニ試登（7月 22 日～27 日） 7月 22 日 BC（4760 m）建設。23 日 C1（5000 m），24 日 5500 m にビバーク，25 日 5760 m まで達したが，登頂をあきらめ下山。26 日 C1 撤収，27 日 BC 撤収，ラパスに下山。 **文献**：「山と渓谷」349 号（1967 年 11 月号），「エーデルワイス」32 号（ボリビア・アンデス特集号）1968 年3月刊。JAC 会報「山」265～267 号（1967 年7～9月），「山岳」63 年 198 頁参照
37	1967.12～1968.3	アルゼンチン・アンデス，メルセダリオ Mercedario（6770 m）南壁登頂	**小田原山岳協会アルゼンチン・アンデス親善登山隊**（Japan Argentina Andes Goodwill Expedition, 1967～1968） **隊長**＝吉田三郎(36)　**副隊長**＝小島実(36)　**隊員**＝渡辺辰雄(29)岡部佳生(28)笠間秀二(26)天利保男(29)　**現地参加**＝*増山直義(29，北大 OB) **チリ側隊員**（メルセダリオ・クラブ）＝Sersio Fernandez (38), Antonso Beorchia (33), Oscar Kummel (33), Robelio Dupont (18) **馬主兼ガイド**＝Manuel Gonzalez (53), Ricardo Valdez (37) **行動概要**：1968 年1月 23 日サンファン市に集結，日・チ両隊員 11 名に NHK から1名加わり，サンファン市を出発。グランコ河とリオ・パトス河の合流点に幕営。1月 31 日 BC 設営。南壁登頂を果たさず下山したブエノスアイレス山岳会員3名に会う。2月2日氷河の末端 4200 m に C1 を設営，4日日本隊7名のみで計画を進めることになり，C2 を建設する。9日 C3 の建設，11 日荷上げ完了，登頂準備なる。12 日岡部隊員が 6000 m の地点で急病になったため C2 へ下ろし，増山隊員と交代する。15 日 4：30 出発，南壁を完登し，22：00，C3 へ帰幕。18 日 BC へ下山。アルゼンチン隊と合流。2月 20 日メザ氷河へ向かう。2月 23 日 BC を撤収，26 日サンファン市へ下山，3月 29 日帰国。 **文献**：「山と渓谷」357 号（1968 年7月号），公式報告書は作成中，「山岳」64 年に掲載の予定。
38	1966.11～	アコンカグア南壁	**1966 年度東京緑山岳会アンデス登山隊**（Tokyo Midori

	1967.6	Aconcagua (7021 m) の登攀とパタゴニアの偵察	Alpine Club Andes Expedition, 1966～1967) **隊長**＝立田実(29) **登攀隊長**＝*青木敏(24) **隊員**＝大橋武三郎(24) **カメラマン**＝*野崎正矩(25) **現地参加**＝*増山直義(28, 北大 OB) **行動概要**：1966 年 12 月 18 日ブエノス・アイレス着。これより鉄道にて1月1日メンドサ着。自動車にてプェテ・デル・インカに至り，それからロバにより運び，1月 15 日南壁基部に BC を建設。1月 20 日より南壁の登攀開始。1月 24 日 5400 m の地点に C1 建設。1月 30 日 5800 m の地点に C2 を建設，2月7日 6300 m の地点に C3 建設，2月 10 日青木，増山，野崎，大橋の4名は C3 よりアタックに向かい，6600 m にビバーク，翌 11 日午後1時南壁を抜け，3時アコンカグア山頂に立つ。30 分の滞頂後北面を下降，2月 19 日 BC を撤収，プェンテ・デル・インカまで下る。翌日メンドサに帰着。メンドサにて休養の後，2月 28 日モンテ・プラタ (6310 m) の登頂を行ない，その後隊を分散，立田，青木はパタゴニア方面を3月 20 日より1カ月間にわたり偵察，フッツ・ロイ，セロ・トーレ，パイネの山群を偵察し6月 19 日帰国する。 **文献**：「山と渓谷」343 号 (1967 年6月号)

スピッツベルゲン

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
39	1967.7～8	スピッツベルゲン西海岸の氷河と山岳の踏査	**日本大学スピッツベルゲン踏査隊** **隊員**＝五月女次男(28)小島一男(23) **行動概要**：7月7日トロムソ発，11 日ロングイヤービーン着，12 日マグダレナ湾着，同地域一帯の氷河を踏査。20 日北緯 82 度を越える。同日ニイ・オレスンド着，8月9日までキング氷河およびニイ・オレスンド附近の氷河と山岳の踏査。同時にアムゼン，バード，ノルデンショルド等のスピッツベルゲンを足掛かりとした探検家の足跡を探る。その他に若干の動物（主に鳥）の生態観測，植物採集を行ない，8月 11 日トロムソに帰着。 **文献**：「山と渓谷」352 号 (1968 年1月号)

ア　フ　リ　カ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
40	1966.9～1967.3	オート・アトラス山脈，アハガル山地，ルエンゾリ，キリマンジェロ等の登山お	**早稲田大学アフリカ縦断登山隊** (Waseda University Trans Africa Expedition) **隊長**＝*和田匡弘(32) **副隊長**＝*藤沢睦夫(29) *三木常靖(27) **隊員**＝井上吉弘(23) *真下健弥(23) 梅崎与一郎

		よび民俗，医療面を主とした地域研究と自動車によるアフリカ縦断	(24)岡崎昌代(22)*久富征夫(22) 松下行雄(22) 黒瀬節子(21)　**隊医**＝*岡部起正(26，慈恵医大 OB)　**カメラマン**＝上野俊郎(39，朝日テレビニュース) **行動概要**：この計画は稲門山の会，早大山の会，早大自動車部員，早大 ESS 会員等女性 2 人を含む 12 名で組織され，1966 年 9 月日本を出国ソ連経由でアルジェ着，チュニスで準備をし，日産のトラック，ランドクルーザーの 2 台でアフリカ大陸を縦断し，併せてサハラ砂漠を横断しようとする計画であった。この間 8 カ月近くを要し，登山は 4 地域の最高峰に足跡を印し，初期の目的を達したが，自動車旅行の方はスーダン南部の治安が悪く，ハルツームで断念せざるを得なかった。しかしケニアのナイロビで 1967 年 3 月 30 日本隊が解散するまで，20000 km を走破し，この間にアトラス山脈，サハラ砂漠のアハガル山地，ウガンダのルエンゾリ，タンザニアのキリマンジェロの四地域で登山を行なった。主なる登山は下記の通り。 ▽アトラス山脈ツブガル山塊 11 月 1 日　アガルジン (3710 m)，タダット (3837 m) 11 月 2 日　ラス・ヌ・オウエンクリム (4083 m)　アツェラ・ヌ・オウエンクリム (4043 m) 11 月 4 日　ツブカル (4165 m) に 3 パーティーに分かれて登頂 ▽アハガル山地 12 月 19 日和田以下 4 名最高峰タハト山 (3004 m) に，三木以下 3 名テホローグ南峰にそれぞれ登頂。 ▽キリマンジェロ 3 月 19 日和田以下 5 名キリマンジェロのキボ峰(5895 m) に登頂 ▽ルエンゾリ 三木以下 3 名 3 月 14 日最奥の部落イバンダを出発，20 日最高峰のマルゲリータ (5119 m) に東稜から登頂。 **文献**：JAC 会報「山」270 号 (1967 年 12 月号)，「山と渓谷」344 号 (1967 年 7 月号)，公式報告書「アフリカ縦断 1966—1967」

イ　ラ　ン

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
※41	1967.2～4	イラン，エルブールズ山脈のディマバンド Demavend (5601	**早稲田大学イラン・エルブールズ登山隊** **隊長**＝*浜野吉生(28)　**コーチ**＝田村修一(30) 大村裕治(26)　**隊員**＝*中山昇二(22) 岡部孝(23) 辻田希代彦(23)

		m）の登頂	本田靖生(23)小林紘司(23)小早川正治(21)高木良三(21)佐藤修(21)山田新(20)林田正彦(20)本間修(20)村田省一(20)久新大四郎(20)代田邦三(19)米本隆夫(19)三宅正太郎(19)斎藤忠文(20) **行動概要**：春山合宿を全部員参加による海外合宿として試みた早稲田大学山岳部の登山隊である。 2月 14 日横浜港よりバイカル号にて出発，シベリア経由にて 22 日テヘラン着。2月 23 日～3月 10 日の期間にディマバンドの登山を行なう。2月 25 日レーネ部落のイラン山岳会の小屋（ca 2600 m）を BH とする。26 日 3400 m の放牧地に BC，28 日ディマバンドの南稜上 4300 m に C1，3月2日 5000 m に C2 を建設，3月4日第1隊中山，辻田，高木，佐藤の4名登頂に成功する（冬期第3登？）。3月8日 C2，C1 を撤収，全員 BH へ下山，3月 10 日テヘランに帰着。3月 12 日イラン山岳会と会食，13 日イラン山岳会の総会に出席。3月 14 日～26 日ホレノー山群の登山を行なう。3月 14 日ラルーン部落の小学校を BH とし，15 日ジャジェ川を遡り，3000 m の台地に BC を建設。3月 16 日ホレノー峰（4350 m）登頂。19 日サラキチョール AC を南稜上 3600 m に設け，同時にコロガッキ（4050 m）に積雪期初登頂を全員で行ない，最後に3月 21 日サラキチョール（4250 m）に登頂。24 日 BH へ下山。登山活動を終了。その後イスファハーン等を見学しモスクワを経て4月3日横浜へ帰着。 **文献**：早稲田大学山岳部「時報」22 号（1967 年4月 20 日発行），「山と渓谷」344 号（1967 年7月号），JAC 会報「山」264 号（1967 年6月号），「山岳」63 年 177 頁参照
42	1967.5	ディマバンド Demavend（5601 m）の登頂	**日本航空山行会** **隊長**＝伊東宏尚　**隊員**＝根本忠 *鷲見竹由 古賀靖啓 **行動概要**：5月2日テヘラン発，レイネ村のイラン山岳会の小屋に泊る。5月3日 3700 m の地点に幕営，4日 4200 m に移動。5日偵察，6日 5000 m の地点に AC 建設。7日ディマバンドに登頂。8日レーネの村に下山。 **文献**：「山と渓谷」344 号（1967 年7月号）

ヨーロッパ・アルプス

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
43	1967.1～4	冬季マッターホルン北壁の登攀	**山学同志会ヨーロッパ・アルプス登攀隊** **隊長**＝小西政継(27)　**隊員**＝星野隆男(26)遠藤二郎(27) **行動概要**：冬のマッターホルン北壁登攀をめざして渡

			欧し1月 30 日ツェルマットに到着，2月4日ヘルンリ小屋より攻撃開始，3ビバークの後7日午後5時 35 分頂上に達した（冬季第4登）。頂上にて 4回目のビバークの後，8日，9日でヘルンリ尾根を下降した。4月3日シベリヤ経由で帰国。 **文献**：小西政継「マッターホルンの北壁」山と渓谷社刊（1968 年2月），「山と渓谷」343 号（1967 年6月号）
44	1967.2〜4	チベッタ北西壁の冬季試登	**第2次 R.C.C. 隊** **隊員**＝*服部満彦(34)車義久(26) **行動概要**：冬季のドロミテ，チベッタ北西壁の登攀をめざし2月下旬渡欧。3月1日イタリーのボルツァーノ着，3月 10 日アレゲ発，13 日チベッタ山麓のバッツォーラ小屋，14 日テッシ小屋に入る。15 日荷上げ，16 日よりチベッタ北西壁にとりつくも，悪天候のため断念，18 日下山する。その後マッターホルンに至り，3月 25 日ソルベイ小屋に達しマッターホルン北壁をめざすも，悪天候のため断念。4月5日帰国。 **文献**：未刊
45	1967.1〜10	アイガー北壁冬季試登と夏のベルニナ・アルプスその他の登攀	**岐阜登高会ヨーロッパ・アルプス登攀隊** **先発隊員**＝*青木寿(37) †斎藤雅文(23)　**後発隊員**＝*水野尭史(26)脇谷秀夫(27) **行動概要**：先発隊2名，清水 R.C.C. の加藤，葛西と共にアイガー北壁の冬季登攀を目指し横浜発。2月初旬グリンデルワルトに BC を設置。3月3〜4日青木，葛西，斎藤の3名アイガー北壁へ向かうも，天候悪化のため<湿った岩穴>にてビバークの後下降，3月中旬アイガー北壁を断念して，先発隊解散。 5月中旬後発隊2名横浜港発，6月中旬先発，本隊合流してベルニナ山塊に入り，ピッツ・バディレ東北壁登攀のためショーラ小屋附近に BC を設営。7月 11 日〜12 日青木，斎藤，水野，脇谷<カシンのセカンド・ビバーク>にビバークの後，ピッツ・バディレ東北壁の登攀に成功，北山稜<ノルト・カンテ>を経て下降中，斎藤転落，遭難死す。その後水野，脇谷は8月上旬ユング・フラウ登頂，中旬マッターホルン，ヘルンリ稜から登頂，下旬モンブラン登頂を行ない，10 月下旬帰国。青木は8月 28 日マッターホルン北壁単独登頂を行なうも果たさず，中近東，ネパール等を経て1月下旬帰国。 **文献**：不詳
46	1967.1〜9	アイガー北壁冬季試登とアルプスで6級の壁の登攀	**清水 R.C.C. ヨーロッパ・アルプス登山隊** **隊員**＝加藤武彦(30)葛西健次(27)興津義訓(22) **行動概要**：加藤，葛西の2名は岐阜登高会の2名と共に1月 25 日横浜発，アイガー北壁試登の後，加藤は体

			が不調のため帰国。5月 25 日興津日本を発ち，葛西とインスブルックで合流後イタリーへ向かい，6月 13 日～14 日チマ・グランデ北壁コミチルートの登攀。6月下旬スイスに向かい，6月 25 日ビッツ・バディレ北カンテ登攀ののち 7月5日ビッツ・バディレ北東壁を 12 時間で完登。7月下旬フランスに入る。ここで隊を解散，各自他のメンバーとフリーにパーティを組み，次のように登攀を行なう。 8月6日～8日　グラン・キャブサン東壁登攀：興津，松原（雪標山岳会），高橋（雪標山岳会） 8月 16 日～17 日　マッターホルン北壁登攀：葛西，長谷川（清水そびえる仲間山岳会） 9月2日～3日　ドリュ北壁：葛西，長谷川（清水そびえる仲間山岳会） **文献**：清水 R.C.C. 会報「登攀」No. 5（1968 年 10 月），「山と渓谷」352 号（1968 年1月号）
47	1967.5～9	グランド・ジョラス北壁，マッターホルン北壁の登攀	**清水そびえる仲間山岳会** **隊員**＝長谷川勝(24)架田勉 **行動概要**：5月 26 日横浜発，シベリア経由 6月 13 日シャモニに到着。6月 21～22 日モンブラン一般ルート，26 日エギーユ・ド・ミディ南壁，7月 11 日～13 日ドリュ西壁の登攀を行なう。その後長谷川は，7月 21 日～22 日グランド・ジョラス北壁：（パートナー高田光政＝JAC 東海支部），7月 29 日～30 日グラン・シャルモ北壁：（パートナー松原誠司＝東京雪標山岳会），8月8日～9日マッターホルン・ツムット稜：8月 16 日～17 日マッターホルン北壁（パートナー 葛西健二＝清水 R.C.C.）の登攀を行ない，9月 28 日帰国した。 **文献**：不詳
48	1967.5～9	シャモニ針峰群での登攀，グランド・ジョラスの試登	**雪標山岳会ヨーロッパ・アルプス登山隊** **隊長**＝松原誠一(28)　**隊員**＝高橋弘康(25) **行動概要**：5月 26 日横浜発，シベリア経由にて6月9日シャモニに到着。6月 21 日～23 日モンブラン登頂。26 日エギーユ・ド・ミディ南壁（レビュファ・ルート）登攀。29 日エギーユ・ド・レム北東稜登攀。30 日エギーユ・ド・レム北西壁登攀。7月 10 日ポイント・アルバート西壁登攀。11 日～12 日グレポン東壁登攀。7月 17 日～18 日高田光政らと共にグランド・ジョラス，ウォーカー稜に取付くも，高橋レビュファ・クラックにて転落のため下山。7月 29～30 日松原，長谷川（清水そびえる仲間山岳会）グラン・シャルモ北壁。8月6日～8日松原，高橋，興津（清水 R.C.C.）はグラン・キャブサン東壁を登攀。8月 22 日～24 日松原，高橋，島（竜鳳登高会），葛西（清水 R.C.C.）の4名はグランド・

			ジョラス　ウォーカー稜に取付くも，悪天のためエクスレント・ビバーク地点より敗退。8月 26 日高橋，八島（竜鳳登高会），葛西（清水 R.C.C.），プレティエール北西稜登攀。9月 28 日横浜に帰国した。後半悪天のため目的のブレンヴァには入れなかった。 **文献**：雪標月報および雪標会報（1967 年度）
49	1967.5～9	ベルニナ山群ピッツ・バディレ北東壁等の登攀	**富士宮山岳会** **隊長**＝望月忠(26)　**隊員**＝加藤三郎(23) 板倉勉(26，吉原山岳会) **行動概要**：5月 26 日横浜発，シベリア経由にてインスブルックに至り，6月 8 日 Brandjoch (2596 m) 登頂。次いで主目標であるベルニナ山群に入り，6月 18 日 Piz Corvatsch (3451 m) 登頂。6月 21 日 Piz Polaschin (3013 m) 北稜登攀。6月 26 日～29 日 Piz Badile (3308 m) 北東壁登攀。7月 11 日～12 日 Piz Cengalo (3370 m) 北壁登攀。その後7月 27 日 Jungfrau (4158 m)，8月 8 日 Matterhorn (4477 m)，8月 22 日～23 日 Mont Blanc (4807 m) の登頂を行なった。 **文献**：富士宮山岳会会報「剣ケ峰」12 号，現代アルピニズム講座①アルピニズムの歴史 pp. 105～106, あかね書房刊 (1968 年 10 月)
50	1967.5～6	マッターホルン北壁の登攀	**大阪白稜会** **隊員**＝野田栄次(23)†鳥居重之(23) **行動概要**：5月 7 日横浜発シベリヤ経由にて 18 日ツェルマットに到着。5月 27 日ソルベイ・ルートによりマッターホルンを登攀。6月 5 日ヘルンリ小屋発北壁に取りつき，3 ビバークの後北壁を完登，8日 10 時スイス側頂上に立つ，登攀時間 35 時間 30 分，11 時よりヘルンリ稜を下降，15 時 30 分ソルベイ小屋に到着。6月 9 日 10 時にソルベイ小屋をでて 2 時間で事故発生。11 日鳥居死亡，13 日捜索隊に発見され，野田は救出される。 **文献**：未刊
51	1967.6～10	チロル地域の踏査およびドリュ北壁の登攀	**竜鳳登高会ヨーロッパ登山隊** **隊長**＝*八島是(26)　**隊員**＝田原宏史(21) **行動概要**：6月 7 日羽田発，まずオーストリアのダハシュタイン山群に入り，6月 17 日 Daümling Ostkante 敗退，6月 20 日 Steigkogel von Osten Sudgrat 敗退，6月 22 日 Mondlkogel Nord Verschneidung 敗退，6月 24 日 Manndlkogel Nordkante 完登。6月 29 日 Dachsteigruppe オーハー北壁より登頂。ついでカイザーゲビルゲに至り，7月 3 日フライシュ・バンク東壁を偵察ののち，7月 15 日同ルートを完登。次に

			ベッター・スティンゲビルゲに入り，7月 20 日オーバー・ラインタームツルム・エドヴァ南西カンテ登攀。7月 21 日ウンター・ベルグシュトツルム西壁登攀。7月 22 日ウンター・シュッセルカール・ツルム東壁を登攀。7月 23 日ツッグ・シュビッツェ登頂。その後フランスのモンブラン山群に入り，8月7日ダン・ド・ジェアン南西壁，16 日エギーユ・ド・レム北西壁ジャン・クジー・ルート登攀。23 日グランド・ジョラス北壁　ウォーカー・バットレス敗退。26 日ブレティエール北西稜登攀。9月3日プチ・ドリュ北壁登攀を行なう。その後ドロミテ山群に入り，9月 21 日グルーブ・ド・ファニスのチマ・デ・ラゴ南ジェードル（ヴィア・デェ・ロマニ・ルート）を登攀。10 月5日シベリア経由で帰国した。 **文献**：「山と渓谷」346 号（1967 年9月号），349 号（1967 年 11 月号），353 号（1968 年2月号），竜鳳登高会「会報」ヨーロッパアルプス特集号（予定）
52	1967.6～9	マッターホルン北壁登攀と高所登山時における人体の生理学的研究	**東京女子医科大学山岳部 1967 年度欧州アルプス遠征隊** **隊長**＝*今井通子(25)　**副隊長**＝小原和子(25)　**隊員**＝吉田聡子(23)以上医学実験者 **登攀隊長**＝加藤滝男(23)　**隊員**＝神田和臣(26)若山美子(26)木村憲司(21)以上医学被実験者 他に NET カメラマンとして*奥山章(41)同行。 **行動概要**：6月 23 日横浜港発，シベリア経由7月3日グリンデルワルド BC 着。7月6日全員でメンヒ(4099 m) 登頂。7月9日ツェルマットからシュバルツ・ゼー BC 着。12 日全員でヘルンリ稜よりマッターホルン登頂。7月 18 日神田，木村パーティ，マッターホルン北壁登攀，7月 19 日今井，若山パーティー，加藤，奥山パーティー，マッターホルン北壁登攀。7月 28 日全員にてモンテローザ登頂。8月2日シャモニに BC を移動。8月19日今井，加藤パーティー，グラン・キャブサン東壁登攀。同日神田，木村パーティーはエギーユ・ドリュ　ボナッティー稜を登攀。8月 21 日若山，加藤パーティー，エギーユ・ド・レム北北東カンテより登頂。8月 25 日，加藤，木村および2名のスコットランド人にて，エギーユ・ブレチィエール西壁を試登。8月 27 日加藤，今井パーティー，エギーユ・ド・ミディ南壁をコンタミン・ルートより登頂。神田，若山，木村パーティー同レビュファー・ルートより登頂。8月 31 日シャモニの BC を撤収，モスクワ経由にて9月 14 日横浜港着。 **文献**：今井通子「私の北壁，マッターホルン」1968 年 10 月 20 日朝日新聞社刊，「岳人」242 号（1967 年 11 月号），247 号（1968 年4月号），「岩と雪」10 号（1967

			年 12 月),「山と渓谷」349 号 (1967 年 11 月号)
53	1967.7～9	グランド・ジョラス北壁ウォーカー稜の登攀	*高田光政(32) (日本山岳会東海支部) **行動概要**：7月 17 日清水そびえる仲間山岳会の長谷川，栗田，東京雪標山岳会の松原，高橋の 5 名で 9 時グランド・ジョラス，ウォーカー・バットレスを目指して出発，高田—長谷川，高橋—栗田—松原の 2 パーティに分かれて登攀するも，レビュファー・クラックで高橋が転落のため，「エクセレント・ビバーク」でビバークの後下山した。21 日高田，長谷川は第 2 回目のアタックを試みるため，9 時レェショ避難小屋を出発。11 時登攀開始，途中ビバークの後，22 日 19 時ウォーカー頂上に立つ。下山の途中 3600 m の地点でビバークの後 23 日下山した。 その後 9 月までアルプスで過ごした。 **文献**：高田光政著「北壁の青春」1968 年 6 月 あかね書房刊,「文芸春秋」1967 年 12 月号
54	1967.6～7	国際アルピニスト集会参加	**国際アルピニスト集合** (Le Rasemblement Internationale D'Alpinisme) **参加者**＝*植村直己(26)*伊藤頌司(23) **行動概要**：伊藤 6 月 23 日横浜港発，現地にてフランス在住の植村と合流。7月 10 日開会式。12 日ボソン氷河よりモンブラン登頂。15 日モアヌ南壁—クーベルクル小屋，16 日タレーフル氷河を経てクーロアール・ド・ウインパー—エギーユ・ヴェルト—クーベルクル小屋。25 日アルベルト I 世小屋よりエギーユ・ド・シャルドーネに向かうも悪天のため途中より引返す。26 日アルジャンチエール氷河をつたってアルジャンチエール小屋へ，27 日トゥール・ノアール氷河をつめてトゥール・ノアール頂上へ。28 日アルジャンチエール小屋よりエギーユ・ド・アルジャンチエールへ登頂後シャモニへ下山。夜閉会式に出席する。 その後植村はグリーンランド東海岸アンマスサリック周辺を訪れる。 **文献**：JAC 会報「山」267 号 (1967 年 9 月号),「山と渓谷」352 号 (1968 年 1 月号)
55	1967.11～12	ドロミテ山群の偵察と踏査	**群馬大学山岳部アルプス偵察隊** **隊員**＝*斎藤晉(29) **行動概要**：11 月 12 日パリ発。13～16 日ベルナー高地，17 日コルチナへ向かい，コルチナ周辺にてクリスタロ・グループのクリスタロとピッツ・ボペナ近くの稜と壁，ボマガニョン，トファネのドリ・ディ・トファナのいくつかの稜と壁を登攀。トファナ I の南壁，ソラビス，ラバァレドの偵察を行ない，12 月に帰国した。

			文献：群馬大学山岳部 RO 会々報「佐武流」4号，JAC 会報「山」271 号（1968 年1月号）

ボ ル ネ オ

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
56	1967.2～4	キナバル各峰 Mt. Kinabalu (4101 m) の登頂および調査	**東京農業大学第3次マレーシア連邦サバ州農業開発基本調査キナバル登山隊** **隊長**＝千葉常之(21)　**隊員**＝早田俊太郎(21) 森田章夫(20) **ガイド**(国立公園管理人)＝Gabriel F. Simit (18) **行動概要**：3月 30 日Tuaran（連絡基地）へ集結。4月5日，Tuaran 発キナバルへ向かう，11 日千葉，早田は東山稜のサングエビワード峰登頂（第3登）。 12 日3名にて西山稜偵察，14 日ビクトリアピーク登頂。15 日アレキサンドリア峰北面ルンゼ登頂（第2登），17 日セント・ジョーズ・ピーク西壁初登頂，18 日ツンク・アボール・ローマン峰の第2登。19 日ドンキース・イヤー峰は失敗するも，20 日無名峰に登頂し，農大峰と命名，21 日撤収。23 日 Tuaran の基地に帰り，5月 21 日ボルネオ発帰国。 **文献**：農大山岳部「年報」Vol. Ⅷ，「岳人」237 号（1967 年7月号）
57	1967.7～8	キナバル峰の登頂と原住民調査	**日本大学探検部第1次ボルネオ調査隊** **隊員**＝森国興他1名 **行動概要**：8月2日ジェセルトン発，キナバルへ向かう。4日クンダサンの国立公園管理事務所に届け出，5日バナラバン小屋に泊り，翌8月6日主峰ローズ・ピークに登頂。8日下山，内陸部のジャングル地帯の原住民調査に向かう。 **文献**：「岳人」247 号（1968 年4月号）

台　　湾

Nos	活動期間	目　　的	記　　事
58	1967.2	玉山（3997 m）登頂	**大分登高会中華民国親善登山隊** **隊長**＝*三重野勝彦(40)　**副隊長**＝*西諒(33)　**隊員**＝*矢野鉄雄(25)佐藤義彦(23)松田篤司(20)釘宮勝子(29)　**報道**＝高木公太郎(26)　**カメラマン**＝竹本梶雄(31)　**台湾山岳協会**＝郭玉祥 **行動概要**：2月7日台北発，嘉義，阿里山，東埔を経て9日排雲山荘に BC を建設。10 日全員にて玉山主峰に登頂。その後4名が北山へ，3名が東山へ向かうも氷

			結のため途中で引返す。11 日 2 名は南山を経て BC へ下山，12 日撤収—東埔山荘泊り。13 日台北へ帰着。 **文献**：大分登高会会報「登高」18 号（1968 年 3 月 20 日発行）
59	1967.3〜4	玉山（3997 m）ならびに雪山（3884 m）登頂。農業調査を主とする自然，社会の調査	**大阪府立大学山岳部台湾遠征隊** **隊長**＝浮田典良(39)　**副隊長**＝田中稔(21)　**隊員**＝橋本智昭(21)下倉則夫(21)木之瀬善夫(20)藤野浩一(21)村田蒸一(21)寺西正一(20)正田正孝(21)由利秀夫(20)大沢康彦(22) **行動概要**：3 月 7 日内地発，3 月 18 日排雲山荘を経て西山に登頂。19 日玉山に登頂。次いで雪山に向かい，3 月 27 日雪山に登頂。4 月 6 日帰国。 **文献**：大阪府立大学山岳部報「THAKTO」Vol. 6，第二部 pp. 1〜33，報告書「台湾遠征報告」（1967 年 10 月 20 日刊）
60	1967.3〜4	玉山（3997 m）登頂沙里仙渓の遡行	**九州大学山岳部台湾登山隊** **隊長**＝白水隆，**副隊長**＝*緒方道彦，**隊医**＝甲斐佐，**隊員**＝中川原捷洋，佐藤進一，杉元勝，永井利明，藤松竜三，桂川茂彦，網谷憲一 **ポーター**＝王天定，伍金虎 **行動概要**：3 月 26 日台北発，27 日東埔，28 日排雲山荘に BC 設営。29 日全員玉山主峰，北山に登頂。30 日南山。31 日沙里仙渓遡行隊，中川原以下 4 名出発。4 月 1 日東山南稜，西山，南山登頂（甲斐以下 5 名），3 日玉山北壁，4 日沙里仙渓遡行隊 BC 帰着。5 日東埔，6 日嘉義へ下山し解散する。 **文献**：九州大学山岳部々報第 10 号（1967 年 10 月 20 日発行）
61	1967.3〜4	玉山（3997 m）ならびに雪山（3884 m）登頂	**和歌山県立医科大学山岳部中華民国台湾省親善登山隊** **隊長**＝辻秀輝(22)　**副隊長**＝奥田好彦(24)　**隊医**＝吉田匡司(25)　**隊員**＝近藤孝(20) **ポーター**＝許阿山（雪山の時），陳僧（玉山の時） **行動概要**：3 月 31 日台北発，4 月 1 日環山着，2 日賽蘭酒池泊。4 日環山を経て嘉義下山。6 日嘉義発，7 日排雲山荘泊。8 日南山を経て玉山に登頂。9 日東山，排雲山荘を経て東埔へ下山。10 日嘉義へ下山。 **文献**：和歌山県立医科大学スキー山岳部部報 "PATELLA" No. 5
62	1967.4〜5	玉山（3997 m）の登頂	**帯広エーデルワイス山岳会滝本グループ訪華友好登山隊** **隊長**＝*滝本幸夫(30)　**隊員**＝*石川隆洋(29)河田庸夫(25)　**台湾省山岳協会**＝郭玉祥(35) **行動概要**：4 月 27 日台北発—嘉義。28 日嘉義—阿

			里山—東埔。29 日東埔—排雲山荘，30 日排雲山荘—玉山登頂—東埔。5月1日東埔—阿里山—嘉義—台南。その後高雄を廻り4日台北に帰着。 **文献**：不詳
63	1967.4～5	雪山（3884 m）登頂	**塩野義製薬株式会社山岳部雪山隊** **隊員**＝中西弘(44)橋本道也(41)大石淳(29) **台湾省山岳協会**＝林清草　**ポーター**＝許阿山(29)白武神(51) **行動概要**：4月2日台中—環山—賽蘭酒池。3日雪山山荘跡に泊り，4日雪山に登頂，雪山北峰を経て山荘跡に泊り，5日礁渓へ下山，6日台北に帰着。 **文献**：塩野義製薬山岳部「台湾省雪山登山報告書」
64	1967.5～6	玉山（3997 m）の登頂	**三菱化成工業黒崎工場登山班グループ・ド・エポール玉山登山隊** **隊長**＝*谷村寿人(30)　**副隊長**＝*今村高良(29)　**隊員**＝*三矢達之(27) *清水智昭(25) *津留忠義(25)　**ガイド**＝郭玉祥　**ポーター**＝蔡添文 **行動概要**：雪山より大覇尖山への縦走を計画せるも，許可がえられなかったため，止むを得ず玉山に変更。5月29日嘉義発。5月30日阿里山。5月31日，上東埔—排雪山荘を経て玉山に登頂，頂上ビバーク要員今村，三矢，津留の3名を残し，谷村，郭は山荘へ下山。5月1日，今村パーティーは南山を往復，谷村パーティーは排雲山荘—玉山登頂後東山を往復。13時玉山山頂にて両隊合流後北山へ向かい，測候所に泊る。6月2日より2班に分かれ，今村班4名は八通関を経て6月3日東埔へ下山，谷村班3名は排雲山荘を経て6月3日東埔へ下山，6月4日東埔より嘉義へ下山。 **文献**：機関誌「べるぐ」昭和42年7月1日発行
65	1967.7	玉山（3997 m）の登頂	**関東蛍雪山岳同志会訪華友好登山隊** **隊長**＝加藤征(26)　**副隊長**＝井上隆(24)　**隊員**＝山口吉雄(22)野沢順治(20)宮崎功(20)　**台湾省山岳協会**＝蔡添文 **行動概要**：7月22日台北—嘉義，25日阿里山を経て排雪山荘泊，26日玉山に登頂後阿里山に下山。28日嘉義へ下山。30日台北へ帰着。 **文献**：「渓雲」第7号（玉山登山記念号）1967年12月15日発行
66	1967.7～8	玉山（3997 m）の登頂	**立教大学台湾登山隊** **隊員**＝*江渕繁男(20)長久真三(20) **台湾省山岳協会**＝蔡添文 **行動概要**：7月29日嘉義発，31日東埔—排雲山荘泊，8月1日玉山主山登頂。東山登頂後北山の測候所に

			泊る。2日北山発，排雲山荘を経て東埔へ下山。4日嘉義へ下山。 **文献**：不詳
67	1967.7～8	玉山（3997 m）の登頂	**東京医科歯科大学ワンダーフォーゲル部台湾遠征隊** **隊長**＝渡辺英宣(23)　**隊員**＝川口洋(24)小林英和(24)小川邦彦(23)奥村健臣(23)田中貴信(23) **行動概要**：1月 29 日嘉義発，7月 30 日排雲山荘泊，8月1日 玉山登頂—北山（測候所泊），2日阿里山へ下山，3日嘉義に帰着。 **文献**：東京医科歯科大学ワンダーフォーゲル部部誌「せせらぎ」No. 5（1968 年6月刊）
68	1967.7～8	雪山（3884 m）の登頂	**大阪医科大学山岳会雪山登山隊** **隊長**＝山地良一(46)　**副隊長**＝遠山嘉治(33)　**隊員**＝黒田克彦(33)星野忠康(34)小松淳一(30)島田真久(30)杉山篤男(28)下村守(28) **行動概要**：7月 22 日シカヨウシャ発—ヒョウタン池，23 日雪山山荘跡を経て雪山登頂，ヒョウタン池へ下山。24 日シカヨウシャへ下山。25～27 日シカヨウ社において 原住民の診療を行なう。28 日シカヨウ社発—台中—嘉義—高雄。当初予定していた玉山は森林鉄道不通のため登頂を中止した。 **文献**：未刊
69	1967.10	玉山（3997 m）ならびに雪山（3884 m）の登頂	**金沢工業大学訪華親善玉山・雪山登山隊** **隊長**＝上田孝三(55)　**副隊長**＝竹内繁(41)　**登山隊長**＝小谷勇慶雄(32)　**カメラ・報道**＝新宅順徳(28)　**隊員**＝島謙司(21)山下忠雄(20)乙丸純一(19)千田豊(20)田島憲章(19)　**ガイド**＝林文安 **行動概要**：台中市の東海大学とフレンド校結成の記念行事として計画された。10 月 16 日台中発—環山—スケラン渓，17 日シカヨウ大山下に BC 設営。18 日は風雨強く停滞。19 日シカヨウ大山より雪山登頂に成功。20 日 BC を撤収して環山へ下山，嘉義へ至る。22 日嘉義発—阿里山，23 日阿里山—タータカ—排風山 荘泊り，24 日玉山に登頂。山頂にて2隊に分かれ，小谷班（4名）は東山，島班（3名）は南山にそれぞれ登頂後，排雲山荘に泊る。25 日阿里山，26 日嘉義へ下山。 **文献**：「部報」（特別号）
70	1967.12～1968.1	玉山（3997 m）および雪山（3884 m）の登頂	**電電九州中華民国登山隊** **隊長**＝藤井康(37)　**副隊長**＝河田博善(39)　**隊員**＝高山栄二(36)塚原司(36)茂村進二(37) *中馬董人(31)曽我浩従(32)高木律生(32)橋本詞央(29)立石俊夫(28)前田岩男(26)山下靖博(28)古庄久則(27)石井文雄(25)清水寛(26)西沢奉雄(23)内田和博(21)上田昌己(36)大坂栄子(26)永

			田瑞穂(25) **行動概要**：玉山隊（13 名）＝12 月 26 日台北発--嘉義。27 日嘉義—阿里山。28 日東埔を経て排雲山荘に BC 設営，29 日 6 名玉山，4 名南玉山登頂。30 日残り全員玉山登頂。31 日 3 名東稜を経由東山登頂。 2 名北山登頂（測候所泊り），1 月 1 日南山。2 日 BC 撤収—多々加泊，3 日東埔—嘉義へ下山。4 日台北に帰着。 雪山隊（7 名）12 月 26 日台北発—環山。27 日環山発—シカヨウ大山。28 日雪山小屋跡（3997 m）に BC 設営。29 日偵察。30～31 日雪山登頂。1 月 1 日 BC 撤収—環山へ下山。 **文献**：電電九州山岳会編「玉山・雪山登山報告書—台湾の 4000 m 峰」
71	1967.12～1968.1	玉山（3997 m）ならびに雪山（3884 m）の登頂	**山形大学山岳部 OB 会有志北海道（置戸）グループ訪華友好登山隊** **隊長**＝*早川禎治(28)　**隊員**＝*亀井英二(27) *桜田昭嘉(26)*中野守成(24) **行動概要**：12 月 30 日嘉義—阿里山。31 日排雲山荘横に BC を設営。1 月 1 日全員にて玉山に登頂後，500 m 程南稜を下り，それより玉山西壁を初下降。 2 日北山を往復，3 日東埔へ下山する。その後 1 月 5 日スケラン渓・大甲渓出合の環山に入り，6 日南稜 2800 m 地点に BC を設営，7 日雪山に登頂。環山へ下山，12 日帰国する。 **文献**：「台湾玉山・雪山登山報告書」(1968 年 3 月発行)
72	1967.12～1968.1	玉山（3997 m）の登頂	**川崎市立川崎高等学校学山岳会台湾登山隊** **隊長**＝渕上正実(30)　**副隊長**＝斎藤昌伯(29)　**隊員**＝桜木郁雄(30)唐木武久(28)具瀬武徳(26) **行動概要**：12 月 30 日台北発—嘉義。31 日嘉義—阿里山。1 月 1 日阿里山—東埔—西山下に幕営，2 日排雲山荘 BH に入り，3 日玉山登頂，4 日東埔へ下山。 5 日嘉義，6 日台北に帰着。 **文献**：同窓会誌「真玉」に掲載。報告書は準備中
73	1967.12～1968.8	玉山（3997 m）登頂	**岩手県高等学校体育連盟登山部玉山登山隊** **隊長**＝福田光男(30)　**隊員**＝伊藤寿(36)菊池修(35)熊谷浩志(31)　**台湾雀山岳協会**＝陣守珪 **行動概要**：12 月 30 日台北発—嘉義。31 日嘉義—阿里山。1 月 1 日東埔を経て排雲山荘横に BC 設営。3 日玉山に登頂。東埔へ下山。4 日嘉義へ下山。 **文献**：「玉山 1967—1968」(1968 年 3 月発行)
74	1967.12～1968.1	玉山四峰の登頂	**長野県山岳協会訪華親善登山隊** **隊長**＝小林保(32)　**副隊長**＝中沢征一(29)　**隊員**＝中沢

			主税(26)太田義孝(25)依田武(22)宮脇行照(20) **台湾省山岳協会**＝陳守珪　**ポーター**＝王天定(42)央金鐘(24) **行動概要**：12 月 30 日台北発—嘉義。31 日嘉義—阿里山。1 月 1 日阿里山—排雲山荘 BC 着。3 日玉山主峰登頂。5 日南山，南玉山の偵察。6 日北山（測候所泊り），7 日北山—BC 下山。8 日 BC 撤収，9 日嘉義へ下山。10 日台北に帰着。 **文献**：不詳
75	1967.12～1968.1	玉山（3997 m）の登頂ならびに周辺の生物調査	**1967 年高知県玉山学術調査隊** **隊長**＝国沢鎮雄(38)　**隊員**＝山岡和興(27)中平清(50)森田新六(39)　**台湾省山岳協会**＝陳守珪 **行動概要**：12 月 30 日台北発—嘉義。31 日嘉義—阿里山。1 月 1 日阿里山—東埔—排雲山荘に BC 設営。2～3 日玉山登頂ならびに周辺の生物調査（積雪のため不可）の後，BC 撤収東埔へ下山。4 日東埔より阿里山までの生物調査。5 日～7 日恒春墾丁，鵞鑾鼻周辺の生物調査。8 日台北に帰着。 **文献**：中平清「台湾探蛛行」1968 年 4 月 6 日発行。公式報告書は準備中

≪1966 年の年表の訂正≫

山岳 62 年 35 頁収載の海外登山年表＝1966 年＝No. 16 第Ⅱ次 R.C.C. カフカズ登山隊に下記の通り誤まりがありましたので訂正願います。

＜誤＞	＜正＞
7 月 18 日にエルブルース（5604 m）を松本，青野が，……	7 月 18 日にエルブルース（5604 m）を奥山が，……

VICTORY®

美津濃

＜札幌＞へのリーダーシップをにぎる…美津濃

アルペン競技用スキー

ブルーインパルス®



〈スラローム〉 SL－61 ￥48,000 グラス FLソール・17－7 PHステンレス長尺L型エッジ・A.B.Sトップエッジ・黒



〈Gスラローム〉 SL－75 ￥43,000 メタル FLソール・17－7 PHステンレス長尺L型エッジ・黒



〈ダウンヒル〉 SL－76 ￥43,000 メタル FLソール・17－7 PHステンレス長尺L型エッジ・黒



〈コンビ〉 SL－77 ￥43,000 メタル FLソール・17－7 PHステンレス長尺L型エッジ・黒

グルノーブルで真価を発揮——

〈オリンピック®〉レーシングウェア

ワンピース・ダウンヒルヤッケ・アルペンスーツ・セーター
スラロームヤッケ……他、オーダーメードうけたまわります

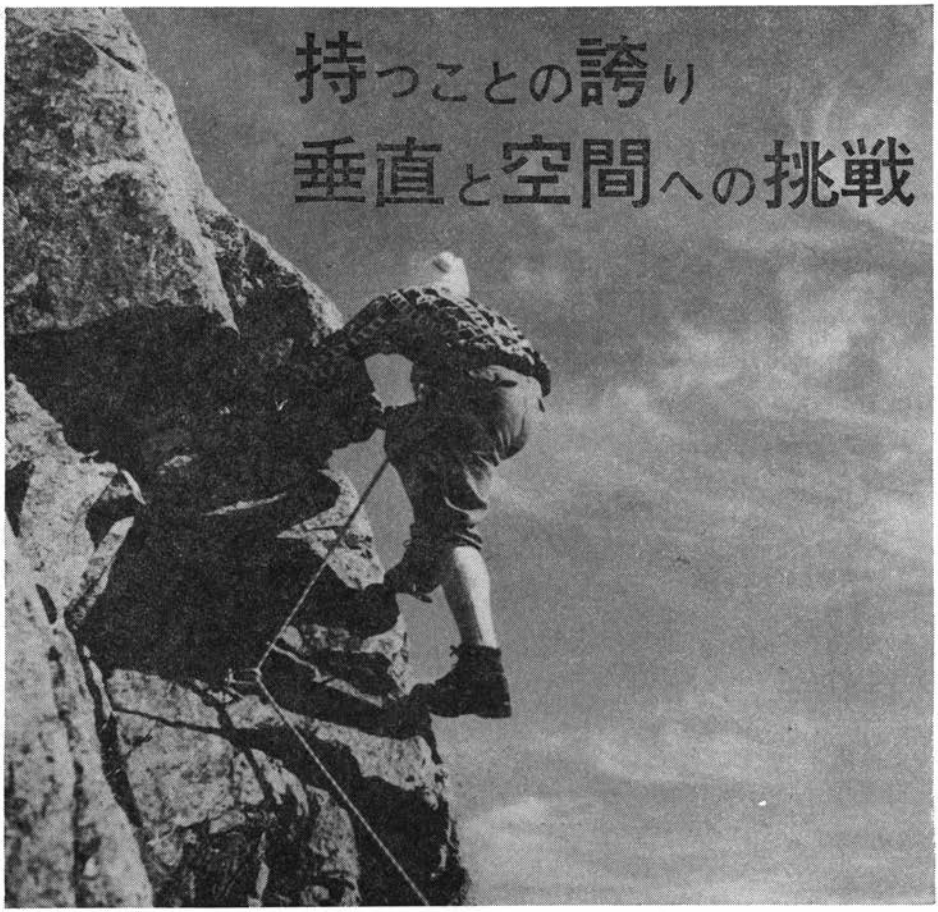
オリンピック Olympic.



美津濃アドバイザリースタッフ
見谷昌禧

大阪本店 淀屋橋・東京支店 神田小川町
養老工場 岐阜県・大阪工場 福島区・四国工場 香川県

この看板の店・デパートで販売しています





マンモス
ナイロンザイル10㎜
スイス製当社直輸入
m に付き￥400



ニュースノーマンバイル
ニッケル・クローム鋼
穴明鍛造刃渡り28㎝
￥4,500



ロックハンマー"ガイド"
最高級鍛造製
人工登攀用
￥3,000



10本爪軽量アイゼン
クローム・モリブデン鋼
厳冬期用ケース付￥6,000

最新の技術と古い伝統が、世界の一流アルピニスト達からの信頼と絶賛を勝得ました。当社の製品は今日も世界の嶺々で活躍しているアルピニスト達の成功のカギとなっています。

日本のトップメーカー

東京トップ

TOKYO TOP CO., LTD, TOKYO JAPAN



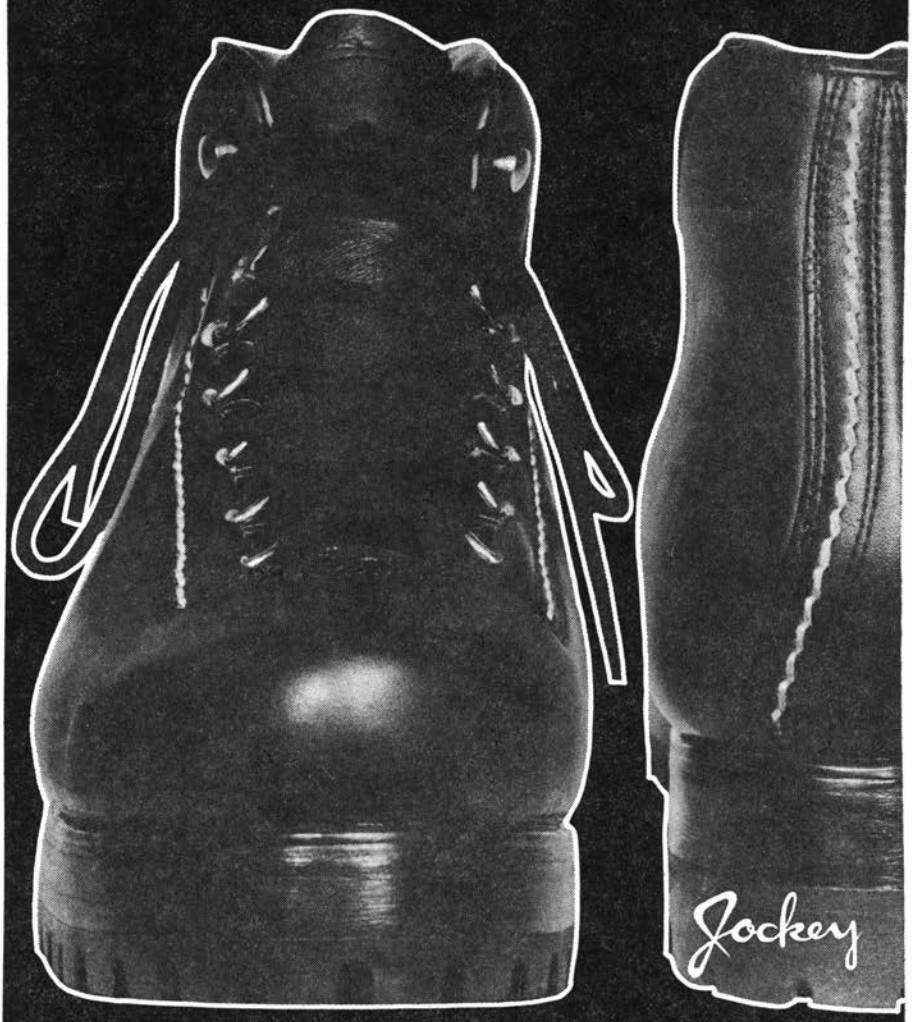
《技術と信頼を誇るエバニュー製品》

●ピッケルグレッチャー,●12本爪アイゼン北壁,●登山ヘルメット滝谷,●クライマーベルト,●ハーケン,●ロックハンマー,●スーパーカラビナ,●アブミ●ザイル,●ホエーブスNo.625,●手付コッヘル

エバニュー

登山・ハイキング・スキー・体育用品の綜合メーカー

ジョッキー



東京／蔵前　ジョッキースポーツ株式会社

計画に無理はないか!?
装備は完全か？
登山靴は
ヒマラヤン印か!?



登山靴ならオニツカのヒマラヤン印にお決めください。かず多くの海外遠征に参加《世界の屋根》を征服した実績がきらめいています。
沢歩きから岩登りまで
あらゆる 登山に最適。
ナイロン製《登山靴》の 最高級品

Onitsuka Tiger

ヒマラヤンSP スーパー 登山靴

オニツカ株式会社 神戸市須磨区寺田町3―1 支店／神戸・大阪・東京



南極で実証ずみ—

ご存じでしょうか。日本南極観測隊の装備をお引き受けしたのは、わたしたちです。防寒服も、防寒靴も、わたしたちがデザインし、制作指導しました。テストにテストを重ね、厳密な低温試験をくりかえし、その努力がみのって、隊員の方々から折紙をつけていただきました。米、英、ベルギー、南ア、オーストラリアにも防寒装備を納入し、優秀な性能は世界的に認められています。冬の装備なら、ぜひ当研究所にお問い合せください。

日本極地装備研究所

東京都千代田区霞ヶ関3—4—2
(商工会館内) TEL (581)1078

ハガスキー

F72シリーズ

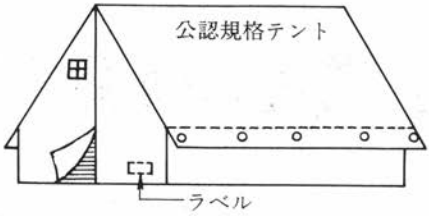
エポキシグラススキー



1 ポリウレタン塗装
2 F72強化プラスチック
3 FRPシート（グラス板）
4 補助板（イタヤ材）
5 空胴板
6 補助板（イタヤ材）
7 FRPシート（グラス板）
8 F72強化プラスチック
9 ポリソール

登山用キャンプテント

キャンプ用テントは安心して御客様におすすめ出来る日本山岳協会公認サイズ・ラベルの付いた品を御指定下さい。



登山用テント部会会員の製作したテントは総て入口下部にラベルが縫付けてあります

日本帆布製品工業会連合会

登山用テント部
東京都中央区銀座4の6の1　三和銀行ビル
電話（561）0231・1820

山友社 たかはし

登山・スキー靴

四谷本店
新宿区三栄町3
TEL(351)1912,7432

八重洲口
中央区八重洲2の5
TEL(271)1560,8575

新宿ステーションビル4階
サービスショップ
TEL (352) 6564



登山とスキーの
日本最古の専門店

好日山荘

東京店
東京都中央区銀座西2の5
電話 (561) 3600・0966
振替 東京113657

大阪店
大阪市北区老松町3の12
日新ビル1階
電話 (364) 0933－4
振替 大阪68763

神戸店
本店 神戸市生田区北長狭通り3-8-19
電話 (39) 4126 (33) 9250
支店 神戸市生田区三宮町1－32－1
電話 (33) 5251

福岡店
福岡市須崎町1－4
電話 (28) 3440

山とスキーの専門店

キスリング
門田ピッケル
〃 アイゼン
夏冬用テント

片桐

東京都文京区湯島3－38－9
片桐盛之助
電話 東京 (831) 1794番
6880番



40年の前進史

マナスル型高所用天幕考案

1952年日本山岳会マナスル偵察隊
全装備納入以来高所用天幕専門
製作・海外遠征隊には各方面より
御使用頂き御高評頂いて居ります

吉田テント　吉田喜義商店

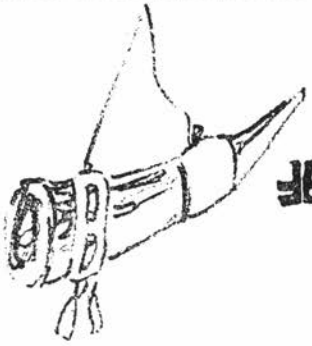
東京都杉並区桃井1丁目3番3号
電話 東京 (399) 2548　(398) 8469 (夜間)

現代アルピニストの
現代的装備

ガリビエール登山靴特約店

山とスキーの専門店 シャモニ

東京都港区新橋5－19－15 Tel.(431)0834



北海道の山の店

秀岳荘

札幌市北13条西4丁目
TEL (72) 1235

実業之日本社の山の本

山のパンセ（上・下）

串田孫一著
B6判／各450円

山を愛し、山で思索した著者が、豊かな感性と知性あふれる山への想いを、ユニークな筆意で綴る山のエッセー

山を考える

本多勝一著
B6判／450円

カナダエスキモー、ベトナムなどの報道で、世界の注目を集めた著者が山を対象につづった紀行と現代登山論。

山の博物誌

ブルーガイドブックス
西丸震哉著
四六判／360円

山とそれをとりまく自然ー動物、植物、自然現象などを、著者の知識と体験とをフルに発揮し、とらえた異色編

山菜記

片岡　博著
B6判／560円

山菜ーそれは懐かしい土の香りをただよわせるふるさとの味だ。豊富な図と流麗な筆で綴った新鮮な随筆集。

毒舌旅行

西丸震哉著
B6判／560円

登山家、探検家、そして科学者である著者が文明社会に毒された現代人の自然への解放を痛烈、明快に訴える快著。

実業之日本社　〒104　東京都銀座1－3－9振替東京326

山溪カラーガイド

山、旅、自然の科学、スポーツ、芸術、風俗を迫力あるカラー写真と適切な解説で紹介するユニークなガイド。現代人の欲求を満たす好企画で続々登場

庭の花 1・2

〈最新刊〉
21・22カラー



随想／今井徹郎
解説／堀江聡男

心に安らぎと深い愛情を呼びおこしてくれる身近に咲く美しい園芸植物一六〇余種を二冊に収録。各品種ごとに花にまつわる随想、簡潔な特長と栽培法、学名、写真倍率を付した家庭園芸の必携書。

鎌倉

20カラー

富岡畦草著



千年の歴史を秘めて、いまなおひっそりと息づく古都鎌倉の風光と人文に秀れたカメラで歳時記風に紹介する。美しい文章は鎌倉の今昔をよく伝え、詳細な二色刷地図は散策の折のよい手引きとなろう。

好評発売中

●B6変型判
カラー一〇〇余点
本文九六ページ
各冊四八〇円

1 山の花Ⅰ
2 日本の山々
3 日本のまつり
4 九州
5 山の花Ⅱ
6 尾瀬
7 上高地
8 世界の山々
9 山のうた
10 スキー
11 日本の野生動物
12 13 野に咲く花1・2
14 北海道
15 雲その生態と天気予報
16 空から見た北アルプス
17 京都
18 四国
19 湖の旅
20 鎌倉
21 22 庭の花1・2
●以下続刊

東京・麹町局区内 **山と渓谷社** 振替（東京）60249

あかね書房・山岳図書

＊ヒマラヤの名著古典を網羅した決定版！

ヒマラヤ名著全集 全12巻 別巻2巻



編集委員
深田久弥
諏訪多栄蔵
吉沢一郎

①ヒマラヤの謎の河 ベイリイ／諏訪多栄蔵・松月久左訳（一三〇〇円）
②カンチェンジュンガ一周 フレッシュフィールド／薬師義美訳（一二〇〇円）
③エヴェレストへの闘い ノートン／山崎安治訳（一〇〇〇円）
④ネパール・ヒマラヤ ティルマン／深田久弥訳（近刊）
⑤無名峰の聳える国 ティッヒー／福田宏年訳（一三〇〇円）
⑥神々の御座 ハイム／ガンサー／尾崎賢治訳（一四〇〇円）
⑦ヒマラヤの五か月 マム／丹部節雄訳（一〇〇〇円）
⑧ナンガ・パルバート登攀史 バウアー／横川文雄訳（12月刊）
⑨カラコルムの夜明け コンウェイ／吉沢一郎訳（一五〇〇円）
⑩地図の空白部 シプトン／諏訪多栄蔵訳（一〇〇〇円）
⑪ティリチ・ミール登頂 ノルウェー隊／吉沢一郎訳（一二〇〇円）
⑫カラコルム登山史 ダイネッリ／河島英昭訳（近刊）
別巻1 ヒマラヤ巨峰初登頂記 ファンティン編／牧野文子訳（近刊）
別巻2 ヒマラヤ事典（近刊）

●カラー地図／カラー口絵つき／菊判豪華装

現代アルピニズム講座 第II次RCC編 全6巻 別巻1

●69年1月完結

＊山に挑むすべてを実証的立場から系統的に解明！

①アルピニズムの歴史
②登攀用具と装備
③岩登りとグレード
④積雪期登攀と設営技術
⑤人工登攀とスーパー・アルピニズム
⑥岩と雪の遭難対策
別巻 海外登山と世界の山（最終配本＝1月下旬）

☆各巻ともカラー4頁・口絵32頁つき・四六判箱入＝各四八〇円

あかね書房／東京都千代田区西神田3－2－1 〒101／電話東京(03)263—0641〈代〉

登山・ハイキングシリーズ

定評ある
コースタイム入精密地図と案内書

①奥武蔵・武甲山・三峰・坂倉登喜子他
②奥多摩・大菩薩嶺・梶玲樹・他
③奥秩父・金峰～甲武信～雲取・乾徳・横山厚夫・他
④陣場高原・高尾山・秋川渓谷・馬場圭二・他
⑤丹沢山塊・羽賀正太郎他
⑥富士と五湖・三ツ峠・渡辺正臣
⑦箱根・湯河原・熱海・渡辺正臣
⑧奥日光・奥鬼怒・川崎隆史・章
⑨尾瀬と檜枝岐・会津駒・白籏史朗・一
⑩軽井沢・神津牧場・妙義・渡辺正臣
⑪伊豆半島・大島・渡辺正臣
⑫三浦半島・江ノ島・鎌倉・本保昭・逢
⑬箕ケ原・霧ケ峰・高ボッチ・坂倉登喜子
⑭谷川岳と上越温泉郷・川崎隆章
⑮八ケ岳・蓼科高原・山口耀・久男
⑯那須・塩原・鬼怒川・人見義男・治
⑰磐梯・吾妻・安達太良・深沢達也
⑱志賀高原・草津白根・下達也
⑲上高地・乗鞍・早乙女緩次・他
⑳黒部・白馬・鹿島槍・川口邦雄・逢
㉑房総半島・本保昭・逢
㉒浅間高原・鹿沢・菅平・掛川昭一
㉓蔵王連峰・松島・衣袋賢二・他
㉔八幡平・岩手山・秋田駒・村井正・衛
㉕霧ケ峰・白樺湖・蓼科・坂倉登喜子
㉖雲ノ平・黒部源流・槍穂高・伊藤正一・ヌ
㉗妙高・戸隠・野尻湖・黒姫・グループ・ド・モレーヌ
㉘南アルプス・夜叉神峠・入笠山・白籏史朗
㉙中央アルプス・木曽駒・木曽御岳・塩沢一郎
㉚南アルプス南部・井川湖・白籏史朗
㉛北アルプスの全貌・山下喜一郎他
㉜加賀白山・白川郷・医王山・出村健治他
㉝飯豊・朝日連峰・衣袋賢二
㉞大雪山・層雲峡・然別湖・中条良作他
㉟槍・穂高・アルプス銀座・小林俊樹
㊱立山・剣・黒部渓谷・大塚大

51金剛・岩湧山・葛城山系・宮川良彦
52六甲・摩耶・中村勲
54比良・京都北山・角倉太郎
56大峰の山と渓谷・御勢久右エ門
57大台ケ原・大杉谷・高見山・
59奥高野・龍神温泉・湯の峰温泉・仲西政一郎
60赤目・青山・室生付近・水町進他
61鈴鹿連峰・御在所・伊吹・熊沢友三郎他
62大山・蒜山・佐野勇一
63帝釈峡・三瓶山・備北山群・加藤武三
64秋吉台・三段峡・芸北山群・加藤武三
65九重・飯田・久住・万年山・加藤数功他
66英彦山登山と耶馬渓探勝・仰木政次郎
67阿蘇登山と周遊・熊本県岳連
68平尾台・福智山塊・月原俊二

定価　150円～200円

ニッチ
地図専門の
日地出版

本社〒101　東京都千代田区西神田1－2－15
振替　東京195917　TEL(261)5126～8
支店〒542　大阪市南区安堂寺橋通3～60
振替　大阪28570　TEL(252)7421

●山の限定本！　予約募集！直接本社にお申込みください

●原書の豪華さをそのまま生かす！

アイガー

北壁での直登三〇日の記録

ヨルク・レーネ／ペーター・ハーク／横川文雄訳

限定一、〇〇〇部　¥三、八〇〇

B5変型判／カラー16／モノクロ40／総アート／別刷ルート図付／豪華箱入

画期的なスーパー・ディレッティシマに成功したドイツ隊の輝しい登攀記録

霧の山稜

加藤泰三著　限定二、〇〇〇部

山のこころをしみじみと伝える山岳画文集として有名な名著に、多色刷りを加えた豪華決定版　予価¥一、五〇〇

山の朝 朝の山

日高信六郎著　限定二、〇〇〇部

日本山岳会の長老として、登山生活五十余年にわたる多彩な山歴の作品からよりすぐり、初めて世に問う話題作！　予価¥一、五〇〇

二見書房
東京都千代田区三崎町2

深田久弥・長沢和俊著

シルクロード

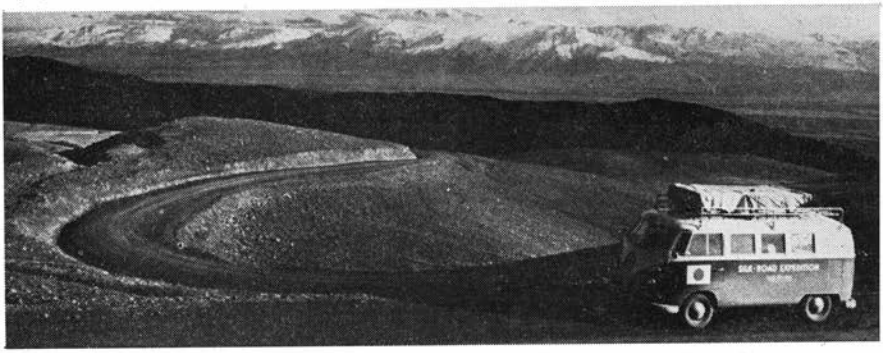
白水社
東京神田小川町3
振替 東京33228

—過去と現在—

東西文化のかけ橋として歴史の興亡を経てきたシルクロードは今ふたたび新しい時代の脚光を浴びようとしている．廃墟に立って往時を想い，近代化した街角で明日の繁栄を予感するユニークな旅行記．

写真多数　付／地図二面

合判／270頁
写真40頁
定価1200円



世界の地誌を克明に一望する　《好評発売中》

PERGAMON WORLD ATLAS

サイズ33 cm×40 cm／総頁 525／10 色刷／地形図 200／主題図 450（人口，気候，地下資源，生物分布など）

特 価　¥ 17,500　(定価 21,600)

—本アトラスの特色—

- 地形図は，そのほとんどが二つ折り・三つ折り頁を使用し，類書にくらべてひときわスケールが大きく，鮮明で落ちついた感じの多色刷り，上質紙を使用した各図面は，東欧のすぐれた地図製作技術により，非常に格調高い仕上がりを見せております。
- 450 の主題図が国別に 収録されており，各国の紋章，国旗，簡単な歴史，その国の特徴が説明され，世界地誌の学習に最適です。
- 豊富な主題図，最新資料に基づく統計，ユニークな各種地図は，一般的利用を越えた専門家の方々の研究活動にも大変有用です。
- 製本は，ルーズリーフ形式で，学習や研究に，旅行に，また複写にも，必要ページが簡単にとりはずせる便利さを備えております。

■ 内容見本送呈

Pergamon Press, Oxford

日本総代理店

丸善
東京・日本橋
振替 東京5番

ジャヌーへのたたかい

ジャン・フランコ／リオネル・テレイ　近藤等訳

ヒマラヤの〝恐怖の峰〟と呼ばれ、難攻不落を誇る大城砦ジャヌー。フランスアルピニストの精鋭たちは大自然がつきつける「不可能」に挑んで人間精神の力を証し、始源的なものとの交感と歓びに浸る。簡勁な文章と華麗な写真20枚がその感動を伝える。

定価８８０円

忘れえぬ山

串田孫一編　全3巻　●各７８０円

愛する日本の山々を描いた岳人たちの名紀行！

●第1巻＝一月の日高山脈・摩周湖・早池峰山から堺の明神へ・剣ケ倉沢から平ケ岳・氷雪の富士行他　●第2巻＝雪と森林・十勝岳紀行・谷川岳と穂高岳・笛吹川を溯る他　●第3巻＝知床日誌大雪山紀行・南会津朝日ガ岳他　A５変型判函入

東京神田小川町2　筑摩書房

古本の買入と販売

山岳書
国文学・漢文
全集・叢書
錦絵・和本
名士の書簡
色紙・短冊

地方も出張いたします

〒101
東京都千代田区神田神保町一ノ三
㈲悠久堂書店
電話（二九一）〇七七三番
〇九二〇番

頭痛・歯痛・神経痛

痛みの激しいとき　おためしください

ハイグレランの強い鎮痛力は新開発成分セコピラピタールによって発現．さらに活性ビタミンB₁（ジベンゾイルチアミン）などを配合して、その効果をいっそう助長強化しました．



"良いクスリ　正しく使って明るい家庭"——ハイグレランをご使用のときは、お近くの薬局・薬店でご相談ください

ハイグレラン錠

ピリン系薬剤に過敏な方は服用できません　6錠　12錠

ピリン系の薬剤に過敏な方は、薬局薬店で——非ピリン系 鎮痛・解熱剤 チプロン錠

武田販売

製造 グレラン製薬　販売 武田薬品



あなたの
グロンサン
必要度は？

飲み過ぎ・二日酔い・肝障害
食欲不振・全身がだるい・瞼がピクピクする・息切れ・動悸がする・肩がこる・腰がいたむ
その他
黄疸・妊娠悪阻（つわり）・脚気じんま疹・小児ストロフルス・薬物中毒・食中毒・自家中毒・耳鳴り・難聴・夜尿症などに……

肝臓障害　神経痛　疲労回復に
新グロンサン錠
50錠 100錠 250錠 500錠
中外

ヤッホー

交通公社の

周遊券は

べんりでおとくです



ご出発の安心感　お帰りの満足感
日本交通公社

忘れえぬ山旅

三笠書房
東京都新宿区戸山町３５
振替口座東京２２０９６

■ 田部重治著 ●Ａ５判上製貼箱入￥1,800〒120

もっとも日本的な山を追求して50年、近代日本の登山とともに歩んだ足跡をここに回顧し、かずかずの山の名作を一冊にまとめた記念碑！　年譜・文献・解題を付す。（他に特装百部限定版あり）

山とある日　上田哲農 画文集　￥1300〒120
岩の呼ぶ声　藤木九三　￥1300〒120
谷川岳の岩場　山学同志会　￥1400〒120

《サンワ》で
しっかり
貯めましょう

みなさまのお役に立つ
三和銀行



のどのかわきが
ピタリととまる！

下痢・腹痛
食あたり
水あたり

全国の薬局・デパートにあり

佐藤ライトの
梅肉エキス



トロフィーならおまかせ下さい

■たえず外国のデザインを直輸入しそれをアレンジして製作

《営業品目》

バッジ・メダル・バックル・名札・キーホルダー・トロフィー・優勝旗・金属看板・ネームプレート・プラスチックマーク・カップ・七宝焼・マーク・ワッペン・ペナント・タイ止・其他記念品・ステッカー・ワッペンマーク・織物ネーム

株式会社 アジア

東京都千代田区飯田橋2丁目8番5号
〒102 ☎ 263－4741(代) シナヨイ
☎ 261－4095(夜)

オートメーションの
完全体制を推進する

横河の電気計測器と
本山のコントロールバルブの御用は

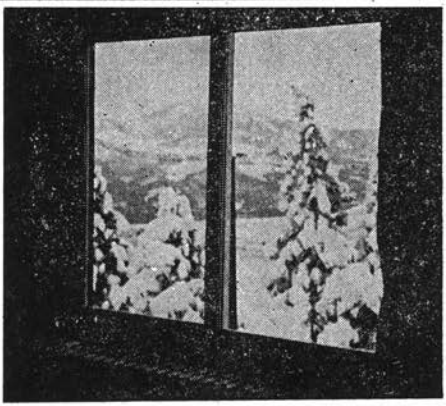
SUN

横河電機製作所
本山製作所(仙台)
代理店

有信計器株式会社へ

取締役社長 神谷 恭 (JAC－744)

横浜市花咲町4－117 中銀ビル TEL (23) 6551－3番



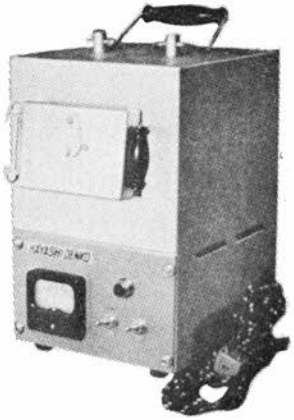
山小屋の窓もアルミでお化粧
木造建築用サッシの決定版
不二のホームサッシDFK
防犯用電子ロック附

● お問合せはお気軽にどうぞ

ガラスとサッシ
池田ガラス建材株式会社
代表取締役 池田光二(会員)
東京都練馬区氷川台4－35－9 (176)
TEL. 03－934－3201(代)

七宝焼

電気炉・絵具・材料



林電工が電気炉と材料を売り出してから
七宝焼が家庭で手軽に出来る手工芸として
て日本中に広まったのです。
一度お気軽に御来店下さい。

カタログ送呈

東京都千代田区神田神保町1の32　TEL.(294)5486

林電工株式会社　工藝部

代表取締役　林　和夫

Electric

Cable & Wire

藤倉電線・西日本電線代理店

播州電機株式会社

大阪・東京・名古屋・札幌・姫路・広島・福岡

ビルの美しい装いに
カーテンウォール
オフィスやご家庭の窓に
アルミサッシ

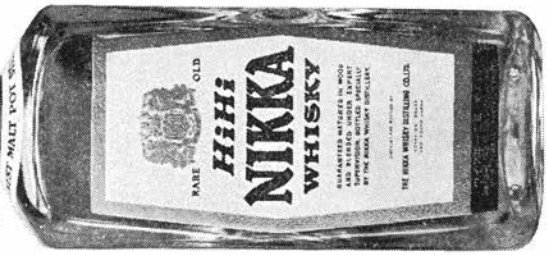


日本建鉄
東京都千代田区大手町２－８(日本ビル)
ＴＥＬ.270－６５１１(大代表)

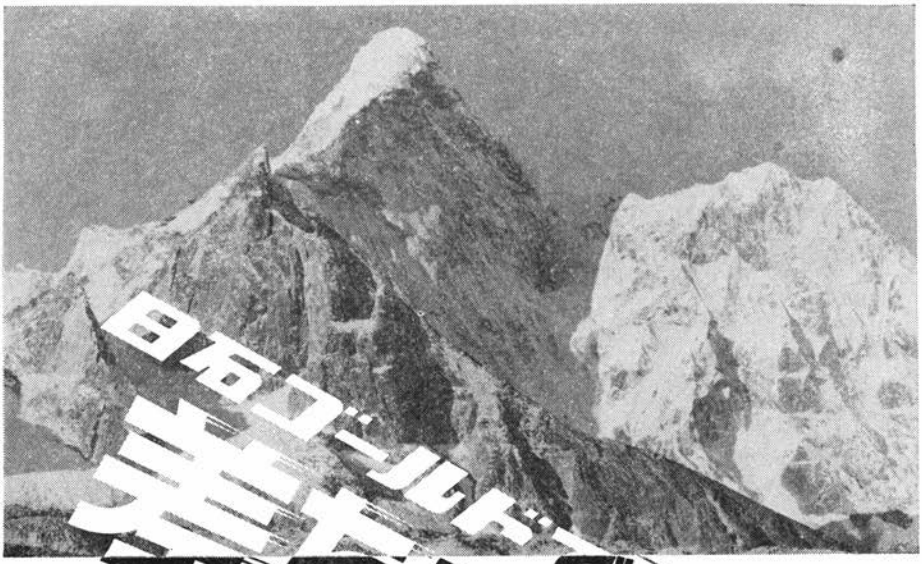
記録破りの
ソフトウイスキー



さあ――――
すいすい飲ろう!!



いちばんソフトな口あたり
ハイニッカ
500円
ニッカウヰスキー株式会社



日石ゴールドで差をつけよう



オクタン価 100 突破!

街で差をつけよう——
ハイウェイで差をつけよう——
坂道で差をつけよう——
長距離ドライブで差をつけよう——

日石ゴールドガソリン

日本石油

実力のあるガソリンをお選びください

安全な高速走行に
ブリヂストンのラジアル・11（イレブン）



欧米の一級ラジアルタイヤをしのぐ数々の性能が，実証ずみです！

活動派向きのオールシーズン用タイヤ

- 高速耐久性が抜群です
- 高速でフラツキがなく安定した走行
- ハンドルの切れがシャープ
- 高速で急カーブが曲がれます
- すぐれた制動力
- 雨の日も安心な耐スリップ性

3タイプの中から選べます

ブリヂストンでは〈ラジアル－11〉の他、ファミリードライブ・ビジネスドライブ用に〈ラジアル－10〉、雪路のドライブ用に〈ウインターラジアル〉のラジアルシリーズをそろえています

高速にもっとも安全なタイヤ

BS ブリヂストン



奥様の腕が光ります！

主原料にエスビーの純カレー
あの有名な赤カン。
世界各地から集めた三十数種もの香辛料が、ぜいたくに使われています。
これをベースにしました。

まろやかな味を加えるクロレラ入り
健康の緑藻類・クロレラを入れました。カレーの辛味と酸味を整えて、だんぜんおいしくしました。

油くささのない純良ラードを使用
即席カレーに共通の、あの油くさいにおいがなくなりました。
高価な純良ラードを使ったので、溶けるのも早く理想的です。

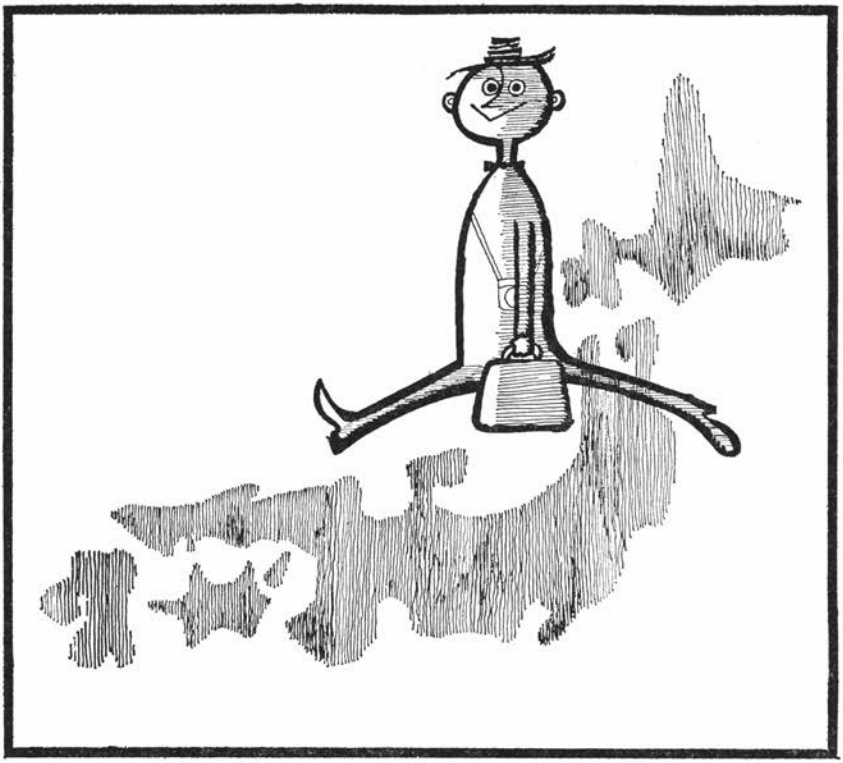
一流レストランとおなじ
いままでドロッとしたカレーをお作りになっていた奥さまも、おためしください。ゴールデンカレーならではの味を、お楽しみいただけます。

ジャガイモを入れないのがコツ
香りを逃がさず、シャープな味を作るためです。すばらしい味と香りで、奥さまの腕が光ります。

S&B GOLDEN ゴールデンカレー

●クロレラ入り……7皿分 ¥100円

エスビー食品株式会社



●お気軽な海外旅行を

どんなに旅慣れたお方でも海外旅行はなにかとめんどうなもの。まして視察研究留学の旅はなおさらです。煩雑な手続や日程作成、手配などはすべて専門家におまかせください。

海外一流業者と提携した日通観光のサービス網は、団体はもちろん、あらゆる旅行のお世話をいたします。

お問合せはお近くの日通支店観光課又は日通東京航空支店へどうぞ。

東京都港区新橋一―五―二

(電)五七一・八四八一

日通 日本通運

日本団体生命はわが国における
グループ保険の開祖です。
個人保険も
登山保険も行なっております。

本店・東京都千代田区丸の内２－１
電 話（281）3211（代表）
小伝馬町別館（役員室，総務部他）
電 話（662）3311（代表）
・東京都中央区日本橋小伝馬町3－2
支店（大阪・名古屋・福岡・札幌）
支社（東京他 25）

昭和生れのホープ

日本団体生命

《協和は》
あなたとおとなり同志



預ける・借りる・たのむ　このような
ふだんあなたが　必要となさっている
ご用を　おとなり同志の気安さで　協
和がこころよくお引受けします。

協和銀行

資本金180億円／本店 東京丸の内／店舗数 全国225ヵ店

スキー、ゴルフに信夫高湯温泉へ
吾妻スカイラインの表玄関
福島よりバス50分、ハイヤー25分

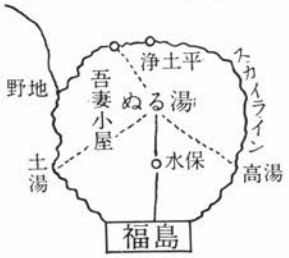
日観連
日本交通公社 協定

吾妻高原ホテル

TEL 庭坂 (024594)-78

登山に、湯治に、保養に
吾妻連峰920mの高原

福島 ——バス— 水保 ——サービスカー— ぬる湯



福島県観光連盟・協定

ぬる湯温泉

連絡先 TEL 佐倉 (024504)-63
近く開通します。

表吾妻唯一の山小屋
電燈、風呂、寝具、完備

夏期スカイライン浄土平駅より7分
冬期ぬる湯♨より100分、信夫高湯♨より200分

吾妻小屋

問合わせ ぬる湯温泉

スキーに良し、登山に良し、皆様のおいでをお待ちしております。

吾妻連峰の東麓 標高750メートルにある高湯温泉は福島盆地の広がりを前に硫黄の匂いがたゞよう高原のいで湯でございます。

収容人員　170名様　客室45室

宿泊料金	1200～3000円	朝　食	250～500円
半　泊	800～1200円	中　食	250～500円

吾妻スカイラインの入口

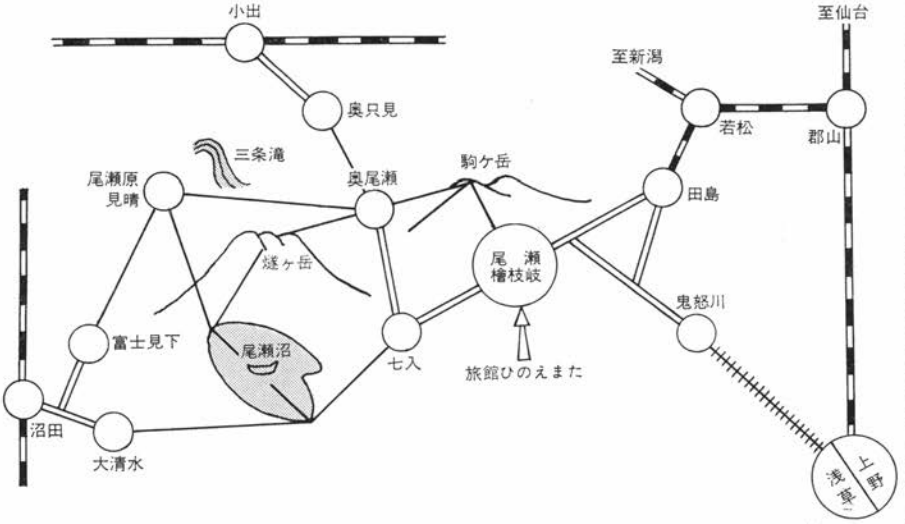
高湯温泉

HOTEL ADACHIYA 安達屋

TEL 庭坂(024594)170～2
東京案内所 (561)1245～6

尾瀬には奥がある
伝統のふるさと
尾瀬檜枝岐

花と池塘と原生林
人跡未踏の魅力ある奥尾瀬



福島県南会津郡檜枝岐村

旅館 ひのえまた

日本交通公社協定

東京連絡所
豊島区長崎１－１３－３
電話　東京（03）９５７－２０９３

橘　喜一郎
電話　檜枝岐２２番
郵便番号　９６７－０４

新野地温泉



相模屋旅館

スキーと登山の基地、岳人の宿



福島市土湯温泉町野地1
相模八郎

◇茗溪堂の山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1
電話東京291局9442／振替東京24723

＊すこし昔の話《近刊》
初見一雄著／B6判箱入り上製本・本文 380ページ・写真12ページ／予価 ￥980／現在では一番行きにくい北辺の北千島　樺太をはじめ札幌や松本周辺での楽しい青春の物語り集

＊雪山・藪山《新刊》
川崎精雄著／A5変型箱入り上製本・本文330ページ・原色版2・写真16ページ／￥1200／東北や会津　越後の山々に魅せられた著者の詩味豊かな紀行と随想集で俳句も一部収めた

＊遠い山　近い山《新刊》
望月達夫著／B6判箱入り上製本・本文 304ページ・写真14ページ／￥ 960／ひっそりとした山や峠の記行で炉辺閑話のような気易さで　この遍歴がいかに楽しいかを山仲間に語りかけている　（別に背皮限定版￥3500）

＊キンヤンキッシュ1965《新刊》
東京大学カラコルム遠征隊編／B5変形判箱入り上製本・本文 220ページ・写真60ページ／￥3000／白木教授以下隊員14人がカラコルム地方のヒスパー氷河流域に残る未登のキンヤンキッシュ7852メートルに挑んだ苦闘の記録で紀行や計画　反省のほか　各隊員が専攻分野を担当した学術調査の集録でもあります

＊登頂ゴジュンバ・カン――明大隊の記録
高橋進編／A5判箱入り上製本・本文 328ページ・カラー16ページ・地図2枚／￥ 900／明大ヒマラヤ登山隊の記録で　登山技術や理論をぬきにして　エピソードをふんだんにいれ　正直に徹した異色のヒマラヤ登頂報告書

＊屋久島――美しい豊かな自然
赤星昌編／B6判・本文 197ページ・口絵写真4ページ・付録に屋久島山岳概念図／九州の最高峰をもつ屋久島の自然と民俗のすべてがまとめられたハンドブック　観光や登山案内書として正確な新しい情報を提供している

＊森林・草原・氷河
加藤泰安著／A5判箱入り上製本・本文 448ページ・写真25ページ・3色刷り地図3枚／￥1500／日本山岳会の重鎮である著者の蒙古・ヒマラヤ・ニューギニアと30年にわたる探検と登山の紀行集で　格調高いエッセイも収録されています　（別に背皮限定版￥3000）

＊雪原の足あと・坂本直行画文集
B5判布装本・原色画41挿画69・200ページ／￥2800／30年間　開拓のクワを持つかたわら好きな山をながめ登ってきた異色画家が　愛する北海道の自然を文と絵でつづった画文集

＊山日記――1969年版《新刊》
日本山岳会編／A6判ポケット型・400ページ／￥ 450／赤いカバーでおなじみの岳人にすぐ役立つ山岳手帳　39年の歴史を重ね　いよいよ充実　新鮮な内容と確実な記事がいっぱい

＊山で唄う歌《再版》
戸野昭・朝倉宏編／A6ポケット型／I ￥240 II ￥280／山で歌を唄う人たちの気持にピッタリ合った歌集　カットのピッケルや山岳会のマーク　山の線描スケッチがまたたのしい

＊南極新聞
1956～7年／南極研究会編／B5判・横トジ／￥ 600／第1次南極観測隊の記録　男ばかりの世界に設立された南極新聞社の日刊新聞縮刷版　南極観測隊の活動を　ことごとく網羅

権威ある執筆陣！豊富な内容！

無機化学ハンドブック
無機化学ハンドブック編委員会編　定価 5,500円

有機化学ハンドブック
有機合成化学協会編　定価 9,500円

機器分析ハンドブック
機器分析ハンドブック編集委員会編　定価 5,000円

窯業工学ハンドブック
窯業協会編　定価 8,500円

石膏石灰便覧
石膏石灰研究会編　定価 1,800円

粘土ハンドブック
日本粘土学会編　定価 5,500円

都市ガス便覧
田中義高編　定価 750円

気象学ハンドブック
気象学ハンドブック編集委員会編　改訂中

生物化学ハンドブック
生物化学ハンドブック編集委員会　定価 3,000円

微生物学ハンドブック
微生物学ハンドブック編集委員会編　定価 3,000円

栄養学ハンドブック
栄養学ハンドブック編集委員会編　定価 2,500円

公衆衛生活動ハンドブック
公衆衛生活動ハンドブック編集委員会編　定価 2,500円

騒音対策ハンドブック
日本音響材料協会編　定価 4,000円

土木工学ハンドブック　（B5判）
土木学会編　上巻・下巻 各 定価 7,000円

土木工学ハンドブック　（A5判）
土木学会編　定価 布－8,000円 皮－10,000円

土質工学ハンドブック
土質工学会編　定価 7,000円

防災ハンドブック
防災ハンドブック編集委員会編　定価 5,500円

建築音響工学ハンドブック
日本音響材料協会編　定価 4,000円

化学用語辞典
同編集委員会編　定価 900円

化学実験ハンドブック
同編集委員会編　定価 800円

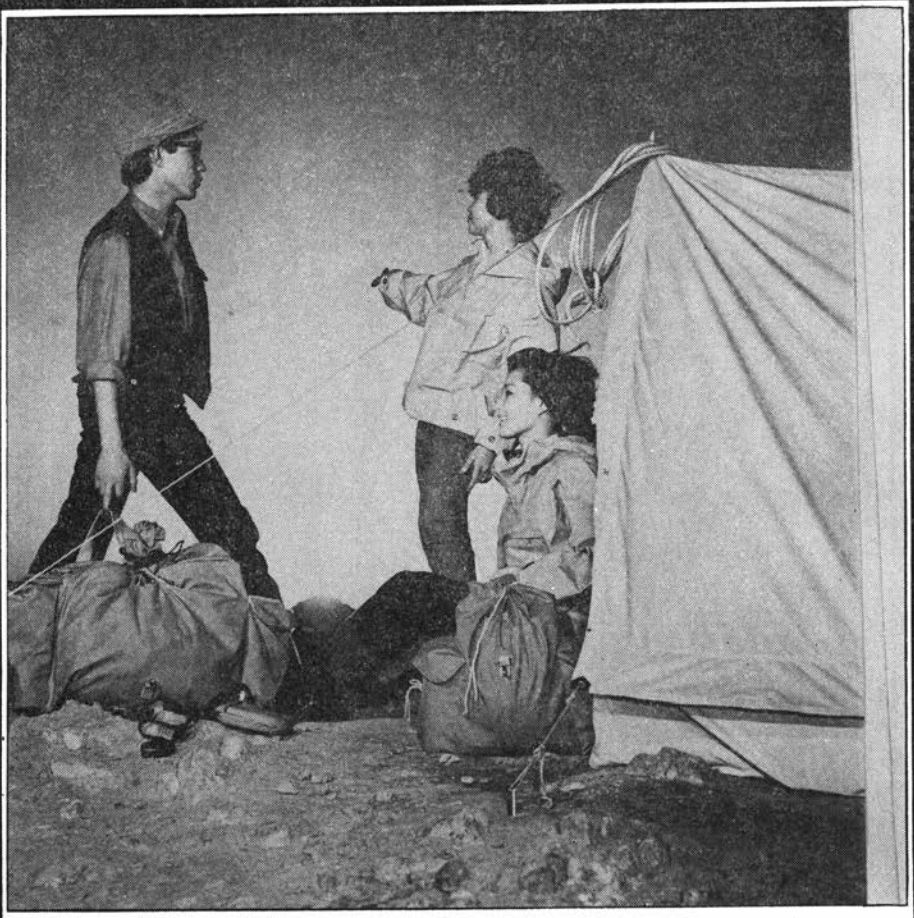
建築用語辞典
同編集委員会編　定価 2,500円

機械工学用語辞典
同編集委員会編　定価 1,200円

電気工学用語辞典
同編集委員会編　定価 1,800円

■ 図書目録請求下さい。■

東京都港区赤坂1－3－6　技報堂



未知に挑戦するとき

クレモナの良さが集結する。強い扱いやすい！風雨、紫外線にビクともせず、黙々とその威力を発揮します。あらゆる試練に耐え抜く山男の根性をそのまま受けついだクレモナ。ヒマラヤから南極まで広く各地で信頼をあつめています

クラレビニロン
クレモナ®

登山用品

テント・シート・ルックザック・アノラックなど
倉敷レイヨン株式会社
大阪市北区梅田8・東京都中央区日本橋通3の1

「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。
一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。
一、原稿は返却しない。
一、研究並に紀行には、その概要を付けること。
一、紀行にはなるべく概念図を添付すること。
一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。
一、地名、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。
一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。
一、校正は編集者に一任されたい。

送り先　東京都千代田神田錦町三ノ二三（向井ビル内）
日本山岳会「山岳」編集部

編集委員
望月達夫　大竹一治　松山美次　中野勇
田崎寛雄　田塚博　上島成
安達寛

一九六九年三月三十日発行
山岳　第六十三年
（通巻一一二号）
定価　二二〇〇円

東京都千代田区神田錦町三ノ二三（向井ビル内）
発行所　社団法人　日本山岳会
電話東京二九三局七四四一
振替口座　東京　四八二九番

日本山岳会内
編集兼発行者　望月達夫
印刷　株式会社　技報堂
写真版　光村原色版印刷所
製本　株式会社　三水舎

東京都千代田区神田駿河台二ノ一
発売所　株式会社　茗渓堂
電話東京二九一局二八八一番
振替　東京　二四七二三番

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁ずる。

アタック成功…ハイ・ドウゾ！



感激の第一声から緊急連絡までボタン1つでOK！

アタック・パーティとベースキャンプ間など、離れた所と無線で連絡できる便利さ！安全な登山が、スピーディにできます。もちろん感度はグンと良好。軽く　使いやすさも満点です。

●同じ周波数のセットを3台以上併用すると、グループ間の相互連絡がさらにはかどります。

サインコール
新しい登山用具

RJ−5　現金正価(1台) **8,800円**
(50mW)　月賦定価(6回) **9,200円**

現金正価　(2台1セット) **17,600円**
(防滴ケース・イヤホーン・電池つき)

姉妹品……
強力タイプ　RJ−11 (100mW)
現金正価 (1台) **14,000円**
月賦定価 (10回) **14,700円**
(防滴ケース・イヤホーン・電池つき)

ナショナル
松下電器

ナショナルトランシーバ



登頂に
観測に

このマークがお
伴いたしました

(1)	1936年	立教大学	ナンダコート登山隊
(2)	1952年	日本山岳会	マナスル踏査隊
(3)	1953年	〃	登山隊
(4)	1954年	〃	第二次マナスル登山隊
(5)	1954年	京都大学	アンナプルナ登山隊
(6)	1955年	〃	カラコルム学術調査隊
(7)	1956年	日本山岳会	第三次マナスル登山隊
(8)	1957年	文部省学術会議	南極予備・本観測隊
(9)	1958年	神戸大学	パタゴニア登山隊
(10)	1958年	深田隊長	ジュガールヒマール探査隊
(11)	1959年	日本山岳会	ヒマールチュリー登山隊
		日本教育テレビ	
(12)	1959年	毎日新聞	雪男学術探検隊
(13)	1960年	明治大学	アラスカ学術調査隊
(14)	1960年	同志社大学	アピ遠征隊
(15)	1960年	早稲田大学	アジア，ヨーロッパ大陸横断隊
(16)	1961年	大阪大学	ピーク29遠征隊
(17)	1961年	全日本山岳連盟	ビックホワイトピーク遠征隊
(18)	1961年	早稲田大学	エクアドル・アンデス遠征隊
(19)	1961年	上智大学	南米事情調査隊
(20)	1962年	全日本山岳連盟	ビックホワイトピーク第2次遠征隊
(21)	1962年	京都大学	サルトロカンリ遠征隊
(22)	1962年	ビルマ国山岳会	シッキム・ヒマラヤ登山隊
(23)	1963年	電電九州	ヒムルン・ヒマール登山隊
(24)	1963年	日本鱗翅学会	ヒマラヤ蝶蛾調査隊
(25)	1963年	同志社大学	サイパル遠征隊
(26)	1963年	都立大学 大阪府立大学	合同東部ネパール学術調査隊
(27)	1964年	北海道大学	アンデス，アマゾン探検隊
(28)	1964年	北海道大学	アラスカ学術探検隊
(29)	1964年	早稲田大学	エクアドル・アンデス遠征隊
(30)	1965年	早稲田大学	ローツェ・シャール遠征隊
(31)	1965年	明治大学	ゴジュンバ・カン遠征隊
(32)	1965年	防衛大学	ロ一ガン登山隊
(33)	1965年	富山泊山岳会	中部ネパール遠征隊
(34)	1965年	亜細亜大学	ヨーロッパ走破隊
(35)	1966年	エーデルワイスクラブ	ペルー・アンデス遠征隊
(36)	1966年	日本グルジア友好登山協会	カフカズ遠征隊
(37)	1966年	RCC II	ヒンズー・クシュ登山隊
(38)	1966年	文部省学術会議	南極観測隊
(39)	1967年	中央大学	ヒンズークシュ登山隊
(40)	1967年	千葉岳連	ヒンズークシュヒマラヤ登山隊
(41)	1967年	静岡大学	コロンビアアンデス学術調査隊
(42)	1967年	信州大学	ネパール王国ワンダリング隊
(43)	1967年	武蔵野美術大学	西部ネパール民族文化調査隊
(44)	1968年	東京歯科大学	ペルーアンデス遠征隊
(45)	1968年	六甲学院山岳会	パタゴニア登山隊
(46)	1968年	徒歩渓流会	バンジャアヒマール登山隊

ビニロン・ナイロン・テント製造元

千代田区神田須田町2－23　株式会社 **細野テント**　Tel.(253) 4426～7

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXIII 1968